

新訳：ペルソナ4～迷いの先に光あれ～

四季の夢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

影時間の戦いが終わりを告げた。

その終わりは一人の少年が全てを背負い、眠りにつくという結末だった。

そして、その少年と同じ力を持ったもう一人の仮面使いがいた。彼は少年の結末に後悔しながら新たな“罪”を生み、更なる後悔と共に街と仲間の前から姿を消した。

それから二年、戦いの舞台は影から霧へと変わる。

嘗て、仲間達から姿を消した仮面使いは再びベルベットルームへ招かれ、起きようとする新たな異変。そしてその異変に弟が巻き込まれる事を知る事になる。

それを知った仮面使いは、一度は捨てた仮面の力『ペルソナ』を再び手に取り、弟の為、そして事件解決の為に霧の町【稲羽】へと向かう。

※作者が書いていたペルソナ4の迷いの先に光あれのリメイクです。

目次

プロローグ	1
序章く霧の開幕く	
第一話：霧の町	5
第二話：霧の洗礼	14
第三話：非現実の洗礼	20
第四話：マヨナカテレビ	30
第五話：我は影、真なる我	43
鳥籠の城く天城 雪子編く	
第六話：紅の姫	49
第七話：雪子救出開始	62
第八話：友達	74
第九話：鳥籠の中の赤い鳥	82
日常	
第十話：変化する町	97
第十一話：ゴールデンウィーク	107
優しき暴君く巽 完二編く	
第十二話：稲羽の暴君	120
第十三話：認める者	136
第十四話：熱気立つ大浴場	142
第十五話：VS完二の影	151
日常	
第十六話：再会への予兆	167
第十七話：最強の再会	171

第十八話：力を司る者	186
第十九話：手掛かり	198
本当の自分くりせ・クマ編	
第二十話：りせ登場！そして愚者の選択……	207
第二十一話：一つの真実の序章	219
第二十二話：久慈川りせ	231
第二十三話：りせの世界	251
第二十四話：逆光の探知封じ VS りせの影	262
第二十五話：黒の力 死の降臨 VS クマの影	277
日常く再会く	
第二十六話：一つだけの選択	288
外伝：堂島 遼太郎編	298
外伝：鳴らない鈴	320
第二十七話：黒キ愚者 繋ゲシ絆カラ背ク事ナカレ	326
第二十八話：愚者と女帝	349
第二十九話：それぞれの想い	371
第三十話：黒キ愚者 拒みし想い	387
無の勇者く久保 美津雄編	
第三十一話：模倣犯	416
第三十二話：久保 美津雄と言う男	426
第三十三話：無の勇者 その名はミツオ	439
第三十四話：GAME OVER	456
黒き仮面く鳴上 洗夜編	
第三十五話：愚者の旅先	473
第三十六話：目覚めし抑圧	495

第三十七話：黒の駅

第三十八話：洗夜の根源。逆位置の脅威

第三十九話：乗り越えし過去

第四十話：降格の運命

525

553

578

593

プロローグ

現在：ベルベットルーム

薄暗く、シリアスな雰囲気を漂わせる電車の内装をした場所で、一人の青年は座っていた。

その青年の髪は灰色に染めており、また顔も最低限は整えている。だが、青年の目には生気が感じない。それはまるで抜け殻の様に。

そして、その正面ではまるで青年を見据えている様に見詰める鼻の長い男。その隣では目を閉じ、この場の雰囲気を楽しんでいる様に黙っている銀髪の女性が座っていた。

「ヒツヒツヒツ……二年ぶりでございますな。再びこのベルベットルームへ訪れた事、歓迎致しますぞ……」

鼻の長い男『イゴール』の言葉に一瞬、青年は反応するがすぐにそれは消えた。

しかし、興味が無い訳ではなく、青年はイゴールへ瞳を向ける。

「何故、俺は再び招かれた？……この世界に今度は何が起きようとしている？」

声には生気があまり感じられない。それはあまりに儂く、意識しなければすぐに青年が何を言ったのか分からなくなりそうだ。

しかし、それだけならばまだ良い。青年は“存在”すらも認識しずらく感じてしまう程にこの狭間、ベルベットルームに溶け込んでる。

そんな謎の雰囲気を持つ青年の言葉を聞いたイゴール。彼は既に青年が何かを勘付いていると判断するや否や、口元から漏れる笑い声を抑える事が出来なかった。

「ヒツヒツヒツ……！ やはり貴方様は大変面白いお客様でございますな……！」

「否定しないか……再び招かれた以上、契約の事以外にも何かあるのか？——いや、寧ろ何かが起こるんだな」

イゴールの言葉には意味があり、同時に意味がない事を青年は知っている。正確に言えば、イゴールからの助言はあくまでも切っ掛けに

過ぎない。

その助言を受け、自分が何を考え何を成すかが重要。

同時に青年にとってベルベットルームへ招かれたのは規模で言えば二度目。一回、二回ではなく二度目と言うのが正しく感じる。

そしてイゴール自身も慣れた相手と言える青年に対し、余計な言葉は不要と判断して薄気味悪く笑った。

「ヒツヒツヒツ……いー」

一定の間イゴールは笑い終えると、真剣な眼力が青年を捉える。

「近々、貴方様は不思議な事件に巻き込まれる事でしょう。しかし、その事件に足を踏み入れるかお決めになられるのは貴方様自身でございませう」

おかしい、イゴールの言葉を聞いた青年はそう感じた。

今までの経験上、イゴールが介入するかしないか決める様な事を聞いた事はない。既に決められた運命とも言える起こる事が確定された事件や異変の数々。それに対し、自分達がどの様な思いでどの様な選択をするのかを楽しんでいる様な男だ。

故に、この言葉は違和感しかない。

そして案の定、イゴールの話は終わってはいなかった。

「……この度の異変。真に対峙なされるのは貴方様ではございませう。ですが、貴方様と無関係とも言えない御方。——もうお分りでしょうか？」

「ッ!?……まさか……いー」

初めて青年に大きな変化が起きた。声を少し荒上げ、目を大きく開けて驚いている。

その考えが正しければ青年にとって今の自分が置かれた現状と、その人物の条件が合致する。

「そういう事か……」

顔を下に向け、諦めたように首を横へ振る青年の姿にイゴールも静かに頷く。

「そう……貴方様の“弟様”でございます」

それを聞いた瞬間、青年の行動は早かった。

この夢から覚める事。意識を徐々にはつきりさせて行き、意識を覚醒させようとしているとイゴールの隣にいた銀髪の女性が口を開いた。

「あらあら……随分とお急がれになられるのね」

「……お前は？」

一瞬、自分が知っている彼女に見間違えそうになったが、その雰囲気は大人の女性であり青年が知っている女性とはまるで違う人物だと気づく。

「エリザベスはどうしたんだ？」

「あの子はいないわ。ベルベツトルームを出たの。……今は現実世界のどこかにいるわ」

嘗てのこの世界の住人でもあり、青年にとっても友であり戦友である大切な女性であるエリザベス。

彼女がもうこの世界にいないという事実は多少なりとも青年の心を揺さぶったが、青年は我を忘れる事はなかった。

「何があった……？」

「……『宇宙のアルカナ』を背負いし一人の人間。あの子がこの世界を出て行ったのはその人間を救うため。——それに関しては貴方の方が詳しいのでは？」

「……ああ、詳しいき。詳しくない訳がない」

そうか、エリザベスが……。青年はそう呟き、再び女性を見つめた。まだ彼女の名前を知らないからだ。

その視線に女性も気づき、静かに頷く。

「ご挨拶が遅れました。私の名は『マーガレット』……貴方様が知るエリザベスの姉になります」

「姉？……どうりで似ているわけか」

青年は多少驚きながらそう言って小さく笑う。

「……互いに個性的な下の姉弟を持って大変だな」

笑みを浮かべながらそう言った青年の言葉。

それを聞いたマーガレットは少し驚いた表情をするが、やがてゆつくりと頷いた。

「ふふ……そのとおりね」

マーガレットがそう言った時だ。青年の世界が揺れた。嘗て、何度も経験したこの感覚。覚えのある感覚だ。

「どうやら急がなくとも、現実の貴方様が御目覚めになられるようですな……」

「ああ、そうみたいだ。……稲羽に着いたら頼むぞイゴール。弟を……”悠”を頼む」

今にも意識が薄れる青年の問いにイゴールは頷いて答える。

それを見て青年も安心した様と同じように頷く。

「それでは、そちらも頼みましたぞ。——全てを受け入れる『黒きワールド』・『黒き仮面』持ちし命の旅人。……”鳴上 洗夜”様」

その言葉を最後に、青年の意識は夢の世界から消えた。

End

序章く霧の開幕く

第一話：霧の町

現在：稲羽駅行き電車【車内】

『八十稲羽やそいなば……八十稲羽でございませう。御降りになられるお客様はお忘れ物のない様にお願ひ致します』

電車内に流れる女性の声の機械音。親の声よりも聴いたが、親の声よりは印象に残らない音声を聞きながら二人の人物が電車から降りた。

灰色の髪、似たような顔付。二人に類似する点が多いことから兄弟である事が分かる。

灰色の長髪、年齢に合わない冷静過ぎる雰囲気を持った青年。二人の関係では兄となる鳴上 洗夜と言う名前だ。

灰色の短髪、年齢に合わない感情がないような雰囲気を持った少年。弟となる鳴上 悠と言う名前の少年だ。

「叔父さんは駅の外にいる。事前連絡ではそう言っていた……」
「兄さんがこの町に最後に来たのはいつ頃か覚えてる？」

悠は隣を見ながら聞いた。
物心ついた時には来ていない、悠はそう呟きながら洗夜の答えを待っている。

「……物心がついて間もなくの時に一回だけだ。叔父さんは年賀状はくれたが、写真はついてなかったから今は顔までは覚えてない」

洗夜は大きめのスポーツバッグ、そして竹刀でも入れている様な袋を背負いながら答え、歩き出した。

悠もその後を追うように歩き始めた。



現在：八十稲羽駅【入口】

洗夜と悠が駅から出ると、思わず後ろを振り返った。

自分達しか駅から出て来なかったからだ。都会ではまずありえな

い光景。これが都会から来た二人に対する田舎の洗礼とすら思える。
「……事故かと思ってしまった」

「ここが終着駅の筈なんだけど……」

駅の入口で棒立ちの二人が都会と田舎のギャップの違いに困惑している、駅の入口の方から二人に呼びかける声が届く。

「おーい！ こっちだ！」

二人は声の方を向くと、一人の男性と一人の女の子が立っていた。男性の方は貫禄のある人物で内なる迫力も感じる。

女の子は小学低学年位の子だろう。人見知りなのか、男性のズボンを抱んだまま後ろから出て来ない。

「写真よりも色男だな。……俺は堂島どうじま 遼太郎りょうたろうで、こっちは娘の菜々子ななこだ。一年間、お前達を預かることになっている。よろしく頼むな」

「洗夜こっやです。よろしくお願いします叔父さん。そしてお久しぶりです」

互いに挨拶を交わしながら洗夜と堂島はお互いの手を取る。

「洗夜か……こんなに大きくなってるとはな。時間の流れを感じちまうな」

互いに最後に直接会ったのは洗夜が物心ついて間もなくの一回だけ。

懐かしそうな表情の堂島は洗夜と最後に会った時を覚えていてくれている様だが、それ故に目の前の成長した洗夜の姿を見て感傷に浸ってしまいそうになる。

だが、それはまだもう一人との挨拶を済ませてからだ。

「と言う事は……お前が悠だな？」

「はい。初めまして……鳴上 悠です」

そう言つて互いに手を取る二人だが、悠の言葉に堂島は苦笑した。「はは……初めましてか。オムツを替えてやったこともあるんだがな」

堂島はそういうと手を放し、今度は自分の後ろから動かない娘の頭を撫でる。

「ほら菜々子。最後はお前だぞ?」

「……菜々子です。……お願いします……」

小さな声で菜々子はそう言うのと再び顔を赤くしながら堂島の後ろに隠れてしまった。

「……」

チラリと、洗夜と悠の顔を見るがすぐにぷいっと隠れてしまう。

恥かしさからだというの二人にもすぐに分かり、洗夜と悠は見守るように小さく笑う。

「はは、お前恥ずかしがつてんな? 昨日まではお兄ちゃんができると喜んでたじゃねえか?」

「!?!」

凶星であつたらしく、菜々子は顔を更に赤くしながら堂島の足を思いつき叩いた。完全な照れ隠しだった。

イテつと堂島も言うが、それは反射的なもので実際は痛がつてる様子もなく、寧ろ笑っていた。

「やれやれ。……じゃあ、そろそろ行くとするか」

そう言つて堂島は二人の方に振り返ると、顔の目の前に金色の鈴とピンク色の鈴を洗夜が差し出していた。

「これ叔父さんと菜々子ちゃんにあげるよ」

「鈴……?」

何故に鈴と思ひながらも条件反射で受け取ってしまった堂島は、ピンク色の鈴の方を菜々子へと手渡した。

「わあ……!」

女の子らしい色で手の中で小さく鳴る鈴を見て、菜々子はすっかり気にいってしまった。

そんな娘の喜ぶ姿。堂島には鈴よりもそつちの方がまさかのプレゼントだ。

「はは、何なのか分からんがありがたく貰う事にしよう」

「一応、気に入った人にしかあげてないから。そう思ってもらえればこつちも嬉しく思えるよ」

「はは、どうやらお眼鏡には叶えられた様だな」

互いに冗談を言い終え、四人は車に乗って出発した。
これから一年間を過ごす事になる新たな居場所に……。



少し走らせた後、車は途中のガソリンスタンドで停車した。

菜々子が花摘みしたくなり、ならばついでにガソリン入れるかという理由だ。

車はそのままスタンドへと入り、それに気づいた店員の元気の良い挨拶がスタンドに響いた。

「らっしやーせー!!」

停車した車から菜々子が飛び出すと、そのままトイレへと向かおうとする。

「あつトイレ分かる？ 左の方にあるから。お箸を持たない方ね」

「むっ……菜々子、こどもじゃないよー!」

気付いた店員の親切心だったがあまりにも優しすぎた為、逆に菜々子は怒ってしまった。

まだ小さいが故に少し背伸びをしたい年頃の少女の姿に、その場にした者達は優しい表情で笑っていた。

「……今日はお出掛けで?」

店員が堂島の方を向き直して問いかけた。

「ああいや、今日はこいつ等を迎えにな。都会から越してきたばかりだ」

中々にフレンドリー過ぎる問いだったが、堂島は特に気にした様子もなく返答する。

都会ではスタンド店員とここまで会話する事はない。更に言えばセルフで済むので会話すらしないだろう。

洗夜と悠はその光景に未だに慣れないギャップの数々に苦笑するしかなかった。

「へえ……都会からね」

堂島の言葉を聞いて興味を持ったのか、店員は洗夜と悠の方へ近づく。

「都会と違ってここ何もないっしょ? 君は学生の様だし、良かった

らうちでもバイト募集してるから」

店員はそう言って悠へ握手を求めるように手を差し出し、悠もそれに応えた。

「よろしく……」

「こちらこそ……」

悠と店員はしっかりと握手を交わすと、店員は今度は洗夜の方を向いて手を差し出した。

「お兄さんの方もよろしくね！」

「こちらこそ頼む」

洗夜は店員と握手を交わした。店員の肌が想像以上に肌白かった事を除けば特になくなることもないものだった。

しかし、洗夜と握手を交わした瞬間だった。店員に異変が起こる。「!?」

突如、店員は目を大きく開くと洗夜の瞳を射抜くかの様に真剣な表情で見つめた。

「君は……」

「?……どうした?」

様子が変わった店員に洗夜は戸惑うが、店員の表情はすぐに収まった。

「……いや、大丈夫。気のせいだったよ。——さて、僕はそろそろ仕事に戻ることにするよ」

店員はそう言ってそそくさとその場を後にするが、洗夜は何か引つ掛かり、店員を追おうとした時だった。

隣に立っていた悠が頭を抑えながらその場に膝をついたのだ。

「悠?……おい、大丈夫か?」

洗夜もすぐにしゃがんで声を掛けると、悠はゆっくり頷きながら立ち上がるがユラユラと体が揺れており大丈夫そうではなかった。

「具合わるいの……?」

いつの間にか戻っていた菜々子も悠を心配して見上げていた。

洗夜が悠の体を支えるが、悠の顔色は良くない。

「どうした?」

一服していた堂島も戻り、菜々子が事情を説明した。

「具合わるいみたい……」

「なに？……確かに顔色が悪いな」

堂島から見ても悠の顔色は悪いと見えた。

稲羽までくるだけでも悠の顔色は幾つも乗り継いでおり、その疲れが出てしまったのかも知れない。

「帰ったらすぐに寝た方が良いかもしれんな」

「……すみません」

来て早々に迷惑を掛けてしまった事に悠は申し訳なきようにする。

悠の生き方、それは他者とは一定の距離を保つこと。遠からず近からずだったが、今の状態ではそれは無理そうだ。

すると、その言葉を聞いた堂島は悠に対して首を横に振った。

「悠……確かに一年だけだが、俺達は家族になる。家族ならそんな事は気にしなくて良い。子供なら尚更だ。子供が大人に気を使う事はないんだぞ？」

「……はい」

堂島の言葉に悠は頷くが、その表情はどこか暗いものであり、すぐには全てを受け入れられる事は出来なさそうだった。

環境、人付き合い、それが全てまた変わる。昔から体験してきた生き方。

今回もそれは同じだと言う悠の想いを知ることなく、一同は自宅へ向かうのだった。



現在：堂島宅

静かな住宅の中に堂島宅はあった。

瓦屋根にそれなりに長い歴史をもつ一軒家。今日から一年間、二人はここに住まわせてもらうことになる。

荷物もあり、悠も体調不良である事からすぐに家に入りたかったが堂島宅の前には一人の男と、トラックが停まっていた。

作業着の男、人受けの良さそうな当たり障りのないマークが入った

トラック。どうやら宅配便の様だ。

「何だ？ 宅配便が来るなんて聞いてないが……？ おい！ 家に何か用か？」

堂島は車から降り、急いでいる事もあつて若干イライラしながら宅配の業者に声を掛けた。

すると、声を掛けられ気付いた業者の方も不安そうな表情から安心した顔になっていた。

「ああ、良かった。留守かと思いましたよ……宅配便です。ハンコかサインを貰えますか？」

業者がそう言つて堂島は家の前に置いてある、大きな二つのダンボール箱を見て驚いている。

「おいおい、何だこの荷物は!? まあ、いいか……すまんな、サインでも良いか？」

「構いませんよ」

そう言つて堂島は書類にサインし、それを配達員が受け取ると頭を下げながらトラックを走らせて行く。

「おい洗夜。スマンが、この荷物を入れるのを手伝つてくれ！」

それなりに大きな二つの荷物。それを堂島が荷物を入れる為に洗夜を呼ぶ。

「今、行くよ」

そう言つて寝ている悠と菜々子を起こさない様に車から降りた洗夜は二つの荷物に目を向けた。

見た感じ二つともテレビの様だ。しかも、今流行りの大型テレビ。

「大型テレビが二台？ 一体誰から？」

「少し待て、手紙が付いていたな……えくと、名前は……姉さん達からだ」

「母さんから？」

何故、堂島の姉であり、自分と悠の母親からテレビが二台も送ってくるのか洗夜も堂島も分からない。

そして、堂島は手紙の封を切つて中身を見る。

そこに書かれていたのは少し早いお札替わりの様に書かれており、

堂島の事だからテレビも買い換えてないだろうと判断したとも書かれていた。

贈り物としては確かに嬉しいが、突然すぎて嫌がらせの類ともとれる。

「らしいと言えば仕事人間の姉さん達らしいな……」

自分さえ理解していればそれで良い。まさにそんな性格の仕事人間。

堂島の言葉に息子である洗夜も苦笑しかできなかった。

「……とりあえず入れようか」

目の前の大型二台を入れなければ自分達が入れない。

まさか、この町最初の仕事がテレビ運びとは。洗夜の苦笑が消える事はなかった。



現在：堂島宅【洗夜自室】

堂島と起きた悠達と話し合った結果、一台は居間に置く事になり。もう一台は、洗夜の部屋に置く事になった。

そして現在、悠は向かいの自室で休んでおり、洗夜は自分の部屋で段ボールに囲まれながらテレビをセッティングし終えていた。

(……こんなもんか)

洗夜は自室を見渡した。

堂島が用意してくれた本棚に参考書等はしまい終えたが、段ボールからはそれ以外の本が顔を出している。

今日中にはまず終わらない。洗夜は段ボールから幾つかの小物を出して今日の作業を終わらせることにし、一つの段ボールから二つの写真立てを取り出した。

衝撃吸収材を取り、写真立てを机の上に置くとその写真を眺めながら目を閉じて呟く。

「あれから二年か……」

二つの写真立て、その内の一つには三人の少年と一人の赤い髪の少女が写っていた。

それはまだ高校生だった洗夜とその友人達が写っている。

二枚目には、成長した洗夜とその友人達。そして新たな仲間達の姿があった。

そして最後、段ボールもう一つだけ洗夜は写真立てを取り出して机においた

「……」

黙って見つめる三つ目の写真立て。そこには洗夜は写っていないかった。

だが代りではないが、一人の男性が写っていた。眼帯をした一人の男性が……。

洗夜はその写真を見終えると、一息入れながらジャージに着替えて事前に敷いた布団に潜り込んだ。

(……また仮面の力か)

そう心の中で呟く洗夜が隣を向くと、そこには一冊の分厚い本が置いてあった。

内なる仮面の寢床。そこにはペルソナと呼ばれる存在の名が刻まれている。

夢の住人に渡された本——『ペルソナ全書』と呼ばれた本。

洗夜の中の仮面達があり、言わば“洗夜のペルソナ全書”だ。この町で起こるであろう未知の事件。その解決には仮面の力が不可欠だと洗夜は分かっていた。

そうでなければイゴールが出て来る訳がないからだ。

「……眠ろう」

自分に言い聞かせる様に呟き、洗夜はペルソナ全書を撫でながらその目を閉じた。

END

第二話：霧の洗礼

同日

現在：???

辺りが霧で包まれた場所に洗夜は立っていた。

無表情で辺りを見ながら、自分は部屋で眠っていた筈だと洗夜は思っ
て出していた。だが、思い出しても何故この様な場所にいるのか答え
にはならない。

更に言えば洗夜は自分の状態を確認すると左腰には袋に入れて稲
羽に持ってきた刀が、腰の後ろにはペルソナ全書。そして左肩にはホ
ルスターに入った白き銃型の召喚器がある事が確認できた。

これらは全て自分の部屋に置いていたものだった。

「なのは何故……?」

洗夜がこの異常な事態が飲み込めずに混乱しそうになった。その
時だった。

「良く、来ましたね……」

「……!」

まるで頭に直接声を流された感じで声を聞かされ、洗夜は刀に手を
添えて警戒した。

だが、何処からも気配は感じない。霧だけが辺りを支配し、強いて
あげるならばこの霧が洗夜が直接確認できる唯一の存在だった。

(まさか、いきなりこんな事になるなんて……)

洗夜は頭の隅には常にこういう方が一の事態との遭遇も置いてい
たが、まさかの初日からのエンカウト。

実際は動いてもいない為エンカウトとも言えないが、早速、巻き
込まれた事実には流石に驚くしかなく、困った笑みを浮かべてしま
う。

(……見張られているのか?)

いつまでも笑っていられない。洗夜は視線だけで辺りを見るが意
味のない事だとすぐに知る。

「私はそこには居ませんよ。私に会いたいならば追って来て下さ

い。さあ、奥にどうぞ……”

「……」

語り掛けてくる声に洗夜は罍の可能性も考えた。だが、此処が何処か分からない以上は既に罍に嵌められたと同じ。

何処か分からない場所、そして謎の声からの誘い。完全に洗夜は相手の言われるがままだった。

「こちらからどうする事も出来ない以上、この声に従うしかなさそうだ……」

半ば諦めた様に呟きながら洗夜は歩き出した。霧が濃く、ちゃんと前に進んでいるのかどうかすら分からないが、それでも洗夜は足を止まずに一歩、また一歩と少しずつ前進して行った。

▼▼▼

あれからどれ位歩いたのだろうか？ 正確に分からない、かなりの距離を進んでいると洗夜は思った不思議と足には疲れがなかった。

そして、暫く歩いている内に洗夜はこの場所の雰囲気が『影時間』に似ている事に気付く。

「雰囲気は影時間。だが、不快感はそれ以上だ……」

それに……。洗夜はそう呟いて辺りを覆う霧に視線を向けた。その霧が自身に纏わり付く様な感じを抱いたからだ。

一体、何故これ程までに霧が濃いのだろうか。ここの居場所を知られたくないからなのだろうか。

洗夜は己の疑問に答えは出ないが、直感的にここの霧はただの霧では無いという答えが出た。

そんなことを思いながら再び歩くと、前方に扉らしきモノを洗夜は見つけた。

「コレは……？」

洗夜が扉に触れると、ガチャガコンツとパズルが解けたような音と共に道が開ける。

だが扉の先もまた霧で覆われていた。全く全貌は確認できない。暫く進んだと思えばこんな一方的なイタチごっこ。

洗夜はそんな現状に面倒そうに息を吐いていた。

「……全く。……しようがないが行くか」

覚悟を決めたと言うよりも諦めが勝り、洗夜はその先へ足を踏み入れる。

▼▼▼

現在：???

扉の向こう側を暫く歩き続けると、霧で覆われていた世界の一部が若干だが晴れ、ここが広い空間である事が分かった洗夜はその場で足を止めた。

(マシにはなったが霧が濃いのは変わらないか……晴れるならばいつもの事、全て晴れてほしかったが)

中途半端に晴れる霧に文句を思う洗夜だが、その瞬間に空間の空気が一変する。

“良く来ましたね”

「ッ!」

再び洗夜に聞こえた謎の声。しかし、今度はそれがとても近くからのものだと本能が警報を鳴らす。

洗夜はそれに従い刀を握り、いつでも戦える体勢に入っていた。

すると、洗夜は気付く……。

「……ようやくか」

自分の目の前に霧で覆われて完全に姿は見えないが、霧によって見えるシルエット。そこに何者かがいる事に……。

「お前か、俺を此処に呼んだのは？」

“ ええ……貴方の力に興味があるのですよ。他の方にはないその力に……”

???の言葉は純粋な興味からの様に読み取れたが、同時にどこか挑発的な様だとも洗夜は思った。

要約するならば……。

「力を見せろ……って事だろ？」

瞬間、洗夜から蒼白い光が溢れ出た。幻想的な美しき蒼白き光だが、洗夜の髪と服をなびかせる力強きものでもある。

その光景を霧に中から見ているのだろう。???はクツクツクツと笑

い、洗夜の力が本物であることを認めた。

“ 素晴らしい……これ程とは……”

「……」

??の言葉など意味ないもの。そう言わんとするかのようには洗夜は沈黙しているが、その左手には白銀の拳銃が握られている。

それを洗夜はそのまま左の蟬谷（こめかみ）へ銃口を押し付け、その瞳は閉じていた。

動きは先程よりも静か。だが溢れ出る蒼白き光の輝きは更に強くなり、洗夜は己に眠りし存在を呼んだ。

「ペ……ル……ソ……ナ……ナ……！」

その言葉が言い終えた瞬間、洗夜は瞳を開き、その瞬間に引き金を引いた。

パライイン——！

何かが割れる様な音。それが反響するかのようにはりに響き渡った。

己の内なる存在、もう一人の真なる自分を呼ぶ条件が揃っていた。

故に、洗夜はその『仮面』の名を叫ぶ様に呼んだ。

「来い……い……！」 アイテル”!!」

洗夜のペルソナ。それは澄み渡った輝く大気の神格化、その天空神

『アイテル』の名を持ちし仮面だった。

アイテルの黒き長髪の間隙から覗き込む赤き瞳が??へ向けられる。

『我は汝、汝は我。……我が名はアイテル。黒き可能性の一つなり』

洗夜とアイテルの動きがシンクロし二人の左腕が??へ翳された。

瞬間、アイテルの手に蒼白い光が集まり、それは放たれた。

『上天の光明』

巨大な光。巨大なエネルギー波。一言で言えばその様な例え。

それが??を己を隠す霧ごと呑み込む。

“ !?”

音もなく全てを呑み込む光明。

それがこの瞬間だけ空間を支配した。並みの大型シャドウならば塵も残せないだろう。

洗夜もそれを一番理解している。そしてある異変に気付き、洗夜が鋭い眼光で先程まで???がいた場所へ向けた。

その場所はまるで傷を治すかのように霧が再び集まり出しており、そこに再びシルエットが浮かび上がっていた。

「お前は……ここにいるのか?」

“ 勿論、それが” 真実” なのですから……目に見えて、実際は全く違うものを見ている。又は魅せられている。真実はいつもあなた方の近くにあるにも関わらず、それを気づけない……”

「……そうか。なら……!」

面倒になると表情に出しながらも、洗夜は己を包む蒼白い光が再び強くした。

そして再び引き金を引き、新たな仮面が呼び起こす。

「ヘメラ!」

新たな仮面、昼の神『ヘメラ』の名を持つペルソナ。

ヘメラは暖かな光を放ち、その神々しい女神は瞳を閉じた。

“ む……?”

先程の様な先手必勝な攻撃が来ない事に???は疑問を持つ。

攻撃が来ない、ならば何か策を練っているのだとしか思えない。

“ フツフツ……!”

???は霧の中を移動し周り、再び洗夜の前にシルエットが現れた。

この迷いの霧の中で洗夜に打つ手はない。そんな上からしか見ない存在、その行動が洗夜の狙う隙を生み出した。

「ヘメラ!!」

洗夜の言葉にヘメラの瞳が開き、辺りに光を放つ。

『昼光の道標』

光が辺りへ放たれた瞬間、洗夜の顔付が変わった。刀を抜刀し、そのまま己の背後へ振り下ろす。

それは丁度、シルエットとは正反対の場所であり、シルエットも何もない場所だった。——しかし。

“ がああ……! 馬鹿な……何故……!”

???の悲痛な声、そしてポタリポタリ……と何かが滴る音が辺りに反

響する。

(手応えはあった……)

洗夜の反撃の要。それはヘメラの能力があったからこそだった。
ヘメラは洗夜のペルソナの中で唯一の『探知特化』のペルソナであり、その能力を用いた僅かな隙を突いた攻撃を洗夜は仕掛けた。

探知特化のペルソナに特別製の刀。

少なくとも好き勝手やられた事への一矢は報いた。

そして己の疑問に答える気がないと分かったらしく、???の様子が変わる。

“……やはり危険な存在でもあったか……フフ……今回はこれまでのようですね”

「流石にここで逃がす気はない……」

洗夜は再び刀を振ろうとしたが、それよりも先に霧が洗夜を包み込む。

「なんだ……いややはりただの霧じゃ……!?!」

“……フフフ。また会いたいならば……真実を追うのですね。それがあなたの……人の望む真実ならばまた会えるでしょう……”

その言葉を最後に通信を切断された様に、洗夜の意識は現実へと強制的に戻された。

次に目覚めたのは新しい己の部屋の布団の中だ。

END

第三話：非現実の洗礼

4月12日（火）雨↓雲

「……夢の中だったか」

霧の中の戦いから洗夜は目覚めます。最初に目に入ったのはまだ見慣れない天井だ。

顔を左右を向ければ開封・非開封の段ボールの数々。洗夜は今日も片付けをしなければならぬだろう。

（何時だ……？）

洗夜が上体を起こし、近くにあるミニテーブルの上に置時計を見た。

時計の針は丁度六時を指しているがまだ外は暗く、本来ならここで二度寝もありとも考えたが今はそんな気分にならなかった。

そして洗夜は欠伸をしながら自室を出て一階へと降りていった。



現在：堂島家【居間】

一階に降りると、洗夜の耳にテレビの音が聞こえてきた。

誰かいると思いそのまま居間に入ると、そこにはテーブルの前に腰を下ろしてコーヒーとトーストだけの簡単な朝食を食べていた堂島がいた。

そんな堂島は洗夜の姿に気付き、朝食の手を止めた。

「おお、なんだ洗夜。朝早いな？」

「叔父さんこそ、今日はもう出勤？」

まあな……。堂島はそう言うところを飲み干し、コートを持って立ち上がった。

「すまんが、俺はもう行かなきゃならん。すまんが後は頼む……」

堂島は洗夜へそういうと家へ出た。だが、先程の堂島の表情は少し険しかった事に洗夜は気づいていた。

昨夜の謎の夢、その直後での刑事である堂島が朝早くの出勤。

「……胸騒ぎがする」

誰もいなくなった居間で洗夜は一人呟いた。

まるでそれは、覚悟はしておくと自分に言い聞かせるようだ。

「……朝食作るか」

目が完全に覚めてしまった冼夜の今日の初仕事。それは冷蔵庫との会議だった。

▼▼▼

七時が過ぎた辺り、菜々子が起床してきた。

欠伸をしながら部屋から出て来た彼女は朝食を作っていた冼夜と目が合い、一瞬だが固まる。

冼夜と悠が昨日からいた事を忘れていた様子。更に言えばパジャマ姿に欠伸、恥ずかしい事この上なかったようだ。

菜々子は顔を真っ赤にしながら洗面所へと走って行ってしまい、やがて戻って来た。

「おはよう」

「お、おはよう……」

顔を洗って目を覚ましたようだが、菜々子の表情はまだ赤く挨拶も堅い。

流石に昨日の今日で打ち解けれる筈がない。

「朝ごはん出来てる」

「……う、うん。じゃあ、菜々子……着替えてくる」

小走りで部屋に入って行く菜々子。その姿は小動物から逃げられたような気分になり、冼夜は謎の罪悪感を抱いてしまった。

▼▼▼

白米、目玉焼きにウインナー、そして味噌汁を奈々子はテレビを見ながら食べている。

本当ならば成長期の菜々子の為に、冼夜はもう少し工夫したかったが食材が本当になかった。

ゴミ袋には総菜の空きパックやカップ麺のゴミが多くあり、食生活が少し偏っているのはすぐに分かった。

また、これによって冼夜の今日の予定に買い出しが決定となる。

そして、菜々子が朝食を食べ終えた頃、丁度よく悠も一階に降りてきた。

「おはよう。朝ごはんが出来てるぞ」

「うん。……菜々子ちゃんもおはよう」

「おはよう」

挨拶を終え、悠の朝食を洗夜が盛り付けていると悠は堂島は既いない事に気付いた。

「堂島さんは？」

「今朝早くに出たぞ。刑事だから忙しいんだろうな」

「たぶん事件……いつもの事だから」

悠と洗夜の会話に菜々子がそう言った。特に様子も変わらず、言い方に菜々子の中では本当にそれが普通の日常となっているのだと二人は察することが出来た。

「学校行く時、一緒に行こう。道、分からないでしょ？ 途中まで同じだから教えるね」

「頼む……」

菜々子の言葉に悠は頷き、今度はテーブルに朝食を置いている洗夜の方を向く。

「兄さんは今日どうするの？」

「片付け、買い出し、バイト探し……やる事だけならなんでもある」

洗夜はそう返答し、菜々子の食べ終えた食器を片付け始める。

「バイトだったら商店街の掲示板を見なさいってお父さんが言ってたよ。……人がいないからバイトならすぐにみつかるって」

「そうか、ありがとう。後で早速行ってみる」

「……うん」

お礼を言われた菜々子は顔をまた赤くした。だが、それが照れであるのが分かり、どうやら嫌われてはいないので洗夜は安心する。

するとその時、窓から音が聞こえたので洗夜が窓の外を見ると雨が降り始めていた。

「降ってきたな……」

洗夜は傘を二人に持たせ、二人は優しく送り出してから自分に仕事に取り掛かった。



部屋・家の片づけを終えた後、冼夜が食材の買い出しを終えた頃には12時を過ぎていた。

色々と場所を把握するのに手間取り、先に送っていたバイクのおかげで足の時間は短縮することが出来たのだが、問題もあった。

冼夜が乗っていたのは黒のビックスクーター。普通の人が見た感想はでかい、なんか凄いバイクと思われるのか視線を多く感じてしまった。

自分のバイクを見てももらえていると思われれば冼夜も悪い気はしなかったが、とある道角を曲がった時にはそれは起こった。

(ん……?)

道の角を曲がったその先にいたのは人だけ。周囲にはパトカーや警察。ドラマなどでよく見る警察のバリケードテープも見えた。

何かが起こったのは明白だが、人だかりの中で冼夜はバイクで突っ切る事を諦めた。

(引き返すしかないな……)

冼夜が周りに注意しながら引き返そうとしたその時……。

「はい！ そこまでだ!!」

突然、冼夜は横からハンドルを掴む右腕、その手首を掴まれた。

「……は？」

何が起こったのか一瞬理解が遅れた冼夜はその腕を辿る。そこにいたのはドヤ顔で自分を見つめるスーツ姿の若い男。

「犯人は現場に戻ってくる……どうやら僕の推理が当たったようだね」

「……あのこれは？ というよりあなたは？」

「僕は『足立 透』——稲羽署の刑事。そして……君を捕まえた男さ！」

足立という男はそう言って先程の倍以上の威力を持つドヤ顔を冼夜へ披露する。

そんな光景に冼夜は更に混乱してしまっていた。自分が捕まえられた理由が全く分からないからだ。

「……ところでこれはなんですか？ なんで俺は手首を掴まれて

……」

「ふっ……とぼけるかい？ 流石は“怪奇殺人”の犯人だね。けどとぼけても無駄だ。詳しい話は署で聞かせてもらおうか？」

くうくこの台詞言ってみたかった！ 足立はそう言いながら流夜を連行しようとする。

だが、流夜も訳も分からないまま連行されては堪ったものではなく、流石に抵抗し始めた。

「なっ!? ちょっと待ってくれ！ そんな理由で納得できる訳——」

「おっ？ 抵抗するか！ なら……ちよつと来てくれ！」

足立が声をあげるとそれに気付いた周囲の警官が流夜と足立の周りに三人程、集まってきた。

「足立刑事……これは？」

流石に現状の光景だけでは警官も何があつたのか理解できなかった様だ。

ヘルメットを着けてバイクに跨る青年の手を掴む足立。警官の顔にはなんだこれは？と書かれている。

「よく聞いてくれた！ 聞いて驚け！ この怪奇殺人の犯人を捕まえた！」

「……は？」

警官達が最初に流夜が言った事を同じ感情で言うと、三人は互いに顔を見合わせて全員が頷き合う。

そして、その内の一人が振り返った。

「堂島刑事！ 少しよろしいでしょうか！」

「えっ……ちよっ!？」

流夜に聞き覚えのある名前が警官の口から飛び出し、その名前を聞いた瞬間、足立の表情が青くなった。

明らかに警官を止めようとする足立だが、それよりも先に堂島がこちらへやって来た。

「どうした？」

「それが……」

警官が足立に視線を向け、堂島も同じように向けた。

「足立？ 何かあつ……そのバイクは……？」

堂島の視線が足立から隣の洗夜へ移された。見覚えのある洗夜と悠が来る前日に届いた大型バイク。それを運んだのも堂島自身でありよく分かつていた。

そして何かを察した様子の堂島に洗夜もようやく安心し、足立の腕を払いながらとヘルメットを外すと、そこから出てきた甥の顔に堂島は目を点にした。

「洗夜？ お前こんな場所でないして……」

「叔父さん……実は——」

洗夜はここまでの経緯を全て説明した。すると、納得したらしく堂島は頷き、やがて表情が一変し顔を真っ赤にした怒りの表情で足立へ雷を放った。

「足立いッ!! この馬鹿野郎があ!!」

「……うっ、す、すみません……」

菜々子には絶対に言わないだろうと思われる怒号が足立を貫く。

既に警官達はこの場にはおらず、堂島の逆鱗に触れた足立はフラフラと歩きながらその場を離れて行った。

「やれやれ……災難だったな」

「本当だよ。……まさか、こんな事になるなんて」

ようやく誤解が解けた事で洗夜は安心の笑みを浮かべながら頷く。「すまん……あいつ警視庁から来た奴で手柄を焦ったのか、いつもなら流石にここまでのポカなんかしないんだが……」

「過ぎた事だつて……納得できるから大丈夫。ところでこの騒ぎは……」

「……ああ、少し訳ありだ」

堂島はそれだけ言っつて視線を洗夜から外した。それはこれ以上、事件について言うつもりはないという表しに見えた。

「そう。……今日は早いのか？」

「いや、遅くなりそうだ。夕飯は先に済ませておいてくれ」

堂島はそう言っつて事件現場へと戻って行こうとした時だ。堂島は足を止めて洗夜の方へ振り返った。

「そういえば洗夜。お前、商店街の【久慈川豆腐店】って店知ってるか？」

「豆腐店？……いや、まだ商店街には行ってない」

「なら少し顔出してみる。こないだ行った時、バイトを雇いたい人がいないって言ってたからな。お前が来る事前にそれらしい事を言っといたぞ」

堂島はそう言い残し、今度こそ現場へ消えていった。

（豆腐店か……とりあえず、顔を出しに行くか）

そう思いながら洗夜はヘルメットを被り直すと、その場を去ろうとアクセルに手を伸ばした。

まさにその瞬間、偶然、洗夜の耳に噂話をしていた主婦たちの会話が聞こえた。

「この事件って殺人でしょ？ しかも殺されたのって、あの不倫アナウンサーの……なんて言ったかしら？」

「山野真由美でしょ……でも、死体が家のアンテナに引っ掛かってたなんて普通じゃないわよ」

「それに私、見ちゃったんだけど……死体、本当に綺麗だったわよ？」

刑事たちはも外傷がないって言ってたし気味が悪いわ」

「あく怖い。早く帰りましょう」

いくら規制しようにも人間の口を完全に封じさせる事などは無理。それを洗夜は実際に体験する。

だが、同時に先程の足立が言っていた『怪奇殺人』の意味が分かり、悪い事だけではないとも理解した。

外傷無しの死体、それが民家のアンテナの上に吊るされていた。怪奇以外の何ものでもない。

「始まったのか……？」

洗夜は嘗ての様な非現実の世界に立った様な感覚を思い出した。

その蘇る記憶によって無意識にハンドルの握る手が強くなった時だった。再び洗夜の右腕が掴まれた。

「話を聞かせてもらおう……」

「!？」

迂闊だった。そういうしかなないと洗夜は息を呑んだ。

つい先程、足立にやられたばかりでの出来事に洗夜は後悔するしかなく、洗夜は腕の持ち主と対峙する覚悟を決めてそちらを向く。「なんてね」

そこには実の弟である悠がいた。その左右には緑のジャージ、赤い制服を着た少女達がいるが洗夜の意識は完全に悠へ向けられる。

「……」

Vサインを自分に向けている悠。洗夜は黙って弟の頭をパコンと叩いた。

「お前は兄に何がしたかったんだ……?」

「特に何も?」

一瞬でも後悔した自分が馬鹿だったと洗夜は納得した。

我が弟ながら思考が読めない。洗夜がそう思っていた時、悠の左右にいた女子達はその光景に楽しそうに笑っている事に気付いた。

「アハハ。鳴上くんって意外にお茶目なんだね」

「確かにちよつと意外だね」

楽しそうにしている二人。洗夜はさりげなく観察すると悠と同じ学校だと気付く。

転校初日で女子二人と帰宅。他人と一定の距離を取る悠だけに、その光景は洗夜にとって驚きでしかない。

「悠……お前、転校初日でこんなレベルの高い女子二人と帰宅してるのか? 一体どうやって? というよりはどんな関係だ!」

「あついや……私達と鳴上君は別に……」

ジャージを着た方の女子が少し照れ臭そうに誤解を解こうとするが、悠が突然その女子の肩に手を置いた。

「えっ!? ちよっ! 鳴上君!」

「!……まさか悠……本当に?」

こんな芸当を転校初日の奴が転校先の女子にできる訳がない。

そう確信した洗夜が悠を見ると、悠は頷きながら右手をグツとして笑顔で返した。

「逆ナンされました」

「!?……なんだと……!」

「おいおいおいおい!!」

衝撃発言に冨夜の目が極限まで開き、その当の女子も顔を真っ赤にして悠へ抗議する勢いだ。

しかし、冨夜はそんな光景よりもシヨックの方が大きかった。

「明るく元気な感じなのに逆ナン……見かけによらないか」

「待て待て待てええええ!!」

冨夜の発言に誤解が大きくなっている事に女子は最大の声で制止させるのだった。



「なんだ、やはり誤解か」

冨夜は女子達の言葉にようやく頷く。

ジャージを着た子が『里中 千枝』で赤い制服の方が子が『天城

雪子』だと、二人の自己紹介と一緒に誤解が解け、冨夜はその光景に笑いを堪えきれなかった。

「ハハハ……! どうりで変だと思った訳だ」

「笑いごとじゃないですってば……もう!」

「反省はしてるが後悔はしてない」

「中途半端に質が悪いわ!」

完全に悠と千枝が漫才をしている様にしか見えなかった。

そして第三者だった雪子もその光景を見ている一人となっていた。

「千枝……逆ナン……ブフツ!」

「ん……?」

何やら笑い声の様な変な音が聞こえた冨夜が雪子の方を向くが、雪子は咳をしていただけだった。

「こほっ……どうかしました?」

「ああ……いや何でもない」

特に何も無いのならばそれでいい。冨夜は視線を戻した。

「そういえば自己紹介が遅れた。俺は鳴上 冨夜。弟共々よろしく頼む」

「あつはい！ よろしくおねがいします！」

「こちらこそよろしくお願ひします」

千枝と雪子は明るく頷き、洗夜もそれに答えるように頷きくと漸くヘルメットを被ってバイクのエンジンを入れる事が叶う。

「それじゃ悠、俺は商店街に寄ってから帰る。千枝ちゃんと雪子ちゃんも今日は早く帰った方がいい。それじゃあ……」

「分かったよ兄さん」

「あ、はい！」

「お兄さんもさよなら」

悠達の言葉に洗夜は頷きながらバイクを商店街へと走らせ、その心の中では決意を新たにしようとしていた。

今回の事件、既に異様な何かの存在を感じていた洗夜は二年前と同じだと思った。

きつと、今回の事件も異常何てレベルでは片付けられなくなるだろう。

(影から霧か……)

洗夜の瞳は真剣なものへと変わっていった事、それはヘルメットによつて誰も知ることはなかった。

END

第四話：マヨナカテレビ

4月14日（木）雨

現在：堂島宅【洗夜自室】

最初の事件から二日が経っていた。堂島のおかげで洗夜は豆腐屋のバイトも決まり、この町での日常が作られている中、同時に異変の情報も耳に流れても来ていた。

稲羽市に存在する異変の片鱗、夜中に映るテレビ。通称『マヨナカテレビ』と呼ばれる都市伝説の存在だ。

マヨナカテレビは雨の日の午前0時に見ると運命の人が映ると言われている。それはガセなのではないかと誰もが思う事だが、バイト中の洗夜の耳にまで届いていた。

あの怪奇殺人の被害者、山野真由美がマヨナカテレビに映っていたという噂話も幾つもある。偶然なのか、仕組まれた異変なのか。

ただ言えるのは彼女の死に方は普通ではないという事。メディアもこれ程までに良いネタはないのだろう。どこもかしこも“山野真由美特集”で持ち切りだった。

そして、この事件で真つ先に疑われたのは当然ながら関係者。不倫相手の『生田目太郎』と、その妻『柊みすず』の二人。

動機は不倫関係の纏れか、不倫相手への復讐だとメディアは決めつけたが、事件当時にこの二人には完璧なアリバイがあり犯行は不可能となった。故に報道内容は同じ内容ばかりとなる。

被害者は怪我一つ無く死因は不明。更に死体発見現場が民家のアンテナの上。常識的にあり得ない場所にも関わらず容疑者の目撃者が誰一人いないと言う事態。

この稲羽に自分と悠が来て一週間足らず。それにも関わらず一つの田舎町が騒がしくなっている事に、洗夜は気付いていた。

「……」

今日の天気が雨で時間も丁度午前0時になろうとしていた中、洗夜は自室にいた。

そう部屋でマヨナカテレビを確認しようとしているのだ。

(マヨナカテレビについて俺はあまりにも知らな過ぎる。ただの都市伝説ならば良いが……だが)

洗夜は誰も映らない事を願ったが、その願いは叶わなかった。

機械音と砂嵐の音と共に何も映っていないテレビに映像が徐々に現れ始め、洗夜は目を見開いた。

「これがマヨナカテレビ……!」

テレビは砂嵐等で映像が歪んで見えづらいが、一人の人影が映った。

長髪にスカート着ている事、そして朝に見かける事の多い制服から察するに、この女性が女子高生だと考えられる。

だが異変はそれだけではなく、その女子高生はまるで何かに襲われているかの様に苦しむ動きをし、やがて静かに消えて行った。

「……なんなんだこれは?」

二年前も出来事で非現実の類には慣れたつもりの洗夜だったが、実際に見て困惑していることで自分も最初はただの人間だった事を思い出した。

(……山野 真由美が死体で発見される前もマヨナカテレビに映ったと言われている。ならば、もしかして今回も……)

不意に洗夜がテレビへ手を伸ばした時だ。

洗夜の左腕は沈むように画面へ呑み込まれ、そのまま吸い込まれ始めた。

「なっ!?」

洗夜は咄嗟に踏ん張ったが、テレビはまるでゴムの沼の様に鈍い感覚のままに抜ける気配がなかった。

咄嗟の踏ん張りのせいで体勢も悪く、洗夜の左腕が肘辺りまで呑まれた時だ。まるで弾き返された様に腕は抜け、その勢いで洗夜は後ろの本棚に激突した。

「があっ……!?!」

洗夜の頭部に痛みが走ったが、幸いにも本が落ちてくることはなかった。

「……」

洗夜は吞まれた腕を確認する様に握っては開くの繰り返しを行うと、正常であることが分かって安心した。

だが同時に脱力感の様な疲労を感じ始めていた。

その疲労は何故か入れた左腕から強く伝わっているように思え、同時に洗夜は強い眠気も覚える。

「……駄目だ……眠気が……」

洗夜は強い眠気に抗えず、布団に倒れ込む。

しっかりと横になれた訳ではない為、体の半分しか布団の上にならない状態で洗夜はそのまま夢の中へと誘われていった。

▼▼▼

4月15日（金）雨

現在：堂島宅【居間】

強い眠りからの洗夜の目覚めは快調なものだった。特に眠気のないまま起き、洗夜は今、朝食を食べている菜々子と共にテレビのニュースを見ていた。

そして洗夜は、そのニュースの内容に我が目を疑う事になる。

『今朝、山野真由美さんの第一発見者だった『小西早紀さん』が、電柱の上で遺体で発見されました』

「!?……まさか……」

ニュースで映しだされた小西早紀の写真に洗夜は動けなかった。

昨日、マヨナカテレビに映ったのは間違いなく彼女だと洗夜は確信してしまっただのだ。

昨日の微かなシルエットと目の前の写真の一部一部が一致する。

彼女、小西早紀は山野真由美の遺体を最初に発見した事により最近、メディアに良く取り上げられていた人物であった。

そしてこの事実は洗夜の脳裏にある“仮説”を生んだ。

『マヨナカテレビに映った人物が殺害される』

しっかりとした確認は出来ていないが、洗夜の中でそれは否定することが出来なかった。

（……イゴール。お前が俺を呼んだ理由、それが分かったよ……）

そう思いながら洗夜がニュースから目を背けるようにその目を閉じたると……。

「お兄ちゃん、なんか辛そう……調子悪いの？」

朝食を食べ終えた菜々子が暗い表情をしていた洗夜を心配し声を掛けた。

その言葉に洗夜は、家族に余計な心配をさせた事に申し訳なく思ったが、逆に心配してくれた菜々子に嬉しく思いその頭を撫でた。

「俺は大丈夫だ。心配してくれてありがとう……」

「お兄ちゃんの手って温かい……」

「……嫌か？」

洗夜の言葉に、頭を撫でられている菜々子は首を横に振った。

「ううん。嫌じゃないよ……逆に安心するから菜々子大好きだよ」

そう言って笑う菜々子の表情に洗夜は心が温かくなるのを感じた。まだ一週間も経っていないにも関わらず、自分を心配してくれている菜々子には感謝しかできない。

(……俺にもやらなければならぬ事があるようだ)

洗夜が己の精神を落ち着かせるように心の中で自身を励ましていると、テレビを見ていた菜々子の何処か不安そうな表情に気付く。

「犯人、まだ捕まらないの……？」

不安は徐々に大きくなる存在。外に出れば嫌でも他者と出会う。その誰かが悪い人なのかも知れないと奈々子は不安に思っていた。

誰かを疑う。誰かを信じられなくなることが、菜々子に本当は一番怖い事なのだろう。

洗夜はそんな菜々子を見て、もう一度撫でた。

「……大丈夫だ。叔父さん達も頑張っている。それに、もし菜々子に何かあれば叔父さんも悠も、そして勿論俺も菜々子を守るさ」

「本当？」

菜々子が洗夜を見上げ、洗夜もそれに頷いた。

「本当だ。……約束しよう」

「……うん！ 約束だよ！」

そう言って指切りする洗夜と菜々子。

この約束だけは何があろうと守ってみせる。内心で洗夜はそう誓った。

▼▼▼

現在：事件現場

菜々子との会話の後、洗夜は商店街の外れにある電信柱に来ていた。その手には花束を持っている。

(まだ警官がいるのか……)

少し気になったが堂島の姿が見られないと言う事は、捜査の大半は終わっていると思えた。

想像よりは周りの警察の姿は少なく、泣いている遺族や近所の住人。そしてそれを映しているメディアしかいない。

そして洗夜も、雨の中で遺族や近所の人に混ざって花束を置いて合掌した。

「……」

洗夜は一言も喋らずにその場を離れると、その瞳をうつすらと開いたがその瞳には二年前の時と同じ覚悟を宿していた。

あのテレビの世界へと足を踏み入れる決意。覚悟が出来た今、洗夜はその世界へ歩んでゆくのだった。

▼▼▼

現在：テレビの世界

洗夜は自分の部屋のテレビからこの世界に足を踏み入れた。

その行動は洗夜にとってほぼ賭けだった。腕が吸い込まれた後、頭の中に生まれた疑問。

『テレビの中には何が存在する?』

何もないのかも知れない。入った瞬間に死ぬのかもしれない。嫌な想像だけならばいくらでも出て来るほどに不安な気持ちが生れたほどだ。

だが、もうこれしか洗夜に残された手掛かりはなかった。既に二人の命が奪われている。不安の可能性を理由に傍観などしたくはない。そしてその結果、洗夜は目の前に広がる世界を見て、最初の賭けに

勝ったと確信する。そう手掛かりの一つを掴み取ったのだ。

「まずは一步。ようやくスタートラインだ」

洗夜はこの世界を見渡し回す。自分の視界に写る新たな世界。先程までの不安の可能性が馬鹿みたいだと今なら言うことが出来た。

新しい世界。テレビスタジオと歪んだ光の照明。まさにテレビの中の世界に相応しかった。

その世界の光景を目にした洗夜は笑みを浮かべた。

「戻ってきたぞ……非現実」

洗夜は霧に覆われた世界に己の存在を教えるように堂々とし、何かを思い出した様に小さく笑った。

(……そうか、俺はこの世界に一度来ている。あの霧の中の戦った時に……)

洗夜は感じ取った。この世界の空気が??と戦った場所と同じ世界なのだと。

この世界に来ることは今思えば必然の様に思えて仕方ない。

この世界に元凶となるものがある。洗夜は確信しながら己の装備を再度確認する。

右肩にホルスターと召喚器。左腰に刀。腰の後ろにペルソナ全書。全てが揃っていた。

(行くか……)

洗夜は探索を始めようと召喚器で己を撃ち抜き、ヘメラを召喚した。

この霧の中では視界も悪い。故に探知能力が高く、気配も消し去れるペルソナであるヘメラの力が必要だった。

万が一の事があれば堪ったモノではない。既に帰りの事も考えていないのだ。入って来た場所には出口らしきものはない。

洗夜が背水の陣で行動を開始しようとする、その洗夜のいる場所の下のフロアだった。そこから話し声が聞こえてきた。

「ちよっ、キ、キミ達！ 何でまた来たクマ!？」

「……？」

何やら緊張感のない声が聞こえる思いながら洗夜が下のフロアを

覗き込むと、そこにはゴルフクラブを持った二人の男子学生とクマ？らしき何かがないにやら揉めていた。

しかし、洗夜は男子学生の内の一人に見覚えがある事にすぐに気付く事ができた。

「あれは……悠か？」

実の弟を見間違える筈もなく、既に悠がこの非現実には足を踏み入れていた事を驚きながらも洗夜は様子を少し観察し始めた矢先、悠とは別のもう一人が何やら怒鳴り始めた。

「だから、さつきから言っただろ！俺達は犯人か小西先輩の手掛かりを探しに来たんだよ！」

「ウソも大概にするクマ！この間来たのに、また来たのが怪しいクマよー！」

「陽介もクマも落ち着け。話が進まない……」

揉めている陽介とクマを仲裁する悠。

当然とはいえ、やはり悠達にも目的があるようだ。

「情報が足りないな……」

洗夜は話の全貌が得られず手掛かりを得るため、再び三人の会話に耳を傾ける。

「分かったクマ！やっぱりこの世界に人を入れているのは君達クマね！」

「人が入れている……？まさかテレビに？」

クマの言葉に洗夜が連想したのは人がテレビに入れられてる光景。

洗夜自身は自分の意志で来たが、万が一この推理が正しければある疑問が思い浮かんだ。

『一体〃何が〃入れられた人間を殺しているのか？』

「……まさか」

なんの躊躇いもなくペルソナを召喚した洗夜だったが、同時に気付いた。

ペルソナが召喚できる世界ならば〃奴等〃もいるのではないかという事に。仮面使いの天敵の〃影〃達。

(だが、そんな……)

影……シャドウと呼ばれていた存在達はもういない。そう思っていたが、洗夜の中で仮面使いとして胸騒ぎが止まらない。

まさかの存在に洗夜が考えていると、下のフロアでは色々とヒートアップし始めていた。

「だ・か・ら!! 違うつつつってんだろ!! って待てよ……お前今、誰かがテレビに入れてるって言ったよな? つまり、誰かが此処に人を入れているのかよ!？」

「白々しいクマく分かっているんだクマよ、君達が帰った後に更に誰かが此処に来たクマよ! 君達が入れたんじゃないクマか?」

クマの言葉に悠と陽介は互いに顔を見合わせた。

「それってもしかして……」

「多分……いや間違いない!」

そう言うのと陽介はクマに近付き、クマの頭を掴んだ。

「おい、クマ! その二人について詳しく聞かせろ! 恐らく、それが小西先輩だ!」

「……小西 早紀。知り合いだったのか」

洗夜は悠達がここに来た理由を理解した。知り合いが変死体で発見されたのだ、黙ってはいられずこの世界に真実を探しに来たのだろうと察することができた。

そして悠達とクマが移動を始め、少し経ってから洗夜は下に降り始める。

「……移動したか」

誰もいない事を確認し、洗夜は下のフロアに飛び降りた。

伊達に鍛えていた訳ではない為、ちよつとぐらいの高さで彼が怖気づくことはない。

「つとー……さて、アイツ等は一体どつちに……」

洗夜はヘメラで探知しようとした時、足元に何かが落ちていることに気が付いた。それは黒い眼鏡だった。

条件反射で洗夜はそれを拾い、レンズを覗き込むと……。

「これは……」

眼鏡のレンズを覗き込んだ洗夜が見たのは、全く霧が写らない世界

だった。

構造は一体どうなっているのか不明だが、洗夜はその眼鏡を付けてみる。

「……霧が全く見えなくなった」

先程まで己の視界を支配していた霧。それが眼鏡を掛けた瞬間に消えた。

テレビの世界というだけでも洗礼だが、どうやら今回も一筋縄ではいかないようだ。

「……流石に驚きの連続だ」

洗夜は困った笑みを浮かべながら悠達の後を追って行くのだった。



現在：異様な商店街

悠達を追って行く中、洗夜は町の商店街に似た場所に出た。しかし似ていると言っても雰囲気は別物で活気どころか不快感しか無い。

「似ている……が、此処は何なんだ」

余りにも異様な商店街に、同じく似たように異質な自分の影。そして自販機すらも異様な感じがしてならない。

「……何が起こつても、ここでは買いたくないな」

苦笑しながら自販機を洗夜は見つめながら呟く。

タルタロスとも違う全てが謎と異質な世界。洗夜が此処の商店街に謎の恐怖を抱いた時だった。

『……！』

探知を行っていたヘメラの瞳が大きく開き、己が得た情報を洗夜に知らせた。

その情報はヘメラ同様に洗夜の目をも見開かせる。

そのヘメラを通じて飽きるほどに感じたこの気配。洗夜の今までの考えが確信へと変わった。

「シャドウ……！」

この独特な気配を間違えることなどない。同時に洗夜の考えを裏付けるかのように叫び声が辺りに木霊する。

「待つクマ!? シヤドウがそこにいるクマよ! やっぱり襲って来たクマ!」

「うわわッ!」

少し離れた所から、先程のクマと陽介の叫び声が響き渡る。

洗夜はその声を聞いて走り出した。

▼▼▼

現在、悠達の前に丸い身体にシマシマ模様をした巨大な口と巨大な舌を出しているシヤドウ『失言のアブルリー』が二体立ち塞がった。

突然のシヤドウの襲来に陽介は座り込んで怯えており、クマは恐怖で動けなくなっている。

だが、此処で何もしない訳には行かない。悠は一人ゴルフクラブを強く掴み、化け物としか認識できないままシヤドウに向かって行つた。

「うおおッ!」

悠はゴルフクラブをシヤドウに叩きつけると、クラブがめり込んだシヤドウはそのまま近くの店に叩きつけられた。

「や、やったのか……?」

ゴルフクラブが命中し、シヤドウは吹っ飛ばされたのを見て陽介は恐る恐る立ち上がると……。

「に、逃げるクマッ! そんなのがシヤドウに効く訳ないクマよッ!」
「ッ!」

クマの言葉と共にシヤドウが起き上がり、舌を出しながら悠に反撃を行う。

『ヒヤア〜!』

シヤドウは口から巨大な舌をだし、その舌を使って悠に体当たりを行った。

「グッ!」

舌での攻撃だったが、まるで車に撥ねられたかのような重い一撃を悠は受けてしまう。しかもそのまま悠は吹っ飛ばされ尻餅を着く様に着地してしまった。

それに比べてシヤドウに疲労の様子はない。そう先程の攻撃は全

く効いてなかった。

「どうすれば良いんだ……!」

攻撃が効かないこんな化け物をどう倒せば良いのか分からない。

悠に焦りが生れようとし、そう思っていた時だ。

「鳴上ツ!」

「うわわッ! クマはどうすれば……!」

悠が吹っ飛ばされた事で更に慌てる二人。この二人は既に戦力には数えられない。

『ヒヤア〜』

しかしシャドウにそんな事は関係ない。少しずつ悠達に接近し始めていた。

(……までなのか……!)

悠は自分の運命を諦めた様にした向いた直後……。

チイリーン……!」

「ッ!」

悠が腰に付けていた洗夜に貫った鈴の音が鳴った。

そしてその鈴の音を聞いた瞬間、悠は頭が冷静になって行く中である想いを思い出した。

「……そうだ。こんな所で簡単に諦めたら、兄さんの背中では越えられない……!」

そう言って悠は再び立ち上がる。こんな所で簡単に人生を諦めたら自分の人生の目標であり、憧れでもある兄を越えられない。

そして同時に悠の中に、陽介やクマを守りたいと言う気持ちが強くなった。

今まで、親の言う事に流されて生きて来た悠には初めての感情。

その感情という名の心の叫びに応え、悠の仮面は目覚める……。

「うおッ! 何だ!」

「ク、クマ〜ッ!」

悠から青い光が溢れ出す。そして同時に悠の手には一枚のカードが現れ、それに触れた瞬間、頭にこの力について流れた。

不思議な事に、何故かこの力が分かる。

悠はこの力の名前を口にする。

「ペ……ル……ソナ……うおおおおッ!!」

悠が手の平のカードを握るとカードは碎け散り、己の後ろに隙間から光る金色の瞳を覗かせる鉄の仮面にハチマキを付け、学ランをイメージさせる黒いコート。

更に右手には、大の大人よりも巨大な大剣を握っている。コレが悠の仮面であり、剣と盾でもあるペルソナだった。

日本の創造神の名を持つペルソナ『イザナギ』である。

「な、なんだよ……これ……!」

「ク、クマにもわからないクマよ……」

陽介とクマは既に考える事を放棄していた。目の前の存在と悠の異変。もはや、見届ける事だけに徹する事をしなければどうにかなりそうだったからだ。

「ハアアアッ!」

『スラツシュッ!』

悠の声に応え、イザナギがシャドウの懐に飛び込んでそのまま一閃する。

そしてアブルリーはまるでゆで卵でも斬ったかのように簡単に両断され、そのまま消滅した。

「す、すっげえ……!」

陽介は悠のペルソナ『イザナギ』の力に驚きを隠せずに見惚れたが、その表情がどこか楽しんでいるようだった事に本人は気付いていなかった。

それは戦いの最中の悠は尚更の事。

「続けて行く! イザナギッ!」

『ジオッ!』

イザナギから雷が放たれ、そのまま残りのシャドウを飲み込みそのまま消滅させた。

初戦は覚醒してからは完全勝利。そんな悠の姿をもう一人、影から見ていた者がいた。

「初陣の割には言う事なしだ。……良くやったな悠」

駆け付けた時には既に悠は覚醒しており、洗夜はそんな弟とその仮面を見守っていた。

洗夜からすればアブルリー程度のシャドウは簡単に倒せたが、シャドウが初見の悠達にとってシャドウは化け物以外の何物でもない。

その恐怖を乗り越えてのペルソナ覚醒と勝利。洗夜はそれを純粹に喜びたかったが……。

(これで悠は……完全に非現実の世界に足を踏み入れたのか)

心の中で、悠がこの世界に入った事。コレから先で戦う事になるかもしれない強大なシャドウ達との事。

新たな危険に晒されるであろう弟の事を考えればまた新たな心配が生れてしまった。故に、この場で洗夜だけは肩の力を抜くことはしなかった。

END

第五話：我は影、真なる我

同日

現在：異様な商店街

それは悠の戦いが終わってすぐの事だった。

『ジュネスなんて潰れればいいのに……』

『娘さんがジュネスで働いているなんてご主人も苦勞するわねえ』

『困った子よねえ』

『ジュネスの息子に言い寄られてるらしわよ?』

『あらあら。何を考えてるのかしらね』

突然、何処からか流れる声を悠達は聞いたが、その声はどれもこれも悪意ある様な内容ばかりだった。

「この声は一体……?」

まるで陰口の様な声だが、一体誰に対しての事なのか分からない。

そう疑問に思いながら同じように聞こえた洗夜も辺りを警戒していると、陽介がこの内容に心当たりがあるのか、何かの気付いた様に口を開いた。

「おいクマー! ここは、ここにいる者にとっての現実だとか言ってたな。それって……ここに迷いこんだ先輩にとっても現実って意味なのか?」

「す、少なくともそういう事になるクマ。その……センパイって人がどういう人なのかはクマには分からないけども、この声はそのセンパイにとつて現実だという事に……」

「んだよそれ……ジュネスと先輩は関係ないだろ!!」

陽介は知っていた。ジュネスによって稲羽が潤い始めていたことを。

だが同時にそれによって今まで稲羽を支えていた商店街の客が減り、幾つもの店が閉店に追い込まれた事も。

それ故に商店街の関係者には心無い言葉も多く陽介は言われてきたが、商店街の関係者であるにも関わらず小西 早紀は数少ない理解者だったのだ。

「先輩……俺は……」

陽介は知りたくもなかった現実を知り、肩を落とした。すると……。

「私、ずっと言えなかった……」

先程とは違い今度は別の声が辺りに響き渡るが、それは悠と陽介には聞き覚えのある声だった。

「この声って確か……」

「間違いない！ 先輩の声だ……！」

そう言つて悠と陽介達は酒屋の中に入ると、その声は更に大きく鮮明なものとなる。

『私、ずっと花ちゃんの事……』

「えっ……先輩、俺の事……」

そう言つて何か楽しみに次の言葉を待つ陽介を見て悠はやれやれと、そう言つた表情で見守るが現実是非情であった。

『ウザいと思つてた……！』

「えっ……？」

「……おい、花村」

小西早紀の声に、倒れそうになる陽介を悠が心配して声をかけるが声はまだ続いた。

『仲良くしてたのは店長の息子だから都合いいってだけだったのに、勘違いして盛り上がってホントにウザい……！』

『なんで私だけこんな目に遭うの!? 私が店長の息子に言い寄られたからってなんで私が何か言われなきゃならないのよ!!』

最早、追い撃ちと言う次元を越えているであろう言葉に、陽介は顔を天井に向けて叫んだ。

「ウソだ！ 先輩は……先輩はそんな人じゃないだろ!!」

見たくない現実を認めたくないのが人間の性だ。

陽介の悲痛の叫びが酒店に響き渡った時、悠は店内の雰囲気重くなつた様な気がした。

(なんだ……?)

悠は異変の正体を知ろうと周りを警戒すると、答えはすぐに現れ

た。

『ククク……可愛そうだな……苦しいな……でも、何もかもウザいと思っっているのは自分の方だつづの！ アハハハハハハハッ！』

「な、何だアイツ……いー」

突如、酒屋の部屋の隅に陽介そっくりの人物が姿を現した。

だが雰囲気も目の色も全く別物で、その姿や雰囲気からシャドウに近い。その姿に悠と陽介は驚愕したが、クマは別の意味で驚愕し、クマは陽介？の方を見て叫んだ。

「シャドウだクマ！ 抑圧された内面が具現化した存在！ それがシャドウだクマ！」

「抑圧された内面？……じゃあ、あれは花村なのか？」

「嘘だろ……そんなの……」

クマの言葉に言葉を失う陽介だったが、陽介？の言葉はずっと続いた。

こんな田舎暮らしが嫌な事。

この世界に来たのも小西 早紀を最もな理由にしただけで実際は未知の刺激を楽しみたかった事。

更に陽介？が何かを言おうとした時だった。とうとう陽介の怒りが爆発する。

「うるせえッ!!! 散々、勝手な事言いやがって……! 何なんだよお前はッ！」

『ククク、アハハハハ！ 何言ってるんだよ？ オレはお前だよッ！』

「ッ!? 黙れ、黙れよ！ お前は俺じゃねえ!!」

陽介は、まるで陽介？を否定するかの様に話すがそれが引き金となってしまう。

その言葉を聞いた陽介？は可笑しそうに笑い、やがて全身から闇を放出させた。

「ククク……そうだよ。オレはオレだ！ テメエと一緒にすんじやねえ!!!」

陽介？が放出した闇に包まれると、下半身は緑色のカエルの様な化け物で、上半身はマフラーを首に巻いたシャドウ『陽介の影』が出現

する。

まるで漫画かアニメの主人公の様にも見えるが、残念ながら今は化け物にしか見えない。

『我は影、真なる我……ククク……アハハハ!!此処も、お前も、全部オレがぶつ壊してやるよ!!!』

「ば、化け物だ……!」

陽介の先程までの勢いは既に死に、巨大な化け物となった『陽介の影』の姿に腰が抜けてしまう。

「花村! クソツ!クマ、花村を頼む!」

「わ、分かったクマ!」

悠の言葉に、クマは自分のシャドウに怯えて動けない陽介を運びだし、悠はシャドウの前に立ちはだかった。

『ああ? 何だお前は? 目障りなんだよツ!』

「イザナギ!」

殴り掛かってきた陽介の影を悠はイザナギで迎撃して向かい打ち、陽介の影の拳とイザナギの大剣の衝突がゴングとなり、悠の初めての大型戦が幕をあげた。

『ヒュ〜! やるじゃねえか! 楽しくなってきたぜ!!』

陽介の影は楽しそうにテンションを上げてゆき、両手に巨大なエネルギーを溜めてそれを悠へ放つ。

『喰らいな! 忘却の風だあ!!』

「くっ!」

巨大な風をイザナギで悠は防ぐが、陽介の影はそれを見て歪んだ笑みを浮かべていた。

『よっしゃ! なら何発で死ぬか試してやるよ!』

陽介の影は再び手に力を溜めると再び放った。

「まだだ!」

イザナギが大剣で陽介の影の攻撃を斬り払ったが、今度の攻撃は一発では止まらない。

『オラララララララララッ!!』

今度は連続で攻撃が放たれ続け、悠は防戦を強いられてしまう。

「くっ……!」

イザナギが悠を守るように大剣で防いだが、徐々にそれは押されて行き、イザナギのコートは破れ、鉄仮面に亀裂が入る。

「マズイクマよ!」

「畜生! いい加減にしやがれ!!」

陽介は近くにあった酒瓶を持って己のシャドウへ向かって行くが、攻撃の余波によって吹き飛ばされてしまい近付くことも叶わなかった。

「ぐあ……ちくしょう……!」

『アハハハ! 雑魚は後回しだっつうの!……さくってお前はまだ耐えるのか?——なら特大で行くぞ!!』

陽介の影は先程までとは比べ物にならない力を溜め込んだ。次で殺しに来るのは明らかだった。

「マズイ! イザナ——!」

『遅せえ!! 特大・忘却の風だ!』

悠がイザナギで仕掛けようとするも先に陽介の影が攻撃を放った。周りの酒瓶を巻き込みながら迫る巨大な疾風。

(……で……終わるのか?)

悠の目に光が失いかけたその時だった。

突如、悠の目の前に光が降り注がれ、その光はやがて一つの光の壁となる。

『マカラカーン』

『……へっ?』

陽介の影は何が起きたのか分からなかった。

光の壁にぶつかった瞬間、陽介の影が忘却の風が跳ね返った事実に気付くのは攻撃が自分に直撃してからだだった。

『ギヤアアアアアアアア!!』

風が己の体を抉り取る。攻撃が止み終わった頃には陽介の影はロボロになっており、既にグロツキーとなっていた。

『な、なにが……起こっ……た……!?』

陽介の影は訳も分からないまま不意に顔を上げた瞬間、時が止ま

る。

己の眼前に写るのは大剣を振り上げるイザナギの姿。

『へ……へへ……い！』

諦めの笑いのまま、イザナギの大剣によって陽介の影は両断された。



消滅した陽介の影の場所には再び陽介？の姿が現れたが。先程までの敵意は感じられない。

その様子に悠は陽介の背中を押すと、陽介はゆっくりと頷きながら陽介？の前で止まる。

「頭の中では分かってたんだ……だけど、認めんのが怖かった。けどよ、今はちゃんとやるぜ。お前は俺だ」

陽介の言葉に陽介？は頷いて光り輝き、両手に星型の武器を持つペルソナ『ジライヤ』に姿を変えた。

そしてペルソナはそのままカードになり、陽介の手の平に舞い降りる。

それを見て一安心する悠。それを店の外から見守っていた者がいた。

「……フツ」

その光景を洗夜と一仕事終えたような雰囲気のアイテルが見ている事に悠達は当然ながら気づかず、洗夜は満足そうな表情でその場を後にした。

そして暫く歩くとそれは起きた。

「……？」

不意に左手に異変を感じた洗夜は何かと思い左手をマジマジと見つめた矢先、突然視界が光った瞬間、洗夜はこの世界から姿を消した。

次に洗夜が目を覚ましたのは自分の部屋の中だった。

END

鳥籠の城く天城 雪子編く

第六話：紅の姫

悩み。それは誰しも必ず一つは抱えているモノ。

そして、深い悩みを抱えた少女が洗夜の前に現れる。

4月16（土）雨

現在：土手

昨日、あの異世界の探索で洗夜は色々と手掛かりを得ることに成功した。

異世界に人を入れている者がいる事。その異世界にシャドウがいる事。

同時に考えられる可能性。被害者は外傷無しという異常の背景に洗夜はシャドウの存在がチラついていた。

（……まだ情報が足りない。結論を急ぐことはできない。……それに）

洗夜は己の左腕を見つめた。突然、異常を持った左腕。別に私生活に支障はなのだが、どうやらテレビの世界から出られる力を得たようだ。

普通ならばこれだけで疑問が幾つも生まれる。だがこんな状況に慣れているせいで何故か気にならず、他の疑問の方で煮詰まらない様に洗夜は今、気分転換で土手の辺りを散歩していた。

言わゆる、雨の日の散歩と言うやつだ。

ポン……ポン……雨が傘に当たる音をBGMにし、洗夜は周りの景色を楽しんでいた。

「……良い雨だ。学園都市も都会の町も酸性雨の嫌な雨だったが、この町の雨は不思議と綺麗だ。……霧が良く出ると関係があるのかも知れないな」

楽しそうに歩きながら洗夜は、雨の匂いと自分の足元で跳んでるカエルを見て一時の平和を楽しんでいる時だった。

土手から少し離れた場所に作られてある休憩所に、紅い和服を着た

見覚えのある少女が目に入る。

(彼女は確かか……)

洗夜はその少女が気になった。遠くからでも分かる程に思い詰めた表情だからだ。

気になった洗夜は休憩所の方に足を運び、少女に話し掛けた。

「こんにちは」

洗夜に気付いた少女、雪子は誰だかすぐに分かったらしくすぐに返答してくれた。

「あ、鳴上君のお兄さん」

「……こんなところでどうしたんだ？ 傘でも壊れたのか？」

洗夜は雪子の座る長椅子に立ってかけられている和傘に目を向ける。

傘が破損してここで雨宿りの可能性を考えたからだが、和傘は壊れている様子はなく、雪子も首を横へと振った。

「いえ……傘は大丈夫なんです……」

「?……なら、なんでそんなに思い詰めた表情をしているんだい？」

「ツ!?……あ、あの！ 私そんなに思い詰めた様な表情をしていましたか!？」

洗夜の言葉に雪子は顔を赤くし、あたふたした様子で慌てる。

(こんな表情も出来るんだな……)

最初に会った時の雪子。あの時は表情も暗かったのもあり、洗夜は雪子が引つ込み思案の様な性格の少女に思っていた。

それ故に、洗夜にとって今の雪子の表情は新鮮に感じていしまつた。

「……いや、表情が暗く下を向いていたからな。俺が何と無くそう感じただけなんだが、気のせいだったら謝りたい……」

「……っ」

洗夜の言葉に雪子は何処か呆気にとられた様な表情をする。その反応を見た洗夜は怒らせてしまったと思ってしまう、頭を下げた。

「済まない……余計なお世話だった」

「えっ? あ、いや、そうじゃないんです！ ただそんな事を言ってくる人って今までいなかったから……」

そう言いながら顔を雨の降る景色に移す雪子。そんな彼女の言葉と虚しそうに空を見る様子に洗夜は疑問を持った。

「いなかった？……一緒にいた子、確か里中千枝ちゃんだったな。彼女と君と仲が良さそうだったが……？」

「確かに千枝は親友です。……けど、だからこそ心配は掛けたくないんです」

その言葉を聞いた洗夜は、この子は不器用。そして悩み等を自分だけで溜め込むタイプなのだど悟った。

親友ならば逆に相談事を聞いて貰うのは普通の事だと思えたが、雰囲気から察するにそういう面で優しさが邪魔をしてしまっているのだろう。

相談すれば少なくとも自分一人で悩むよりは随分と楽になる筈。

(ふっ……俺にはもう親友と呼べる者達がないから君が羨ましく思うよ)

「あ、あの……鳴上君のお兄さん？」

「ハハ……名前で良い。それだと長いし、鳴上だと悠と被って違和感があるだろう？」

洗夜が自分の名について問いかけると、雪子は一瞬だけ困った表情をするがそれが一番流れを乱さないと分かったのだろう。

特に抵抗もなく頷き、洗夜を名を口にする。

「分かりました。……じゃあ、洗夜さんで」

「ああ、それで頼む。……こんな可愛い和服美人に名前を呼んでもらえるなんて男として嬉しい限りだからね」

「……もしかして口説いてます？」

先程の暗い表情が消えた雪子がジト目を洗夜へ向け、洗夜はその目を見ながらも楽しそうに返答する。

「おや……バレたか？」

「ざんねん。私、そんなに軽い女じゃありませんよ」

「そうか残念だ。……どうやら足を何回も運ばなければならなくなっただ様だ」

楽しそうに言う洗夜と雪子。そんな互いの言葉の中には悪意など

がなかった。

お互いに冗談だと分かっており、会話が途切れるとその内、二人の笑い声が生まれ始めた。

「ハハハ……！」

「ふふふ……もう、なんなんですか突然？」

今までこんな事を自分に言ってきた異性はいない。

たまに口説かれていたと千枝から雪子は聞いたことはあったが、彼女にそんな自覚はなく断り続けた結果、口説く事が出来ない難攻不落の女と認識されていた。

やがてそれは彼女の名字から取られ、通称『天城越え』とまで呼ばれるようになった際も、雪子は千枝から教えられるまで意味を理解できなかったのだ。

しかし、洗夜の場合は年上の雰囲気もあつて可愛い和服美人と直球で言ってきたから彼女が自覚出来た。口調が楽しげだった為に本気ではないとも分かつていたが……。

「ふふ……本当にもう。千枝だつてそんな事は言わないですよ？」
初めての感覚に雪子は、目に涙を微かに溜めながら可笑しそうに話し続ける。

そんな彼女の様子に洗夜は先程と違い、安心した表情を向ける。

「……肩の力は抜けたかい？」

「えっ……あつ……！」

気付けば自分が笑っていたいる事に雪子は気付いた。

洗夜が来る前は本気で悩み、本当に何もかもどうでもよくなた程に暗く落ち込んでいたが今はいつの間にか肩の力も抜けて胸の中の違和感も消えていた。

（……逆に洗夜さんになら言えるのかも）

千枝や親等、あまりに近い人物とは違い洗夜とは会つて二度目だ。だからこそ、気楽な感じに悩みが相談できるのではないかと雪子は考えた。不本意だが、旅館の手伝いで得た人を見る目がこんな場面で約に立ち、雪子は洗夜ならば大丈夫だと判断するした。

「……あの、少しだけ御時間を頂いてもよろしいですか？」

それはとても小さな声だった。

「構わないよ」

隣に座ると冨夜は頷きながら雪子の話を待つことにした。

「あ、あの……鳴上君から聞いたんですけど、冨夜さんは高校に進学する時に家族から離れて一人で別の町に行っただんですよね？」

「悠の奴、なんでそんな事まで話しているんだ？……まあ、それは置いといて、確かに俺は家族から一人離れて別の街に行った。が、それがどうしたんだ？」

雪子の質問の意図が分からない冨夜は、雪子の次の言葉を待った。

「そんなに意味は無いんですけど……その……どうして、家族から離れてまで別の町に行ったのかな？って思いました……」

雪子の言葉に冨夜は軽く周りの景色に目を向けて黙ったが、返答までの時間は掛からなかった。

「……何と言えば良いのやら……あく結論を言えば、あの環境から逃げたかった」

「逃げたかった？」

冨夜の予想外の言葉に雪子は呆気に取られた。

冨夜のイメージからして、もつと真面目な理由だと思っていたが“逃げたかった”とは中々に物騒だ。

「ああ……虐待とかではない。ただ……俺達の親は仕事の都合上、引っ越しが多くてね。……最悪、半年も同じ学校にいられなかった事もあったぐらいだ」

「そんな……。そんなのって……嫌じゃなかったんですか？ 親の都合に振り回されて、友達だって……」

「まあ、実際に友達とは別れてばかりだった。……それで悠は苦労していたよ」

「……だから逃げたかった？」

これは自分なんか聞いて良い話なのだろうか。雪子は少し気まぐずそうな表情だった

「ああ……親の勝手と言いなりの生活。そんな光景とは違う世界を少しでも良いから見たかった。だから……俺は一人、家族から離れたん

だ」

その言葉を聞いた雪子。そんな彼女の表情は不思議にも気持ち分かれるという思いが読み取れた。

「まあ……最初は両親からかなり反対されたさ。万が一の事があつたらどうする？　自分達は傍にはいないんだぞ？　とかな」

一言一句、今でも覚えていた洗夜。そんな彼の表情はどこか寂しそうだ。

「今思えば……どんな親でも言いそうな言葉ばかりだった。誰の親でも言える言葉じゃなく……鳴上　洗夜の親としての言葉が欲しかったな」

「……本当にそうですよね。なんで……親なのに分かってくれないんでしょ……」

自分にも覚えがある。雪子はそれもまた表情に出しながら洗夜の言葉に共感する様に頷き続ける。

「……案外、親だからこそ分からないのか。それとも……自分が自分を分からないのか。……どっちかだろうな」

「えっ……自分が自分を？」

今まで共感できる言葉だけだったが、その変化球に雪子の表情が変わった。

完全に不意打ちを喰らった者の顔だ。

「……おっと、この話だけは答えられない。これに関しては自分で理解しなきゃ駄目なものだ」

「そんな……」

「サスペンスで犯人だけ知ったところで何も理解できてないだろう？　だからこそ自分で考えるべきだ」

ずるい……。雪子は全部は納得していない様子でそう呟いた。

本当ならばここで追及したかったが、洗夜がこれに関しては絶対に教えないとは察することができ、諦めて話を戻すことにした。

「……それで結局、洗夜さんの世界はどうなったんですか？　変われた……んですか？」

雪子は息を吞んで洗夜からの答えを待つ。手を握る力が自然と強

くなるを感じれるほどに。

「……変わった。自分が想像できなかった程に」
「！」

雪子の目が大きく開く。やっぱり自分の考えは正しいものだった。少なくとも今の自分の考えと行動は間違っていないかったと雪子は心の中で確信した。が……。

「……けれど、それが正しかったのか間違いだったのか。それだけが分からない」

「……えっ？」

雪子の中で先程までのあつた確信。それがいとも簡単に亀裂が入る。

変わったのに正しい？間違い？ 雪子はどういう事なのか全く分からなくなってしまう。

「それで、そろそろ君の話聞かせてもらっても良いかな……雪子ちゃん？」

その言葉に雪子が洗夜の顔を見ると、洗夜の表情は先程までよりも真剣なものだった。瞳も真剣なもので雪子は思わず緊張しそうになった。

だが、そこは天城 雪子。表情を崩さず、今度は自分の事を話し出した。

「……洗夜さんは、私の実家の事をご存じですか？」

「……稲羽が誇る老舗の温泉旅館。その客層は一般から政治家や芸能人までにも及ぶ知る人ぞ知る最高の旅館。——この町に来て日は浅いが【天城旅館】の名はずっと耳に入ってくる」

商店街のバイトもそうだが、ジュネスで買い物していても聞こえてくる天城旅館の情報。

町の誇りなのだろう。ジュネスとは違い、誰も天城旅館の事を悪く言う人はいない程に慕われている事は洗夜の耳にも入っていた。

「……そうですね。うちの旅館、本当に有名だから……」

自分の家の事なのだが雪子の表情は明るくはならなかった。寧ろ、暗くなる一方だ。

「……洗夜さん。私……いつかこの町を出たいんです。その為に資格も取得しています」

「一応、聞くべきだと思うから聞くが……旅館の方は？」

洗夜のその言葉に雪子の動きが止まった。彼女にとつて旅館はただの老舗の実家ではないらしく雪子は顔を下に向けた。

「洗夜さん……私の世界、この町で終わっているんです」

連休、休みという休みに遊びに連れて行ってもらえたのは小さい頃の時だけ。何かあればずっと旅館の手伝い。

周りも女将修行、後の女将としか見ていない。好き勝手言っている。自分が女将を継ぐと疑っていないと、雪子は洗夜へ語る。

「私にだってやりたいことぐらあります。全て決められる人生なんて……嫌……！」

雪子の体は震えていた。それを見て洗夜は理解した。天城 雪子、彼女は旅館を継ぐことを嫌っているのだと……。

「……その事をお母さんには？」

「……」

雪子は無言で首を横に振る。言っても無駄だと思っているのだろう。

（当然の反応だ。……ずっと次期女将としての育て方をされてきたんだからな）

洗夜は雪子の事を責める様な事をしなかった。

もし、これを他の人間が聞いても……。

『そうは言うが、今日まで生きて来れたのもご両親や旅館のおかげだろ？』

『何かあったの？ 当然、そんな事を言つて……悩みなら聞くわよ？』

大人、旅館に近ければ近いほど、そして何の責任のない者程、こんな無責任な事を平気で言うだろう。

実際に言われもしたのかも知れない。親友の千枝にも言わない事。迷惑を掛けると言うが、実際は怖いのかも知れない。

親友だからこそ、彼女にまで旅館を継ぐことを進められれば雪子の心が折れてしまう。

洗夜は目の前のどこか痛々しい雪子の姿に嘗ての親友の姿を重ねてしまった。

(……美鶴。この子はお前と違うタイプだが、お前と同じぐらい抱え込み、一人で傷ついてしまう子だよ)

『桐条 美鶴』彼女もまた大きな家。決められた人生。重き荷を背負い込んで生きてきた人物。

ずっと一人で頑張り、抱え込んでいた彼女と雪子を、洗夜は重ねてしまっていた。

「二つ聞いても良いかい雪子ちゃん？」

「?……どうぞ……」

視線を目の前の景色へ向け、雪子を一切見ずに洗夜は話し始めた。

「もし……もしもだ。今のままでこの町を出たでしょう。そして全てが上手く良かった君は……心の底から笑っているか？」

「えっ……それは……そんなの……!」

雪子はそこで言葉が詰まった。

簡単な事だ、そこで笑えると言えば良いだけなのだから。しかし、雪子はそれが言えなかった。

想像するのは容易かったが胸にザワザワとした違和感を同時に感じ、脳内に過る旅館の姿。

(私がいなくなった後の旅館ってどうなるんだろう……)

考える気もなかったこと。雪子がそれを考えた時、洗夜は立ち上がって雪子に背を向ける形で数歩前に出た。

「……答えが出たな」

「……えっ?」

洗夜の背を雪子は見つめた。

「心の底から笑う事が出来ないんだろ?——君に心残りがあつて……」

「……心残り。……でも、そんなのどうすれば良いんですか……!」

心残りは旅館の事。だが、旅館の人達は皆が自分の事を考えていないと雪子は確信していた。

何を言っても意味のない事。解決策などある筈がない。そう雪子

は思った。……だが。

「家族と話すんだ。それでようやく君はスタートラインを見つける」
「話すって……そんなの無理です！ 旅館は……お母さんは私が旅館を継ぐとしか思っていないんですよ!」

「それを本人の口から聞いたのか？」

雪子の動きがまた止まる。直接は聞いていない。聞いても意味のない事だと思ってきたからだ。

「確かに旅館の人達が反対する可能性は高い。だが、実際にこの事を話して聞いたことじゃないのだから?——心残りを君は感じたか?」

「……話す。……でも、やっぱり……そんなの……!」

否定のイメージしか湧かない。自分の将来が奪われる。心が折れるかもしれない。

雪子は顔を下に向けたまま上げる事が出来なくなると、洗夜は彼女の傍に近付いてしやがみ、雪子と目線の高さを合わせ……言った。

「君は知るべきだ。……親が分からないのか。自分が自分を分からないのか。——それとも、互いが互いを分からないのかを……」

「!……互いが互いを……?」

その言葉に顔を上げた雪子と洗夜の目線があい、洗夜は頷いた。

「今の君は想像だけでお母さんの本当の気持ちを知らない。……君が知らないのになんで相手だけ知っている? そんな事ない。相手も今の君と同じだ」

「……もし……もし話して……否定されたらどうすれば良いんですか?」

「……それは賛成されようが反対されようが、そこからが君のスタートラインだ。そこで初めて君は本当の自分の意志で行動できる」

洗夜はそう言うのとポケットから黒のハンカチを取り出し、それで雪子の瞳からいつの間にか流れていた涙を拭いてあげた。

「えっ!? あ、あの……」

「ほら……最初からその顔じゃ上手く話せないぞ?……ここで流さないからこそ、女の涙は強いんだ。綺麗な顔でぶつかっておいで」

「……も、もう!……子供じゃないんですから……」

そう言う雪子だったが表情は仄かに赤くなっている。

こうやって誰かに涙を見せ、拭いてもらったのは随分と昔だ。一人で泣くことは会っても異性に見られ、そして拭かれた機会なんてない。

「ハンカチはあげるから、家に帰るまでには泣き止む様にな。——あと、これは御守りだ」

洗夜はハンカチと一緒に雪子に紅い鈴を載せた。

「可愛い鈴ですね。……でも本当に良いんですか？」

雪子の問いに洗夜は頷いて返し、気に入ったのか雪子は鈴を携帯に付け、その中で鈴は小さく鳴った。

そんな鈴を見て雪子の顔にようやく笑顔に戻った。そんな時、雪子はある事に気付いた。

(あれ?……洗夜さんの服……)

先程洗夜から渡されたハンカチといい、目の前の服といい黒の割合が多く見えた。

ジーンズも黒っぽく、着ているTシャツと上着もどことなく黒っぽい。

「あの……洗夜さんって黒が好きなんですか？」

「……ああ、好きだよ。黒は何色にも染まらない。だからいつまでも変わらず、自分のままでいられる」

「そうですか……じゃあ、何色にも染まって自分自身の色がない白は嫌いですよね」

その言葉に雪子は少なからず、表情を暗くしながら口を開いた。

自分の名前にある雪と言う存在の色。その色である“白”は自分の意志ではなく勝手にどんな色にも染まるもの。まるで全てを決められている今の自分の様で雪子は嫌いだった。

だが、洗夜は雪子に視線を向けずに雨に濡れる景色を見ながら口を開く。

「別に白は嫌いじゃない」

「えっ? でも、白は黒と全く真逆ですよ?」

真逆のものが好きな事なんてあるのだろうか。雪子は疑問に思っ

だが、洗夜は悲しそうだが確かにある笑みを浮かべながら返答した。「確かに真逆だ。だからこそ白は良いんだよ。白は何色にも染まるって言ったが、何故それが悪い？ 逆に白は無限の可能性を秘めている証拠だ。……じゃあ、俺は帰るよ。そろそろ菜々子が帰ってくる」

「えっ!? あ、あの……」

「また何かあれば商店街の豆腐店に来れば良い。俺はそこでバイトしてるから……話ならまた聞いてやれる」

そう言い残し洗夜は雪子の制止も聞かず、傘を差してまた雨の中に消えて行った。



洗夜が去った後、雪子は今、不思議な気分だった。

自分は、この町の名物とまで言われている老舗の旅館の一人娘。

将来は母と同じで女将を継ぐと勝手に言われているが雪子はそれが嫌で、いつかこの町を出ようと思っていたが、つい最近転校して来た悠が兄である洗夜が家族から一人離れて別の町に行ったと話しているの前に帰りに聞いた。

故に、何か為になるかと思って偶然会った洗夜に話を聞いた結果がこれだ……。

「ずるいなあ……為になればそれで良かったのに、いつの間にかこんな事になってる。——私もそんな気になっちゃった……」

何だかんだで洗夜は、自分の悩み等を知っていたのでは無いかと思う雪子だったが、少なくとも話して良かったと雪子は思った。

(話して……答えを得なきやね。……私、お母さんにも千枝にも相談して良いんだ。……お母さんは何て言うか分からないけど、やっぱり私が何を思っているか知って欲しいもん」

雪子は傘を差し、洗夜から貰ったハンカチをしまつて歩き出した。

その表情は先程までと違ってどこか吹っ切れた様に見える。

しかし、この時雪子は気付かなかった。少し離れた所から一台のトラックが自分を見ている事を……。

そしてこの日を境に、雪子が行方不明になったのを洗夜はまだ知ら

E
N
D

ない。

第七話：雪子救出開始

4月17日（日）晴れ

この日、マヨナカテレビに動きが見られた。

『こんばんは〜』

突如、マヨナカテレビに映し出されたのは紅いドレスとティアラを纏った一人の少女。その少女は洗夜に見覚えのある人物。そう、天城雪子だった。

その姿は昨日見る和服の雪子ではなく、洋風なお姫様を連想させる姿で雰囲気もまるで別人にしか見えない。

『今日は私、あの天城雪子がなんと！ 逆ナン 〴〵に挑戦したいと思います！ 題してー』

やけに高いテンションの雪子？ はまるで枷が外れたかのように生き生きとした様子だ。

その台詞の後に流れるジャラジャラジャラ、と言う音が止むと同時にでかでかと題名が画面の上から姿を現した。

【やらせナシ！ 雪子姫、白馬の王子様さがし！】

『もお、超本気イ!! 見えないトコまで勝負仕様……』

そう言っつて雪子？ は下の方を手で隠す。何が勝負仕様なのかは心が一切の穢れを持たない賢者以外の者に想像がつける筈だ。

そして、最後に雪子？ 再びカメラ視線で振り向くと……。

『もお、私用のホストクラブをぶっ建ててるくらいの意気込みで、じゃあ行っつてきま〜す!!』

そう言っつて雪子は後ろの方に建っている城の中に消えて行っつてしまった。

そしてそれを部屋で見ていた洗夜は……。

「な、何だったんだ今のは……?」

今までのマヨナカテレビとは違い、番組らしくなっている事に困惑していた。

しかもテレビの中に居るのは、つい昨日会って話した天城雪子だと言う事実には洗夜は多少なりショックだったが、今回のマヨナカテレビ

のお陰で洗夜はある確信を得た。

それは山野真由美・小西早紀・そして今回、誘拐？されたであろう天城雪子。この三人にはマヨナカテレビに映った以外に共通点がある。

それは……。

「メディア……なのかな？ 不倫騒動で騒がれた山野アナ。その山野アナの遺体の第一発見者で報道されていた小西早紀。……そして、山野アナが泊まった事で注目されていた旅館の女将の娘……天城雪子。全員が誘拐される前に必ずメディアで取り上げられていた……」

被害者達の顔に不思議と見覚えのあった事、その事に納得する洗夜。

もちろん、洗夜はそれ以外にも狙われる理由を考えてはいた。最初は山野アナの事件の関係者を狙っているかと踏んだが、雪子が誘拐された事によって状況が変わる。

旅館に宿泊していた山野アナは人気の高い女子アナだ。しかも、その時は既に不倫騒動で騒がれている為、その様な人の対応をするのは恐らく、雪子の母である現女将。

その為、雪子が山野アナと会った可能性は低く、誘拐される可能性が高いのは直接会った女将の方だが現に姿が消えているのは雪子の方。

そうになると、それ以外で共通点は性別を除けばメディアしか無いのだ。

(記しておくか……)

洗夜はここまでの推理を白いノートに書き留める。このノートは、洗夜が今回の事件について記録している言わば調査レポート。

机に置いてある二冊の黒と白いノート。白いノートの方には事件について、黒いノートにはテレビの世界にいるシャドウについて記されている。

コレは、自分にもしもの事が起こった時の為の言わば保険。自分に何か起こっても、悠かイゴールの関係者に事件についての事を残す為のモノだ。

「……それはそうと」

洗夜の頭の中にある疑問が残った。

(山野アナ達の遺体が発見されたのは雨が続いた日の翌日。二人続けて……これは偶然なのか？ これに関してはまだ情報が足りないか)

何かが重なるとそれも関係あるかと疑ってしまっただけで仕方がない。だが、今は確認する術はない。

(……どの道、明日辺り悠も動くだろう。俺も準備だけはしておくか) そう思いながら洗夜は明日に備え、ノートを本棚に収納して眠りに着いた



4月18日(月) 晴れ

雪子がテレビの中に入れられ、洗夜が行動を起こすと思いきや……。

現在、豆腐屋

「お兄さん、木綿と絹を二つお願い」

「ありがとうございます。またのお越しを！——これでピークは過ぎたか？」

豆腐を買って帰って行くお客さんを見ながら、一息着いていた。

「ご苦労様、洗夜さん。ありがとうございますね、今日はもう上がってもらって大丈夫ですよ」

「はい。それでは先に上がらせてもらいます」

そう洗夜は商店街にある豆腐屋で現在バイト中だった。本来ならば今日はバイトが休みなのだが、今朝方に洗夜の携帯に豆腐屋から連絡があった。

内容は足を怪我してしまい、急遽だがバイトをお願いしたいとのこと。

雪子の事も心配だったが、快くよそ者の自分を雇ってくれたお婆さんの頼みを無下には出来なかったのだ。

だが幸運な事に早く上がる事ができ、洗夜は帰宅しようとした時だった。ポケットの携帯が震え出す。

b u u u u ! b u u u u !

「携帯……？」

何か嫌な予感を覚えながらも冴夜が携帯を見ると、ディスプレイには『堂島遼太郎』の名前が写し出されていた。

(この時間帯に叔父さんからは珍しい。まだ仕事中心だと思っただが……)

そう思いながらも冴夜は聞いた方が早いと判断して電話を取る。しかし、嫌な予感は当たり、堂島から掛かってきた内容を聞いた冴夜は頭痛に悩まされることになる。



現在、稲羽警察署

「全く俺がいたからよかったもの……！」

「す……すいません……！」

現在、悠と陽介は警察署で堂島に怒られていた。原因はこれかのテレビの中の戦いにゴルフクラブだけでは心許ないと言う事で、陽介がジュネスの倉庫から持ってきた模造刀。

持つてくるまではよかったのだが、陽介がそれを振り回していた所を警察に見られてしまい現在に至る。

「お前はこう言う事するようには見えなかったんだが……！」

今だ信じられないと言った感じの堂島。

引越してまだ一週間も経ってないが、悠の真面目な態度には関心していた程であり、悠がこんな事をすると思えば微塵も感じていなかった為、尚更信じられ無かった。

「すいません……次から気をつけます」

「え?! いや……その、今回は俺が悪かったんであんな……コイツの事を叱らないで下さい」

悠が堂島に謝罪するのを見て、陽介は今回の一件は自分に非が有ると思っただけに謝罪した。その様子を見た堂島はため息を吐きながらも二人の態度から反省したのを感じて頷いた。

「まあ、今回は何とかあったが次はどうなるか解らんからな。あんな、問題を起こすなよ……！」

「はい……」

堂島の言葉は少し厳しい様に感じるが、その言葉からは心配してくれているのが感じ取れた。

「ああ……そうだ。一応、洗夜の奴を呼んどいたからな、ちゃんと事情を説明しとけよ」

そう言つて堂島は最後に爆弾を落として仕事場に戻つて行き、その言葉を聞いた悠の表情は少し青くなる。

(……マズイ。いくら兄さんでも補導されたなんて聞いたら良い顔をしていない。だからって、理由も話す訳にもいかない。ペルソナやシャドウなんて非現実的なモノを話したって信じてもらえる訳がない……)」

昔から警察の厄介にだけはなるな、そう言われてきた。だが実際に補導された事によつて、兄である洗夜がどんな反応をするか、悠が心配していると陽介が口を開く。

「なあ相棒、洗夜つて誰なんだ？」

「そう言えば、陽介は会つてなかつたな。洗夜は俺の兄さんだ」

「ええッ！ お前つて兄弟いたのかッ!？」

自分は一人っ子に見られ易いのだろうか？ そんな疑問が悠の頭を過ぎつた時だった。

「あれ？ 君つて確か、堂島さんの所の……?？」

誰かに声を掛けられて悠が振り向いて見ると、そこには右手にコーヒーを持った堂島と一緒に行動している頼りなさそうな刑事がいた。

「貴方は確か、叔父さんと一緒にいる……」

「堂島さんの相棒を勤めさせて貰つてる足立透だよ。宜しくね」

軽い感じに話し掛けてくる足立に、悠も自己紹介しながらそれに答える。

「鳴上 悠です。宜しくお願いします」

「ああ、宜しく。ところで君達つて天城さんと同じクラスだよな？」

天城さんについて何か聞いてない?？」

悠達も雪子の映つたマヨナカテレビを見ている為、足立の言葉に二人は顔を見合わせた。

「あ、あの、天城さんに何かあったんすか!？」

「えっ!? いや、その、実はね……」

陽介の勢いに圧されたのか、足立は少し気まずい感じで語り始める。

足立の話によれば雪子が昨日辺りから家に帰って無い、そう家の人達から相談を受けたらしい。

しかし警察の中には山野アナが旅館の接客態度に過剰にクレームを入れ、それが原因で接客をしていた雪子の母親がストレスで倒れたという情報を得ていた為に少しややこしくなってしまった。

この状況で雪子が行方不明になったのは、実は何か後ろめたい事があるからじゃないかと思っっている人達がいるとの事。

「そう言う訳だから、警察署の中もピリピリしていてね……」

……と、足立がそこまで言った時だった。

「足立いッ！ コーヒー持って来るのにどんだけ掛かってんだッ!!」

堂島の怒鳴り声が警察署の廊下に響き渡り、その声を聞いた足立をビクッ!と肩を揺らす。

「い、今行きます! ……って言うか今の言っただけ良かったのかな？」

「ゴメン! 今の無し! 忘れて……」

そう言っただけ足立は堂島の所に駆け足で去って行くが、足立の言葉を聞いた悠達は易々と忘れられる訳がなく、事態が嫌な方向に流れている事を感じ取っていた。

「相棒……もしかしてコレってマズインじゃね？」

「確かにマズイ……このままじゃ、雪子が犯人にされてしまうぞ」

二人がそう言っただけ、今の状況に焦りを感じていた時だった。

「悠!」

自分の名を呼ぶ聞きなれた声を聞き、悠は振り向くと洗夜がこちらに近付いて来ていた。

どうやら既に洗夜は警察所に到着していた様で色々と手遅れを察した。

そして、二人の前に来た洗夜は呆れた様子で悠を見つめる。

「全く……越してきて日が浅いのにやってくれたな……」

「人生初補導」

こうなれば勢いでこの場を乗り切ろうと考えた悠はVサインを見せた。

「ほう……それはおめでとう。——そして馬鹿野郎！」

洗夜のチョップが悠の脳天を直撃する。

「あだっ!？」

綺麗なチョップが決まり、悠は無表情のまま頭を抑える弟に洗夜はため息を吐く。

「悠……今日は叔父さんがいたから良かったものの。人がいたジュネスのフードコーナーで模造刀を振り回したって電話来たぞ? どうなんだ……?？」

「あつ!・ちよっ!?! それに関しては俺がやったんだ! 相ぼ——悠は悪くねんだ!」

洗夜と悠の間に陽介が入った。今回の件、悠は完全に自分のとばかりを受けたに過ぎない。

叱られている悠。そして本当に心配した様子の洗夜の姿に陽介は罪悪感で何も言わない訳にはいかなかった。

そしてそんな陽介の姿の方を洗夜は向いた。

「君は……そうだ悠に聞いたな。確か……花丸 陽介君だったか?」

「わーい満点だ!……って誰が小学校低学年の満点回答すか!？」

「花町だよ兄さん」

ああ、そんな感じだった。陽介の名字を知らない洗夜はそれに聞き覚えがあると感じ、そのまま脳内保管しようとし始めた。

「花村! 村だよ村! なんて相棒も間違うんだよ!？」

「ワンランク上げてみた」

「上げた結果、間違ってるじゃん!？」

陽介が警察署だと忘れてツツコミの嵐を披露するが、その後ろで騒ぎを聞いた警官が不振そうにこちらを見ている事に洗夜は気付いた。

「少し静かに。ここは警察署——」

「見付けたッ!」

突然、廊下に響く声に荒野の言葉は遮られ、三人がその声の主の方

を振り向くと……。

「里中！」

そこには走ってきたのか、肩で息をしている千枝の姿が会った。



現在、稲羽警察署受付

悠と陽介は千枝に今までの状況を洗夜に隠れながら説明した。

「何よそれ……！ 雪子が疑われてるのッ！」

「バツ！ 落ち付けて……気持ちちは解るけどよ……」

千枝を宥めようとする陽介は視線を自分達を見ている洗夜へ向けたが、親友である雪子の危機に大人しくする程に千枝は大人ではなかった。

「落ち着いてられないよ！ すぐにあの世界から助けに行こう！」

「あの世界……？」

千枝の言葉を聞いた洗夜の目が真剣なものへと変わる。

（そうか、彼女もあの世界を知っているのか……）

悠と陽介しかあの世界に入っていたところ見ていなかった為、洗夜は千枝がテレビの世界の事を知っていた事が意外だったのだ。

しかし、その言葉を聞いた陽介は洗夜が怪しんだと勘違いし、必死に誤魔化そうと慌てて洗夜の前に出る。

「えつと!? ……あのせ……あのせ……あの石灰石が良かったんすよね!!」

「? ……石灰石？」

「そうそうそう!! 実は里中は石灰石マニアなんすよ！」

（キツイぞ陽介……！）

どこの世界に石灰石マニアの女子高生がいるんだと、悠は内心で咳くが冷や汗まみれの陽介も無理やりなのは分かっているようだ。

「へっ? 石灰石? そんな事よりも雪——うぐっ！」

「流石は八十神高校一の石灰石マニアだ！」

悠が墓穴の中に墓穴を重ねようとする千枝の口を閉じさせその場を乗り切ろうし、そのまま小さな声で千枝へ話しかけた。

「助けに言うが……あそこは危険なんだ」

悠は何とか落ち着かせようとする。少なくともペルソナに覚醒していない千枝はシャドウと戦う力はなく、このまま行ったら足手まといにしかならない。

「……まったく、相棒の言う通りだ。お前はあそこがどう言う所か知らないからそう言う事が言えるんだよ」

なんとか無理やり押し通したのか、陽介は絶妙な距離を取りながら悠の意見に頷くが千枝は納得しなかった。

「そんなの、あんただって同じだったじゃん」
「うっ」

千枝の言葉に黙ってしまう陽介。悠もそれに関しては正論の為にフォロワー出来ない。

「でもな……武器も取り上げられたしよ」

「え？ 武器？ それなら売ってる場所知ってるからついて来てよ」

陽介の言葉に普通に返す千枝。

しかし、武器を売っている店って一体……等と言う疑問が頭の中に残る悠と陽介は互いに顔を見合わせる。

「どうする？」

陽介が悠に意見を求める。

「此処に居ても仕方ないし、まずは行ってみよう」

その言葉に千枝は頷き、今にも走り出しそうな感じに体を動かし始めた。

「じゃあ案内するから行こう！」

「何処に行くんだ？ 何処に……」

見守っていた冴夜だが、今にも移動しそうな三人を呼び止めた。

雪子救出に行くのは予想の範囲内だが、どうも今の様子を見る限り三人の結束がバラバラで不安なのだ。

だが冴夜はそれよりも知りたかった事がある。……悠の覚悟をだ。

「悠……また何かするつもりか？」

「……うん」

悠はいつもの無表情に見えるが、兄である冴夜は悠の表情が真剣なものだとわかった。

「お前はもう高校生だ。……俺は同じ事はもう言わないぞ?」

「大丈夫」

悠の瞳が段々と強くなって行く。それを見て冨夜の瞳も強く、そして鋭くなった。

「……俺はお前を守ってはやれるが、お前がやる事の責任はとってやれないぞ?」

「うん。……自分の選んだ道。その行動の責任は自分でとる」

ここまでの会話の間、悠は一回も冨夜から目を逸らさなかった。

その事に冨夜は多少驚き、更に言えば今まで身を流れに任せてきた悠がここまで自分の意志を示している事に驚きと共に嬉しく思えた。

いつの間にか前に進み始めた弟の姿。冨夜はその姿に思わず笑みを浮かべた。

「ハハ……」

「……?」

悠は何故、兄が笑ったのか分からなかった。そんな様子に陽介と千枝も心配そうに見守っている。

そしてそんな様子を知ってか知らずか、冨夜は。

「だったら行け……悠。己の意志で選択し、そして前に進め」

「……分かってる。今度こそ……自分の意志で」

悠の言葉に冨夜は嬉しそうに笑みを浮かべると、陽介と千枝の方を向いて二人にある物を投げ渡した。

「おっと!」

「うわっ!」

突然の事で驚く二人だったが、うまくキャッチすることが出来た。一体、冨夜が自分達に何を渡したかと思ひ、キャッチした手の中を見ると、そこには小さな鈴がそれぞれの手にあった。

陽介がオレンジ、千枝が緑色の鈴だ。

「お守りだ……」

冨夜はそう言って悠達に背を向け、その場を後にする。

そして、その後ろ姿に悠は黙って見送り、陽介と千枝は軽く頭を下げると警察署を後にするのだった。



現在：警察署

悠達がいなくなった後、洗夜は警察署の中にある自販機の前でコーヒーを買い、それを飲みながら悠達の事を考えていた。

(……まだまだ見ていて危ういが、迷いはなかった。……全く、お前を思い出してしまうよ……『湊』)

洗夜は今もういない親友の事を思い出しながらコーヒーを飲み干し、隣のゴミ箱へ入れた時だった。

後ろから洗夜は話しかけられる。

「あれ？ 君は確か堂島さん所の……？」

「あつ……あなたは確か……！」

洗夜は振り向いてみるとそこには以前、事件現場で自分を無茶苦茶な理由で捕まえて堂島に大目玉を喰らった刑事の足立が立っていた。

洗夜からすれば忘れる筈のない相手であり、足立も覚えているのだろう。洗夜の表情を見る顔は引きつっている。

「は、ははは……や、やあ僕は足立透だよ。堂島さんの相棒を勤めさせて貰ってる。君は確か、鳴上君のお兄さんだったよね？ 堂島さんから色々聞かせて貰っているよ。……覚えてるよね？」

「色々と衝撃的でしたから。……まあ、過ぎた事なんで今はどうでも良いですよ。俺は鳴上 洗夜です」

そう言って握手する洗夜と足立。流石に前の事もあってどこかギクシヤクシヤした挨拶だった。

「よ、宜しく。……そう言えば、君ってさ……天城雪子ちゃんについて何か知らない？」

「……突然ですね。意味が分かりませんが？」

「いや、実は……」

足立は洗夜に悠と同じ話を聞かせ、洗夜は足立の話から周りの警官達がピリピリしている理由に納得した。

「なる程……署内がピリピリしている理由はそれですか……」

今思えば、悠達が補導されたのもかなり動きが早く感じる。署内、町中、どうやら思っている以上に警察は警戒を強めているようだ。

足立もどこか怠そうな感じで覇気がない理由もそれによる疲労なのだろう。

「そう言う事。だから、天城さんについて……」
軽い感じで足立が言った時だった。

「足立ッ!! コーヒーのお代わりにどれだけ時間掛けてんだッ!!」
堂島の怒鳴り声が廊下を介して奥から響き渡り、足立は慌てて返答した。

「す、すいません! あ、それよりさっきの事言っただけ良かったのかな……? ゴメン! 今の無し! 忘れて……」

そう言っただけ足立は悠達に言った事と同じ事を言い残し行ってしまおうが、やはり忘れてと言われて忘れられる訳が無い。

「彼女が疑われているのか。救出が長引けばマズイかも知れないな……」

このままでは、雪子が犯人と言う先入観が警察内で広まるかも知れない。

最悪、救出が間に合わず雪子がシャドウに殺害されたら、彼女が自殺したと思われる可能性もあり、冴夜の目が鋭くなった。

「俺も行くか……!」
そう言っただけ冴夜もテレビの世界に行く為、自宅へと急いだ。

END

第八話：友達

同日

現在：雪子姫の城

洗夜との接触の後、悠達はテレビの中へと入り、雪子がいるである巨大な城へと向かった。

しかし、そこで雪子を心配した千枝が独断で行動をしてしまい、急いで千枝を追う悠達が追った先に見たのは千枝と千枝？が対峙している光景だった。

「あ、あれは!?」

「シャドウだクマよセンセイ！ 抑圧された内面……不安定な精神状態が制御を失ってシャドウが出たクマ！」

クマの説明で悠達に気づいた千枝がこちらを向くが、その表情は青白く冷や汗が流れていた。

「み……皆……違う……違うよ！ 来ないで！ 見ないで！」

自分のシャドウが見られたくないのか手を広げ、シャドウを隠そうとする千枝。

しかし、彼女のシャドウである千枝？は可笑しそうに笑いだす。

『ふふ。雪子はトモダチ……雪子が大事……手放せない……はははは！ あんな都合のいいやつを手放せる訳ないよね！』

「違う……違う！」

『雪子ってさ、美人だし女らしいから男子にいつもチャホヤされてる……。その雪子が時々あたしを卑屈な目で見てくる……。それがたまんなく嬉しかったんだよね!! 自分よりも上の人間が自分を頼りにしてるんだからさ!!』

「黙れ!!」

認めない。全部が嘘。そんな事実は存在しない認めない。

千枝？の言葉を否定する様に遮る千枝だったが、その状態の危険性に悠達が気づかない筈がなかった。

「まずいぞ……」

「よせ里中！」

不穏な空気をさした陽介が千枝を止めようとしたが、自分のシャドウのせいで冷静さを失っている千枝には届いてない。

そして、千枝はどうとう拒絶の言葉を口にしてしまう。

「あんたなんか！ あんたなんか……私じゃない！」

その言葉が引き金となり、シャドウから闇が放出された。

『うふふ……はははは!!』 そうよ私は私！ あんた何かじゃないわ！』

そう言うのと放出された闇が千枝？包み込む。

そしてその闇は覆面を被り、手には鞭を持ち、沢山積み重なっているシャドウ達の上に乗っているシャドウ『千枝の影』となって出現した。

真なる我となった影は、千枝を見下す様に笑いあげる。

『ハハハハハハハハッ！ 我は影、真なる我、うふふ、あんた……邪魔！』

「あ……ああ……」

「まずい、クマ！ 千枝を頼むぞ！」

「任せるクマ！」

何が起こったのか理解出来ずに放心状態になっている千枝はクマに任せ、悠達はシャドウの前に出た。

まだシャドウとの戦いに慣れていない二人だが、此処で逃げる訳にも行かないが、どこか堅いそんな二人を見て千枝の影は鬱陶しそうに見下す。

『なに？ あんたたちも邪魔よ。とつとと消えなさい！』

「消えろと言われて消えられるかよ！ 行くぜ相棒！」

「陽介！ 油断するなよ！」

「ペルソナ！」

その唱えるとジライヤとイザナギが召喚され、二人はそれぞれ戦闘体勢に入る。

「先手必勝だ！」

『ガル！』

陽介が先手をとり、ジライヤから放たれた疾風が千枝の影を襲い、

そのままガルをモロに喰らった千枝の影は叫び声をあげた。

『きゃああーこの！』

ガルを受けて体勢を崩す千枝の影。自分達の想像以上のダメージの受けに悠達は相手の弱点を悟り、自分の属性である陽介は笑みを浮かべる。

「どうやら相手の弱点は風の様だ」

「ああ、なら俺の独壇場だ相棒！援護を頼む！」

「ッ!? 待て陽介！油断するなッ！」

相手の弱点属性が自分の属性と分かった途端に、考え無しに突っ込む陽介を悠が止めた。だが陽介はそのまま突っ込む。

「くらえー！」

そう言つて再びジライヤはガルを放ち、千枝の影へ放たれた。……が。

『ふふふ、ただ突っ込むだけの馬鹿程倒し易いのは無いわよ。……コレでどう？——緑の壁！』

千枝の影が『緑の壁』を唱えると、その前に文字通り緑色の壁が出現した。その壁がジライヤのガルと衝突すると、ガルは壁にぶつかり威力が激減した微風となった。

『あーら、良い風ね』

「嘘だろ！ そんなのありかよー！」

陽介が余りの事に混乱するなか、シャドウが視線を陽介へ向けた。

「ッ！……逃げろ！ 陽介!!」

「攻撃がくるクマー！」

「え？」

攻撃を防がれての後で陽介の思考が遅れ、悠達の言葉を理解する事がすぐには出来なかった。

だが、そんな千枝の影の視界には自分達も映っていたことに悠達も気付いていない。

『何、人事みたいに言ってるの？ あんたたちもよー——マハジオー！』

「ぐわあああ！」

千枝の影が放つ雷が辺りに降り注ぎ、悠達はダメージで膝を付いて

しまう。

弱点を突けば勝てると思っていた二人にとって、耐性属性を持つ敵との戦いが想像以上に手強い。

同時に確信もした。目の前のシャドウが陽介のシャドウよりも強いという事を。

「センセイ！ ヨースケ！」

クマが二人に危険を知らせようとするが、千枝の影の方が早かった。

『これでとどめよ！ 底知れぬ妬み！』

千枝の影は鞭を振り回しながら攻撃を放つ。

(アレは流石にマズイッ！)

いち早く攻撃に気付き、ヤバいと判断した悠が陽介を庇う為に出た瞬間、強烈な一撃が悠の体を襲う。

「ぐあッ!!」

「相棒！」

余りの威力に再び膝をつく悠は、初めて大型シャドウの恐ろしさを自覚した。

弱点を突けば楽に勝てる？ 二人掛かりで挑めば余裕を持てる？

(俺達は……甘かった……！)

膝を着いて息を乱しながら悠は後悔しながらも、勝つ手を考えた。

残された手はやはり隙を作らなければ始まらない。

それしか手がなく、悠は隣で膝を着く陽介の方を見る。

「はあ……はあ……！ 陽介、どうにか……ならないのか……！」

「どうにかって言ってもよ……あの壁をどうにかしねえと!？」

やれたらとうにしているが、あの壁がある限り決定打にならない事に陽介は歯痒かった。

そしてどうすれば良いか分からず、陽介の顔に恐怖が写った時だった。

『疾風ガードキル！』

突然、何処からともなく緑色の光が飛び込む様に現れ、緑の壁と激突した瞬間、緑の壁に亀裂が入り、そのまま粉々に砕けて消滅する。

『ちよつと！ ナニよこれ！』

突然の事に困惑するのは千枝の影だ。だが、その突然の事には悠達も驚きが隠せないでいた。

少なくとも自分達では無い別の力が働いたのだ。今の悠達はそれぐらいしか理解出来ず、呆気にとられてしまった。

「ど、どうしたんだ……？」

「よく分かんないが、今がチャンスだ！——イザナギ！」

我に返った悠の言葉を合図にイザナギが千枝の影を斬り付け、斬撃によるダメージを与える。

『キヤアアアッ！』

千枝の影が怯んだ事で隙が生まれ、悠は更に追撃した。

「畳み掛ける！ オロバス！」

『アギッ！』

悠がイザナギを一旦戻し、馬の姿のソロモン72柱の悪魔『オロボス』の名を持つペルソナを召喚すると同時に炎を放った。

炎は千枝の影を囲む様に走り、シャドウの周りは軽い火の海へと変わる。

『ぐああッ！ ナメンじゃないわよッ!!』

「ッ?」

追いつめられた大型シャドウの怒りの反撃。

千枝の影は鞭を握り絞めると振り回し、炎を風ぎ払いながら悠を目掛けて振り下ろそうとした。だが……。

『スクンダー！』

『！……な……に……コレ……体が……！』

突如、先程の様に謎の光が千枝の影に降り注がれ、その光を浴びた途端、千枝の影の動きが鈍りだす。

そして今がチャンスと思い、悠はイザナギを再び召喚した。

「イザナギッ!!」

『スラッシュー!』

体の自由が効かない千枝の影は、イザナギの攻撃を避ける事が出来ずにそのまま攻撃が直撃した。

『あああああ……!!』

それが止めとなり、千枝の影は千枝?の姿へと戻っていった。



その後、千枝と千枝?は向かいあっていた。陽介からは、俺もそうだった……などと言った応援をして貰い。

悠も、それも含めて千枝だ。などと言って応援をした。

「私、最低だね……でもさ、こんな……わた……しでも雪子のこと……好きなのは嘘じゃ……ないから……!」

泣きながら答える千枝の言葉を聞いて、千枝?は静に頷くと光りだし仮面を付け薙刀を持つペルソナ『トモエ』へと転生した。

「知ってるよ……皆もそう言う所あるから。だから人間なんだ……」

「……うん、ありがとう」

悠の言葉に少し気が楽になったのかお礼を言う千枝。その時だ。

『うふふあははは! あらあ? サプライズゲストかしら? どんな風に絡んでくれるの?』

突如、雪子?がその姿を現し、悠達を見ながら嬉しそうに笑っていた。

だが、やはりその姿にはいつもの雪子の姿は無く、千枝は目の前の存在を否定する。

「違う……! あんたは雪子じゃない! 本物の雪子は何処!」

『何言ってるの? 雪子は私、私は雪子』

千枝と雪子?が言い争っている間に悠はクマに聞いてみる。

「やっぱり彼女は……」

「そうクマね……もう一人のあの子、クマよ」

(やっぱり彼女のシャドウか……)

陽介の時と同じ様な感じだと思いながら、悠は雪子?に警戒を解かなかった。

『それじゃ再突撃いって来ます! 王子様! 首を洗ってまってるよ!』

だが、雪子?は何もせずそう言って奥の方に走って行ってしま

「ま………ま………！」

雪子？を止めようとする千枝だが、疲れが出た為か膝をついてしま
う。

「今日は一回戻った方がいいな………」

「ああ、里中を休ませないとな」

「ちよ！ ちよつと勝手に決めないでよ！ 私は大丈夫だから！」

悠と陽介の話しに反論して叫ぶ千枝だが、何処をどう見ても無理を
している様にしか見えない。

「あのな………！」

千枝の説得は陽介とクマに任せ、悠はある事を考えていた。それ
は、先程のの戦いの最中に隙を作ってくれた光。

アレが無ければ、恐らく自分達は負けていたからだ。

「なんだったんだ………あの大型シャドウの技を糸もたやすく………」

そう考えていた時だった………。

「相棒!? 里中の野郎が！ 勝手に行っちまいやがった」

「!? どういう事だ！」

実は……。陽介は気まずそうに説明した。

なんとか戻ろうと説得していたのだが、雪子は今も寂しい思いをし
ていると聞かず、どうするかクマと相談している隙を突かれて千枝は
先に進んでしまったとのことだ。

「どうする相棒!? 里中の奴、まだペルソナに慣れてない筈だぜ。俺
だってまだ扱い切れないのに、さっき覚醒したばっかで、しかも疲労
してるんだぜ!？」

「とりあえず追うぞ。里中の向かう先は天城のところだ！」

悠はそう言うと、急いで次のフロアへ千枝を追っていった。



現在、雪子姫の城。

洗夜は城の影から、悠達が次のフロアへ向かう眺めていた

「急いで来て正解だった。……しかし、花村の奴はまだまだか。緑の
壁が破壊された時に奴も攻撃していれば、もっと楽に勝てた筈なん
だ
が………」

しかし、それを除いても悠達の耐性持ちのシャドウに対する戦い方、それは仕方ないが撫様としか言い様が無かった。

今回は自分が居たから勝てたものを、いつでも自分がいる訳ではない為、悠達には早く自立して貰わないと困る。

本来なら洗夜が教えれば良いのだが、もし自分が名乗り出て共に戦う事になれば必ず自分を頼ってしまい、全く成長しなくなる可能性もある。

何より、経験談からあの年齢の子達に教えるのは実戦が良いと分かっているからだ。

(ゆかり達を思い出すな……)

洗夜は感傷に浸りそうになったが、先程の光景の中である疑問が生れ、そつちに意識を向けなおした。

「しかし……まさか、あの子まで覚醒するとは。……だが何故、この時期にペルソナ能力に覚醒する者達が増えたんだ……？ 偶然にしてはイゴールの事件とタイミングが良すぎる」

経験談から言つてこの手の事は偶然で片付いた試しがない。

やはり何かの力が動いていると洗夜は考えながらも、今は悠達の後を追う事を優先させ、後を追っていった。

END

第九話：鳥籠の中の赤い鳥

同日

現在：雪子姫の城【最上階】

『老舗旅館？女将修行？ そんなウザい束縛まっぴらなのよ！』

「や……やめて……」

千枝を追った悠、そして陽介とクマはやがて最上階まで辿り着いていた。

最上階の巨大な扉は既に開いており、悠達が扉の中に入るとそこには千枝、そして雪子と雪子？が対峙していた。

「雪子……」

雪子の苦しみが分からなかったからか、雪子？の言葉を聞いて表情を暗くしている千枝。

そんな中、雪子？は話を続けた。

『生き方……死ぬまで何から何まで全て決められてる！ あーやだ！嫌だ！ 伝統？ 誇り？ そんなのクソ食らえよ！ あんな旅館、潰れば良い！ 私はモノじゃないんだから！……それがホンネよ。ねえ？……もう一人の私？』

「ち……違う……違うッ！ やめてよ！ そんな事、みんなの前で言わないでよ！ あなたなんか……！」

雪子？の言葉を聞いた雪子。彼女がそれを否定しようとしている事はすぐに分かった。

「……まずいぞ！」

「ダメ！ 雪子ッ！」

「言うな！」

不穏な空気を感じ悠達は雪子を止めようとして声を上げるが間に合わず……。

「あなたなんか！ 私じゃないッ！」

その言葉が引き金となり、雪子？から闇が溢れ出る。

『ふふふ……あははははははは!! そうよ！ 私は私、あなたじゃないわ！』

雪子？がそう叫ぶと、闇が集まり上から鎖に繋がれた鳥かごが降つて来る。そして、中から顔が人面の紅き鳥のシャドウ『雪子の影』が出現した。

『我は影、真なる我……ふふふ、力が……力がみなぎってくる！』

「あ……ああ……何？ 何なの……！」

「雪子!?——クマ君！ 雪子をお願い！」

「任せるクマ！」

雪子の事をクマに任せて悠達は武器を構え、前にでた。

『なに？ 何なのあんた達、邪魔よ！ 来て王子様！』

雪子の影がそう叫ぶと、冠を被り、赤い服、そして小さな剣を持つシャドウ『白馬の王子』が出現する。

「いきなり召喚か……」

「大丈夫、数ならこつちの方が勝ってる」

「皆……いくぞ！」

「「ペルソナ！」」

悠達はそれぞれのペルソナを召喚し、シャドウ達に掛かっていくが悠にはある不安があった。

「邪魔すんなあ!!」

早速、ペルソナで突っ込む千枝だが、体力の消費は変わっていない。所詮は空元気だ。

(長期戦は出来ない。短期戦に持ち込む！)



現在；雪子姫の城【通路】

「…………やはりシャドウ化したか」

洗夜はこと切れた黒い大型シャドウ『征服の騎士』を背景にし、自分の傍に漂うヘメラからの情報を得ていた。

本来ならばすぐに追い付けたのだが、他のシャドウ達がまるで妨害する様に洗夜の前に立ち塞がり、少々時間を取られたのだ。

しかし、洗夜の中には既に妨害したシャドウ達の事などなかった。あったのは新たに現れた雪子の影の事。

(この力……やはり深い内面な程、シャドウも強くなるか。先程の里

中千枝のシャドウよりも強い力だ……)

強い力を感じ取った洗夜は、急ぎ城の階段を駆け上がって行く。



「はあ……はあ……」

「里中！ お前は一回下がれ」

『ふふふ、どうしたの？ そんなモノ？』

悠の不安は当たった。現在の悠達の状況、それははつきり言って危険だった。

全員の身体はボロボロで、顔や服にも傷が目立ち始めている。

「流石にマズイぞ！ あの王子野郎……ふざけた顔の癖に強え！」

そう、苦戦の理由は戦いの直後に召喚されたシャドウにあった。

悠達が雪子の影へ攻撃を仕掛ける、又は接近すると白馬の王子が妨害をし、その隙を突いて雪子の影が攻撃を繰り返すという連携に苦しめられているのだ。

唯でさえ、雪子の影の力は強い。体力・精神共に消費している悠達には端から余裕などはない。

「ヴァルキリー！」

悠は強引でも攻撃を仕掛けようと新たにペルソナを召喚し、攻撃を仕掛ける。

馬に跨った二刀流の戦乙女はその機動性を使い、雪子の影へ一気に距離を詰めた。

『早い!?!』

その速さは雪子の影も反応が遅れ、悠はその隙を逃さなかった。

「斬り伏せろ——ヴァルキリー！」

『両腕落とし』

両手の剣を同時に振り落とし、ヴァルキリーの剣術は雪子の影の両翼に傷を刻み込む。

『グウッ！——まだまだ！』

「駄目クマよセンセイ!? 攻撃が浅いくまー！」

(クソッ……。こつちには余裕がないのに……!)

思った以上に雪子の影の翼は強力だった。全身を覆う赤い羽根は

最早、並ではない鎧でもあったのだ。

「相棒！　今度は連携でやつぞ！　天城さんのシャドウさえ何とかすれば、あの王子野郎も——」

陽介が連携を提案するが、悠が全て聞き終える前に千枝が行動を起こした。

「負けられない……負けられないのよ！　雪子は……雪子は絶対に私が助けるんだから！」

この中で一番長く雪子との付き合いが長い千枝。しかし、彼女は雪子の苦しみを全く理解……否、気付いてあげる事が出来なかった。

故に千枝は自分が許せなかった。何も知らない癖に何が親友だ、と千枝は心を燃やして雪子の影に単身突撃して行った。

「駄目だ里中！」

「千枝……！　駄目……！」

既に千枝は限界を迎えている筈であったが、それでも無理な攻撃を繰り返しており、いつ倒れても不思議ではない。

雪子も衰弱の中で危うさを感じたらしく、千枝を止めようとするが声が入り出なくて届かなかった。

『王子様！』

『！』

雪子の影の言葉に白馬の王子は千枝の前に立ち塞がる。

「邪魔するなああああ！！」

千枝は力の限りで白馬の王子を蹴り飛ばした。

その威力に白馬の王子はゴムボールの様にバウンドしながら吹き飛び、千枝の前に障害は既がない。

「トモエ！！」

『よくも王子様をッ！！』

振り下ろされたトモエの薙刀と雪子の影の翼がぶつかり合った。

お互いに全力の一撃。しかし、疲労している千枝が徐々に押され始める。

『マハラギ！』

「——トモエ！」

雪子の影が放つマハラギとトモエのブフが衝突するが、相殺にまでは至らず千枝は押し負ける。

「あああつ!!——くっ! まだまだ!!」

だが、千枝は受け身を取って再び雪子の影へと駆け出す。その光景に悠達も直感的に危険を判断した。

「陽介!」

「任せ——へぶっ!!」

千枝の下へ向かおうとした瞬間、悠と陽介は何者かに片足を掴まれてその場で転んでしまう。

二人はすぐに正体を知ろうと倒れたまま振り向くと、そこには先程、千枝に蹴飛ばされた白馬の王子がいた。

白馬の王子は悠の左足、陽介の右足をそれぞれ掴んでおり、ここぞというタイミングで妨害したのだ。

「この……!」

「てめえ!」

悠と陽介は全力で何度も蹴るが、白馬の王子は離そうとせず、寧ろ表情は笑っているように見えた。

「この……! クマー! こいつを何とかしてくれ!!」

陽介は二人では無理と判断し、近くにいたクマに助けを呼んだがクマは震えながらオドオドする。

「クマが!? そ、そんな無理クマよ……クマじゃシャドウには……!」

「良いから早く!!」

悠が声を荒げたがクマは動けない。

「雪子は私が守る!」

悠達は間に合わず、千枝は単身で再び雪子の影へ突っ込んだ。

『なんなのよアンタはあ!!』

再び雪子の影とトモエがぶつかり合ったと思われた、その時だった。

パリーン——! と音をたてながらトモエは砕けた様に消滅してしまった。

「えっ……!」

『!?——ふふ……!』

言葉を失い、目の前の状況が理解できない千枝を見て、雪子の影は笑みを浮かべながら大きく翼を広げて飛翔する。

その光景を千枝、白馬の王子に足を掴まれている悠と陽介。そして立ち尽くすクマはスローモーションで見えた。

『アハハハハ! ——アサルトダイブ!!』

雪子の影はその巨体を利用しながらスピードを上げて千枝へと突っ込み、その勢いのまま悠と陽介、そしてクマを白馬の王子ごと巻き込んだ。

「ガアツ——!」

「カハツ!」

地面に落ちた悠と陽介の体内から空気が強制敵に吐き出された。白馬の王子は先程の巻き添えで消滅し、クマも少し離れたところに落ちていた。

そしてそれは、最初に吹き飛ばされた千枝にも当然の如く同じ様に地面に落ちた。

「ぐはっ!——そ……んな……!」

『やっぱりね……!』

千枝を見下ろすように雪子の影は近付き、そう呟いた。明らかに失望の色が混ざっていたが、どこか予想通りだという諦めの感情もある。

そんな雪子の影を、友と偽るシャドウを千枝は最後に力を振り絞って睨みつけた。

「何が……よ……!」

『やっぱり千枝は守ってくれない……私を……友達を……!』

そう言っつて雪子の影は千枝の向こう側に首を向ける。

千枝もそこに何かあるのだと、痛い首に鞭を打って向き、ようやく気付いた。

「鳴上くん……?……花村?」

そこには倒れて動かない悠達の姿があった。三人は気絶しており、大型シャドウの連戦とその疲労の中でのペルソナの使用。既に自力

に目覚めるエネルギーは一滴も残っていないのだ。

そんな三人の姿に千枝は思い出す。何回も自分を止めた二人の姿を、それを雪子の事しか見えてなかった自分は無視したことを……。

『千枝のせい。何も考えないで突っ走って……私を守るって言った癖に守れない。——そういつもの千枝』

「……えっ?」

千枝は雪子の影の言葉が何故か胸に突き刺さった感じを覚えた。ジワジワと心に痛みも生れ始めた。

『いつもいつも……どうでも良い時だけ守る千枝。ここぞという時だけ守ってくれない千枝。……私の友達……』

「ふぎ……けるな……! あんたは雪子じゃない……雪子を語るなあ!」

『酷い……私は雪子なのに。——でも、仕方ない事。千枝には私のこの部分を教えてないもの。……言っただって何にもならないから。そうよね……私?』

雪子の影は首を雪子の方へと変えた。千枝もそつちを向くと、雪子は両手で耳を抑えながら頭を左右に激しく振っていた。

目の前の現実を拒絶するかのよう……。

「やめて……もうやめてよ! 千枝に酷い事しないで! 鳴上千ん達を傷つけないで!」

雪子は悲痛な叫びをあげて悲願するが、雪子の影はそれを無視して話を続ける。

『あの男に言った事なんて嘘。千枝に言わないのは迷惑を掛けるからじゃない。——言っても無駄だから』

「……無駄?」

「やめてえッ!!」

雪子は叫ぶ。心の底から叫んだが、それを自分の影が無視するのは心のどこかで察していた。

一度や二度じゃない、雪子の言葉を雪子の影はずっと無視するだろう。

『だって本当じゃない? 千枝に何ができるの? 旅館の連中を説得

できると思ってるの？ 微塵も思っていないから言わなかったんじゃない。口だけの千枝に言ったって解決しない……ただ虚しくなるだけだから千枝には言わない』

「やめてよ……！」

雪子の声に力が無くなってきた。心が殆ど折れているからだ。

自分に今、唯一出来る事がこれを言うぐらいしかない。千枝を傷つけ、悠達にも酷い事をしてしまった。

(私の我儘が……こんな事を起こしてしまった……！)

自分が旅館を継ぎたくないから、自由を得たいから等と思つてはいけなかったのだ。

雪子の瞳から徐々に光が消え始める。……その時だ。

「雪子!!」

「！」

自分と呼ぶ声にハツとなつて顔を上げると、その目に映つたのは足を震わせながらも立ち上がっている千枝の姿だった。

『なに、まだやるの?』

面倒そうに千枝を雪子の影は見つめるが、千枝は一切目を逸らさず、静かに話し始めた。

「雪子……私ね、雪子に謝らなきゃならない事がいっぱいあるんだ。雪子が私に言えなかった様に……私にもあるんだ……。それを互いに言えば喧嘩になるかも……。でも、今の私達には……。それぐらいが丁度良いのかもね……」

そう言つて千枝は笑顔で雪子の方を向き、その笑顔を見て雪子は言葉を失った。

ずっと見てきた親友の笑顔。救われてきた笑顔。千枝のその笑顔を見ると不思議と心強く、元気になつていたのを思い出したのだ。

(そうだ……昔、チョウソカベを拾った時……千枝に相談したんだ。旅館じゃ飼えないから……千枝に言つて近所を回つて結局、千枝の家が引き取ってくれたんだ……)

最近では散歩を嫌つて太つたと聞いた。見に行つたら本当に太つていて一緒に笑つた。

無理やり散歩に連れて行ったら途中で眠って動かなくなり、日が暮れて二人で呆れながら笑った。

ずっと一緒に親友との思い出。古いものから新しいもの。全てが楽しい記憶だ。

「千枝……ごめん……ごめんなさい……!」

気付けば雪子は口元を抑え、泣きながら千枝を見詰めていた。

それに答えるかのように千枝は笑った。

「気にしてないよ……だって、雪子が私にとって……親友なのは嘘じゃないから……」

千枝はそう言うのと悠達の方を振り向いた。

「鳴上君……花……村……ごめん。……でも、けじ……め……は……」

千枝はそこまで言うのと力尽きて倒れた。過度のペルソナの使用で疲労はピークで眠くて仕方ない。

だが、これで残されたの雪子ただ一人。誰も彼女を守れない事を意味していた。

「千枝……!」

『……残りはあんた一人だけ』

鳥籠に縛られた紅い鳥がとうとう宿主の下へと迫った。

(……もう駄目みたい……力が入らないよ……)

雪子の体力も既に限界に近付いていた。意識も時折、朦朧としてハッキリしづらい。

体が重く、立ち上がるのがやっとなのだろう。しかし、その間に雪子の影が彼女を襲うのは想像に容易い。

『お前を殺して……私は鳥籠から羽ばたくのお!!』

雪子の影が感情を爆発させた。

私をここから出して。私を助けて。次々に出る抑圧された心の声。

雪子はその叫びを虚ろな意識の中で聞いていた。

(ごめんね……みんな。——私、もう無理だよ……)

雪子は覚悟を決めた。諦める事の覚悟をだ。

(死ぬ前に誰かに話せてよかったな……)

雪子は昨日、自分の悩みを話したことを思い出す。

ずっと誰にも言えないと思っていたが、予想外の人物に聞いてもらうことが出来た。それだけで満足だった。

雪子は顔を上げ、己のシャドウを見上げてそのまま目を閉じて命の時間を終わらせた。……そう思っていた。

「諦めるのかい？」

雪子の耳に背後から誰かの声が届いた。聞き覚えのある声だが、意識が朦朧としている雪子は誰の声かまでは分からなかった。分かったのは若い男性、つまりは青年という事だけだろう。

「誰……？」

『あんたは……！』

雪子の影はその姿を捉えて驚きの表情を見せ、青年は笑みを浮かべてハツキリとした口調で呟いた。

「ジャアクフロスト」

パリンと何かが砕けると何かが自分の隣に現れた事に雪子は気付き、ゆっくりと横を向くとそこにいたのは……。

『ヒューー！』

“黒い雪だるま”がそこにいた。体も黒ければ顔も悪戯でもする様な悪い顔をしている。

突然の事だったが雪子は、頭がハツキリしていない事や今日の内に経験したことのお陰もあり、この程度では驚く事なかった。

しかし、雪子の影は違った。目の前の青年とジャアクフロストから感じる強い力を察知し、先制攻撃を放とうとする。

『マハア——』

『ヒョー——』 “ニブルヘイム”

それはまさに一瞬の出来事であった。雪子ですらよく分からず、その目の前の事に意識も覚醒する程だった。

分かったのはジャアクフロストが両手をかざし、その手から冷たく巨大な青い光を放ったという事ぐらい。

そして、その直後に目の前に突如として出現した氷像。その中にいるのは雪子の影だった。

雪子の影の氷像はそのまま全身に亀裂が走り、やがて砕けてバラバ

ラと崩れ落ちた。

「一体……これは……」

雪子が隣を見ると、ジャアクフロストが一仕事終えたかのように嬉しそうに跳ねていた。

『ヒホヒ〜ホ♪』

目の前の雪だるま。それを見て同時に雪子は思い出した。自分の背後にいる人物の事を。

「あのっ——！」

「そのままだ」

「っ！」

軽く抑えられる背中。力は籠ってないが、こちらを向くなという想いは背中越しに雪子は伝わった。姿の見えない人物に雪子の体は緊張から固くなる。

「君が見るのは後ろじゃない。……前だ」

雪子の緊張を察したのか、青年の口調は優しいものであった。

しかし、雪子はそれよりも千枝や悠達の事が心配だった。

「でも、そんな事より千枝や鳴上君達が……！」

「彼等は大丈夫だ。御守りを渡しているから……」

雪子は青年の言葉の意味が分からない様子で皆の方を見ると、その景色に驚いた。

「なにあれ……？」

倒れているメンバー。クマ以外だが、クマ以外のメンバー達の体を暖かな優しい光が包んでいた。その光に包まれるメンバー達の顔色は良くなっており、傷も消えているのを遠目で見ても分かる程だ。

「今、君が知るべきなのはあれじゃない。——前を向くんだ」

「前……？」

雪子が青年の言葉通りに前を向いた。その視界に映ったものは氷塊の中で一人、膝を着いている雪子？の姿がああった。

先程とは違い、覇気のない姿。今にも消えそうな花の様に儂く見える。

「あのシャドウが自分自身だという事は、君ならばもう気付いている

筈だ」

「……」

その言葉に雪子の表情が曇る。分かっているのだそんな事は、だが体が思うように動かない。怖い、無意識に思ってしまう恐怖。

その正体が向き合うことの怖さという事、それに雪子は気付いていたが動くことが出来ない。

「……ここで逃げるのも一つ選択だ。そうする事で君は今までの日常に戻る事が出来るだろう。だが、それは決して変化する事のない今までの日常に戻るだけであり、前に進んだ訳じゃない。何も変わらない安定の世界だ」

「今までの日常……安定の世界……」

独り言の様に呟く青年の言葉を聞き、雪子は考える。

今までの日常、それは縛られた鳥籠の世界。だが、鳥籠故にこれからも大切に育てられるのは約束される。

変わる事のない世界で大切に育てられる。鳥籠の中の鳥の生き方。諦めるだけで傷つく事もなくなるだろう。

「だが向き合えば、確実に君の世界に変化が起きる。その変化がどのような結果と結末を招くかは君にすら分からない。幸か不幸か、栄光か破滅か。何が起るか分からない恐怖もあるだろう。——だが、前には進むことはできる」

「前に進む？……世界に変化？」

鳥籠を飛び出した鳥がどうなるか、それは誰にも分からない。

幸を得て栄光を手にするか、不幸に魅入られ破滅へ導かれるか。だが、自分の意志で前に進むことができるのだろうか。

「……そんなの皆が同じだよね」

青年の言葉を聞き終えた雪子の顔に笑顔が戻る。そして雪子はそう呟きながらそのままゆつくりと、だが堂々とした姿で立ち上がった。

その彼女の姿に青年も安心する様な静かに笑みを浮かべた。

「そうだ。君はもう……一人じゃない」

「はい……私には千枝が……皆がいます」

母親、旅館と稲羽の人々。ずっと昔から優しくしてもらい、見守って貰ってきた世界。

「色んな人から大切な物を貰ってきたのに私、そんな事まで忘れてた。……辛い事だけ目を背けて、あなたがそれを全て受け止めてくれてたんだね」

雪子？の前まで来た雪子はそう言って目の前の存在の手を取った。自分と同じ姿の存在とその苦しみ。自分じゃないと言ったが、そんな訳がない。

「もう、私は背けない。あなただけに背負わせない。……私も一緒に前に進みます」

雪子がそう言った瞬間、雪子？に光が溢れ、花びらを撒き散らせ華の飾りとなり、桜色の美しい衣を纏う仮面。日本神話の女神の名を持ちしペルソナ『コノハナサクヤ』となった。

「一緒に行こう……コノハナサクヤ」

雪子とコノハナサクヤは手を取り合う。周りの花びらは二人を守る様に舞い踊り、コノハナサクヤはやがてカードとなって雪子の手の中に入る。

そして雪子は胸の中に温かい想いに気付き、同時に洗夜の言葉を思い出す。

『親だからこそ分からないのか。それとも……自分が自分を分からないのか』

「今なら分かる。……私、自分が自分を分からなかったんだ。だって……私はこんなにも旅館とこの町が好きなんだもの」

彼女の表情は優しい笑顔だった。もう迷いもない。……だったのだが。

「あれ……？」

雪子は何かが引つ掛かった。そしてすぐに脳裏にそれが浮かんだ。先程、自分が思い出した洗夜の言葉と今、自分の後ろにいる青年の声があまりに似ている様な気がしたのだ。

「あつ……！」

雪子は後ろを振り向こうとしたが、それは叶わなかった。

今までの疲労の中でのペルソナへの覚醒によって雪子も限界になり、振り向こうとしてそのまま倒れそうになる。

「おっと……」

しかし雪子が倒れそうになった時、青年がタイミング良く彼女の体を支えたのだ。

「あな……たは……」

薄っすらと雪子は目を開けていたが、残念ながら顔を見る事は叶わなかった。だが、最後に雪子は聞いた。

「……今はまず休め。話ならまたいつでも聞いてやるさ」

その言葉だけ聞き取る事ができ、雪子は安心、そして嬉しそうな表情で静かに意識を手放した。

「……さて」

青年は両手で彼女を抱えると、倒れながら癒され続ける少年達の方を見て溜め息を吐いた。

「……どうやって運ぶか」

主を失った城の中で一人悩む、青年のため息が何度も吐き出されるのだった。



現在：テレビの世界【いつもの広場】

(ここ)は……? 体に痛みもない……)

悠は徐々に意識を覚醒し始めていたが、最後に残っている記憶は雪子の影からの攻撃でやられた事。しかし、体には痛みはなく、寧ろ心地良さすら今は感じている。

そして、徐々に目が覚めた事で悠は薄っすらと目を開けるとそこで誰かが雪子を、そして陽介達を壁に寄りかかせながら何やら優しい光で包んでいた。

「だ……れだ?」

目蓋が重く相手の足しか見えないが、その言葉にその人物は悠の下へとやってくるとそのまま話し出した。

「詰めが甘かったな。……自分とメンバー達の状態は分かっていた筈だろ? ——お前達はまだ覚悟が足りず、そして弱い」

口調には怒り等の感情はなかったが、その言葉は不思議と悠の中で印象に深く残ってしまった。

「仲間の独断……不安定な連携……未熟な覚悟。それで本当に誰かを守る事が出来るのか？ 自分を守る事が出来るのか……？」

その言葉に悠は何も言えなかった。誰かも分からない相手に何も返せなかった。意識が薄いからじゃない。自分でも分かっていたからだ。

あの時、千枝を止めてせめて休憩だけでもして互いの能力確認でもしていれば、また違う結果だったかもしれない。

悠の表情が後悔のものへとなっていた時だ。悠は自分の頭に温かい感触を覚える。

「強くなれ……やつと、自分で選んだ道なんだろう？」

相手が優しく言った事で、悠は自分の頭に相手が手を置いたのだと理解できた。だがそれはどこかとても懐かしい感じがあった。

(いつだったか……誰の手……?)

その手の温かさに悠はやがて眠くなって行き、やがてその意識を手放した。

「お前の意志で前に進むんだ……悠」

最後にそんな事を言われたような気がしたが、既に悠の意識は眠りについており、悠は気のせいだと思った。

やがて、陽介達が目を覚ますとこの場所がいつもの広場にだと気づき、悠と雪子を起こすと混乱しながらも現実へと帰還した。

そして、警察から天城旅館に雪子発見の連絡が届いた。

END

日常

第十話：変化する町

4月22日（金）晴↓曇

雪子救出から、早いモノで数日が経過していた。

あの後、雪子は一応大事をとって病院へ行き、数日入院する事になった事を洗夜はバイト中の噂で聞いた。

そして雪子が発見された日から三日後、雪子の母親がお土産を持って洗夜を訪ねにやって来たのだ。

話を聞いて見ると、案の定それは雪子についての事だった。体調が悪い中で、雪子は母親に自分の気持ちを話をしたとの事。

洗夜は一瞬、自分が雪子の相談に乗ったことで自分が雪子をたぶらかしたと思われたのではないかと息を呑んだが、洗夜の想像とは違った。

洗夜を訪ねた理由なのだが、雪子が気を失う前に洗夜の事を話したからだろうだ。

帰りに雪子の母である女将は洗夜に向かってこう言った。

『貴方のお陰であの子と正面から向き合う事が出来ました。……本当にありがとうございます』

そう言った時に見せた、女将の笑顔は今だに印象に残っている。やはり母親が娘を思っていない訳がなかったのだ。

洗夜も雪子が前に進んだことを知る事ができ、雪子の母に頭を下げて見送った。



そして、現在洗夜は……。

現在：商店街

「ゴクゴク……フウー」

洗夜は商店街の道の端にバイクを止め、その上で飲み物を飲んでいった。既に今日のバイトは終わり、後は家に帰るだけなので少し休憩

中。

そんな休憩の中で洗夜はある事を考えている。それは、バイトの帰り際に豆腐屋のお婆さんに言われた言葉だった。

『実は今度、孫が家に来る事になってるのよ』

別にこの言葉に問題は無いが、問題があるのはその孫にだった。

その孫と言うのが……。

「まさか、あの『久慈川りせ』とはね……」

久慈川りせと言う人物を簡単に言うならば『アイドル』だ。しかも、子供からお年寄りまで幅広い年代にファンがいる大人気アイドル。

(そんなアイドルがお婆さんのお孫さんとは……だが、そんなアイドルが何でこんな田舎町に?)

洗夜は、人気アイドルがこの町に来る理由が今一つ分からなかった。ただ祖母の家に遊びに来るだけでも思われるが、忙しい人気アイドルがこの田舎町に来る時間があると思えない。

何か問題事の気がしてならない洗夜だったが……。

(考え込んでも仕方ない。……アイドルだろうが来たら来たらで普通に接すれば良いだけだ)

実は久慈川りせの顔を洗夜は思い出せない程、洗夜はアイドル等に興味がない。それはアイドルだけではなく俳優・女優も該当する。

興味がない為、映画やドラマで『今人気の』等がついて宣伝されても全く知らないので困惑する事も少くないのだ。

そんな性格もあり、洗夜は久慈川りせが来る事となっても簡単に割り切れる。

「……帰るか」

洗夜は落ち着くことができ、飲み終わった空き缶を近くのごみ箱にその場から投げたのだが、空き缶はごみ箱の口の周りにぶつかり、普通に落ちて転がった。

「……器用さが足りないってか?」

缶を見て洗夜は苦笑しながらバイクから下りて拾いに行くが……。

「ん……?」

突如、洗夜の前に青い帽子を被った少年が現れた。その少年はチラツと洗夜の方を見て、先程落とした空き缶を拾い上げて言った。

「ゴミを投げ捨てるのは余り関心出来ませんね」

そう言つて空き缶をゴミ箱に入れる帽子の少年。

(なんだ、この少年は？ 不思議な雰囲気だ……)

謎の少年の登場に警戒する洗夜。この少年からは年相応の雰囲気が感じない。その少年の独自の雰囲気が洗夜を警戒させるのだ。

すると、そんな洗夜を察したのか少年は帽子を被り直して再び口を開いた。

「ああ、突然すいません。自己紹介も何もしていませんでしたね。

……僕の名前は『白鐘 直斗』と言います。どうぞ宜しく」

そう言つて帽子の少年、直斗に手を差し出された洗夜は自分が挨拶された事に気付कि、直斗の握手に応じる。

「……あ、ああ。すまない、俺は……」

「鳴上 洗夜さん。ですよね？」

「……君は一体……？」

直斗が自分の名前を知っている事に驚き、洗夜は直斗から視線を外せない。

本来ならばこの町は小さい為、自分達みたいな存在はすぐに町に広がり、知らない人が自分を知つていても不思議ではない。

だが、名前まで知る事は余りない筈だ。しかも、この少年は普通の者達とは何かが違う。

そして、洗夜は無意識に握手していた手に力を入れてしまった。

「何で俺の名前を知っている？……少なくとも君とは初対面だが？」

少し、口調を固くし直斗を見詰め続ける洗夜。だが直斗はそれに一切怯まずに、軽く笑うと話を続けた。

「簡単に言えば調べたからですよ。堂島刑事の甥っ子であり、尚且つ貴方はこの町の事件が起こり始めた時期に町にやって来た。僕から見たら十分貴方は疑うに価する人物なんですよ」

「……疑う？ 初対面にしては物騒だ。それに理由になつていないぞ？ 何故、君が俺の名前を調べる事ができ……その事件を調べている

理由にはな——！」

話をごまかす直斗に、洗夜は掴んでいた手を離し、距離を取ろうとした。しかし、その行動によっては洗夜にも予想外の事が起きた。

「わっ!!」

「なっ!!」

直斗が洗夜の手を放さなかったのだ。しかも直斗の身体はあまりにも軽く、距離を取ろうとした洗夜に引つ張られる形になってしまった。

それもその筈、直斗の重さは明らかに年相応の男子の重さではない。それに気付いた直斗の腕はとても細かったのだ。

しかも、手に関しては傷一つ無い綺麗な手。男と言っても誰も信じないほどに。

「あッー！」

「まっずいッー！」

そして結果的に洗夜に引つ張られた直斗はバランスを崩し、洗夜側に倒れそうになる。それに気付いた洗夜は直斗の身体を押さえたのだが……。

むにゅ……。

「ッ!!」

「ん？ 何だこの感触……？」

洗夜は直斗の身体を押さえた瞬間に、明らかにおかしい感触を感じたがそれは不快な感触ではない。寧ろ、柔らかく心地の良いものだ。

一体何の感触だと洗夜は想い、その部分を良く確認するとその場所は胸。

(何故、男子である筈の彼からそんな感触が……?)

そう思いながらも、洗夜はつい腕に力を入れてしまった。

むにゅ、むにゅと確かに分かる形が変わる膨らみの存在。

「ひゃあッー！」

直斗が変な声を上げているが、洗夜は気付かずに考えていた。

(何だ、このまるで何かで抑えている様なこの変な感触は。だが、確かに分かるこの膨らみは……?)

そう思いながら洗夜は、フツと直斗の顔を見てみると……。

「ッ……！」

「うっ……うっ……」

そこには先程の冷静な表情は無く、顔を真っ赤にして涙目で睨む直斗と目が合うと、洗夜はようやくやく意味を理解する。

「ま、まさか……いや、ちよつと待て！ これは不可抗力……！」

しかし、洗夜が口を開いた瞬間……。

「うわああああッ!!」

パアアアッ！

渴いた音が商店街に響き渡った。

▼▼▼

現在：神社

「少しは落ち着いたか……？」

「す、すみません……」

あの後、洗夜と直斗は神社の階段に座っていた。……が、洗夜の顔には生々と平手の跡が残っている。男の勲章だと思えば誇らしいが、ジンジンと痛みが自己主張して中々に痛い勲章だ。

「まあ、これで詫びじゃないが……とりあえずは貰ってくれ」

洗夜は座っている直斗に買ってきたジュースを渡し、直斗はそれを受け取った。気まずいの直斗も同じであり、少しでも良いから気分を紛らわせたい様だ。

そしてその様子を見た洗夜も隣に座り、気まずそうに口を開いた。

「それにしても、探偵の一族。その五代目か……」

洗夜はあの後、直斗から自分は『白鐘家』と言う探偵の一族の五代目である事を聞いた。

そして、今回は警察から直々に稲羽の事件の調査を依頼された事も教えられた。元々、不可解な事が多過ぎる今回の事件に流石の警察も自分達だけでは事件解決は不可能と判断したのだろう。

だが、だからと言って先程の事が解決した訳では無い。

「ところで直斗。何でわざわざ男装なんかしていたんだ？ 男装なんかしていなければ、あんな事は……」

洗夜は先程の事を自分で言って恥ずかしくなり、顔を片手で覆う。勿論、それを聞いた直斗も顔を赤くし、恥ずかしそうにジューズに口を付けた。

「そ、それに関しては言いたくありません」

(まあ、何となくは予想がつくがな)

ただでさえ年齢的にも子供の直斗。女性だとバレたら周りから嘗められてしまい、ロクに捜査は疎か事件解決なんて無理だろう。

ただでさえ警察は女性軽視の部分の事もあるのだろうと、洗夜は内心そう思いながらも話を変えた。

「まあ、この話はここまでで良い。……それで結局、お前は何で俺に接触して来た？ この町に来たのは俺だけじゃないだろう？」

洗夜の言葉に直斗は表情を最初の時に戻し、帽子を被り直すと目だけこちらに向けて口を開いた。

「僕なりに、事件が起き始めた時期にこの町に来た人を調べたんです。そして、その人達に話を聞こうとしていた時に丁度よく貴方に会った。……コレが理由です」

「簡単に言えば偶然か……」

そう言っただけで洗夜は直斗に視線を戻す。つい直斗の雰囲気は気になっただけで済んだからだ。

先程は気付かなかったが、直斗の雰囲気は何処か無理をしている様な感じに思えた。今思えば、何故こんな年齢の直斗が殺人事件の調査に来たのかが不思議でならない。

未成年で、しかも隠しているが女性。外見や年齢と違い、中身は探偵としてかなりの力が合ったとしても、やはり普通ならば考えられない。

「……直斗。はっきり聞かすが、お前が事件に関わるのは危険なんじゃないのか？」

「……どう言う意味ですか？」

直斗の言葉は落ち着いているが、明らかに目には怒りが混じっている。まるで、親の仇でも見るかの様に洗夜を睨む直斗。

洗夜自身もまさか、今の言葉でここまで直斗が怒りを表すとは思っ

てはいなかった。

「そう睨むな。お前の様な年齢で、しかも女だ。言い方は良くないが、普通なら何でお前みたいな奴が殺人事件の調査をするのか疑問に思わない訳が無い」

「回りくどいですね。ハッキリ言えば良いじゃないですか。子供の癖に、女の癖にでしゃばって事件に首を突っ込むなってッ！」

冴夜から視線を外し、突然声を上げる直斗に冴夜は一瞬驚く。だが、直斗のその姿は余りにもか弱く見えた。

見た目では強がつて見せているが、直斗の目には恐怖や悲しみが映されていて、それが強がりだと言う事が冴夜は理解した。

「……直斗。さっきの言葉が気にしたのならすまなかった。だが、この町の事件は何処か異質なモノである事はお前も何処かで理解している筈だ。一体何がお前をそこまで駆り立てる？」

今回の事件には、シャドウやテレビの世界等と言った非現実的なモノが関係している。ハッキリ言って、ペルソナ使いではない一般人の直斗が解決出来る事件では無いと冴夜は判断していた。

最悪、下手に犯人を刺激してしまい、誘拐の標的にされてしまう可能性だつて無い訳ではない。そんな冴夜の考えを知ってか知らずか、直斗は拳を握り絞めると口を開いた。

「……言いたくありません」

「……そうか」

冴夜も今回の会話だけで、全て話してくれるとは思っていない。性別を偽ったり、この年齢で今回の様な凶悪事件を調査してるのだ、恐らくは直斗にしか分からない何かがあるのだろう。

すると、冴夜がそう思っていると、直斗は立ち上がり冴夜を見て再び口を開いた。

「ですが、既に覚悟は出来ていますよ。必ず僕は今回の事件を解決まで導きます……必ず」

そう言った直斗の目には先程の怒りは無く、文字通り覚悟が映っていた。自身に何が起ころう共必ず事件は解決させる。

そんな覚悟が映った目を見てしまったら、冴夜はもう何も言えな

い。

「……それ程の覚悟を持ってこの事件に挑むのか。……子供扱いして悪かった。頑張れよ直斗」

そう言って洗夜は直斗の頭を帽子の上から置き、バイクに跨がる。「えっ？ あ、あの……」

洗夜の突然の反応に、やや困惑気味の直斗。そして洗夜は、そんな直斗の様子を見ていると、まるで何かを思い出した様にヘルメットを被ると直斗に向かって口を開く。

「ああ、そうだ。直斗、情報と言う訳じゃないが……少し気になる事がある。被害者なんだが……事件の報道前に何故かよく見た気がする……」

「……どういふことですか？」

直斗は聞き返した。目は真剣なものだが、洗夜は既にヘルメットを被っている為、彼の表情は分からない。

これから洗夜が話す事が嘘かも知れないが、それは聞いてから自分が決めれば良いことだと直斗は思っている故に気にはしなかった。

「俺にもよくは分からない。……だが、何故かニュースで被害者達が出た時、最初はまたか……そう思ってしまった。何回も言われた様な……聞かされた様な感じだった。なんでだろうな？」

それはこちらの台詞だと直斗は思ったが、同時に何か自分にも引っかけかりを覚えた。

（洗夜さんは何故、そんな事を思ったんだ？……山野真由美は不倫で騒がれていたし、小西早紀も目撃者で報道されていたからそう思ったのか？）

この町に来る前に報道されていたニュースは直斗なりに調べていた。最近のニュースはこの事件の事ばかりで、被害者達の報道が多かった。

そう思うと、この町にいる洗夜が被害者達の報道を見る度、無意識にでもそう思ってしまうだろう。

直斗はそんな事を考えた瞬間、脳裏に電流が走った。

（——ッ！ まさか……！）

直斗は目を大きく開いた。自分の中で当たり前の事になってしまった事で気付かなかった可能性に気が付き、直斗は洗夜へ問いかける。

「洗夜さん。……あなたがそう思ったのはもしかして、被害者の方々が殺害される前にメディアに映ったからですか？」

「……ああ、そう言われればそうだな。……やはり三人共テレビに……」

(……三人?)

後半になるにつれ、考える様に呟く洗夜の言葉を直斗は聞き逃さなかった。

「洗夜さん……今——」

「そろそろ菜々子が帰ってくる。——じゃあな」

直斗が止めに入ったが洗夜はスパツと言い切り、そのまま止まらずに走り去ってしまう。

自分の後ろで直斗が何か言っているのに気付いたが、家事をやるものとして時間は貴重なのだ。

やがて、走っている内にそれは聞こえなくなると洗夜はヘルメットの中で小さく微笑んでいた。

「アイドルに探偵か……。この町も大分騒がしくなるな」

暇を潰すものと言えばジュネスぐらいしかなく、少しお洒落な買い物などがしたい場合は電車で隣町に行かなければならない程の田舎町。

そんな田舎町にアイドル、そして探偵までもやってくるのだ。下手な祭りよりは騒がしくなる事は想像に容易いものだった。

(……まあ、どこまで調査出来るか分からないが、負けるなよ直斗……)

心の中でその人物を激励している洗夜の表情はどこか楽しそうなものだった。

そして洗夜は、久しぶりにちゃんとした覚悟を持った者との出合いを喜びながら、バイクを家まで走らせたのだった。



現在：直斗宅

帰宅した直斗はテーブルの上に新聞紙、その中でテレビ覧の部分を引いて、一枚一枚メディアの部分を読んでいる。

理由は今日出会った洗夜が去り際に言った言葉が気に入り、至急、家に戻って古新聞を集めたのだ。そしてその結果、直斗は亡くなった二人と行方不明になっていた雪子との共通点を予想から確信へと変える。

「……メディア。三人共、事件が起こる前にテレビで報道されている……！」

洗夜が言っていた事はこの事か、と自分の目で確認して理解する直斗だったが、それと同時に直斗の頭の中にある疑問が過った。それは……。

「何故、洗夜さんは天城 雪子さんの一件を知っていたんだ？」

直斗は、何故事件として扱われていなかった天城 雪子が行方不明になっていた事を洗夜が知っているのか疑問に感じていた。

商店街にいれば色々と聞こえては来るだろうが、雪子の一件は少し違う。

本来ならば事件として扱われておらず、明らかに今回の事件の被害者に彼女の存在はない。

事実、直斗もこの事を知ったの警官達の世間話を立ち聞きした為であり、洗夜の“三人”という言葉によって一連の事件と天城 雪子の失踪が関係していると判断したのだ。

「堂島刑事が話したのか？ いや、あの人は仕事とプライベートを分けている様な人を感じた。それにあくまで家出の件になっている案件に関わる程、あの人は暇じゃない。……一体、貴方は何者なんですか？ 洗夜さん……」

自分しかいない部屋で直斗はそう呟くが、誰も答える者はいなかった。

END

第十一話　：　ゴールデンウィーク

4月30日（日）晴

現在：堂島宅

「4日と5日だな」

「「？」」

家で菜々子と悠、そして仕事が多く終わり帰宅している堂島とテレビを見ていた洗夜だったが、突然の堂島の発言に洗夜達三人の視線がと集まる。

「4日と5日なら……まあ、休みが取れそうだ」

「成る程……」

最初は良く分からなかったが、堂島のその言葉を聞いた洗夜は理解した。もうすぐゴールデンウィークだから、その予定についての事なのだ。

「ほんと!？」

堂島の言葉を聞いて飛び上がる菜々子。その満天の笑顔を見れば、どれだけ嬉しく思ったのかは想像出来る。

そして、その光景を見て堂島も微笑んだ。

「何処か行きたい所はあるか？」

「うーんとね……それじゃあ菜々子ね、ジュネスがいい!」

（何故ジュネス？）

洗夜と悠も、菜々子のジュネス好きは知っていたのだが、まさかゴールデンウィークにまで行ききたがるのを見て流石に驚いた。

そして菜々子のそんな様子を見た堂島も聞き返した。

「別に近所じゃなくてもいいんだぞ、何なら何処か旅行でも行くか？」

「……ほんとに?」

堂島の言葉を聞き、菜々子は先程の笑顔から暗い表情になり、どこか心配そうな様子の菜々子。いつも、ゴールデンウィーク等の連休の時には堂島も休みが取れなくなってしまう事が多いからだ。

その為、菜々子は不安なのだ。

「なんだ、疑っているのか?」

「……いつもダメだから」

菜々子の言葉に一瞬、冷や汗をかいて視線を逸らす堂島。やはり心当たりがあるのだろう。

洗夜と悠も余りに予想通りの答えにフォロー出来なかった。この微妙な空気で下手に口出しなんて出来る筈がない。

「ま、毎年じゃないだろう……お前等はどうか？ 予定空いてるか？」

「特には……」

「右に同じ」

上から悠と洗夜。元々、ゴールデンウィークの日の時は基本的に暇な二人。……と言っても親が共働きだった為、ゴールデンウィーク等の連休の時は基本的に洗夜が悠を連れ出していた事が多かった。

だからなのか、悠はゴールデンウィーク等のイベントの時の楽しい思い出は結構あつたりする。

「じゃあ、コイツ等も一緒だな」

「うん 一緒！ みんな、いっしょに行こう！」

堂島の言葉を聞き、笑顔になる菜々子。皆で出掛ける事が余程嬉しかったのだろう。

再び、菜々子は先程の様な満面な笑みを見せてくれた。

「菜々子おべんとう持って行きたい！」

「ん？ ああ、そうだな。いつも惣菜メシばかりだからな。けど、俺は作れんし……」

そう言うのと洗夜達に視線を送る堂島。

「……けど大丈夫か。今年はコイツ等がいたんだつたな」

「了解。今までので最高の弁当を作るよ。……悠、お前も頼む」

「分かった」

「やったー！ おべんとう！」

そう言つてはしやぐ菜々子を見て微笑む洗夜達。

「さてと、材料を下見しないとな……」

そう思いながらゴールデンウィークに備えようと考え始める洗夜と悠。しかし数日後……



5月2日（月）晴↓雲

「もしもしお父さん？ うん、大丈夫……うん……うん……分かった」
そう言うとき菜々子は電話を持って、冨夜の所に来て電話を渡す。

その菜々子の表情は、何処か納得した様で、だけど悲しそうな表情をしていた。

「かわってって、お休み取れなくなっただって」

「……そうか」

悲しい顔をしながら菜々子は部屋に行く。その寂しそうな背中を見送るが冨夜は虚しく感じた。

堂島も仕事なのだから仕方ない。警察ならば尚更なのだが、菜々子はまだ幼い。

母親も他界しており、父親である堂島も仕事で遅く、寂しい思いをして来た筈だ。ハッキリ言って、まだ幼い菜々子に我慢ばかりして欲しく無いと思いつつも、冨夜は電話に出た。

「もしもし……？」

『お前か？ 悪いが今日は遅くなるから戸締まりして先に寝てくれ。それと、4日と5日の休みの件なんだが……』

「中止になったんでしょ？ 実は俺も、たった今予定入ってさ、丁度良かったよ」

『……そうか、すまん。実は若いのが一人体を壊してな……抱えている事件の内容から行くと穴はあけられん。俺が出るしかなさそうなんだ』

その言葉に何故か真つ先に足立が思い浮かんだが、流石にそこまではないだろうと冨夜は頭からその考えを削除し、電話越しで頷いた。

「……分かった。叔父さんも無理はしないでくれよ」

『ああ。……すまん。急な事で……菜々子の事、頼んで良いか？』

冨夜の先程の言葉を聞いた堂島は、言葉の意味を察した様だ。そして、その堂島の言葉を聞いた冨夜は、問題無いと言わんばかりに口を開く。

「問題無い。こう言う展開には慣れてるから、菜々子は俺達に任せてくれ。それよりも、叔父さんも本当に無理だけはしないでくれ」

『……ああ、すまんな洗夜。悠にも言つといてくれ。……じゃあ、後は頼むな』

そう言つて堂島が電話を切ると丁度、菜々子が部屋の中からこちらを見ていた。

「平気だよ。いつもだから……お休みなさい」

そう言つて部屋に戻る菜々子。そんな菜々子の姿に昔の悠の姿と洗夜は重なつて見てしまった。

「なんて顔してんだ。昔の悠と同じだ……」

「ただいま……う？ どうしたの？」

丁度、洗夜がそんな事を呟くと同時に悠が帰宅し、洗夜は状況を手短かに説明した。

「旅行は中止。……だが悠、悪いが明日は予定を開けとけ」「え？」

悠にそれだけ伝えると洗夜も部屋に戻つて行つた。



5月3日(月) 晴

現在：堂島宅

折角のゴールデンウィーク。だが菜々子は部屋でテレビを見ていた。その後ろ姿は余りにも弱く見え、見ていられ無いほどだ。

「……さて行くか」

そう言つと洗夜は菜々子に近付いて頭を撫でた。

「えッ!？」

突然の事に驚く菜々子。それに対して洗夜は笑顔で返す。

「菜々子。今からお兄ちゃん達と遊びに行くか？」

洗夜は後ろにいる悠を指刺しながら菜々子に聞く。すると、菜々子は少し驚いた表情で洗夜を見つめた。

「え……い。でもお兄ちゃん予定が入つたつて」

昨日の話を聞いていたんだろう。菜々子は少し戸惑っている様子だが、洗夜は菜々子の言葉を聞いて軽く微笑んだ。

「ああ、予定は入ってる。……今から菜々子と遊びに行くつて予定だ」

「！……お兄ちゃん、ありがとう！」

そう言つて涙目になる菜々子を見て頭を撫でる洗夜。弟と妹の面倒をみるのは兄の特権。ずっとそう思いながら生きていた洗夜にとって、誰かの面倒を見るのは慣れている。

すると、そんな時……。

ピンポーン！

「鳴上君！……どっかに遊びに行かない？」

チャイムが鳴り、玄関の方から千枝の声が響き渡った。どうやら悠を誘いに来た様だ。

「千枝ちゃんか。……良いタイミングだ」

頭の中で洗夜は予定を微調整し始めるのだった。

▼▼▼

現在：ジュネス

現在、洗夜達は奈々子を連れてジュネスの休憩所にいた。

その場には私服を来た洗夜・悠・菜々子以外には千枝・雪子・陽介がテーブルにそれぞれの飲み物を置きながら座っていた。

「それにしても、ゴールデンウィークだつてのにこんな店じや菜々子ちゃん可哀相だろ」

「……一応、お前の家見たいなモノだろ」

自分の親が店長をやっている店を、こんな店扱いする陽介に苦笑いする悠の言葉に千枝達が、確かに……と言つて相槌をうつが、菜々子は……。

「菜々子、ジュネス大好きだよ！」

「な、菜々子ちゃんツ……！」

何の迷い無く、満面の笑顔で言い放つ菜々子の言葉に感動する陽介。ハッキリ言つて、ジュネスは便利なのは違い無いのだが、そのせいで商店街の売れ行きが下がり、店を畳む所もある。

故に、商店街の人達や一部の人達に嫌われている為に菜々子の様に堂々とジュネスが好きと言つてくれる人は少ない。

だが、先程まで笑顔だった菜々子の表情が突然に曇った。

「でも、ほんとはどこか……旅行に行くはずだったんだ。……おべん

とう作って……」

(無理も無いな、あれだけ楽しみにしていたのだから。……まだ機嫌が治るにはもう少し掛かるか)

菜々子の表情を見て、洗夜と悠は少し心配するが、雪子が菜々子に話しかけて話題を変えてくれた。

「……お弁当？ 菜々子ちゃん作れるの？」

雪子の質問に反応して表情が柔らかくなる菜々子。どうやら、意識を会話の方を持って行く事に成功した様だ。

「ううん……」

雪子の質問に首を振りながら、洗夜と悠の方を向く菜々子。その反応を見て千枝が顔をニヤニヤしながら笑い出す。

「へえー、家族のお弁当係なんだ”お兄さんズ”は」

「……売れない芸人みたいな呼ばれ方をされたのは始めてだ」

「グオツ！ こ、洗夜さん……意外に直球」

「アハハハハハッ！ だって千枝！ 流星にお兄さんズは無いよ！

何処の芸人？ アハハハハハッ！」

「雪子!? ちょっと笑いすぎ！」

千枝のネーミングセンスがツボに入ったのか、雪子が日頃は見せない様な大爆笑をかました。

(最初の頃に比べて明るくなったな)

その雪子の様子を見た洗夜は、最初に出会った時に比べて良い方向に彼女が向かっていると判断し内心で微笑む。

そんな時、今度は陽介が会話に入った。

「へえーお前も料理とかできんだな……そーういや何か器用そうだなな」

陽介の言葉に悠は首を横に降る。

「いや、俺よりも兄さんの方が上手い。……俺の料理は兄さんから教わった物だからな」

その言葉に陽介と千枝が洗夜の方を向いた。二人のその表情は、意外なモノを見た様な表情だった。

「なんだ？ 突然、二人共、俺の方を向いて……」

洗夜の言葉に陽介と千枝は、少し気まずそうに顔を逸らす。

「えつと……その少し、意外かなって……」

千枝が答え。

「顔もいいのに料理も出来るとか、反則だろ……」

（共働きだったから自然と身についただけなんだが……）

千枝と陽介の言葉に微妙な気分になる洗夜。あまりに微妙な答えのせいで釈然としないのだ。だが、陽介と千枝が騒いでいる中、雪子はどこか思い悩んだ表情で洗夜を見ていた。

「……」

雪子は洗夜に何か言いたそうだったが、その一步を踏み出せず言い出せない様子だ。

そんな彼女の様子に洗夜も気付いているが、自然を装って気付かないふりを装って雪子の方を向くことはなかった。

すると、そんな間にも陽介が千枝の方を、まるで何か納得した表情で笑っていた。

「まあ、少なく共俺は何か里中だけには勝てそうな気がするな」

「ああ、何となく分かる気がする」

「何よそれ！ 雪子まで！ だったら勝負しようじゃん！」

今までの流れで、何故そうなったのかは分からないが洗夜は少し面倒な臭いがしたので、菜々子と遊ぼうと思った時だった。

陽介が禁句を口にしてしまう。

「じゃあ菜々子ちゃんか審査員か。この人達菜々子ちゃんのお母さんよりも——」

「菜々子！ 何か食べに行くか？ 今日は何んでも好きな物を買ってやるぞ」

陽介の言葉を察した瞬間、洗夜はマズイと判断して咄嗟に横槍を入れる形で菜々子に話し掛けた。

「えー！ いいの!? だったら菜々子ね……タコ焼きが食べたい！」

タイミングが良かったらしく、菜々子は陽介の言葉を聞かなくて済んだ。その証拠に、洗夜の言葉を聞いた菜々子の顔は笑顔だった。

「そうか、じゃあ行くか」

そう言うと洗夜は菜々子を肩車して売店へ向かった。

「わあー高い高いー！」

嬉しそうにはしゃぐ菜々子に、洗夜が笑みを浮かべながら向かった姿を悠達は見送る形でその場に残ったが話に横槍を入れた陽介はぶつくさと文句を言っていた。

「な、何だよ……まだ話しの途中だったのに……」

横やりを入れられたのが嫌なのか、ぶつくさと文句ばかり言う陽介に悠は説明する事にした。

流石に兄の行動は正しいモノの筈なのは悠も分かっており、文句を言われるのは良い気分はしなかった。

「陽介、兄さんに助けられたな……」

「はっ？ どう意味だよ」

意味が解らないらしく聞き返す陽介。知らないのは当然なのだが、逆に知っていたら怖い。

「……菜々子のお母さんは昔、事故で亡くなったんだ」

「「ツ!?!」」

悠の言葉に三人は驚き、気まずそうな表情になる。

「えっ!?! その……マジ?」

少し、遠慮がちに聞いてくる陽介に悠は頷いた。こんな事を冗談で言える訳が無い。

そして先程の洗夜の行動に気付いた千枝は陽介を睨み、呆れた様に言い放つ。

「ちよつと！ 花村！ あんたって奴はろくな事を言わないんだから！」

「だ、だってよ。知らなかったし……」

陽介と千枝が言い争って時に雪子が口を開く。

「洗夜さんはその事を知ってたから菜々子ちゃんを連れてったのね……」

「「……」」

雪子の言葉に黙る二人。

すると、千枝が売店にいる笑顔の菜々子と、菜々子を笑わしながら

買い物をしている洗夜を見ながら呟く。

「私さ洗夜さんと初めて会った時、本音を言うところ……なんか雰囲気か尖っていて、怖い人だと思ったんだよね。でも……さっきの菜々子ちゃんの事を思うと本当は優しい人だって気付いたんだ」

「まあ、確かに優しいつつうか……警察署で下手に聞かないで見送ってくれたしな」

そう言って陽介達は警察署での事を思い出す。補導直後だったが最終的には弟達を信じる形で見送ってくれた。

実際、雪子を救出する為、時間は少しでも惜しかった。その為、洗夜が下手に追及しなかった事はありがたかった。

そんな会話が続き、やがて洗夜と菜々子の方を見ながら千枝が話しを続ける。

「実際に優しいでしょ？ 今だっけ見てみてよ……菜々子ちゃんさ、私達といた時よりも凄く笑ってる」

千枝に言われ、悠も洗夜と菜々子の方を向いた。そこには、洗夜に肩車されながらも洗夜の頭に捕まり満面の笑顔でいる菜々子。

そして、その洗夜も優しい表情で菜々子が落ちない様に気を配りながら、楽しそうにタコ焼きを受けとってる光景だった。

「……兄さんはいつもそうだった」「いつも？」

その言葉に千枝が聞き返し、悠は頷いた。

「ああ……家の両親は共働きで転校も多かったから、ゴールデンウィークやクリスマスも兄さんと二人だけで過ごす事が多かった。だけど、不思議と寂しくは無かった」

「寂しくない？ でも両親は仕事だったんだろ？」

陽介の言葉に悠は再び頷き、話しを続けた。

「何かある度に、兄さんが何かと何処かへ連れてつたりしてくれて、俺に構ってくれてたから寂しさを感じ無かった」

『悠！ 一緒に外で遊ぶか？』

『そうだ！ 悠！ 一緒にケーキでも作ろう！』

『どうした悠？ 兄ちゃんがついてるから大丈夫だぞ』

悠は昔、洗夜が自分にかけてくれた言葉を思い出した。

ハッキリ言って悠から見た洗夜は、恐らくは自分よりも両親と過ごした時間が少ないだろうと分かる。事実、前に何となく聞いた事があった。

洗夜に「両親との思い出」について聞いた時だ……。

『……思い出さ？ そんな物は無いさ。運動会、授業参観、休みの日。全部、親は仕事で一緒には過ごせ無かったからな。……だが、恨んではない。そのお陰で俺達は、此処まで育ったんだからな』

と言っていた。その後、洗夜が高校入学の為に家を出た後に両親から聞いた事がある。

実は洗夜が、裏で両親に出来るだけ悠との時間を作って上げてくれと、両親に頼んでいた事をだ。その事を聞いて、悠は嬉しいと言う感情と、申し訳ないと言った感情が生まれた。

そして、その日から悠にとって兄である洗夜が人生の目標と憧れに変わったのだ。

「ほんとに優しいお兄さんなんだね……」

千枝の言葉に悠は少し焦る。もしかして、無意識に言葉が出ていたのか？ と思ってしまった。

「……声に出ってた？」

「いやいや、声よりも表情に出ってたな」

「うん。鳴上君の顔が凄く優しい感じだったし」

そう言って微笑んでいる陽介達を見て、悠は凄く恥ずかしい感じになっっている。雪子が俯いている事に気付いた。

「どうした天城？」

「……えっ？ あっ……ごめん。ちょっと考え事してたんだ。私がペルソナに覚醒した時の事で……」

その言葉に悠達全員の表情が真剣なものへと変わった。あの時の事は悠達にとっても考える事であるからだ。

「私達が雪子のシャドウにやられた後の事だよね？……知らない誰かに助けられたって……」

「クマも覚えてないって言うしよ……実際、どうなんだ？ 本当はいいんじゃないのか？」

千枝の言葉を聞きながら陽介が皆に問い掛ける様に聞き返した。実際にそんな人物がいたのか？ 記憶が混乱しただけなのではないのか？ 陽介はどうも他の皆よりも信じてはない様子だ。

ペルソナ能力と言う特別な力。本音を言えば、それを持っている人間がこの町に自分達以外にいるとは思いたくなかった。そう思うと何故か胸に不快感を覚えるからだ。

しかし、雪子と悠はそれを否定した。

「ううん！ そんな事ない！ 私はちゃんと聞いたもの……」

全員が倒れた後、自分を助けてくれて更に後押しもしてくれた。その事実を雪子は記憶の混乱で片付ける事は出来なかった。

「俺もそうは思えない。……忘れられる筈ない……！」

あの虚ろな記憶の中、確かに覚えている言葉。

弱い、強くなれ。悠の中に刻まれている記憶が確かに存在する。忘れる筈がない、忘れはならない、そう思う程に悠の中に深く刻まれている。

「……け、けどよ……」

陽介はどこか納得してない表情だったが、そんな中で雪子が決意した表情で悠を見詰めた。

「鳴上君……あのもしかしてなんだけど……」

「どうした？」

悠が雪子を見つめ返すと、雪子は頷きながらも緊張した様子で続けた。

「うん……あくまで私の想像なんだけど、もしかしたら……その人って洗——」

「ん？ どうしたんだ？」

「どうしたの？」

「……うわっ……」

雪子の話は中断された。気が付くと、そこには菜々子を肩車しながら肘まで袋を下げている洗夜と菜々子が突然出てきたからだ。

「何だ？ なにかあったのか……？」

そう言いながらテールブルに買ってきた物を並べ始める洗夜。

「お前等も腹減っただろ。俺の奢りだから食べ」

「え！マジ！」

「ありがとうございます！」

「……ご馳走になります」

そう言って菜々子と陽介達は食べ始めるが、雪子はどこか気まずそうな表情でチラチラと洗夜を見詰めていた。

それは悠も同じであり、洗夜を見ていた。

「ん？ どうした悠？」

視線に気付き、食べない悠の方に洗夜は聞いた。

「……いや、ただ兄さんは何で俺や菜々子にそんなに構ってくれるのかと思っただけ」

悠が誤魔化すようにそう聞くと、洗夜は小さく笑いながら答えた。

「俺がお前等の兄だからだ」

「……」

洗夜の言葉に、悠は自分がこの人の弟で生まれた事に再度感謝した。そして、洗夜の言葉を聞き終わり、食べ初めて様とした時だ。

「お兄ちゃん」

菜々子がそう言っただけで悠と洗夜の顔を見て笑顔で……

「ありがとう！ 菜々子とっても、楽しいよ！」

と満面の笑顔で言い、それを聞いた悠と洗夜は互いに顔を見合わせる。そして……

「どういたしまして」

そう答えたのだった。

ちなみにその夜、旅行に行けなかった詫びとして、堂島がジユネスで菜々子には服を、悠には微妙な柄の水着を、そして洗夜には背中に唯我独尊と書かれたコートを渡した。

そのお土産に菜々子は……。

「変な柄」

と言いながら喜び洗夜は……。

「……悪くない」

そう言っていた兄の姿を見て、悠は洗夜のファッションセンスを疑うのだった。

END

優しき暴君く巽 完二編く

第十二話：稲羽の暴君

5月14日（土）雨

現在：堂島宅

直斗との会話からそれなりに月日が経つ。あれからの接触はなく、自分で答えを見付けたのか、それとも自分に頼るのが嫌なのか、理由はどうであれ直斗からの連絡は無い。

そして現在、洗夜は居間で悠と菜々子、そして珍しく休みの堂島と一緒にテレビを見ていた。珍しく洗夜も真剣にテレビの画面に集中している。

元々アイドルや芸能人に興味が無い洗夜。たまにニュースや映画で出演して周りから騒がれている俳優や女優やアイドル等にも誰……？なんて言う程の始末。

久慈川りせの事を知っていたのは出演しているCMが多い為、嫌でも覚えてしまったからだ。

そんな洗夜が見ている番組は、稲羽市の周辺での暴走行為をする少年達についてのニュース。

ハッキリ言えば、ヤラセが多い様なバラエティ番組よりは真実性が多く、面白く感じるのが理由で洗夜はこう言った番組を好む。

『静かな町を脅かす暴走行為を誇らしげに見せ付ける少年たち……』

自分達の前で、何か異様な雰囲気では話をしている少年達。

そんな少年達にレポーターは怯まずに実況を続ける。そして、そんな映像を見ながら洗夜は、菜々子に膝の上に座られながらお茶を口に運んでいた。

「ズズ……お茶を飲みながら、こう言った番組を見る……平和だ」

「少なくとも番組の内容に合う様な台詞を言えよ兄さん……」

「お兄ちゃん、お茶のおかわりいる？」

「頼む……」

洗夜がテレビの番組を見て呟いた言葉に悠が苦笑いしながら呟く。

そして、そんな様子に多少は苦笑いしながら冨夜にお茶を注ぐ菜々子。

するとその時だった……。

『その時！ そのリーダー格の一人が、突然カメラに襲い掛かった！』
ガシャン！ガチャガチャ！ と強烈な機材が揺れる音と共に一人の少年の怒号が響き渡る。

『見世モンじゃねーぞコラアツ!!!』

騒がしい音を出した番組に驚きながらも、冨夜は番組に視線を戻す。

そこには、目にモザイクを掛けられている周りの少年達より一回り大きい少年がレポーター達に掴み掛かり、レポーター達が逃げている光景だ。

そして、先程まで新聞を読んでいた堂島がさっきの少年の怒鳴り声を聞き、テレビに視線を移すと口を開いた。

「あいつ……まだやってんのか」

そう言つてため息を吐く堂島。その様子からして、堂島の顔見知りだと言う事が分かる。

「お父さんのしりあい？」

「ん？ まあ……仕事の知り合いだな」

菜々子の質問に堂島は少し言いづらそうに話し始めた

「『異完二』。ケンカが得意で、たかだか中三でこの周辺の暴走族をシメた問題児だ」

「おいおい……中三か。凄いな……」

堂島の言葉に多少は驚いた様に話す冨夜。

しかし、冨夜の周りには美鶴や明彦等と言つた連中が多く、感覚がマヒしている為に今一凄さが分からないでもいる。

「けどたしか……高校受かつて、今はどっかに通つてんじやなかったか？」

「ふーん」

そう言つて、またテレビに視線を戻すと顔にボカシ掛かっているが完二の映像が大きく映つていた。

しかし、いくらボカシが掛かっているとは言え誰だか一目瞭然だった。レポーター達はここぞとばかりに映像を撮影し続けてもいる。

「テレビ的には、コレ以上に無い程の良い絵か」

洗夜の言葉を聞き、堂島もその映像を見ると苦い顔をしていた。

「あーあー……せつかくボカシ掛かってんのに。……こいつ、実家が老舗の染物屋でな。母親が夜、寝られないから毎晩走ってた族を一人で潰しちまったんだ」

「母親の為だからって族を……」

「根は綺麗な奴なのかもな……少し極端過ぎるが」

堂島の言葉にそれぞれの思った事を口にする悠と洗夜。

そして、堂島はテレビに映る完二の姿を見て再びため息を吐いた。

「ハア……これじゃあ、その母親が頭下げることんなつちまうな……」

堂島がそう言い終わると番組も天気予報へと変わる。

「あー！ 明日、雨だって洗濯物は中だね」

「雨……か」

菜々子の言葉に思わず呟く洗夜。

今までの被害者は皆、メディアに取り上げられてる。その為、明日映るマヨナカテレビに映るのは恐らくは……。

5月15日（日） 雨↓曇り

そして、夜。

ザーツザーツ！

「……」

いつも通り、マヨナカテレビに映ったのは霧や砂嵐が邪魔でよく見えないが、特徴的な髪型に型のいい体を見て洗夜は核心を得た。

「異完二か……」

こうして洗夜は自分の推理に核心を得たが、表情はやはりどこか優れない。

「……一向に犯行が収まる気配はない中で彼か。今度はどうなるか……」

既に二人を亡き者にし、次に雪子。勢いの様なものが止まっていな

い事に薄々、洗夜は気付いていた。

だが、次の標的となる人物は中三で族を潰した少年。余程の事が無い限り、完二が簡単に誘拐されるとは思えなかった。

(……場合によれば本当にペルソナの様な力を持っているのかも知れない)

洗夜は未だ見ぬ犯人の事を考えながら布団の中に入り、明日は完二の家に行くことを予定に入れながら眠りについた。



5月16日(月) 雨↓曇り

現在：ジユネス

悠達はマヨナカテレビの一件が合り、その事について話し合う為に今この場を集まっていた。この場には悠・陽介・千枝と、その隣にはペルソナ能力に覚醒した雪子の姿も合った。

「オイ！ マヨナカテレビみたか？」

「見たから！ つーか花村あんた少しうるさい！」

「……で見たんだよな？」

早速、陽介がマヨナカテレビについて喋りだし、その言葉を聞いた千枝が耳を塞ぎながら陽介を睨む。

元々この場所には人が多い為、ハッキリ言って静かに話し合うのが理想なのだ。そして、何だかんだで陽介の言葉に頷く千枝。

「見た見た！ いまいちぼけててわかりずらかったけど彼だよね……
異完二」

千枝の言葉に皆が頷く。マヨナカテレビの映像を見て、全員があの人物が異完二だと思いつかんでいた様だ。

「私もあんな風に映ったんだ……あれ？ でも被害者の共通点って一件目の事件に係る女性……じゃなかったっけ？」

確かに、最初に殺害された山野アナその死体の発見者の小西先輩、そして誘拐された山野アナが泊まっていた旅館の娘の雪子。

この全ての被害者の共通点から、狙われているのは最初の事件に係る女性だと悠達は推理していた。

「確か、私のときは事件に遭った夜からマヨナカテレビの内容が変

わったんだよね?」

「ああ、急にハッキリ映って内容もバラエティみたいなものになった。……今思えばクマの言った通り、中の天城が見えちまつてたのかもな」

確かに、雪子の中にもいた事によってシャドウが出現した。

そして結果的にあの様な世界が生まれ、マヨナカテレビに動きが見られた……つまり。

「まだはつきり映らなかつたって言う事は……」

「まだ、さらわれてない!　つまり、今はまだ “あっち” に入っていない!」

「ああ、可能性は高い……」

悠の考えに反応して千枝が答えたが、陽介は少し考え込むそぶりをする。

「でもよ……見るからに……なあ?」

「……確かに」

陽介の言葉に頷く悠と千枝。場合によっては逆に、自分達がカメラマンみたいになるかもしれない。

と言うよりも、逆に犯人を捕まえそうな感じがするとここにいるメンバー全員がそう考えていた時、雪子が口を開いた。

「あの子、昔はあんな風じゃなかったんだけどな……」

「えっ!　雪子、彼と知り合いなのツ!」

雪子の言葉に驚いた様子の子の千枝。

だが、老舗の旅館の娘の雪子に老舗の染物屋の完二。良く考えてみれば何だかんだで接点があるのかも知れない。

「今は全然話さなくなっちゃったけど、完二君の家って染物屋さんだから、ウチも昔からお土産品を仕入れているの。だから今も完二君のお母さんとはたまに話すよ。……染物屋さんこれから行ってみる?」

話くらい聞けるかもしれないし」

「それしか無いか……」

他に手掛かりはないし、雪子の提案を受ける事にした悠達も何もしないよりはいくらかマシな筈であり、雪子の案に頷いた。

▼▼▼

同日

現在：染物屋【完二の家】

ジュネスで話終えた悠達は雪子の案を以て巽完二の家である染物屋に来ていた。既に雨もあがり、ここまで問題なく来れた。

そして中に入ると、青い帽子を被った少年が完二の母親らしき人と会話をしていた。

すると悠達が入って来たのに気付き、完二の母親に頭を下げて少年は店から出て行ってしまった。

「なんなんだ今の？ 変な奴だな……」

「見かけない顔だったよね？」

さっきの少年について陽介と千枝が会話する中、雪子が完二の母親と話しをしていたので悠達も後に続いたが、悠だけは先程の少年の事が気掛かりだった。

(さっきの少年は一体？ 不思議な雰囲気だった……)

悠は少年から感じた謎の雰囲気が気になり、少年が出ていった入り口を陽介達に呼ばれるまで見ていた。

▼▼▼

現在：完二の家の前

「此処か……」

入口の前にバイクを止めた洗夜は、染物屋を見上げていた。老舗と言われるだけあり、中々の雰囲気を出店から感じられる。

(見た所、巽 完二は見当たらないか)

店と周りの雰囲気から察して、辺りに完二がいる様子は無い。

ある意味それはそれで都合が良いのだが、逆に目の届く範囲にいないといつ頃のタイミングで犯人が完二に接触してくるのか分からない。

「ふう……。表情にでやすい人達ですね」

誰かが店の中から何かを呟きながら誰かが出て来る。そして、その人物と洗夜は互いにその姿を見ると同時に口を開く。

「ッ！ 洗夜さん……！」

「よお、暫くぶりだな直斗……」

店から出て来たのは白鐘 直斗だった。自分の姿を確認した直斗は最初は驚いた表情だったが、今度は自分を睨む。

「……洗夜さん。どうして貴方が此処に居るんですか？」

「なに、それ程深い理由は無い。ただ染物屋に興味が合ったんでな」
そう言っただけで軽く笑う洗夜だが、直斗はその理由では納得していない様子。

前回の会話で直斗は洗夜に対する見方が少し変わっているのが理由なのだが、洗夜はそんな事に気付いてはいない。

「普通の一般人ならば、その理由で通ったと思いますが洗夜さん。貴方ならば話は別です」

「……俺も十分一般人だと思っただが？」

直斗の言葉に少しショックな感じで話す洗夜。周りの人と自分を区別されたのが、どうやら地味に傷付いた様だ。

そして、そんな様子の洗夜に直斗は帽子を被り直して話を続ける。

「普通の一般人は被害者達の共通点に気付きません。……メディアに映ると言う共通点だね」

「……俺は疑問を言ったに過ぎない。誰も事件の共通点を話した訳じゃないぞ？」

今になって自分が直斗に此処まで警戒される理由を洗夜は思い出すが、核心的な事を言っていないのも事実。どの道、だからと言って本当の事を言う訳には行かないのが現状だ。

なにより普通に現実を生きている直斗。彼女をペルソナやシャドウと言った非現実的な世界に巻き込みたくはないのが一番の本音だった。

「まあ百歩譲って俺も気付いてたとしても、メディアに関しては俺以外にも気付いている人間がいると思うが？ 元々、同じ事が三度も続けば誰でも疑問に思うだろう」

「……確かに、そう言う事もあり得ますね」

案外、物分かりの良い返答に少し呆気ない感じに思う洗夜だった

が、直斗の話はまだ終わっていないかった。

「……それならば、もう一つだけ聞きたい事があるのですが」

「別に良いが、こちらも予定があるから手短かに頼む。　と言うよりもそんなに聞く事があるなら電話で良かったな。――ほら、俺の連絡先だ」

「……えっ!?　　そ、それは……どうも……」

まさか連絡先をこのタイミングで貰うとは思っていないかったのだろう。どこか恥ずかしそうな直斗を軽く笑いながら洗夜は見つめていた。

「ゴホンツ……単刀直入に聞きます。洗夜さん、貴方は何で天城雪子さんの事件を知っているんですか?」

「……何の事を言っているのか分からないな?」

口では冷静を保っているのだが、内心では極限まで平常心を保とうと洗夜は必死だった。

元々、洗夜は嘘をバラさない様にするのは余裕なのだが、相手は年下とは言え探偵の直斗。人の嘘を暴くのが仕事と言っても過言ではない。

その為、どのような所から自分が隠している事が見破られるか分からないのだ。

「隠しても無駄ですよ。この間、貴方は確かに言いました……」三人“　ってね”

直斗の言葉に洗夜は、自分が無意識に言ってしまった無意識の失言に気が付き、つい口元に笑みが零れてしまうが、同時にある人物も思い浮かんだ。

「……ああ、それに関しては足立刑事に聞いた事だ。弟達がちよつとした不注意で補導されてな……その時、足立刑事に会って愚痴の様に聞かされたんだ」

「足立刑事ですか?……まあ、あの人ならば考えられますね」

直斗が稲羽に来てから時間はそんなに経っていないだろうが、既に足立の評価は低いものになっている様であり、直斗はどこか納得した表情だった。

だが、笑みを浮かべながら喋っていたのが気に入らなかったのか、直斗の表情が少し厳しいものとなる。

「笑いながら言っても説得力はありませんよ。ですが、まあ良いでしょ。あなたには被害者達の共通点と言うヒントを教えてくださいましたし、今日の所はこの辺で退きます」

そう言つて、不本意だが今回は仕方ないと言った感じに冴夜に背を向ける直斗。しかし冴夜は、直斗の余りの呆気ない行動に驚いてしまい、つい呼び止めてしまう。

「待て直斗」

「……何ですか？」

「……何故、こうもあっさりと退く？ お前は、俺の行動は怪しい判断したんだろ？ それに、天城雪子の一件もその気になれば俺から聞き出せる筈だ」

「さっき言いましたよ。今回、貴方の事を見逃すのは貴方から情報を貰ったからです。つまり、コレで貸しはチャラにしてもらいたいだけですよ」

冴夜にそう告げる直斗の姿は、一人の少女ではなく、真正正銘の探偵としての姿だった。その姿に冴夜は、心の何処かで直斗の事を過小評価していた事は大きな間違いだと理解した。

最初は感情的に行動するかと思いきや、攻める時は攻め、退く時は退く。その年齢的にも合わない思考・行動力に冴夜は驚かされてばかりだ。

「お前、もし俺が犯人だったらどうする気だ？」

直斗からしたら自分が犯人だと言う可能性は決してゼロではない。そう思い冴夜は直斗にそう聞いて見ると直斗は……。

「何と無くですが、それはあり得ません。貴方からは覚悟が感じますので……」

「覚悟……」

「はい。何かあるうと、この事件を解決すると言う覚悟が貴方から感じます。そんな人が犯人である可能性はありませんよ。……何より、もし犯人だったらワザワザ探偵である僕にヒント何て渡さないです

からね。……と言う訳で、僕はコレで失礼させていただきます。それでは、また今度会いましょう」

まるで、洗夜が言いたかった事が分かっていた様な感じで話すだけ話し、その場を後にする直斗。

そして洗夜は、まるで嵐が過ぎ去った様な感じでどっと体から疲れを感じ、精神的に疲れてしまった。

だが疲れてはいるが、その顔には笑みが見て取れる。

「白鐘直斗……既に俺が、何だかんだで事件に介入している事に感づいたか。……最近の少年少女は未恐ろしい」

まるで、弟か妹を見る様な目で洗夜は直斗が去って行った方向を暫く眺め、そして洗夜はようやく完二の家へと足を進めるのだった。



同日

現在：完二の家（染物屋）

直斗との疲れる会話の後、洗夜は完二の家である染物屋の扉を開け、中へと入って行く。主な目的は、事件に係る物の探索と完二の姿の確認なのが目的だ。

しかし、染物屋に入った洗夜の目に飛び込んで来たのは、弟とその友人達の相変わらずの姿だった。

「……何しているんだ悠？」

洗夜の台詞に四人が入口へと向く。

そして、洗夜を見た四人はいかにもマズイ所を見られたと言った様な顔だ。

「兄さん、どうしてここに……!」

「叔父さんが言っていた染物屋に興味がわいてな、来てしまったんだ」

口調から察するに、洗夜が此処に来るとは全く予想していなかったのである。悠の言葉に、洗夜は違和感が無い様に返答する。

悠達は恐らく、直斗程の推理力・鋭さが無いとは思われるが、下手な事を言えばバレる可能性もある。

その為、出来るだけ違和感が無い様に会話する必要があった。

「こ、こんにちは、お兄さん」

「こんにちは洗夜さん……」

悠が口を開いた為に少し緊張が解れたのか、自分に挨拶する千枝と雪子。

「やあ、千枝ちゃんに雪子ちゃんもこんにちは。……ところで、お前等こそ何でここに……?」

内心では、悠達が此処に來た理由を察する洗夜。だが、洗夜の言葉に花村と千枝が冷や汗をかく中、悠と雪子は冷静を保っている。

その様子に洗夜は少し安心する。どの様な場面でも、必ず冷静を保てるメンバーが最低でも一人は必要になる。

その為、陽介と千枝はともかく悠と雪子に冷静さがある事がわかり、安心したのだ。

「それはかくかく然々で……」

「なるほど、雪子ちゃん繋がりが……」

「え? それでわかるのツ!」

洗夜と悠の会話に呆氣に取られる千枝。

第三者からは分からないかも知れないが、家族等と言った長い付き合いの者との会話は、これで意外に分かる。

そして、悠との会話を終えた洗夜は今度は自分が此処に來た理由を付け足す事にした。

「あと言い忘れていたが今日は簡単に下見して、そして良いのがあったら買うつもりで來たんだ」

そう言っただけ悠達に背を向けながら店内の商品を見る洗夜の様子に悠達はソツと外に出ていくが、洗夜はまだ氣付いてない。

(中々、良い品が揃っている。流石は老舗の染物屋、凄いな……ん?)

洗夜が店内の品を見ていると、何故か店内に似つかわしくないウサギのぬいぐるみを見つけた。洗夜は何気なくそれを手に持った。

(糸の縫い目も繊細で丁寧。布や綿の量も適切だ……)

洗夜は、そのぬいぐるみの技術と完成度が素人目でも分かる高さに驚きを隠せないでいた。

「……それ、よく出来てるでしょ?」

洗夜が真剣にぬいぐるみを見ていると、お店の女性が嬉しそうな表

情をしていた。

「これは貴方が……？」

洗夜の質問にお店の女性は静かに首を横に振る。しかし、その嬉しそうな表情から女性の身内の人物が作った事が分かる。

「いいえ、それは——」

「何い見てんだあ！ゴラア!!」

女性の声を遮る様な怒号が店の外から放たれ、同時に誰かが逃げるように走り去って行く音も聞こえた。

「……あらあら」

「……？」

店の外から怒鳴り声。その余りの事に状況がついていけない洗夜だが、店の女性は慣れた感じの様子だ。

すると、そんな時に扉が開く。

「……」

中に入ってきたのは、デカイ体格に特徴的な髪型の男子学生。そう『巽 完二』が店に入ってきた。

その体格や纏っている雰囲気から、族を中三で潰したのが真実だと分かる。

「ただいま……」

「こら完二！ 中まで聞こえてたわよ！お客様もいるのに……」

「えっ!? あ、その、すみません……」

自分の母親に怒られ、店にいた洗夜に気付き素直に謝罪する完二。その態度から察するに、根は良い奴なのが分かる。

(だが、そんな格好や雰囲気では周りから誤解されてしまう。だが、彼がこうなったのには何か理由がある筈だと思うが……)

完二の性格と、態度や雰囲気合わないと考えた洗夜は何故、完二がこうなってしまったのか理由について考えていた。

するとそんな事を思っていると、完二が洗夜の手を持っているぬいぐるみに気付く。

「あッ！ それは……」

「これが何か？」

洗夜が聞き返すが完二は顔を下に向け、黙り込んでしまった。その姿は先程とは違い、まるでとても小さく、そして弱く見えてしまう。そして、一体何故完二が黙ってしまったのか分からず、その場で佇んでしまう洗夜。すると……。

「うふふ、お兄さん。実はそのぬいぐるみはね、この子が作ったのよ」「なっ！ テメエババア！」

余程知られたくなかったのか、顔を真っ赤にしてキレる完二。どうやら黙った理由は、ぬいぐるみを作ったのが自分だと知られたくなかったからの様だ。

「これを君が……」

洗夜は完二にぬいぐるみを見せながら聞く。こんな高度なぬいぐるみを作れるなんて、もはや才能のレベル。それなのに隠す理由が分からなかった。

「うっ……そ、そうだよ！ 悪りいかよ！」

そして洗夜の問いに何故かキレる完二。別に悪いとは一言も言っていない。そう思った洗夜は首を横に振り、完二に語り掛ける。

「悪い所か、凄いいじゃないか。俺は都会から越し来たんだが、こんな繊細で完成度の高いぬいぐるみはあっちじゃ売ってないぞ？」

洗夜の嘘偽りの無い気持ちの台詞に、完二は目を丸くしと驚いた顔をしていた。

「な、気持ち悪いとか思わないのかよ……」

完二の、気持ち悪いと言う発言の意味が分からない洗夜。これ程の裁縫技術なのだから、褒められたりするのはあると思うが、気持ち悪い等とは考えもしない筈。

洗夜はそう思い、完二に聞き返す。

「何故だ？」

「何でって！ 俺は男なんだぞ！なのにこんな女みてえな事して……！」

そう言って悔しそうに拳を握り締める完二。そして洗夜は、完二の言葉を聞いて言葉の意味を理解する。

元々、裁縫には女性がするモノだと言うイメージが少なからず、皆

が思っている事であろう。その為、恐らく完二はその事で嫌な事があつたのだと分かる。

しかし、此処まで高度に人形を作る完二は、本当に裁縫が好きだと言う事が分かり、そう思うと洗夜は完二の前に来てこう言い放つ。

「そんなのは関係ない。これは君の才能であり大事な個性だ。少なくとも他の人が否定しても俺は君を応援してやれる」

「……」

洗夜の言葉を聞いて完二は驚きの余り絶句している。そんな完二を余所に、洗夜は先程から持っていたぬいぐるみを見て、無性にこのぬいぐるみが欲しくなり、完二に聞いて見る事にした。

「なあ、このぬいぐるみを俺に売ってくれないか？」

「な！ 本気かよ……」

「あらあら」

洗夜の言葉に完二は更に驚き、完二の母親は嬉しそうに笑う。

「妹にプレゼントしたいんだが、駄目か？」

「え？ つーか、金はいらねえよ」

そう言つて恥ずかしそうに目を背ける完二だが、これ程の作品をタダで貰う訳にはいかない。

「そう言う訳にもいかないだろ。すいませんが、これは幾らで？」

「だから、別に金はいらねえって！」

洗夜が完二の母親に値段を聞くが、完二はそれを必死で阻止する。そんな息子の様子が嬉しいのか完二の母親は笑いながら答えてくれた。

「なら、こちらのお兄さんに値段を決めて貰えばいいんじゃないの」
その案に洗夜は頷いた。確かにそれならば、少なくとも洗夜は納得出来る。

それに、自分が決めた値段を知れば完二も少しは自信が持てるかも知れない。

「ハア……勝手にしろよ……」

そして、完二も根負けしたらしく少し疲れ気味だ。そんな様子を洗夜は、軽く微笑みながら、財布から万札を取り出して完二に渡すのだ

が……。

「こんな受け取れるかよッ!!」

案の定、完二は手を振り回しお金を受け取ろうとしない。その様子を見て、洗夜はため息を吐きながら無理矢理完二にお金を持たせる。「これはぬいぐるみ代と君への期待だと思え。それでも納得できないなら、君への小さな投資だとも思ってくれ」

お金を完二に無理矢理渡すと洗夜は、とつと店から出てバイクを走らせて家に帰った。

このまま居ても、完二が何か言ってくるのが目に見えていたからだ。

「な、何だったんだ今の客は……？ 金を無理矢理渡して、とつと帰りやがった……」

完二は先程の客である洗夜の事が気になっていた。最初は、店の前で自分の方を見ていた連中のせいでイライラしていた。

そんな時に家に帰ってみれば、一人のお客が店で自分の作ったぬいぐるみを持ちながら佇んでいた。そのお客は、髪は灰色の長髪で目も鋭い。しかも、雰囲気にも刺がある様に感じ戦えばとても強いと思う程。

それが完二が洗夜を見た時に感じた印象であり、その印象のせいで完二は洗夜を警戒していた。

しかし、実際に話して見れば印象とは違い、自分の趣味をあんなに褒め、そして認めてくれた人物は初めてだった。

昔から、他の奴は男のくせに女みたいで気持ち悪いとか言っていたが、さっきのお客に関しては違った。

完二が洗夜に無理矢理手渡されたお金を握り締めたまま、そんな事を思っていると自分の母親が隣で笑いだす。

「な、なんだよ……」

「うふふ、いやお前がそんなに嬉しそうな顔をするのは久しぶりだったから。さっきのお客様に感謝しないとね」

「なッ！ う、うるせえな！ ほっとけよ！」

母親に対して完二は、それだけ言ってお金を母親に投げ付けて部屋

へと帰って行った。

だが、後ろから母親の笑い声が聞こえている為、自分の行動が照れ隠しである事はバレている様で更に完二は面白くない。

それから扉を少し乱暴に空け、部屋に戻った完二は机に置いている作りかけのぬいぐるみを取って、ぶつくさ言いながら作り始めた。

「……ったく！ 何で今日に限って色んな事が起こんだよ……！ 白鐘って奴と良い、さっきの四人と客と良い、意味が分かんねえぜ……！」

ハッキリ言っ自分の姿を見た奴は十中八九逃げるか、喧嘩を売って来るかのどちらかだ。きっと先程の四人も同じ様な連中だと完二は思っている。

だが、白鐘とか言う帽子を被った少年は自分の話しが聞きたいと行って来た。そして、昔から親や親しい友人以外では認めてはくれなかったこの趣味。

だが、先程の客は初めて会ったのにも関わらず、年上と言う理由もあるだろうが自分の姿にも恐れず、趣味も褒めてくれた。

「……才能か。オレにしたら、そんな大層なもんじゃねえんだがな……」

そう呟いた完二の表情は、自分でも滅多に見れない程の笑顔だった。

END

第十三話：認める者

5月17日（火）雲

現在：豆腐屋

「ご苦労様、洗夜さん。お昼休みに入って構いませんよ」

「分かりました。それでは、先に休憩に入ります」

完二と接触してから翌日が経ち、洗夜は相変わらず豆腐屋でバイトに勤しんでいた。そして現在は昼休みに入り、昼食の為に豆腐屋から外に出るとそこには……。

「君は……」

「あつ、その……どもっス」

豆腐屋の前で、何故か気まずそうな表情の完二が洗夜を待っていた様に立っていた。



現在：神社

「……成る程な。昨日の事で少し気になり、俺と少し話があった。たつて事で良いんだな？」

「まあ、大体はそんな感じっスね……」

洗夜と完二は神社の階段で近くで購入した串焼きを食べながら会話をしている。ちなみに、完二が洗夜の元に来たのは昨日の出来事で洗夜に興味を持ち、話をする為に来たとのこと。

場所もどうやら母親に聞いたらしい。

確かに、豆腐屋と完二の家は距離が近く、完二の母が自分を知っているにも不思議ではなかった。

そして、自己紹介を終えた二人はそんな感じで会話をしていると、洗夜はある事が気になって、持っている串焼きを噛みちぎりながら完二へと言葉を振る。

「……ところで、学校は良いのか？ 本来なら、今は学校の時間じゃないのか？」

「ああ、学校スか……今は昼休みっスから、時間内にちゃんと戻れば別

に良いんすよ。まあ、自分が教室にいと教室の中が葬式見たいに静かッスけど……」

そう言つて、軽く笑いながら話す完二。平然を装っているが、その表情には少し寂しさがあつた。

その表情を見た冼夜は少し考え、話を変える為に自分の学生時代について言う事にした。

「俺の中学時代の事だが……」

「え？ 何スか、いきなり……？」

冼夜の話の切り替わりが余りにも急な為、完二は少し動揺している。

「良いから、黙つて聞いてくれ……」

冼夜は完二の言葉を両断して話を続けた。

「……俺の中学時代に、ある友人がいた。その友人は体力とかは無いが、絵や字を書くのが上手で本人も好きでやっていた。そんな彼は、どんな部活に入ったと思う？」

「えつ？ えつと……絵や字を書くのが好き何だから、美術部や書道部とかじゃないスか？」

冼夜言葉に、完二は普通の人でも同じ事を言いそうな事を言う。

絵等を描くのが好きなのだから、美術部等に入学するのが普通だと思うだろう。しかし、冼夜は完二の言葉に首を振る。

「いや、そいつも本当は、美術部に入学したかったんだ。だけど、俺とそいつの当時の担任は『男子は絶対に運動部に入れ』つて言う古い人間だった」

「えっ!?! いや、でも、そう言う奴、結構いるツスよね」

一瞬、完二は信じられないと思つたが冷静になればそんな教師ばかりだと思ひ出して頷いた。

「確かに多い。それに体力を付けたら、成長期だからつて考えならば良い。だが、あの教師は違う。あいつは女子生徒に色目を使い、男子には敵意を向けるような教師だった。その証拠に奴は女子の遅刻は笑つて許したが、男子の遅刻には怒鳴り散らしていたよ」

冼夜言葉に完二は驚きを隠せないでいた。自分の学校にも、嫌な

教師はいるがそこまで酷い教師はいない。

その為、完二は冴夜の言葉に動揺してしまったのだ。

「それで、そいつはどうしたんスか？」

「ん？ そいつは結局、運動部に入ってたな……苦労してたよ。ただでさえ、体力が無いんだから当たり前だ。まあ、高校は別になつたから分からないが、最後にそいつは高校では美術をやるって言ってたから絵でも描いてんじゃないか？」

「いや、その人の事じゃなくてその教師ツスよ！ いくら何でも、そんな奴は最低じゃねえか！」

少し感情的になる完二に、冴夜は軽く微笑む。やはり、完二は心優しい少年だと分かったからだ。

ただ周りに構わず、暴力を振るう奴が先程の言葉を聞いてそんな言葉が出て来る訳が無い。

そして、完二の質問に冴夜は微笑んだまま返答する。

「ああ、あの教師ならこの間、ニュースで女子生徒を盗撮して逮捕されたって出てた。驚きはしたが納得も出来たな」

「……へッ？」

冴夜の言葉に、完二は可笑しな声を上げた。そして、冴夜はその完二の様子に笑い声を上げた。

「クククツ……アハハハハハハハ！ まあ、そう言う事だよ。」

そう言つて、その場からゆっくりと立ち上がる冴夜。そして、冴夜の話聞いた完二は最初は驚いた表情をしていたが、その表情からは徐々に笑みがこぼれ始め、遂には……。

「……ぷっ！ ククク……アハハハハハハッ！ 何なんスか、そのオチは！ マジであんだ、んなこと……！」

冴夜の雰囲気と、シリアスな感じの会話とは裏腹な話なオチに完二はツボツたらしく、腹を抱えて笑いだす。

冴夜自身は別に完二を笑わせる為に、この事を言った訳では無いがこの事がニュースに出た時には、冴夜自身もテレビの前で笑っていたりした。

そして、冴夜は頭を切り替え、今だに腹を抱えて笑っている完二に

視線を向けると口を開いた。

「まあ結局、俺が言いたいののはだな完二。お前は周りのせいで自分の才能とかを無駄にするなって事だ。そんな情けない大人や周りに負けるな」

「……………あんた」

洗夜の言葉に、少し俯く完二。その様子を見た洗夜は、きつと何か思う事があるのだろうと思っていたのだが……………。

「話が長いし、分かりにくいっス……………」

「……………」

気まずそうに言う完二の言葉に、洗夜は申し訳なくなり言葉がでなかつた。

基本的には何でも出来る洗夜なのだが、自分の行動に対してたまに自覚が無いのが弾に傷。

「まあ世の中、色々とある……………」

「イヤイヤ！ なに話を変えてんスか!? その……………ハッキリ言った方が早い気が……………」

「いや……………少しは考えた方がお前の為でもある……………」

そんな言い争いを初めて数分後……………。

「……………お前が時間を確認しないからこうなるんだ」

「ええッ！ オレのせいっスか!?!」

現在、洗夜は完二をバイクの後ろに乗せて学校まで送っている。主な原因は、二人の話が長くなってしまったのが原因だ。

その結果、今回は少なくとも自分にも非があると感じた為、洗夜は完二を送っている最中だ。

その途中の事だ。洗夜が赤信号で止まると、ヘルメット越しから完二が話掛けて来た。

「あの……………洗夜さん」

「……………どうした？ 黙って無いと舌噛むぞ」

「……………何で、オレ何かに此処までしてくれんスか?」

「……………どう意味だ?」

洗夜は完二の言葉の意味が分からず、完二に聞き返す。

「いや、だってオレはなんつうか、こんなんすから。……それに昨日の会ったばかりなのに、普通はここまでしねえっすよ……」
「……」

完二の言葉を洗夜は黙って聞き、そして信号が青になると再び走り出し、その最中にゆっくりと語り始めた。

「……なんていうか、お前みたいに不器用な生き方をしている奴がほっとけないんだ」

「不器用……っすか？」

洗夜の言葉に良く分かって無い様な声で返事を返して来た。顔は見えないが、恐らくは意味が分からず困惑した様な顔なのだろう。

「フツ……まあ、そんなに深く考えるな。所詮はただのお節介と偽善だ。……ほら着いたぞ」

「えっ？ あっ……本当だ」

学校に着いた為、洗夜は話を簡単に終わらせると完二を降ろす。

そして、降ろした完二からヘルメットを受け取り、完二は洗夜に頭を下げた。

「今日は、ありがとうございました……」

「礼は良い。早く行きな、煩い先生がいるんじゃないのか？」

「ああ、確かにいるっすね……オレの担任じゃないっすけど、確か二年の担任の『モロキン』って奴が……って時間がヤベッ！ それじゃあオレ、もう行きます！」

「頑張れよ！ ……って行っただか。何と無くだが、明彦に似ている所があったな……って、俺もバイトの時間か」

そう言っ完二を送り届けた洗夜は、自分のバイトの昼休みが終わるりそんな事に気付き、急いでバイクを走らせた。

この時、洗夜はこっそりと完二のポケットに鈴を入れといたが、完二が気づくのはまだ先だったりする。



……しかし、その日の夜にマヨナカテレビに映った人物を見て、洗夜は驚愕した。

『皆様、こんばんは。僕は巽完二どえすツ!!』

「まさか……こうなるとは……!　これで四度目か……!」

犯行が繰り返された事で、洗夜は犯人への怒りを表にしたが、マヨナカテレビに映っている「フンドシ」一着しか着ていない完二の姿に絶句してしまったのであった……。

END

第十四話：熱気立つ大浴場

5月18日（水）曇

現在：テレビの世界【いつもの広場】

完二がテレビの世界に入れられてから翌日。洗夜は、現在テレビの世界に入り完二の救出に来ていた。

この間の番組の影響もあってか、完二の母親に疲労の色が出ていると商店街で話は聞いている。その為、コレ以上余計な心配を掛けさせる訳にはいかなかった。

何より、完二は態度や口調等はともかく、根は優しい少年。そんな彼の命を、この様な事で散らせる訳には行かない。

「相変わらずの霧……か。だが、まあいい。今は完二の場所を把握しないとな……へメラ！」

相変わらぬ霧を一蹴し、洗夜は完二の探索の為にへメラを召喚すると、へメラは瞳を閉じて探知に入ろうとしていた。

「へメラ。早速だが完二の——」

「分からないだツ!？」

洗夜がへメラで探索しようとした矢先、下の方から遮る様な声が響き渡る。その声は若く、その声の主が該当するの悠達しかいなかった。

しかし、その声は何やら揉めている様にも聞こえる……。

「あいつ等は一体、テレビの中に来てまで何を揉めている……?？」

そう思いながら洗夜は、悠達から見つからずに下を見ると、そこには悠達とクマが話をしていたが、クマと陽介が何やら揉めていた。

「お前にも完二の居場所が分かんないと困んだよ！ こんな世界、とても闇雲になんて進めないしょ……」

「ムムムム……カンジクン」のヒントが欲しいクマよ。そしたらクマ、シューチュー出来る予感がひしめいてるクマ……たぶん」

クマの言葉に頭を悩ます悠達。どうやら今回は、いつもの様にすぐに場所が分からない様だ。

「……情報が無いとコレ以上は探索出来ない、か」

洗夜はクマの様子からして美鶴と同じで完全な探知タイプではないと判断した。

当時ですら、美鶴が探索やサポートをしていたのは単純に探索タイプの力を持つ者がいなかっただけの事。

だから、風花がメンバーに加入するまでは多少能力が低くとも当時、探索能力を唯一持っていた美鶴がサポート係をするしかなかったのだ。

ちなみに、洗夜がヘメラを誕生させたのは風花が加入した後の為、サポート係はしていない。

そして、クマが美鶴と同様のタイプだと判断した洗夜は、その場のため息を吐きながらヘメラに指示を出した。

「仕方ない……ヘメラ、完二の居場所を捜すぞ。恐らくは最近出来た筈だから、すぐに分かると思いたい……」

『昼光の道標』

洗夜の指示にヘメラは瞳を開き、周囲に暖かな光を放つとその光が広がる度に洗夜の中に情報が入ってくる。

ヘメラの高い探知能力によって徐々に場所は絞られてゆき、やがて洗夜の中に完二の居場所が示された。

「見付けた。……お前にはいつも助かっている」

そう言って洗夜は、悠達にバレない様にヘメラから得た情報の場所へと向かった。



現在：熱気立つ大浴場

「この場所か……」

いつもの広場から少し離れた場所に、その場所があった。

その周りからはムシムシとした熱気、そして熱苦しい程の湯気が立ち込められている。一言で言うならばサウナが一番近いだろう。

「暑い……だが、そんな事を言っている場合では無いか。——アイテル！」

洗夜は、周りの暑さのせいで流れる額の汗を拭いながらアイテルを

召喚すると、待っていましたと言わんばかりにズズ……と周囲に黒い水溜りが現れる。

「やはり出たか……」

アイテルの召喚と同時に出現するシャドウ達。それを確認した洗夜は、こちらも待っていたかの様なそぶりでシャドウ達を見据え、アイテルを前に出した。

「アイテル……」

『……！』

洗夜の呼び声と同時にアイテルの身体から電気が溢れ出し、アイテルは両手を握り絞めた。

今から洗夜が行うのはただのシャドウ退治ではなく、悠達に居場所を教え様としているのだ。どんなに探知タイプではないとはいえ、多少は能力があるなら大きな力等の反応には嫌でも気付ける筈。

つまり……。

「分からないならば、大きな力を放ち、嫌でも気付かせるまで……アイテル!!」

『真理の雷!』

『☆▲★○#ツ!』

洗夜が指示を出した瞬間、周りが光ったと思った時にはアイテルの放った巨大な雷が轟音と共に辺り周辺に降り注ぎ、シャドウと辺りを一掃してしまっていた。

▼▼

「ドッヒャアツ!!」

「ど、どうしたツ!!」

「クマくんツ!」

先程まで鼻に力を集中させていたクマが突如叫んだ事に驚く悠達は心配してクマの下に駆け寄ると、クマは何やら鼻を凄い勢いで動かしていた。

「かんじる……かんじるクマ! ものスゴイ力を、あっちの方からかんじたクマよ!——こっちクマ!」

「あつ! おいクマ! ちよつと待って……行っちゃった」

「呑気に言っている場合じゃないだろ。クマを追うぞ」

自分達の言葉も聞かずに行ってしまったクマに、悠達は呆気になってしまったがすぐに頭を切り替え、クマの後を追って行った。



現在：熱気立つ大浴場

「此処クマ！」

「なッ!? 此処は……!」

「い、一体何があったの……?」

クマを追って来た悠達が見たモノは、完二が映っていた大浴場。しかし、その大浴場の入口辺りはとても巨大な焦げ跡が刻まれていた。余りに巨大なその焦げ跡を見るだけでも、どれだけの威力だったかぐらいは予想出来る悠達。今も小さく辺りで放電しており、余りの事に呆然としてしまった。

「クマ……」一体此処で何が?」

「クマにも分からないクマよ、センセイ。クマはただ、ここで強い力を感じただけクマ」

「つ、強い力って事は……誰かが?……いや、なにかが何かやったんだよね……?」

「何ビビってんだよ里中。誰かって、シャドウしかいねえだろ」

この状況を見て、内心では恐怖を覚えていた悠達に陽介は少し茶化す感じに千枝に言う。どうやら、まだ事の重大さに気付いてないらしい。

その陽介の態度に、千枝と雪子は注意を促す。

「……花村あんたさ、この状況を理解出来る?」

「え? 何がだよ?」

「花村くん。少なくとも、この辺りにこんな事が出来る様なシャドウがいるかもって事なのよ。今の私達じゃあ、勝てるかどうか……」

雪子の言葉の通り、これ程の力を持つシャドウではいくら戦い慣れ始めた自分達でもどうなるか。……それに、コレをやったのが本当にシャドウなのかどうかも分からない。

そう思っていると……。

「なあに、辛気臭いなんてんだよ。相棒も、らしくないぜ。相棒には、俺達とは違って他にもペルソナが使えるだろ？ ほら！ とつとと完二の奴を助けにいこうぜ！」

「あ、待て陽介！」

「待ってクマー！」

悠達はさつきと走って行ってしまった陽介を追う為に、完二がいるである熱気立つ大浴場へと入って行った。

そして、その後ろから悠達を見ていた人物が一人……。

「……やり過ぎたか」

弟達が大浴場の中に入ったのを確認すると洗夜は建物の影から姿を現し、自分がやってしまった周りを見て呟いていた。

（それにしても、人数が増えた事によってアイツ等に油断が生まれ始めたか……？）

基本的に人は沢山の人数がいる場合、無意識に他人任せにする場合がある。その為、悠達（主に花村だが）は正にこの状態に近く、人数の多さによつて気が大きくなっている様だった。

（やれやれ……アイツ等の成長はまだまだ掛かりそうだ）

そう思いながら、悠達の行動に頭を悩ませる洗夜。ハツキリ言つて、今の悠達に全て任せる事は難しいと悩んでしまうが此処でいつまでも考えている訳にも行かず洗夜は静かに大浴場へと足を進めた……その時。

ズズズ……と再び黒い水溜りが出現した。

「どうやら、俺は入れたくない様だな……」

洗夜の前に現れたのは、虫型シャドウ『死甲虫』。台座に乗っている『静寂のマリア』。球型のシャドウの付いた首輪を付ける獣型のシャドウ『ニザームアニマル』等のシャドウ達だった。

その中には、タルタロスではいなかったタイプのシャドウも存在している。

『シャシャ……！』

『……』

『グルルル……！』

シャドウ達はそれぞれが意味も無い声を発しながら敵意を剥き出しにして洗夜に牙を向けている。それに答える様に洗夜も刀を抜いた。

「掛かってくるなら相手をしなければな。——撃ち抜け！ マゴイチ！！」

洗夜が目をカツと開き、顔の半分を烏をイメージさせる様な仮面を付けたペルソナが現れた。

そのペルソナは一つ一つが銃口で出来ている黒い羽の様な足まである長いマント。更に両手には火縄銃を持つが、その周りには沢山の銃が浮いている。

そしてマゴイチは召喚されると同時に全ての銃口をシャドウ達へ向けた。

「マゴイチ！」

『秋雨撃ち』

洗夜の指示に、マゴイチは銃を右から左に乱射してシャドウへ攻撃を放った。

『…!?』

『ジャ……!?』

それぞれの攻撃がシャドウを襲い、何体かのシャドウは撃ち抜かれて消滅したが、残りのシャドウ達は空中に逃げて攻撃を回避する。

「あれを避けたか……」

『シャシャシャシャッ！』

洗夜が喋っている間にも、『死甲虫』が洗夜目掛けて突っ込んで来る。シャドウ特有のアルカナを示す仮面が付いた角が洗夜を襲うが、洗夜はそれを横に跳んで攻撃を避けた

だが、その直後に洗夜は背中に衝撃を受けた。

「ぐッ！ 後ろか……！」

突如、後ろから銃の様な鈍い衝撃を受けた洗夜だったが、物理耐性を持ったマゴイチのお陰でダメージは抑えられただけで服に傷がついただけで済んだ。

「アイツ等か……」

洗夜が攻撃の来た方に視線を向けると、明らかに他のシャドウとは大きさが違う、二体のシャドウがいた。それ等はレスラーの様な姿の『闘魂のギガス』と、銃と手錠を持った警官の姿をしたシャドウ『狭量の官』だった。

（大型シャドウか。…… 他の奴ら同様に今度は完二に影響された突然変異のシャドウ……）

毎回と言って良い程、影響されたシャドウにそう遇する洗夜。しかし、今回は二体同時に相手をしなければならぬと判断した洗夜は新たなペルソナ呼んだ。

「立て……ベンケイ!!」

召喚されたのはそ巨大な姿で全身を鎧と武器を纏ったペルソナだった。頭巾を被り、顔まで隠れたているがそこから覗く赤い瞳がシャドウへと向けられた。

「ベンケイ!!」

『弁慶の七つ武器』

それはまさに一瞬、ベンケイが両手に様々な武器を持ち闘魂のギガスへそれらを叩き込んだ。万物属性のその攻撃に闘魂のギガスはそのまま壁にめり込み、そのまま消滅する。

その光景を目の当たりにした狭量の官はすぐさま、ベンケイを拳銃を向け迎撃しようとする。だが……。

「……!!」

洗夜はその隙を逃さず、助走をつけて刀を狭量の官の腹部へと突き刺した。

そして、その刀が突き刺さると同時、狭量の官はブルブルと痙攣を起す。

『……!!?』

「生憎と特別製だ……!——マゴイチ!」

洗夜の命令を受け、マゴイチは銃口を未だに震えて動けない狭量の官へと向け、そして放った。その弾丸はそのまま狭量の官の額に命中し、顔が破裂しながら黒い水溜りとなって消滅した。

「ハア……ハア……!——ムラサキシキブ!」

膝をついて洗夜は息を乱し、額に汗を流しながら新たにペルソナを召喚した。

その青い長髪に青・黄・桃色の和服を身に着け、周りには金色と水色の羽衣を纏とい、手には『源』と書かれた大きな本を持っていた。そしてムラサキシキブは洗夜にメディアをかけると、洗夜はペルソナ達を戻し、やがてゆつくりと立ち上がる。

(……やけに疲労が強い。……なんだこれは……?)

洗夜は今の先頭による自分の疲労に疑問を感じた。ペルソナを使えば体力・精神共に疲労するがここまで疲労することは今までなかった。

(……気のせいかな?)

洗夜は自分の思い過ごしと思い、大浴場へと向かおうとした。……その時だ。洗夜は胸に急激に苦しみを覚えた。

「グウツ!?……これ……は……?」

両膝をつき、洗夜は右手で胸を抑えながら苦しみを和らげようとするが効いてはこず、寧ろ苦しきは徐々に増大し始めた。

まるで首の縄を徐々に絞められている様な感覚に洗夜は戸惑ったが、同時に頭の中に声が響き渡った。

『許さない……認めない……黒キ絆……ヲ……認め……口……受け入れろ……』

(こ、これは……!)

洗夜には身に覚えがあるのか、その謎の声に驚愕の表情を浮かべるが、やがてどこか納得したような虚ろな笑みを浮かべた。

(そうか……このまま何も無いと思ったが、そんな訳はないな。今までの絆を拒絶する俺に……今まで通りにペルソナを……いや、ワイルドの力を使われるのは認めないか……)

洗夜がそんな笑みを浮かべていると、やがて苦しみは和らいでゆき、フラフラだが洗夜はゆつくりと立ち上がった。

「今だけは……もう少し待っていてくれ。悠の……弟の成長が実るまでは……せめて……」

洗夜は呟きながら、ゆつくりと完二の生み出した世界へ入って行く

の
だ
っ
た。
E
N
D

第十五話：VS完二の影

同日

現在：熱気立つ大浴場

洗夜が大型シャドウと対峙していた頃、悠達は……。

『ウツホツホ、これはこれは、ご注目ありがとうございます！ ついに潜入しちゃった、ボク完二！』

「！！！！！！」

悠達は完二の影と対面し、そして絶句していた。余りの存在感に言葉が出ない。

当たり前だ、この状態で絶句しない男子はいないだろう。汗臭い大浴場、フンドシつけたヤバそうな男子、最早この場にいるだけでも相応な精神が鍛えられそうだった。

しかしそんな悠達の思いを知ってか知らずか、完二のシャドウは……。

『あ・や・し・い熱帯天国から、お送りしていまあす!!』

更にテンションを上げ、声のボリュームを上げた。そして、完二の台詞と共に上から題名が降りてくる。

『女子禁制！ 突☆入!?!愛の汗だく熱帯天国!』

「！！！！」

題名を見た瞬間、悠達は更に絶句する。先程まであと少しで出そうだった言葉すら引つ込んだ。

本当の意味で言葉が出ない。まさにこの事を指しての言葉とも思えてしまう。

そして、その様子にメンバーそれぞれが口を開いた。

「ヤバいやバいやバいやバいやバいや……！！ いろんな意味で……！！」
俺らの貞操危ないじゃないのか!?!」

身体を震わせながら悠の肩を揺らす陽介。そんな陽介に落ち着けと言う意味で肩に悠はポンと置いた。

「確か雪子んときもノリとしてはこんなだったよね……? いや……
場合によってはもっと酷いかも……」

「えっ！ う、うそ……！ こんなじゃ……無いよね……？」

完二の姿と自分を交互に見ながらそう呟く雪子。まさかとは思いたくないが、フンドシで暴れている状況とどっこいどっこいとは思いたくはなかった。

まさか自分は一生、お嫁に行けない様な事をしていてはないかと雪子は不安を覚えていたが……。

ワー！ワー！ワー！

突然、何処からとも無く歓声が聞こえ始めた。その声はまるで、この世界の外から聞こえてくる感じがする。

そう思った悠達の頭にある考えが過る。

「この声、まさか……！」

「外の人達の声!？」

「番組」が流れている反響って事？」

「これ放送されてんの!?!……完二くん、新たな伝説が生まれそうだね」その伝説は恐らく、嫌でも胸に刻まれるだろう。そんな事を苦笑いしながら悠達は思っていた。

「まあ、シャドウなんだけど、外の連中には分かんないしな……」

ウオー！ウオー！ウオー！

「シャドウもめっちゃ騒いでるクマ！」

クマの言葉通り、周りからシャドウ達の咆哮が響き渡る。どんな影響を与えているんだと悠達は疑問と同時にシャドウを警戒していると、完二のシャドウは再びマイクを持ち直し、喋り始める。

『ボクが本当に求めるモノ……見付かるんでしょうか、んふっ』

「ゾクっ！寒気が!？」

ウインクしながら喋る完二のシャドウの言葉に、謎の寒気を感じる男二人。照準は確実に悠と陽介だったのだから当たり前の反応だ。

そして、そんな様子を見ながら完二のシャドウは……。

『それでは更なる愛の高みを目指して、もっと奥まで突☆入！ 張り切って……行くぜ、コラアアア!!』

そう叫びながら完二のシャドウは走り去ってしまう。あまりの勢いに負けて、悠達もすぐには追えなかった。

「完二くん！」

「待て！早まるな！」

「馬鹿言つてないで、追うぞ！」

完二のシャドウに調子を狂わされながらも、これ以上は完二自身の身も危ないと思いメンバーは奥へと進んだ。



現在：大浴場最深部

「この先か？」

「そうクマ！ この先にカンジクンがいるクマよ」

悠達はシャドウを退けながら先に進み、そして今、巨大な扉の前に立っていた。

その扉の向こうから、扉を越えて微かにだが完二のシャドウの声が聞こえて来ている。

「中に入りたくねえ……」

「陽介、思っても口にはするな。俺だつて入りたくは無い……」

扉を前にして、そう呟く陽介に注意する悠だが実際にこの部屋の奥に入るのに躊躇ってしまう。

流石に先程から、フンドシだけの完二の姿ばかり見て悠と陽介の精神は折れ掛かっている。

しかし、実際に入らない訳には行かず、悠達は扉を開けた。

『もうやめようよ、嘘をつくのはさ……』

「オ……オレア……！」

そこには完二と完二？が対峙していた。

「完二くん！」

「間違いない。本物の奴だ」

『ボクはキミの〴〵やりたいこと〴〵……』

「違う！」

完二は否定するがシャドウは話を続ける。

『女は嫌いだ……偉そうでわがままで、怒れば泣く、陰口は言う、チク、試す、化ける。何でも有りだ』

「あく何かよく分かる気がする……」

陽介はそう言つて千枝を見る。何故、千枝を見たのかは分からないが、陽介の視線に気付いた千枝は顔を赤くして抗議する。

「わ、私はそんな事しないよ!? そんなぐちぐち陰口見たいな事を言わないしきー!」

(逆に蹴り倒しそうだ……)

「でも、男の子とかつて、女子が何を言つても手とか出せないから辛そうなイメージがあるよね……」

「確かに」

「たまに思うね」

雪子の言葉に頷く陽介達だが、悠は雪子の話を聞いてある事を思ひ出す。

「いや、兄さんは普通に手を出すよ」

「「「えっ!」」」

悠のまさかのカミングアウトにクマまでもが声を上げる。

「センセイ!お兄さんがいたクマ!」

「そつちか……」

「お前は黙つてろつて! でも、手とか出すと女子つて最低!最低!とか言わないか?」

陽介の言葉に納得したのか、女子である千枝達も頷いている。

「兄さんの話では確かに言われたらしいけど当時、苛めをしていた人達だったらしい。その人達に兄さんが」 だったら手え出される事してんじやねえ!」 っつて言ったら皆黙つたらしいよ」

「冨夜さん……意外と熱血系?」

「分かる様な……分からない様な……」

何と無くだが、冨夜の性格が少しは分かってきたらしく雪子は想像し、陽介達は苦笑いしながら頷き、冨夜と接触した事の無いクマは意味が分からずに首を傾げている。

すると、そんな会話をしている間にも完二とシャドウは話をしており、ついに状況に動きが見られた。

『皆、ボクを見て変人変人つてき……。笑いながらこう言うんだ。裁縫好きなんて気持ち悪い、絵を描くなんて似合わない。男の癖に男の

癖に……！ 男って何だ？ 男らしいって何なんだ？ 女は怖い……よね！』

「こ、怖く何かねえ！」

完二？に食ってかかるが完二？が話をやめる気配はない。

『男がいい……男の癖について言わないし……！ この間のお客さんみたいに受け入れてくれる男がいい……』

シャドウの言葉が癩に触ったのか、完二はシャドウの方を睨み、声を上げた。

「さつきから、何なんだてめえ！ 俺と同じ顔しやがって！」

完二の言葉にシャドウは待つてました言わんばかりに歪んだ笑みでニヤリと笑った。

『君はボク……ボクは君だよ。分かってるだろう？』

「ふぎけるな！ お前なんか……お前んかが……！」

シャドウの言葉を聞いて、否定しそうな完二の言葉に雪子と悠が止めに入る。

「ダメ！完二くん！」

「言うな！」

しかし、皆の言葉は完二に届かず、完二はあの言葉をシャドウに放つ。

「俺の訳ねえだろう！」

その否定の言葉が引き金になり、シャドウから闇が溢れ出した。

『ふふふ、あはははははははははは！ 僕は君！僕は君さ!!』

完二の影は闇を纏うと、巨大な体に男と女のマークを持ち薔薇に包まれているシャドウ『完二の影』と筋肉質なシャドウ『タフガイ』と『ナイスガイ』が現れた。

タフガイとナイスガイは現れると同時に完二の影の後ろの左右に下がり、マッスルポーズを披露して完二の影の存在感をアピールし始める。

『我は影、真なる我！ ボクは自分に正直なんだよ。だから、邪魔物は消えろ！』

「ば、化け物……！」

余りの出来事に、身体が動かなくなってしまうた完二。そんな完二を見て、悠達は行動を開始すると庇う様に完二の前へと出た。

「皆！ 行くぞ！」

「二「ペルソナ！」二」

完二のシャドウとの戦いが幕を開けた。



現在：熱気立つ大浴場【フロア途中】

傷を癒しながら洗夜は、再び襲ってきたシャドウを返り討ちにし、消滅したシャドウ達がいた場所を見ていた。

（やはり、何かが違うな。この世界のシャドウ達と、タルタロスのシャドウ達は根本的に何かが違う……）

洗夜がそう思ったのには、訳がある。最初の疑問は単純に美鶴、つまりは桐条から聞いた情報に無い事があった事や二年前まで戦っていたシャドウは元々、人間が絶望等と言った感情に支配された時に、その人間の無意識と一体化したニユクスの一部が意識の表面に顔を出し、宿主から分離しようとするニユクスの一部がシャドウなのだ。

しかも、このシャドウ達は現実世界でも悪さをしていたのだが……。

（ニユクスはもういない筈。それに、此処の世界のシャドウ達は直接、現実世界に悪影響を及ぼしてはいない。……本当に良く分からないな……この世界のシャドウは）

洗夜がそう思っていた時だった、洗夜の視界とフロア全体が大きく揺れた。思わず洗夜は上を見上げ、それに応えるかのようにヘメラから情報が送られた。

「……悠達も手こずっている様だな」

自分のいるフロアにまで響く震動と音に、上で完二のシャドウとの戦いの壮絶さを教えている。

そして、洗夜は自分もその場所を目指すようにゆっくりと階段を上り始めた。

「ハハ……流石に暑いかな」

サウナの様な構造をしている為、フロア全体がムシムシしていても暑い。そんな中で歩いている自分の姿を想像したのか、可笑しうに笑みを浮かべながら額の汗を拭き、洗夜はゆつくりと前に進んで行った



現在：熱気立つ大浴場【最上階】

『うふふふ。中々やる見たいだねえ』

「センセイッ！ 皆、大丈夫クマカツ!？」

完二の影と悠達の間には、消滅していく『タフガイ』と『ナイスガイ』の姿があった。

完二の影に二体のシャドウがサポートしていたのに気付き、倒したまでは良かったが、完二の影は全くの無傷であり、それどころかタフガイとナイスガイのサポートにより能力も格段に上がっていた。

それに引き換え悠達は疲労があり、四人の体力は徐々に限界に近づいていた。

だが、完二の影は悠達の様子に嘲笑い、悠達はせめてもの抵抗で睨み付けていた。

「ハア……ハア……ちくしょう!」

「やっと倒したのに……完二くんのシャドウはなんで元気なのよ!」

陽介と千枝がシャドウに対して決死の態度で構えている中で、悠は雪子に話し掛けた。

「……天城。回復は後何回ぐらい出来そうだ?」

「一人ずつなら、まだ余裕はあるけど……全体にするならそんなに余裕は……鳴上君は?」

「俺もそんな感じだ……」

皆の残りの体力も限られているこの状況で、完二のシャドウと一戦交えなくてはならない。

元々、完二のシャドウのサポート役だった『タフガイ』と『ナイスガイ』そ存在意味に気付くのに遅れたから今の現状を招いてしまった。

(あのシャドウ達は何とか倒したが、この状態で完二のシャドウを倒せるのか……！)

『何を考え事をしているんだい？ もっと、僕を見てくれよ！』

「センセイ避けるクマ！」

シャドウとクマの言葉を聞き、気付いて顔を上げた悠が見たのは武器であるオブジェを振り上げている完二の影の姿だった。

「ッ!? しまつ……!」

『遅いよ！ デッドエンドッ！ うおりゃあああああああッ
!』

「ガハッ!!」

鈍い音が辺りに響き、シャドウの攻撃をモロに喰らった悠はそのまま吹っ飛ばされた。

「二「相棒！／＼鳴上君！／＼センセイ!」二」

「ッ！ イザナギ!!」

陽介達の言葉が耳に入った事で、頭を切り替えた悠は壁にぶつかる寸前でイザナギを召喚し、受け止めて貰った事で壁への激突だけは避けた。

しかし、シャドウの攻撃のダメージが大きく、立つ事が出来ない。

「く、くそ……!」

「鳴上君!……今、回復を!」

『行かせると思ってるのかい？ 女は消えろやあ!』

「あつ……!」

悠の回復へと向かおうとしたが、シャドウが雪子の前に出て妨害する。

そして、雪子目掛けてシャドウは武器を振り上げるが……。

「あんたの相手は私達よ!」

「行け! ジライヤ!」

「マハガル!」

千枝がシャドウに向かって、おもっきしの飛び蹴りを食らわし、陽介はジライヤの疾風攻撃を放つと攻撃を喰らった完二の影はそのままバランスを崩して倒れてしまった。

『あうッ!』

「千枝!」

「雪子! 此処は私と花村に任せて、早く鳴上君を!」

「分かった! クマさん! 千枝達を!」

「任せるクマ!」

クマに千枝達のサポートを頼むと、雪子は悠の所へと走って行く。すると千枝達に妨害されたシャドウも立ち上がり、武器を構えながら千枝達を睨み付けた。

『ふふふ、情熱的なアプローチだね。……それじゃあ、あの二人の相手は他に頼もうかな?』

いやらしい笑みを浮かべた完二の影は悠と傷を治す雪子に向けられる。

その視線に気付いた千枝はハッとなって二人に叫んだ。

「雪子! 鳴上君! 逃げ——!」

「千枝ちゃん! ヨースケ! 避けるクマ! 攻撃が来るクマ!」

危険を知らせようと瞬間にクマが叫び、千枝と陽介は咄嗟にペルソナを召喚して防御を固めたが二つの武器を構えると武器を振り回した。

『オラアッ! 電光石火ッ!』

「きやああッ!」

「うわああッ!」

完二の影の怒濤の攻撃が千枝達を襲い、更に悠達にも迫っていた。

『メディア!』

「大丈夫? ……鳴上君?」

「何とか。……っ! 天城! 後ろだ!!」

雪子に回復して貰った悠は声をあげた。雪子のその背後にいつの間にかレスラー姿のシャドウが立っていたからだ。

「っ!」

雪子も気付き、急いでコノハナサクヤで迎撃しようとしたが相手の方が一瞬だが速かった。

「イザナギ!!」

悠がイザナギでシャドウを間一髪で抑えたが、その隣を何者かが過ぎ去っていったのを悠は見逃さなかった。

「っ！ もう一体……!?!」

シャドウは一体ではなかった。イザナギが目の前のシャドウと取っ組み合った瞬間にもう一体のレスラー型のシャドウが横切り、雪子へと突撃してゆく。

「ああっ——!」

助かったと思つた矢先の事で雪子の判断は遅れ、コノハナサクヤの動きが鈍つた。

防御が間に合わないと思ひ、雪子は咄嗟に目を閉じてしまう。その瞬間……。

『グボオア!!』

雪子に迫つたシャドウの腹部を“黒い腕”が貫いた。

シャドウはそのまま悶絶した様子で消滅し、悠も目の前のシャドウを倒した事で雪子の方へ振り向き、その存在を目の当たりにする。

「これは……ペルソナ?」

「……えっ?」

悠の言葉に雪子も目を開けると、そこにいたのは黒い長髪の人型のペルソナ、そうアイテルが君臨していた。

『んん?』

アイテルの存在に完二の影も気付く。その異質な存在感に無理矢理に目を奪われてしまったのだ。

あまりに強い力。故に気に入らない。

『気にならないな……なんだい、あれは?』

完二の影の言葉に陽介と千枝もようやくアイテルの存在に気付いた。

「す、すげえ……相棒の奴、まだあんなペルソナ持ってたのかよ……」

陽介は純粹に悠が召喚したペルソナだと思つているようだ。しかし、悠も驚いてる様子に千枝は気付いたが、それを踏まえてもどこかアイテルが悠のペルソナじゃないと感じた。

「あれ……本当にそうかな?」

一目見た感想が異質。千枝は直感的にあのペルソナと悠が無関係と判断する。

白いキャンパスに突然に現れた黒。そのぐらいの異質だった。

『……』

悠達が色々と考えているとアイテルはやがて右手を悠へと向けた。

「！」

思わず攻撃が来る可能性を思い、悠は咄嗟に身構えた。

『メシアライザー』

だが悠へ放たれたのは攻撃ではなく、不思議な光だった。

そもも光を浴びた瞬間、悠は体が軽くなるのを感じ、同時に力が漲ってくる感覚も感じ取った。

「これは……？」

悠はアイテルが自分に力を貸したとすぐに分かった。何故か、それに疑いは持てなかったのだ。

そのまま悠はアイテルを見上げると、アイテルも悠をジッと見詰めていた。

(不思議だ……このペルソナを俺は信頼している)

安心、敵対してこない。悠はアイテルに何故かそんな想いを抱いた時だった。

『アハハハハハ!!』

完二の影が笑いながら悠達へ突撃してきていたのだ。武器である二つのオブジェを手に、狂った笑顔でアイテルに照準を絞っていた。

『死んで!! 僕の為に死んでちょうだい!!』

完二の影は右手のオブジェを高く上げ、アイテル目がけて全力で振り落とした。だが……。

『……』

アイテルは左手一本で攻撃を受け止めた。

『えっ……!』

完二の影の顔が初めて崩れ、アイテルは掴んだオブジェを握るとそのまま握り絞める様に砕いた。

そして、完二の影へ手を翳した瞬間、完二の影は吹き飛んだ。

『ギャアアアア!!』

悠達から少し離れた所に完二の影は吹き飛ばされた。その圧倒的な光景に悠達も呆気になっていると、再びアイテルが悠を見詰めた。

“お前はその程度なのか……?”

「……………」

悠は何故かアイテルからそう言われた様な気がし、表情を固めると悠は完二の影へ向かって行き、アイテルはそれを見送ると姿は消え始め、やがて消滅する。

「ハイピクシー!」

悠が召喚したのは、小さな妖精のペルソナ。召喚されたハイピクシーの身体から雷が流れ始めながら、悠とハイピクシーは完二の影へと向かってゆく。

『な、なんだ一体それは!』

「ただの妖精さ……ハイピクシー!」

ハイピクシーが一気に完二の影へ距離を詰めようとするが、完二の影も最後の意地を見せた。

『なめんじゃねええ!!!』

完二の影は無事の方のオブジェでハイピクシーを叩き落そうとした。

だが、先程のメシアライザーで悠とハイピクシーのスピードは遥かに上がっており、ハイピクシーは踊る様に完二の影の攻撃を避けた。

そして、その小さな手を完二の影の目の前に翳す。

『ジオンガッ!』

『ガアアアアアアッ!!?』

特大の雷を浴びながら叫んだ後、完二の影は倒れ、悠達は警戒しながらも完二のシャドウが立ち上がらないのが分かると腰を下ろす。

既に疲れた事が分かるが、悠達の顔には笑みが生まれていた。しかし……………」

『……………ツグ……………ウフフ……………ふふふ、情熱的なアプローチだなあ。

これならみんな……………素敵なカレになってくれそうだよ』

「「「ツ?!」」」

悠達は声の聞こえる方を向くと、そこには完二の影が完二の姿に戻りながらもこちらに近付いてくる姿だった。

「ま、まだ向かってくるクマ！ よっぼど強く拒絶されてるクマか……？」

「……そりゃ、これだけのギャラリーがいればな」

「ある意味、一生の恥だもんね」

陽介と千枝の言葉に苦笑いしながらも、何とか平常心を保とうとする悠達。すると……。

「……めろ」

「？……なんだ？ 誰か今、なんか言ったか？」

「ううん。私は違うよ」

「私も」

今一瞬だけ、誰かのドスの効いた声が聞こえた様な気がした悠だったが千枝達は首を横に振る。すると、そんな事を言っている間にも完二？がこちらに近付いて来ていた。

『誰でもいいんだ……誰かボクを受け入れてよおおお!!』

「止めろって！ 言っただらろおおお!!」

「!!」

突然、完二が自分のシャドウを殴り飛ばし、その殴った時のバキッ！と言う音が周りに響く。

そして、殴り飛ばしたシャドウを見ながら完二はゆっくりと語り始めた。

「情けねえぜ……こんなんがオレん中にいるかと思うとよ。……知っただよ、お前がオレん中にいることくらいな！」

そう言っただけ完二はシャドウの前に立つ。その姿は、先程まで恐怖に支配されていた姿では無く自信に満ち溢れていた。

「オラ立てよ！ 俺と同じツラ下げてんだ。……ちつと殴られただけで沈む程ヤワじゃねえだろ。男だ女だってんじゃねえ、拒絶されんのが怖くてビビってよ……自分から嫌われ様としてるチキン野郎だった。……でもよこの間、店に来たお客が俺の作った人形を妹の為に言え……あんなに褒めてくれて買ってくれたのを見て正直……て

めえも嬉しかった筈だろ！」

『……』

完二のその言葉に、完二？は立ち上がると完二に近付いてくる。「今まで、お袋以外に俺の趣味を認めてくれた奴はいたか？……いねえだろ！あの人が言ってくれた言葉を聞いて……もう少し頑張ってみようと思ったんじゃねえか！ だから来い！ あの人が認めてくれた様に俺も認めてやる！てめえは俺だあ！」

完二の言葉にシャドウは頷き、光に包まれると全身が黒く巨大で髑髏のイラストが描かれていた。その手に雷のオブジェを持つペルソナ『タケミカツチ』になり、完二は自分のペルソナを見上げた。

「頼むぜ相棒……」

『オオオオッ！』

完二の言葉に答える様にタケミカツチは手に持つ雷のオブジェを掲げ、新たに決意を胸に固めたのだった。

そしてその光景を見ている者がもう一人おり、扉の隙間からその人物である洗夜は満足そうな笑みを浮かべながら現実の世界へと帰って行った。

チリーン……！！

この時、鈴の音が響いていた事に洗夜は気付かなかった……。



チリーン……！！

「今……！！」

「どうした相棒？」

薄っすらと聞こえた鈴の音に、反応している悠に陽介が声をかけた。

「今、兄さんの鈴の音が聞こえた気がしたんだ……」

「ハハ、いくら死に掛かったからって、それは無いだろう……今日はお前も俺達も、疲れてんだ。早く帰ろうぜ」

そう言って笑いながら、千枝達の下へ行く陽介。

その様子に何処か納得出来ない感じの悠。先程の謎のペルソナの事もある。この世界には未だ、自分達の知らない事があると悠は感じていた。

だが、陽介の言う通り、兄である洗夜がいる訳はなく、また戦いで疲労が半端でなかった為、完二を連れて、此処から早く帰る事にした。



現在：堂島宅

「ただいま……」

「お帰りなさい……って、お兄ちゃんどうしたの凄い汗だよ!？」

「はは……ちよつとね」

菜々子が驚くのも無理はなく、悠のワイシャツは汗でビショビショだった。

いくら今が夏とは言えこれは流石に流しすぎであり、汗でシャツが透けていた。まあ、サウナのような場所で戦って来たから当然なのだが。

「……シャワーを浴びてくるよ」

菜々子にそう言って浴室に向かう悠だったが。

「あつ！ お兄ちゃん。今は洗夜お兄ちゃんがシャワー使ってるよ」

「兄さんが……？」

「うん、洗夜お兄ちゃんも、お兄ちゃんと一緒に凄い汗かいてたんだよ。何かね、素振りしてたんだって」

「素振り……」

菜々子の言葉に悠は少し考える。洗夜がどこでハマったのか趣味？の剣術をしている事は悠も知っている。

その為、木刀の素振り等をしていてもおかしくは無いのだが、悠は玄関に置いてある木刀に目を向け、不意に近付いた時だった。

「さっぱりした……ん？ なんだ悠、帰っていたのか」

「たった今ね、ただいま兄さん」

「お帰り……。お前も早くシャワー浴びてこい」

悠の姿を見て、洗夜は特に気にするそぶりもなくそう告げて木刀を

持って部屋へと行ってしまった。

そして、悠はその後ろ姿を静かに見詰めていた。

(なんだろう……この違和感?)

他愛もない兄弟の会話だった筈だが謎の違和感を悠は感じてしまったが、理由は結局分からず、心の中をモヤモヤさせながらシヤワーへと向かって行くのだった。

END

日常

第十六話：再会への予兆

同日

現在：???

そこは広いフロアで豪華な一室であった。周りに飾られている装飾品を見ても高級品と分かる。

そんなフロアの主である紅く長い髪を靡かせ、毛皮のコートを羽織っている女性は周りにいる部下らしき者達へ怒りを放っていた。

それを同じく、全身を隠す様な服を着ている付き人らしき金髪の女性が様子を静かに見詰めていた。

「何故、私の許可なくこんな事をした！ ようやくシャドウワーカーも設立して間もないんだぞ？ そんな忙しい時に……！」

そう言って近くの机の上の資料をバンツ！と叩く紅髪の女性。その音にビクツ！とする部下の人々は恐る恐るでありながらも資料を見せながら食い下がった。

「で、ですが、ご当主。幹部の汚職等が原因での『桐条グループ』の大変な時期は何か乗り越えました。しかし、それでも世間的にはまだ風当たりが強いので……」

「ご当主の『お見合い』話をして、少しでも世間やグループ内を明るくしようと……」

「それか、せめての息抜きなどと思い……」

ビクビクしながら語る部下達の声のポリュームは徐々に下がって行き、紅髪の女性はため息を吐いた。

「……お前達がそう考えるのは納得出来るが、私はまだ！ 身を固める気は無い!!」

「で、ですが、ご当主！ 相手のご両親は、国々とのパイプを持っておりますし……それに、見合い相手も高卒ですが……学力・行動力共に問題無いと資料に……何より、このお見合いは先代のご当主が決めた事なのです」

「お父様が……」

部下のしつこい言葉に、イライラし始める紅髪の女性だったが父の名前を出された事で耳を傾ける。

許婚やら見合いやらの事は昔にもあったが、彼女が当主になってからは一度も起こらなくなった。彼女が絶対にさせなかつたからだ。

だが、今回の話は珍しく部下達が行動的であり、しかも今亡き父の名も出たのだ。彼女といえど、無視する事はできない。

「はい……当時の話によれば直に見て気にいったらしく……その……本来ならば、もう少し早く行う予定だったのですが、先代のご当主の不幸等が重なり、今に至ります」

「……そうか」

少し考え込む紅髪の女性を見て、部下達は手応えありと判断したのかここぞとばかりに畳みかける。

「それに……ご当主も、誰かに支えられた方が仕事等も捗るのでは？」

「それとも、どなたか心に決めた方でもいるのですか？」

「ッ!？」

部下の何気ない言葉に、無意識に彼女は二年前の事を思い出す。

突然、黙り込む当主の様子に部下達も少し焦り出すが、彼女は頭からその事を振り払い、何も無かつたかの様に振り向いた。

「分かつた。そのお見合いを受けよう。日時や場所が決まったら報告してくれ」

「おお……!」

彼女の言葉に、部下達は喜びの言葉を上げるのだが……。

「その変わり、共に行く人員は私が決める。それが最低条件だ」

「えっ!　ですが、ご当主……」

「何か文句があるのか？」

「ヒッ!　いや、何でもありません!　そ、それでは私達はこれで……!」

そう言つて、一睨みすると部下達は逃げる様に去って行く。それによつて部屋には部下達が居なくなり、それを確認すると近くの椅子に女性は腰を下ろした。

「心に決めた者……か」

「大丈夫ですか？」 美鶴さん

「アイギス……」

金髪の女性「アイギス」に紅髪の女性「美鶴」は顔を下に向けて口を開いた。

基本的に一人で頑張つて来た彼女がこう言う表情をするのは珍しく、それを知っているアイギスは余計に心配してしまう。

「先程の言葉……洗夜さんの事を思い出したのでは？」

「……否定すれば嘘になるな」

「美鶴さん……」

美鶴は切なさそうに笑みを浮かべるがアイギスは知っている。美鶴だけでは無く、明彦達も洗夜が消えた事に後悔している事を。

この事を知らないのは、風花・乾・コロマル・チドリぐらいだ。特に、風花と乾には伝える事は出来ない。

彼女達は、あのメンバーで人一倍懐いていたからだ。故に洗夜が消えた理由をうまく伝えていないのだ。

「そう言えば、どなたをお見合いに連れて行くのですか？」

話を变える為か、アイギスはお見合いの方に話を振った。

「それは君と明彦に同行をお願いしようと思っている。君達と一緒にならば、安心出来るからな。無論、自分の身は自分で守るつもりだ」

そう言うものの、自分でも何処か無理をしている様に美鶴は感じた。

元々、お見合い自体乗り気では無いのだが、今は亡き父の名が出たならば無下には出来ない。

「あっ……そう言えば、お見合いのお相手に関する話を聞いてませんでしたね」

「そう言えばそうだな……まあ、顔も知らない相手との見合いも面白そうだ。それよりもアイギス、明彦に連絡を頼めるか？」

と言いながらも、美鶴は元々興味が無いお見合いなのは変わらない為、相手に興味等は微塵も無かった。

しかし、念のために明彦には連絡しなければならない。

「分かりました。それでは少し席を外します。え〜と……携帯はどう使ったつけ？」

「……」

少し心配な言葉を発しながらアイギスが部屋を出ていくのを確認し、美鶴は静かに窓から空を眺めた。

その内心では今はどこにいるかも分からない、自分にとって大切な男性である洗夜について考えいた。

「お前は今、何処で何をしているんだろうな……洗夜。——お前はあの時、何を伝えたかったんだ……？」

美鶴は洗夜が消えた時の最後の電話の内容を思い出す。

『……美鶴。すまない……俺がお前達を傷付けてしまった。辛い絆を

……お前達に刻んでしまった……！ 本当にすまない……！』

——俺はもうお前達に会えない。それが、美鶴と洗夜の最後の会話であり、言葉だった。

「傷付けたのは私達だ……なのに何故、お前が謝るんだ洗夜……！」

豪華な椅子の上で美鶴は、自分を抱きしめながら体育座りと言う似合わない座り方でそう呟いたが、誰もそれに答える者はいなかった。しかし、美鶴は知るよしもなかった。

洗夜が桐条とは関係の無いシャドウの事件に巻き込まれている事を。

そして、美鶴が貰い忘れた見合い相手の資料。その名前の欄に……『鳴上 洗夜』と書かれている事に。

END



5月28日(土)曇↓雨

現在：堂島宅(深夜)

「——ハッ……ハア……ハア……ハア……ハア……また、あの悪夢か。この頃は見なかった。……何かの予兆じやなきや良いが」
そう言つてうなされたせいでかいた汗を拭きながら、窓の外で降っている雨をずっと眺め続けた。



5月29日(日)晴

現在：堂島宅

家にいるのは洗夜と菜々子だけ。堂島は仕事で、悠は完二達と遊びに行くとして留守にしている。

どうやら、すっかり完二も皆と仲良くなった様だが、それでもたまには洗夜に会いに来るがどちらにしる洗夜にしては変わらない日常だった。

そんな今日……。

「お兄ちゃん！お兄ちゃんにお手紙とどいてるよ」

「手紙……？ 誰から分かるか？」

「うーん、良く分からない」

菜々子は少し困った様子で封筒を渡し、洗夜はそれを受けとった。ただでさえ手紙は珍しいが、封筒に書かれている文字を見て洗夜は驚愕してしまう。

何故なら、そこに書かれていたのは……。

「果たし状……？」

大きな文字で『果たし状』と書かれていたのだ。もちろん、洗夜に心当たり等は無い。

洗夜はありもしない恨みを思い出しながらも差出人の名前を確認すると、再び驚愕した。

差出人の名前の所には……。

差出人：絵里座部醉

「誰だ……」

絶対に一度見れば忘れない名前にも心当たりがない。このままでは埒外開かないと判断し、洗夜は手紙の中身を読む事にした。

内容を見れば、少しは謎が解けるだろうと思っただが、その考えは呆気無く崩れた。

『突然、この様なお手紙をお許し下さい。実は貴方様に前から伝えたい事があります。……今日の12時に、近くの神社の前で待つて下ります』

「……何故、果たし状なのに中身はラブレター風なんだ？」

余りの訳の分からない手紙に頭を抑える。そして、少し悩んだ洗夜の出した結論は……。

「イタズラだ。こう言うのは無視するのに限る」

洗夜が手紙を丸めようとした時だった。

——PiPiPiPiPiPiPiPiPiPi

「あっ！ お兄ちゃん、でんわだよ」

「今度は電話？ 一体、なんだ……」

変な手紙のあとの突然の電話。しかも、相手の名前を見ようとしたがディスプレイに映し出されているのは『非通知』の文字。

変な手紙の後の非通知着信に息を飲むと、ゆっくりとボタンを押す。

——Pi……！

「もしもし……」

『来ない殿方にはメギドラオンでございます。ブツツ！ プー！ プー！……でございます』

「……」

それだけ言われて、切られた電話。本来ならば悪戯電話なのだろうが、今の電話の声と言葉遣いに聞き覚えがあつた。

洗 夜は再度先程の手紙の差出人の名前を見た。

「……先程の声。そして、この宛名といかにも付け焼き刃の知識で作った的な果たし状。……まさか」

そう言うと、洗夜はすぐさま携帯電話と財布をポケットに入れて、

出掛ける準備をする。

「菜々子、俺は少し出掛けて来る。大丈夫だとは思うが、何かあったら電話しなさい」

「お兄ちゃん、何処に行くの？」

その言葉に少し微笑みながら菜々子の方を振り向き、洗夜はこう告げた。

「少し友人に会ってくるだけだよ……」

「お兄ちゃんのお友達　？　どんな人？」

洗夜の友人が気になるのか菜々子は、興味津々で聞いてくる。その様子を見た洗夜は、菜々子の頭を撫でながら口を開いた。

「世界『最凶』の……『エレベーターガール』だ」



現在：神社

あの電話の後、少し急ぎ気味で神社に向かった洗夜は神社に到着した。遅れたら何をされるか分かったものじゃないからだ。

また、この商店街の神社は周りを見る限りそれ程に綺麗では無く、ハッキリ言ってボロい。しかし、不思議と心が落ち着く場所の様に感じた。

近頃、また見始めた悪夢のせいで静かな場所が恋しいのだろう。それとも、二年前の戦いを知る数少ない友人と久しぶりに会話出来るのが嬉しいからなのか。この頃、余り見せなくなった笑顔で洗夜は神社の階段を上り始めた。すると……。

——ちやりーん……！——パン……パン……！——

(昔見たいに賽銭箱に財布をひっくり返すマネは、もうしないか)

そう思いながらも目に入ったのは見たのは明らかに場違いで、周りからも浮いた感じの青い服装を完璧に着こなしている銀髪の女性が神社の前でお参りをしている光景。

そして、自分の気配に気付いたのか銀髪の女性は洗夜の方を向き、その姿を見て微笑んだ。

その女性の微笑みはミステリアスだが、確かな嬉しさと優しさが

あつたが、それは洗夜も同じ事だった。

「……二年ぶりの再会だな。また会えたな……」
「エリザベス」

そう言つて笑顔でエリザベスに語りかけ、洗夜はエリザベスに手を差し伸べる。

「突然、御呼び立てして申し訳有りません。……ですが、変わりない様で安心致しました……洗夜様」

そう言つてエリザベスは洗夜から差し出された手の上に、自らの手を添える。

神社の中の光景にしては異質だが、その光景に誰も文句を言わないだろう。二人の表情はとても幸せそうなのだから。



現在：ジュネス近くのステーキハウス

再会した二人だったが、エリザベスが空腹を訴えた為にジュネス近くのステーキハウスへと足を運んでいた。

別にジュネスでも良かったのだが、万が一に悠達に見付かると面倒だと思つた結果だった。

そして、洗夜はエリザベスと共に注文した料理を口にしながら話をしていた。

「それにしても……一体何なんだ、あの果たし状は？」

「古来より、誰かを呼び出す時にはその手紙を使うのが正しいとばかり思っていたのですが？」

そう言つて注文したお肉を口に運ぶエリザベス。口にお肉を含んだその姿はまるでリスの様で可愛いが、今はその姿で和む暇は無い。

既に三皿平らげていては尚の事。

「別に呼び出す事自体は間違っていない。だが……それにしたつて、差出人の所の名前は何だ？ 電話が来なかつたらお前だつて気付かなかつたぞ？」

「あの方が見栄えが良かったので」

「お前は、漢字を嘗めている」

「辞書を引いて頑張りました」

「そんな事より常識を学んでくれ……」

胸を張るエリザベスに洗夜は頭痛を訴えた頭を抑えた。

「それに何だあの内容は？ あんな内容で本当に決闘だったら、体育館裏が血の海だぞ……」

そう言っただけでもエリザベス同様に注文した肉を口に運んだ。

「殿方の方は、あの様な内容の手紙が届くと嬉しいがと思っていたのですが？」

「別に男に限った事じゃない。そもそも、二十歳であんな内容の手紙を買った所で何にも感じない」

呆れた感じで洗夜は食事を続けるが、それに対してエリザベスは間違った内容とは言え、自分が書いた手紙に全く興味を示さない態度が惜に触ったらしく洗夜を少し睨む。

「……」

伊達に最強クラスのペルソナ使いであり、力を司る者と言われるだけあって眼力が尋常では無かった。

そのあまりの眼力でジツと見詰められた洗夜に冷や汗が流れ始めた。

「……俺が悪かったからも睨むな」

「最初からそうおっしゃれば良かったのです。せつかくの再会ですので、女性の心を傷付ける酷い殿方……シクシク」

そう言っただけ泣きをするエリザベスだが、片手はしっかりと肉を捕らえていた。

（この二年で一体、何を学んだんだ……）

そう思いながらエリザベスの行動に洗夜は再度頭痛を起こす。最近では頭痛が結構起きている。

理由は単純、悠達が危なげな行動と軽率な行動でヒヤヒヤしているからだ。だからと言って別に苦とは思ってはいないからある意味で質が悪い。

そんな状態だが、洗夜は頭から手をし、エリザベスに視線を向けた。「全く、お前は俺の事を何だと思っている？」

「この様な弱い私を二人掛かりで襲う様な殿方なのでは？」

「……戦いの事を言っているんだよな？」

洗夜は苦笑するが表情は引きつっており、その様子にクスクスと笑うエリザベス。

「どうやら、先程の仕返しのもりの様だ。その様子に洗夜も気づき。周囲を確認して誰も聞いていない事に安心するとエリザベスのオデコに指をグリグリと押し付けた。

「暇があればメギドラオンとかばっかりするお前の何処が弱いんだ……！ それにあの時は『アイツ』と俺の二人掛かりで挑めって言ったのはお前だろ……！」

「も、申し訳ありません！　じよ、冗談、あつ！痛いです、痛いです！　オデコが凹んでしまいます!？」

エリザベスが謝った為、デコから指を離すと窓から外の景色を見始めた。オデコを抑えながら自分に抗議の視線を送るエリザベスの視線には気付かないまま洗夜は口を開いた。

「……あれから二年か」

その言葉にエリザベスは、デコから手を離すと小さく、そうですね……と相槌をうち、洗夜の事を悲しそうな目で見つめた。

「確かにあれから二年です……ですが、私にはつい昨日の様に感じなりません」

「お前は前に進む事を選んだからだ。……だが、前に進む所か二年前から時が止まった俺にはこの二年は長すぎたよ……」

洗夜は力を抜く様にその場の椅子に座り直し、ゆっくりとエリザベスの方を向いたのだが目には涙が流れていた。

しかし、無意識から来るモノなのか自身では自分が涙を流している事には気付いておらず、そのままの状態を話続ける。

「……『アイツ』は凄いな。ニユクスもシャドウ達も皆、人間の愚かさが招いた事だったが……『アイツ』は自分の命を賭けて終わらせた。アイツも、もつと生きたかった筈なのに……いや、生きて欲しかった……！」

「……洗夜様」

「……泣いていたか」

そう言っただけの涙に気づき、洗夜は顔を隠しながら話すその姿

に、エリザベスはただじつと黙って聞き続ける。

エリザベスは洗夜の身に何があつたのかは知らない。だが何か、自分には分からない苦しみが洗夜を襲つた事だけは理解できた。

そして洗夜が喋り終わるのを確認すると同時に口を開き、語り始めた。

「私は『彼』を救う術を探す為に旅に出ました。……ですが、その方法は疎か、手掛かりすら未だ見付かりません」

「……イゴール達から聞いた。だが、やはりニユクスも『ユニバース』の力も甘くは無い。そんな方法自体があるかどうか……」

その言葉に顔を俯かせるエリザベス。恐らく、エリザベス自身も内心では多少なりともそう思っているのだろう。

だが、エリザベスはすぐに顔を上げた。

「それでも私は前に進む事に致しました。洗夜様も、今こうしていると云う事は前に進む事を選んだからなのではありませんか?」

「分からない。俺はちゃんと前に進んでいるのかどうか……グツ!」

自分はちゃんと前に進んでいるのかが分からず、エリザベスにその事を聞こうとした瞬間に洗夜の頭に痛みが走る。

「どうしましたか? 何処か、お怪我でも?」

「いや、何でも無いさ。ただの頭痛だ……」

そう言つて、大丈夫の合図の為に手をブラブラと降る。

だが、その様子にエリザベスは少し心配そうに見るがそれに気付いた為、話を変えた。

「そう言えば、何でお前は稲羽に来た? この事件と二年前との関連性でも探してきたか?」

「この事件……? 少し、お待ち下さいませ」

その言葉にエリザベスは意外にも、何も知らないと言つた感じだった。そしてエリザベスはそう言うと、静かに目を閉じて何かに集中し始めた。

(……本当に何も知らないんだな)

そう思いながらエリザベスの様子を見守っていると、5分もしない内にエリザベスは目を開いた。

「お待ちせ致しました。確かに、この町から少し不思議な力を感じます……もしや、主様関係ですか？」

「当たり前だ。相変わらず、お前には隠し事は出来ないか。……だが、お前が何も知らなかったの意外だった。……マーガレットとかに何も聞いていないのか？」

「只今、絶賛職務放棄中でございます」

「ああ、そうかい……」

洗夜の言葉にエリザベスは機嫌を悪くしたように表情を鋭くした。マーガレット辺りが止めたのだろう。それ故にエリザベスの行動は家出同然だと洗夜は察する事が出来た。

「まあ……あまり姉に心配は掛けてやるな」

「明日から本気を出させて頂きます」

その言葉に無理だと洗夜は判断すると、諦めてエリザベスに今回の事件の説明等の会話をする事にするのだった。



「……何て言ってるか聞こえるか？」

「ビミョーっス。席も遠いし、周りの客も煩くて」

「あー！もう！少し黙っててよ！ 全然聞こえないじゃん！」

「頼むから静かにしてくれ……」

などと会話しながら悠達が見ていたのは、自分の兄である洗夜、そしてその洗夜と楽しそうに食事をしている金髪の女性（エリザベス）の姿。

本来の拠点がジュネスである悠達が何故、こんな事をしているのかと言うと。

← 完二のシャドウとの戦いの特訓が終わった。

← すると、皆が空腹を訴えだした。

← たまには別の所で食べようと言う話になる。

←

← ならば、ジユネスの近くのステーキハウスへ。

← ステーキハウス到着。

← 「あれ？ あそこにいるのって洗夜さんと……誰？」

← 現在に至る。

以上の経緯から悠達は、洗夜とエリザベスから少し離れた席から様子を眺めているのだ。

「ね、ねえ……やっぱり止めましょうよ、覗き見なんて……」

暫く前に洗夜に相談を受けて貰った雪子は罪悪感を覚え、覗き見をしている千枝達を説得したが……。

「とか何とか言っちゃって、本当は雪子も気になるんでしょ？」

「ち、ちがつ！ 私は別に洗夜さんの事は……」

「誰も兄さんについて言っていないんだが……」

「!!」

悠の言葉が止めとなり、雪子は顔を真っ赤に染めたまま沈黙した。

「まあ、天城先輩のカミングアウトは置いといて……本当に何を話してんスカね？」

「確かに良く分かんねえけど、一つ分かる事は……美人だよな」

「た、確かに……」

陽介の言うとおり、確かに、ミスティアスな雰囲気纏っているが、エリザベスは女性の中でも美人の分類に入る事は間違い無い。

しかし、悠は陽介の言葉よりも女性の姿に何故か見覚えがあった。

(……見た目や服といい、雰囲気といい。ベルベットルームのマーガレットにそっくりだ……偶然なのか?)

偶然とは言え、マーガレットとそっくりの女性と自分の兄である洗夜が一緒にいる理由が分からない悠は、後ろで勝手に盛り上がっている陽介達の事は頭に入らず、周りの音に気をつけながら洗夜達の話に集中する事にした。

「それでは、今回の一件は二年前の事とは関係無いのですね？」

「ああ、元々タルタロスにいた『奴ら』はニユクスの一部であり、僕みたいなモノだった。それに引き換え、今回の奴らは何かが違う」
「??」

二年前・ニユクス・タルタロス等の悠達にとって謎の単語が二人の会話を飛び交う。

洗夜達の話に出て来る単語の意味が分からない悠は既に戦意を削がれたが、もう少しだけ二人の話に耳を傾ける事にした。

「……それにしても、二年もたったのにお前は全く変わらないな」

「俗に言う若さの力と言うモノです」

「何が若さだ……お前は今、何歳だ？ 本当は外見詐欺でいい歳……」

——シュッ！

洗夜がそう言った瞬間、何かが洗夜の顔を摩った。不意に洗夜は隣を見ると……。

「ッ!」

そこには、ペルソナカードが椅子に刺さっていた。

そして、顔を何かがつたる感覚を覚えた洗夜は恐る恐る手で頬を触れると、触れた指先には赤い液体が流れていた。

洗夜はようやく自分の頬が微かに斬れている事に気付いた。そして、洗夜はゆつくりと怪我をさせた張本人であるエリザベスの方を冷や汗をかきながら向くと……。

「女性に年齢を聞くのは言わゆるタブーと言うやつでございます。……しかも、冗談でも許し難い事を……口を閉じる事をオススメ致します」

顔はいつもの笑顔だが、目は全く笑っていなかった。隣で刺さっていたペルソナカードもエリザベスの手元に戻り、第二射がいつ来てもおかしくはない。

それを確認した洗夜はしずかに頷いて頭を下げた。

「……す、すまなかった。お前は綺麗なままのエリザベスでいてくれ……」

「……これが噂の命乞い……でありますか？」

(間違っていないが何かが違う……!)

エリザベスの言葉に、洗夜は己の命の危機を感じていたが、その恐怖の元凶であるエリザベスから殺気が無くなった。

「……まあ、反省していらっしやっっている様子でありますし……今回は許して差し上げます」

言葉だけ聞けば許してくれている様に聞こえるが、目をみると次は無いと語っていた。

「ああ……すまなかった」

洗夜も今は謝る事が最善だと思い、素直に何度も謝り続ける事でも話題を離そうと試みる光景は、悠達にとっては奇妙な光景しか思えなかった。

「何だろう……今度は謝ってるよ」

「何か殺気みたいなものも感じたつすよ……」

「相棒、何て言ってたか聞こえたか？」

「皆が騒いでたから余り聞こえなかった……」

洗夜達の奇妙な様子に不思議がる陽介達、悠も二人の会話に興味があつたが陽介達の声がうるさく、後半は余り聞くことは出来なかった。

そして、悠は再度耳を傾けようとしてしたが……。

「さて、そろそろ出るか？」

「そう致しましょう。ちなみにお会計は……」

「俺が払ってやるよ……やれやれ、一人で五皿も肉を食ったのか……」

そう言っただけでブツブツ言いながら請求書をレジに持って行く洗夜とその様子を見てニコニコしているエリザベスの様子から洗夜達の話は既に終わって終わっていた。

だが、悠は洗夜とエリザベスの前半の会話がどうも引掛かって仕方ない様子だ。

「一体誰だったんだ？ さっきの女の人は……」

「そう言っただけで考え込む悠だが……」

「いや！ あれは別れ話じゃないのか！」

「違くない？ 逆に寄りを戻そうとしてるんじゃない？」

「……ハア」

既にいない洗夜と女性の話に盛り上がっている陽介達の姿にため息を吐くしか出来なかった。



現在：商店街

「そう言えば、先程の店で私達の事を見ていた方々がいらつしやいましたね」

「……弟と、愉快的仲間達だ」

「気付いてらしたのですか……」

「あんな人数で騒いでいたら嫌でも気付く。それに、話を聞かれていたとしても……シャドウの名前は出していないし、ニユクスの事も意味が分からない筈だ」

そんな会話をしながら洗夜とエリザベスは商店街の道を歩き続け、やがて洗夜は何かを思い出した様に口を開いた。

「……ところでエリザベス、お前はその後ベルベットルームに帰るのか？」

「そうですね。この町に興味が沸きました。……故にこの町に滞在する事を兼ねて、主様やお姉様にちゃんと話をしないとイケません」

(職務放棄中なのか……?)

家出している割には律儀だと洗夜は思ったが、口に出すことはしない。災いの元凶は大抵が口からだと言っているからだ。

それに洗夜にはエリザベスに頼みたいこともあった。

「……だったら悪いんだが、悠がベルベットルームに来たら俺の事は上手く誤魔化しといてくれ？ まだ悠達に俺がペルソナ使いである事を知られる訳には行かない」

真剣な表情で伝える洗夜。それはエリザベスにも真剣さが伝わったらしく静かに頷いた。

「畏まりました。弟様が来た際には上手く伝えておきます」

「すまない……」

本当ならば自分が悠達に正体を教えれば手っ取り早いのかも知れない。だが、それでも洗夜は正体を晒したくはないのだ。

成長の妨げやらはそれを正当化する為の口実に過ぎない。本当の

理由は別にあるのだ。

(もう……あんな想いを誰かにさせる訳にはいかない。それによって……己の仮面から報いを求められる事になってもな……)

「……洗夜様？」

「！……どうした……？」

「……いえ、少しお辛そうな様子でしたので」

「!?……いや、気のせいだ」

エリザベスの言葉に我に帰った洗夜は、エリザベスの質問にそう答えた。彼女にすら余計な不安を抱かせたくないのだ。

『彼』を救うという覚悟共に前に進んでいるエリザベス。自分と『彼』との思い出を共通できる数少ない仲間である彼女を洗夜は巻き込みたくない。

「そうですか……」

洗夜の答えにエリザベスはそう言ったが、表情はどこか悲しそうだ。

すると、エリザベスは何を思ったのか足を止めた。

「……洗夜様。貴方様に来て頂きたい所があるのですが？」

「来て頂きたい場所？ 何処だそこは？」

「すぐに御理解頂けます」

エリザベスはそう言うと同時に手を翳すと、その場所から空間が裂けて入口となった。

だが、その様子に町の人は誰一人気にした様子も無く、普通に歩いている所を見ると入口が見えているのは洗夜とエリザベスだけの様だ。

「一体、俺を何処に連れて行く気だ？」

出現した入口に戸惑いながらも、洗夜はエリザベスに問い掛ける。

その問いに対して、エリザベスはいつも通りの表情でニコツと笑い……。

「誰にも迷惑の掛からない場所でございます。そこで……私とお手合わせ願います」

エリザベスではなく……『力を司る者』として洗夜に立ち塞がった。

E
N
D

第十八話：力を司る者

現在：???

洗夜は、エリザベスが作り出した入口に共に入り、謎の広い空間に立っていた。その空間にはこう言った特徴も無いが、雰囲気はベルベットルームに似たモノを感じる。

洗夜はそう思いながら辺りに視線を送っていると、エリザベスは洗夜に特に説明はせずにペルソナ全書を何処からともなく出現させて手に取った。

「では、早速始めさせて頂きます。今回は単純にペルソナだけの勝負で構いませんね？」

「俺は別に構わない……が、闘う理由は何だ？ それぐらいは聞かせろ」

闘う事自体は嫌な訳では無い洗夜。逆に、昔は自分と『彼』の二人掛かりでやっとなったエリザベスに今の自分はどれ程通用するかを知りたいぐらいだ。……どれ程まで、力に己が耐えられるのかも含めて。

そして、洗夜の言葉に無表情のままエリザベスは口を開いた。

「……確認したい事がございます。それが理由では駄目ですか？」

「いや、別に良い。……さて、長くなったがさっさと――」

「ちなみに、洗夜様はアイテルしか使用を認めませんので」

「……なに？」

エリザベスの言葉に、信じられ無い事を聞いたと言った感じで目を丸くする洗夜。

洗夜がそう思うのも無理は無く、女性とはいえエリザベスは最強クラスのペルソナ使いであり、『力を司る者』と言われる程の存在。

そんな彼女相手にいくら何でも、自分は一番長い付き合いであり、自分の最初のペルソナである『アイテル』であつても一体だけで挑むのは流石の洗夜も辛いレベルを超えて最悪死ねてしまう。

しかも、エリザベス自身もワイルドの力を持つ者、フェアとは言えないこの条件に洗夜は一応、反論してみた。

「……流石にそれは無いだろ。幾ら俺でも、お前相手にアイテルだけでは分が悪すぎる」

「その点に付きましてはご安心を……私も使用するペルソナは一体だけでございます……ヨシツネ！」

ペルソナ全書を開き、ヨシツネを召喚するエリザベス。

「レパトリーが増えてるな」

「お互い様でございます」

エリザベスの言う通り、二年前にはいなかったペルソナを二人は新たに誕生させている。

現に、洗夜もヨシツネを誕生させたのはつい最近でもあり、それを確認した洗夜は召喚器を眉間につけた。

「それならば問題無いか……アイテル！」

洗夜はアイテルを召喚して身構えた。だが、この時洗夜の頭の中にある疑問が過ぎる。

(エリザベス……何故ヨシツネを選んだ？ ヨシツネは物理に強く、ステータスも高い上級のペルソナ。だが、俺のアイテルには物理無効がある。基本的に物理技しか無いヨシツネでは俺のアイテルを倒せない……)

基本的に物理技しかないヨシツネからすれば、物理無効を持つアイテルとは相性が悪い。

しかし、ペルソナは心の力である為、使い手によっては得られるスキルも変わるので絶対にそうだと言えない。

「考え事ですか？ 余裕なのですね……ヨシツネ！」

「……アイテル！」

洗夜が気付いた時には、ヨシツネを目の前まで接近を許していた。しかし、エリザベスの突然の攻撃に驚きながらも、直ぐにアイテルで迎撃する洗夜。

ヨシツネの刀と、アイテルの腕が互いにぶつかり合い、周囲に金属音が響き渡る。しかも、互いに物理に耐性を持つペルソナ同士だ。

互いにぶつかり合った瞬間に発生した攻撃の余波もかなりのモノであり、余波が空気から伝わり、洗夜とエリザベスはそれを黙って受け止めた。

「最強クラスのペルソナ使いの名は、今だに伊達では無いか」

「逆に私は残念でなりません。まさか、今のが全力なのでしようか？」

「——言ってる」

まだまだ余裕なのをエリザベスにアピールする洗夜。互いの力を自覚しているつもりであり、双方共に無駄口をしながらも相手から目を逸らす事はない。

実際、互いに先程の余波を受けても眉一つ動かさない。その様子を見る限り、洗夜とエリザベスの実力の高さが分かるが、エリザベスは小さくクスクスと笑い出す。

「フッフ、余裕があるのは構いませんが……この戦い、負けるのは貴方様でございます……洗夜様」

「……理由を聞いても良いか？」

エリザベスが喋り終わつたと同時に放たれた威圧感に、危うく呑まれそうになる洗夜。しかし、何とか踏ん張るとエリザベスに自分が負ける理由を問い掛ける。

「直ぐに御理解頂ける事でしょう……それと、大事な事なのでもう一度言いますが、今の貴方様では私に勝てません」

エリザベスがそう告げた瞬間に、ヨシツネは一瞬で洗夜に刀を向け、再度接近する。

「……お前こそそんな攻撃ばかりでどうやって勝つつもりだ？　いくら互いに物理に強いとは言え、基本、物理技しかないヨシツネではアイトルには勝てない。それは、お前ならば分かる筈だ、なのに何故ヨシツネを選んだ？　他のスキルでも得ているのか？」

先程と同じ様に、話が終わるか終わらないかと言つた瞬間にエリザベスは洗夜に攻撃を仕掛け、それに対して洗夜も素早く対応し、再びアイトルで迎え撃ち、エリザベスに向かってそう言い放つ。

だが、洗夜の言葉にエリザベスは先程とは違い、一切笑わずに真剣な表情で口を開いた。

「いえ、特に変わったスキルを得てはおりません。……ですが、だからこそ“今の”貴方には十分な相手だと思われれます」

先程から“今の”と言う言葉を強調するエリザベスに、洗夜は一瞬違和感を感じたが、だからと言ってここまで見下されれば、いくら洗夜と言えども面白くはなく、行動に出た。

「アイテルッ！」

洗夜の掛け声にアイテルは、腕を振り上げながらヨシツネの目の前まで接近し、腕をヨシツネの顔面に翳す。

「……ヨシツネ」

エリザベスの言葉に、ヨシツネは刀でアイテルの腕を弾き、アイテルの顔面目掛けて突きを放つ。

「——アイテルッ！」

ヨシツネの攻撃に洗夜は肝を冷やすが、紙一重の所でアイテルは顔を反らし、ヨシツネの攻撃はアイテルの仮面を掠り、一瞬の隙が出来る。

それを逃さず、今度はアイテルが腕を横に薙ぎ払う様に振るうと、その辺りを中心に衝撃波が生れ、そのままヨシツネを捕らえたと思われた。が……。

「甘々でございませす」

アイテルの攻撃にヨシツネは巻き込まれず、捕らえたと思つたヨシツネはアイテルの背後に回り込む。

だが、その直後にアイテルから荒々しい雷が放電された。

「ヨシツネー！」

『電撃ガードキル＋ジオダイン』

エリザベスの言葉と同時に、アイテルから雷が放たれた。だが、ヨシツネに直撃するまでには至らなかつたが、片足が焼き焦げている事から無傷ではすまなかつたようだ。

そのままヨシツネは大きく飛んでアイテルから距離を取り始める。

「まだまだ……！」

だが洗夜は攻撃を休めず、アイテルは腕を振り上げながら再度接近し、ヨシツネ目掛けて力を放った。

だが、ヨシツネはボックスステップして回避し、アイテルの攻撃は謎の空間の中に消えて行った。……だが、その直後にアイテルから再び雷が溢れ出した時、フラッシュが発生する。

『ジオダイン』

アイテルを中心に辺り一面を雷がヨシツネごと包み込んだが、雷の壁と化した雷の中からヨシツネは出てきた。

しかし、ヨシツネが纏っていた鎧は全身焦げている。

「くっ………しぶとい！」

「……もう終わりで宜しいですか？」

エリザベスという強敵との戦いだからか、洗夜は息が切れ頭痛も起こってきた。そろそろ時間切れかもしれない。

しかし、まだまだ余裕と言わんばかりのエリザベスに洗夜は睨み付けている。

「アイテルッ！」

洗夜の声に応え、アイテルは今度は両腕から電気を放電させ始めた。先程とは比べる事も出来ない程に大きな力だ。

「アイテルの力は強大だ……」

「……存じて居ります」

洗夜の言葉にエリザベスは、だから何だと言わんばかりの反応を示す。その反応を見た洗夜だが、これ以上エリザベスの挑発に乗る気は無くそのままの状態でアイテルに指示を出した。

「……アイテルッ！」

『真理の雷』

電撃属性最大の技を放とうとした瞬間、アイテルが纏う雷が急激に小さくなる。

『ジオダイン』

「ッ!?!」

轟音と共にアイテルが放った雷は、的確にヨシツネとエリザベスを捉えてそのまま直撃し、アイテルの電撃により辺りには煙りが立ち込め、周囲の地面にも電気が多少の放電をしていた。

だが、洗夜の表情は晴れない。

(なんだ……何故、真理の雷が放たれなかった？ 急激に力が減った様な……)

今までこんな事が起こった事はなく、洗夜にとっても初めての経験。一体、何が起こったのだと洗夜が思っていると、辺りの煙が晴れ始めた。

「……偶然なのか？」

「何がですか？」

声が聞こえた方を洗夜が視線を送ると、そこには煙りの中から出て来るエリザベスの姿があつた。

その様子を見る限り、エリザベスにダメージは殆ど無い様子。

「殆どダメージ無しか……相変わらずだ」

最強の電撃技である『真理の雷』ではなかったが、ペルソナの攻撃を食らってもニコニコしているエリザベスに洗夜は驚きを通り越して呆れた。

だが、そんな様子の洗夜にエリザベスは自分の姿を見ながら、洗夜へ問い掛けた。

「……何故、真理の雷ではなく、ジオダインを使ったのですか？」

「偶然だ……別に大した意味は無い。——アイテル！」

洗夜自身は偶然だと思ひ込む事にしたが、エリザベスの真剣な目を見た瞬間、まるで自分の全てを見据えられている様な感覚に襲われた。

洗夜はその感覚から恐怖に吞まれそうになるが、洗夜は顔を振って恐怖を払い退ける。

そして、エリザベスの目から放たれる感覚を止める為にアイテルを動かす。

「まだ、お気づきにならないのですね。それならば致し方ありません……ヨシツネ！」

『空間殺法！』

一瞬、何かを呟いたエリザベスだが、その言葉は小さかった為洗夜には届かなく、アイテルを迎撃させる為にヨシツネを前に出す。

そしてアイテルとヨシツネは互いに技を出してぶつかり合う。互

いの腕と刀が空間全体を襲う程の撃をぶつけ合い、その衝撃に洗夜とエリザベスも思わず手で顔を隠した。

「グッ！ 流石にやる……！」

二年と言う年月もあれば、誰でも力は上がる。それはエリザベスも例外では無く、エリザベスの攻撃は二年前よりも威力が上がっていた。

しかし、それに気付かない洗夜では無い。 アイテルは物理無効を持つペルソナだ。

本来ならば、刀があればエリザベスに接近戦を挑むのだが、この戦いは武器無しの純粋なペルソナ使いとしての闘い。

ペルソナの力と能力、そして、それを扱うペルソナ使いの力や器、それと技量や経験等が闘いの鍵となる。

そして、今回の闘いでは物理無効を持ち、尚且つ最も洗夜自身に近いペルソナであり、長い期間を共に闘い抜いたアイテルを扱う洗夜の方が有利ともとれる。……と、洗夜自身もそう思っていたのだが。

「……」

(まさか、此処で押し返して来るのか……！)

先程まで良い勝負をしていたのだが、段々とヨシツネの攻撃がアイテルを押し始め、そのまま洗夜に迫り続ける。

その様子に対してエリザベスは、相も変わらぬ冷静な表情で様子を見ていた。そして、ヨシツネの攻撃がアイテルの腕を弾いた。

(!?——だが、アイテルは物理無効持ち。ダメージは防げる)

物理無効があるなら、ダメージは防げると、その考えが、洗夜が生きて来た中で最大の油断であった。

そんな洗夜の様子に気付いたのか、エリザベスはこの闘いの中で殆ど変えなかった表情を少し、悲しむ様な表情をして、ヨシツネに指示を出した。

「……ヨシツネ」

『八艘跳び！』

ヨシツネが高速で飛び回り洗夜を襲うが、それに対しアイテルが前に出て、そのまま物理技を全て防ぐ。……筈だった。

「ガアッ——!!」

ヨシツネの攻撃をアイテルは確かに防いだが全てでは無く、残りの攻撃を洗夜は受け、その場から少し飛ばされる。

そして、洗夜は床に身体が接触する前に受け身を取ると視線をアイテルへと向け、信じられないモノを見る様な目でアイテルを見上げた。

「一体……何が……」

自分とアイテルに何が起こったのか、分からない様子の洗夜だが、その洗夜の疑問に答えを示す為にエリザベスが口を開く。

「本来ならば真理の雷だった筈がジオダインを……そして、物理無効にも関わらず物理技でダメージを受けた。……この二点の事から、貴方様の身に何が起こっているのか、お分かりになられる筈でございます」

「まさか……!」

エリザベスの言葉に洗夜の頭にある言葉が過ぎる。しかし、洗夜にとってその言葉は認めたくない。認める訳には行かないモノだった。

その事は、エリザベス自身も分かっている事。だが、だからと言ってここで目を逸らせばいつか必ず絶対に洗夜を危険に曝す時が来る。

それを理解しているエリザベスは、その場で膝を着いている洗夜へと語り掛けた

「もう、此処まで話せば御自分でも理解している筈です。今の貴方様に起きているのはペルソナ能力の……“弱体化”です」

「ッ!……“弱体化”?」

「はい。今思えば出会った時に気付くべきでした。貴方様は二年前の闘いで深く傷付いております。貴方様自身が、それ程まで傷付いているのです。ペルソナに影響が出ない訳がございません。……何か、影響が出ていたのではありませんか?」

「影響……!?!」

エリザベスの言葉に洗夜は、過去の戦いから記憶を思いだした。

完二の救出の時に戦った大型シャドウ戦。今思い出せば、いくら大型シャドウが相手とはいえそこまで疲労する事はないが、やけにあの

時は疲労を覚えた。

しかし、だからと言って洗夜はそれを認める事は出来なかった。「だが、ペルソナ達には何も起きてはいない……良く見ろ！ アイテルには何処も変化はない！」

そう言つて洗夜は、自らのペルソナのアイテルを見ながらエリザベスに反論するのだが、エリザベスは昔の洗夜ならば絶対に見せない姿で叫んでいる洗夜を見て、悲しそうな表情でアイテルに視線を移す。

「本当にそうでしょうか？」

「な、何がだ……！」

「良くアイテルを御覧になって下さい。一切、何にも目を逸らさずに」
エリザベスの言葉に洗夜は良く分からなかったが、言う通りにアイテルに視線を移した……その瞬間、ピキバキとアイテルに亀裂が走つた。

「ッ!？」

アイテルのの身体に亀裂は徐々に広がり、アイテルの身体全体に亀裂が入った瞬間、アイテルは砕けその姿を見せる。

「ッ!？」

アイテルの姿は変わってしまい、纏っていた物はまるで放浪者の様にボロボロの布切れと化し、今まで共に戦ってきたアイテルの姿は見る影もなかった。

その姿を見た洗夜は両手すらも床に付き、最早、認めるしかまかった。己自身とペルソナの弱体化を……。

「……やはり、無理をしていたのですね。恐らく、貴方様の頭痛も弱体化しているに気付かず力を使っていた為でしょう」

「駄目……だ。俺は……まだ仮面を失う訳には……！　まだ悠達を……！」

既にエリザベスの言葉は洗夜に届いていない。そう言つて洗夜はその場から立ち上がり、フラフラしながら歩き始める。

今の洗夜にはショックが強すぎて、今までの疲労等も一気に出て来た。洗夜自身も、自分が今は何を考えているのかもよく分かっていない。

「……洗夜様」

エリザベスが今まで見た事の無い様な姿の洗夜に心配し声をかけるが……。

「……今日はもう帰らせて貰う」

「しかし……」

「エリザベス……」

洗夜のその声はとても弱弱しいものだった。今にも消えそうな儂い程、故にエリザベスは言葉が出なかった。

「……すまない。だが、考える時間を俺にくれ。悩む時間を……！
悲しむ時間を……！」

「ですが……」

「大丈夫だ……俺は前に進まなければいけない……過去には戻れないんだ……！」

それだけ言うと洗夜は、その空間から去って行く。そして、その場に一人残されたエリザベスは静かに独り言の様に呟いた。

「……過去や未来にも目を背け、他者との繋がりは疎か自分自身まで拒絶する者にペルソナは力は貸しませんよ。……黒き愚者……洗夜様」

エリザベスの言葉を聞く者は誰もいなかった。

▼▼▼

同日

現在：ベルベツトルーム【悠のベルベツトルーム】

「ようこそ、ベルベツトルームへ……」

「君は……」

悠は現在、ベルベツトルームへと来ていた。理由は単純に、イゴールにペルソナの合体を頼むつもりで来たのだが、いつもマーガレットが座っている席の隣にもう一人座っている女性を見つける。

その女性は悠には見覚えがあった。そう、今日、自分の兄である洗夜と食事をしていた女性だった。

「君は……？」

「お初に御目に掛かります。私はエリザベスと申します。鳴上 悠様

でございましたね、お話は主様とお姉様からお聞きして下ります。私
が貴方様のベルベットルームに存在するという事は、貴方様とも何か
しらの運命があると思われれます。以後お見知り置きを……」

「主様は多分イゴールだけど……お姉様は？」

「もちろん、私よ」

そう言つて姉妹揃つてクスクス笑い出すエリザベスとマーガレツ
ト。更にその様子を見て、ヒツヒツヒと笑っているイゴール。

かなり不気味な光景だが、それよりも悠はエリザベスに聞きたい事
があつた。

「エリザベス。君に聞きたい事がある」

「何でございましょうか？」

エリザベスは私は何も知りません、みたいな雰囲気を出しながら首
を傾げる。

「今日、君はステーキハウスで一緒に食事をしてなかつたか？」

「はい、それが何か？」

悠の言葉に首を傾げるエリザベス。それに対して悠は話を続ける。

「あの時、君と一緒にいた人だけど、あの人は——」

「ああ、道を教えて下さつてくれた、あの御優しい殿方の事でございま
すね」

「えっ？」

悠の言葉を遮りながら説明するエリザベスの言葉に今度は悠が首
を傾げた。

「実は、この町に来た時に恥ずかしながら迷子になってしまいました
……」

「エリザベス。新しい町に着いたらまずは地理を調べなさいって、あ
れ程……」

「お姉様その話は後で……話を戻しますが、その時に道を教えて下さ
り、御昼食まで奢つてくれました優しい殿方でございました。彼が何
か？」

「いや……何でもない」

「それでは、御用件をお聞きしましょう」

悠は自分の気のせいと思う事になると、イゴールの言葉に悠は先程の疑問を捨て、ペルソナを合体させる事にした。

END

第十九話：手掛かり

6月6日（月） 晴れ

現在：ジュネス【休憩所（特別捜査本部）】

悠達はシャドウとの戦闘にも戦い馴れた完二から事件について聞く為、ジュネスにある「捜査本部」と言う名の休憩所へと訪れていた。

そして早速、完二から犯人の手掛かりを聞きだそうとしたのだが、当の完二自身は気付いたらテレビの中にいた為、犯人の顔は見えていなかった。

その言葉に、また手掛かりが掴めなかった事で肩を落とす悠達に完二は慌てて何かを思い出し始める。

「えつと……あつ！ 誰かが来たツス！」

「だからそれが犯人だろ？」

「……」

悠の言葉に今度は完二が肩を落とす。完二的に天からのお告げだったが、それを一刀両断された事で更に謎の罪悪感に襲われた完二は、何かを思い出した様にポケットから紙切れを取り出し、悠達に見せた。

「これ！ これ見てくれよ！」

それは見た目はただの紙切れなのだが、その紙切れにはつい最近、放送された番組名が書かれていた。

悠達は完二に詳しく聞くと、何やら自分の周りをコソコソと嗅ぎ回っていた刑事を脅したら勝手に落として何処かに行ってしまったらしい。

それを聞いた陽介は流石にドン引きしてしまった。

「お前、その歳で現役の刑事を脅すなよ……」

「いやいや、脅して無いっスよ……ただ、軽く近寄って何してんだ？ って聞いたら勝手にそれ落として逃げたんスよ」

完二が陽介に誤解を解こうとしている中、悠は紙切れに番組名以外にも何かが書かれている事に気付いた。

「……山野真由美、4月11日。小西早紀、4月12日?」

「何なのその日付? 二人の誕生日?」

「連日でか? それは無いだろう」

紙切れに書かれている謎の日付に気が付いた悠と千枝だが、最初は何の日付か良く分からなかった。

しかし、その答えはその隣に書かれていた。

「……『テレビ報道番組表』?」

そう書かれているのを見た瞬間、悠はある事に気付く。

(確か、その書かれている日付のニュース内容は……山野真由美の不倫報道と山野真由美の殺人に関するインタビュー。それに確か……雪子と完二も……)

「どうしたんすか、先輩?」

「何か気付いた?」

悠の言葉に全員が身を乗り出して来たが、悠は冷静に自分の思った事を口にする。

「これに書かれている二人の日付は、その時のニュース内容が二人に関するモノの時だ。……そして、誘拐された雪子と完二にもこの二人と同じ共通点がある」

「……共通点?」

「……もしかして、テレビ?」

「そう、全員が居なくなる前にテレビで報道されていた……」

「!!!」

その言葉に全員が驚愕した表情で固まった。今まで、山野真由美の事件に関係している女性が犯人のターゲットだとばかり考えていた悠達だったが、完二が誘拐された事により事態は大きく変わる。

今までいなくなった者達に今度こそ、ちゃんと共通するモノ。それは、テレビに報道されたと言う事だった。

「じゃあ、何? 犯人が標的にしているのって『テレビに報道された人』……?」

「今思えば犯人は雪子の一件が失敗しているのにも関わらず、標的を完二に変えた理由もそれなら頷ける」

「私も事件のニュースにばかり集中していたから、気が付かなかった……」

「じゃあ、何か！ 犯人はテレビに映ったら殺すって事なのか!？」

自分達の推理とは全く違った事によって驚きを隠せないでいる陽介達。しかし、そんな中で悠は更に続けた。

「だけど、マヨナカテレビ以外に犯人が狙う人物が分かるなら俺達の行動もかなり動き易くなる筈だ。……今後からはニュース報道に出て来る人物に注意しよう」

悠の言葉に全員が力強く頷いた。自分達の今までの推理が違っていたとは言え、今回の発見は大きいからだ。

そんな時、今日はいつもより日差しが強いからか雪子が額の汗を拭く為にポケットから黒いハンカチを取り出した事に千枝が気が付いた。

「あれ……雪子そんな黒いハンカチ何か持ってたっけ?」

「ん? 本当だ。天城にしては珍しい気がするな」

基本的に雪子が黒色のハンカチ等を持っていない事を知っている千枝が雪子に問い掛け、陽介も同様にそう呟く。

「え? ああ、このハンカチは少し特別……実はこれ、冨夜さんから貰った物なの」

「……兄さんから?」

恥ずかしそうに雪子は頷くが、悠は雪子と冨夜の接点が分からなかった。思い当たるのは二人が初めて会った時の山野アナの事件現場ぐらいしかない。

「つーか、何で天城先輩が冨夜さんからハンカチを貰ったんすか?」

「なんか地味に羨ましいッス……」

前半だけならばよいのだが、後半の完二の言葉に悠と陽介はさり気なく距離を取り、それに気付いてしまう雪子は苦笑いしながらも話し始めた。

「ほら、千枝には話したよね? 私が雨の日の時に悩みを聞いてくれたって……」

「あ、あつー! その話ね、うん、確かに聞いた聞いた」

「何だよ、その話って……?」

雪子の言葉に千枝は思い出した様に頷くが、聞いている筈のない陽介は意味が全然理解出来ないらしく雪子に言葉の意味を尋ねた。

「あれは確か……私が誘拐される直前って言うか、少し前って言うか……それはいいとして、あの時は河原の近くの休憩所で私が自分について悩んでいた時の事……」

「雪子のシャドウが言っていた事だよな? 確か、自分の決められた将来についての事だった筈」

「うん……今でもたまに思うけど、洗夜さんのお陰でお母さんともちゃんと話し合えたし、千枝にも聞いて貰えてるから……」

雪子は笑顔で千枝を見詰め、その表情を見て千枝は少し照れ臭そうに顔をかいていた。

「いや〜でもあの時は驚いちゃったよ。雪子に肩を貸しながら旅館に入ると、雪子のお母さんや旅館の人達が駆け寄って来てくれたんだけどさ……いきなり雪子——」

『私、女将にはなりたくない……まだ、私自身の意志で何もしてないのに……勝手に決められて女将にはなりたくない……』

「何て言うから叔母さんも旅館の人も、私だって驚いちゃったよ……はは」

苦笑いする千枝を見ながら雪子も思い出したように苦笑いするが、悠達にはリアル過ぎて笑う余裕はない。

「いや、笑える話じゃないっすよ……」

「と言うよりも、その事と兄さんと一体どんな関係が……?」

今一、自分の兄である洗夜と雪子の繋がりが分からない悠。何だかんだで、やっぱり洗夜が雪子等、自分の友人達と接する絵が思い描けない。

「さつき、洗夜さんに話を聞いて貰ったって言ったでしょう? その時に、洗夜さんに話を聞いて貰ったから私はお母さんとちゃんと話が出来たの」

「へえ……なんか意外だな」

雪子の言葉に陽介は相槌を打つように呟くが、当の陽介は洗夜との

繋がりが殆どない為、あまり興味はなさそうだった。

「うん、それに洗夜さんって何か不思議だった……まるで、私の悩みを最初から知っていた見たいに話を聞いてくれたの。あと、ハンカチもその時にね。……あげるって言われちゃって……そのまま貰っちゃった」

そう言つて、頬を赤くして恥ずかしげに言う雪子の言葉を聞き陽介と完二は肩を落とす。

「ベタな台詞と行動なのに、何でそんなに格好良く終わるんだよ……普通だったら、そんなハンカチ要らねえとかだろ……」

「やっぱ、男は顔も良くないと駄目なんスか？ フランケンやゴリラ見たいな顔の人は駄目なんスか！」

「いや、リアルでそんな奴いたら俺でも逃げるって……それより、クソッ！ 男が中身で勝負する時代は終わったのかッ！」

「あんた等の場合は、その中身にも問題がありそうだけどね……」（確かに……）

千枝の言葉に内心でそう思った悠と雪子だが、陽介達のリアクションが面白いのでもう少し眺める事にしたが、そうやって皆が馬鹿やっている時、雪子は前々から思っていた事を口に出す事にした。

「……鳴上くんに聞きたい事があるの」

「何だ……？」

「何か訳あり？」

「……うん。前々から思ってたんだけど、皆は洗夜さんに何か違和感とか感じない？」

雪子の今度に、陽介達は互いに顔を見合わせた。

「今一意味が分からないんだけど……？」

「違和感って何スか？」

雪子の言葉の意味が分からないと言った感じのメンバーだが、弟である悠は静かに頷きながら雪子に聞き返した。

「訳を話してくれないか？」

「う、うん……あのね、前にも話したよね？ 私が自分のシャドウと向き合った時の事……」

「忘れる筈ないよ……私のせいで、雪子や皆を危険に晒しちゃったんだから……」

今は自分の考えなしの行動に反省している様で、千枝は申し訳なきような表情だ。

そんな表情の千枝に悠は助け舟を出した。

「今は大事な仲間だ。……期待している」

「……ハ、ハハ……期待されてるんだ……うん！ 任せといて！」

悠の言葉に千枝は照れくさそうだが、表情はちゃんと笑顔に戻っていた。そんな千枝の姿に雪子も安心し、そのまま話を続けた。

「私達を助けてくれた人の声……今思い出すと、どこことなく冴夜さんの声に似ていた気がするの……」

「兄さんの声に……？」

「うん……意識が朦朧としていたからハッキリとは今まで分からなかったんだけど、時間が経つにつれてそう思う様になってきたの……」

「……けどよ」

雪子の言葉に陽介を中心に悩むようにメンバー達は顔を見合わせる。

その人物が自分達を助けたのだと雪子からは陽介達も聞いてはいるが、当の自分達はその時に腕に気を失っていて助かった今でも実感は持つ事が出来ないのだ。

この中で悠を除いて……。

(あの時……)

悠は頭に手を置かれながらその人物に話し掛けられたことを思い出していた。

あの手の温もり。意識が薄かった故に実感は朧気だったが、雪子の言葉によつて悠の中にもその考えが生まれ始める。

「……あの手……兄さん……？」

あの手の温もりが懐かしく感じた理由。それが正体が実の兄ならば納得できる。

それに悠が疑問に感じた事はそれだけではない。もう一つの疑問、

それはエリザベスと洗夜が会っていた事だ。

エリザベスは偶然を貫いていたが、もし自分達を助けた正体が洗夜ならば話は変わる。

「もしかして……本当に兄さんが……」

「おいおい相棒まで……気持ちには分かっけどよ。その男ってペルソナ使ってたんだろ？ マヨナカテレビにそれらしい人物って映ったか？」

「そりや……覚えがないけどさ」

陽介の言葉に千枝はそう言うが、表情は明らかに迷っていた。親友の言葉も信じたいが、洗夜があの世界を知っている証拠も実際はないのだ。

「つうかよ……そこまで言うんなら先輩達は逆になんかないんすか？」

洗夜さんが事件に関係してそうな事とかよ」

「兄さんが事件に関係……」

完二の言葉に悠は何とか考えようとするが、やはり証拠なんてある筈がなかった。

まさに万事休す、だったその時だ。千枝が恐る恐ると手を上げた。

「あ、あのさ……あくまでも思った事なんだけど……」

「どうしたの千枝？」

「うん……あのさ、私と雪子が初めて洗夜さんと会ったのって山野アナの現場の前だよな？もしかして……それが何か関係あるかなあつて……」

おそらく、千枝自身もあまり自信はないのだろう。苦しいまでに苦笑しながら言っているのであまり期待は出来なかった。そう思ったが……。

「ああ、それなら小西早紀の現場にも洗夜さん、花を添えてあげたらシッスよ？」

「ハアツ!! なんだよそれ!」

「初耳だな……」

まさかの完二の爆弾発言に陽介と悠は食いつき、陽介はそのまま完二に迫った。

「おい詳しく話せ！」

「はあっ!?!……詳しくつつても……ダチが洗夜さん見たらしいんですよ。引越してきばかりの人間なのに変だなと思っただけよ……他にも似たような連中が花添えてたから気にしなかったって……」

完二は出来る限りの事を話すが、その言葉を聞いても陽介は納得できなかつた。

「なんで……花添えたんだ？　確か相棒の兄貴って小西先輩とは会ってねえよな？」

「俺達知る限りはだがな」

悠もそう言うが、確かに洗夜と小西早紀の間に出会いが会ったとは思えなかつた。

「……つでその後、洗夜さんは雪子にも会って、完二くんの家にも行つたって事……だよな？」

「……全部、本当に偶然なのか？」

ここまで偶然が重なるものなのか、悠は疑問に思えて仕方なかつた。

勿論、先入観からの影響で洗夜の行動が全て怪しく思えているのも事実だ。

「洗夜さんと話し出来ないかな……もし、そうなら答えてくれるかも」

雪子は洗夜との対話を思いつくが、悠にはそれが上手くいくとは思えなかつた。

「いや……あの兄さんから答えを出せる気がしない。実際に兄さんが関係していたとしても、俺達にはそれを証明できる物は何もないんだ……」

「まあ、実際……偶然で片付けられるツスからねえ」

完二も洗夜に迫及しに行くことはあまり乗り気ではない様だつた。自分の人形を買ってそれを自分を含めて褒めてくれた人なのだ。証拠のないのにそうするのは完二的には反対なのだ。

そして今まで聞いていた陽介は冷静になろうぜ、的な感じで悠達に話し掛けた。

「つうかよ……さつきも言ったけど、マヨナカテレビに相棒の兄貴が映ってもないだろ？ クマも知らないって言ってたし、相棒の兄貴がペルソナを持つてる筈ないだろ？」

「けど……」

雪子は納得できなさそうだが、自分に切れる手札が既にある事を知覚しており、それ以上は何も言えなかった。

「……今日はこれぐらいにしておくか」

空気がどこかピリピリしだしたのを察知し、悠は今日の話し合いを終わらせる事になると、他のメンバーも複雑な表情をしながらも頷くのだった。……しかし、悠達は気付いていなかった。

この話し合いに勝手に参加していた招かねざる客の存在を……。

『……』

その人物は悠達がいたテーブルの裏側。植物によって隠されている死角から悠達が話し終えるのを確認すると、静かにその場から立ち上がった。

『……本当に馬鹿だなあ』

その言葉は誰にも聞かれることもなく、その人物と共にこの場から姿を消していった。

END

本当の自分くりせ・クマ編く

第二十話：りせ登場！　そして患者の選択……

6月20日（月）晴

現在：堂島宅

エリザベスとの会話から数日、洗夜は悩んでいた。理由は単純に、自分のペルソナ能力の弱体化についてだ。

原因が分かっている。同時に日々日々弱体化が進行している事も。

この所、再び見出した悪夢、犯人について分からないと言う焦り、自分の存在価値と言っても過言では無いペルソナ能力の弱体化の不安。

顔には出さないが、洗夜の中に色々な感情が渦巻いていた。そんな風に洗夜が悩んでいると……。

「お兄ちゃん……？」

「！……どうしたんだ菜々子？」

洗夜は自分が居間で皆とテレビを見ていた事を思い出し、自分を見る菜々子の頭を撫でた。それに対して菜々子は、気持ち良さそうな顔をしながらもテレビを指す。

「りせちゃん出てるよ」

「りせちゃん……？」

「久慈川りせ」だよ……兄さん」

「久慈川りせ……？　あつ……あのアイドルか」

その名を聞いた瞬間、一瞬誰だか良く分からなかった洗夜だが豆腐屋のお婆さんの話を思い出した。

（確か、近々この町に来る予定だったな）

お婆さんからの言葉を思い出し、町が騒がしくなると思い出しながら洗夜は悠の方へ首を向ける。

「それで、その子がどうしたんだ？」

「会見だって。何か、少しの間だけど休業するらしい」

「休業……？」

その言葉を聞いて、洗夜はテレビの方を向くと、りせらしき女の子

とどマナージャーらしき人の数人が座っていた。

また、会見事態は既に終わっていたらしく今から質問の様だ。

『……以上、当プロ「久慈川りせ」休業に関する本人よりのコメントでした。……えー、時間が押しておりますので質問等は手短に……』

進行役の人の言葉に一人の男が手を挙げる。

『失礼、えー《女性ビュウ》の石岡です。静養と言う事は何か体調に問題でも?』

『いえ、別に体を壊してるって訳じゃ……』

『とすると、やっぱり心のほうですか?』

『え……?』

『休業後は親族の家で静養との噂ですが確か稲羽市ですよね! 連続殺人の! 老舗の豆腐店だと聞いてますがそちらを手伝わ——』

記者がそこまで言った瞬間、冨夜はチャンネルを変えた。

「ん? どうしたんだ冨夜?」

チャンネルを変えた事に疑問に思ったのか、堂島が読んでいた新聞を畳んで冨夜へと聞く。

「いや、ただ少しイラつとね……」

「イラつと来たか?」

「ああ、何かいくらアイドルだからって、人の事をまるで物見たいに扱ような様子が……それに、表情が余りにも辛そうだった」

そう言っ冨夜はテーブルに置いてあるお茶を飲み、それを聞いた堂島も少し考える。

「まあ、お前の気持ちも分からなくはないが……芸能界はそんなモノ何だろう……」

「まあ、そういう事なのか……」

冨夜は納得は出来るが、理解したくない自分がいる自分の想いにまだまだ子供だと感じ、心の中で自分の事を笑った。

そして、その会話で何を勘違いしたのか、菜々子は首を傾げながら冨夜に聞いた。

「げいのうかい? りせちゃんの事? お兄ちゃんはアイドルになり

たいの?」

自分と堂島の言葉に真つ直ぐな反応をする菜々子に、洗夜は軽く笑いながら再び菜々子の頭を撫でた。

「ハハ……違う、違う。別にアイドルにはカケラも興味がないな。……まあ、少しは羨ましいとは思うがな」

「何で?」

悠が聞き返すと、悠は笑みを浮かべた。

「……彼女が『二色』だからだ」

笑みを浮かべる洗夜の言葉にその場の全員が首を傾げるのだった。

▼▼▼

6月21日(火)曇↓雨

現在：商店街の豆腐屋

昨日のりせの会見のニュースから翌日。洗夜はバイト先の豆腐屋に来ていた。

実はあのニュースの後、洗夜の携帯に豆腐屋のお婆さんから連絡がきた、本来ならば休みの筈の今日の午後に、誰にも言わずにお店に来て欲しいとの事。

詳しい事はその時に話すと言われた為、洗夜は何も知らずに此処にいる。

「お婆さん、何かありましたか?」

そう言いながら店の中に入った洗夜を待っていたのは椅子に座っているお婆さんの姿。

そして、お婆さんは洗夜に気付き椅子から立ち上がる。

「あら、洗夜さん。ごめんなさいね、お休みの日に突然お呼び出しちゃって……」

「まあ、俺は何も問題無いのですが……何かありましたか?」

何か問題が発生したのではないのかと心配していた洗夜だが……。「いやね、実は洗夜さんに駅まで迎えに行ってもらいたい子がいるのよ」

「迎えに……? 俺は構いませんけど、一体誰を迎えに行けば良いんですか?」

迎えに行くのは構わないが、迎えに行く相手が分からなければどうする事も出来ない。そう思い、洗夜はお婆さんに聞くのだが……。

▼▼▼
現在：稲羽駅

「見れば分かると言われてもな……」

そう呟きながら洗夜はバイクを駅前で止め、それらしい人物が来るのを待っていた。

あの後、お婆さんから言われた言葉は……。

『見たら直ぐに分かるわ。連絡もしているから安心して』

……と、ニコニコ笑いながらそう言ったお婆さんの言葉により、洗夜は駅前で待ち続けているが、それらしい人物は今だに姿を見ない。

基本的に此処は田舎町、いくら駅とは言っても人の出入りは少なく、出て来る人は数える程度しかない。現に、今も駅から出て来たのはスーツ姿の男性が三人と、サングラスっぽい眼鏡をかけ、帽子を深く被った女の子。

その他にも数人いたが、それらしい人物は居ない。

(キヤリー持ちじゃないと言っていた。だからそのままバイクで来たんだが……)

洗夜が退屈そうに自分のバイクを弄っていた時だった。

「……あの〜」

「ん？……何か？」

誰かに声をかけられた洗夜が後ろを振り向くと、そこには先程駅から出て来た帽子を深く被り、サングラスを付けている少女がいた。

その少女は最初は戸惑った感じだったが、意を決した様なそぶりをし、静かに口を開いた。

「あ、あの……鳴上洗夜さん……ですか？　商店街の豆腐屋さんでバイトをしている……？」

「確かに俺がその洗夜だ。君は……」

何故、見ず知らずの少女が自分の名前を知っているのか疑問に思った洗夜だが、該当する人物がすぐに思いつくことが出来た。

同時にその少女は、自分が話し掛けた相手が洗夜だと分かると安心

した様な感じで口を開く。

「おばあちゃんから話を聞いてませんか？ 駅に迎えに行つて欲しい人が要るとかって？」

「おばあちゃん……？ それじゃあ、迎えに行つて欲しいのはお孫さんだったのか……」

少女のその言葉を聞いた冴夜は、少し疑問に感じたが、あの天下のアイドルが記者会見の翌日に稲羽に来るとは思えなかった。

更に言えば事前通りキャリアも持つておらず、手軽なハンドバッグ呑みを持つている事もりせじゃないという判断が出来た。

そして、この少女がその目的の人物だと言う事が分かり、その少女を乗せて豆腐屋へと向かい始めた。



現在：道路

冴夜は先程の少女をバイクに乗せて豆腐屋へと向かつており、暫く走っているとその少女が口を開いた。

「あ、あの……鳴上さん」

「冴夜で構わない。鳴上だと……まあ、言いくいだろうか？」

「えっ？ じ、じゃあ冴夜さんで……」

「ああ、それで構わない。……で、何かあったか？」

安全運転の為に後ろを見る事が出来ない冴夜だが、その少女が困惑した様子な感じなのは分かった。

「その……私がこう言うのも何ですけど……何とも思わないんですか？」

「……何をだ？」

今一意味が分からない冴夜は、周りと後ろに注意しながら少女の言葉に集中するのだが……。

「いや、だって……私“久慈川りせ”ですよ？」

「へえ……そうなのか。久慈川りせ、か……って、なっ！」

その少女“久慈川りせ”の言葉に驚いた冴夜は、一旦バイクを道路の端に止めた。

「久慈川りせ？ 本当に……？ いや、そーいや孫だつて……だが

……」

信じられない洗夜は混乱してしまい、驚いた表情のままでりせの事を見るが、りせも洗夜と同じ様な表情で洗夜の事を見ていた。

「気付いてなかったんですか!? 私、てっきりおばあちゃんから聞いていたのだとばかり……」

「確かに君がお孫さんなのは聞いていたが、誰をとはいわれていない。簡単に見れば分かるとしたか……それに記者会見は昨日だろ?」

「そんなの、後始末は基本的にマネージャーとかがやってくれるもん。だから、別に可笑しい事じゃないですよ。逆に洗夜さんが私に気付いてなかった事に驚きです」

「いや、その、俺は余り芸能人やアイドルには興味が無くてな……」

アイドルのりせに対して、自分は失礼な事をしたんじゃないのかと思ひ、洗夜は少し冷や汗をかきながら困った様子だ。

すると、それを見たりせは、少しイタズラを思い付いた子供の様な表情をし……。

「グスン……いくら、アイドルに興味が無いからって、女の子に向かってそんな風に言いますか?……グスングスン」

「えっ!? いやっ!? そのっ!」

昨日の記者会見で洗夜は、理由は知らないがりせが休業する事を知った。その為、休業目的で来たアイドルを傷付ける様な真似はしたくない洗夜。

だが流石はりせであり、本気の泣き演技に本気で焦りながらどうかしようとする洗夜だが……。

「ふふ、アハハハハ! もう、洗夜さん焦り過ぎだよ。大丈夫、私悲しんでないよ!」

「……謀ったな」

りせの態度が嘘泣きと言う事が分かり、洗夜は安心と同時に本気で悩んだ自分が恥ずかしく思えた。りせはドラマもやっている為に演技が上手く、ハッキリ言って洒落ではない。

そして焦りから解放された洗夜は、前にエリザベスにやった時の様にりせのオデコに指を押し付け、手加減しながらグリグリする。

「洒落にならん！ こっちは真面目に焦ったんだぞ！ そんな事を考えるのは、この頭か？ この頭なのか？」

「うわわわくく！ ご、ごめんなさく！」

りせが慌てた様子で、洗夜は指を放すが、やられたりせは頬を膨らませて洗夜に抗議した。

「洗夜さん大人げないですよ！ 軽い冗談じゃないですか。もう、オデコに指をグリグリされたのは初めてです……」

「君の場合は演技が冗談の領域を超えているからだ。それに、今はカメラも何も無い。君は……『りせちー』だっけ？……まあ、それは良いとしてだが、今の君は久慈川りせだ。だから、何も問題は無い」

そう言いながらも内心では少しビク付いていた洗夜だが、りせはそんな洗夜の言葉に驚いた表情をしていた。

「りせちーじゃなく、久慈川りせ……？」

「……？ 少なくとも今は休業中だろ。だからそうなんじゃないのか……？」

「……普通の人は、そんな風に割り切れないですよ。プライベートの時だって、皆が見ているのはりせちーとしての私。誰も本当の私を見てくれない……」

そう呟くりせの姿は、先程洗夜にイタズラを仕掛けた様な姿では無く、何処か悲しく、そして弱々しく見えた。

その姿を見た洗夜は雪子や完二の時の様にやはり無視できず、和えてそんなりせに背中を向けたまま口を開いた。

「……俺はアイドルじゃないし、君自身でも無いから君の苦しみを全て理解して上げる事は出来ない」

「……」

洗夜の言葉にりせは、少し表情を暗くしながらも黙って聞いていた。

「だが、これだけは言える……君は君だろ？」

「……」

「確かにアイドルと言う職柄上、皆はテレビ等に映るりせちーとしての君を本当の君としてみるだろう。だが、君の家族等と言った人は親

しい人達は恐らく、りせちーとしての君を本当の君としては見ないだろう」

「でも、それじゃあ本当の私って一体……」

洗夜の言葉に先程よりは楽になった感じのりせだが、全てを受け入れる事は出来ない様でりせは、再び顔を下に向けてしまう。

それに対し洗夜は……。

「君の言う、本当の自分と言うのは俺には分からないが……それでも、君が本当の自分を求めるなら俺から言える事はこれぐらいだ……」

「……何ですか？」

「君は一色じゃない……」

「一色じゃない……？」

洗夜の言葉にりせは、今一良く分からなかったらしいが、その顔には笑顔が生まれ始めた。

「……洗夜さん。洗夜さんの今の言葉の意味はまだ私には分からないけど、気持ち少し楽に慣れた気がするの……不思議、意味は分かかってないのに、こんなにも気持ちが落ち着くなんて」

「初対面の俺に対して隙を見せすぎじゃないか？俺が悪い人だったらどうする？」

先程の仕返しで軽い冗談で言った洗夜に、りせは満面の笑みで返した。

「大丈夫！だって私、人を見る目はあるもん！」

「じゃあ俺は……そんな君の才能を嘘には出来ないな」

そう言っつて洗夜とりせは互いに笑いながら再びバイクを走らせ、そのまま豆腐屋へと向かうのだった。



同日

現在：堂島宅

悠は自室で悩んでいた。頭から離れなれないのは兄の事だ。

兄である洗夜がテレビの世界、強いてはこの事件に関係しているのかどうかだ。

(天城はそう思っている……)

雪子の言葉を悠は思い出す。自分は意識がなかったが、雪子の言葉によって悠はあれが兄であった気が強くなった。

「……どうなんだ」

気のせいだと思い、この悩みの巡回から解放を選ぶか。

やはり気になり、本当か嘘かも分からない疑問を兄へ問うか。

選択を己で問う中、悠の中である記憶が蘇る。洗夜が一人暮らししていた高校から帰って来た二年前の事だ。

『兄……さん?』

『……悠か』

生気がない兄の顔。何があったか尋ねても決まって答えは一つだけ。

『なんでもない……何もなかったんだ……何も……』
「!」

何故、今に思い出したのかが分からない。

しかしこれは悠にとっては大きな記憶であり、この選択は大きな分かれ道の一つだ。そして、悠はやがて選択した。

「やはり気になる……」

悠は立ち上がり、洗夜の部屋へと向かった。



悠は兄の部屋の前に立ち、扉を叩いた。

「……」

しかし、反応はない。悠は何回か叩いてみたがやはり反応はなかった。

「……いない」

悠は扉を開けたがやはり洗夜はいなかった。このまま諦めるのも良いが、無断に入るのにも勇気があるだろう。

だが、今の悠の勇気ではそれは可能と言える事であり、悠は多少の罪悪感を胸に中へと入る。

「……兄さんの匂いだ」

部屋に入った悠の第一声は無意識に放ったその言葉。どんな匂いは説明できないが、兄の匂いだとは悠は直感的に言える。

(何かあるのか……)

入っては見たものの、実際に部屋に何かがあるのかは悠にも分からない。最悪、ありもしない物を自分の妄想だけを根拠に探すことになる。

机、押し入れ、本棚や棚。色々と探す場所は多くある。

(どうするか……)

一応は後ろめたい事だと思っっているらしく、静寂の中の部屋で悠の鼓動が早くなる。今にも兄が帰ってくるのではないかと思えてならない程に。

既に迷う時間はない。悠は直感的に場所を選んだ。

「……本棚か」

やはり探し物といえれば本棚を調べるだろう。本に何か挟んでいるかも、色々と発想を浮かべながら悠は洗夜の本棚を調べ始めた。

(漫画……辞書……辞典……参考書……小説……)

何を見ても平凡なものしか本棚にはなかった。これが普通の本棚の姿であり、悠の方が異常を見つけようとしているのだから難易度は遥かに高い。

悠は色々と見てみたが、本に異変はない。ケース入りの辞典も何冊かはあるが以外にも数は多い方だ。手早くしなければ洗夜が帰ってくるかもしれない。

(……)

一冊、一冊、開ける時間が勿体ない。手に持って重さで判断するしかない。ここに何もなければ他の場所を探すためにも無駄な時間は省きたい。

そんな事を思いながら悠が辞典の半分調べた時だ。とある時点のケースを持った悠の表情が変わる。

(……軽い?)

そのケースだけ辞典とは思えない軽さだった。悠は反射的にケースを開けると、中に入っていたのは黒と白のノートが入っていた。辞

典ではなかったのだ。

「なんだこれ……」

奇妙な二冊のノート。再び悠は勇気を試されるが、迷いなく彼はノートを開いた。……黒いノートの方を。

『テレビの世界・基本的に霧に覆われており、視界は悪い。長居すると体調に影響を及ぼす等、影時間、タルタロスのように人が本来は存在してはいけない世界だと思われる』

『シャドウ……この霧の世界の住人。他者の抑圧された内面と言われている、ニユクスとの関係性は不明。習性もタルタロスのシャドウは違い、謎多し。更に調べる必要あり』

(!?……これは……テレビの世界……!)

そこにはテレビの世界、そしてシャドウについて詳しく書かれていた。今まで悠達が戦ってきたシャドウは勿論、そして陽介達の大形シャドウについてもだ。

悠は急いで白いノートを開くと、そこには事件に詳しく記されていた。

『山野 真由美・小西 早紀・天城 雪子。三名が被害に遭っている。事件関係者、その中で女性だけ狙われている?……(メディアに関係があるのか?)』

『巽 完二がテレビの世界に入れられた。女性だけが標的ではない。マヨナカテレビ、メディアに事前に映っていた。だが、あの完二を何故、誘拐できた? (犯人もペルソナ使い? 別の存在?)』

調べている内容の中、時折、赤ペン等で洗夜の考えが書かれていた。しかしこれを見る限り、兄が事件を追っていた事実は分かった。犯人としての関係者としてじゃないのが何よりの収穫。ありもしない不安からはまずは解放される。

思わず、肩の力が抜けてしまったのだろう。悠の手から白いノートが落ちてしまった。

(……あっ)

その場に落ちると思ったが、角にぶつかって部屋の扉にまでいってしまった。悠はすぐに拾うとして手を伸ばしたが、その手を途中で止

めた。

「……………」

その場で止まり、沈黙のまま固まる悠。そんな姿にそれを見ている人物が口を開いた。

「拾わないのか……………悠？」

「兄さん……………」

無表情で自分を見つめる冴夜の姿に、悠は息を呑んだ。

END

第二十一話：一つの真実の序章

同日

現在：堂島宅

「兄さん……」

悠はそれしか言葉が出なかった。先程までいなかった筈の兄が帰宅しており、何事もない様な表情で見詰めているからだ。

同時に動く事も出来ず悠がそのまましていると、やがて洗夜の方が動き出し、足下に落ちている白いノートを拾い上げた。

「……見つかったか」

白いのノートの中を見ながら洗夜はそう呟くと、悠の隣の押し入れに向かった。

「驚きはしない。いつかはこうなると思っていた……だが、こんなにも早くお前にバレるとは思わなかったぞ」

洗夜は押し入れを開けると何やら取り出そうと両手で何かを掴み、それを取り出した。

「……なにそれ？」

洗夜が取り出した物に悠は呆気になったが、しかしそれは無理もないだろう。押入れから出した物、それは「メートルはあるであろう緑色の巨大な顔だけの怪物の”人形”」だったのだから。

「昔、応募者全員サービスで貰えたゲームのキャラクターだ。だがただの人形じゃない……こうやって眼球を指すと……」

洗夜が人形の眼球を指でぶつ指すと、まるで叫び声でも上げるかのように人形は口を大きく開き、その中から色々と物が飛び出してきた。

「こんな風に鞆の役割にもなる。……って待て、なんで知らない？

悠、お前はここからその二冊のノートを出した筈だろ？」

「いや……ノートは本棚の辞典のケースに入っていた……」

「なに……？」

悠の言葉に洗夜の表情が変わる。信じられないようだと言った感じだ。

ここで悠も何か言えれば良かったのだが今の悠は洗夜のノートの中身、そして兄の登場に混乱しており、何故に兄がこんなにも普通に会話しているのかもあって、そこまで余力はなかった。

「そんな筈は……俺は万が一の為にこの絶対に触りもしないコレにしまつていたんだが……」

洗夜がそう言って人形の頭を叩いた時だ。人形の口から小さな何かが飛び出した。

「これ……」

「……！」

口から出てきたのは一言で言えば『しおり』だった。本に挟むあの葉だ。

だが、普通の葉ではなく、それはとても輝いていた。まるで宝石の様な白銀細工のしおりに悠は目を奪われたが、洗夜は何か気付いた様に目を開いた。

「……そういう事か」

何かを察したのか洗夜はその葉を拾い、空いている方の手を布団の下に手をつ突っ込むと己のペルソナ全書を取り出してそれに挟んだ。

(マーガレットとエリザベスと同じ本……！)

何度も見ているから悠は一目で分かった。ペルソナを宿す事が可能な本。一つだけ二人と違うのは洗夜のペルソナ全書は黒色という事だ。

だが、悠は黒故に二人の全書とは違う重みと深みを直感的に感じ取る。

(兄さん……本当に……)

悠は兄がペルソナ使いだという事に殆ど確信していると……。

「それで……何か俺に聞きたい事があるんじゃないのか？」

「……!？」

背を向けたままだが、兄からの重き言葉が悠に押し掛かった。

「何もないならそれで終わりだ。……お前にはまだ早過ぎた……それだけの事だ」

洗夜の言葉通り、ここで悠が何も言わなければそこで話は終わるだ

ろう。洗夜も自分からこの事に追及する事はないだろうと分かる。

だが、この兄の存在を乗り越えれば悠は事件ではないが、別の真実の一旦を知ることが出来るだろう。ここが洗夜の件で悠の勇気が試される最後の分岐点。

そして悠はその答えを出すのだった。

「兄さんと……兄さんとペルソナやシャドウ、そして事件について全部だ！」

「……」

悠は正面から受けた。洗夜もその言葉に動きを止めたが、やがて振り返った。

「何から聞きたい……？」

「！」

悠は扉を開いた。事件ではないが、別の真実への扉をだ。

そして悠はすぐに洗夜に聞きたい事を考えた。

- ・ 陽介の影
- ・ 千枝の影
- ・ 雪子の影
- ・ 完二の影
- ・ シャドウ
- ・ テレビの世界
- ・ 事件について
- ・ エリザベスとの関係
- ・ ペルソナ使い

恐らく、全てを聞けるかは分からないが今の悠の伝達力ならばそれは可能かもしれない。

悠は早速、洗夜へ問いかけた。

「陽介達の大型シャドウとの戦いの時、助けてくれたのは兄さん？」

「そうだ。花村戦のマカラカーン。里中 千枝の時の疾風ガードキル。そして天城 雪子のシャドウと完二の時のペルソナ……全て俺がしたことだ」

「……なんで自分達に正体を言わなかった？」

悠にはそれが謎だった。洗夜が自分達に表で協力してくれれば明らかに色々な幅が広がった筈だからだ。

「色々であるが……俺とお前等の力の差が大きすぎた事もある。あまりの力差は時に周りの成長を妨げる。ペルソナの力の源は心の強さにある。宿主が成長しないならば仮面も同じだ。ワイルドも他者との絆により成長する。俺が教えたからではなく、お前自身の意志の行動にこそ意味がある」

「……じゃあ、シャドウについては……シャドウとか、ニユクスっていうのは？」

悠は質問の問いに対する質問は諦めた。疑問は後からいくらでも考えれば良い。今は出来るだけ多くの事を兄から聞き出す事だけを悠は選んだ。

「あの世界のシャドウについては俺もお前等と同じ程度にしか分かっていない。ニユクスについては……今回の事件には関係ない」

洗夜は悠から目を逸らす。表情もどこか暗く感じたが、固い意志に悠は気付いた。

ニユクス、この存在に関してお前に言う事は何もない。……そんな意志を。

「テレビの世界……今回の事件について……」

「あの世界については……昔、似たような世界を体験した事がある。あの世界も人に対する影響力はとても大きかった。……だからこそ、あの世界にも言える事がある。——本来ならば、人が踏み入ってはいけない領域なんだとな」

「似たような世界……？」

本当ならば問いの答えに対し、新たに質問することは避けたかった悠だが、流石に今の言葉は聞き逃さず事は出来ない。

そんな悠に対し、洗夜は小さく一言だけで返答する。

『影時間』……言えるのはこれだけだ」

ニユクス同様、洗夜はそれだけしか言うつもりはない様だ。

「事件について……」

「事件の情報はおまえらの方が詳しいと思うが……犯人については一言

で言えば迷いが無い。……メディアに映り、マヨナカテレビに映った後で間もなく誘拐。証拠も残さない、慎重且つ大胆……悪い意味で迷いが無い奴が一番危険だ」

迷いにも色々ある。犯罪に手を染めようとした時に本当にするのか迷うが、その迷いは最後の砦。思いとどまらえるせる事が出来る最後の理性。

既に二人も死んでいるにも関わらず、続けて迷いなく行っている時点で犯人にそんな迷いはないだろう。

「エリザベスは？」

「あいつは……一言で言えば親友以上の友だな。腐れ縁とでも言った方が良くも知れないが、本当にそれぐらいだ」

どうやらエリザベスについてもそれ程まで詳しく話す気はないらしい。恥ずかしさからか、他の理由があったとしても洗夜の表情は色々と複雑そうだった。

(聞きたい事は……まあ、大体は聞けた)

最低限だが得られた物はやはり大きい。

しかし、それで終わりではない。悠は最後の質問を問い掛けた。

「兄さんの正体」

「ようやく本題か……」

まるで待っていたと言わんばかりに洗夜は堂々としている。どうやら、悠の質問は全部想像通りのモノの様だ。

「俺は……お前より前に覚醒したペルソナ使いだ。……もう五年になる」

「！……じゃあマヨナカテレビは？」

「悠……誰がマヨナカテレビで己と向き合う事がペルソナ覚醒の絶対条件なんて言った？……絶対なんてこの世にない。絶対なんてものはただでさえ少ない人間の知識、それだけの知識に満足して自分の世界に勝手に線引きした奴の常套句だ」

つまり、お前達の常識よりもペルソナの世界は広いと言いたいらしい。

「つまり……」

「俺のペルソナ能力の覚醒は今回の事件とは全くの無関係という事だ。俺は別の事件で覚醒した。——その事件は既に解決したから話すことはないぞ?」

言おうとしている事を先に潰されてしまった悠は別の事を聞くことにした。

「その事件は兄さん一人で?」

「いや……勿論、仲間がいた。もう会う事は出来ないがな」

そう言った洗夜が一瞬だが、机の方を向いたのに悠は気付く。ふと、悠自身も机の方を見ると、それらしいものは三つある写真立てだ。(もしかしてあれが……)

何かあったのかは悠にも分かった。洗夜の表情からは悲しみを感じ取ることができ、仲間と言った者達と何かがあったのだと。

その仲間というのがその写真立てに映る人物達なのだろう。何かがあったとしても、思い出までも変わるわけではない。

「悠……ワイルドには無限の可能性がある」

悠へ背を向け、ペルソナ全書をパラパラとめくりながら洗が話し始めた事で悠も意識を話へと戻した。

「星の数以上にある可能性の中を選び続け、その可能性の中で誰と出会って絆を築くか……それすらも無限の選択肢であり、その選択肢は自身にしか決められない。……だが選んだ答えはやり直す事は決してできず、無限故に選択肢はお前自身にも想像が出来ない答えを示す可能性もある」

「想像の出来ない答え……?」

「ああ……例えば、お前がこの事件の犯人の共犯者になるとかな」「!」

冗談半分なんだろう。楽しそうに洗夜は話すが、聞いた悠自身は思わず息を呑む。

だが、あまり悠は驚いていない自分に気付いていた。無限の可能性ならばそんな結果も必ず選択肢の中にある筈だからだ。

「可能性の選択肢……その答えはワイルドの旅の終わりの中で一つの

結果となつて自身で得る事ができるだろう」

「……兄さんの答えは？」

自分達は違うが、目の前の兄はこの事件同様に非現実的な事件を終わらせている事を悠は思い出す。

ならば、洗夜なりの可能性の答えがある筈なのだ。

しかし、悠の問い掛けに洗夜は窓の外を見上げ、力なく首を横へと振る。

「俺は……何もなかった。何も出来なかったんだ……悠」

「なにも……？」

背を向けたままで言う洗夜の声、その声に悠は今まで聞いた中で悲しみが一番を感じ取ることが出来てしまった。

一体、何があつたのだろう。疑問には思うが悠はそれを口にすることはない。兄が絶対に答えないと分かっているからだ。

「俺は……」利用”してしまっていたんだ。……その結果、俺は仲間達に苦しみの絆を——」

「こうやお兄ちゃくん！ おなかすいた〜！」

洗夜の言葉は二人の最愛の妹、菜々子の一階から来た無邪気な声に遮られてしまった。

そのあまりのタイミングに悠は思わず言葉が出なかったが、洗夜は楽しそうに笑い出した。

「ハッハッハッ！ もうそんな時間か……」

そう言つて洗夜は菜々子の為に夕飯を作りに一階へ行こうとし、それを悠は慌てて呼び止めた。

「待つてくれ兄さん！ 一緒に戦つてはくれないのか!? 兄さんがいるだけでも——」

「悪いが、俺は共に戦う気はないぞ、悠。——その代わり、部屋の中はもう少し見て行つて構わない。まあ、これ以上は面白いものはない筈だな」

洗夜はハッキリとそう言い残し、そのまま部屋を出て行つてしまふ。

「……」

悠は嵐が去った様な感覚に襲われたが、今は自分の出来る事を優先することを選んだ。

地味に高い伝達力のお陰で時間に余裕があり、洗夜の許可もあつて一々、勇気を持って調べる必要はなくなったからだ。

(押し入れは……)

悠は早速だが押し入れに目を向けたが既にそれらしい物は本当になかった。目の前に転がっている悪趣味な人形よりも凄いの期待していただけに悠は少しがっかりした。

(やつぱり机か……)

やはりそこしかなかった。洗夜が向けた写真立て、それが気になった悠だが一応はと引き出しも開けようと試みる。

(空きそうなのは一段目だけか……)

そこはプライバシー故か、一段目以外は鍵が掛かっており開く気配はない。悠は仕方ないと思いながら一段目を開けると、中にあったのは白銀の拳銃が一丁だけに眠っていた。

(拳銃……?)

思わず息を呑みながら悠は拳銃を手にとってみた。

ズツシリとした重みがあり、至る所の装飾もかなり手が込んでいる。アンティークシヨップ等でこれが並んでいれば悠も思わず買いたいと思う程に拳銃の価値は大きくなった。

だが、悠は気付いた。

「実弾は撃てないようになってるのか……」

よくよく観察すると明らかに撃てないように細工されている事に悠は気付いた。だが、そこまでしなければ本物の拳銃と疑わなかっただろう。

それ程までリアルに作られている拳銃を悠は戻し、今度こそ写真立てに手を伸ばした。

(左から見るか……)

悠は順番通りに見る事にし、左の写真立てから手に取って見ると、写真には洗夜と三人の同い年ぐらいの男女が映っていた。

紅い長髪の女子、第一印象は凄いい美人だ。短髪の男子、印象はかつ

こよく見えるが写真からでも分かる雰囲気は凄い。最後の男子はどこか鋭さを感じた。

(この人達が兄さんの仲間だった人?……凄い個性的だ)

自分達も中々に負けてはいないのだが、悠がそんな事に気付く事はなく、二枚目、三枚目と手に持って行った。

活発そうにも見える女子、お調子そうに見える男子、幸薄そうな女子、小さな少年と赤い目が印象的な犬。……そして、金髪のどこか印象に残ってしまった女性がいた。

(不思議な人だ……)

その女性の青い瞳に?まれそうな感じを悠は覚えた中、眼帯をした一人の男性にも目を奪われる。

(誰なんだろう……)

流石に眼帯は印象が強かったが、明らかにこの写真に写る者達の中では年上だろうがそれ以上は何も分からない。

(戻すか……)

悠が写真立てを戻そうとした時だ。留め具が緩かったのか、一つの写真立ての後ろが外れてしまった。

蓋はポトッと落ち、悠は写真だけでもキャッチしようとした時に気付く。写真が二枚落ちた事に。

そして悠が取ったのは二枚目の方だった。

「これは……」

写真に写っていたのは洗夜と片方の目が隠れてしまっている一人の男子。そして、そんな二人に挟まれながらピースしている男子の計三人が写っていた。

「この人は……」

悠は洗夜と真ん中の一人には目もくれず、片目が隠れた男子に目を奪われる。

その男子の存在感に違和感を悠は覚えた。不思議だと、そう思って悠は仕方なかった。その時だ。

「お〜い! 今、帰ったぞ〜!」

「!」

帰宅した堂島の声で悠は我に返り、急いで写真立てを戻す。

最近では堂島に何故か目をつけられている為、あまり怪しい動きは避けたい。悠は洗夜の部屋を出ようとして最後に振り向いて見渡した。全てではなく、寧ろ深まった謎もあるが兄である洗夜の事を悠は少し理解できた気がした……。そう思った時、悠は胸が熱くなるのを感じた。

“ 我は汝……汝は我……汝、新たなる絆を見出したり……絆は即ち、まことを知る一歩なり。汝——”

『築け……黒の繋がり……』 死の絆”を——！』
「っ?! 駄目だ!!」

悠に悪寒が走った。今まで絆を築いた時に感じる事のなかった悪寒と声。気付けば悠はコミュを自らの意志で抑え込んでいた。

(今のは……一体?)

その答えはまだ、悠は知る事が出来なかった。



同日

現在：ベルベットルーム【洗夜】

電車の姿のベルベットルーム。洗夜のベルベットルームには洗夜とエリザベスの二人だけが見詰めあっていた。

「ようこそベルベットルームへ……しかし、残念ながら主様は御席を——」

「何の真似だエリザベス」

洗夜はエリザベスの言葉を遮った。どこか怒りを感じているようにも見える。

「どう……とは?」

エリザベスは身に覚えがない様な素振りをするが、洗夜は気付いていた。

「とぼけるな……何故、あんな真似をした? 俺のノートを本棚に移したのお前だろ?」

「……」

エリザベスは黙ったが、その表情はバツが悪そうな顔だ。

そんなエリザベスの顔を見て冼夜も悲しそうにするが、そのまま首を横へ力なく振った。

「悠の可能性に賭けたとでも言いたいのか？ ……俺の事が悠にバレれば俺が無茶せず、力も使わなければ負担にならないとでも思ったのか？ ……ふざけるな。俺は悠達と行動を共にする気はない ……できない」

「ッ！——何故ですか！ これ以上 ……貴方様がご自身の力に目を背け続ければ仮面達が ……その命が ……」

「 ……ありがとう、エリザベス」

「！」

冼夜の言葉にエリザベスは言葉の続きを奪われる。その冼夜の表情はどこか儂い笑顔だった。そしてエリザベスは同時に悟った。

冼夜が既に覚悟を決めている事を。

「例え俺が悠達と行動を共にしたとしても、俺はあいつ等と一線を引く。あまり意味はない事だ」

「何故 ……何故そこまで ……貴方様の“黒きワイルド”は霧の世界を通じ、日々日々力を増しております。 ……このままでは本当に命が消えてしまいます ……」

冼夜にもエリザベスの気持ちは痛いほどに伝わっていた。だが、それでも首を横にしか振らない。

「エリザベス ……興味が出たのは嘘なんだろう？ 本当は俺の為に残ってくれたんだろう？ すまない ……だが、俺は変わらない。俺の身勝手ですこれ以上、誰かを傷付ける訳にはいかない ……悠達を巻き込む訳にはいかないんだ ……」

「それでも ……私は貴方様が ……貴方にはこれ以上、命を燃やして欲しくは ……ごいません ……！」

「すまない ……だから、もう俺の事は良い。この町を去ってお前の本来の目的の為に生きる。未来を捨てた俺の為じゃなく ……『あいつ』の為に お前の命を ……心を使え」

冼夜はそう言つて意識を現実へと戻して行き、ベルベットルームか

ら消えようとした時だ。

「私は諦めたくはございません……絶対に貴方も……『あの方』も救わせて頂きます。——それが私の意志でございます！」

“また三人で……”

最後にエリザベスのその言葉を聞きながら冴夜は現実へと意識を戻し、ベルベットルームを後にするのだった。

END

第二十二話：久慈川りせ

同日

現在：堂島宅（洗夜自室）

りせを送った日、悠に自分の事を話した夜、洗夜は雨が降り始めた事で映るであろうマヨナカテレビを部屋のテレビで映るのを待っていた。

そしてその予想は当たり、いつもの様に砂嵐と異様な電波音と共にマヨナカテレビは起こると、その映った人物を見て洗夜は目を険しく細めた。

「……アイドルだから、もしかしたらと思ったが……やはり、久慈川りせ」か

眩きながら洗夜は顔は見えないが、マヨナカテレビに映る水着姿の少女を見て、この少女が久慈川りせと確信した。



6月22日（水）晴

現在：久慈川豆腐屋

昨夜のマヨナカテレビの一件、洗夜はりせに注意を払いながらバイトを頑張ろうと思っていたのだが……。

「ねーねー本当はいるんでしょ？ りせちゃんに会わせてよ」

「お客さん。オススメはオカラのドーナツです……」

「いや、そういうのは良いからりせちゃんは？」

「いるって目撃情報があるんだよ！」

「ねえねえ、お兄さんさ……りせちゃんに会わせてくれよ。じゃないと僕、暴れるよ？」

「……ああ？」

「「ひ、ひい……す、すみませんでした!!」」

洗夜が一睨みすると、叫びながら豆腐屋から走って逃げて行くカメラを所持したりせのファン達。豆腐も買わずに一時間近くも居座っている者ばかりが大半だ。

今朝から洗夜が済ませているバイトもいつもの内容ではなく、やつ

ているのはりせ目当ての営業妨害をするファンの対応ばかりだ。

(まさか……)までとはな……)

本音を言えば、りせの人気を甘く見ていた洗夜。酷い奴は、店の前に車を止めようとする始末。そんな奴等の対応すらも先程からしていた洗夜は疲労からの溜息まじりで店内に戻った。

(睨まれただけで逃げるなら最初から来るな……)

基本的には先程の様に洗夜が一睨みすれば大抵は逃げて行き、それでも帰らずに突っかかる者には正面から向かい合う事で対処していた。

勢いで相手を臆させれば良いと思っていたのだろうが、洗夜はそんなどこにでもいる様な連中では臆す事はない。

本気で肝を冷やさせる気ならばストレガのタカヤを5人は連れて来なければならぬだろう。

「ありがとうね、洗夜さん」

戻った洗夜へ椅子に座りながらお婆さんはお礼を言うが、その隣ではりせが申し訳なさそうな表情をしていた。

「洗夜さん……やっぱり、私が出て対応した方が良いんじゃない？あしらうのにも私は慣れてるから……」

「君が良いならばそれで良いんだが……大丈夫なのか、君は休養中だろう？」

「でも、私のせいでお祖母ちゃんや洗夜さんに迷惑を掛けたく無いし……」

そう呟くりせの姿は、口では強い感じにしているが無理をしているのは誰の目から見ても明らかだった。

実は洗夜もりせが無理をしている事を早くから気付いており、自分が誘拐される可能性があるとは本人には悟られない様に注意している。

実際、アイドルに突然そんな事を言う人はいないとは思っているのだが、洗夜はりせのメンタル面に気を配っていた。

「りせ、そんな事を気にしなくて良いの。こういう時ぐらいいは、お祖母

「ちゃん達を頼りなさい」

「俺もお婆さんと同じだ。それに、誰かに頼る事は悪い事じゃない。年下が年上に甘えるのに何の問題がある？」

「お婆あちゃん……洗夜さん……」

「気持ち嬉しい。だが複雑な表情のりせに背を向けて洗夜は、再び店の外に向かおうとした時だ……」

「すみません！ 稲羽署の者ですが……って洗夜か？」

「叔父さん……う？ 珍しいね、バイト先に来るなんて」

「まあ、お前のバイトの様子を見たかったと言うのもあったが、こんな状況だからな……」

指を外へ向ける堂島に合わせ、洗夜も視線を向けると先程までいたファンと野次馬は殆ど消えており、その中心には足立が立っていた。

「はいはい。こんな所で車を止めない！ 行つて、行つて！」

刑事である足立が交通整理をして車を動かさせていた様だ。おそらく、ファンと野次馬達は堂島が蹴散らしたのだろう。

堂島の姿にお婆さんは頷いていた。

「私が呼んだのよ洗夜さん……流石に何かあると大変だから」

「成る程……でも、何でわざわざ叔父さんと足立さんが？ 交通整理とかになんで刑事が……？」

「ん？ まあ、こつちにも色々と事情があるんだ……」

そう言った堂島が一瞬だけ目を逸らしたのを、洗夜は見逃さなかった。

（まさか、警察もりせが誘拐される可能性がある事に気付いたか？

警察側には直斗がいるからあり得ない話ではないが、まだ判断するには早いか……）

別に警察に誘拐される人物を特定されても洗夜は別に困りはしないが、少し動きづらくなる。

誘拐を阻止するには最低でも、誘拐される人物には接触しといった方が良く、下手な行動で警察に怪しまれたり堂島に迷惑を掛ける事は避けたかった。

警察が狙われている人物を護衛し犯人を捕まえてくれるならば苦

労はないのだが……。

「それはさておき、久慈川りせはどうしてる？」

堂島はお婆さんとりせに注意しながら洗夜に耳打ちした。

「いくら叔父さんでも言える訳ないだろ……それとも何か訳あり？」

洗夜の言葉に堂島は頭を抑えながら、あー……と呟いていたが、洗夜に顔を近付けて静かに口を開いた。

「余り詳しくは言えないが訳ありだ……それで、久慈川りせはどうしてる？」

「……今は奥にいるが、話を聞くなら後にした方が良い。……少なくとも、野次馬達が完全に消えるまでは我慢してくれ叔父さん。彼女は態度には出してないが、かなり無理をしている」

「そうか、なら一旦戻るか。……洗夜、何も言わずに黙って聞いてくれ……久慈川りせから目を放すな」

「……その意味は？」

堂島の言葉に洗夜は、意味は理解しているが敢えて知らない振りを決め込んだ。仕事とプライベートをきちんと分ける堂島が洗夜に対してこの様な事を言ったのだ。

現在りせの一番近くにいるのと、洗夜がこの事件の事とは一切の関係がないと思っっているからだ。

「……後でまた来る」

堂島は洗夜の質問には答えずに店を出て行ってしまった。

(警察は完全に気付いている。流石だ、直斗……)

警察に上手く情報を伝えている直斗の動きの早さに、洗夜が純粹に感心していた時だった。

「何だよ……りせちーいないじゃん」

「いるのは、いつもの婆さんとバイトだけ……」

「ガセネタだったか……」

そう言っただけで最後まで粘っていた店の前の野次馬達が去って行き始めた。どうやら、りせが全く姿を見せない事でガセネタと判断した様だ。

「……やっと一段落付ける」

「ご苦労様、 洗夜さん。 奥に入って休憩して下さい」

「ありがとうございます……」

そう言って洗夜はお婆さんからの許可を貰い、休憩の為に奥に入ると、そこではりせが下を見ながら座っていたが洗夜に気付き顔を上げた。

「洗夜さん……」

「ファンと野次馬は帰ったから大丈夫だ。……あと、すまないが少し休ませて貰う」

洗夜は、りせの隣の空いているスペースに座って一息整えとりせは、その疲れた様子の洗夜を見て再び申し訳なさそうな表情になってしまう。

「ごめんなさい……」

「何がだ？」

「だって、私がいるから、お祖母ちゃんや洗夜さんに迷惑掛けて……」
そう言いながら顔を下の方に見続けるりせの様子を見ていた洗夜は、少し気になった事があり、りせにそれを聞く事にした。

「……りせ。一つ聞いて良いか？」

「……別に良いですけど、なんですか？」

「……君は何でアイドルになった？」

「えっ……？」

その言葉にりせは予想外の事だったらしく、面喰らってしまう。

「深く考えなくて良い。ただ、気になっただけだ」

口ではそう言っているが、洗夜は内心では別の目的があった。

それは、りせがここまで本当の自分に付いて強く意識しているのはアイドルの仕事だけではなく、根本的な部分、つまりはアイドルになった時に何かあったのでは無いかと判断したからだ。

「実は……」

洗夜の言葉に、りせは暗い表情をしながらも意を決した様に口を開いた。

「……私、アイドルになる前は学校でイジメられてたんです」

「何だと……」

りせの言葉に洗夜は、表情は冷静を保っているが内心では憤怒していた。

基本的に洗夜はイジメが嫌いだが、イジメられている者にも多少は問題がある場合がある可能性を考える派だが、洗夜はりせに問題があるとは思わなかった。

恐らくは、風花の時と同じパターンだ。

(風花の時もそうだったが、聞いていて良い感じはしない)

「……イジメが続いて何度も嫌になったけど。私、それでも自分を変えたいと思っただけです。そんな時にアイドルのオーディションの合格……イジメは無くなって、知らない子からも話しかけられるようになりました」

(……そういう事か。この子もまた、不器用な子だ)

ここまで聞いた時点で、洗夜はりせが本当の自分について深く考える様になった理由を理解した。理解はしたが、洗夜はりせ自身からの言葉が聞きたかった為に黙ってそのまま話を聞き続ける。

「でも、そんな時に気付いちやっただけです。皆が好きで、ちやほやするのは本当の私じゃない……売る為だけに作られたアイドルの「りせち」何だって」

「……りせ、一つ言わ——」

「すいませーん！」

「……」

りせに何かを伝え様とした洗夜の言葉は、店の方から響き渡る声によつて遮られた。そんなその後の洗夜の間が面白かったのか、りせは思わず吹いてしまう。

「クスッ……！　また私の為に何か言ってくれようとしてくれたんですよね？　ふふふ……また今度に聞かせてね洗夜さん」

そう言つて嬉しそうにりせは店の方へと歩いて行こうとし、洗夜は心配し声をかけた。

「もう、大丈夫なのか？」

「……うん。気持ちの整理が付いたから。それに、お客さんも高校生だし、ファンとかなら上手く聞き流すから大丈夫だよ洗夜さん」

そう言ったりせは、顔を引き締め直して店へ向かう姿に洗夜は今までの事と嘗ての仲間たちの事を思い出してしまった。

(……なんでもアイツ等と被るんだ。花村は順平、完二は明彦、りせは風花、雪子ちゃんと千枝ちゃんは……ゆかりとアイギスとは……似てないか。だが、ワイルドに異常な程に早いペルソナ能力の成長。……悠と『湊』の姿が重なる)

それぞれが心に悩み等を持つ、この町のペルソナ使い達(りせは例外)を洗夜は、かつての仲間達と被って見えてしまった。

そして何と無くだが、洗夜は冷静に昔と今の自分の事を考えると自分は普通の人とは明らかに違く、また色んなモノを失った事に気付く。

(五年前まで、ただの学生だった俺が今ではペルソナと言う力でこんな事をしていいのか……これが俺の運命ならば、自ら切り開くには障害が多過ぎる……)

全ては偶然なのかどうかは今では確かめる術は無い。それについて苦しんでも、支えてくれる仲間は洗夜にはもういないのだ。

全ての始まりは夢で見たイゴールと、忘れ物をして偶然巻き込まれた影時間とタルタロス。何故、自分は高校を決める時に学園都市を選んだのか……。

そして何故、自分は友や大切な人を失ったのにも関わらず仲間達を傷付けたのか。今まで皆を助けた力によって……自分だけ失って行く。

そう思っている内に、洗夜の心の中に色々な感情が生まれて始めた。

「何で俺と『アイツ』だけが……」

あの事件の元凶で両親を失い、最後には自分すらも。そして洗夜もいつも前に出て戦っていた。ストレガのタカヤに目を付けられてからは本当に死ぬとも覚悟した。

(基本的に俺と『アイツ』に守られるだけで、『アイツ』の中にデスが居る事が分かった時の態度……今思えば、アイツ等を守る価値は最初から無かった……！ 桐条の罪……！ ストレガの者達への罪悪感

……！ 何故、俺だけにそれ程の罪が……！ 今も何処かでアイツ等が笑っていると思うと憎くて堪らない……だが、俺が誰も守れなかったのも事実。俺はどうしたらよかつたんだ……」

自分一人では抱えられない程の罪。それに対し、自分は一人でどう向き合えば良いか悩みながら目を血走らせる冴夜。

そんな時だった……。

『そうだ。……それが正しい感情。傷の舐め合いの様な生温い絆じゃない。怒りや憎しみ、決して薄れる事のない感情こそが真の絆……！』

「ッ！——やめろ!!」

冴夜は不意に我に帰れた。危うく戻れなくなりそうな程に危険だった。

「俺は……なんて事を……!」

自分がとんでもない事を考えてしまった事に冴夜は本気で焦り、自分の中の力が悪い意味で強くなっている事に胸を抑えながら苦しんだ。

「認めない……! 認める訳にはいかないんだ……!」

胸を抑えながら冴夜は息を整えると、やがて苦しみは治まると今度は店の方が騒がしくなり始めた。

「!」

「!」

「騒がしいな……」

店の方が騒がしく感じた冴夜は、休憩を終わらせて店の方へと足を進めたが、この時に冴夜は気付かなかった。

テレビの世界から出られる力が宿っている腕が、一瞬だけ禍々しく光った事を……。

そして、堂島宅の自室に置いていたペルソナ白書が光り出し、その中に記されていたペルソナ数体の名が消えた事に……。



店の奥で休憩していた冴夜が店へと戻ってから見たのは自分の弟

である悠、花村、完二がりせに対して何かを話している光景だった。そして、洗夜が奥から出て来た事に悠達も気が付き、視線をこちらに向けた。

「兄さん……？ どうして此処に？」

「……お前に言っただけか？ 俺が此処でバイトをしているってさ。確か、完二は知っていた……よな？」

「うっす。結構近所のオバサン達が噂してるツスよ？。豆腐屋にイケメンのバイトが入ったって」

「ハードル高いな……」

完二の言葉を聞き、自分のいる町が田舎町だと言う事を再度自覚した洗夜。田舎町だけあって、どうやら些細な事でも噂になってしまう。

そんな中、悠達と話していたりせの様子が少しおかしい事に洗夜は気付いた。

「どうしたりせ？ 何か様子が変だぞ……？」

「えっ？ いえ、大丈夫です。何でもありませんから……」

そう言っただけで平常心をよそおっているりせだが、身体が無意識に震えているのを洗夜は見逃さなかった。

洗夜はまさかと思い、悠達に視線を移す。

「……悠、花村、完二。お前等、何かりせに言ったか？」

「えっ!? いや、オレ達は……何も言っていないツスよ……」

「そうそう！ 俺達は別に……」

「？ ……さつき、私が誘拐されるかも知れないから気をつけて……」

「「ッ!」」

「なに……!」

りせの言葉にマズイと言った感じの表情になる悠達。その様子を見た洗夜の表情にも微かに怒りが現れる。

「お前等……休養中の子にそんな事を言ったのか？」

「いや、兄さん……これには訳が……」

「そうそう、深い訳が……」

「問答無用……！」

冨夜の怒気に悠達は疎か、隣にいたりせも驚いていたが、隣で座っていたお婆さんは平気な顔をしていた。

「お前等な……！」

呆れた様子の冨夜が此処まで怒るのも無理はない。冨夜自身はリセが休養中だと言う事もあつて、負担を掛けない様に誘拐については直接は伝えない様に上手く立ち回っていた事が無意味になる。

リセは自分達が思っているよりも心身共に大きく疲労しているのだ。只でさえ、近頃は叔父である堂島が悠達の事を疑いの視線で見ている事もある。そのフォロー等の為、本人達の知らない所で冨夜が動いてもいる。

そんな中での今回の事、本人達は良かれと思つた行動だが言い方が悪かつた。

ハッキリ言つて、精神的な部分で休養している人に向かつて、誘拐されるかも知れないと言われて良い気分になる人なんている訳がない。

「流石に今回は堪忍袋の尾が少し切れたぞ……！」

「マズイ……兄さんが本気で怒ってる。——勇氣ある撤退だ」

「な、何で此処までキレんだよ!? 訳分かんねえよ！」

「いや、普通に考えて俺らの行動つてかなり酷かつたんじゃないスカ? アイドルとは言え、女子に向かつてお前誘拐されるつて結構失礼なんじゃあ……?」

そう言つて冷や汗を全開で流し続ける悠達に冨夜が徐々に悠達に迫ろうとした時だつた……。

流石に悠達が可哀相に思つたのか、リセが冨夜を止めに入る。

「冨夜さん……その辺で許して上げて下さい。伝え方は酷かつたけど、一応私の事を心配してくれたからですし……」

「いや、リセ……そう言うが」

堂島の悠達への疑いの眼差しへのフォローも日々日々、きつくなつている。ちよつとでも良いから冷静な行動をしてもらいたいのが本音だ。

「それに……さっきの人達、もういなくなってますよ……」
「なにッ！」

りせの言葉に冴夜は、急いで店から出るとそこには必死で走って逃げる悠達の後ろ姿が見えた。

その逃げ足は驚異的なスピードで、既に神社のところまで走っており、その様子を見た冴夜は頭を抑えた。成長する場所が違うのだろ……と。

「アイツ等……足の速さは成長しているのに、何故もう少し考えて行動が出来ない？」

「あははは……ハア……」

冴夜の様子に苦笑いするりせだったが、突然ため息を吐いて肩を落とす。

「どうした？」

「いえ、ただ……少し、心を落ち着かせたかったからこの町に来たのに……私もう問題に巻き込まれてるのかな……って」

「……りせ。こんな事しか言えないが、気にするな。そんな事に一々気にしていたらキリがない」

「はは、大丈夫だよ冴夜さん。さっきの人達の言ってた事だって、そんなに気にしてないし……」

そう言うりせだが、相変わらず無理をしている様子だ。そんなりせを見て、冴夜はポケットから紫色の鈴を取り出してりせに手渡し、それを見たりせは首を傾げた。

「冴夜さん……？ コレって？」

「お守りだ……出来れば肌身離さず持つていて欲しい」

実は冴夜が今渡した鈴は昨夜、冴夜がムラサキシキブの力を使って鈴にメディアアラハンやテトラカーン・マカラカーン等を鈴に宿したものの。

こうすれば、もしりせが万が一誘拐されても、テレビの世界での異常な体力消費やシャドウから身を守ってくれる。

SEES時代に出来るだけ皆を守る様にとペルソナ能力を応用し、回数は限られるが物に補助技を宿す芸当が出来るのも冴夜の才能

だろう。

しかし、その言葉を聞いた当の本人のりせは、洗夜の言葉に顔を赤くしてしまう。良く考えれば異性に対して物を渡し、そして肌身離さず持つていて欲しいと言う言葉は結構な誤解を招く言葉だった。

「……………どうしたんだ？」

このタイミングでそんな事に洗夜が気付く筈がなく、首を傾げながらりせに尋ねると、洗夜のそんな様子を見たりせはため息を吐いた。

その様子から、洗夜が恋愛面では鈍い事を理解した様な表情すらしている。

「もう、洗夜さん！　そういう言葉をもしかして、会う女の子全員に言ってるんじゃないですよね!？」

「……………いや、そんなには？」

そういうものの、どんな意味でりせが機嫌を悪くしているのかは分かっていない洗夜は前に菜々子にも同じ事を言っていた気がしたのを思いだし、りせの言葉に頷く。

そしてその結果、その言葉を聞いたりせは頬を膨らませて洗夜にしゃがむ様に合図する。

「洗夜さん。ちよつとしゃがんで下さい！」

「?……………なん——」

「良いから！」

「は、はい……………」

りせの迫力に圧された洗夜は、言われるがままにしゃがみ、洗夜がしゃがんだ事によって洗夜の顔がりせの射程圏内となり、そのままりせは洗夜の頬を引っ張る。

「イタタタッ!？」

何故自分が年下の女の子に頬を引っ張られているのか理解出来ない洗夜にりせは更に力を強くする。

「洗夜さんが悪いんです！　洗夜さんは少し女心を学ぶべきです！」

「な、何故!？」



現在：商店街

「女心が完璧に記されている書物はこの世にあるのか……」

先程、りせに引つ張られて赤くなつた頬を抑えながら洗夜は帰宅の為に商店街を歩いていた。

りせが怒つた理由は、さっき上げた鈴が気に入らなかつたと思つたのだが……。

『気に入らないなら、別のにするか?』

と言つたのだが……。

『えっ? あ、あの……その……こ、これは別です!』

と言われて、別に鈴は気に入っている様子だつた。

(いつか女性で苦勞するな)

何で苦勞するのは分からないが何となくそう思つてしまい、そんな感じで歩いていた洗夜だつたが、すると……。

「何をしているんですか貴方は?」

「ん? 直斗か……やっぱり女難が出てるか」

りせに負けず劣らずのキャラの濃さを備えている直斗の登場に、洗夜は何故か無意識に溜め息を吐いた。また、出会つて直ぐに溜め息を吐かれた直斗はムツとした表情をする。

「なんですかいきなり? それに、僕の性別の事をそう軽々しく口にしないで下さい。僕はその事に対して嫌悪をしていると言つても足りないぐらい何ですから……!」

「……その割に俺にはすぐにバラしたろ?」

「あ、あの時は……! あの時は……仕方ないと思つたんです。既にバレている事を隠すのは嫌なんですよ……」

初めてあつた時の事を思い出したのか、直斗は恥ずかしさで顔を赤くしたり怒りで顔を赤くしたりしている。

やはりバレているとは言え、余り性別の事には触れて欲しくないのだろう。そんな直斗に洗夜は悪かつた悪かつた……と言いながら謝罪をするが、表情は笑つていた。

そして、そんな冴夜の様子に全ては納得してはいない感じの直斗だが、仕方ないと諦めた様にため息を吐き、歩いている冴夜の隣に並んで歩きだした。

「……」

基本的には、余り必要最低限の事や意味のある言葉しか話したがらない冴夜と直斗。こういう場面では何だかんだで波長が合う二人だ。そして暫く歩き、先に沈黙を破ったのは直斗だった。

「……次に狙われるのは、久慈川りせで間違いなさそうですね」

「……やはり気付いていたか。だが、それを俺に言っただけなのか？」

一応、俺は一般人だ」

「確かにそうですが一応、僕は貴方に期待しています……その勘の鋭さや僕とは違う推理力や想像力にね」

そう言っただけで軽く微笑む直斗。一応、直斗は自分の事を一般からの協力者として見ている事を冴夜も理解した。

年下とはいえ、プロの探偵からそこまで評価して貰えると嬉しいものだ。……態度がでかいのがたまに傷だが。

「そりゃどうも……それと豆腐屋に叔父さんと足立さんが来たのはお前の差し金か？」

「ええ、その通りですよ。犯人がファンや野次馬の中に紛れている可能性もなくはないので、刑事である堂島刑事達が豆腐屋に出入りをしていけば、多少は犯人も何かリアクションをしようと思っただけですが……今日来ていたファン達の中には怪しい動作をする人はいませんでした……」

そう言っただけで帽子を被り直す直斗だが、その表情には悔しさ等の感情はない。この程度の事で犯人が尻尾を掴ませるとは、直斗も最初から思っただけでなかった様だ。

「だが、今回は久慈川りせの近くには俺もお婆さんもいる。それに、いくら田舎町の商店街とは言え人通りも少なくはない。この状況下で犯人がどう動くか……」

冴夜は悠達の事もあり、テレビの世界の事の方に偏った調査をして

しまっている様に見えるが、ちゃんと現実世界の何処かにいる犯人についても調査をしている。

しかし、コレと言った手掛かりはまだ見付かっていないのが現状。直斗に協力をして貰えば、もっと成果が上げられるのだが、テレビの世界やペルソナとシャドウ等の非現実的な物に直斗を巻き込みたくはない。

何より、ペルソナやシャドウ等の存在を話しても誰も信用しないだろう。

「どうかしましたか？ いきなり上の空になっていましたが……」

「いや……大丈夫だ。少し疲れた」

「そう言えば、ファンや野次馬の対応に追われてましたね」

「見てたのか……良い趣味してるな。こっちは大変だったんだがな」

「まあ、貴方も久慈川りせが来た事でこうなる事は分かっていたのではありませんか？」

帽子を触りながらクスクスと笑う直斗を見て、洗夜はため息を吐いた。

「全く、人事だと思っただけ言いたい放題だな。……最初に会った時の方が可愛げがあった」

「……何ですかそれ。もう一度、あんな事が起きたら全力で叫びますよ？」

「……叫んだら女の子だってバレルぞ？」

「……」

「……」

互いの言葉に黙り込む洗夜と直斗。なんだかんだでお互いにレベルの低い争いに一步も引かないが、やはり互いに息が合う二人。

「引き分けだな……」

「その様ですね」

だが結局、互いに冗談だと分かっている為に洗夜と直斗は互いに微笑んだ。

そして暫く直斗と会話した後、互いに帰宅した。



現在：堂島宅

本来、家族での夕食と言うのは空気が明るくなる場面が多いだろう。しかし、今日の堂島宅の夕食は空気がピリピリとしていた。

「わー！ おとうふがいっぱいだね！」

空気がピリピリとしている中で、それに気付いていない菜々子は今晚の夕食の献立に目を輝かせている。

今日の献立は、悠と堂島が豆腐を大量に持っていた為、冷やっこ、麻婆豆腐、肉豆腐、ねぎと豆腐の味噌汁等と言った豆腐尽くし。

中々にヘルシーな夕食だが、部屋を包むピリピリとした空気がそれをぶち壊す。

「しっかり食べなさい菜々子。豆腐と言うより、大豆は肌を綺麗にしてくれるからな……」

「はい！」

そう言っただけで明るく話す菜々子だが、洗夜は視線を堂島と悠に向けてと……。

「……上手いな」

「うん……」

(気まずい……)

モクモクと食事を続ける堂島と悠だが、空気がピリピリとしている原因はこの二人だ。

重い空間のその様子を見る限り、堂島と悠の間に何かあったのかが分かる。するとそんな時、堂島の視線が悠を捉えた。

「……悠、久慈川りせと何を話した？」

「……！」

堂島の言葉は何気ないモノだが、悠は堂島の言葉に目を少し大きく開き、軽く冷や汗を流していた。その表情には焦りと言った感情が読み取れる。

そして、流石にマズイと判断した洗夜だが、此処で下手に口を出せば自分も何か関係があると思われる、後々の行動にかなり支障きたすのは想像に容易く、口が出せない。

前々から何処か事件の裏には必ず悠達がいる事に疑問を感じてい

た堂島。恐らくは、洗夜がバイトを終えた後にもう一度豆腐屋に行き、りせに何かを聞いたのだろう。

洗夜が状況を見守る中、その時……。

「お父さんたち、りせちゃんに会ったの!？」

堂島の言葉に、りせのファンである菜々子はパアツと明るいい笑顔を見せる。

「あ、ああ。まあな……」

「一応……会ったかな」

菜々子の笑顔に調子が狂ってしまった堂島と悠。しかし、その二人のいつもと違う様子に気付いた菜々子は表情を暗くした。

「ケンカ……?？」

表情を暗くしながら不安そうに二人を見る菜々子。そんな菜々子の顔を見たら堂島と悠も話を止めるしかなかった。

「はあく違う。大丈夫だから食べなさい……」

そう言って再び食事を始める堂島と悠。堂島家で菜々子の悲しむ顔を見たいと思うのは誰もいないのだから当然の終結だった。

「どういういみ……?？」

菜々子はどう言う事なのか良く分からない様な表情をしていると、そんな菜々子に洗夜は頭を撫でてあげた。

「菜々子は良い子って事だ」

「??？」

そんな感じで菜々子によって、堂島家の一触即発の危機は回避されたのだった。



現在：堂島宅【洗夜の部屋】

「兄さん、今……大丈夫?？」

「良いぞ、入ってこい」

夕飯の後、それぞれが自室に戻って自分の時間を過ごしていた中、悠が洗夜の部屋を訪ねていた。

洗夜もそれに頷き、悠を部屋へと入れた。

「どうした?？」

「いや……久慈川 りせの事で……」

おそらく、今日の出来事の一部。そしてその事で堂島に何かを悟れたかも知れないという事なのだろう。

冨夜は白いノートを書いていたペンの手を止め、悠の方を振り向いた。

「気持ちには分かるが、少し伝えた方を考えるべきだったな。おそらく、叔父さんが豆腐店に行った時にりせが話したんだろう」

「……警察も勘付いている？」

「叔父さん達だつて無能じゃない。それに今の警察には“あいつ”がいるからな」

「あいつ……？」

兄の言葉に引つ掛かり、悠が聞き返すと冨夜も気付いた様に目を開いた。

「そうか、お前はまだ会っていないのか。……白鐘 直斗。警察が雇った探偵だ」

「探偵？」

「ああ、見た目は……ああ……帽子を被った小柄な少年だが、その実力は凄いで。雪子ちゃんや完二の件も最初から事件との関係性に気付いていた程にな」

冨夜の言葉に悠も少し考える素振りをした。

探偵、しかもそこまで勘付いているだけでもかなりの能力を持っている事が想像できる。おそらく近々、自分達も会う事になるだろうとも……。

「あと、直斗の事もそうだが……叔父さんの事も頭には入れとけ。お前等へのマーク、当分は外す事はないぞ？」

「分かつてる。でも……やっぱり、りせの事も気になる」

「りせの事は今週一杯はずつとバイトに入れる事になつてる。四六時中ではないにしろ、俺も近くで護衛できる。……お前等は、もう少しだけ目立たない様に見張ってくれと助かるがな」

流石に何も買わないで辺りをウロウロされるのは店側からしても辛い。現に今日の売り上げはファンや野次馬のせいで一般のお客が

買いづらかったらしく、ハッキリ言って酷かった。

今日ほどではないにしろ、明日もそんな連中ばかりではお婆さんも倒れてしまうかもしれない。故に悠達だけでも慎重になつてくれるだけでも違う。

「大丈夫。今日の事で反省したから策がある」

悠は自信満々の表情で言い切り、その表情の悠に洗夜は頷いたが心の中では……。

(明日も駄目かもしれない)

そう思っていたのだった。



6月28日(火)曇

現在：久慈川豆腐屋

あれから数日、マヨナカテレビに映っているのがりせだという事は分かったが、りせに変わった様子はない。

やはり、人目が多い事もあってか、犯人も動きづらいのかも知れない。

そして、洗夜は今日のバイトは夕方であった為に今、バイクを豆腐屋に走らせていた。

すると店に着いた洗夜が目撃したのは、店の前で高校生ぐらいの少年が一人、りせに話し掛けている光景だった。

一見、またファンが来たのかと思ったが様子が少しおかしく、りせはその少年の話を上手く流している様だが、少年がしつこく食い下がっていた。

りせも流石に辛そうで、表情も曇っており、その様子に気付いた洗夜は急いでバイクを止めて、りせと少年の下へと向かった。

「お客さん、何かお探しですか？」

「な、何だよお前!!」

「洗夜さん……!」

洗夜が来た事で、りせは安心した様子で洗夜の後ろへ隠れたが話を邪魔された少年は洗夜を睨みつけた。まるで親の仇でも見るかのような瞳だが、所詮は感情に任せて相手をビビらせる為だけのもの。

その程度の事で洗夜は怯む気すらなかった。

「此処で働いてる只のバイトです。それで、何をお探でしょうか？」

木綿、絹、焼き、オカラ、ガンモ……他にもありますが？」

「うう……くそッ！」

全く怯まない洗夜の雰囲気には圧されたのか、少年はそのまま走って行ってしまうと、その様子を確認したりせも大きく息を吐いて自分を落ち着かせた。

「洗夜さん……本当にありがとう」

「大丈夫だったか？……しかし、さっきの子は何だったんだ？」

「多分、ファンの子だとは思うんですけど……いきなり、りせ！って呼び捨てにされたり、暴走族って迷惑だよね。とか、誰かの悪口ばかり言っていました。……それにどこか気味が悪かった……」

「確かに明るい子とは言えないな……」

虚な目に雰囲気も気味が悪かった。洗夜は何故かその少年が存在がずっと気になっていたが、今はバイトだと割り切る事にした。

その少年を後姿が曲がり角で消えると、洗夜はバイトをし始めるのだった。

End

第二十三話：りせの世界

7月2日（土）雲

現在：豆腐屋

（足立さんもそうだが……アイツ等は何をしているんだ？）

洗夜がバイトをしながらりせの周りを注意していると、事情を聞く為に店を来た足立もキョロキョロと辺りを警戒し過ぎて逆に挙動不審。

そして……。

「「「「……」」」」

何故か悠、陽介、完二は先程からあんパンと牛乳を持ちながら豆腐屋の周りを何往復も行ったり来たりし、雪子と千枝も同じくあんパンと牛乳を持ちながら、店の前で会話をする様な素振りしながらりせの事をチラチラと確認していた。

（今までよりはマシと思う自分が悲しい……）

本来ならばコレはコレで営業妨害なのだが洗夜は最早、口を出すのもバカバカしく感じてしまいがち、これはこれで犯人を牽制できていると思う事にして悠達には触れない様にした。

そんな時だ……。

「……やあ、洗夜君。バイト頑張ってるかい？」

「足立さん……仕事中じゃないんですか？」

バイトをしている洗夜の下に来た足立はどこか暇そうな感じであり、明らかに暇潰し目的なのが目に見えていた。

どうやらりせから大抵の話は聞けた様だが、そのまま署に戻って仕事をしたくない様だ。

「いやあ、彼女からは話をほとんど聞いたし、ちょっと暇になっちゃってさ」

思っただけだが本当に口に出されてしまうと、洗夜も苦笑しかでなかつた。

「は、はあ……？ それで、何か様ですか？」

「いやさ、君もそろそろ退屈しているかなって思っただけ、実は話がある

んだよ」

(俺はそんなに暇そうに見えるのか?)

真面目にバイトをしているだけあって中々にシヨックを感じる洗夜だが、能天気には笑っている足立は話を止める気がないらしく勝手に喋りだしていた。

「実はさ……堂島さんから言われてる事があるんだけど。……なんかさ、悠君達の事を見張ってるって言われてるんだ」

「……何故、悠達を?」

「良く分かんないけど、何か消えた子を見付けた時に違和感を感じたり、ジュネスの電化製品売り場に頻繁に行ったり、今回も久慈川りせが誘拐される事を知っていたのが原因らしいよ?」

そう言つて長々と怠そうに喋る足立。どうやら、足立自身は堂島の考え過ぎ程度にしか思っていない様だ。

「そうですか……でも、あくまでも推測ですよね? 叔父さんは本気で悠達を疑っている訳では……」

「そんなに慌てなくても大丈夫だよ。堂島さん……何かこのところピリピリしていてね。多分そのせいだよ」

過剰に反応する洗夜に、足立は笑いながらそう言った。洗夜も自分が過剰に反応してしまった事に気付き、すぐに冷静になろうとした時だった。

店の外にいた悠達に異変が起こった。

「あつー! あれ……!」

店の外から聞こえた雪子の声を聞き、洗夜と足立は急いで外に出た。そこには雪子達が見上げており、視線は電柱の上へ向かっている。

洗夜と足立もその場所を見てみると……。

「誰だ……?」

電柱の上には、眼鏡をかけてカメラを持ったおかしな男が電柱にへばり付いていた。

行動、姿の両方が不審であったが“ 事實は小説より奇なり” を直に目撃してしまい、その場にいた全員の時が止まってしまった。

そして、そこまで騒がしくしていれば不審者と言えど気付かない訳がなかった。

「!?」

男は洗夜達に気が付くと、驚いて電柱から落ちるように地面につき、そのまま商店街の奥へと走り出す。

「あつ！逃げたつ！」

「追えー！」

千枝が叫び、悠が全員に一喝しメンバー達は不審者の後を追って一斉に走り出した。

洗夜も一瞬は追いかけてしようとしたが、今はりせが店にいる。ここで彼女の周りを無防備にする訳にはいかない。

少なくとも洗夜はそのつもりだったのだが……。

「こ、洗夜君……君も行ってくれないかい？」

「はあッ？」

何故か隣で蹲っている足立の言葉に洗夜は思わず声を出した。当たり前前だ、一般の人に不審者を追ってくれと頼む刑事が何処にいる。

少なくとも、洗夜の目の前に一人いるがそれは稀な例だ。

「いや、実はさっきの男が落ちた時に驚いて足をくじいちゃって……はは」

(叔父さんがこの人を怒鳴る理由が良く分かる……!)

苦笑いしている足立の情けなさに呆れを通り越して怒りを覚える洗夜だったが、そんな事を考えている間にも足立のアップールは大袈裟を増して行く。

「ああ！ 急がないと悠君達が……！」

「っ……ッチ！」

弟の名を出されてしまえば洗夜は簡単に揺れ動いてしまい、万が一の事が過つてしまうのは想像よりも容易く、洗夜は舌打ちをして悠達の後を追う。

そんな洗夜の様子にりせも漸く異変に気付き、慌てて店から飛び出して来る。

「洗夜さん！」

「りせ！ 君は店にいろ！ 良いな、絶対に店から出るな!!」

洗夜達を心配して店から出て来たりせに、洗夜はそれだけ言って途中で向かい側から走ってくる何台かの車やトラックに注意しながら走り出し、店に残されたのはりせとお婆さん。

そして、苦笑いをずつとしている足立の三人だけが残されたのだつた。



洗夜が追った先で見えたもの、それは先程のカメラを持った男が道路側で何やら叫びながらも悠達が男を追い詰めていた状況だった。

しかし、追い詰めた割には悠達の表情は訝えなく、何故か近付こうとはしていない。

「どんな状況だ？」

「兄さん……」

「近付いたら道路に飛び込むとか言ってるんですよ。だから、どうするって事に……!」

「来るなッ！ 来たら飛び込むぞッ！」

悠と千枝の言葉を聞きながらも洗夜が男の方を見ると、冷や汗を滝の様に流しながらも車が多く走る車道に飛び込もうとする。

だが、両足は固定された様に全く動かず、明らかに飛び込む気配はまるでない。

「あんな事を言ってるんだよ……」

「へッ！ そんなの無視して一気に突っ込めば良いんすよ！」

陽介と完二が面倒そうにそう言った時だった。

「だ、駄目だよ！ もし大怪我したら、警察の責任が問われて……!」

先程までいなかった筈であり、足を痛めたと主張していた足立が洗夜達の後ろに立って慌てて二人を止めたのだ。

「足立さん……! 足は……?」

「いや、実は大した事はなかったんだよ……はは」

「……おい」

「に、兄さん落ち着いて！」

「こ、洗夜さん！ まずはアイツっスよ!」

足立に向かって拳を握りしめる冴夜を、悠と完二の二人係で止めた。

足立に対しては悠も思う事はあるが、それよりも問題は目の前の男だ。だが、事態は悪化してしまう。

男は先程の足立の言葉を聞いてチャンスだと思つたらしく、ニヤニヤしながら道路の方へと近付き始めた。

「ほ、ほら飛び込むぞ！ 嫌なら早くあっち行けよ！」

「テメエ……！」

「ひ、ひい……!!」

完二が男の言葉に逆上した光景を見た瞬間、男が怯んだのに冴夜は見逃さなかつた。男が怯んだ隙を付き、一瞬で相手の懐に入り、そのまま足払いを仕掛けた。

「……飛び込む気も無いんだろ？ 交通事故に遭つた人達に失礼だ」

「ぐほッ……！ き、君達！ 善良な市民に向かって何て事を……！」

冴夜に足払いをされた男は多少は痛い思いをした様だが、その場に尻餅をつきながら悪態を吐くがそんな男に完二が怒りの形相で近付き、男の服の襟を掴み上げた。

「ふざけんなッ！ 人様をぶつ殺しといてテメエはそれか!? ああ!!」

自分を善良な市民発言をする男を見て完二が怒鳴り、怒鳴られた男は余りの迫力に先程までの勢いは一瞬で死に絶えた。

「ひょー!? タ、タンマ!!? ぶつ殺して何の事ですか!」

「と、とぼけたつてムダだから！」

「そ、そうだけ！」

完二に続けとばかりに千枝と陽介が男に向かって抗議した。……

冴夜の背中から。

「そう言う事は本人の前に出て言ってくれ……」

「え、まあ……その……」

「は、ははは……そうですね……」

冴夜の言葉に苦笑いする千枝と陽介。その二人の様子にやれやれと冴夜は微笑む。

やはり、いくらシャドウと戦っているとはいえ、殺人犯かも知れない相手を前に怖いと感じてしまったのだろう。

「ちよ、ちよつと待って下さいよ！ 僕あ、ただりせちーが好きで部屋とかちよつと見てみたくて……ほら！ 荷物コレ全部カメラだよ！」

冼夜達の話聞いていた男が目の色を変え、鞆の中から身の潔白を証明する様に大型のカメラを取り出して全員の前の差し出した。……が、非情にも足立によって手錠を掛けられた。

「はいはい犯人ってのは皆言うんだって、そういう事を……」

「そ、そんな！ 僕が何をしたって言うんですか!？」

「とりあえず、話は署で聞こうか……くー！ この台詞言ってみたかった！」

犯人を逮捕して一人テンションを上げている足立が、男を連れて行きながら冼夜と悠達に手を振った。

「君らもお疲れ様！ 犯人逮捕にご協力感謝します！」

「……あ、はい」

雪子が呆気になりながら返事をしている間にも足立は男を連れて行ってしまう。

そしてその場に残された悠達は顔を見合わせる。余りにも呆気ない感じに、今一理解が遅れていたのだ。

「これで事件解決？」

「予想通り、犯人は少し気持ち悪かったね……」

「まあ、後は警察の仕事っスね」

「って事は……全部解決？ やったあ！」

陽介は呆気に、雪子は顔色を悪そうに、完二は肩の力を抜き、千枝は大きく跳び上がった。

既に事件解決ムードの悠達だが、冼夜は先程の男をジツと見ていた。先程の男は明らかに怪しかったが、どう見ても人殺しが出来る様には見えなかったのだ。

（今のが犯人……？ いや、違う。夢の中に出て来た霧を扱う奴とは雰囲気が全く違った。それに、ここまで証拠一つ掴ませ無かった奴があんな馬鹿な真似をするか？……いや待てよ、もし今のが犯人じゃな

いとすると、真犯人は——)
りせを諦める理由がない。

「!?」

「……兄さん?」

「え、洗夜さん!?!」

洗夜が突然、走り出した事に驚く悠達だったが、洗夜は悠達の相手を
する暇は今は無いらぬ。

先程の男が犯人では無かったのなら、今はほとんど人がいない店の
りせが一番危険な事に気付いたのだ。

「りせ……? お、お婆さん……りせは?」

店に着いた洗夜は店内を見渡すがりせの姿はどこにもいなかった。
「あらあら、洗夜さん大丈夫? 顔色が悪いわよ? それで、りせがい
ないのかい? ……前にもあったんですよ。私にも言わずに何処かに
フラツと出掛ける事が。まあ、あの子も疲れていたし今はそつとし
いてあげましょう……」

そう言ってお婆さんは慣れた様子ながらも、りせを気遣う様に仕事
に戻った。

その心配はない感じで話す様子から、どうやらりせが勝手に何処か
に行くのは珍しい事ではない様だが、洗夜にはそうは思えなかった。

「あれ程に言ったのに店から出たのか……そんな訳は……ん?」

りせがいない事に疑問を持つ洗夜は豆腐屋の入口に光っている何
かを見付けた。光が反射して目障りだったが、洗夜はそれを拾い上げ
ると……。

「……間違いない。りせに渡した鈴だ」

洗夜が拾ったのは前にりせに渡した鈴だった。それを見た洗夜は
りせが消えた理由を理解し、店から出ると近くの電柱に拳を放った。
拳を放った事で生々しい音が聞こえたが、近くには誰もいなかった
為に気付かれる事はなかった。だが、洗夜の瞳が映す怒りは強くなっ
て行く。

(完全に俺のミスだ……近くにいたにも関わらず、りせを犯人に連れ
去られた……)

雪子や完二の時とは違い、日頃から自分の近くにも関わらずにりせを誘拐された事。その事に自分に怒る冴夜がりせを守る為に作った鈴も、今はりせを守ってあげられない。

「冴夜さん、今日はもう良いですよ。最近、りせの事で忙しかったでしょう?」

「すみません……そうさせて頂きます」

冴夜はそう言っただけでバイトを切り上げると、そのまま帰宅して自室へと向かった。

「待っている……りせ」

テレビの世界に行く為に……。



現在：テレビの世界

「ヘメラ!」

テレビの世界に入るや否や冴夜はヘメラを急いで召喚し、いるであろうりせの存在、その探索を素早く行った。

ヘメラは辺りに力を集中させ、それから得られる情報が冴夜の中にも流れ込んでいる。新しく世界はまだ存在してはおらず、神経を削りながら冴夜は集中を維持していた時だ。

冴夜の中に入りせの姿が捉えられた。

「!」

冴夜はりせを見つけた。やはりこの世界に入れられていたのだ。

「りせ……!」

冴夜の行動は早く、素早くその場所から降りていつもの広場の中を走り去って行く。

「な、なにクマか!」

そして当然、いつもの広場にはクマがいたが冴夜はクマの横をスピードを全く緩めずに走り去って行き、その勢いに押されてクマは回転しながらその場に転がってしまった。

「クマ〜!」



現在：テレビの世界【りせの場所】

いくつかの世界を素通りし、洗夜はヘメラの能力でその場所へ辿り着いた。

その場所は雪子達の時とは違い、いつもの広場と同じ様なスタジオの様な場所だ。その場所の中心に割烹着を着たりせが横向きで倒れていた。

「りせ……！」

洗夜は急いで彼女の下に向かうと、腰を下ろしてそっと彼女の上半身を起こした。

「りせ……りせ！……無事か？」

「……んう？……あれ？……こう……やさん？」

幸運にもりせの意識はすぐに目覚めてくれた。だが、どこかぼくとしておりまだ意識は曖昧の様子に洗夜は拾ったりせの鈴を彼女の手握らせた。

「無事で良かった……りせ」

洗夜はまずは安心すると、ヘメラに手で合図して『癒しの波動』をりせへ放ち始めた。

「これ……は？」

優しい光にりせは自分の体から不純な重さが徐々に消えて行くの感じる事が出来た。怠さや頭の朦朧さも徐々にスッキリして行き、やがて彼女は意識が正常に戻って自分の力で起き上がった。

「洗夜さん……私は一体？……って、何ですかこれ!!？」

意識が戻ったりせが真っ先に気付いたのはテレビの世界ではなく、目の前に浮いているヘメラの存在であった。

「落ち着いてくれりせ。彼女達は君に害を与える存在じゃない。君を癒してくれたのは目の前の存在であるヘメラだ」

「へ、ヘメラ？ あ、あの……洗夜さんは何を……って、ここどこ？」

りせは自分がある場所が明らかに商店街ではない事に気付き、辺りを見回した。霧が濃い、それでも分かる機材等でりせもスタジオの様な場所なのは理解できた。

「スタジオ？……でもこの霧は？ ドツキリ？ でもヘメラって……」

？」

「大丈夫だりせ。俺がいる……静かに深呼吸するんだ」

「こ、洗夜さん……」

洗夜は彼女の傍に寄り添い、りせを安心させようとする。日頃の信頼もあつてりせからはその行動で好感を得られた様だ。

困惑した感じではなく嬉しそうな表情をりせはしており、やがて冷静さを取り戻して行く。

「洗夜さん……ここは？」

「すまない、りせ。説明は後です、今は一刻も早くこの場を離れるぞ」

洗夜からすればこのまま残れば新たな世界が生まれ、りせのシャドウが出るのは目に見えており、この場を後にしたかった。

そしてりせも自分には分からない事だらけなのは変わりなく、洗夜を信じて頷く事にした。

「はい。私、洗夜さんを信じます」

「ありがとうございます……」

洗夜はりせの手を取り、自分の左手を翳そうとした時だった。

周りの景色が陽炎の様に歪み始め、徐々に世界を変化させ始めたのだ。

「りせ！俺から離れるな！」

「えっ！は、はいッ!?!」

洗夜はりせを抱き寄せて分断されない様に力を強め、当のりせは顔を赤くして笑みが漏れるのを耐えながら恥ずかしそうに表情で洗夜に身を任せた。

その間にも徐々に周りの景色は変化を言い続けていた。

「これは……!」

徐々に落ち着き始めた事で周りの景色の状況を洗夜とりせも理解し始める。

円状のステージにヒラヒラのカーテンにポール。周りもピンク色を中心としたスポットライトを存分に照らし始めた。

「ステージか……?」

「と言うより……ポールダンス？」

温泉街にでもありそうな派手な舞台に二人は困惑するが、洗夜は頭の中で嫌な予感を覚える。

おそらくこの場所が出現した理由、それは……。

『キヤハハハ〜！ みんなく〜！ 私の事をもっと見てえ〜!!』

聞き覚えのある声に洗夜とりせが振り向くと、そこには露出度の高い水着を纏ったりせ？がポールを使ってクルクルと楽しそうに踊っていた。

(遅かったか……)

洗夜の恐れていた事は起きてしまった。りせの世界、りせのシャドウ。これらにりせを巻き込ませたくなかった洗夜だったが、今ではもう不可能。

この世界は何もしていないゲストを返してはくれないのだ。

END

第二十四話：逆光の探知封じ VS りせの影

同日

現在：堂島宅【洗夜の部屋】

「？」

帰宅した悠は先程の兄の行動が気になって部屋を訪れたが先に帰宅したと思われるいた洗夜の姿はなかった。

（どうしたんだ……？）

胸騒ぎを覚えた悠は洗夜の部屋をキョロキョロと見渡していると、悠は畳まれた布団が雑になっている事に気付く。

いつも綺麗に畳んでいる故に珍しく思った洗夜が布団を持つと、そこには隠している筈の洗夜のペルソナ全書がなかった。

「！」

瞬間、悠は事態に気付いて急ぎ、陽介へ電話を掛けると陽介は3コール程で出てくれた。

「全員集合!!」

『ハアツ!』

有無を言わず悠は招集を掛けるのだった。



現在：特出し劇場丸久座【最上層】

『アハハ！ 見てくもつと私を見て!!』

「な、なにこれ……私……？」

目の前で妖美にポールダンスを踊る自分と同じ姿の存在を見て、りせは口を押さえながら後退りしてしまう。

訳の分からない世界、異常なもう一人の自分。この二つだけでも常人の正常さを奪うのには十分であった。

「りせ……」

「こ、洗夜さん……あれって……」

洗夜はりせの傍にいてあげるが、りせは不安の色を隠せずに洗夜に

己のシャドウを指さしながら答えを求めていた。

そんな問いに対し洗夜は少し悩むように目を閉じたが、数秒ほどで目を開けて重い口を開く。

「信じられないかもしれないが……あれはもう一人の君だ」

「えっ……」

りせは言葉を失った。当然の事だ、明らかに自分とは異質なテンションで騒いでいる目の前の存在を自分だと理解は出来る筈がない。

りせは洗夜の答えに首を横に振りながら否定してしまう。

「うそ……あれが私なんて……」

「……抑圧された内面。君が認めたくない心の苦しみ……その具現化したものだ」

重く語る洗夜の口調から察し、りせは洗夜がふざけている訳じゃないと真面目に言っているのだとは分かった。

だが、納得できるかと言えばそれは別だ。

「そんな……そんなのって……一体、なんなのこれ……嘘よ全部！」

『嘘じゃないわ！ もつと見て欲しいんでしょ？ 本当の私を！』

そう言ってるりせ？は更に過激な踊りを披露し始めた。体をクネらせ、唯でさえ露出の多い水着にも関わらずその紐を解く様な仕草もする。

「イヤッ！ やめてよ!!」

自分よりもスタイルは良いが、それ以外は全部が自分と同じなのだ。りせ自身は堪えられない程に精神的に辛く、慌てて洗夜の方を向く。

「洗夜さん、お願い見ないで！」

「大丈夫だ……」

洗夜はちゃんと目線を逸らしており、りせ？の姿を見ないであげていたのだが、そのりせと洗夜の反応を見て当のりせ？は不満そうにしてポールでクルクルと回り続けていた。

『本当は見てもらいたいのに変なの〜！ 本当の自分……りせちゃんじゃない本当の自分を見て欲しいんでしょ〜？——だったらアンタの方が嘘ついてんじゃないわよッ!!』

「っ!？」

突然、声を荒げたりせ?の言葉に体を震わせるりせは、洗夜の服を掴む。

『事務所の命令通りのキャラ付け……』りせちー“ ってなによそれ? どの誰よ? りせちーじゃない!! これが本当の私よ! 見て見て!』

「やめてよ……もう嫌……! あなたは私じゃない……私じゃない!」

本人が否定する。それはシャドウ暴走のトリガーに他ならない。

しかし、洗夜はそんなりせを止めようとはしなかった。寧ろ、言いたい事を吐き出させたいとすら思っていた。

この世界には煩い野次馬もしつこい記者達も存在しない。だからこそ、りせが己と向き会わせたかった。

(やるか……)

洗夜はゆつくりと刀を抜刀し左手に召喚器を持って戦闘準備をした時だ。

りせの影から大きな闇が溢れ出した。

『アハハハ!! 良いわ! だったら本当の私を見せてあげる!!』

巨大なステージの上でその姿を現すりせ?の姿。それは全身が気味の悪いカラフル、顔は巨大なアンテナと言う異質な大型シャドウ、それが『りせの影』の姿であった。

りせの影はポールに器用にぶら下がりながら揺れ動いており、己の存在を確立した時、洗夜は仕掛けた。

「魅せろ——マタドール!」

洗夜が引き金を引き、召喚されたのは魔界の闘牛士『マタドール』だ。豪華なカポーネに身を包み、鮮血の様に赤いムレータとサーベルを手に持ちし闘牛士。その骸の瞳の奥からマタドールはムレータとサーベルを構えてりせの影へ堂々と立ち塞がる。

『ヤル気は満々って事ね!!——アギラオ!!』

(!——初っ端から弱点属性!……あの姿もそうだが……まさか、りせの力は……!)

洗夜はある考えを過ったが、考えるのはまずは攻撃を防いでからだ。

「マタドール！」

洗夜から蒼白き光が溢れ、マタドールが動く。弱点属性の炎をもともせず、ムレータで流した。

「馬鹿正直に弱点を喰らうか……！——コウモクテン！」

洗夜は四天王の一角、コウモクテンを召喚してマタドールと同時に攻勢に出した……その時だった。

りせの影のアンテナが僅かに光った瞬間、網状のレーザー光の様なものが現れ、それはマタドールとコウモクテンの全身をスキャンした。

『——マハアナライズ』

その異変はすぐに判明する。マタドールがサーベルをりせの影へ振り下ろした時だ、りせの影は何一つ無駄のない動作でポールを使って攻撃を回避し、その反動でマタドールへ強烈な蹴りを放つ。

更に、背後から回っていたコウモクテンにも同じように無駄なく顔だけを後ろへ向けてアギラオを放った。

その結果、マタドールは洗夜の傍に落下し、コウモクテンは火だるまになりながら鎮火するまで膝を付いてしまった。

「ッ！！」

ペルソナを通してダメージが己の体に流れた洗夜は若干の苦痛の表情を浮かべ、その姿にりせは掛け寄った。

「洗夜さん!? 大丈夫ですか！」

「……ああ、大丈夫だ。……だが、そっちこそ大丈夫か?……少しずつ、理解し始めたんだろ?」

その言葉にりせの表情が曇る。それだけで洗夜の言葉を肯定している様なものだった。

決して頷く事はなかったが、りせは重い口をあけてくれた。

「……変わりたかった。最初は変わりたいだけだった……アイドルになれて虐めはなくなって、知らない人からも声を掛けて貰える様になった」

今でもりせは覚えている。優勝してアイドルになってから世界が変わった事を。

親しい友人としか話す事はなかったのに、話した事もない者達から積極的に話し掛けられる様になった。苛めた者達はバツが悪そうで昔の自分みたいに孤立した事も。

勿論、りせは色んな人から声を掛けられる事は嬉しかった。だが、日々が過ぎて行く毎にりせは違和感を抱き始めたのだ。

自分に話し掛け始めた誰かが言った。

『あの子達、りせの事を苛めてたんだよ』

その言葉一つでクラスメイト、別のクラスの者達も一斉に苛めていた者達に矛を向けた。

最低・酷い・ダサイ・苛めつ子がクラスメイトとか嫌だ。それ以外にも色々と言っていた気がしたが、突然の事で困惑していたりせは全てを覚えきる事は出来なかった。

徐々にヒートアップする中、ある言葉がその場に現れた。

『私達は“りせちー”の友達だから、また手を出したら許さない』

『“りせちー”何かあったら相談しろよ?』

『“りせちー”』

『“りせちー”』

ずっと続く言葉。りせちーという存在。段々とりせの中でその違和感は大きくなり、そして気付いた。久慈川　りせとして仲良くなっていた友達とは全く話す機会が無くなっていった事に。

久慈川　りせという本当の自分を知る者がいない事に。

『皆が見てるのはりせちーだけ……本当の私の事は誰も見てくれない。……本当の私を……』

りせの声は段々と小さくなっていった。まるで心の火が消えて行くかの様に。

だが、洗夜は口を開く。

「……本当の君ってなんだ?」

「……えっ?」

言葉通り、本当に分からないと言った口調の洗夜の言葉にりせは不

意を突かれた様に意識をその言葉に持って行かれた。

「……君と会った事も切っ掛けだったが、妹がりせちーのファンでな。ネットで色々調べてみた」

洗夜が検索した内容には色々なものがあつた。古典的な批判も含めてあつたが、大半がりせを応援するものがあつた。

イベントでの写真等も多くあり、中には小さな子供達や高齢者の方々との写真もあり、洗夜はその写真の全てに驚かされたのだ。

「小さな子供達から高齢の人達……この人達と写る君は本当に嬉しそうな笑顔だつた。実際にそこにはいなかった俺が見ても元気が貰える位に良い笑顔だつた」

直感的だが分かつてしまうものだ。その写真に写っている人の笑顔が本当なのか、嘘なのか。

わざとらしいとか、そういう事ではなく、純粋な違和感。よく見るアイドルや芸能人の笑顔、その笑顔の中で本当の自分の笑顔をしているのは一体何人いるのか。

誰でも出来る仕方ない笑顔ではなく、その人だけが出来る本当の笑顔だけが見る人も楽しく、そして嬉しくさせる笑顔だと洗夜は思っている。

その笑顔を洗夜はりせから感じたのだ。

「俺は芸能人じゃない……だから君のその苦しみを理解する事は絶対にない。——だが、色んな人達と写っていた君の笑顔が偽物だとは俺には思えない」

「洗夜さん……でも、私……りせちーになつたから私は……！」

「妹に笑顔を与えてくれるりせちーは……りせだから出来るんだ。……久慈川 りせだから皆が君を応援してくれるのさ」

洗夜はそう言って立ち上がり、りせの影の前へと再び立つ。その背をりせはまだ、眺めているだけだったが、その中にある心には変化が起こり始めていた。

だが、そうであっても戦いはまだ終わらない。

『キャハハハ！ 安い演説は終わったのかしら？』

「……安心しろ、もう終わりだ。——終わらせる」

洗夜の全身から青白い光が徐々に大きさを増し始め、洗夜はその引き金を引く。

「照らせ——へメラ!!」

洗夜は再度へメラを召喚する。これが最後、へメラでなければりせの影を倒す事は出来ないだろうと気付いていた。

アナライズのスキルはとても希少で強力な力であり、自分達の能力を解析されればりせの影への攻撃は全て無効化されてしまう。……故に洗夜は探知特化であり、探知に対する対策を持つへメラを召喚したのだ。

『何をしようが無駄よ!!』

りせの影は洗夜が動こうとするよりも先に攻撃を仕掛ける。その攻撃は先程と同じマハアナライズだった。

『マハアナライズ!』

洗夜とへメラに照準は決められ、解析が始まろうとした時だった。へメラが瞳を大きく開く。

『昼光の逆光』

へメラから巨大な光が放出された。昼光の道標とは違い、攻撃的で直視できない程の光がりせの影を襲う。

『キヤアアアアアア!!?』

りせの影からすれば閃光弾をモロに受けたようなもの。巨大な光によって怯みはしたが、マハアナライズは既に洗夜達へ成功している。

りせの影からすれば油断したが、相手の悪足掻きを受けたに過ぎなかったとしか思えてならなかった。

『クツ……いー ウザイ……けど、勝負はこれで……!!』

憎らしい口調でりせの影は解析結果を得て、洗夜の全てを読もうと試みた。……だが、それは叶わなかった。

『!?!……な、なによコレエツ!!?』

りせの影に映る洗夜の情報、それが全く見る事が出来なかったのだ。

マハアナライズは成功したが解析結果には全てフラッシュの残光、

そして靄や砂嵐等も起こって何が何だかりせの影には分からなかったが、ある考えがすぐに通り、りせの影は洗夜の方を向いた。

『まさか……!』

「……ああ、それで正解だ」

りせの影の考えている事が分かっているかの様に洗夜は静かに頷く。そう、りせの影を襲っている異常現象の原因はヘメラが放った攻撃にあった。

「ヘメラは探知特化のペルソナだ。……だが、ヘメラには他のペルソナにはない特別な力がもう一つあった。——それがジャミング攻撃だ」

『ジャミング攻撃……ですって……!』

ヘメラが先程放った“昼光の逆光”は所謂、アナライズ潰しのスキル。更に使い方を変えれば己の気配も隠す事も可能とする特殊スキルであり、アナライズを潰されたりせの影に焦りが現れた。

『ふ、ふざけんじゃないわよ!! 私は何を間違ってるのよ!? 適当に作られたキャラだけの“りせちー”が何なのよ!? あれが私にとつて何なのよ!!』

りせの影……否、りせの心の叫びが咆哮として放出される。ずっと誰にも言えなかつたりせの闇。仕事だから、それだけでしかなく、自分から本当の自分を奪った存在としか今まで見る事が出来なかつた。

だが、今は違うと洗夜は思っており、後ろにいるりせへ答えを聞く為に振り向いた。

「りせ……答えは出たか?」

「……はい」

そう頷く姿のりせの顔は憑き物が取れた様にスッキリとした笑顔をしていた。答えは彼女の中にもうあるのだ。

「あなたは……私。私だから生まれたのよね”りせちー”も……全部。今の私も、あなたも”りせちー”も……これから先も生まれる新しい私も全部……が私なんだよね」

『あ……ああ……!』

りせの言葉にりせの影に変化が起き始めた。消えて行くかのよう

に全身から闇が放出されて行き、徐々にその姿はりせ？へと戻って行き始めたのだ。

その姿を見て、冴夜は満足そうな笑みを浮かべながら刀を収めるとその場に膝を付いた。

「冴夜さん！」

りせが冴夜の下へ駆け寄って冴夜の表情を見ると、冴夜は額から汗が多く流れていて息も乱れていた。

「……大丈夫なんですか？」

「ああ……大丈夫だ。……りせこそ、自分を見つける事が出来たんだな」

「……………はい！」

二人の目の前にいるりせ？と向き合えばこの戦いは終わる。冴夜はまずは安心だと思いながら不意にペルソナ全書の開いてあったページを覗き、異変に気付く。

（ベルゼブブやコウリュウが……）

本来いる筈の名前が虫食いの様に所々で消えていたのだ。ペルソナが消えるなんて事は今までなかった事だが、冴夜はその異常の光景に驚く事もせず、ただ笑みを浮かべてしまった。

「ハハ……」

納得した様な小さな笑みを冴夜が浮かべた時だった。後方の扉が騒がしくなるのを感じ矢先、悠達が雪崩れ込むかのように入って来て悠達は冴夜とりせの姿を見つけた。

「見つけた！ りせちゃんと……えっ!?!」

「マ、マジかよ……」

りせの隣にいる冴夜の姿に気付いた千枝と陽介は驚きの表情を隠せなかったが、悠と雪子は別だった。

「兄さん！」

「冴夜さん！」

驚く四人はその場で立ち尽くし、悠と雪子は冴夜とりせの下へと駆け寄った。

「二人共無事でよかった……」

「やっぱり……やっぱり洗夜さんだったんですね」

「ハハ……今更、言い訳は出来ないか」

単身でりせを救出しようとした時点でこうなる事は洗夜の予測の範囲内だった。既に言い訳する気は洗夜にはなく、雪子に回復されているとそんな二人に遅れて完二達もやって来る。

「うお……本当に洗夜さんじゃねえか。……それと」

悠がペルソナ使いの時点で驚きはしないのか、完二は洗夜がいる事に特に驚きはせず、そのままりせとりせ？へと視線を向けた。

「もう……終わっちゃった系？」

「……いや、まだ終わらない。……そうだな、りせ？」

「はい」

りせはそう言つてりせ？前へと向かい、向き合う様に立った。

「りせちーも、もう一人の私なんだね。ゴメンね、アナタだけに辛い思いをさせて……私の中には色々な私がいる。……前に洗夜さんが言っていた意味が今なら分かる。私は一色じゃない……こういう意味だったんだね。私の中には沢山の私がいる……その中で『本当の自分』なんて最初から居なかった」

「……本当の自分なんていない？」

りせの言葉に周りから距離を取っていたクマが意味深に呟くが、それに気付く者はいなかった。

「これからも……一緒に頑張ろう！ あなたもりせちーも私なんだから！」

その言葉にりせ？は頷くと、その姿は輝きを出して新たな姿となる。アンテナの頭部に純白の白衣を纏う仮面『ヒミコ』だ。

そしてそのヒミコの力は勿論、探知特化。

「……そのペルソナの力は強力だ。おそらく、それでもまだ力は大きくなる。……先が楽しみだ」

「勿論です！ 私はこれからも頑張りますから！」

りせの表情はすっかり吹っ切れた様子であり、悠もその事に安心した表情を浮かべるが他はそうではなかった。

「相棒は知ってたのか……その、自分の兄貴の事？」

「……知っていた」

「マジか……」

陽介の中では洗夜がこの世界にいる事自体がまだ納得できず、困惑し続けていたが雪子はそうでもない。

「……私のシャドウの時に助けてくれたのはやっぱり……」

「……俺だ」

雪子の言葉に洗夜は返答するが、その声と表情には先程までの覇気は殆どなかった。弱体化の影響とでもいうのか洗夜は先程のペルソナ能力の使用だけで体力・精神共に限界まで持って行かれてしまっていたのだ。

(悪いが……ペルソナはまだ手放せないんだ)

己自身に言い聞かせるかのように心の中で洗夜が呟いていると、完二が納得した様に頷いていた。

「けだよ、鳴上先輩がペルソナ使えんすから、洗夜さんも使ってるのは納得できるぜ」

「ええ……そんな単純なの？」

同じ単純でも千枝の方はすぐに理解は出来ていなかった。よく考えれば洗夜と千枝の間にはそれ程の繋がりが無いのだから当然でもある。

そしてそんな困惑した様子の二人に気を使い、洗夜はゆっくりと口を開く。

「……それが普通の反応だ。こんな状況で言い訳する気はないが、まずはこの世界から——」

洗夜がそこまで言った瞬間、自分達の背後からとても凶悪な力を感じた。

ゾクリと、背筋を凍らす程の何かに洗夜は視線をすぐに向けるとそこには今まで話に入ってこなかったクマが虚ろな目で自分達を見ていた。

「本当の自分は……いない……?」

「クマ……?」

「お、おいクマ、どうした? 頭でも打ったか? まあ、中身は無い

けどな」

悠が心配し、陽介も冗談混じりで言いながらクマに近付こうとするが、りせがそれを止めた。

「近付いちゃ駄目！ その子の中から何か来る！」

「へっ？ 何かって……」

りせの言葉に陽介が聞き返そうとした時だ。クマの背後から何か
が現れた。

『ハハハ……実に愚かだ』

「なっ!？」

「アイツは……!！」

千枝と完二は言葉を失う。クマの背後に現れたのはシャドウ特有
の禍々しい金色の瞳をしたクマ？ がいたのだ。

本人とは違い、愛嬌の欠片もない表情は能面の様に不気味だ。

「彼のシャドウか……!！」

雰囲気は本人とは全くの別物であり、その圧倒的な存在感は洗夜に
満月の大型シャドウを彷彿させる程だった。

「皆どうしたクマ？……って、おわあッ!? ダ、ダレクマか!？」

メンバー達の様子に、今更自分の後ろにいるシャドウに気付いたク
マ。

そんな様子にクマ？も、洗夜と悠達とクマに視線を交互に動かし、
金色に輝き他者を恐怖させる様な目で見ながら口を開いた。

『オマエもキサマ等も本当に愚かだ。こんなに広く、迷いの霧に包ま
れた世界でどんな真実を求む？ そんなのは愚かとしか言えない』

「んだとおっ!！」

「さて完二!！」

シャドウの言葉に逆上する完二を悠が手で静止させるが、それを無
視してクマ？は更に話を続けた。

『元々、真実を手に入れるの不可能だ。どれだけ苦勞して手に入れた
真実も、それが本当に真実だと確かめる術は無い。だったら己と全て
を騙した方が、ずっと楽で賢いじゃないか?』

「どういう意味だ?！」

クマのシャドウに悠は聞き返す。

『……貴様らにも分かる様に言ってみよう。例えばだ、貴様らの目の前で誰かが死んだとしよう……そんな時、貴様らは何を考える？ 何故死んだ？ 誰かに襲われた？ そんな事を考える意味はない。お前がその事をただ死んだと思えば、それはもう真実なのだ』

「……なに言ってるんだコイツ」
「イカれてる……！」

陽介と千枝はクマ？へ非難の目を向け、洗夜と悠達も理解出来ないと表情を青ざめるがクマ？は小馬鹿にした様に笑い飛ばし、クマの方に目を向けた。

「……オマエもだ。最初からカラツポなのに何を求める？」

「カ、カラツポ……？ 失礼しちゃうクマ！ クマはコレでも一生懸命考えてるんだクマ！ それなのに勝手な事言うなクマ！」

『それが無駄なのさ……カラツポのオマエは何かになりたい為に、何かになろうとする。記憶も無い、何も無い……即ち“無”……それがオマエだ』

「うるさいクマ！ もう止めるクマツ！」

クマがクマ？に突っ込もうとした瞬間、クマ？から謎の力が放たれてクマは吹っ飛ばされて壁に激突した。

「ク、クマ〜」

「クマツ！ お前……！」

『キサマ等にも真実を与えてやろう……『死』と言う真実を……『死』と言う名の定めを！』

そう言い終えた瞬間、クマ？から大量の闇が放たれ自身を包み込んだ。

そして、その場に現れたのは床を突き破る程の巨体、大きすぎて上半身しか出せない程であり顔面の部分から闇を溢れ出しているシャドウ『クマの影』となって出現した。

『我は影、真なる我……『死』の真実、『死』の定め……キサマ等に与えよう』

シャドウになった事によって存在感が更に増えたクマの影。その

様子に気を圧される悠達。

「……なんて奴だ。こんな奴がクマの中にいたのか！」

「なんて力……!!」

「こんな奴とどうやって戦えばいんだよ!？」

陽介がシャドウの姿に恐怖した時だ……。

「恐れるな……」

膝を付いたまま顔色が悪い冼夜が、陽介達が恐怖に呑まれないよう言葉の腕を掴む。

「もう……俺が裏で助ける必要もない程に君たちは強くなっている筈だ。……後は心の問題だ……己を……仲間との絆を信じれば君達はあのシャドウに勝てる……俺はそう信じたい……」

冼夜はそう言い終えたが、兄の異変に悠は気付いていた。

(様子がおかしい……)

冼夜に比べれば悠自身も経験は浅いと思ってしまうが、それでも兄の様子がおかしいのは分かる。

異常に疲労しており、雪子に回復してもらってもあまり効果は薄く感じ、悠は嫌な胸騒ぎを抱くが冼夜は弟の様子に気付かず、りせへ視線を向けた。

「……りせ、皆を助けてあげれるな」

「うん！ 今度は私が守ります——ヒミコー！」

りせがカードを砕くと同時にヒミコが召喚され、手をリング状にしてりせに載せた。

「ペルソナ!? 大丈夫なのその体で!？」

雪子がりせを心配するが、りせは笑顔だ。

「大丈夫……見てて冼夜さん！ りせちーは何でも出来るんだから!!」

「ああ……俺も簡単な手助けぐらいは出来る」

冼夜はそう言って今度は悠へ視線を向け、悠もその視線を受け取った。

「……」

無言で見詰める冼夜だが、その瞳から兄の意志を悠は理解する。

“お前が皆を助けるんだ”

強い意志を受けた悠も、そんな事は言われるまでもない。仲間を、クマを、そして洗夜も悠は守ろうとペルソナカードを取り出し叫んだ。

「行くぞー！——ペルソナ!!」

『来い!!!』

その叫びがVSクマの影、開幕の合図となり全員の仮面がその姿を現した。

END

第二十五話：黒の力 死の降臨 VSクマの影

同日

現在：特出し丸久座【最上フロア】

悠達・洗夜とクマの影との戦いは序盤から全力の戦いであった。

クマの影は広範囲の属性技や巨大な腕で薙ぎ払うなど、その力をフルに活用して悠達を苦しめるが、そこはりせの能力の見せ所。

的確に攻撃範囲を解析し、悠達を的確にサポートしてクマの影と対等以上の戦いを見せていた。

『マハブフーラ!!』

クマの影の口から巨大な氷が広範囲に放たれ、それは悠達を的確に呑み込もうとする。

「させない！ その人は後ろに避けて！ その人は真横に！ 他の人は動かない！」

りせはヒミコの能力を駆使して悠達をサポートし、悠達はそれに従った行動で攻撃を回避に成功した。

「助かる……い！」

悠はりせへ礼をし、りせもそれに対し任せろと言う様にVサインで応え、今度は悠達が攻勢に出る番となる。

「行けよジライヤ！」

「舞いなさい——コノハナサクヤ！」

ジライヤは手裏剣形状のガスを乱れ撃ちし、コノハナサクヤはアギラオでクマの影の周りを包み込んだ。

徐々にダメージを与えるが、それは確実にダメージを与えており、クマの影は攻撃を払う様に腕で薙ぎ払う。

『小賢しい!!』

薙ぎ払いでガスとアギラオを吹き飛ばすが、それは大きな隙となっている事にクマの影は気付かない。

「今だよ！ 隙が出来る！」

「よし！ 行くよ完二君！」

「ウツス！」

りせの探知で絶好のタイミングでクマの影へ接近する千枝と完二の二人に、洗夜も手助けを行う。

「……ムラサキシキブ！」

召喚された平安の歌人、ムラサキシキブは洗夜の持つペルソナの中でもサポートスキルがかなり充実された仮面だ。

洗夜の指示に従いムラサキシキブは滾る赤き光、マハタルカジャを二人に浴びせた。

「すげー!? なんかが漲る……!」

「よっしゃー! 行くぜオラァア!!」

漲る力に二人の力は更に入り、トモエとタケミカツチがクマの影へ近接攻撃を仕掛けようと武器を振るい上げた。

だが、クマの影も馬鹿正直に攻撃を受ける気がある筈がなく、その腕で再び薙ぎ払おうとする。

『やせん……!』

「こっちもだ。——トウテツ!」

クマの影の動きを呼んだ悠が既にクマの影の懐で待機しており、塔のアルカナを持つ体は牛か羊、曲がった角に人と虎の牙爪、人の顔などを持つ仮面、トウテツを召喚した。

トウテツは振り上げるクマの影の腕を見上げると、その口を大きく開けて多数の斬撃を吐き出した。

『マインドスライス!』

トウテツのマインドスライスはその巨大故に回避する事はクマの影には出来ず、クマの影の腕へ全てが突き刺さり、そのダメージは千枝と完二の攻撃を助けるのに十分であった。

「私は右! 完二くんは左! ——トモエ!」

「ウツス! ——タケミカツチ!」

『疾風斬! 剛殺斬!』

更に二人がバラバラに分かれた事により、クマの影が攻撃を防ぐ術は完全に消え、二人の攻撃を左右から受けたクマの影はその身体を大きく揺らす。

『グオオオオ……!』

ダメージが蓄積し始めたクマの影の動きは確実に鈍くなり始めており、陽介と雪子が追撃を行う。

『ガルーラ！』

『アギラオ！』

陽介と雪子がクマの影へに向かって風と炎の属性攻撃を放つが、クマの影も意地を見せる。

クマの影は二人の攻撃に対して手に力を込め、陽介達の攻撃ごと二人目掛けて腕を振り下ろした。

『嘗めるな……ヒートウェイブ！』

クマの影の攻撃は糸も容易く陽介達の攻撃を相殺し、その攻撃の余波が悠達へと流れた。

「ぐわああっ！」

「きやあっ！」

「固まったら駄目！ アイツの攻撃は基本的に広範囲の技が多いのだから、闇雲に固まったら危険だよ！」

陽介と雪子は受け身を取り、りせがすぐに注意を促し、その間にも悠は攻撃を仕掛けた。

「マカミ！」

『アギラオ！』

悠は身体が長身の獣型のペルソナを召喚し、マカミは炎を吐いてクマの影は炎に顔を包まれた。

『グオッ！ ——そのチカラ、ジャマだな。……患者の囁き』

ペルソナ能力に目をつけたクマの影の瞳が怪しく輝いた瞬間、クマの影から放たれる黒い霧が悠や後方にいるりせを包み込む。

そして、その霧の正体に悠達はすぐ知る事になった。

「なっ!? ペルソナが……！」

「な、何だよコレ！ ペルソナが……出せねえ！」

突如、ペルソナが消えてしまう悠達。もう一度召喚しようとするが、それと同時にまるで何かに押さえ付けられている様な感覚によって悠達はペルソナ召喚が叶わなかった。

「そんな、コレじゃあ皆をサポート出来ない……！」

『そんな必要はないぞムスメ……キサマ等は全員死ぬのだからな。虚無への導き』

「しまった……！」

悠は相手の攻撃に気付くが既に攻撃は撃つだけの状態。

そして、クマの影の攻撃が放たれ様とした。……時だった。

「させるか……！」

りせよりも後方で控えていた洗夜が動く。

ムラサキシキブをバツと横からクマの影の目の前に飛び出させ、ムラサキシキブは両手を前に出して翳した。

『メギドラ』

一瞬、何か光ったと思った瞬間、クマの影が巨大な爆発に呑み込まれ、その衝撃の凄まじさにクマの影は大きく仰け反った。

『グオオ……オオ……！』

「まだだ……ムラサキシキブ！」

『アムリタ』

ムラサキシキブが放った優しい光を浴びた悠達。その光を浴びた事で胸の中の突っ掛かりが取れた感覚を覚え、ペルソナを召喚しようとする。仮面達は今度すぐにその姿を現した。

「治ってる……」

「良かった……」

悠やりせは安心し、他のメンバー達も安心しながらそのままクマの影へ視線を戻すと、メギドラでもトドメにはならなかったらしく、クマの影は意識がまだあった。

だが、ダメージがない訳ではなく、既に虫の息だ。

『馬鹿な……死を与えられるのは……私……なのか……！ 私……！』

「そういう事だ……これで終わりだ」

悠はそう言ってイザナギを召喚し、クマの影へ大剣へ向けた。

(決着だ……)

洗夜も決着を疑わなかった。既にクマの影はボロボロであり、まともにも動く事も出来ないだろう。

体を休めたかった洗夜は少しだけ瞳を閉じようとしてる間にも、クマの影の恨み言は続いていた。

『死を……私に……貴様らが……!』

クマの影は血走った眼で悠達を睨みつけたその時だった。

“ 死の絆ヲ……望ムか……? ”

「ツ——ガアアアアツ!!」

「アアアアアアアツ!!」

突如、頭の中が締め付けられるような痛みを覚えた洗夜と悠は頭を抑え、その場で叫び声をあげる。

宿主の異常にペルソナ達も存在を保つことが出来なくなり仮面はその姿を消し、異変に気付いた陽介達は驚きながら、それぞれが二人へ駆け寄った。

「相棒!」

「鳴上君!!」

「洗夜さん!」

「大丈夫ツスか!」

陽介と千枝は悠へ、雪子と完二は洗夜の下へ向かい、りせはヒミコを召喚したまま困惑したまま待機している。

いや、立ち尽くしていた。ヒミコを通じて見える目の前の光景に。

「なに……これ……」

りせにだけ見えていた。ヒミコを通じ、洗夜からは巨大な黒い靄が噴出しており、悠とクマの影には互いに繋がっている黒い線の様なものが。

そして悠の頭の中には声が響き渡っていた。

“ 要らヌのナラば……真に欲スるモノに絆を……与えヨ……! ”

(頭が……!)

頭が割れそうに痛い。まるで脳を直に掴まれて無理矢理に話されている様だ。少なくとも悠はそれ故に意味ある言葉をいう事が出来なかった。

『これは……!!』

異変を感じたのはクマの影もだが、徐々に変化が起きる。

クマの影から肉眼で見える程の黒いウネウネとしたものが現れ、クマの影の左目の下には涙の様なメイクが出現した。

そんなクマの影の変化が終わったと同時に洗夜と悠も落ち着きを取り戻すが、目は血走り、呼吸も二人共乱れていた。

「ハア……ハア……！」

「今のは……！」

洗夜も悠も、そして陽介達も今はクマの影へ視線を奪われてしまった。先程よりも不気味さが増している。背筋に嫌な汗が全員に流れる程に。

しかしその中で洗夜だけが一人、事態の危険性に気付いていた。

（まさか……こんな事が起こるとは……！ 築いたのか……負の絆を……！）

拳を握り絞め、歯を食い縛りながら洗夜は無理矢理立ち上がり、全員を止めようとしたがそれよりも先にクマの影が動く。

『……ウルトラチャージ』

「ツ……させるか！」

クマの影が腕に力を溜めた事で攻撃が来ると判断し、陽介は阻止しようとしてジライヤを突撃させた。攻撃は悠と洗夜、そしてりせを除く三人もペルソナを召喚して参加し、共に出したが、我に返ったりせは止めようと叫んだ。

「駄目えっ!!」

りせに分かっていた。既に目の前のシャドウが先程とは別物、いや別格である事を。

しかし、それは間に合う事はなかった。陽介達がりせの言葉に気付いた瞬間、それは放たれてしまったからだ。

『魔手ニヒル』

瞬間、強風と爆音が辺りを包み込んだと認識した悠と洗夜、そしてりせが次に見た光景は陽介達四人がボロボロで倒れているというものだった。

「皆……！」

「そ、そんな……！」

悠とりせが目の前の光景の衝撃によって言葉を失いかけたが、二人にはそんな暇など存在しない。

『……怒り……憎しみ……』

ブツブツと何やら呟いているクマの影だが、その言動とは裏腹に右手を振り上げて攻撃を行おうとしていたのだ。

その事実に見つ先に気付いたのは洗夜だけだった。

「悠ー りせー」

動けない体に強烈な鞭を打ち、刀を抜刀しながら洗夜は二人の前へ立った。

刀を構え、盾の様にクマの影へ向ける洗夜だが、その瞬間に自分の体が宙を舞った事に気が付き、その後には強烈な衝撃と痛みが洗夜を襲った。

「——ガッ！」

擬音の様な声しか出す事が許されず、ギリギリの受け身を取りながら地面に叩き落とされた洗夜がその瞬間に見たのは、腕を振り払ったクマの影の姿。

それでようやく洗夜は自分が薙ぎ払われたのだと理解し、兄のその状態に悠は我に返る。

「兄さん!!? ——イザナギイイイ!!」

主の叫びに応え、イザナギは召喚と共に大剣をクマの影へと振り落とす。

『孤独……悲しみ……復讐……』

クマの影は大剣を左手で掴んで攻撃を防ぎ、そのままイザナギを押し潰そうとするが悠も負けてはいない。

「イザナギー」

『……』

悠の叫びに応えたイザナギは大剣からジオンガを放ち、強烈な電撃をクマの影へ浴びせる。

ゼロ距離での電撃により、クマの影の体や腕が焦げ、そして抉れたりするがクマの影のリアクションは何もなかった。

『妬み……恨み……』

「効いていないのか……!」

ジオンガを受けたクマの影の肉体は間違いなくダメージを受けているのが見て取れた。だが、にも関わらずクマの影の動きは鈍くなる事はなく、機械の様に忠実に悠達へ攻撃を行い続ける。

そんな狂気とも言えるクマの影を、りせはヒミコを通じて既に普通ではない事を知った。

「このシャドウ……既に意思はないの？ 力だけが暴走してる……」

りせはあまりの事に言葉を失いそうになる。

【危険】・【異常】・【解析不能】等とヒミコからも危険を知らせる情報しか入ってこない程に異常なのだ。

(けど……私は逃げる訳にはいかない!)

ここで自分がヒミコを解けば誰が目の前の人達を守るというのか。りせは決してヒミコを解かないという強い意志を抱き、その意志にヒミコが応えた。

ヒミコは更に力を強め、そのお陰でクマの影の情報の一握りを手にする事が出来た。のだが……。

「これって……あのシャドウのアルカナ？」

唯一りせが引っ張り出した情報、それはクマの影のアルカナだった。そのアルカナでは先程までの【月】ではなく……。

「道……化——」

「前を見る!!」

「ッ!？」

洗夜の叫びにりせが我に返った瞬間、目の前にクマの影の腕が迫っていた。

「イザナギ!!」

間一髪、イザナギがクマの影の腕を受け止めたが、徐々に押されて行く。

「まずい……」

悠も劣勢になっていく事に気付いている。だが他の仲間も既に戦闘不能状態。

洗夜も既に戦える状態ではない。……だが、洗夜にとって弟の危機

だけは見過ごす事は出来ないものだった。

洗夜は腹這いになりながら、ペルソナ全書を強く握り絞める。

(……『湊』……俺に力を貸してくれ……)

洗夜は心の中でそう呟き、蒼白き光を肉体から発しながら弟に仇なすクマの影を睨んだ瞬間、その時は訪れた。

『復讐……後悔……死——!!?』

クマの影が初めて動きを止める。いや、悶絶していた。

何故なら……自分の胸を一本の腕が背後から貫いていたからだ。

「これは……」

「何かが……いる……?」

悠とりせが困惑すると共にクマの影は前のめりに倒れると、クマの影を貫いた存在がその姿を顕にした事で洗夜がその仮面の名を呼んだ。

「タナトス……」

トラバサミの様な顔、刀の様な細い刃、背後に連なる棺と鎖。嘗て『有里 湊』と共にいた者ならば見た事がある筈の仮面。それが悠達の目の前のいる。

だが、それはあくまで『有里 湊』と『デス』のタナトスの姿だ。目の前のタナトスは『湊』と過ごした事で築いた絆、その片鱗を受けて洗夜が生み出したタナトス。

所謂、鳴上 洗夜産のタナトスである。それ故に有里^原 湊^産のタナトスとは容姿が多少は変わっている。

顔の左目の下に涙のメイク、周りに連なる棺も枠は棺だが中身は各アルカナが描かれているステンドグラスだ。

そして、一番の違いはアルカナであったが、それに気付く事は洗夜ですら分らない。

『死……死!!』

『——!』

タナトスは奇襲の様に突然、起き上がって腕を薙ぎ払って来たクマの影の右腕を片腕で止め、もう片方の腕でも掴むとそのまま裂いた。
「ひっ!」

目の前で起きた反撃と言う名の惨劇にりせは恐怖し、悠は言葉を失った。勿論、洗夜も言葉を失っていた。

タナトスのアルカナを洗夜が分からない理由、それがこれだ。今のタナトスは洗夜の意志で動いておらず、所謂オート操作だ。

生み出したのは洗夜だが、洗夜はタナトスの存在を維持しているだけに過ぎないのだ。

『マ……ハ……ブフーラ……！』

片腕が裂けてもクマの影は攻撃を止めず、マハブフーラをタナトスへ放つ。

タナトスには対氷スキルはない。タナトスにはこの攻撃は通るのだ。——本来ならば。

『――』

マハブフーラが迫る瞬間、タナトスが背負う棺の枠のアルカナのステンドグラス、その中の魔術師のステンドグラスが輝いた。

『道化師の戯れ』

『道化師の戯れ』を唱えると同時にタナトスの肉体が青色に変化し、片腕でマハブフーラを受け止めてそのまま氷を握り潰した。

『ヒート……ウエ――』

『ヴオオオオオオオオオツ!!!』

突如、発生したタナトスの咆哮がクマの影の全てを許さない。咆哮だけで部屋中に亀裂が走り、その衝撃にクマの影の動きが止まる。衝撃が強すぎて動けなかったのだ。

悠とりせも同じであったが、クマの影はいち早く動く事が可能となり、タナトスへ口を開けて呑み込もうとし接近した瞬間、決着がついた。

『――』

沈黙して動きを止めたクマの影。そして空間には肉を突き刺した様な生々しい音だけがそれぞれの耳に届く。

だが誰も何の音かは聞かない。目の前を見れば分かるからだ。タナトスが特に変わった動きをする訳ではなく、ただ右腕を前に出して手に持った刀でクマの影の額を突き刺したという事実を。

『…………』

タナトスは無言で刀を荒々しくクマの影から引き抜くと、クマの影は消滅しクマ？がその姿を現すと同時にタナトスは蜃気楼の様になる場所から姿を消す。

「終わったのか…………？」

「…………うん」

悠は文字通り、嵐が過ぎ去った様な虚しさの様な感覚を抱くが目の前の光景を何度見ても戦いは終わっていた。

その光景を見て冴夜は徐々に目を閉じていた。タナトスを召喚した事で最後の一滴まで力を使い果たしてしまったのだ。もう意識も保てない。

だが、気を失う冴夜は最後に悠の無事を確認すると多少の安心感を覚えたが、気を失う陽介達の姿を見て最後に心の中で呟いた。

(悠、すまない…………)

その言葉を最後に冴夜は気を失い、己の罪を胸に抱きながら眠りに就いた。

END

日常く再会く

第二十六話：一つだけの選択

7月3日（日） 晴れ

現在：堂島宅【洗夜自室】

（俺の部屋だ……）

洗夜は目を覚ますと同時に己の部屋にいる事に気付く。まだ完全に目を覚まさない頭を使い、最後に覚えているのがクマの影撃破の場面である事を思い出す。

カーテンからは既に日が出ており、洗夜は自分の隣に置かれている携帯を覗くと既に時間は昼、日付も3日になっている事にも気付いた。

（翌日まで寝ていたのか……）

流石にこれは寝過ぎだと思い、洗夜は布団から起き上がろうと足に力を入れようとした時だった。

「うおっ……!」

足に力が入らず、洗夜はそのまま転びそうになるのを両手で床を押さえて難を逃れたが、その拍子にドンツと大きな音と軽い衝撃を生んでしまった。

すると、階段を上がってくる音が部屋の外から洗夜は聞こえ、扉の方を見ると扉は静かに開き、中から悠が顔を出した。

「兄さん、もう大丈夫?」

「ああ……なんとかな。……だが、今の状態を知りたい。教えてくれ……」

「分かった」

悠は頷き、洗夜に現在の状態を教え始める。

「まずは……」

あの後、クマはもう一人の自分と向き合ってペルソナ使いに覚醒したり、りせも僅かな疲れはあったが大した事はなかった事。

その後、気絶した冴夜を何とか家まで運び、堂島と菜々子には疲れだと押し通した事等を悠は冴夜へ全て語った。

「バイトについてもリセが実家だから上手くやるってさ」

「そうか……迷惑を随分と掛けたな」

弟達だけではなくバイト先にまで迷惑を掛けた事に冴夜は、少しシヨックで表情を暗くした時だった。

「……ん？」

不意に視線を感じた冴夜が扉の方を向くと、微妙に開いている扉から陽介達が覗き込んでいた。そして冴夜と目があつた瞬間に「あつ」と呟きながら陽介達は扉のドアを開けた。

「お、おじゃましてまゝす……」

千枝が代表して冴夜に気まずそうに挨拶し、それに対して冴夜も軽く頭を下げると悠の方を向いた。

「来ていたのか？」

「来てたよ」

どうやら昨日の事もあつて今日は堂島宅に集合していたらしい陽介達。ある意味で病み上がりみたいなののである為、冴夜は休みたいのが本音だが、自分には言わねばならない責任があると言ひ聞かせ、陽介達を部屋へ招いた。

「まずは入ってくれ」

「えっ……ああ、どうも」

上の空、と言うよりも困惑している陽介が頷き、それに続くように千枝、雪子、完二、リセの順で部屋の中に入って来る。

そして、リセが冴夜の姿を捉えると素早く冴夜のいる布団に飛んできた。

「冴夜さん!? 大丈夫だったんですか!」

「……ああ、助けに行つた方が逆に心配を掛けてしまったな」

そう言つて冴夜は笑顔をリセへ向けるが、顔色までは笑顔に合わせる事は出来ない。リセも、他のメンバー達も全員が冴夜の空元気に氣付いていた。

「……」

洗夜が無理をしているのが明らかの中、陽介は何やら言いたそうだが洗夜の事を考えたのか、言いづらそうに口をモゴモゴと動かしていると、それを見ていた完二が溜め息を吐きながら動いた。

「洗夜さん……疲れて途中で申し訳ないんすけど、洗夜さんがペルソナ使用の理由とか聞かせて欲しいんすよ」

「なっ！ 完二!？」

「ちよつと完二君、本当にちよつと待って!？」

それを言うのかと、陽介と千枝が完二を止めようとしたが、逆に完二はそんな様子の二人を呆れた様子で見つめ返した。

「何、他人事みたいに言ってるんすか？ 最初に聞き出すぞ!……つて息巻いてたのは花村先輩達じゃないツスか?……つたく、いざ来たらこれかよ」

「えっ!?……あ、まあ、その……」

凶星なのだろう。完二の言葉に陽介はバツが悪そうな表情を浮かべ、千枝もあたふたしてる。

そして、そんな二人の様子に対し昨日ペルソナ使用に覚醒したばかりのりせは頭を捻っていた。何故、そんなに聞きづらそうなのかと。

「ハハ……勢いで来ては見たものの、俺の様子に頭が冷えて自分達が非常識なんじゃないかと感じたたつてところか?」

意外にも二人の心を代弁したのは洗夜であった。そしてそれも凶星らしく、陽介と千枝は肩を落とす。

「す、すいません……」

「す、すいません……」

反射的に謝る二人だったが、洗夜は全く気にした様子はなく、逆に笑みを浮かべていた。

「気にするな。……君達が俺の事を知りたがるのは当然の事だ。——それで、悠からはどこまで聞いた?」

最後のところで表情と声を真剣なものにし、洗夜は自分以外の全てに問い掛けた。

「俺が話したのは兄さんの覚醒はこの事件と無関係で、別の事件だつて事まで」

「そうそう！ それぐらいまでは聞いた！」

悠の説明に千枝が食いつき、洗夜は悠が本当に最低限の事までしか教えなかった事が分かった。

「そうか、それじゃあ……まずはそこを踏まえて話さなきゃな。——俺がペルソナに目覚めたのは今から五年前になる」

洗夜は悠達に話し始めた。

全ては五年前、辰巳ポートアイランドで巻き込まれた不可思議な現象によって自分がペルソナ能力に目覚めた事を。

『影時間』『タルタロス』『特別課外活動部』等も話したが“桐条”の名は洗夜は伏せた。最早、終わった事件の全てを話す必要がないからだ。

だが『ストレガ』については話した。ペルソナ使い同士の戦い、おそらく可能性でしかないが悠達には己と同じ存在と戦うという覚悟はないと洗夜は判断していた。

シャドウならば迷いなく戦えるが、同じ人間同士ならばどうか？

下手な迷いによって取り返しのつかない事態を巻き起こす事になる。

そして、洗夜はあの事も話した。

『荒垣 真次郎』が起こしてしまった過ちの事も。

「大体は……こんなものだ」

簡単にだが、核心を含めた事を洗夜が話し終えて悠達の方を見ると、悠は耐えたようだが他のメンバー達の顔色は青白く染まっていた。

「んだよそれ……」

「影時間……タルタロス……私はその時点で理解が限界。……でも……」

理解できない陽介と理解が追い付かない千枝。だが千枝が何か言いたそうな事に皆は気付いており、雪子が続きを呟いた。

「ストレガ……」

「そうだよ！ なんでペルソナ使い同士で戦うんですか!? 同じペルソナ使いなら戦う理由なんて……」

雪子の呟きにりせが身を乗り出して言い放ち、そんなりせの疑問に

洗夜は静かに答える。

「彼等は、人工のペルソナ使い」だった。寿命を減らす薬で無理矢理に仮面を制御しなければ、彼等は仮面の制御を出来ず……ペルソナに殺される。——ペルソナ使いとして生まれた彼等だ、影時間の消滅を目的としていた俺達とは分かり合えなかった」

「嘘だろ……オイ……」

今度は完二が言葉を失う。言葉だけでは全部が全部、信じられる訳じゃないが想像したら血の気が失せたのだろう。

「その人達は今は……？」

悠が洗夜に問い掛けた。その問いの内容に場の空気が静寂に包まれる。

「三人の内、一人を除いて後は……死んだ」

洗夜の言葉に静寂の中で誰かの息を呑む音が耳に届く中、完二がスツと手を上げた。

「洗夜さん……その……ペルソナが暴走して……その……」

完二は真次郎の事を聞きたいのだと洗夜は分かった。おそらく、言い方を考えているのだろうが言葉が見つからないのだろう。

ちゃんと考えて言葉を選ぼうとする完二の優しさを察した洗夜は、そのまま結論を言った。

「遠くへ行ってしまった」

「えっ？……あつ」

洗夜の言葉の意味が分からなかった完二だが、すぐに言葉の意味を理解した。そして再び流れる沈黙の後、陽介が思わず呟いてしまった。

「ペルソナ使い同士で殺し合ったのかよ……」

「!?」

無意識の発言だったのだが、その発言は適切だったものではなく隣にいた千枝が陽介の頭を叩き、軽くも乾いた音が部屋に響く。

「イテツ!？」

「花村さ……あんたって本当に碌な事を言わないんだから！」

「……あつ」

千枝に叩かれた陽介は呆気になりながら自分の失言に気付き、急いで頭を下げた。

「す、すみません!」

陽介の言葉に他のメンバー達は呆れた様に溜め息を吐くが、当の洗夜も表情は暗くなつたが怒つた様子はなかった。

洗夜は首を横に振りながら、静かに口を開いた。

「実際、本当の事だ。……色んな人が傷付き、そして沢山の命が消えた。……俺はそんな戦いを何も出来ずに生き残ってしまった。……最後は仲間すら傷付けてな」

洗夜はそう言つて机の上にある写真立てに目を向け、悠もそれに釣られて目を向けた。

「その写真の人達が?」

「……もう二年も会つてもなければ連絡も取つてないがな」

洗夜から切なさが見て取れた。そんな兄の姿に悠は息を呑み、陽介は陽介で顔色が悪くなつていた。

(人が……仲間が死んだ? 命を削るペルソナ使いが敵……?)

陽介の頭の中で色んな考えが浮かぶ。今までの自分達の行動、ジュネスで話し合つていた時に自分が抱いていた感情は『楽しさ』『刺激』しかなかった様な気がしてならない。

勿論、陽介は小西 早紀の事もあつて事件解決の事には真剣だ。だが、目の前の洗夜の言葉を聞いている内に自分に自信が無くなつてきた。

自分はこれで良いのかと、遊び半分が内心であるかもしれない自分がペルソナを使って良いのかと?

自分のシャドウが言つていた小西早紀を理由に刺激を求めた事、それも陽介の脳裏に過つた時だった。雪子が洗夜へ話しかけたのだ。

「洗夜さん……私達、どうすれば良いですか?」

「……どういう意味だい?」

顔を暗くして思い詰めた様に言う雪子に洗夜は聞き返す。だが、悠達はその意味を分かっている。自分達の行動が正しいのかどうか、それが気になっているのだろう。

陽介もそうであり、真剣に聞こうと意識を集中していた。

「冨夜さんの話を聞いていて……私達のやっている事が本当に良い事なのか分からなくなつて……」

「だが、君達はテレビの世界とシャドウが警察には解決できないとも思っている筈だ。だからこそ、叔父さんに怪しまれながらも続けていくんじゃないのか？」

「……言葉を変えます。私達が……ペルソナを安易に使つて良いんでしょうか？」

雪子の言葉に冨夜は黙つた。そして少し考える素振りをすると静かに話し出した。

「俺から言えるのは……俺に言われたからこうするって言うのなら、もうこの事件から手を引くんだな」

「!？」

冨夜の言葉に悠を除くメンバー達が息を呑む。冨夜の言葉には疲労感などは出さず、真剣なものだった。

「冨夜さん……どういう意味ですか？」

一番、経験が浅いりせが冨夜に聞くことができ、冨夜はそれにすぐに答えた。

「君達は自分自身と向かい合い、そして自分達が正しいと選択して事件を追つていた筈だ。本来ならば、俺が言う事じゃない……いや、誰にも言える事じゃない。俺が言ったから、誰かに教えられたから……そうじゃない」

冨夜はそこまで言い、横に置いてあるペルソナ全書を手に取り、表紙を撫でた。

「人は選択して生きて行く。……一人で選択する者、一人で選べないならば二人で……三人で……と選択して行く。少なくとも、悠と君達はそうやって戦つてきたんじゃないのか？——君達はもう自分達で選べる筈だ」

冨夜はそう言つて悠へ視線を向けた。

「俺の力はもう要らない。……お前達の意志で進むんだ」

「うん！」

悠は頷き、他のメンバー達も静かに頷いて返した。



その後、疲れている洗夜に負担を掛けさせまいと悠達はジュネスへ行く事にした。悩んだ表情の陽介・千枝・雪とは違い、完二とりせは洗夜に迷いなく笑顔で頭を下げて下に降りて行った。

そして、悠も降りようとした時だ。洗夜が悠を呼び止める。

「悠……」

「……どうしたの？」

悠は足を止め、その場で振り返ると洗夜は苦笑しながら言った。

「俺は暫く……戦えない」

兄の言葉に悠は目を大きく開いて言葉が出なかった。だが、理由は気づいている……と言うよりも思い当たるところだ。

「もしかして……クマのシャドウで？」

「気付いてたか……あのクマのシャドウに変化を与えたのは俺のワイルドの力、その片鱗だ」

薄々だが、悠ももしかしてとは思っていた。何かを感じ取れた訳じゃない、だが悠は兄の力だと感じ取れていた。

「悠……俺はもうペルソナを制御しきれていない。力は弱体化している中、ワイルドの力の一部が日々々に大きくなっている。……だから、俺はお前等と戦えない」

「分かった……」

「素直だな……」

「兄さんが弱音を吐く時は本当に大変な時だから」

悠はそう言っつて部屋を出て行くが、どこか悲しそうな表情を廊下で浮かべ、静かに階段を下りて行った。

そして悠が部屋を出た事で洗夜は自室で一人になり、壁に触れながら何とか立ち上がり、机の上にあるバイクや家の鍵の束を掴み、その中の小さな鍵を取って引き出しの鍵を開けた。

その引き出しの中には瓶に入ったカプセルが大量に入っていた。

(真次郎……湊……お前等に会うのは遠い未来じゃなさそうだ)

洗夜自身、既に限界が来ていると気付いていた。抑圧していた力だが、まさかシャドウにすら影響を及ぼし始めたとなると洗夜も覚悟やら何やらの問題ではないと判断していた。

これ以上は自分のペルソナに殺されるが、それよりも先に悠達を傷付けてしまう。これ以上はペルソナ達すらも凶器にしてしまう。

それを防ぐ為、洗夜は友から取り上げた劇薬に手を付ける。

「悪いが……悠に手は出させない……！」

洗夜は手にカプセルを一つ取ると、一瞬、歯を食い縛った直後、それを呑み込んで顔を下に向ける。

呑んですぐだが体に異常はなく、まだ副作用は大丈夫だろう。

（選択をやめた人間は生きていと言えない。それが今の俺だ……俺のせいで……誰かを傷付けたくはない。……俺の心の弱さが生んだ力で……）

洗夜は顔を上げて机の上にある写真立てを見ると、写真の友人達と目が合った。

そんな友人達に洗夜は「すまない……」とだけ呟き、その場に膝を付いた。



同日

現在：稲羽警察署

「なんだよ……」

帰宅しようと思っていた堂島は嫌そうな顔で携帯を見詰めていた。画面に写っている向こうの人物は『姉』とだけ書かれている。

そう、堂島にとつての姉であり、洗夜と悠の母親だ。同時に電話してくる時は大抵、碌でもない時でもある。

故に堂島は溜息を吐きながら電話に出るが、予想はすぐに当たる。

「もしもし……」

聞こえてくるのは姉の声。特に変わらない声だが問題は内容だ。

姉からの連絡のない様に徐々に堂島の顔色が変わり、本題によって堂島の表情が壊れた。

「はあっ!?! “見合い” だあ!?!」
堂島の叫びが署内に響き渡った。

END

外伝：堂島 遼太郎編

とある日の出来事。

現在：堂島宅【居間】

現在、悠は叔父である堂島と二人で話しをしている最中。学校はどうだ？ 友達は出来たか？ 勉強は大丈夫か？

等と言った、たわいもない話しだったのだが……。

「……一つ聞いて良いか？ この前、署でちよつと耳にしたんだが……お前とお前の友人だが、よくジュネスに行っているらしいな」

そう言っつて悠を見詰める堂島の目はどこか鋭く、その視線は痛く、悠は冷や汗を流す。

何故か、今回の事件に関係していると思われる事件の裏に、必ずと言って良いほど悠達が絡んでおり、その為か例え身内であろうとも怪しいと思われる行動を見つかれば容赦はしない。

そして、悠自身も堂島の獲物を見るかのような視線を外せずにいた。はつきり言っつて、殺人事件を捜査しているのだから十分に後ろめたい。

「一応言つとくが、それ自体は何も問題ない。ただ、問題なのは……何で頻繁にジュネスの家電売場に入入りしているかと言う事だ！」

堂島の眼光が悠を捉え、悠は余計に目を逸らせなくなった。

今思えば、確かに怪しい行動と言える。ゲームコーナーならばまだ弁明の余地があったのだが、家電コーナーならば弁明は難しい。

シャドウの事を言う訳にも行かず、悠が言い訳を考えていると……。

「お父さん……？」

悠が悩んでいる最高のタイミングに菜々子が目を擦りながら自分達の下に歩いて来たのだ。

「皆、揃っつて何やってるんだ？」

そう思っつている内に、兄である洗夜も来て、堂島も悠を問い詰める所では無くなっつてしまい焦りが現れ始めたが、悠にとっつてはまさに地獄に仏。

そして、今度は菜々子が堂島に非難の視線を向ける。そんな娘の視線に、堂島は悠に何かしている事に怒っていると思い、言い訳を考えようとしていた。

「あ、いや、そのな……違うぞこれは……だから、事情聴取じゃなくてな……」

そう言いながら慌てる堂島を見て悠は、珍しい光景だと思いながら見ていた。何だかんだで堂島は、娘の菜々子に甘い。

そして、責める様な瞳の菜々子に何か言われるかと思ひ、気まずく言葉を待つ堂島だったが……。

「お兄ちゃんとはっかかりずらい!」

「……何?」

自分が思っていた言葉とは違ったらしく、菜々子の言葉の意味が解らずに聞き返す堂島を見て菜々子はゆっくりと口を開く。

「だって、今日はお父さんいるのに……」

その言葉に堂島は菜々子の言いたい事が分かり、静かに溜め息を吐くと静かに頭を撫でた。

「……あの菜々子、お前とはいつも話してるじゃないか」

「いつもって、いつ?」

「……っ!」

「……」

菜々子の何気無いこの一言。受け取り方は人それぞれだが、少なくとも堂島は何か思う所があり、菜々子の言葉に撫でていた手を止めて黙ってしまふ。

そして、洗夜も先程から真面目な顔をして状況を見守る事だけに集中していた。

「菜々子も一緒にいる……!」

目を擦りながら眠そうに話す菜々子に気付き、堂島はふと、時計を見ると既に時計の針は11時を回っていた。

身体が出来ている自分達とは違い、まだまだ成長期の菜々子には既に寝る時間であった。

「ったく……もう寝る時間だろお前は、だから今日はもう寝なさい。」

今度必ず遊んでやるから……洗夜、頼んでいいか？」

「了解……菜々子、一緒に部屋に行こう」

洗夜の言葉に黙って頷く菜々子。その表情は、何処か納得した表情とは言えないが、睡魔には逆らえ無かつたらしく菜々子は堂島の方に顔を向けた。

「絶対だよ……」

そう言っただけ菜々子は、洗夜に連れられて部屋へと歩いて行った。その時の表情と後ろ姿は、何処か寂しそうだ。悠の中に強く印象に残る。

「いつもっていつ……か」

菜々子が部屋に行くのを確認してから堂島はゆっくりと口を開き、先程、菜々子が言った言葉を繰り返していた。

普通の家庭ならば余り聞かないワードだが、色んな意味で忙しい堂島にとってはとても重く、そして辛い言葉とも言える。

しかし、事前に母親から聞かされていた洗夜とは違い、堂島家について余り知らない悠には良く分からなかった。

「叔父さんは子供は苦手？」

悠の質問に堂島はゆっくりと首を横に振る。

「いや、別にそう言う訳じゃない……が、まあ、だからと言って得意って訳でもないがな」

そう言っただけ苦笑いしながらも表情が暗くなる堂島を見て、悠は堂島の過去に何かあったのだと気付く。

「正直な話、あの子のことは妻……あいつの母親に任せっきりだった。だから、その……どう接すればいいか、加減や態度とか、その……よく解らねえんだよ」

悠は堂島の言っている意味が理解できなくなった。悠は両親が共働きだったから堂島ではなく、菜々子の気持ちが良い分かるのだ。

自分には兄である洗夜がいてくれたから多少の寂しさは何とかなったが、基本的に家では一人だった菜々子はそうは行かない。

本来ならば、菜々子ぐらいの子供は親に甘えたいのが普通。

そう思いながら、悠は堂島の言葉を聞き続けた。

「それにな……俺じゃ、あいつの家族は務まらんだろ……」

「……意味が解らない」

悠は気付いたら堂島へ向かってそう言っていた。

そして、悠の言葉に堂島は苦笑いした。

「ハハ……正直だな、お前は……」

悠の言葉にそう言っ言葉返すと、表情を戻して堂島は話し続けた。

「血が繋がってれば家族か？ そうじゃないだろ……これじゃ、姉さん達の事は言えねえな」

堂島はそう言うのと頭の中にある、とある記憶を呼び起こした。

(昔、洗夜が家に来たときの事を思い出すな……)

堂島はそう思うと同時に、小さい時に物心が着き始めた時に家に来た洗夜の事を思い出していた。

”あの頃”の洗夜は、それだけ堂島にとって印象が強かったのだ。

「……叔父さん」

堂島の言葉の意味を知ってか知らずかは分からないが、悠は自分が堂島の事を誤解していた事に気付く。

そして、堂島自身も苦しんでいると分かったが同時に表情が固くなった。堂島は気付いて我に戻った。

「ああ、すまん、お前に聞かせる話じゃなかったな。……もう、遅いからお前も寝なさい」

「うん……おやすみ」

「ああ、おやすみ」

今日はもう話す事が無いと思った悠は堂島にそう言って自分の部屋へと戻って行った。



階段の隅で、悠と堂島の話を持ち聞きしていた洗夜は少し考えていた。

(……叔母さんが亡くなってから叔父さんは叔母さんをひき逃げした

奴を追うことに執着している。……しかも基本的に家の事は叔母さんに任せていた叔父さんにとって、菜々子への接し方が解らないのは当たり前だ。それに、刑事である父親が、母親を殺した奴を捕まえられてないとは菜々子には言える訳も無いか)

出来ればこの町にいる間に何とかしてあげたいが、今は自分に出る事は無いと思いい洗夜も部屋へと戻って行った。



あれから少したったある夜の事。

堂島は台所でコーヒーを入れ様としていると階段から降りて来た悠に気付いた。

「コーヒー入れるんだが、お前も飲むか？ インスタントだがな」

「それじゃあミルク入りで……」

悠は何気なく言ったつもりだったが、その言葉を聞いた堂島の表情が一瞬だが固まり、危うくコップを落としそうになった。

「……何か変な事を言った？」

「……えっ!?! あ、いや、そう言われるのは随分と久しぶりだったからな……思わず反応が遅れちゃった」

きつと叔母の事を言っているんだと、悠は何となくだがそう思った。

「お父さん！ 早く早く！ テレビ始まるよ！」

テレビの前で、洗夜の膝の上で座っている菜々子がこちらを向いて呼ぶ。そして、その様子を見た堂島は笑いながらコーヒーを入れる準備をし始めた。

「ははは！ 分かった分かった、ミルクと砂糖をたっぷり入れて持ってってやるからな！」

「うん！」

菜々子の返事を聞いて悠は言葉の意味を理解した。

「お前も先に行ってる」

「それは流石に悪い……」

居候させて貰っているのにも関わらず何もしない訳には行かない

と思い、悠は堂島を手伝おうとするのだが、居間にいる洗夜がそんな悠を止めた。

「良いんだ悠、コーヒーに関してだけは叔父さんの仕事なんだ」
「？」

居間で奈々子を膝の上に乗せている洗夜の言葉に意味が解らないと悠は頭を捻るが、そんな悠に堂島は小さく笑いながら説明した。
「いや、悠……洗夜の言う通りなんだ。結婚する時に、あいつの母親に約束させられちまったんで……」

何処か照れ臭そうな様子で話す堂島だが、その表情は嬉しそうに悠は見えた。

「約束？」

「ああ、家の事はこれだけでいい。そのかわり必ず、ずっとやる事ってな……だからまあ、その……すっかりクセみたいになっちまったって訳だ。それに、俺が守ってやれるのは、もうこの約束くらいだ……」
「……」

悠は堂島の言葉を聞いた瞬間、何故か言葉が出なかった。

そして、悠と堂島は気付かなかったが堂島の言葉に一瞬、洗夜も反応していた。

また、そんな悠を見て堂島が照れ臭さそうに言った。

「まあ、その……先に向こう行ってる」

そう言われ悠は洗夜と菜々子の所に行き、一緒にテレビを見る事にした。



悠達はテレビのニュースを見ていたが、余りめぼしいニュースは無い……そう思った時だった。

『次のニュースです。今日、●●市郊外で自転車に乗っていた女性が車に跳ねられ死亡しました。また、轢いた車はその場から逃走しており、轢き逃げ事件と見られ、現在も警察が行方を追っております。また、目撃者の話からその車は——』

「！」

そのニュースになった瞬間、洗夜が素早くテレビの電源を消し、そのまま立ち上がった。

「俺は風呂に行つて来るよ……」

そう言つて風呂へ向かう洗夜を見て、堂島はすまなそうな顔をした。

「洗夜……すまんな」

堂島の言葉に洗夜は、無言で手で合図して風呂に行き、堂島も立つて部屋に行つてしまう。

そして、この場には悠と菜々子だけになってしまった。

「お父さん達のようすが変だったのは、『ごうつうじこ』のニュースしたから……お母さん、事故で死んじゃったから。……だからななこ、お母さんの事、覚えて無いんだ。お父さんは、ぜんぜん話してくれないし……」

悠が分からなそうにしていた為、菜々子は悠に説明をすると部屋に戻つて行つた。

「……」

悠は洗夜と違つてこの家の事は余り知らないが、このままじゃ駄目なのは分かる。

しかし、どうすれば良いかも分からず、悠は部屋に戻つた。



とある日の夜、堂島はテーブルの上に新聞を広げて何かを探していた。

そして、その新聞記事を見ながらブツブツと文句を言っていた為、何故か気になつてしまい悠はテーブルに近付いた。

「あるとすりゃ、後は……つたく！ 今時の若えのは資料の整理ひとつもまともに出来ねえのか！……って、お前じゃないんだ、すまん……」

「手伝う？ とういか何をしてるの？」

「ん？ 実はな……」

堂島は昔の新聞記事がボロくなったからコピーを取り直したかったのだが、そのコピーがどつかに紛れたらしく、それを探しながら愚痴を言っている時に悠が来たと言明する。

「そんなに重要な内容なの？」

「ああ、ある事件の犯人がまだ上がらねえんだ。なのに、新しい事件のせいで風化しかかってんだ……！」

そう言っつて、拳を握り締めながら言う堂島を見て、悠はその事件がどれだけ堂島にとって大切なのかよく理解した。

「けどな、俺だけは諦める訳には行かねえんだ……絶対にな」

「お父さん……」

悠が堂島と話していると菜々子が来たが、少し顔色が悪い。

「なんだ、どうかしたか？」

「なんか、お腹痛い……」

「悪いもんでも食ったのか？」

「……叔父さん、それは晩飯係の俺に対する冒瀆だ」

「うおっ！ いつからいたんだ!?!」

洗夜の突然の登場に驚く堂島。悠の中にも、たまにわざとでは無いか?と思う自分がある。

「ついさっき、でも確かに顔色が悪い。……天ぷらに使った海老が駄目だったのか? いや、菜々子にアレルギーは無いし、あの海老も痛んでなかった」

そう言いながら洗夜はその場にしゃがみ、菜々子の顔を見る。

「うーお腹の下のほうがちくちくする……」

そう言っつてお腹を抑えだす菜々子の言葉に堂島は慌てて立ち上がった。何かあってからは遅い、そういう気持ちで悠にも出て来る。

「何だっつて!?! きゅ、救急……い、いや、確か前にもあったな。あの時と同じ感じか!?!」

「……わかんない」

「……まさか」

堂島が慌てている中、洗夜は何か気付いたらしく、その場から黙って移動してしまうが堂島はそれに気付かず、頭を押さえて悩み出

す。

「クソ……、あの時の薬は確か……」

そう言つて堂島が頭をかきながら考えてると……。

—— P i P i P i

堂島の携帯が鳴り出してしまい、堂島は少し乱暴に携帯を開く。

(叔父さんの携帯……もしかして事件?)

悠がそう思いながら状況を見守るが……。

「こんな時に……—はい堂島……なんだ足立か、切るぞ。……なに封筒? しかも俺に? ひよつとして市原さんからか!? いつ!? ……なに、昨日来たけど忘れてた!? ふざけやがって!! すぐに行くから準備してろ!」

携帯を乱暴に仕舞うと堂島はコートを持った。その様子から仕事に行くと言う意味である事に悠は気付いた。

「叔父さん、まさか……!」

「——出て来る。救急箱の中に薬があるはずだから……頼む」

そう言つて堂島は、苦い顔をして逃げるように出かけてしまった。薬の場所を言われたからと言つても、どんな薬かは分からないが何とか探そうとした悠だが……。

「これだな……悠。これを菜々子に飲ませろ」

話している最中に救急箱をあさっていた洗夜。何故、洗夜が菜々子の薬が分かったのかは謎だが悠は薬を受け取り、菜々子に飲ませて寝かせる事にした。

そして数時間後……。

悠は洗夜と落ち着いた奈々子が眠つたのを確認し、一緒に堂島の帰りを待っていた。

すると、そんな時に堂島が帰つて来たが、何処か機嫌が悪そうなのを悠と洗夜は感じ取っていると堂島は溜息をを吐きながら玄関を閉めると悠達に気付いた。

「……ん? 洗夜、悠。お前等、まだ起きてたのか。もう遅いだろ、早く寝ろ!」

その堂島の言い方に、少しイラつとした悠と洗夜。誰のお陰でこん

な事をしていていると思っっているのだろうか、と口には出さず胸の中にしまう。

「どういうつもりだ？」

「流石に言いきすぎだ叔父さん。こつちだって色々やっていた」

「——ツ！ うるせえな！ お前等にそんなこと言われる筋合いは……そりゃあ、あるよな。すまない、菜々子は どうしてる？」

悠と洗夜の言葉に逆ギレしかけた堂島だが、すぐに冷静になり自分に非がある事を認め、二人に任せた菜々子の事を聞いてきた。

「落ち着いて寝たよ」

堂島の言葉に答えたのは洗夜だ。こういう時の洗夜は何だかんだで頼もしい。

「そうか、寝てるか……お前等がいてくれて本当に助かった。今日はもう遅いから寝てくれ……」

そのままテーブルに座る堂島に悠は一言なにか伝え様としたが、洗夜に肩を掴まれてしまう。

そして、洗夜が無言で首を横に振ったのを見て悠は部屋に戻った。



あれから数日、悠は堂島を探していた。

あの新聞記事の事が気になり、その事を堂島に聞いてみたかったからだ。

「新聞記事のコピー……？ ああ、見付かったよ。すまん心配したか？」

居間でコーヒを飲んでいた堂島は悠の言葉にそう伝え、悠は首を横に振る。ただ気になっただけなのだから、そんなにたいそうな事では無いのだ。

「いや、ただ気になっただけだから」

その言葉に堂島は笑いながら「そうか……」とだけ呟いた。

「実はその新聞は妻の……千里の記事なんだ。ひき逃げされて死んだ時のだ……」

「……！」

突然の事で少し驚いたが、悠もそんな気はしていた。

そして堂島がゆつくりと語り始めるのを見て、悠は静かに聞く事にした。

「前に話したな……まだ犯人が上がってない事件の事を。……もう分かっただろうか？　これ以上は家の中でする話じゃない……」

そう言っただけで表情を暗くしながら下を見る堂島だが、悠はここまで聞いたという途中下車をする気は更々なかった。

「じゃあ、外で話せば良い」

悠がそう言うのと堂島は一瞬、驚いた顔をするがその後には苦笑いした。

「ははっ！　まったく……かなわんな、お前には」

「俺は？」

「うおっ！」

また冴夜の突然の出現に堂島は驚いてしまった。

その様子には悠は自分の家族が心配を消し、いきなり出て来ると言う行動を目の当たりにしているのは、恐らく自分達だけだろうと思っ

た。

「お前、いつからいたんだ？」

「部屋にいたけど、暇だから降りて来た。……つまり、ついさっき」

「部屋……？　　そういやお前、ここ最近は何か書いてたな……」

「叔父さん話がズレてる。兄さんも邪魔しない」

冴夜のおかげでシリアスな空気が一瞬で無くなった事に軽く悠は怒るが、そんな様子に冴夜は逆に楽しそうだ。

そして、悠の言葉を聞いて話の続きを堂島は始めた。

「冴夜は知ってると思うが……」

堂島の話は、悠が思ってたより辛い話だった。

当時、菜々子の母親は菜々子を保育園に迎えに行く途中にひき逃げされた。しかも、その日は寒い日で目撃者もなく、発見も遅れたらしく堂島に連絡が来るまで菜々子は保育園でずっと待っていたのだと言

う。

いつまでたつても来ない迎えを、ずっとたった一人で……。

「殺されたって菜々子には言えなかった。犯人を捕まえるのが仕事の父親が……足どり一つ掴めねえって事も。——だが！俺は必ず犯人を上げる。その為ならプライベートなどない、菜々子だって分かってくれる筈だ」

悠は堂島の言葉を聞いてどう言えば良いか分からなかった。

(言い訳だとしても言えはいいのか……)

そう思いながら悠が悩んでいると、洗夜が口を開く。

「……叔父さん。叔父さんの菜々子に対するやり方は間違ってる。——そして正しくも無い」

「……」

洗夜の言葉に堂島は黙って聞いている。それだけで内心では堂島自身も同じだと分かる。

だからこそ、堂島はこんなにも苦しんでいるのだ。

「菜々子は知りたがってる、なんで自分には母親がいないのか。叔父さんの表情を見て聞かない様になっているが、本当は母親の事が聞きたいんだ。あの子には知る権利がある……」

「だがっ！菜々子はまだ幼い……言えるのか！菜々子に自分の母親は自分を迎えに行く途中で殺され、そして刑事の父親は何も手掛かりを掴めて無いとっ！」

堂島は洗夜の言葉を上げるが、洗夜は落ち着いて言い返す。

「それでも知りたい筈だ……どんなに辛い内容でも、自分の母親の事を知らないままな事に菜々子は苦しんでいる。叔父さん……叔父さんも苦しんで、菜々子も苦しんでいる。……両方共が苦しむだけで一体、誰の為にしている事なんだ？」

「っ……だがあの子はこの事実には耐えられん！このままが菜々子にとって一番いいんだ……！」

「……菜々子がそう望んだのか？」

(兄さんが何か凄い)

堂島と洗夜の会話に入る場所がなく、悠は黙って聞いていた。

そして、堂島は洗夜の言葉に少しだけ顔を下に向けた。

「……今は望まなくとも分かってくれる日が来る。……そう思うしか

無いだろう。——すまん、今は一人にしてくれ」

そう言われると一人にしない訳にもいかず、悠と洗夜は立ち上がり部屋に向かおうとすると堂島が口を開く。

「洗夜、そして悠……ありがとな」

そう言われて、二人は部屋へと向かった。



とある日、悠はいつも通り居間で堂島と話をしていた。あれから結構、時間が経つが堂島との会話も増えてもいた。

するとそんな時、菜々子が目を擦りながら居間に来た。

「もう寝る……」

「ん？ ああ、もうそんな時間か……」

時刻を見たら既に11時になりかけている。小さい菜々子にはもう寝る時間。

悠も堂島と同じ様に考えていたのだが、何故か菜々子はその場から移動しようとしなない。それどころか、何故か堂島を不満そうに見詰めている。

「む〜」

「な、何だ……？」

流石に気になったのか堂島が菜々子に聞いた。最初からそうすれば早かったのだが、何となく聞きづらかった様だ。

「お父さん……今日、寝る前に本よんでくれるっていったのに……」

菜々子の言葉に堂島の表情が変わった。どうやら、完全に忘れていた様だ。

「あ……ああ、そうだったか。分かった分かった、少しだけだぞ」

「やったー！」

根負けした堂島と喜ぶ菜々子。これはこれで、なかなか貴重な絵である。

だが……。

P i P i P i ……！！

堂島の携帯から音が響き渡り、悠は少し嫌な予感がした。

「すまんが、ちよつと待つてろ……」

そう言ってポケットから電話を取り出し、電話に出る堂島。

「はい堂島……市原さん!? はい、はい……そんな……! それじゃあ結局……あの、市原さんの都合さえよければ今からそちらに……はい、分かりました。それじゃあ……」

そう言って電話を切る堂島だが、その表情は魂が抜け掛けている様な表情をしていた。

「……お父さん、いっちゃうの?」

「……仕事だからな」

悲しそうな菜々子の顔を見て、堂島は自分に言い聞かせる様に呟く。しかし菜々子は諦めきれないらしく、今にも泣きそうな表情で堂島を見た。

「でも、今日は読んでくれるって……」

「そんなのはいつでも……」

「それは、菜々子より大事なことなの?」

「!」

悠の言葉に目を開く堂島だったが、その場で溜め息を吐きながら頭を掻き、静かに呟いた。

「んな筈ねえよな……」

そう言って奈々子を見つめる堂島。今、自分の目の前で今にも泣きそうな一人娘に代わるモノ等は無いのだから。

「ケンカしてるの? い、行つていいよ……お父さん」

「ケンカじゃないさ、菜々子」

悠と堂島のやり取りを見て不安そうな菜々子の肩に、いつの間にか来ていた洗夜が手を置いた。

そして悠も堂島も、洗夜の突然の登場にも慣れたのか敢えて何も言わない。

「本当……?」

「ああ、洗夜の言う通りだ。ごめんな菜々子……それより本って、どれだ?」

「……いいの?」

「約束だからな……ほら行くぞ」

その言葉で菜々子の表情が明るくなる。

「うん！」

その笑顔は年相応な笑顔だったが、随分と久しぶりに見た気がする。そう思いながら堂島は菜々子と部屋に向かった。

それから数分後……。

「やれやれ、まさか、本一冊を読まされるとはな……」

部屋から出て来た堂島が、苦笑いしながら悠と洗夜の方を向いた。

そして、堂島は気まずそうにしながら口を開いた。

「少し話でもするか？」

▼▼▼

現在：堂島宅【庭】

「さっきの電話な……市原さんって言って俺の元先輩だ。千里のひき逃げの捜査で鑑定やつてもらってる。……さっき鑑定結果が出たって電話だった。あの様子じゃあ、警察の調べ以上の事は出なかったんだと思うがな……」

恐らく、その市原さんの鑑定が最後の希望だったのだろう。只でさえ、手懸かりが少ない事件。それもあって、堂島は拳を握り締めていた。

「出向いた所で、それが変わる訳じゃないって分かってたんだがな……何もしない訳にも行かなかった。千里を轢いたのは白のセダンで恐らく、でかいアメ車だ。もちろん、この町にそんな車はねえ。修理も廃車も該当する記録も出て来ない。……下手すりやもう日本にない可能性もある。——怖えんだ、犯人が捕まえられねえって事が……どうしようも無い気持ちをつづけるとこがなくて、飲み込むしかねえって事が……！」

「……」

「……クッ！」

堂島の言葉に、悠も洗夜もただ黙って聞く事しか出来なかった。今、自分達に出来るのは静かに堂島の苦しみを聞いてやる事だけだからだ。

だが、洗夜は別の事を考えている様にも思えたが、悠は気付かなかった。

「菜々子を見る度に、あいつと似た所を見付ける度……現実を突き付けられてる様な気がしてな……怖えんだ」

「……」

堂島の話に洗夜は黙って聞いている。今、このタイミングで自分から言える言葉が無いのを知っているからだ。

「……まさか、お前等にこんな事を話す事になるとはな……。いつまでもこのままでいい訳がねえつてのは分かつてる。洗夜に言われた時は頭をぶん殴られた様な気がしたよ……お前等がいる内に向き合わなきゃならねえよな」

そう言つて堂島は部屋に戻り、庭には悠と洗夜が残った。静かに辺りで鳴く蝉達の鳴き声だけが二人の耳に響く。

(このままじゃ……叔父さんが可哀想だ)

これほどまで身を削っている堂島の苦労が実の生らない事に悠は複雑な心境だった。

そんな悠は、隣で空をずっと眺めていた洗夜に堂島の事について聞こうとした。

「兄さん……」

「可哀想……とか思うなよ悠」

「!」

自分の心を読んだのでは無いかと疑う程、自分の気持ちを言い当てた洗夜の言葉に悠は黙った。

「その人の生きて来た人生を聞いて、可哀想とか思うな。自覚があるかないかは関係ない。そう思う事は、その人を見下すと言う行為だ」

「……可哀想と思うのは、その人の事を心配しているって事じゃ?」

「心配と同情は別物だ……だから俺は、必死で今を戦っている叔父さんの事を可哀想とは思わない。そして……“アイツ等”の事も……」

「『アイツ』って?」

「……」

それだけ言うと洗夜は悠の質問に答えずに、自分の部屋へと戻って

行くが洗夜は部屋の前まで来て立ち止まり、隣の壁を拳で殴り付けた。

「何を偉そうな事言ってた俺は……」

自分の言葉に何の説得力が無い事に自分自身で怒る洗夜だが、そんな洗夜に声をかけるものはいなかった。



現在：堂島宅【居間】

あれからそれなり日数が立ち、あれ以来、堂島の表情も明るくなり菜々子も嬉しそうだ。

そんなある日、洗夜は暇だから下に降りると悠と堂島が会話をしており、洗夜を見付けると口を開いた。

「おお洗夜、実は後で皆で散歩に行こうと思うんだがお前も来ないか？ 出来れば、お前と悠と菜々子の四人で行きたいからな」

「丁度、暇してたから良いよ」

「そうか！ ——ああ、後、お前等にこれをやろう」

そう言いながら堂島は洗夜と悠にマグカップを渡した。見た感じは何処にでもある普通のマグカップ。

しかし、それは堂島家では大切なマグカップなのを洗夜は知っている。

「俺と菜々子が使っているのと同じやつだ。これはお前等専用、後で名前書いといてやるからな」

そう言う堂島に悠は苦笑いしていた。

流石にこの歳にもなつて物に名前を書くのは子供っぽく、結構恥ずかしい。

「いや、名前はちよつと……」

「何言ってたんだ、書いとかなないと間違うだろう。菜々子のも俺のもちゃんと底に書いてるぞ？」

「それとも悠、お前は菜々子との間接キスを狙っているのか……！」

「悠、年相応になるまで手を出すなよ……」

「本人を置いて勝手に話を進めないでくれ……」

洗夜と堂島の冗談に肩を落とす悠だが、堂島の目は笑っていない。かつて事には敢えて触れないでいる二人だった。

そして、堂島はそう言うのと急に表情を真剣なものにした。

「洗夜、悠……俺達は家族だ。だから、お前等のマグカップも菜々子のカップも、いつでも満タンにしてやる……忘れるなよ二人共」

「叔父さん……」

「なら、期待してるよ」

「おう！ 任せろ！」

洗夜の台詞に笑いながら堂島が答えた時だった。

「お父さん準備できた？」

部屋から身仕度を整えた菜々子が出て来ると堂島に準備を聞き、堂島は時計を見て時間を確認する。

「ああ、そろそろ出るか……」

「お兄ちゃん達も行こ！」

そう言って洗夜と悠の手を掴む菜々子。その掴む手は、意外に力強いモノである事は洗夜と悠にしか分からなかった。



現在：河原

現在、洗夜達が来たのは近所の川だった。ここは良く、洗夜と悠が釣りをする場所でもある。

「よるだと、こわーい！ でも、お父さんとお兄ちゃん達といっしょでたのしーね！」

「はしゃいで落ちるなよ」

満面の笑顔で楽しむ菜々子に堂島は笑いながら言った。だが、実際に落ちたら洒落にはならない為、洗夜も悠も菜々子に注意している。

「ねえ、どうしてここに来たの……？」

菜々子が堂島にそう聞くとと言う事は、菜々子自身も此処に来た理由が分からない様だ。

「お前、ずっと来たと言ってただろう？ その内、また四人で天気の良い日に弁当でも持って来ような」

「なら、弁当係の俺もそんな時に備えて頑張らないと……」

「うん！ やったー!!」

「兄さん、頑張り過ぎて倒れない様に……」

そう話している内に少しの間だけ、この静かな川で楽しげな話し声が聞こえていた。

実は洗夜と悠も家族四人で出掛けた事がない。故に、この他愛もない外出も、かなり新鮮に感じる事が出来ていた。

「ねえ、もつと川のそばに行つていい？ さかな、寝てるかもしれないよ！」

菜々子の言葉に堂島は「分かった分かった」と笑いながら言い、菜々子は笑顔で頷くと川の方に行つた。

「あの子のあんな顔、久しぶりに見た気がするな。……悠、洗夜、俺はこれからも千里を轢いた犯人を追うつもりだ」

「叔父さん、それは……」

それは菜々子から逃げる理由じゃないかどうか、そう聞こうとした洗夜だが、堂島は静かに首を横に振る。

「安心しろ……それはもう、何かから逃げる為じゃない。——俺が“刑事”だからだ」

堂島はそう言つて二人へ目を合わせる。

「こんな簡単で当たり前前の事すら、俺はいつの間にか忘れちまつたんだ。大切な事をみんなお前等が思い出させてくれた……本当に感謝してる」

「俺はただ、思つた事を言つただけ……」

「右に同じ……全部、結果さ」

洗夜と悠の台詞に堂島は、笑いながら話を続ける。

「この町はな、俺の町だ。菜々子やお前等のいる俺の居場所だ。だから、俺はこれからもここを守つて生きて行く。刑事として……そして父親としてだ」

そう言う堂島の顔には既に迷いはもう無かった。その時……。

「までコラーツ!!」

「クソツ！ いい加減、マジしつけーんだよ!!」

突然、上の道から若い男性と複数の少年らしき声が聞こえて来た。「何だあ？……って、あいつは……おい、どうした？」

堂島叫んでいる内の男を呼ぶと、男は警官だった。どうやら、仕事仲間か何かの様子。

「堂島刑事……？。す、すいません、お休み中……」

堂島だと確認すると警官は堂島に頭を下げる。この時点で堂島が署でどれだけ凄いか、何となく分かる。

「んなこたあ気にすんな。それよりあいつ等なんだ？」

そう言つて堂島が逃げてる集団を指刺す。そんな間にも、その集団は逃げているが……。

「あ、あの、カツアゲグループです。最近ウワサになってる……」

「カツアゲだあ!? ったく、しよっぱい真似しやがって……!」

「しよっぱい……?」

「お父さん行くの……?」

洗夜が堂島の言葉に疑問を持つ中で、騒ぎを聞き付けた菜々子が堂島に聞き、その言葉に堂島は笑顔で返す。

「おう！ 悪い奴を捕まえるのが俺の……いや、お父さんの仕事だからなー!」

そう言う堂島の顔には、迷い一つない笑顔だ。その表情は正に刑事、そして父親と言うに相応しい凛々しい表情だった。

(……叔父さん。あんたは既に立派な父親だよ)

迷いを一つ断ち切った堂島を見てそう言いながら洗夜は、準備体操を始めながら悠に言った。

「悠、菜々子を頼む……」

「え？ 兄さん!」

「何でお前が準備体操してんだ？」

「それはもちろん、善良な市民の義務」

洗夜の言葉を聞いて、菜々子は笑顔で堂島と悠は溜め息を吐いていた。

「ったく、お前は……仕方ない悠、菜々子を頼むぞ」

「——任せろ！ 叔父さんも兄さんも頑張れ!」

「おうよ！ 俺を誰だと思ってる。泣く子も黙る稲羽署の堂島だぞ。だから、お前達は安心して先に帰って寝てろ」

堂島の言葉に二人が頷くのを確認すると同時に洗夜は走りだす。

「んじゃ先に行ってるよ。叔父さんは歳だから無理すんな」

「なっ！——うるせえ！ 俺はまだまだ現役だ！ おるおああ!! 待てクソガキ共ーッ!!!」

「何だ!? 何か増えたぞ!?!」

「後ろ見てる暇あったらもつと早く走れ!」

カツアゲグループが追い掛けて来る洗夜と堂島を見て焦り出す。

「お父さん！お兄ちゃん！がんばれー!」

菜々子の声援を聞いては、やらない訳には行かない洗夜と堂島は気合を入れた。

「鍛え方が甘いな」

そう言っただ洗夜はグループの一人にスライディングをして捕まえる。

「ぐわあ!」

「一人目終わり……って……」

そう言っただ前を見ると、既に堂島が他のメンバーは背負い投げをして全員を捕まえていた。

捕まった少年達も何が起こったか分からず、呆気に囚われている。

「どうだ洗夜、俺もまだまだ現役だろ?」

ニッコリ笑う堂島を見て、洗夜は苦笑いしか出なかった。

「……お見事」

「はははは!」

洗夜の台詞に堂島は大笑いしていた。

稲羽の堂島刑事。恐らくこれからも堂島は、この町を平和にする為に走り続けるだろう。堂島には守るべき家族と守り続ける約束があるのだから……。

「……叔父さん、あんたは最高の父親だ」

それから後に堂島が千里を轢いた犯人を逮捕したニュースでお茶の間を騒がし、皆で千里さんのお墓参りに行って堂島と菜々子に本当

の笑顔が戻るのは、
もう少し先のお話……。

E
N
D

外伝：鳴らない鈴

とある日の事。

現在：???

青年は夢を見ていた。楽しい夢か、悲しい夢なのか本人すら分からない不思議な夢であったのは間違い無い。

だが、不思議と言うのも適切な表現ではないのかもしれない。どちらかと言えば、懐かしいと言う感覚がしていた。

その感覚も所詮は夢に過ぎないのだから自分は泡沫の夢幻の偽りの懐かしさに心が感動し、揺らいでいる事も偽りなものと思えば青年は夢の中でも瞳を閉じる。

「……！」

しかし、青年が瞳を閉じてても夢が消える事はなかった。それどころか、閉じてても閉じてても同じ夢の繰り返しが続いていく。

夢の又夢。その連鎖はまるで青年に目を反らす事を許さないと言っている様に感じる。

そして、その夢で青年の前に立つ一人の青年は、ずっとその青年の事を見つめていた。

「……ッ！」

青年は、自分の中から込み上げてくるモヤモヤした様な感覚に思わず目を反らしてしまう。だからと言って青年にとって目の前の“別の青年”は初対面ではない。

それどころか、親友と呼べる程の関係を築く程に親しかった。

だが、そんな親友も今では夢でしか会えない。自分の事を本当の家族の様に心配してきた親友に邪魔だとか、鬱陶しい、関係無い、親友に対しそんな風に思った事もあった。

自分の“命”なのだから自分でどういう風に扱うかは自分の勝手。そう言っただけでブチキレた、その親友と殴りあった事もある。

何故、自分はその時に彼に押し返したのか、その頃の自分には分からなかったが青年は今なら嫌でも分かる。亡くした後

気付いてしまった。

自分は只、薄汚れた自分とは違うキレイな親友が自分の事を親友と呼ぶ事に申し訳ないと思っていた事に。

自分とそいつは生きる場所が違う。そう思った時もあった。

だが、青年はもう1つだけ気付いた。その親友達と馬鹿をやっていた時の自分は確かに幸せだったんだと……。

(今更、なんでこんな夢を……)

最初はなんとも感じなかった夢だが、今更になって段々と罪悪感や寂しさが溢れ出る。

自分は全てを捨てたつもりだった。しかし今の自分は確かに悲しんでいる。亡くしてから気付いた。

後悔、先に立たず。その言葉が今はとてつもなく憎らしい。

そう思いながらも青年が目の中の青年の事を見つめ続けると、その青年は無表情のまままで此方に近付き微かに微笑むと、ゆっくりと口を開く。

『お客さん……もう終点ですよ?』



現在：電車内

「ん……?」

場違いの発言に青年は徐々に意識を覚醒させると目の前に駅員と思われる男が立っていた。

そして自分以外は誰も乗客のいない車内の状況を見ると同時、自分が電車に乗っていた事を思い出す。

また自分が寝過ごして終点まで眠っていた事、それが今の状況で嫌でも分かってしまった。

「……?」

寝起きの為、未だに頭が目を覚まさない事もあるが余り反応を示さない自分の態度に駅員が困惑している事に気付いた青年は、ポケットから切符を取り出して駅員に差し出した。

そして切符を受け取った駅員は静かに覗き込む。

「あく、お客さんがお降りになられる筈だった駅は三つ前の駅ですね」

「……此処は何て駅だ？」

先程の夢の事に内心では愚痴りたかった青年だが、どうしようもない只の怒りよりも青年は現在位置の詳細を調べる事にした。

なんだかんだ言いながらも現在の居場所を把握しないと、どうしようもない。

「此処は”八十稲羽”駅です」

「……何処だ？」

青年の言葉に、駅員は思わず苦笑いを漏らした。

「ハハ……まあ、此処は何もない所ですからね。所で、お客様が御降りになられる予定だった駅の方へ向かう電車は向かい側から三十分後になりますか……？」

「三十分か。……これも何かの縁か」

そう言う青年は自分の荷物である小さなカバン、釣竿の様に長い何かが入っている袋を背負い、半袖のTシャツを纏う自分の肩にボロボロの“赤のコート”を掛けながら、ゆっくりと立ち上がって電車を降りた。



現在：稲羽市【駅前】

三十分も駅で暇を持て余すのは流石に面倒。そう思った青年は、ここまでのお金を駅員に支払って駅から出たが、三十分しか居られず、それほど遠くには行けない。

（完全に田舎だ……）

駅から出た青年を出迎えたのは何も無いが景色や汚れていない気持ちのいい風だった。

しかし今は夏と言うこともあり、ジワジワと日光が容赦なく青年に熱を与える。只でさえ青年は現在、駅の前で絶賛棒立ち中。

夏場でその行為は動くよりも体力が奪われて行く。

（自販機を探すか……田舎とは言え駅の周辺に一つくらいあるだろ）

寝起き十夏の日差し。この結果から、青年は水分を補充する為に自販機を探す為に辺りを見回した。

すると青年の思った通り、駅の入り口に自販機は設置されていた。

そして青年は自販機に近付いてお金を入れ、スポーツドリンクを購入して口に流し込む。

寝起きと言うこともあり、冷たいドリンクが頭の目を覚まさせてくれる。それと同時に喉を伝って身体に行き渡る水分に青年はようやく一息つけた。

「……ふう。——チッ！」

一息付くと同時に先程の夢が纏わり付く様に頭から離れず、青年は強い感じで舌打ちをした。

何故、今更にこんな夢を見てしまうのか。

“ 只の偶然 ” そんな言葉で片付けられたらどんなに気が楽な事か。虫の知らせと言うものかどうかは分からないが胸がざわつき、まるで不安を煽る様な感覚が青年を襲う。

何かの予兆か、少なくとも楽しい事ではないとだけ青年は分かった。また、青年がイラついているのは夢だけが原因ではなかった。

もう一つの原因、それはこの町だ。

「さつきまでは気付かなかったが……この町の雰囲気は？」

野生の勘に近いものなのか青年は、この『稲羽の町』から自分をイラつかせる何かを感じ取った。

不快、不安等を掻き立てる様な雰囲気。まるで駅から出た瞬間から誰かに“監視”されている様に感じる。

（嫌な予感がしやがるが……下手に面倒事に巻き込まれると”あいつ”がうるせえからな……とつとと電車に行くか）

下手に事件に巻き込まれたら堪ったものではない。何より、この町は何処かおかしい。

そう判断した青年は、少しはや歩きで駅へ向かう。そんな時だった。

チリーン！と青年の足下で小さな音が鳴った。

「？」

青年が早歩きで歩いていたら足に何かがぶつかったのだ。

思わずそれを拾い上げると、それはピンク色の独特な模様が入った鈴だった。

だが青年はその鈴を見た瞬間、目が大きく開いた。

「この鈴は……」

青年が鈴に驚いた時だった。

「あ……あの……」

「？」

自分の後方、しかも腰より低い所から声が聞こえた青年は振り返った。

そこには髪をツインテールにしている少女が青年を見上げていた。しかし青年が怖いのか、少女は何処か怯えた様にオドオドしている。

そんな女の子に青年はまず姿勢を低くして少女と同じ目線に立った。これは同じ視線になれば多少は少女が怖くなくなると思っただけの優しさだった。

また青年の行動に少女は多少なりとも先程よりは怯えた表情をしなくなった。

「どうした？」

青年の言葉に少女は恐る恐る青年の持つ鈴に指を差した。

「それ……ななこの……さつきお友達とあそんでた時に落として……お兄ちゃんから……グス……もらったから……ななこ……探して……」

余程大事な物なのだろう。菜々子と言う少女は目に涙を溜めながら話してくれた。少し離れた場所には学校の友達らしい女の子達もいた。

その子たちは怖がって来ないが、これ以上は余計に不安がらせない為に青年は鈴を掴んだ手を菜々子へと伸ばした。

「……分かったから泣くな。ほら、もう無くすんじゃないぞ」

「……うん……ありがとう……」

青年から鈴を受け取った菜々子の顔に笑みが戻った。

そんな時、菜々子は青年の腰に銅色の鈴がついている事に気付く。

「それ……」

「ん？……ああ、この鈴か。こいつはもう音を鳴らさねんだ……その鈴は大事にしてやれよ」

そう言うとき青年は菜々子に背を向けて駅へと歩みだした。時間も時間で丁度良かった。

▼▼▼

現在：電車内

青年は椅子に座り、電車が動くのを待っていた。

冷房が効いている電車内は心地良いものでもあったが、くどいものでもあった。

しかし先程まで真夏の日光を諸に浴びていたのもあり、なんだかんだで丁度良くも感じてあやふやだ。

そう思っていた青年はおもむろに腰に着けていた鈴を外して自分の視線に入れた。

「……鳴らない鈴か」

青年はそう呟き、鈴に付いている紐を上下に揺らして音を出そうとするが。

「……」

形が悪くなっているからか、それとも鈴の中が壊れているからか鈴はその綺麗な見た目に似合わない音を出していた。

また、そんな様子に青年は、そんな事は最初から分かっていたと言わんばかりに鼻で笑うと眠りに付く。

そして青年は再び夢を見る。今度はどんな夢か、それは青年しか分からない。

そんな青年の手の中で、鈴は静かに握られていた。

End

第二十七話：黒キ愚者 繋ゲシ絆カラ背ク事ナカレ

7月9日（金）曇り

現在：稲羽郊外の道路

「わーい！ お出かけお出かけ！」

「菜々子、ちゃんと座らないと危ないぞ」

「無理もない、ゴールデンウィークの事があったから余計に今が楽しいんだよ叔父さん」

「まあ、そうだな……」

現在、悠達は堂島が運転する車で稲羽の町を少し離れていた。また本来ならば平日である事で悠と菜々子は学校があるのだが菜々子は創立記念日で休み。悠は簡単に言えば学校に上手く言ってサボり。

堂島は有給休暇をとって今日は休みにした。ゴールデンウィークの一件もあつた事で何とか取ることが出来たらしい。

「……」

そんな中、明るくはしゃぐ菜々子と真逆に洗夜がただ一人だけ機嫌を悪そうに景色を眺めながら黙っていた。

「洗夜、お前が機嫌を悪くするのも無理はないが……少しは落ち着け」

「兄さん、あつちに着くまでに疲れるよ？ 折角の“お見合い”なんだ」

「何が折角だ……俺はお見合いをする気は無い！」

悠と堂島の説得も虚しく、洗夜はそう言つて更に機嫌を悪くする。そもそも、事の発端は六日前の堂島に掛つて来た洗夜と悠の母親からの電話だった。

その内容は単純なもので、昔の仕事の繋がりに関係でお見合いをする事にした。相手は若い“美人”社長、別にお見合いを成功させるとは言わず、断られても良いので息抜き気分で行つてこいと事。

その話を聞いた堂島も言葉を失い、洗夜も聞いた時は勿論、言葉を失った。

「怪しい……今年、大学受験をするとは言え、俺はまだフリーターだぞ？ 明らかに釣り合っていない。——何かの尻尾切りにでも使われ

るんじゃ……」

「ドラマ化決定だ」

「アホな事を言ってるんじゃない。どうせ姉さん達の仕事関係なんだ。向こうも本気じゃないだろう」

洗夜と悠の話に堂島は運転しながらヤレヤレとそう言って、話を聞いていた菜々子は堂島の話聞いて更に頭を抱える洗夜の姿に首を傾げる。

「……ハア」

「洗夜お兄ちゃん、なんか悩んでるみたい……」

「今度は見合いの断り方に悩んでいるんだろ……」

車内で今だに頭を抑えてイライラしている洗夜を心配する菜々子と、その光景に苦笑いする堂島。

実は菜々子を旅行に連れていく口実が出来たため、内心では洗夜に感謝している事は堂島の内心に隠しているのは内緒だ。

そんな風に会話をしていると悠が堂島に声を掛けた。

「そう言えば叔父さん、今日と明日泊まる場所って？」

「ああ、確か見合い場所の近くのホテルでそれなりに良いホテルだ。

俺の名前で予約していると姉さんが言っていたな」

「たかが見合いで二泊三日か……」

元々、そう言う事を勝手に決められる事が嫌いな洗夜は未だに機嫌が治らずに悪態を漏らす。

そんな兄の様子に悠も苦笑いしか出ない。

「まあ、そう言わないで……それに見なよ、あの菜々子の様子」

悠に言われて洗夜は菜々子の方を見ると、菜々子は旅行に行くかの様に助手席で楽しんでいる。

只でさえ、色々と我慢してきた菜々子にとって今回の事は旅行に思えて仕方ないのだろう。

そんな菜々子の笑顔を見た洗夜は、どうやって見合い相手に上手く断るかを考えていた自分が情けなく感じ、ゆっくり目を閉じた。

「……寝る、着いたら起こしてくれ」

「分かった」

そう言つて洗夜は、ホテルに着くまでの少しの睡眠に入った。



現在：ホテル【ロビー】

稲羽の町から数時間、車で移動して時間は丁度お昼頃に洗夜達は宿泊先のホテルへと着いた。

宿泊するホテルは見た感じ、中と外、どちらも良い感じの洋風のホテル。そんな感じのホテルを洗夜は寝起きの為、目を擦りながら眺めていた。

「……眠い」

「洗夜、見合いは一時間後だ。それまでは目を覚ましとけ。……さて、俺は受付に行くから菜々子と荷物を頼むぞ」

「叔父さん、俺も行く。……少しでも眠気を覚ましたい」

寝起きからのすぐにお見合いの準備をしなければならぬ事に面倒だと思いつつも、洗夜は少しでも眠気を晴らす為に堂島について行く事にした。

「そうか、なら悠、頼むぞ」

「分かった」

そう返事をして洗夜と堂島は目を輝かせながら辺りを見つめる菜々子と荷物、それらを悠に任せて受付へと向かい、そのままロビーにある巨大な柱の向こうに消えて行つた。

そして、そんな二人の後ろ姿が見えなくなると悠は軽く一息入れた。

「やれやれ……」

なんだかんだ言いながらもお見合いに応じる兄の姿に悠は笑みを零していた。基本的に洗夜は自分の道は自分で決めたがる、だから洗夜は勝手に親が決めたお見合いが嫌なのだ。

相手の方も勝手に決められたら嫌な筈、そう思いながら洗夜が相手の事も考える性格なのを悠は知っている。

「……兄さんも十分不器用だ」

悠がそんな事を呟いた時だった。

「きゃっー」

後ろの方から菜々子の声が聞こえ振り向くと、そこには尻餅を着いた菜々子、そして全身を隠す程に長いワンピースを身に付け、頭にも変わったアクセサリーの様なモノを付けた金髪の女性が心配そうに菜々子に手を差し延べている光景。

その様子から、菜々子が隣の女性にぶつかったのだと分かる。

「菜々子ー」

その様子を見た悠は急いで菜々子の下へ向かった。

既にぶつかった後に言うのも難だが、これ以上は何かあってからでは遅い。

「ごめんなさい……」

悠が菜々子の下へ近付くと、菜々子はぶつかった相手に戸惑いながらも謝っていた。

それに対し、相手の女性も菜々子に視線を合わすように姿勢を低くしながら頭を下げた。

「いえ、こちらもよそ見をしていたもので……申し訳ありません。お怪我はありませんか？」

そう言つて申し訳なさそうに菜々子に謝罪する女性の顔を見て、悠は思わず見とれてしまった。

その女性の表情は何処か幼さが残っており、だが大人の女性の様な気品も身につけていて整っていた。

千枝達には悪いが、はつきり言つて今まで出会つて来た女性の中でも一、二を争う程のレベル。

(綺麗な人だ。……だけど、あの頭と耳に着いてるのは一体……?)

そう思いながら悠は、女性の顔と頭に着いているアクセサリーとも言えるか言えないかの様なモノを眺めていると女性と目が合つてしまふ。

それに思わず悠は身体をビクつかせ、女性は首を傾げる。

「あなたは……?」

「ああ、すみません……俺は悠と言います。この子……菜々子の――」

「……〃 洗夜〃 さん?」

「えっ……?」

悠はその女性から放たれた兄の名前に言葉を失う。何故、この初対面の人から兄の名前が出て来るのか。弟である自分の前で洗夜と言う名前は偶然では出ない筈だ。

悠はそう思っていると、その女性も悠を見つめ続けており、何がしたいのか理解できず困惑してしまった。

「あの……なにか？」

「あ、いえ、失礼ですが……悠さんは、この子の……」

(まあ、本当は従妹だけど……菜々子からも実の兄の様に思われてる) 内心で悠は少し悩んだが、堂島家との繋がりは既に強い。家族と今ならば言えるだろう。

「はい兄です。ほら、菜々子」

恐らくもう会う事もないと思った悠は女性にそう告げ、菜々子に自己紹介させる為にしやがみ、菜々子の肩に手を置いた。

そして、菜々子は少しおどおどしながらも女性の近くに向かい自己紹介する。

「……どうじま……なな……です」

「……どうじま？」

菜々子が自己紹介したが、その女性はまた何かを考えているかのようになり黙り込んでしまう。

どうしたのかと悠も菜々子も不思議に思ったが、その女性はすぐに我に返った。

「……はっ！ すいません、少し考え事をしていました……」

やはり女性は考え事をしていたらしく、菜々子が自己紹介した事を思い出したのか、女性は視線を菜々子に戻し、おどおどした感じの菜々子に優しく微笑むと菜々子と同じ目線に合わせた。

「申し遅れました、私は『アイギス』と言います。先程は失礼しました」
そう言つて女性『アイギス』は静かに落ち着いた感じで再び頭を下げ、手袋をした状態のまま菜々子と握手をした。

それに対し菜々子も、アイギスから感じる不思議な優しさを感じたのか笑顔になる。

「うん、もう大丈夫。それにさつきは菜々子もよそ見してたし……」

「ふふ、それでは今度からお互いに気をつけましょう」

「うん！」

(何事も無くて良かった……)

仲良くなつた感じのアイギスと菜々子の姿に悠は一安心した。

都会に来た早々に問題を起こしたくもなく、菜々子の身に何かあれば堂島と洗夜が黙っていない。

そんな事を悠が思っていると、アイギスが自分の顔を再びマジマジと見ている事に気付く。

「あの……なにか？」

先程から何度も自分の事を見ているアイギスに悠は思わずそう言つてしまい、悠の言葉にアイギスも思わず恥ずかしそうに視線を反らした。

「あ、いえ……貴方の雰囲気と容姿が私の大切な方々に似ていたもので、つい……」

「似ていた……ですか？ 良ければその人達の事を聞いても良いですか？」

ただ何となく気になつたと言う理由で悠は今の勇気ならば可能であり、アイギスにその人達に着いて尋ねると、アイギスも頷いた。

「はい、別に構いません……その人達は——」

「アイギス！」

「明彦さん？」

突如、アイギスの後ろから彼女に声をかけたのはスーツを来た青年だった。

しかし、スーツが着慣れないのか少しぎこちない動きをする明彦と言う青年は目付きと雰囲気は獣の様に鋭かった。

(この人は……?)

悠が明彦を見た瞬間、何故か悠は明彦を初めて見た気がしなかった。同時に何故かアイギスの事も知っていた気がし出し、頭を捻りながら明彦を見た。

獣の様な雰囲気。爪と牙を潜ませている。その位、明彦と言う青年の存在感は凄まじかった。見覚えがあるなら忘れはしないだろう。

悠がそう思っているそして明彦はアイギス達に近付くと、近付くにいた総司達の方を向いた。

「ん？ 君は……！」

明彦が悠を見た瞬間、アイギス同様にその様子が変わる。驚き、恐怖、色んな感情が明彦の目から悠は感じ取る事が出来た。

そしてそんな明彦にアイギスは現状を説明した。

「悠さんと菜々子ちゃんです。実は先程ぶつかってしまいました……」

「ホントか？……友人がすまない事をした。怪我はなかったか？」

「いえ、ぶつかったの俺じゃなくてこの子の方で……」

「そうなのか？」

そう言つて明彦は菜々子の方を向いた。それに対し身体をビクツとさせる菜々子。

外から見たらライオンと子羊の様な絵だが、明彦はそんな菜々子の容姿に気付かず先程のアイギス同様にしやがむ。

「友人がすまなかった……大丈夫か？」

「っ!？」

明彦に悪気はないのだが、菜々子は明彦の雰囲気怖がってしまい涙目に鳴りながら悠のズボンを掴みながら後ろに隠れた。

「……!？」

菜々子に怖がられたのが思ったよりもショックだったのか、明彦は身体を奮え上がらせると床に手を着いてしまった。

(どちらにも悪気が無い分、余計にややこしい……)

涙目の奈々子。落ち込む明彦。

どちらにも非はなく、どうすれば良いか悠は分からなかった。

そして悠が菜々子と明彦の様子を見てそう思った時、アイギスが明彦に近付いた。

「ところで、なにか私に様子が合ったのでは？」

「……あ、忘れていた。美鶴が呼んでいる。そろそろ時間だ」

「……そうですか、ならば急がなければ。……ではお二人とも私達はこれで失礼します」

「おっと、俺もまだ準備が終わっていない。……じゃ、またな」

「え、あの……」

余程、時間がないのかアイギスと明彦は急いでエレベーターの中に入って行ってしまった。

そして、二人がエレベーターへ入ったのと同時に洗夜と堂島も戻って来る。

「やれやれ、思ったより時間が掛かったな……」

「全く……ん？ 悠、菜々子どうした？」

まるで嵐が過ぎたかの様に呆気に捕われていた悠と菜々子に受付で鍵を貰って来た洗夜と堂島が声をかけた。

「いや……なんか、嵐と言うか美人と言うか獣……？」

「……なに言っているのか分からないが早く部屋に行くぞ。時間がない……ちなみに叔父さんと菜々子、俺と悠が同じ部屋だ。あと部屋は隣同士だ」

そう言われながら悠達は、着替える為に急いでエレベーターへと向かって行った。



現在：エレベーター

アイギスと明彦はエレベーターの中で会話をしていた。話の内容、先程出会った少年、悠についてだ。

「……さっきの少年、似ていたな」

「……そうですね」

明彦の言葉にアイギスは頷き、似ていると思うのは自分だけではなかったと内心で安心もした。

何処か不思議な雰囲気。例えを言えと言われても恐らくは無理だろう。掴みどころの無い雰囲気なのだから。

「……雰囲気は『アイツ』だが、容姿は洗夜に似ていた」

何処か懐かしい様な、そして何処か悲しそうな感じで話す明彦。その彼の言葉にアイギスは静かに頷いた。

「はい……ところで一つ聞いても良いでしょうか？」

「……なんだ？」

アイギスの真剣な表情に明彦は静かにアイギスの言葉を待つてくれた。

「いえ、ただ……洗夜さんにご兄弟はいらっしゃったでしょうか？」

「洗夜の兄弟……？ 確か弟が一人いると聞いていたが……まさか、さっきの奴か!？」

アイギスの質問に明彦は先程の少年が洗夜の弟なのかアイギスに問い掛けるが、アイギスは静かに首を横に振った。

「いえ、さっきの方は隣にいた少女の事を妹だとおっしゃっていました。そしてその子の名前は“堂島” 菜々子ちゃんと仰っていました。……ですから……」

「……“堂島 悠”か。洗夜とは無関係だな。……今、思い出しても確かに妹がいるとは聞いてない。下に弟が一人だけいるとしか聞いてなかったからな……」

洗夜には弟が一人だけとしか明彦は聞いておらず、妹の話は一切なかったと思ひ出す。

洗夜の性格から妹の事だけを話さないと言う事はありえず、今の話を聞く限り先程の二人は洗夜とは無関係、他人の空似と言う結論で落ち着いた。

「他人の空似か……しかし、あそこまで似ている人間がいるとはな……世界は狭い」

「はい……目も『あの人』と洗夜さんの二人に似ていました。何事にも恐れず、まるで未来を見ているかの様に真つすぐな目……」

「……アイギス」

悲しそうな目で話すアイギスに明彦が心配し彼女の方を向くが、アイギスは静かに大丈夫だと言った感じで首を横に振った。

「大丈夫です……ただ、あまりにも似ていたので御二人の事を思い出ただけです」

忘れた事すらない思い出を胸にアイギスは明彦にそう告げた。その様子に明彦は腕を組んで「そうか……」とだけ返した。

すると、明彦は今度は気まずそうに口を開いた。

「なあ、アイギス……」

「はい、なんでしよう……？」

いつもより真剣な表情に感じた明彦に、アイギスは何事かと思いき葉を待った。すると……。

「俺は怖いのか……？」

先程の菜々子との一件の事だろう。

明彦は何処か真剣な目でアイギスに聞くが、聞いた相手が悪かった。

「はい怖いです、(あの様な小さな子にとっては) 恐怖の対象です」

アイギスは思った事をそのまま口にした。あの時、奈々子は確かに怖がっていた。

しかもアイギスに悪気は無く、ただ明彦も気付いていると思って言ったのだが明彦にトドメを刺すのには十分だった。

「グツ……！　　そうか……」

そう言って明彦は、エレベーターの扉が開くまでずっと落ち込んでいた明彦。

そして何故、明彦がそんなに落ち込んでいるのか分からずに首を傾げるアイギスだけがエレベーターに乗っていた。

すると今度はアイギスがある事を思い出した。

(そう言えば……” 御二人” の準備はもう良いんでしょうか?)



現在：ホテル【悠の部屋のフロア】

着替えと言っても悠自身は制服が良い為、兄達の着替えが終わるまでフロアをブラブラとして時間を潰していた時だった。

悠はフロアのエレベーター前で何やら言い争いの様に騒いでいる変な”男女の二人”を発見する。

「絶対に阻止よ！　そんな訳の分からない男に美鶴先輩を渡せないわよ」

「いや、俺等にそんな決定権ってないじゃん……」

その男女は両方とも若く、見た感じでは二十歳手前だと悠は思った。

更に良く見れば二人共、良い服装をしていた。青年はスーツ、女性はドレスではないが落ち着いた雰囲気の色を身に纏っていた。

「って言うか俺っち、今回はシャドウワーカー関係ってアイギスから聞いてただけど……」

「ちゃんとシャドウワーカー関係じゃない。美鶴先輩が親の“七光り”の訳の分からない男とお見合いするのよ?——」順平“? あんたは何も思わないの?”

「いやいや、”ゆかり”っち。相手がどんな奴かって俺等も桐条先輩達も知らないって聞いてたじゃん」

順平と呼ばれた青年はやや疲れ気味で返答しているが、ゆかりと呼ばれた女性は何故か一人でヒートアップして行く。

「あんたね……美鶴先輩の前の許婚の男って凄いやつだったのよ? 前例がある以上、今度の奴は紐男ね! 結婚を境に美鶴先輩にたかる気ね」

「少し羨ましいかも……」

順平は呑気に呟いていたが、ゆかりの一睨みで沈黙する。

そしてそんな光景を見ていた悠は……。

(バカップル……?)

適前に前方の男女をそう判断しており、これ以上は見ても良いものじゃないと思った悠は、そそくさと二人の横を通り過ぎようとした時だ。

それに気付いた順平が自分達が道を塞いでいると思い、軽く避けながら謝った。

「ああ、悪い……」

そう言っつて順平は顔を悠へと向け、ゆかりも自然と悠の顔が映り、二人が悠の姿を認識した時、二人の目に別の青年が重なって見えた。

「待ってくれ!!」

「……!」

気付けば順平が悠の左手を掴んでおり、ゆかりも啞然とした表情で悠を見ていて止める事は出来なかった。

そうなれば最も困惑するのは悠本人だ。

「??」

見覚えのない二人に止められたのだ。これは犯罪の匂いを感じるべきなのか、と悠は冷静に考えていると悠はある事に気付く。

悠には目の前の二人に何故か“見覚え”がある事に。

「あの……」

悠は二人に問い掛けようとする、それよりも先に順平とゆかりが我に返った。

「あっ……違う。よく見たら髪も短けえし……」

「！……そ、そうよね。——あの“人”が、ここにいる訳ないもの……」

そう言っつて順平は手を放し、ゆかりと同様に二人は暗く思い詰めた様子で顔を下に向ける。

「……あの？」

悠がもう一度、二人に問い掛けると二人は一瞬、なんで悠がここにいるのか分からなかったが、すぐに我に返った。

「あ……ああ!! わ、わるい! その……」

「ごめんね……君がちよつと知っている人に余りにも似てたから……つい……」

ゆかりの言葉に悠の脳裏に、ついさつき出会ったアイギスの姿が浮かぶ。

(あっ……兄さんの写真)

悠は思い出した。兄の部屋の写真立てに写っていた人物達の事を。

先程のアイギスと明彦。そして目の前にいる順平とゆかりの二人も容姿は変わっていたが、確かな面影があった。

そして悠がジツと見詰めていた事で順平とゆかりも、それに気付く。

「ど、どうした……?」

「や、やっぱり突然の事で怒ってるよね……」

悠はただでさえ無表情な事もあって二人は悠が怒っていると感じたが、悠は怒りではなく自分の心にある疑問を口にした。

「写真の人……?」

「へっ……写真って……ゆかりっち?」

「もしかして私の……ファン?」

順平が写真と聞いてゆかりの方を向き、ゆかりも少し嬉しそうしながら聞き返しながら照れ始めた。

「写真って事は雑誌よね……まさかフェザーマン以外で気付かれるなんて思わなかった……!」

「フェザーマンですら気付かれてないもんな」

余計な事を言わなきゃ良いのだが順平はゆかりに睨まれ、冷や汗を流しながら顔を逸らす。

そして悠は話が脱線している事に気付き、首を横に振りながら訂正した。

「写真立ての写真」

「……写真立ての写真?」

「……どういうこと?」

話がキナ臭く感じたのか、二人の様子が変わる。

「なあ、お前……名前はなんて言うんだ?」

「……」

何かを感じたのか順平は少し真剣な表情で悠を見詰め、悠もゆっくりと口を開こうとした時だった。

丁度のタイミングで可愛らしい着信音が鳴り響く。

「あつごめん、私……って美鶴先輩から!?——もしもし?」

ゆかりは焦った様子で電話を出ると、何やら相手と素早く半紙をしてすぐに電話を切った。

「順平! もう時間みたい、皆は外にもういるって!」

「えっ! もうかよ!?……ああ……悪いけどよ、もう俺等は行かなくや駄目なんだ!」

「色々ごめんね!」

二人は余程の急ぎなのだろうか、二人は悠に頭を下げながら急いでエレベーターに乗り込み、そのまま一階へと向かった。

残された悠も後はどうする事も出来ず、その場で壁に寄り掛かって兄達を待つ事にするのだった。



現在：お見合い会場（とある料亭）

あの後、ホテルでスーツに着替えた洗夜達と悠は合流し、見合い会場である料亭に来ていた。

見た感じはそれなりであり、ホテルとは真逆で完全に和風な雰囲気
を漂わせていた。

「うわー！ すごいすごい！」

普通ならば子供が喜びもしない料亭だが、基本的に稲羽の町から出た事のない菜々子の好奇心を刺激するには十分だった。

菜々子は入口に飾られている鎧の前で目を輝かせ、元気にはしゃいでいる。

「こら菜々子……あまり騒いだら駄目だろ」

「……は〜い」

堂島に注意されて少し頬を膨らます菜々子。

こう言う所も菜々子の数少ない子供らしい一面の一つ。そんな光景を洗夜は悠と二人で見守っていると、料亭の着物を着た女性従業員らしき人が堂島と菜々子に近付いた。

「ふふふ、騒がしくなっても大丈夫ですよ。今日はこの料亭全体がお見合いのため貸し切りですので」

「「はっ!」」

「……う？」

従業員の言葉に洗夜達は絶句してしまい、今一意味を理解していない菜々子は首を傾げていた。

ほとんどお客が見られないと思っていたが、貸切状態ではなく本当に貸し切り。

その言葉を聞きはするが、実際に体験する機会は滅多にないだろう。

洗夜は気分が悪くなり、表情が悪くなってゆく。

「おいおい、料亭を貸し切りとか相手側は何を考えてんだ……」

「それだけ相手側は本気？ なんか、周りの従業員の人もそわそわ

している」

「勘弁してくれ……それにまあ、少なくとも料亭一件を貸し切りに出来る程の財を持つ相手だ、迂闊に変な断り方が出来なくなつた……」

悠の言葉に思わず頭を抑える洗夜。

周りの店員の落ち着かない様子。貸し切りと言う徹底ぶり。

しかも、相手側の情報が何一つ聞かされていない中、料亭一つを貸し切れる力を持つと言う情報だけでは頭が追いつかず洗夜は不安になるだけだった。

「一体、母さんは誰とお見合いを？」

「分からないが多分、相手側は一般的な考えがない相手だ……」

「兄さん、良く分かるね」

「俺にも良く分からないが……何故か俺の勘がそう言っている」

互いにそんな会話をして緊張感を和らげようとする洗夜達。

しかし、虫の知らせと言うべきなのだろうか。洗夜はざわざわとする自分の胸を落ち着かせる為に掴んだ。

そんな中で堂島が洗夜達を呼び寄せる。

「洗夜！ 悠！ そろそろ移動するぞ」

堂島の言葉に、思わず洗夜は膝を付いた。

まだ、お見合いは始まつてもいないのに雰囲気は何処か今にも燃え尽きそうだ。

「……ついに来たか死刑宣告が」

「馬鹿言つてないで……つてあれ？、兄さん髪型が？」

「……髪型？……ああ、何本か飛んでいるな」

さつきまで車で寝ていたからか、朝にはちゃんとセットした洗夜の髪の一部がはねていた。

四方八方に自己主張する洗夜の髪。

流石にこのままお見合いをする訳にも行かず、洗夜は面倒だと思いつながらも髪型を直す事にした。

「仕方ない……悠、すまないがワックス持ってるか？」

「一応持って来て正解だった……」

洗夜の言葉に悠はスーツの内ポケットからワックスを洗夜へと手

渡す。

「すまない！ あと先に行っててくれ、髪型を直したらすぐに行く」

そう言つて洗夜は通路の角にあるお手洗いへと走つて行つた。

そんな様子の洗夜に、堂島は思わず溜め息を吐く。

「全く……仕方ない、俺達だけでも先に行くか……」

「そうだね……」

「では、こちらになります」

そう言つて悠達も案内されるまま、お見合いに使う部屋へと案内されて行くのだった。



現在：とある一室【お見合い場所】

悠達が一室に案内されると相手はまだ来ていなかった。

また目の前の室は和風な一室で、部屋な真ん中にはテーブルに座布団、周りには和風な置物が置いてある。

お見合いをしそうな和風の部屋を考えて下さいと言われたら、十人中八人ぐらいが同じイメージをしそうな部屋だろう。

そんな事を思いながら、悠達は座布団に腰を下ろした。

「そろそろだ……」

「ああ……この調子なら洗夜は遅刻決定だな。言い訳を考えとくか……」

悠と堂島は他愛もない話をしていると、座布団に座つて周りを見ていた菜々子が堂島と悠に話かける。

「ねーねー、おみあいが終わったら洗夜お兄ちゃんは結婚するの？」

「結婚……するかしらないかはまだ分からないが、恐らくしないだろう」

「兄さんの性格から考えて、それが妥当だ」

「……菜々子わかんない」

何故、洗夜の性格だと結婚しないのか理解出来なかった菜々子。

その様子に悠と堂島が苦笑いしていると、何やら廊下から段々と近付いてくる足音と話し声が聞こえて来た。

どうやら、相手側の人達が来た様だ。

「……全く、明彦のおかげで危うく遅刻する所だったな」

「こんな所にレイピア何か持ち運べる訳が無いだろ」

「その事じゃない。時間ギリギリまで部屋から出てこなかった事だ。何かあったのか？」

「……俺にも考える事ぐらいあるさ」

外から聞こえて来ているのは女性二人と男性一人の声。相手は三人、かと思いきや。

「大体は順平のせいですけどね」

「何でもかんでも俺たちのせいにするの止めて……」

「どちらにしろ、相手の方々を待たせる訳には参りません。ですから早く中に入る事をオススメ致します」

「……」

更に外から聞こえてくる声から察するに相手側は五人。

しかし、悠は話の内容からしてまともでは無い気がした。

(兄さんの予感が当たった……)

そんな事を冷や汗をかきながら思っている悠だが、その間にも襦が開かれた……。

(また綺麗な人だ……)

襦が開く音と共に中に入って来たのは赤く綺麗な和服に身を包み、髪は和服以上に綺麗な紅色で容姿共に完璧な女性だった。

先程出会ったアイギスもそうだったが、悠は今日だけで二人も並以上の美人に出会った事になる。

陽介辺りに言ったら……。

『お前！　なに学校サボってそんなうらやましい事をしてんだよっ!!』

等と言われそうだが今回は仕方ない。

悠が陽介で勝手な想像していると、和服の女性が向かい側に腰を下ろして頭を下げた。

「この度はどうぞ宜しくお願い致します……」

「いえ、こちらこそ宜しくお願い致します」

和服の女性と堂島が互いに挨拶を交わし、それに吊られて悠も頭を下げた。

(凄く威厳を感じる……)

悠が相手の女性に感じたのは綺麗だと言うだけではなく、彼女から伝わるとてもないリーダーシップと雰囲気。

だからこそ、堂島もそれ相応の対応をしているのだろう。

見ただけで伝わるその雰囲気は悠が下げた頭を、かなり上げずらく感じていと……。

「あつ！ アイギスお姉ちゃん！」

「っ!？」

隣にいた菜々子の声を聞いて頭を上げると、先程出会ったアイギスと明彦の姿が会った。

「菜々子ちゃんに、悠さん……?？」

「まさか、本当にまた会うとは……世界は本当に狭いな。(俺の事は……?)」

驚いているのはどうやら悠だけではなく、アイギスと明彦も驚いている様だ。

アイギスは思わず瞬きを繰り返し、明彦も似たように見えるが菜々子に呼ばれたのがアイギスだけだったからか、何処か複雑な表情をしている。

しかし、話は更にややこしくなった。

「あつ！ お前……!？」

「君はさっきの……!？」

「さっきの変なカップル……!？」

「違う!!」

順平とゆかりの存在にも悠は互いに気付き、悠が思わずそう呟くとゆかりが猛烈に否定した。

そしてそんな光景に驚いているのは悠達だけではなく、初対面の堂島と女性もキョトンとしていた。

「なんだ？ 菜々子と悠の知り合いか？」

「アイギスと明彦も……更に君達まで初対面ではないようだが？」

「実はさつき、菜々子がアイギスさんにぶつかって……」

「いえ、それは私の不注意で……」

説明中……。



「そうか、それは申し訳ない事を……」

「いえいえ、こちらこそ娘がご迷惑を……」

「もう良いよ……それにさつきアイギスお姉ちゃんと一緒に気をつけるって約束したもん！」

「ふふ、そうですね」

女性と堂島が互いに頭を下げる中、すっかりアイギスの事が気に入った様子の子の菜々子。

基本的に堂島家は男成分が強いため、菜々子にとってアイギスとの会話は良い息抜きになっている様子。

また、アイギスにとってもこの位の小さな子と接する機会も少ない為、良い経験だった。

そしてその二人の様子に女性は、何処か嬉しそうに微笑んだ。

「アイギスがお姉ちゃんか。……それに、既にお互いが知っている様だな。……なら、後は私だけだ」

そう言って女性は姿勢を直し、静かにお辞儀をした。

「……改めまして、私は桐条美鶴と言います。呼び方も美鶴で構いません」

「桐条……!?!」

女性『美鶴』の言葉に真っ先に反応したのは意外にも堂島だった。

また、桐条と言う名を聞いた瞬間、堂島が雰囲気が刑事としての雰囲気になったのを悠は感じた。

「どうかしましたか……?」

「なにか、気に障る事でも……」

美鶴の後に言葉を発したのは、これ以上は菜々子に怖がられまいと

黙っていた明彦だった。

しかし、堂島の雰囲気が変わった事を察したらしく、明彦からも鋭い雰囲気が発せられる。

その雰囲気を感じて堂島は我に帰ったらしく、頭を抑えてやってしまったと言わんばかりにため息を漏らした。

「あく、お見合いの場で言う事じゃありませんが……私は刑事をやっています」

「刑事を……なら、仕方ありませんね」

あのような雰囲気を出されて怒るかと思った悠だったが、美鶴は怒るどころか納得した様子で頷いている。

「叔父さん、一体何の話……？」

「……ここで言うような事じゃない」

堂島に一蹴されてはこれ以上は聞く事は出来ないと思は感じ、静かに黙るしかなかった。

そんな時だ、アイギスが静かに手を挙げたのは。

「あの、宜しいでしょうか？」

「え？ はい、どうぞ……」

まさか、このタイミングでアイギスが口を開くとは思ってなかった堂島は呆気な様子で返答したが、アイギスは気にした様子もなく、視線を悠に向けて静かに口を開いた。

「貴方様は菜々子ちゃんと悠さんの叔父さんなのですか？」

「はい……？」

アイギスの質問に堂島は困惑するが堂島は何かを察したらしく、落ち着いて返答する事にした。

「もしや、そちらも見合い相手の情報を知らなかったんですか？」

「恥ずかしながら……知る時間がなかったモノで」

本当はあったのだが、ここまで来たのだから相手の事を知らずにぶっつけ本番でお見合いをしようと思っていた美鶴にとって、結局知る事はなかったが正しい。

そして、美鶴の反応に堂島も軽く頭を下げた。

「あ、いえこちらも似たようなモノですから……それで先程の質問だ

が……私は堂島遼太郎と言いまして、この子は堂島 菜々子で私の娘ですが、こつちの悠は息子ではなく甥っ子です」

「っ!!」

堂島の言葉に驚愕するアイギスと明彦は何かを感じて目を大きく開けながら驚き、順平とゆかりは情報がアイギスと明彦程はなく、二人の様子に困惑気味であった。

だが、次に発する堂島の言葉と、それに答える悠の言葉に美鶴達の表情は驚愕に変わる。

「ほら悠……お前も自己紹介はしておけ」

「悠です。——」 鳴上「悠」

その言葉を聞いた瞬間、美鶴を除く四人の表情が驚愕に変わった。

「っ!?!」

「鳴上……!」

「鳴上って……まさか……!」

「そう言えば……さつき写真立ての写真って……」

ゆかりは先程の悠との会話を思い出し、悠の方へ問い掛けるように顔を向けると悠はそれに答えた。

「兄さんの写真立て」

「兄さんだとッ……!」

その言葉に真つ先に反応したのは明彦だ。明彦が突然、声をあげた事で菜々子は呆気になり堂島も何事かと様子見をしている中、聞き覚えのある苗字に美鶴は悠の方を見ながら口を開く。

「鳴上……?——すみませんが、私のお見合い相手は誰なんでしょうか。彼ですか?」

無意識かどうかは分からない。だが、ある考えが脳裏を過った美鶴の心拍数は徐々に早くなっていく。

そう感じながらも美鶴はこの場で一番見合い相手らしい悠が自分の相手かどうか気になった。

また、そう言って悠を見る美鶴だが堂島は普通に首を横へと振る。

「いえ、こいつは私達と同じ付き添いで貴女のお見合い相手はこいつの兄貴です。まあ、今は髪を直して遅れています……」

「そう言えば兄さん遅いな……」

そう言って悠が美鶴達の方を向くと驚愕した。

先程と違って美鶴達、五人全員が信じられないと言った様子で蒼白い表情をしていたからだ。

（あの女の子と、この少年が兄妹じゃないなら……この少年の兄はまさか……！）

（もしかしたら、私はとんでもない勘違いをしていたのでしょうか……？）

アイギスについては大丈夫なのだが。

段々と、ある考えが強くなって行く明彦と美鶴の表情は青白くなっていた。それに気付いた菜々子も心配して声をかけた。

「……ぐあい、わるいの？」

「い、いや大丈夫だ、心配してくれてありがとう」

美鶴は菜々子を心配させまいと笑顔でそう答えるが、無理をしているのは明らかだった。

すると、ゆかりが悠へ問いかける。

「ゆ、悠君……君のお兄さんの名前って……」

「すぐに分かる」

「ハッ!?……な、なに言ってる——」

順平がそこまで言った時だった。部屋の戸を叩く音が室内に響く。

それは堂島達の後ろの引き戸からで、それと同時に声が発せられた。

「すいません、遅れました……」

悠達の後ろの方から声が聞こえ、堂島は一段落した気分になった。

その声の主を悠達は知っているのだから。

「兄さん……やっとな来た」

「たく……髪直すのに時間をかけすぎだ。……じゃあ、あとは本人から自己紹介させた方が言いと思いますので……ほら、早く入って来い」

「『洗夜』お兄ちゃん遅刻だよ!」

「『……?!?』」

菜々子の言葉で美鶴達は思わず息を呑み、襖の戸は開かれ始める。だが、その開かれている間の時間は美鶴達にとつてはとても長く感じた。

明彦も珍しく呼吸が乱れ落ち着きがない。美鶴自身も不安と言う名の重苦しい感情によつて胸が苦しくなるのを感じていた。

そして、襖は開かれた。

「悪かった、今からちゃんと……っ!? お前等……!」

襖を開けた洗夜は美鶴達が視界入った瞬間、まるで此処にいる訳がないモノでも見たかの様に頭がフリーズし驚愕した表情のまま視線を外せなかった。

「洗夜……なのか……!」

「洗夜さん?」

「洗夜……」

「な、鳴上……先輩……」

「洗夜先輩……!」

洗夜と美鶴、アイギス、明彦、順平、ゆかりの五人は互いに無意識に目を限界まで開いた状態のままお互いを見続けていた。

今、言える事は現在において、もしこの再会を仕組んだのが神だとしたら、洗夜はその神に祈る事は無いだろう。

End

第二十八話：愚者と女帝

同日

現在：料亭【庭園】

あの衝撃の再会の後、洗夜と美鶴は二人だけで庭園を歩いていた。あそこでは話せない事もあるからだ。

当初は順平やゆかりも同行しようとしたが、明彦が二人を止めた。明彦自身も許されるならば今すぐにでも飛び出して行きたかったが、目の前には洗夜の保護者としての堂島がいるのだ。

堂島が桐条側の人選、若い者達ばかりで美鶴の保護者と言うべき存在、つまりは「大人」が全くいない事に多少の苛立ちを感じている事に明彦は気付いていた。

ただでさえ刑事である堂島は桐条に対する警戒は強く、まるで友達が集まりの様な人選の見合い。美鶴自身は見合いに乗り気はなかったが、相手側を馬鹿にするつもりもなかった。

しかし、堂島からすれば向こう側がどれだけ今回の見合いにやる気がないのかと、誤解を抱くには自分達の人選は充分なもの。甥っ子の事になれば尚の事。

相手側が洗夜の関係者と知って入れればこんな事はしなかっただろうが、既に後の祭り。これ以上は堂島達に不快な思いをさせない様にするのが今、自分の使命だと明彦は思い、気持ちを押し殺して二人を止めたのだ。

故に庭園にいるのは二人だけだが、洗夜は美鶴よりも前を歩き、視界には入れない様になっている。

「……」

「……」

お互いに言葉を発さず、ただただ静かに庭園を歩く二人。聞こえてくるのは風や草木の音。

しかし、今の二人にはそんな音は何の癒しにもなる筈もなく、そんな頃、先程の部屋で食事をしている悠達はと言うと……。

▼▼▼
現在：料亭（とある一室）

悠達と明彦達は静かに食事を食べていた。

それは洗夜と美鶴が部屋を出ていく際に、悠達に先に食事をしていてくれと伝えていたからだ。

悠も先程の洗夜と美鶴達の様子に疑問を感じたが、自分にはまだ踏み込んで行けない事だと感じて身を引き、気を紛らわす為に箸を持ち、目の前に置かれた料理へ伸ばした。

（美味しいけど、今一食欲が……）

和風な料理が中心で、その中の焼き魚を食べる悠は内心ではやはり複雑。その隣では堂島は静かに食事しており、菜々子も好き嫌いせずにもくもくと食事を続けていたのが救いだ。

「おいしい……い！」

「……ズー、そうだな」

菜々子の言葉に頷きながら、静かにお吸い物を啜る堂島。

そんな平和な光景に悠は思わず微笑んだ。

引越してからペルソナ、シャドウ、そして殺人事件等と言った物騒な事ばかりに巻き込まれていた為、洗夜には申し訳ないが今回のお見合いはつかの間の休息に悠は感じる事が出来た。

（そう言えばアイギスさん達、やけに静かな気が……）

そう言っただけで顔が上がった悠はアイギス達を見て驚愕した。

なんと、アイギスはあるとあらゆる料理の汁しか飲んでおらず、明彦に至っては料理に何やら粉末状のモノをかけていたのだ。

「……ゴクゴク！」

「……こんなモノか」

「……」

言葉が出ないとはこの事だろう。

洗夜が体験した事件の仲間と聞いていたが、こんな個性豊かな人達と洗夜の出会いが悠には想像できなかった。

すると悠の視線に気付いたらしく、アイギスと明彦が顔を上げた。

「これは気にしなくて大丈夫です。私は汁状のモノの方が燃料にしやすいので」

「燃料……?」

「俺も気にしなくて大丈夫だ。コレはただのプロテインだから……別に珍しいモノでは無いだろ?」

（プロテインは珍しくない……が、料理に掛けて食べる人は初めてだ。……兄さん、一体どんな友人関係作ったの?）

自分も負けてはいないのだが、棚上げ等でそんな事を考えながら悠は兄の友人関係に心配するが、悠はアイギスと明彦の隣の二人も気になった。

「……」

「……」

順平とゆかりは全く料理に手を付けてはおらず、ずっと暗い表情で下を向けたままだ。

（何があっただんだ……）

目の前の二人、先程の兄である洗夜と目の前にいるアイギス達の様子。

お互いの姿に驚くと言うよりも、何処か恐怖に近いものを感じられた。友達との久し振りの再会と言ったそんな軽いものではない。

何より、悠には前から気になる事があった。……それは、洗夜が関わった事件が二年前に解決したと言うことだ。

（二年前……兄さんが学校を卒業して家に帰って来た時と重なる）

二年前、家から離れていた兄である洗夜が帰って来た。

学校の寮で生活していた洗夜が家に帰って来たのは、三年間の内で僅か一回程度の事で、殆どは電話で済ませていた。

今思えば、其ほどの事件に巻き込まれていたのだから、今考えれば当たり前であり、卒業したのだから寮から出たのも当然だ。

しかし、悠が気になっていたのは洗夜が帰って来た事ではなく、帰って来た洗夜の“状態”にあった。

（帰って来た兄さんは、まるで抜け殻の様な目をして何かに疲れ果てた様に窺っていた。……もし、兄さんのあの時の状態が、この人達と

の間に起こった事が原因ならさっきの様子も領ける)

そう思った洗夜は、どうにかアイギス達と洗夜の間にあるものを知りたくなり、アイギス達が洗夜と共に前の事件に関係していたという根拠を探ろうと考えた。

しかし、何をどう言ったものか、悠は食事をしながら少し悩んだが答えは案外、簡単にに出てきた。

(これだ……)

悠が考えた事、それはストレートな事だ。今の悠の勇気ならばそれも言うことが出来る。

そうと思えば悠は食事を続けるアイギス達を見詰めると、思惑通りにアイギスと明彦が悠の視線に気付く。

「どうかしました?」

「プロテインは珍しくないと思うが……」

アイギスは聞き返し、明彦はプロテインが好奇心な目で見られると勘違いしていたが、そんな呑気な空気は悠の一言で壊される。

「……あなた達は“ペルソナ使い”ですか?」

「ッ!」

「———という意味だ、それは?」

悠の言葉にアイギスと明彦の雰囲気が変わる。それだけで悠は確信を得ることが出来たが、更に隣の順平とゆかりの表情を見れば確信は更に強くなる。

「なんで……それを……」

「君は一体……」

悠は確信を得る為だけの危ない橋を勝手に掛けただけに過ぎず、特に返答しないで食事に戻った。人に合わせていただけあってその人達の行動も読める。

下手に大事にしたくないというアイギス達の内心が……。幸いにも堂島からは気づかれる事もなく、明彦達も悠の思惑を見抜いたのか沈黙して食事に戻った。

視線は悠からは外さずに……。



現在：料亭【庭園】

悠達がそんな混沌とした食事をしている中、洗夜と美鶴は相も変わらず黙って散歩を続けていた。

本音を言えば美鶴自身は、すぐにでも洗夜に謝罪したい気持ちで一杯。

思えば、自分達が洗夜にした事は下手をすれば取り返しのつかない程の事だからだ。

二年前よりは弱々しく感じる洗夜の背中だが、それ以上に辛い何かを体験して来た事を物語っていた。

しかし、美鶴は意を決した。

「洗夜、私は——」

美鶴が覚悟を決め、洗夜に謝罪の言葉をかけようとした時だった。

「和服、似合うな」

「!?」

先程まで沈黙を貫いていた洗夜の突然の発言に美鶴は驚き、思わず言葉が出なかった。と言うよりも「嬉しき」と「恥かしき」で何を言えば良いか分からなかった。

「そ、その……お母様が御選びになって下さったんだ。そ、その……変じゃない……か？」

「ハハ、似合ってるって言ったろ。——綺麗だつて事だ」

そう言つて洗夜は静かに振り向いた。だが、その振り向いた洗夜の表情に美鶴は驚く。

先程は気付かなかつたが、洗夜の姿は二年前より窶れていたからだ。

「洗夜……少し窶れたか？」

「そうか？ これでも体重は増えたんだがな……」

美鶴の言葉に、洗夜は何事もない様に笑みを浮かべながら発したが、美鶴はすぐに洗夜が無理して笑っている事に気付いた。

「洗夜……」

「……まあ、色々あつたからな」

洗夜の言う“色々”とは美鶴達との一件も含め、あの事件からの二年間にあつた事を示している。

今では時々だが、最初の頃は毎日の様に見た悪夢。それが原因での精神的・肉体的負担。

それを心配し、両親より勧められて精神科やカウンセリングも受け、稲羽の町に向かう前までは生きる気力までを失い掛けていた。

今は守らなければならない存在が出来た為、まともな生活をしているが二年近くもそんな生活を続けていた洗夜からすれば寔れる理由には十分だった。

「大丈夫なのか……？」

「……ああ、大丈夫だ」

洗夜を傷付けたのが自分達なのは美鶴達自身も分かっている。だからこそ、心配していてもこんな単純な事しか言え無かった。

そして、洗夜も美鶴からの言葉を一瞬で終わらせた。無理をしていると美鶴にバレながらも無理をする。

それだけでも美鶴から言葉を奪うのには十分だった。

(また、何か無理をしているのか……)

昔の洗夜を知る美鶴にとって、今の洗夜は何処か弱っている様に見える。そんな仲間が無理をしている。本来ならそれを否定するべきだろう。

しかし、自分達と洗夜との決別する“原因”を作ったのは紛れもなく自分達。それを理解している美鶴からすれば、例え洗夜の言葉を否定しても何の説得力も無い。

そう思う美鶴の姿は日頃の彼女を知っている者からすれば、信じられない位に弱々しく見えた。

そして、洗夜はそれだけ言うのと再び美鶴に背を向けて歩き出し、鶴もそれに付いていく様に歩き出した。

(……)で洗夜から目を背け、逃げ出すのは簡単だ。だが、もう私はもう十分に逃げた。……なら、今の私がやる事は一つ、何と思われても良い。二年前の謝罪……そして、あの後に起きた、もう1つの事件……

『彼』の想いを伝えなければ！』

美鶴の瞳に力が戻り始め、その場で足を止めた。

「洗夜……私は——！」

まずは謝罪。これをしてはいけない事には始まらない。

そう思う美鶴は色々な感情が混ざり会う中で、謝罪の言葉を発しようとした。

だが……。

「謝罪はするな……」

「っ!？」

庭園の石橋の上で洗夜は美鶴の言葉を遮る様に、彼女に背中を向けたままそう告げた。

その口調からは先程の様な冷静な感情はなく、微かに怒りや哀しみの様な何処か感情的になっている事が読み取れた。

美鶴の言葉に何かを察した洗夜に、段々と過去の心の傷が再び浮き上がっていく様な感覚に襲われながらも口を開いた。

「言った筈だ……あの件ではお前達に非がないって事を……！」

「確かにお前は言った……だが、それだけでは私は納得できない！」

一体、どういう事だ……何故、私達がお前を傷つけたにも関わらず私達には非がないんだ!？」

「……俺からいう事は何も無い。それで二年前の件は終わりだ。お前等も、もう気にしなくて良い事だ……」

「洗夜!!」

洗夜の言葉に美鶴は食って掛かるが、洗夜は何も言おうとしなかった。本当に何も言う気がなく、二年前の“あの事”を終わらせる気なのだと思鶴は理解した。

だが、納得は出来る筈はなかった。

「洗夜……お前に何があった？ 一体、あれはなんだったんだ……?」

「美鶴……俺にはもう何かを成せる力はない。……ペルソナも弱体化し、俺の全てが弱っている。だからお前達を巻き込んでも何もしてやれない……! だから……もう干渉するな……!」

「……洗夜」

洗夜の押し殺すような言葉に美鶴は何て言えば良いか分からず、言葉が出なかった。だが同時、美鶴は先程の洗夜の言葉のある事に気付く。

「——少し待て、何故ここでペルソナの弱体化の話が出る？ まさか洗夜、お前、また何かの事件に巻き込まれているのか？」

「っ!？」

今までやや感情的に喋っていたからか、洗夜は思わずしまったと言った様な表情をしたのを美鶴は見逃さなかった。

ペルソナの名前が出て来た事から、恐らくはシャドウに關係する内容だと美鶴は判断する。もし、本当にシャドウ關係ならば美鶴達「シャドウワーカー」からすれば見逃す事は出来ない事だ。

「……お前等には關係ない」

しかし、洗夜はそう言つて美鶴から顔を逸らしてしまい再び背を向けた。

「洗夜!」

「……」

美鶴の言葉に黙る洗夜。本当にシャドウ關係の事件に洗夜が巻き込まれているならば洗夜の性格上、自己犠牲と言わんばかりの事をするに違いない。

洗夜と三年間、ずっと共に過ごしてきた美鶴はそう感じ、先程よりも大きな声を出して洗夜を問い詰め様とするが洗夜はそのまま黙つてしまう。

変な所で頑固の為、こうなつてしまえば洗夜が何があつても口を開かない事を知っている美鶴も、本来ならば何が何でも問い質すのだが、今回は相手が洗夜に断念するしかない。

「……」

「……」

先程と同じ様に繰り返す沈黙の中で、美鶴は洗夜の背中に不思議な優さを感じた。このまま、洗夜が消えてしまう様に思ってしまう。

そして気付けば、美鶴は洗夜の背に近付き、優しく抱きしめていた。

「……美鶴?」

強く握り絞めていた。

「今更、私が言える事ではないが……洗夜、私は……私達は知っていない。お前の優しさを、心の暖かさを……だが、それ故に私達はお前の優しさに甘えてしまったんだ。……だから、あの時……あんな事を……」

「……違う。甘えていたのは俺だ……お前達にも、自分の力である“ワイルド”にも……」

美鶴の言葉を否定する様に洗夜は首を横へ振るが、その振る力はあまりにも弱いものだった。

「それでも……『彼』や私達を含め色んな人々がお前の心の温もりに触れて気付き、助けられ……そして、惹かれてた……。『彼』や明彦達……もちろん私もだ」

「そうは言うが……俺は一体、何が出来た？ 一体、誰を守れた？ 親父さん……真次郎……『湊』……結局、俺は——ッ!？」

まるで火が消え始めた様に段々と声が小さくなりながら話す洗夜だったが直後、突然の胸に痛み思わず表情を歪ませ、美鶴にバレない様に胸を握り潰すかの様に掴んだ。

その結果、美鶴はその異変に気付かず、洗夜の言葉に返答する為に美鶴は洗夜の背から手を離れた。

そして、暗い表情で美鶴は何か考える様に口を閉ざした。それは悩んでいる様子。洗夜に何か言おうとしているが言い出せない、そんな様子。

しかし、僅かな悩みの中でも美鶴は大きな決断を下し、洗夜へそれを伝えようとする。

「洗夜、実は——」

美鶴が意を決して口を開こうとした時だった。

「ガッ!?——カハッ!」

美鶴は洗夜の異変に気付いた。最初は胸を押さえていた洗夜だったが、今は首を押さえている。まるで何者かに首を絞められている様に見える光景。

それを見た美鶴は洗夜の頭上に薄っすらと存在するモノに気付く。

意識しなければ分からない程に薄い姿だが、その存在が洗夜の首を絞めていたのだ。

「これは……!?!」

その光景が美鶴の記憶を刺激し、嘗て同じ光景を見た事を思い出させる。

その時は病院だった。チドリが入院していた時に見た光景。――

仮面が宿主を“殺す”光景だ。

美鶴の記憶が覚醒した時、彼女はその存在の姿を全て理解した。黒い仮面、全てが黒き愚者の仮面……。

「アイテルか……!?!」

美鶴が名を呼んだ瞬間、アイテルが獣の様に咆哮を放った。



そして美鶴が異変に遭った時、アイギスもその異変に気付いた。

「!」

頭部から僅かなデジタル音が鳴り、アイギスのセンサーが異変を捉えた。

「ペルソナ反応!?! 美鶴さんと洗夜さんが危険です……!?!」

「なんだと……!?!」

アイギスの言葉を聞いた明彦は顔色を変えながら、プロテインをお吸い物に全てを投入する。

「うわ……!?!」

菜々子はその光景に驚き、堂島も言葉が出なかった。

だが悠はどちらかと言えば普通に冷静でいられた。変人の交友関係ならば悠だって負けちゃいけないのだから。

だが、変わっているとはいえないアイギスが異変に気付いたのは確かであり、それが聞こえたゆかりと順平も頷き合う。

そして四人は一斉に立ち上がって悠達に頭を下げた。

「お花を筆りに……」

「筋トレに……」

「お花を摘みに……」

「トイ……って最初の二人はおかしいだろ!？」

それぞれが理由を付けて四人共、その部屋から飛び出して行った。その様子に困るのは勿論、堂島と菜々子の二人だ。

「なにかあったのかな……?」

「……さあな」

菜々子は首を傾げるが、堂島はもう諦めた様子で箸を置いた。色々と考えすぎてもう堂島は疲れてしまっていたのだ。

「……やれやれだ。本当に今の連中が洗夜の知り合いなのか?……悠、お前は何か聞いていないのか?」

堂島は菜々子の隣にいる悠の方へ向くと、そこには誰もおらず空の席だ。

「アイツ……どこ行っちゃった?」

「ななこ、わかんない……」

堂島の言葉に伝えてくれる娘がいるが、答えを教えてくれる者は誰もいなかった。



アイギス達が飛び出した頃、アイテルの咆哮によって生まれた余波によって美鶴は強風に襲われていた。

「くっ!」

現実で完全に具現化出来ていないとはいえ、アイテルから放たれている力は本物。しかし、そんな呑気に分析している暇など美鶴にはなかった。

「洗夜ツ!!」

美鶴の目の前では今もアイテルに首を絞められている洗夜の姿がある。今も苦しそうにし、ギリギリで呼吸している洗夜の下へ向かいたい美鶴だが、アイテルから放たれる力の余波を受け、そこまで近づく事が出来ない。

「このままでは……！」

残念ながら今の美鶴にアイテルを直接どうにか出来る術はない。近づく事も出来ず、洗夜がジワジワと殺されるのをただ見ているだけと言う現状に美鶴は歯痒いを通り越し、怒りを覚えた。

（やはり私には何も出来ないのか……！ 何故、アイテルが洗夜を襲う!?!）

己の無力への怒り、アイテルが洗夜を襲う理由を美鶴が思っていたその時、一発の銃弾がアイテルの眉間を捉えた。

『――！』

乾いた銃声、頭部に当たった衝撃でアイテルが洗夜から手を離し、洗夜は苦しみから解放された。

「グウツ!?!」

洗夜がそのまま膝を付き、地面に腹這いに倒れたと同時に、事態に気付いたアイギス達が美鶴の下へ駆けつけた。

「美鶴さん!」

「洗夜!」

アイギスとゆかりと順平、そして明彦が倒れた洗夜の下へ駆け寄った。

「おい! 洗夜!?! 無事なのか!」

「……」

明彦の呼びかけに洗夜は答えず、気を失っていた。

「一体、何が起こってる? あれはアイテルだろ……」

洗夜に肩を貸しながら明彦はアイギスに銃撃されたアイテルへ目を向けると、アイテルがゆっくりと動き始め、左手を翳しながら美鶴達へ向けた。

『――』

何やら眩いたと思うや否や、アイテルの左手から白い渦の様な物が発生し、美鶴達が行動するよりも前に美鶴達はその場から消えた。



現在：テレビの世界

霧が覆う異質の世界。その世界で美鶴とアイギス達は目を覚ました。

「なにが……起こった……？」

幸いにも意識はすぐに戻る事ができ、美鶴を皮切りにアイギス達も起き上がり始めた。

「ここは……一体、どこなのでしょう？」

「私達、さっきまで料亭にいたわよね？」

アイギスが周囲を見渡し、ゆかりが困惑した様子で呟く。

洗夜に肩を貸す明彦と順平も辺りを見回すが、霧が濃くて判断は難しい。だが言える事は一つあり、ここは先程までの料亭ではない。最悪、世界が違うという事だった。

「最後に覚えているのはアイテルが何かをしようとした事だ……」

「……なんでアイテルが鳴上先輩を。あれじゃまるでチドリと同じ……」

順平は明彦に身を預けたまま意識が戻らない洗夜へ視線を向け、そのまま表情を暗くする。辛そうに、そして気まずいと順平の顔には出ていた。勿論、ゆかりもその一人。

そんな二人に美鶴が冷静にさせようと声をかけた。

「二人共、気持ちは分かるが……今は落ち着き、この場所が何処か調べるんだ」

非現実慣れている事からメンバー達は異常に騒ぐ事はせず、冷静を欠いたのも洗夜の事であってこの霧の世界には既に適応していた。

「だが原因がアイテルの可能性が高い……」

明彦はそう言って洗夜を見るが特に変化はない。原因がアイテルである以上は洗夜が脱出の鍵なのだ。

そんな風に明彦が考えていると、不意に奇妙な視線を感じ取った。

「——誰だ！」

明彦の言葉に一斉に美鶴達もその場所へ視線を向けて警戒する。アイギスもセンサーを使用して警戒を高める中、アイギスは気づいた。

「シャドウ反応……！」

「……予想はしていたが、やはりシャドウ関連だったか」

本能でシャドウ関係だと察していた美鶴はあまり驚かず、他のメンバーもこんな異常事態がシャドウ関係ならば納得することが出来た。

霧の向こうからでも分かる、相手が近付いてくる気配に、この中で完全に武装している唯一のアイギスが先頭に出て銃口をそこへ向けた時、相手がその姿を現した。

「!?」

しかし、その姿を捉えてもアイギスは発砲する事が出来なかった。否、捉えてしまったが故に撃てなかった。

美鶴達も撃たないアイギスを非難しない。それは美鶴達も同じく、そのシャドウの姿に驚いて動けなかったからだ。

そのシャドウの姿を見た美鶴は、信じられない様に困惑の言葉を呟く。

「洗夜……?」

『……』

美鶴達の目の前にいるのは鳴上 洗夜その人の姿であった。洗夜と全く同じ姿の洗夜?に明彦達も困惑を隠せなかった。

「どういう事だ?」

「鳴上先輩はそこに……」

明彦と順平の傍に洗夜はいる。だが目の前にも洗夜?が確かに立っており、洗夜が二人いる事に困惑は加速すると思いきや、美鶴は冷静さを取り戻してアイギスへ問いかけた。

「アイギス……あの洗夜はシャドウなのか?」

「はい、私の中ではあの洗夜さんはシャドウだと判断しています」

「け、けどよ……鳴上先輩なんだぜ……あれは……」

外見は洗夜と同じであると確信できる順平には、少なくとも洗夜?への敵意はそこまで抱く事が出来なかった。

その様子はゆかりも同じであり、表情が晴れない時、洗夜?が動いた。

『理解できない……自ラが望んだ絆を……何故、拒絶する? 受け入

レナイ?』

「なんだと……う?」

「喋った……!」

洗夜?の言葉に美鶴は表情を変えて睨み、ゆかりは息を呑んだ。

『都合の良い繋がりだけヲ求める……愚力者……逃げルが楽か?』

「んだと……!」

意外にも真ッ先に言葉に反応したのは順平だった。不思議にも順平はこの洗夜?の言葉を何故か“理解”出来ていた。

しかし、それは言葉の“意味”ではない。その言葉が自分に“不快”な気分させるという事を理解出来たのだ。

「俺等が何から逃げたってんだ……!」

『“全て”……偽リノ仮面使いを守る時だけ、力を使う愚かな“魔術師”……“愚者”ヲ妬み……“黒き愚者”へ怒りを向ケル……弱キ魔術師……』

「んなッ!」

その言葉が順平の頭に嘗ての光景を見せる。

自分と力に目覚めて間もないにも関わらず“特別”だった少年への妬み。

何も出来なかったのは自分も同じだったのにも関わらず、訳も分からないまま青年へ“負の感情”を放った。

そんな記憶を勝手に呼び起された順平の頭に血が上る。

「うるせえ!! お前に何が分かんだよ!! なんで鳴上先輩の姿してんだ!?! お前はシャドウなんだろ!?! とつとと掛かって来やがれ!!」

『感情を目眩マセに使イ……また、逃ゲルか?——哀れ!』

(ッ!? 身体が……!)

洗夜?の金色に輝く瞳を見た瞬間、順平は“金縛り”の様に体が硬直して自由がなくなる。息は出来るが体が動かない。謎の圧倒感を持つ洗夜?に順平は背筋を凍らせた。

すると、用事は終わったかのように洗夜?は順平から視線を外し、今度はゆかりの方を向いた。

『虚しキ“恋愛”……己の“自己満足”ダケデ歩む愚か者……想う“

だけ”で逃げる弱者……』

「っ!? どういう事よ……!」

ゆかりも順平と同じであった。言葉の意味ではなく、言葉から感じる不愉快な想いに気付く事が出来ていた。

洗夜?を鋭く睨みつけたゆかりだが、その禍々しい金色の瞳を直視する事は出来ず、自ずと瞳を逸らしてしまった。

『お前ハ……何も成してイナイ。父をヲ想うだけ……母へ想うだけで逃げ……想イ人には想うダケで守れず……黒き愚者へは想うだけで、マタ逃げタ……!』

「うるさいわよ……! 誰かを想って何が悪いの? 何も出来なかったから私は”動いた”の! お父さんの事や……色んな事もそれで知れたの……」

ゆかりは拳を握り絞めて悲しみの表情で下を向いた。

何も成せていないは分かっている事であり、だから動いた。そして色んな人に会えた。

『彼』の事では凄く悲しんだ。洗夜の事も理由が分からないまま”あんな事”をしてしまい後悔した。

それは良くも悪くも自分だけの想いであり、それを理解しているゆかりは再び洗夜?へ睨みつけた……が。

『“想い”は自由ダ…… 無垢な赤子”から”老いし老体”マデ誰でも出来ル……ただの”自己満足”』

「っ! 自己満足……?」

『想うノは自由……故に何も成せない。他者へあらゆる感情ヲ想うだけであり、己の心ヲ守ってイタだけの逃避術……哀れ——』

洗夜?がそこまで言った時だった。順平は不意に声を聞いた。

“——順平……洗夜を頼む”……と。

その瞬間、洗夜?の顔面に明彦の右ストレートが直撃する。辺りに肉が潰れる様な音が響き、明彦からしても会心の一撃であった。……筈だった。

「むっ!?!」

『……』

会心の一撃であったが、洗夜？は一歩もその場から動いていなかった。まるで地面に埋め込まれているのではないかと思う程にビクともしていない。

今のダメージは何処に消えたのだと明彦が考えた瞬間、洗夜？の瞳が光る。

『また守れなかつた力……愚かな“戦車”』

「ッ!？」

突如、洗夜？から放たれた殺気に気付き、明彦は素早く距離を取ろうとしたが今の明彦の服装はスーツに革靴だった。

当然、いつもの動きは出来ず、明彦はワントempo回避が遅れる。

「明彦!？」

「明彦さん!？」

美鶴とアイギスが咄嗟に動くが早い洗夜？の方。

明彦はせめてダメージを抑えようと腕をクロスして攻撃に備えた時……。

「イザナギッ!」

巨大な大剣が明彦と洗夜？の間に入り、そのまま洗夜？を吹き飛ばす。

そして突然、現れた巨大な仮面の姿を見ながら明彦は態勢を整える。

「ペルソナ……か?」

目の前で大剣を担ぐイザナギの姿。そして先程の声が聞こえた後ろを美鶴達が向くとそこには悠が立っていた。

「君は……洗夜?」

「悠さん……」

美鶴とアイギスが悠に気付き、ゆかりと順平は悠が呼んだであるイザナギと交互に見続けた。

「このペルソナって……」

「お前……ペルソナ使いだっただのか……」

「……」

順平の言葉に悠は黙ったままだった。そんな悠に明彦は近付いた。

「礼は言おう……だが、お前は一体……」

「っ!」

明彦の言葉に悠は突然、身構えるとそれに気付いた明彦も身構えて振り返った。

そこには何事もなかったかのように立っている洗夜?の姿があった。

「効いていないのか……?」

「……危険な存在と思つて良いようです」

美鶴とアイギスは洗夜?の存在に危機感を覚え、悠のペルソナを見て自分もペルソナを召喚しようとした時であった。

周囲にカリツと言う噛み砕くような音が聞こえた時、洗夜?の腹部に剣が突き刺さった。

「!」

その様子に驚き、剣が投げられた場所を美鶴達が見ると、そこにはフラフラながらに立っている洗夜の姿があった。

息を乱しながらも洗夜は周囲にあった適当な剣を拾い、何やら噛み砕きながら洗夜?に投げて睨みつけていた。

そんな洗夜に対し、腹部に剣が刺さっている洗夜?は表情を変えなのまま、その姿は徐々に消え始めた。

『油断シタか……だが』それを『使つてモ、完全に『黒のワイルド』を防グ事はない……いずれ……必……ズ……』

その言葉を残し洗夜?はその姿を消し、対象が消えた事で剣も地面に落ちて虚しい金属音を鳴らす。

そして直後、洗夜の左腕からアイテルと同じ力が放出される。

「そういう力だったのか……」

その眩き最後に、再び洗夜と美鶴達は这个世界から姿を消した。



現在：料亭【中庭】

今度は意識はしっかりとしており、美鶴達はすぐに状況を知る事が

出来た。和風の庭園、料亭の中庭だ。

「戻ったのか……？」

「流石に慣れたぞ」

美鶴と明彦は冷静に判断し、アイギス達の方に視線を送ると三人も無事を知らせる様に頷く。

そして更にその奥には悠がいた。

「どうも」

軽く手を振りながら挨拶する悠の姿に安心なのか、呆れたのか複雑な表情を浮かべる美鶴だったが我にすぐに帰った。

「洗夜!？」

すぐ傍で膝を付いている洗夜に美鶴は近付くと、息を乱す洗夜の手握られている瓶の存在に気付く。瓶その物は普通の者だが、その中身には見覚えがあった。

「洗夜……それは……!？」

「……!？」

美鶴の言葉に明彦も気付くや否や、洗夜に近付き……。

「どういう事だ……これは何だ?——洗夜ツ!!」

「……ッ!」

明彦は洗夜の胸倉を掴み上げ、怒りの表情で洗夜へ吠えた。その行動に洗夜も衝撃で表情を歪ませるがそこまでだ。何も言わずに明彦を無言で見詰め返すだけだった。

そしてその事態に気付いたゆかり達もやって来て、その明彦の行動の意味に気付いて声を失う。

「……!？」

「これは……!」

「……見間違い様がねえ……チドリの時と同じだ……“抑制剤”だ……!」

順平が震えながら呟き、それを聞いた明彦は再び洗夜を問い質す。「その通りだ……どういう事だ洗夜?……なんでお前がこの薬を持っているッ!!」

「一つしかないだろ……俺はもう、ペルソナを制御出来ない……だか

ら使った。真次郎から取り上げた抑制剤を……」

「!?」
美鶴の表情が固まる。ゆかり達の表情も固まる。順平に関してはチドリの件もあって絶句する。現状、抑制剤を使う事の恐ろしさを話だけでしか分からない悠だけが冷静だ。

「だからって何でだよ!? 鳴上先輩だって知ってんだろうが! 抑制剤を使ったらどうなるかをよ!」

「順平の言う通りだ……お前がそれを使って良い理由はない筈だ!」

順平の明彦は心配からの怒りを洗夜にぶつけるが、洗夜の瞳は既に曇っていた。

「悠達を……殺したくない……」

「なんだと……う?」

洗夜の言葉に明彦が聞き返すが、洗夜は曇りながらもその瞳から静かに涙が流れていた。

「俺はもう……誰も失いたくない……! 誰も殺したくはない……!」

俺にはこうするしかないんだよ……明彦!!」

「!」

洗夜の強い口調で思わず体を固くしてしまった明彦。美鶴もゆかり、順平も体を固くしてしまう中、アイギスだけがその場を見守っている。

「もう……俺に構うな……! 構わないでくれ……! 俺も……いつ

までも……お前達を……」

「洗夜……!」

「洗夜?」

洗夜が気を失った事で重くなり、明彦はすぐに下ろして美鶴が洗夜を受け止めた。

それでも洗夜は抑制剤の瓶を離さない。中身も中途半端な数であり、確実に洗夜が服用していることは分かる。

その事で美鶴は半ばパニックになりそうな自分の感情を抑え、すぐに人を呼ぼうとした時、洗夜は微かに口を開いた。

「あいつ等を……守らなく……ては……こうするしか……ない……!」

この……ままじゃ……俺は悠達を……殺してしま……う……」

「洗夜ッ！ 洗夜ッ!!」

洗夜はそれだけ言うと、再び気を失う。後に残されたのは、人を呼ぶ美鶴達。

そして、騒ぎを聞き付けて来た堂島達だけだった。

END

第二十九話：それぞれの想い

同日

現在：ホテル（洗夜・悠の部屋）

「！」

「あつ目が覚めた？」

とあるホテルの一室で洗夜は目を覚ました。服もスーツからジャージに変つてベッドの上で意識を取り戻した洗夜を、悠が迎えた。

「……悠？ 此処は……？ 俺は一体……？」

記憶の混乱により一瞬、見覚えのない部屋だと思つたが此処が自分と悠のホテルの部屋だと気付いた洗夜だが、大量の汗にボくつとした頭、とてつもない怠さで現在の自分の場所を把握するだけでもやつとの思いだった。

「兄さんはお見合い会場で倒れたんだ。それで美鶴さんがすぐに医者を呼んでくれて現在に至る」

「そうか……医者はなんて言っていた？ 病院ではないなら、大した事はなかったんじゃないのか？」

“抑制剤”を服用している事で医者と聞いて内心で洗夜は少しだけ焦つた。

美鶴達ならばともかく、一般人である堂島にでも知られたら面倒ですまないからだ。

「良く分からない。けど、身体に異常が見当たらなかったから、何か精神的なモノじゃないかってさ……」

「……成る程、それと叔父さん達と美鶴達は？」

「叔父さんと菜々子はさつき、美鶴さん達と一緒に夕飯を食べて今は部屋にいるよ。……美鶴さん達も此処のホテルに泊まつてて、菜々子と仲良くなつたから。……ちなみにお見合いは美鶴さんからの提案で保留にして貰つてる」

「アイツ等も此処に……それに保留か」

洗夜はこの際、お見合い自体をなかつた事にしたかつた。

別に自分が倒れたからでは無いが、互いにもう会わない事がお互いにとつて一番ベストだと洗夜は思っていた。

それが良いかどうかは分からない。だが、事態はそんな問題ではないのだ。

洗夜が内心でそんな事を考えていると、悠が一息入れて話し出した。

「それに実は結構大変だった。兄さんが倒れた事で菜々子が大泣きして……。兄さんの側を離れなくて、叔父さんが説得してやっと夕飯に向かったんだ」

「……菜々子がそこまで？——叔母さんの事と重ねてしまったのか……」

悠の話を大体聞き、菜々子達に余計な心配をさせてしまった事に洗夜は罪悪感を抱いた。

まだ一緒に住んで短いが、あんなにも強く、優しい菜々子を悲しませたくない。

そう思いながら洗夜は、ゆつくりとベッドから身体を起こした。

「兄さん……余り無理はしない方が良い。ただでさえ、兄さんは自分の事を二の三の次にするし」

「そんなつもりはないんだが……だが、別に大丈夫だ。……それに、少しでも何か口にしていた方が良いだろう」

「そう言うと思って、叔父さんがルームサービスを頼んでくれる。一応、部屋に届いてから20分は経ってないから、まだ温かい。……」

それじゃあ俺は叔父さん達に兄さんが目を覚ましたって教えてくる」
(起きた後に頼んで欲しかったな……)

自分がいつ目を覚ますのか分からないのだから文句は言えないが、そんな事を胸にしまって洗夜は自分のベッドの隣にあるテーブルにおいてある食器に手を伸ばし、閉じてる蓋を開くとチーズが乗っているハンバーグが鉄板に置かれていた。

「病み上がりで寝起きにはへビーだ……」

そう言っと思わずナイフとフォークを置いてしまう洗夜にドアノブを掴んでいた悠がその場で止まり、洗夜に背を向けたままで口を開

いた。

「兄さん、一つ聞いて良い？」

「……どうした？」

「兄さんと美鶴さん達……昔、何かあったんだろ？」

「……」

悠の言葉に洗夜は沈黙で返す。

自分達のごたごた、と言うよりも自分の罰に弟である悠まで巻き込みたくはないのだ。

そう思っていた洗夜に、悠はその場で軽く微笑んだ。

「……隠さなくても良い。お見合いの時の兄さん達を見れば、兄さん達の間にかあったのかぐらい分かる」

「ハハ、だよな……」

やはり隠し通す事は出来なかったと、洗夜は悠の言葉に思わず笑ってしまう。伊達に長年兄弟をやってはおらず、洗夜と悠はなんだかんだでお互いの隠し事ぐらいいは分かる。

「これは俺の勝手な推測だけど、二年前に兄さんが家に帰って来た時の抜け殻の様な感じ、そして兄さんのペルソナ能力……コレ全部、美鶴さん達と関係しているんじゃない——」

「悠……お前には話せない」

「兄さん……？」

兄の言葉に悠は振り向くが、洗夜はその様子に軽く笑う。

「……悪いな。別に意地悪で言っただけなら、お前を信用していない訳でもない」

「なら何で？」

「これは〃罰〃なんだ……」

「……罰？」

洗夜の言葉に悠は意味が分からず、キョトンとした表情をする。

ただでさえ、『タルタロス』『アス』『ニクス』『影時間』『桐条の罪』これ以上に言葉を上げると言われれば、まだいくらでも上げられる程に重い事件で目覚めた〃罪〃だ。

言葉は悪いが、はつきり言ってしまうと洗夜からすれば今、起きて

いる『稲羽の事件』は二年前の事件に比べれば軽いモノと見える。

『タルタロス』と『影時間』を徘徊していたシャドウに比べれば、いくら死者が出ているとは言え凶暴性・知的性、共に前者の方が遙かに上だろう。

テレビの中のシャドウも全く凶暴じゃないとは言えないが、霧が晴れると凶暴になると言う条件付き及び、自分達からは外の世界の人達に危害を加えない。

その為、悠達にとつてのシャドウの事件の基準が『稲羽の事件』だとすれば、二年前の事件は重い話でしかなく、その中で起きた己の『罪と罰』は洗夜でも話し切れない。

前にかいつまんで悠達に話した時でさえ、悠以外の者は顔面蒼白ではないが辛さを隠せなかつた故に話せない。つと言うよりも、話してどうにかなる問題ではないのだ。

「悠、俺が抱える問題は“俺だけ”の問題なんだ。お前に話しても無意味に巻き込むだけなんだ……だから頼む。この件にだけは干渉しないでくれ……！」

「……なら忘れないでくれ。俺が兄さんの“弟”だという事を……」

悠はそう言つて部屋から出て行つた。表情は納得していなかつたが、受け入れてはくれた様だ。

そして、洗夜は悠を見送つて再びフォークとナイフに手を伸ばした。

「……もう、お前を守る事は出来ないな」

そう言つて洗夜は、微妙な温度のハンバーグを切ると、中からもチーズが流れ出て来る。

「……重いな」

洗夜は静かに口に運び、微妙な温かさのチーズとハンバーグの味を無理矢理楽しむ事にするのだった。



現在：ホテル（バー）

菜々子達との夕食を終えた美鶴と明彦は現在、ホテルに備わっているバーで軽くお酒を飲んでいた。

ゆかりと順平はギリギリアウトだが美鶴も明彦は既に二十歳。更に言えば美鶴は、色々な付き合いでお酒を交わす場面があり、少しずつだが嗜んでいる。

しかし、今日に限っては違う理由だと、美鶴達の暗い表情を見ればすぐに分かる事だった。

「……私は駄目だな」

「なんだいきなり、お前らしくもない……」

それほどアルコールの入っていないお酒を口にしながら、美鶴は無意識の様にそう呟く。

その隣でお酒の手を休める明彦が意外そうに言うが、らしくないと思っているのは美鶴も承知の上だ。

「私は今日、洗夜に自分の想いを伝え様としたが……それは、私のただの自己満足に過ぎなかった。……結局、私は洗夜の気持ちも苦しみも何も理解出来ていない……」

「美鶴……余り自分だけを責めるな。本来ならお前だけじゃなく、俺も洗夜と向かい合わなければならなかったんだ……！」

「明彦……」

今にも割りそうな勢いでグラスを握る明彦を見て、美鶴は苦しんでいるのが自分だけじゃないのを知る。

「俺は強くなる為に世界中を渡り、武者修業をして来た。……だが、結局強くなったのは力だけだ。……心はまだまだ弱い！ 何より、俺は親友だったアイツを裏切ってしまった……！」

そう言つて歯を食い縛りながらグラスを置く明彦。その苦痛を浮かび上がらせる表情は同時に、後悔をも抱かせるかの様に見える。

「その事も洗夜に伝えたんだが……前と同じ、私達は悪くないとしか言ってくれなかった……」

「……確かに、あの“一件”は当事者の俺達でさえ何でしてしまったのか未だに分からない事だ。——だが、だからと言って納得できるか！」

美鶴と明彦は、そんなお互いの言葉を聞くと同時に二年前に起きた、洗夜との決別する事になった“一件”の事を思い出す。

二年経とうが、あの時の自分達が洗夜にぶつけた言葉は一言一句覚えてる。忘れる筈もない。

今、この瞬間にも、あの時の言葉が頭の中で再生される。

『どうして『彼』を守ってくれなかったんですか!』

『誰かを守れない様な綺麗事よりも、俺は誰かを守るヒーローごっこの方がましっすよ!』

『……誰も守れない力。そんなモノに何の意味がある?』

『……お前を信じた私達がいけなかったんだ』

「ッ!」

「あの時……俺達に何が起きていた……!」

美鶴と明彦は、洗夜との溝を作った原因である二年前の出来事を思い出して表情を悲痛に歪ませた。

二年前の出来事後、美鶴達は“我に返った”様に自分達の過ちに気づき、洗夜に謝罪する為に部屋を訪れたのだが、美鶴達が来た時には既に洗夜の部屋は空き部屋だった。

当時それに明彦達が驚愕する中、急いで連絡した美鶴の電話に洗夜は出た……が。

『お前達は何も悪くはない。全部、忘れる。——すまなかった……!』

その言葉を最後に洗夜と会う事は疎か、連絡も通じないまま二年が過ぎてしまった。

一度も忘れた事のない過去を思い出すながら、明彦と美鶴はグラスを少し口に運んで再び置いた。

「シンジも『アイツ』も……そして洗夜も……何故、一人で抱える……!」

明彦の言葉を黙って聞いている美鶴の表情は悲しみに満ちていた。何もしないよりは、何かしら行動をしたかったが何が出来るのかも分からない。

「こうなったら無理矢理にでも聞き出すしかないぞ!」

明彦はグラスから手を離し、美鶴へ視線を向けて今にも洗夜の部屋

へ向かうとに椅子から立ち上がった。だが……。

「止めとけ……」

美鶴は明彦の行動に対し、首を横へと振って返した。その行動は間違いだと言ったことが分かっているからだ。

「何でだ!? お前だって分かっているだろ! 洗夜は既にあの薬を服用している……このままじゃアイツは死ぬぞ!」

「そんな事は分かっているッ!!」

明彦の言葉に美鶴が叫び、静寂に似合ったBGMを打ち消してBAR全体を支配する。

何かあったのかと思つて店員が向かおうとするが、近くにいた桐条のガードマンとメイドがそれを止める。止めた姿はまるで彼女の時間を守ろうとしている様だった。

「分かっているんだ……明彦……だが、何が洗夜の為になるのかいくら考えても分からないんだ……!」

「美鶴……お前……」

今にも壊れそうな程に悲しそうな表情をする美鶴を見て、明彦は黙つて再び椅子に腰を掛けるしかなかった。

この中で一番洗夜へ何かしてあげたい気持ちが一番強いのは他の誰でもない、美鶴自身だと言う事を明彦は思い出した。

最初の頃は無理ばかりして、愛想笑いすらしなかった美鶴。

幼い時から彼女が背負っているものからすれば、それは当然の事と言えるが、そんな美鶴が良く笑っていたのは決まって洗夜の前だった。

勿論、洗夜が入部仕立ての頃は笑う事はなかった。

それどころか、偶然ペルソナが覚醒したとは言え、関係のない者に一部秘密にしながら巻き込む事に申し訳ないと罪悪感を隠すだけで、本音の顔を押し留めていた。

しかし、洗夜自身が元々、笑わす気があったかどうかは分からないが世話好きな性格の洗夜は顔色の悪い美鶴や食生活が片寄っていた自分に、真次郎と料理対決と称した夕食を作ってくれたりしていた事を明彦は覚えている。

真次郎とは違い、何処か懐かしい様な家庭の味。それが洗夜の料理の味だった。

美鶴達が大変だからいいと言っても……。

『まずければ止める』

それしか言わない洗夜に美鶴達は何も言えなかった。不味い訳がないからだ。

そんな風に温かい食事を作ったりしている内に、美鶴の心も溶かしたのだろう。

巻き込んだに等しく、全てを知らないとは言え、事件の一部を秘密にして教えていない様な自分に温かい食事を作ってくれる、察に帰つたら”おかえり”と言ってくれる。

両親が共働きの為、面倒見が良い洗夜からすれば当然の事なのだが、美鶴にしてはそれがとても嬉しく心を温かくしてくれたと思えた。

そんな日が続く中、気付けば美鶴は洗夜と行動する事が増えていた。明彦達を含め共に勉強したり、洗夜が話す弟の話だったり色々しながら。

美鶴を気分転換と称して洗夜がゲームセンターに連れて行った時もあった。

美鶴の人柄を知っている明彦や真次郎なら未だしも、美鶴を只の”桐条グループ”の令嬢としてしか見ていない一部の生徒からは、美鶴を平然と誘う洗夜は怖いもの知らず等と思われていた事もあったりした。

洗夜と美鶴本人は全く気にしていなかったが、明彦からすれば何も知らない連中に友人を変に言っただけで欲しくないのが心情だ。

しかし、明彦は今でも覚えている。洗夜がゲームセンターに美鶴を連れていき、一度だけ二人で写真を撮った事があった日を。

当初は落ち着いていた美鶴だが、翌々考えて見ると同性の友人と一緒には愚か、ゲームセンターすらまともに行った事ないのにも関わらず、異性である洗夜と二人つきりで写真を撮る。

当時の洗夜からすれば、友人とゲームセンターに行き写真を撮った

だけなのだが、美鶴からすれば色々余計な事を考え、変に意識してしまつて段々と恥ずかしくなつてしまつたのだろう。

その撮つた写真を洗夜に渡さず、そのまま自分でしまつてしまう。当時の洗夜は、そんな美鶴の行動に笑つていたが、美鶴は洗夜のそんな態度に更に顔を赤くし、そんな珍しい光景に微笑む明彦と真次郎の姿があつた。

何だかんだ言つて、あの時がそれなりに安定していた時期なのかも知れない。

だが、訳も分からないまま親友を自分達は裏切つた。

自分も勿論、後悔しているのだが、そんな事があつたからこそ、美鶴がメンバーの中でも一番後悔の念が強いのだと明彦は思う。

(過去に戻る事は出来ない……)

昔の想い出を思い出しながら、明彦がそう思つていた時だ。

美鶴は徐に懐から何かが包まれているハンカチを取りだし、テーブルへと置いた。

「抑制剤……」

瓶から出され、ハンカチに包まれている薬に明彦の目は無意識の内に鋭くなる。

「洗夜は薬をシンジからと言つていたな……」

「……洗夜が真次郎から自らの“能力”で副作用を取り除いた時、不要になつたからと取り上げていた事があつた。おそらく、その時のだろう」

まるで本人に聞いたかの様に語る美鶴だが、明彦の目は更に鋭くなる。

(また……俺は救えないのか……シンジ……!)

明彦の頭に過る、自分が救えなかつた友の姿に肩を落とす様に目を閉じて明彦は歯を食い縛つた。

「結局……あの事件が終わつたと感じていたのは私達だけだ。……洗夜だけが未だに囚われている……」

美鶴はそう言つて、コップに入つて残りの少ないお酒を飲み干すと、明彦も同様に一気に飲み干した。

そんな時だった……。

「おいおい……若えのがなに間違った酒の飲み方してんだ？」

「あなたは……」

「確か、洗夜の叔父の……」

「堂島遼太郎だ。まあ、好きに呼んでくれ」

堂島はそう言うと、明彦の隣に腰を掛け、傍にいた店員に注文した。

「……すまないがサツパリしたのと、肴を適当に頼む」

「かしこまりました」

店員が頭を軽く下げ、さつそく準備にとり抱えると暫くして要望通りの青いカクテルと肴が置かれ、堂島は静かに口に付けた。

「ふう……やつと一息着けたってとこだな」

朝早くから家を出て、この場所へと向かい、一息つく暇もないままお見合いへと参加した為に疲れていた堂島は、アルコール摂取してようやく体を休ませる事が出来た。

すると、そんな堂島に美鶴は声を掛けた。

「……あの女の子と洗夜はどうしましたか？」

「ああ、心配を掛けてたか……菜々子は結局、泣きつかれて部屋で寝ていて、今は悠が見ていてくれる。……そして、洗夜も先程、目を覚ましたらしい」

先程とは違い、少しラフな感じに返答する堂島は内ポケットから煙草を取り出して手に取ると、美鶴達に吸っても構わないかと視線を送り、美鶴と明彦は、どうぞと意味を込めて手を堂島の前に出した。

二人の許可が出た事で堂島は煙草を口に加えて火を着け、一息吸うと風向きに気を付けながら美鶴達に煙が行かない様に吐いた。

煙草の煙が空への階段の様に伸び、やがて消える中で堂島の言葉を聞いた美鶴は、洗夜が目を覚ました事で胸を撫で下ろしていた。

「……そうですか」

「……良かったな」

安心する美鶴達を見て、今度は堂島が口を開いた。

「……すまんが、今度はこちらから話を聞いて良いか？」

「……構いません」

突然の堂島からの問い。それに対して別に断る理由もない為、美鶴は堂島の言葉に頷いて、明彦は隣で静かに耳を傾けた。

「いや、ただな……洗夜との間に何があつたのか気になつてな」
「……」

何気なく聞いて来た堂島の言葉に、美鶴達は何て言えば良いか分からなかった。

本来ならば、あまり他者が気付かない程にリアクションが小さかつたが、刑事である堂島からすれば二人の反応は十分過ぎた。

堂島は、そんな二人のリアクションに思わず笑つてしまう。

「はは……そんな驚く事でもないだろう。一応、俺は刑事だからな、お前達と洗夜が会つた時の顔を見れば何かあつたのか位は分かる」

堂島はそう言つてつまみを口にしながらも更に続けた。

「まあ……最初はあからさまにやる気が無さそうな人は少し驚いたがな」

「……その事に関しては本当に申し訳ありません。ですが、別に其方を下に見た訳ではなく……彼等は私にとって本当に信じられる者達なのです」

「まあ、それはお互い様だからもう文句はねえ。——話を戻すが、洗夜との関係は？」

別に責める様な目で見ている訳でもない堂島からの質問、それに明彦が顔を上げた。

「俺達は……本来なら、俺達全員が背をわなければならなかつた罪を……洗夜一人に押し付けてしまつたんです」

「おいおい……罪つて、犯罪じゃねえだろうな？」

「いえ……法に触れた様な事はしていませんので、ご安心して下さい」
法に触れているかどうかは怪しいのだが、美鶴はしっかりと否定した。

刑事である堂島に下手な事を言つて洗夜には余計な心配を掛けたくなかつたからだ。

そして、美鶴の言葉に渋々だが納得したのか堂島は酒を口にし、何かを思い出した様に語り始めた。

「その事と関係あるかどうかは分からんが……あいつの母親からある事を言われていた」

「ある事……？」

「何の話ですか？」

基本的に洗夜の家族の話は殆どが、弟である悠の話だった。

それ故に、洗夜の母親の話と言われても今一ピンと来なければ、何故、堂島がそんな話を自分達に聞かせようとするのか二人には分からなかった。

しかし、そんな美鶴達の想いとは裏腹に意外にも真剣な話なのか、堂島はまだ微妙に長い煙草を灰皿にグリグリと潰しながら話し出した。

「いやな……あいつ等の両親は今海外に居てな……。それで今、家であいつ等を預かっているんだが悠はともかくとして、洗夜を預かる理由が少し特殊だった」

「と言うと？」

「話によると約二年前、正確に言えば高校卒業をして帰宅した時、洗夜はまるで脱け殻の様だったらしく何やら不眠症や精神的な面でも苦労していたらしい」

「……」

堂島の言葉を聞いた美鶴は言葉が出なかった。

明らかに“あの出来事”が原因なのは美鶴と明彦にはすぐに分かった。

まさか洗夜が、自分達が想像していたよりも酷い状態で生きていたのを知り、明彦は思わず拳を握り締めた。

堂島もその話は洗夜の母親から聞いたただけだが、実際はもっと酷かったのかも知れない。

そう思うと、美鶴達は余計に洗夜に対して申し訳ないと言う気持ちが強くなると同時に、洗夜に会いづらいと言う気持ちが強まってしま

う。

そして、堂島は美鶴達の方を敢えて見ずに話を続ける。

「そういう事もあって、洗夜の母親からは休養も兼ねて洗夜も預けた

んだ……だがな」

「……何か問題でも？」

どこか不思議そうな事を思い出した感じに頭を弄る堂島の様子に、明彦が堂島に何があったのかを聞く。

「実はな……精神的に参っているって聞いていたんだが、あいつが家に来た時は全くそんな様子がなかった。……それどころか、まるで何かを覚悟している様な目をしていた。あれは、脱け殻の奴の目じゃない」

「覚悟の目……？——失礼ですが、お住まいはどちらに？」

堂島から聞いた言葉で、洗夜から感じた覚悟の目と言うのが気になった美鶴はお見合いの時に洗夜が口走ったペルソナの弱体化を思いつく。

この二年間、洗夜が本当にペルソナやシャドウと関わっていないならば、ペルソナの弱体化に気付く訳がない。

しかし、先程の堂島の言葉から洗夜が住んでいる場所に何らかがあると美鶴は判断した。

「今住んでいるのは、稲羽市」と言うところだ。ニュースでやっているからすぐに分かる筈だ」

「ニュースでやっている……と言うと、あの稲羽市ですか」連続殺人の？」

「ああ、その稲羽市だ」

「連続殺人？ 何の事だ？」

「後で話してやる」

大学に在学しているにも関わらず、海外を渡り歩いて武者修行をしていた為、日本での事件に疎い明彦には後で説明すると言ひ。美鶴は稲羽の町に何かあると踏むと、堂島が顔を上げた。

「……前置きが長くなっちゃったが結局、洗夜と何があったんだ？ さっきの話からじゃあ、単純な喧嘩とかな訳じゃないんだろ？」

話を本題に戻した堂島の言葉に、美鶴と明彦は無意識に顔を下げ

る。

なんだかんだで心身共に成長した二人だが、洗夜の事となると話は

別。美鶴達も未だに二年前に縛られているのだ。

そして、美鶴達は堂島の言葉に首を横に振る。

「……良いんです。我々が関わると、洗夜が苦しむ事になる。……今日の様に」

「洗夜に今後一切関わらない事が、俺達が出来る唯一の事なんだろう……」

美鶴達にとって今日の出来事がきつかけとなり、自分達が近付くと洗夜が傷付くと思ってしまうている。

すると……。

「洗夜がそう？ 望んだ？ のか？」

「っ!？」

堂島の言葉に、先程以上の衝撃を感じたと同時、その衝撃を隠せない美鶴と明彦は思わず、持っていたグラスをテーブルに落としてしまった。

そして二人は堂島の方を向くと、堂島は静かに笑っていた。

「……この言葉は、悠と洗夜に教えられたものだ」

「洗夜と……あの少年が？」

「一時期、俺はある事を理由に娘から目を背けていた時があった。言わなくても分かってくれる。そう思っていたが……悠と洗夜にそう言われて気付いちまった。……それはただ、俺自身すらも欺いて望んだだけの事だっけな」

堂島は辛そうな表情をしながらも酒で紛らわしながら話を続ける。

「……思えば、それが正しかった。いつまでも目の前の現実から怖がっていたが、アイツ等のお陰で俺は菜々子と向き合えた。だからな、洗夜にも……そして洗夜の友人であるお前等にも、俺と同じ思いをして欲しくねえんだ」

まるで、何年も前の事を話す様に語る堂島の話。

その言葉に、美鶴と明彦は正に今の自分達そのものではないかと思ってしまうた。

「……お話は気持ちには分かりました。ですが私達は直接、洗夜に関わるなど言われております」

「それがあいつの心の底から本心ならば俺も特に言う事はない。——
だがな、それが本当の洗夜の想いなのかは誰も確かめてはいないん
じゃねえのか?……人間つてのは本当に辛い時ほど、自分を欺くもん
だからよ……」

「……」

その言葉に美鶴と明彦は言葉がでなかった。不思議と楽になつて
しまい、先程までの洗夜へ会いに行く恐怖は既に消えていた。

「まあ、すぐにとは言わんさ。……そうだな、何なら洗夜のガキの頃の
話でも聞かせてやるか?」

「洗夜の子供の頃……?」

「そう言えば、そんな話は洗夜から聞かなかつたな……アイツ、自分の
昔の話はしなかつた」

堂島の言葉に美鶴と明彦は頷き合う。美鶴も明彦も、洗夜の昔の事
は知らなかつた。洗夜は何故か、自分の昔の事は話さなかつたからで
あり、美鶴達にとつてはありがたいものだ。

「お願いしても宜しいですか?」

「別に構わんさ、そんなに俺も長くは語れねえがな。……ええと、確
かあれは洗夜が四、五歳の時だったか……悠がまだ、よちよちと危
なつかしかつた時だな」

そう言つて、美鶴達と堂島は暫くの間、会話を楽しむのだった。



現在：ホテル【洗夜の部屋】

「……胃薬が欲しいな」

嫌がらせに近い程にチーズが入っていたハンバーグを完食した洗
夜だったが、やはり寝起きだったからか胃に響いていた。

胃の中が油の海。一瞬、そんな事を思う自分に思わず苦笑する洗
夜。——そんな時だ。

ピンポン……!と部屋についているチャイムが鳴り響き、洗夜
はゆつくりと扉に向かつた。

「食器の回収か……」

ホテルの係員が食器でも下げに来たのかと洗夜が考えている間にもチャイムは鳴らされ続ける。

「はいはい……すぐ開けますって……」

とつとと食器を渡して、さつさと横になりたい。

今日は色々とありすぎた。それ故に、早く心と体を休ませたい。そんな事を思いながらも洗夜が扉を開けると、そこには……。

「ご苦労様……って、お前は……！」

洗夜の予想とは外れ、そこに居たのはホテルの係員ではなく……。

「……何か用か、アイギス」

扉の前に居たのは、相変わらず機械的な部分が見えない様に全身を隠している、白い服に身を包んだアイギスの姿だった。

そして、アイギスは洗夜の姿を確認すると軽く頭を下げた。

「……お久しぶりです洗夜さん。病み上がりで申し訳ないのですが……少しだけ、お話がしたかったので……お時間はありますか？」

アイギスの言葉に洗夜は、やや気まずそうな表情をするが彼女の真っ直ぐな瞳に負け、静かに頷くのだった。

そして、この空間は二人だけのモノではない。

「あれ……アイギス？ 誰と話してるの……？」

「……まさか」

ゆかりと順平が廊下の奥からアイギスの姿を見ていたのだった。

END

第三十話：黒き愚者 拒みし想い

同日

現在：ホテル（廊下）

「ふう……予定よりも、飲みすぎてしまったか……」

美鶴は現在、明彦と堂島の話聞き終わり、自分に反省させるように呟きながら軽くほろ酔い状態で自分の部屋へと向かっていた。

今は着物ではなく、先程よりもラフな格好になってはいるが、それでも汗は流れる。それもあって早くお風呂に入って休みたいのが美鶴の本音。

しかし、堂島の話は美鶴にとって思っていたよりも楽しい時間であった。

洗夜の子供の頃の話。洗夜から聞かされていなかった話でもあるが、話がかなり新鮮に捉えられたからだろう。

だが、全てが楽しい話と言う訳ではなく、美鶴は堂島の話で気になる部分を思い出す。

（子供らしくなかった……か）

美鶴の気になってしまった部分の話。それは、洗夜と悠の母親が、二人を堂島の家連れてきた時の話。

洗夜がまだ幼稚園で、悠がまだ目を離すのが怖い位の時期の事。

まだまだ若かりし当時の堂島は、洗夜と悠が赤ん坊の時にしかあつておらず、柄にもなく当時は楽しみにしていたと言う事だった。

仕事の都合で父親の方は来れなかったらしいが、堂島は駅へと向かいに行つて、車を駅前止めにしながら三人が来るのを待っていた。

久しぶりの姉と甥っ子達との再会。どんな顔をしたら良いか、当時の堂島は迷いながら待っていた。そんな感じで待つ事、数分……。

洗夜達を連れ母親が駅から出てきた。堂島は、出来るだけ怖がらせない様に努力しようと思いつつながら車から降り、三人を迎え様とする。

だが、その三人を見た瞬間、堂島は当時に違和感を覚えたと言う。その理由は……。

「親子らしくないとはな……」

誰もいない廊下で、美鶴は自分だけにしか聞こえない声で、そう呟いた。

日常で幼い子供を連れだした大人がいれば、大半の人は親子連れと思うだろう。

恐らく子供や大人の様子、それか雰囲気から判断してそう思う事が多いと思われる。

悠を抱き、もう片方の手で洗夜の手を掴む母親。これだけならば、良い親子だが、堂島が感じた違和感。

親子ではなく、大人の隣に子供が“存在するだけ”と思えた。

そう感じたのだと、堂島は苦笑いしながら言っていた。その話が、美鶴の頭の中で何度もリピートされているのだ。

（堂島さんは自分の気のせいかもしれないと言っていたが……洗夜は、私達といた三年間、一度も両親について話した事が無かったな……）

両親がいない明彦や、父親や母親が他界しているゆかりと乾に遠慮したとも思っていたが、弟の事は積極的に話すのに、両親の話は洗夜が意図的に話したくなかったのではないかと美鶴は思い始めた。

（洗夜は、自分の両親が苦手なのか？）

美鶴が洗夜についてそう考えた時だった。

「ん……？」

自分の部屋へと向かっていた美鶴。しかし、気付けばここは洗夜の部屋の前。

どうやら、無意識の内に来てしまった様だ。

（何をしているんだ私は……ここに来た所で、私が洗夜に出来る事はないと言うのに）

シャドゥワーカーを設立する時も色々と大変ではあったが、自分の思っていたよりは簡単に設立まで運べた。

メンバーも少なく、組織としてもまだまだ完全な活動は出来ていないが、それでも美鶴からすれば大きな進歩である。

しかしそうやって一族の罪を背負いながら歩んで来たが、洗夜の前では何処か自分の弱い部分が出てきてしまうと美鶴は思う。

そんな事を思い、美鶴は扉から移動しようとして左を見たと……。

「ん？ あれは……明彦達か？」

廊下の奥で、何かを隠れながら見ている、先程バーで別れた明彦の姿が美鶴の目に入った。

他の人に部屋の前に立っている自分が言うのも何だが、明彦の場合はその存在感が災いしてしまい、余計に怪しさが倍増する。

共に向かって中々に凄い事を言う美鶴だが、好奇心というのはどうか？ ついつい、明彦達が何をしているのか気になってしまい、その背後に静かに近付いた。

「っ!？」

「!」

美鶴が明彦の後方に、あと少しでたどり着こうとした瞬間。突如、明彦が驚異的なスピードでその場で体を回し、足を上手く使って美鶴から間合いを取った。

色々と残念なところがあるとは言え、学生時代はボクシングを学び、二年前の戦いを生き抜いただけはあり、明彦の身体能力はそこらの常人よりも研ぎ澄まされている。

そんな明彦は、自分の背後に近付いていたのが美鶴だと分かり、明彦は静かに肩を落とす。

「なんだ、美鶴か……驚かせるな……」

「私はお前の反応に驚いた……。何故、私が近付いたのが分かった？」
「別にお前だとは分かっていたはいなかった。ただ、何者かの気配が感じたから振り向いた。それだけの事だ」

当然の事だと言わんばかりの口調で話す明彦に、美鶴は思わず溜め息を吐いてしまう。

明彦が武者修行をしている事は知っている。だがしかし、明彦の反応、服装等があまりにも過剰すぎるのだ。

さっきの反応といい、スーツを脱いだ現在の服装である獣の爪で引き裂かれた様な穴の空いたTシャツと言った過剰的な服装。

ここに来るまでの時もそうだった。空港近くで明彦と合流する予定だった美鶴はアイギスと共に車で待っていた。

だが、予定時刻が過ぎても明彦は来ず、美鶴とアイギスは嫌な予感を感じて運転手に空港まで走らせた。

そして、空港途中で警察から職務質問を受けていた、上半身をボロボロのマントだけで隠した明彦の姿を目の当たりにしてしまったのだ。

自分達が来なければ本当に危なかった。武者修行も良いが、出来れば最低でも常人が理解できる服装をしてほしいと思う美鶴であった。

余談であるが、アイギスを含め、美鶴の周りの人が彼女に対してもそう思っているのを美鶴は知らない。

「明彦……もう少し、その服装と過剰な反応をどうにか出来ないのか？」

溜め息混じりで喋る美鶴だが、明彦は何を言っているんだお前は？

と言った感じの表情をすると、美鶴に反論する。

「美鶴……お前は野生の力を甘く見ている。奴らに背中を見せると言う事がどういう事か、お前は分かっているのか！ 奴らに背中を見せる事、それ即ち……死を意味するぞ！ 例え、逃げるとしても奴らを刺激しない様に目線を合わせてゆっくりと……」

(……一体、何の話だ?)

一体、明彦がどんな武者修行をしてきたのか疑問が尽きないが、美鶴は話の内容による頭痛に溜め息を吐きながらも本題に入る事にした。

「所で明彦、お前はこんな所で何をしている？」

「ああ、実は……酔いつぶれた堂島さんを部屋に送って来た所なんだが……」

「……どうした？」

気まずそうに顔を背ける明彦の表情から、何かがあったのは明白。

美鶴は明彦に問い掛けると、明彦は軽く息を吐いて口を開いた

「実は……さつき、アイギスが洗夜と階段の方へ行くのを見た……」

「なに……っ？」



現在：ホテル【屋上】

洗夜とアイギスはその後、何も語らずにただ静かにホテルの屋上へと来ていた。特にこれと言った物は無い、只の屋上。

屋上に何か特別な物を求めても仕方ないのだが、強いて挙げるならば今日は皮肉にも満月。

学園都市での戦いに参加していた者ならば分かる筈である特別な月。美鶴達との再会。そして、今日は満月と言う偶然。

この続けざまに体験する偶然に、洗夜はこれは定められた運命ではないかと錯覚しそうになる。

しかし、ただ気持ち良く吹く夜風が洗夜の頭を冷して冷静にしてくれており、風もあつて洗夜は自分とアイギスの事を影から見ている二人に気付いていなかった。

「なんて話してる？」

「まだ何も話していないみたい……」

ゆかりと順平は屋上の出入り口の影から覗いていた。二人は洗夜の事が気になって仕方がないのだ。

望まぬ別れをしてしまい、ようやく再会したと思えば異常な事態に巻き込まれる。まだまだ成長中とはいえ、洗夜が何か巻き込まれている事に気付かない程には二人も未熟ではない。

そして何の話をアイギスがするのか多少の不安を覚えながら二人が見ていると、いつまでも夜風を楽しんでいる場合ではないと洗夜は、隣で瞬き一つしないで夜景を見ているアイギスに視線を向け、此処に来るまでに入ってしまった肩の力を抜きながらゆつくりと口を開いた。

「……今更だが、元気そうだなアイギス」

「はい……色々と忙しいですが、それなりに楽しい毎日をごさせて頂いています」

「楽しい毎日を……か」

自分の隣に立ち、一緒に夜景を眺めながら話すアイギスを見て、洗夜は本当にアイギスが今の生活が楽しいのだと分かった。

最初に出会った時のアイギスは、はつきり言って普通の機械と変わらない、と言うよりも今一感情が出せていなかった。

これと言った必要最低限だけの感情とも言えない、文字通り機械的な行動のみ。他者とコミュニケーションを取りもしなければ、笑いもしない、ただ彼女の存在理由でもあるシャドウ殲滅の為だけの機械人形だった。

しかし、自分達と生活している内にアイギスは感情豊かになって行き、学校にも通い『彼』を始めとした色々な人から色々な事を学んだ。

そして今、自分の隣にいる彼女はごく自然に自分の意思で笑う事が出来ている事が、洗夜はとても嬉しく思い、アイギスからの言葉の眩きに小さく微笑みを浮かべた。

「お前が笑顔で生きているならそれで良い……ところで、俺に話つてのは？」

「その事なんです……」

洗夜の言葉にアイギスは、少し言いにくそうに顔を下げることが意を決した様な表情で洗夜を見た。

「洗夜さんにお願ひがあります」

「……なんだ？」

アイギスからのお願い事態が珍しいのだが、次にアイギスが言った言葉で洗夜は表情を固くする事になる。

「実は……洗夜さんに戻って来て頂きたいのです」

「なに……？」

「そして……美鶴さんを支えて下さい」

「……」

アイギスの言葉に、洗夜は一瞬だが言葉が出なかった。

アイギスが自分が寮から姿を消した本当の理由は疎か、その“切っ掛け”も知らないだろう。その事を知っていればアイギスもこんな事は言わない。

そう思った洗夜は、これである日の事を思い出すのは何度目かと想

いながらも、アイギスに事情を説明しようとする。

「アイギス……俺が皆の前から消えたのは……」

少し抵抗があったが、洗夜がアイギスに二年前の事を伝え様とした時だ。

先に動いたのはアイギスだった。

「存じております、美鶴さん達との事……」

「っ!?!——お前、何でそれを……」

美鶴達の反応から察するに、あの場に居なかったアイギスを含んだ風花達には、あの事を伝えてはいない筈だと分かる。

それなのに、何故アイギスがその事を知っているのか洗夜は不思議でならなかった。

「不思議……ですよ？ 私が洗夜さんと皆さんとの間の事を知っているのが」

「……何処で知った？」

「……」コロマル”さんからです」

「……盲点だったか」

S・E・E・Sメンバーの中で唯一の動物にしてペルソナ使い犬であるコロマは頻繁に一階のリビング周辺でリラックスしており、あの時の洗夜と美鶴達との揉め事を見ているも変ではない。

意外な目撃者の登場に、洗夜は一瞬だが思考が止まりかけるが、納得できれば後は単純だ。そのあまりの単純さに洗夜は笑うしかなかった。

「アハハ……何処に隠れていたんだか」

おかしく笑う洗夜だが、その洗夜の表情を見たアイギスの表情は暗くなる。

見ていると痛々しい、そんな風にも今の洗夜の事が見えてしまうからだ。

「私も最初は疑問に感じていました。確かに洗夜さんならば、二年前の戦いと『あの人』の事を自分一人の責任にしてしまう可能性は確かにあります。ですが……洗夜さんの事を説明した時の美鶴さん達の様子が変でした……」

簡単に言うアイギスだが、『彼』の結末の状況下でそこまで冷静に物事を見極められたのはアイギスだからこそ出来る事だ。

本来ならば、一番心が傷付いているのは彼女自身であるにも関わらず……。

「それで、疑問に感じていたお前の下に来たのがコロマルか」

「はい……」

小さく頷くアイギスに、洗夜は彼女の言葉を聞いて複雑な心境だった。

何を言えば良いのか。これ以上の関りを持つても大丈夫なのだろうか？ 洗夜は困惑の下、どうしようも出来ない不安に怒りを覚えるが、それを発散させる術もない。

「この事を知っているのは私とコロマルさんだけですから安心して下さい」

洗夜の心境を察したのかどうかは分からないが、アイギスはこの事を誰にも告げていない事を伝えるが、洗夜にとってそれはどうでも良かった。

あのメンバーで自分との繋がりを思っている事、それが問題だからだ。

「……アイギス。俺は美鶴の傍にはいられない」

「……何故ですか？」

洗夜の言いたい事が分からないと言ったアイギスの反応、それに洗夜は目を逸らす。

「正確には……お前等の傍にはいられないだな」

「……」

洗夜の言葉にアイギスは黙る。だが、だからどうして……と、目で語っている。

「いつまでも子供じゃない……俺がいなくても皆、立派に自分の道を歩いている。——俺がいないと何も出来ない様な弱い人間じゃないだろ……アイツ等は……！」

「それは——」

「それは違いますー！」

アイギスの言葉を遮り、洗夜の言葉に異を唱えた者が現れる。

二人は聞き覚えのある声の方を向くと、そこには堂々と立つゆかりと、明らかに動揺してビビっている順平の姿があった。

「ゆかり……か？」

「……」

ゆかりは洗夜の言葉を無視し、堂々と力強く歩いて洗夜の前に立つと目の前で顔を見上げ、若干、怒ったような表情を浮かべていた。

「いないとどうとか……そんな事は関係ない。……大切な人に傍にいて欲しいと思っちゃいけないんですか！」

「……」

ゆかりにとって、洗夜と言う人物は一言で言えば『兄』を感じさせる男性だ。

初めて会った時は普通に好印象はなく、外見やら何を考えているのか分からない行動と性格に距離を置いたものだとゆかりは当時を振り返る。

だが毎朝、朝食・昼の弁当・夕飯、そしてタルタロスで戦う姿を見て行く内、洗夜の傍にいと安心する事に気付く。

しかし、それが恋愛感情ではない事にもすぐに気付いていた。何故ならば『彼』がいたからだ。

そんな兄の様に慕っていた洗夜だが、そして『彼』にも言えた事だが……ゆかりには嫌いな所があった。

「なんで……なんでそうやって……」 本当の意味“で相手の気持ちを理解してくれないんですか!! 相手にとっての自分と言う存在がどんなものなのか……それを理解せずにいつも無理ばかりして……」

ゆかりはそう半場叫び、洗夜の胸ぐらを掴み上げた。

「少しは——自分が相手にとって“特別”な人間だって自覚しなさいよ!!」

「ゆ、ゆかりっち……!」

ゆかりの迫力に順平は動けず、ゆかりも力尽きた様に胸ぐらから手を離す中、洗夜はただ黙って彼女の横を通り過ぎ……。

「それは……俺以外の奴に言うべきだ……」

「！」

過ぎ去る洗夜の言葉に、ゆかりはハツと顔を上げながら、その場に膝を付く。

ゆかりは気づいてしまったのだ。自分が何故、こんな事を言ったのか。それは簡単に言えば“変えたかった”からだ。

洗夜と今の自分達とのこの関係を変えたかったが、自分には洗夜を止めることは出来なかった。そう、ゆかりは確信してその場に膝を付く。

だが、そんなゆかりの言葉に動いた者はいた。

「ま、待つてくれ鳴上先輩!!」

伊織 順平、彼が動いた。洗夜と話す事が気まずいと、ずっと思っていた順平だったがゆかりの行動に心を動かした。

二年前、あの別れ方は正しかったのか？ 己に解いたその疑問に順平の答えは“否”だ。

出会う方は良くなかっただろう。明彦の言葉に乗り、楽しみ・多少の刺激程度で参加する自分に色々と言教ではないが、危険だという事をしつこいレベルで言われた事を順平は今も覚えている。

『彼』に対しては自分よりも何も言わない事が更に気にくわなかった。“特別扱い”としか思えなかった順平だが、今思えば当たり前前だと言える。

自分と『彼』とでは覚悟の重さ、その全てが違ったのだから。

それでも洗夜に対し印象が変わるまでは時間が掛かった。気にくわれない先輩、それをすぐに受け入れる事は下手なプライドが許さなかった。

だが、共に生活してゆく内に受け入れて行ってしまった。順平の己の意思で……。

真次郎の情報を得る為に駅裏へ黙って向かった時、自分達の後を追って不良から庇ってくれた。毎日、食事を作って貰った。大切な人を守り、そして助けてくれた。

そんな先輩だ。卒業時には柄にもなく精一杯の想いで送り出してやろうと思っていた。なのに……。

(なのに……なのに……！ あんな送り出し方があるかよッ！)

順平は怒りを覚えた。自分に対して？ 仲間に対して？ それは順平自身にも分からない事。

あの時、理由もなく感じてしまった不快感を順平は不可思議に覚え続けている日々も中、納得はした事はなかった。

故に洗夜と正面からぶつかる選択を選ぶ。それが順平の今の選択の答えだった。

「オレ……オレ……」あの時〃の事、今でもよく分かんないんす……なんであんな事を思ってたのか。自分でも分かんねえとか馬鹿って思われるかも知んねえすけど……それでもオレ……納得はしてねえんだ！」

「……！」

順平の言葉に洗夜は足を止めた。意識した事ではなく、足が動かなかった。まるでこの場から去る事を許していない様に。

「そんで……そんでよ……今のゆかりっちの言葉で目が覚めたんだけど……鳴上先輩はいつも俺達の事を考えてくれていた。だから……あの後、すぐに寮を出たのは俺達の為だったんじゃないんすか!？」

「違うッ！ 俺の意思で勝手に出て行っただけだ！ 卒業生が寮から出るのは当然だろうがッ!!」

洗夜は順平の言葉に声は張り上げ、叫びの様に否定した。そして左手を強く握り絞める。

その姿を見たアイギスは、その洗夜の後姿に弱々しさを感じ取っていた。

「洗夜さん……！」

嘗て『彼』と共に誰よりも出ていた故に、皆は洗夜の背中を知っている。力強く、安心して前に進めたあの想いを。

だが、今はそれが感じられない。寧ろ、虚しさや悲しさしか感じる事が出来ない。心が温かくなる事もない。冷たく、辛さしかアイギスの瞳には写らない。

(洗夜さん……あなたに何が起こっているんです……?)

アイギスの心は微かに異変に気付き始めていた時、洗夜の言葉に今

度は順平が叫んだ。

「当然ってなんだよ！ 天田や風花がどれだけ辛かったのか分かるんじゃないのかよ！ なのに……あの時の事が自分の責任だって言われただけでオレ等が納得できると本気で思ったのか！」

「納得しろッ！ それで全てが終われる!!」

「出来ない！」

洗夜の叫びをゆかりは立ち上がって否定した。

「なんでそれで終わらせようとするんですか！ なんで私達を信じてくれないんですか……！……なんで洗夜先輩が……なんで……」

ゆかりは脱力する様に再びその場に膝を付く。だが、今度はその瞳から涙が静かに流れ落ちていた。

「なんで……」あんな事」が起こったんですか……？」

「……ッ！」

ゆかりの言葉に洗夜は黙った。言葉が出なかった。苦しみを押し留める様に右手で髪ごと頭を掴み、歯を噛み締める。

もう何を言っても傷付ける。何を選んでも誰かを危険に晒す。洗夜はもう、未来が見えなかった。

「俺には……俺にはもう……」

「お前は……なんで苦しんでいるんだ、洗夜？」

声に反応し、洗夜が顔を上げると屋上の入口から現れる美鶴と明彦の姿がそこにあった。

「美鶴……明彦……」

二人が現れ、洗夜はいよいよ言葉が全て失う。

ゆかりや順平は二人の登場に驚きながらも安心し、アイギスもその三人の様子を見守ろうとする。

そして洗夜へ明彦が近付き、胸倉を掴み、洗夜の目を無理矢理に自分の目に合わせた。

それに対し洗夜は目を逸らすが、明彦はこれで十分だと、口を開く。

「洗夜……全てを話せ！ お前は何かを知っている！ 何で苦しんでいる!? 二年前……俺達の間になんか起こっていたんだ！」

「忘れろ……全て……！」

月が照らす、冷たい夜風が吹く世界で洗夜の言葉を全員がハッキリと聞こえた。

その言葉にアイギスは悲しそうに瞳を閉じ、ゆかりは口に力を入れて涙を耐える。順平はどうしようもない怒りが抱き、美鶴はただ黙って明彦と洗夜の様子を見守る。

そして明彦は瞳に力が籠り、その瞳で洗夜と目を合わせ、今度は逸らさない洗夜と今度こそ向き合った。

「……洗夜、ならばお前が言ってみろ」

「なんだと……う？」

明彦の言葉に洗夜の表情が変化する。困惑、そして言っている事の意味が分からず抱く怒り。

だが明彦はもう怯む事はしない。後輩が向き合おうとしている中、自分は何をしているのか。洗夜と向き合うこのチャンスのみすみす逃すと言うのか。それは違う。

故に明彦は今、洗夜と向き合っているのだ。

「言ってみろ……俺達が邪魔だ。消えろ、憎い……一緒にいて碌な事はなかったと！ 言えば言う通り忘れてやる！ 言ってみろ洗夜!!」

順平はうざい！ 岳羽は軽率！ 天田は邪魔だ！ 山岸の料理は食えた物じゃない！ アイギスは兵器！ 美鶴は巻き込んだ元凶！

俺は何も出来ない唯の弱者と云って——」

「言えるか!!」

月夜の下、再び美鶴達は洗夜の言葉をその耳で確かに聞いた。

はつきりとした一言だが、洗夜から聞きたかったものでもあり、美鶴達、そして明彦は驚き目を大きく開けている。

「俺の両親は仕事人間だ……俺や悠はそれでいつも寂しい想いをしてきた。……だから、お前等との生活は楽しかった……“家族”の様に思っていた……!——そんなお前等にそんな事が言えるか！ 俺はお前等を嫌う訳がない!!」

「なら……なんで何も言わない!？」

「だからだ!!」

その洗夜の叫びに美鶴達全員の身体が震えた。覇気が籠った叫び

で洗夜が本気で言っている事が分かってしまったからだ。

「お前等を大切に想っている……だからこそ！ 二年前の“あれ”が起きた！ 俺が望んでしまった！ だから俺は消えた！ もう……お前等を傷付けたくなかった……なのに……なんでまた、お前等は俺の前にいるんだ……？」

歯を食い縛り、洗夜はその瞳から涙を流す。その想いの乗った叫びを受け、美鶴達は言葉が出なかった。

自分達が知りたかった事、その片鱗を得た筈にも関わらず、美鶴達はそれを理解できず、ただ洗夜が一人で苦しんでいる事だけを知ってしまった。

「洗夜……」

美鶴は一步、また一步と前に進み、洗夜の下へ向かおうとする。

だが、洗夜と彼女たちは近過ぎていたのだ。アイギス、そしてゆかりが順平がその様子を見守っていた。

——刹那、屋上一帯に背筋を凍らす程の悪寒が全員に走った。

『ウオオオオオ!!』

洗夜が叫ぶ。洗夜を使い、微かでも己の存在を具現化して主の真上に降臨するアイテル。

『%#&* *&+*!』

奇怪な咆哮。満月がアイテルを照らし、まるで祝福するかのように幻想的な光景を生み出す。

だがこれは現実ではない。微かな存在しか保てずともアイテルは美鶴達へ敵意を向ける。

『黒キ愚者ガ望ンダ絆。同時ニ、才前達ガ望ンダ絆……『黒キワイルド』により築かれた真なる“負の絆”……』

「負の絆だと……？」

「どういう事だ……！」

美鶴と明彦は上空に君臨するアイテルを睨むが、アイギス達はそうではない。

「アイテル!？」

「またなの！」

「やっぱ先輩、ペルソナが……！」

咄嗟に構える三人だが、今のメンバー達にはアイギスしか戦う力は持っていない。

現実で薄くともここまで存在を保つアイテルが異質なだけであり、今この状況の無力は誰のせいでもない。

『己が築キシ絆……何故、拒絶スル……？』

「もう止めろッ!!」

洗夜は微かな意識の中、無我夢中で“抑制剤”を口に投げ入れて噛み砕く。

『――過去ハ――取り戻セナ――イ――全テヲ――“死ノ絆”ヲ――』

アイテルはその言葉を最後に、その姿を消す。そして解放された洗夜は糸が切れた様に力なくその場に倒れた。

「洗夜!!」

美鶴がすぐさま駆け寄り、洗夜の身体を支える。それに続き、明彦達も傍に掛け寄って洗夜を見た。

やや服が汚れていたが、洗夜の顔色は良く、呼吸も安定しており気を失っているだけの様だ。美鶴達はその事に一安心するが、同時に洗夜の手から零れた抑制剤に気付いてしまう。

「洗夜……!」

洗夜の名を呼ぶ美鶴の表情は悲痛に包まれる。

抑制剤を始め、それらは桐条の罪だ。洗夜の苦しみも元を辿れば五年前に洗夜をS・E・E・Sに誘った自分達、否、桐条が今の洗夜に苦しみを与えているとしか言えない。

だが自分に今、何を洗夜にしてあげられるのかが分からない。解決、協力、一体何を？ 美鶴にはそれが何かが分からない自分が情けなかった。

ようやく、目の前に会いたかった人がいるのに何も分かってあげられない自分が……。

「鳴上先輩……本当に死んじゃうって……!」

順平も同じ想いだった。チドリをずっと支えてきた彼だから分か

る抑制剤と言う“命を守る”為の“命を奪う”劇薬の苦しみを。

このままでは洗夜は死ぬ。順平の表情には焦りが現れ、明彦とゆかりも同じ表情だった。

ただアイギスを除いて……。

『黒きワイルド』……』

「なに……？」

アイギスの呟きに美鶴が聞き返し、明彦が思い出す。

「そう言えばアイテルも言っていたな……『黒きワイルド』って」

何か意味でもあるのかと明彦は考え始め、その明彦の言葉にアイギスは頷いた。

「昔……『あの人』が言っていたんです」

『先輩の力は……『黒』なんだ。だから僕と違って『全』であり『可能性』その物でもある。——だけど先輩は僕と強く絆を結んだ事でワイルドを持つ者としての『旅』を中断させてしまった。だから先輩の『■■』はアイテルへとなってしまったんだ』

嘗て、アイギスにとつて最愛の人であった『有里 湊』の言葉を美鶴達へ伝えて行くアイギス。

彼女のその言葉を美鶴達は黙ってそれを聞き続けた。

『……だけど『黒』は一色じゃない。一色ではなれないんだ。『黒』は“黒”だけでは生まれない。——いつか先輩は向き合う事になると
答』

アイギスの話はここで終わった。当時のアイギスにも分からなかった話。アイテルの言葉を聞くまで思い出せなかった言葉を受け、美鶴達も考え始めた。

「……『黒』とはどういう意味だ？」

「まるで『あいつ』と洗夜のワイルドが別物の様に俺は聞こえたが……」

「逆に私は『彼』と洗夜さんのワイルドは“同じ”な様に聞こえました……」

「だああああああ！ 昔から『アイツ』はよく分かんねえ事ばっか言いやがって！ 宇宙人か!? 今はそんな場合じゃねえのに!？」

結局、答など出る筈もなく『黒のワイルド』と『彼』の言葉だけ残ってしまおう。

「取り敢えず……洗夜を休ませよう」

洗夜を抱く美鶴はそう言い、明彦達も無意味に考えるよりはとそれに頷くしかなく、美鶴は洗夜に背負う様にして洗夜の手に触れ、気付いた。

(……冷たいな)

昔、美鶴は洗夜からは温かさを感じていたが今はそれを感じる事が出来ない。

まるで悲しみ一色であり、そんな考えが美鶴を更に悲しませる。だが、それを言っても何の意味もない想いであり、美鶴はそれを無理矢理に呑み込んでその場を後にする。



7月10日 (土) 晴

現在：ホテル【入り口前】

翌日、ホテルの入り口に止まっているリムジンの前で、堂島達と美鶴達は別れの挨拶兼雑談をしていた。

元々、美鶴は今回のお見合いには乗り気ではなかった。相手が洗夜と最初から知っていたいれば結果は変わっていたかも知れないが、最初から今日の午前中に帰る事を計画していた為、こんなにも早めに撤退になったのだ。

「この度は、ありがとうございます」

「いや、こちらこそ……折角のお見合いなのにごちやごちやになってしまつて……」

「……先程も言いましたが、それは気にしないで下さい。お見合いの話は、またいつか……」

「そう言つて貰えると、此方も安心できます」

こちららも乗り気ではなかったとはいえ、変な意味でうやむやになった聞かれれば、洗夜達の母である自分の姉に何をされるか分かつたも

んじゃないと堂島は冷や汗を流していた。

二日酔いで痛む頭痛に耐えながらも、美鶴とお見合いの今後について話し出す堂島を他所に、その向こう側では、悠と菜々子がアイギス達と会話を楽しんでいた。

「アイギスお姉ちゃん……またね！」

「菜々子ちゃんもお元気で……」

菜々子に合わせてしゃがみながら話をするアイギス。お互いに笑顔でありながら、菜々子の表情は時折、悲しそうな表情をしており、寂しさを隠せないでいた。

たった一日でも、アイギスと過ごした時間は菜々子にとって確かに楽しいものだった。

「アイギスお姉ちゃん。また……ななこと会ってくれる？」

思わず悲しそうになる表情だった菜々子は、アイギスに見えない様に顔を下に向けた。

そんな菜々子の表情から感じとったのか、アイギスは優しい笑顔で菜々子に小指を差し出す。

「大丈夫……いつかまた会えます。その約束として指切りしましょう」

「……うん！ 約束だよ！」

そう言つて互い指切りをして満面な笑顔で約束をする二人は指切りが終わった後、何故かアイギスの顔をジッと菜々子は眺めていた。「あの……何か、私の顔についているでしょうか？」

恥ずかしいのか、少し自分の顔に熱が生まれるのを感じたアイギスの内心を知つてか知らずか、菜々子はアイギスの顔を更に凝視しながら口を開いた。

「アイギスお姉ちゃんって……わるい人と戦つてるの？」

首を傾げながら言う菜々子に対し、アイギスも思わず首を傾げてしまふ。悪者かどうかは分からないが、自分はシャドウと戦っているのも事実。

だが何故、菜々子がそんな事を思ったのかアイギスには検討が付かなかった。

「……悪者かどうかは分かりませんが、どうしてそう思うのですか？」

アイギスの言葉に、菜々子は彼女の目をしっかりと見つめた。

「だって、アイギスお姉ちゃん……」ロボット”さんだよね？」

「！」

菜々子の言葉に、アイギスは言葉を失ってしまう。菜々子からすれば、アニメ等の影響でロボット＝悪者と戦うと言うイメージが生まれすぎてしまっているのだろう。

だが、アイギスからすれば、自分がロボットだと言うのがバレている。

しかも自分は只のロボットではなく、シャドウと戦う為に造られた言わば兵器。一歩間違えれば、自分は誰彼構わず傷付ける存在。

アイギスは少し胸が悲しくなるのを感じながら、菜々子の言葉に頷く。

「はい……菜々子ちゃんの言葉通り、私はロボットです。……怖いですか？」

「どうして？ 菜々子、アイギスお姉ちゃんがロボットさんって言うのぶつかった時に分かってたよ？ それにアイギスお姉ちゃんはやさしいし、怖くないよ！ 逆にカッコいい！」

怯えた様な表情を一切しておらず、寧ろ楽しそうに話す菜々子からの思わぬ返答に目を丸くしてしまうアイギス。

人とは違う自分に対し、菜々子が本当は怯えているのではないかと思ひ、アイギスはそう言った。

しかし、菜々子は兵器である自分の事を怖くない、それどころか優しい、カッコいいとまで言ってくれた。

ぶつかった時に自分がロボットと分かったにも関わらず、ずっと自分に対してあんなにも懐いて来てくれていた。

そう思うと、アイギスは自分の胸が温かくなり、目にも涙が溜まり、手で目の辺りをチェックする。

「アイギスお姉ちゃん……泣いてるの？ 菜々子、わるいこと言ったの？」

アイギスが泣きそうになっているのは自分のせいだと思い、菜々子は心配そうにアイギスを見るが、アイギスは静かに首を横に振る。

「……いいえ。これは悲しいからではなくて、嬉しいから泣きそうになっているんです……菜々子ちゃん、ありがとうございます」

「??」

何故、自分がお礼を言われたのか分からない菜々子は再び首を傾げてしまい、そんな菜々子の様子にアイギスは嬉しそうに微笑んでしまった。

そんな二人の様子をゆかりと順平も遠くで見ている。

「アイギスったら、すっかり菜々子ちゃんに懐かれたわね」

「本当だったら、ゆかりっちの方が子供受けしないとイケないのにな……」

順平の余計な言葉にゆかりは彼の足を力一杯、踏んづける。

結果、ホテル周辺で変な奇声が発生してしまった。

そんな中、更に少し離れた所では悠と明彦が立ち話をしていた。

「……洗夜はまだ眠っているんだな？」

「はい。一回目を覚ましたんですけど……見送り出来るほど元気じゃないとか言っていました」

互いにホテルの入口の柱に背中を付けながら語る悠と明彦。

二人は洗夜について話しており、明彦は悠の言葉に瞳を閉じる。

（……目が覚めたのか。それだけでも分かれば良い……）

「兄さんが目覚めたら一言、伝えときますが？」

「……すまないな」

悠からの言葉に、そう言って礼を言って明彦は空を見上げた。

大きな雲や小さな雲。色々な雲が浮かぶ晴ればれとした綺麗な青空だが、明彦の心はそんな空を眺めても晴れない。

自分達が招いた罪。昨日の洗夜の異変。

自分の知らない所で、また何かが起きている。そう思ってならず、明彦は自分の胸から感じるざわざわとした感じに不快な気分を消せない。

（それだけじゃないがな……）

そう心の中で呟くと、明彦はチラツと悠の方に視線を向けた。

明彦が気になった事。それは悠がお見合いの場で一瞬だけだが、小さく発した”ペルソナ”についての言葉。

(鳴上 悠か……一体、どこまで知っているんだかな)

明彦からそんな事を思われているとは知らない悠は、菜々子とアイギスの方を見ている為か、明彦の視線には気付かなかった。

そんな風にそれぞれが会話をして数分が経ち、明彦達四人は美鶴に呼ばれてリムジンへ乗車する。

すると、桐条の使用人らしき者達が数人現れ、美鶴が入るのを確認すると扉を閉めて悠達に一礼し運転席へと移動した。

そんな出来事に良く分かっていない菜々子はともかくとして、呆気に取られる堂島と悠。

自分達が普通に接していたのはああ見えても、桐条グループの現当主。その事が今になって実感した二人を知ってか知らずか、窓から美鶴達は悠達に軽く頭を下げた。

「それでは、私達これで……」

「アイギスお姉ちゃん！ バイバーイ!!」

菜々子の笑顔に、アイギスで返しながら手を振り返し、リムジンはゆっくりと前進する。

そして、まるで嵐が過ぎ去ったかのような感覚の堂島と悠はリムジンが見えなくなったのを確認すると同時にゆっくりと溜め息を吐いた。

「……やれやれ、お見合いの付きそいって、慣れない事はしない方が良いな」

昨夜のバーの様に限られた人数ならばいつも通りの感じに話せる堂島だったが、さっきの様な状況では下手に気を配ってしまい気疲れしてしまう。

そして、やつと肩の荷を下ろしたと言わんばかりに伸びをすると煙草を取り出して火を着けた。

そんな堂島に共感する事もあれば、良い息抜きな感じに思っていた悠は、堂島の言葉に苦笑で返す。

「まあ、少なくとも菜々子には良い息抜きになったと思うよ?」

「ん？ まあ……そうだな」

この間のゴールデンウィークもそうだったが、菜々子に家族で出掛けるという事をずつとしてやれなく後悔していた堂島。

今回ののは洗夜が倒れたり色々合ったが、菜々子には其なりに良い思い出を作る切っ掛けをくれた洗夜と姉に感謝している。

そんな風に思っていた堂島は、煙草の煙を二人に掛からない様に吐くと何気なく悠の方を向いた。

「……それにしても悠。お前は何時とも思わなかったのか？」

「何が？」

「何がって……場合によっては桐条美鶴がお前の義姉になるかも知れなかったんだぞ？ 少しは思う所があったんじゃないのか？」

「……」

堂島の言葉に悠は少し黙る。

堂島の言う通り、少なからず不安等があった。

元は両親が自分達に一切何も言わずに勝手に進めていたお見合いであり、自分の目の前にいた女性が兄と結婚して自分の義姉になるかも知れない状態に洗夜じゃなくても、色々不安はある。

「……其なりに不安はあった。けど、最終的には兄さん達が決める事だ。俺が不安があっても仕方ないと思ってる。それに、良くは分からないけど……兄さんと美鶴さんが何故かお似合いに見えた」

「……成る程な。まあ、確かに……俺達が騒いでたっつしようがねえな」

そう言つて堂島が吐いた煙草の煙が空に登って行くのを悠は静かに見詰めていた。



現在：リムジン【車内】

悠達が色々と会話をしていた頃、美鶴達は口を閉じていた。

いや、正確に言えば、機嫌が悪くなっている美鶴の雰囲気困惑してどうすれば良いか迷っているアイギスと、触らぬ神に祟り無しと言わんばかりの雰囲気腕を組みながら目を閉じている明彦達の四人

が口を閉じていた。

美鶴が機嫌を悪くしている理由は極めて単純。原因はこの車だ。美鶴が部下に頼んだ車は単純に自分達四人が”余裕”を持って乗れる車と言った。そう”余裕”のある車と……。

しかし、部下が何を思っただけで決めたのか分からないが、その結果がリムジン。正直な所、美鶴はリムジンが嫌いだ。

今走っている場所は色々人通りも多く、交通も充実している。リムジン等と言った目立つ車に道行く人全員が此方に視線を向けて来る。

外から中が見えない様になっている為、外から美鶴達の姿が見える事はないが、そんな事は関係なかった。

はつきり言っただけで落ち着きもしなければ、集中も出来ない。

(洗夜の御家族に嫌味だと思われなかっただろうか……?)

先程の別れ際に見た悠達の絶句した表情を思い出しながら溜め息を吐く美鶴。

そんな時、明彦が口を開く。

「美鶴」

「どうした?」

さっきまで目を閉じていた明彦だったが、いつの間にかその手には”子供に好かれる強者の成り方”等と書かれた胡散臭い本を読みながら美鶴へ問い掛けた。

「……洗夜の事はこのままにするのか?」

「シャドウが関わっているかどうかは分かりませんが、ですが、洗夜さん自身が何かに巻き込まれているのは確かな気がします」

明彦とアイギスの言葉に向かいに座っているゆかりと順平達も不安そうな表情を浮かべており、美鶴も昨夜の事を思い出す。

洗夜は自分達に会うのを拒んでいたが、それで本当に良いのかと思えば美鶴も納得は出来ていなかった。

「けど、鳴上先輩って今は何処に住んでんだ? 連絡も相変わらず出来ねえし……」

順平の最もな話が車内を包む。

確かに誰も今の洗夜の住所を知らない。“昨日”までは……。

「……私は卑怯だな」

そう呟く美鶴の手には一枚の資料が握られていた。

その資料の右上には一人の男性の顔写真が貼つてある。——『堂島遼太郎』の顔写真が。

堂島の資料を見合いの後に部下に頼んでいた美鶴は、資料の住所の部分を見詰める。

「……稲羽市か」

美鶴達が動き始める事を洗夜が気づく事は出来ない。

▼▼▼

7月11日（日）曇り

現在：稲羽市

「すまん、せつかくゆつくりしていたのに、日曜日の朝一で帰る事になっちまって……」

「仕方ないさ、それだけ叔父さんが頼りにされているって事だつて」
そう言つて洗夜は、車のミラーで後ろの座席で寝ている悠と菜々子の様子を見る。

何故、洗夜達がこんな今朝早くから稲羽市に戻っているのかと言うと昨日の昼頃、堂島の携帯に連絡が入り、どうしても堂島でなければ駄目な仕事が出来た為に急遽、稲羽に戻る事になった。

また、すぐに仕事に行く堂島を気遣つて洗夜が運転していた。

そして暫く運転していると、やがて稲羽の町に近付いたのだろう。霧が濃くなったのに気付いき、洗夜は車のライトを点灯する。

「……霧が濃すぎる」

稲羽の町は相変わらず異常に濃い霧に包まれており、運転する洗夜にとつては邪魔で仕方なかった。

ライトを点灯しても其ほど意味がない中、堂島が洗夜に視線を向けた。

「洗夜……」

「ん、どうしたの？」

「いやな……俺が言う事ではないとは思うが……そのな、無理はする

なよ。何かあったらちゃんと言えや菜々子、そして悠に――」

「叔父さん」

堂島が言わんとしている事が分かったらしく、洗夜は堂島の話に割り込んだ。

「気持ち嬉しい……けど、こればかりは俺達の問題だ」

そう言つて、洗夜は赤信号の交差点でブレーキを踏んで車を止めた。

まだ、早朝だからか霧が立ち込める交差点には人の気配はなく、鳥の鳴き声一つも無い程に静かだった。

「洗夜……お前と悠は俺に大切なことを思い出させてくれた。だから、今度はお前の力になってやりたいと思つてる……まあ、こんな、短い間で父親面はされたくはねえかも知れねえが……」

洗夜の様子に苦笑する堂島だが、洗夜は堂島の言葉に首を振つた。

「それは違う……俺は両親と話す機会が少なかった。悠が生まれてからは尚更……でもさ、叔父さんは少なくとも、どれだけ仕事が忙しくても菜々子とは話をするだろう？俺はそれすらも無かった。――俺も叔父さんみたいな親が欲しかった」

「洗夜……」

まさか洗夜にここまで信頼されていたとは思わなかった堂島からすれば、その言葉は確かに嬉しいものだったが、どう返せば良いか分からないと言つた感じでもあった。

「姉さん達には何の相談もしなかったのか？」

精神科に行く程の出来事だ、少なからずは両親に相談したのだと思つた堂島だったが……。

「何で……？」

平然とした表情でそう言つて退ける洗夜に、堂島は少し驚いてしまった。

「何で……そりゃあ家族なんだから、親に何かを相談しても可笑しくはないだろう？」

堂島のごく当たり前の言葉に、洗夜はどういう意味か理解した感じで頷き、アクセルを踏んだ。

「別に母さん達に相談しても意味は無いさ。だから、言う必要はない……」

「そうかも知れないが、精神科に勧めてくれたのは姉さん達だろ？」
「勧めただけだよ……」

そういう洗夜だが、別に両親を嫌っている訳ではない。

ここまで育てて貰い、色々と自由にしてもくれているから逆に感謝しているが、それだけでも言える。

洗夜は悠が生まれる前から自分の事は自分でやっていた。

親が共働きで自分しか頼る者がいなかったというのが一番の理由でもあり、いつの間にか洗夜は親に頼ると言う事をしなくなっていた。

そんな洗夜の様子に堂島は溜め息を吐いた。

（昔から洗夜は子供らしくなかったが……そういう事か。姉さん……これは姉さん達の負債だ。俺も人の事を言えねえが、今の洗夜にしてしまったのは姉さん達だ）

堂島が内心でそう思った時だ。

気分を変える為か、洗夜がラジオを着けるとニュースが流れる。

『次のニュースです。▲▲県の◆◆学校の職員が、女子児童の着替えを盗撮したとして昨日、逮捕されていた事が――』

流れたニュースに思わず顔をしかめる洗夜と堂島の二人。

「最低なニュースだ……」

「全くだな……。これじゃ、娘一人安心して学校に預ける事もできねえな」

そう言つてチラツと後ろで悠と一緒に眠っている菜々子に視線を向けた二人は、もし菜々子が同じ目に遭ったならば、悠を含め、この三人は犯人を地の果てまでも追いかけるだろう。

「やれやれ……今の若い連中は情けねえな。大体、今の連中ときたら――」

堂島がそこまで言った時だった。

『次のニュースです。昨夜、▲▲県警の巡査部長が女子高生に、わいせつな行為をしたとして昨夜、逮捕されました』

「……」

ラジオのニュースに黙り混む二人。

車の走る音しか聞こえない車内の沈黙が更に気まづくさせる。

そして、再び赤信号でブレーキを踏むと、洗夜は静かに口を開いた。

「……叔父さん」

「……ま、まあ、人それぞれだしな。皆が皆がそういう奴な訳ではない」

思わず苦笑いする堂島。その様子に洗夜は軽く微笑むと青になった信号に気付き、ゆっくりとアクセルを踏んだ。

——瞬間。突如、霧の中から赤信号である歩道の方から人が飛び出した。

「うおっ！」

突然の事に驚く洗夜だが、スピードがまだそれほど出ていなかった事もあり、すぐに急ブレーキを踏むことが出来た。

「な、なんだ!？」

「どうしたの？」

「うわわ!？」

後部座席で寝ていた悠と菜々子も急ブレーキの衝撃で跳ね起きる。

ブレーキを踏んだ洗夜自身も、霧のせいで飛び出して来た人物のシルエットしか分からず、男性なのか女性なのかさえ分からないでいると、助手席に座っていた堂島がシートベルトを外した。

「ったく、どこのどいつだが知らねえが……この稲羽署の堂島の前で堂々と信号無視しやがって……!」

「……そういう問題なのか？」

堂島の言葉に苦笑いする洗夜だが、相手が信号無視して飛び出して来たのは事実。

万が一の事が起こらなかつたから良かったものの、事故が起きたらどうするつもりだったのだろうか。

そう思いながらも、シートベルトを外した堂島が車のドアを開けた。

「ッ！」

「あつ！ 逃げやがった!？」

堂島が扉を開けた瞬間、飛び出した人物は一目散に逃げ出した。それに気付き、堂島も後を追うとするが深い霧がそれを阻む。そして結局、洗夜も堂島も何が起こっているのか分からない悠と菜々子もその人物を見失ってしまった。

「……逃げられたね」

「……マジで轢かなくて良かった」

「俺の前で堂々と信号無視、そして逃げやがるとは……」

「お家についたの？」

それぞれが今感じた事を口にして、心の整理をする。

——瞬間。

「うわああああああつ!!」

「ツ!？」

突如、ここから近いところから叫び声が洗夜達の耳に届く。

「い、今のなに?」

「大丈夫……菜々子はまだ寝てた方が良い」

怯える菜々子を悠が落ち着かせ、菜々子は静かに頷き、悠にしがみつく様に目を閉じる。

「近いな……」

「有給とか言ってらんねえな……洗夜！ 近いところまで行ってくれ！」

「了解……!」

堂島の言葉に、洗夜は急遽、方向を変えて叫び声が聞こえる方へ車を走らせた。

▼▼▼

その場所にはすぐに着いた。霧で良く分からないが、小さなビルなのかアパートなのか、その建物の前でジョギングでもしていたらしきジャージを来た中年の男性が腰を抜かしていた。

「洗夜、悠……お前らは菜々子を頼む。絶対に車から出るな」

刑事の顔の堂島に言われ、洗夜達は頷き、堂島は車から降りてその男性の下へ向かった。

そして、洗夜と悠は約束通り車からは出ず、車内の中からその様子を見ていた。

「どうしました？」

「あ……あ……あれ……！」

男性は堂島に気付き、とても怯えた表情で建物の上を指差す。建物の上の方は少しだけ霧が薄く、全く見えないほどではなかった。

「上……？」

男性の言葉に堂島は上を向き、洗夜と悠も車内の中から体勢を低くして建物の上を見ると、そこには……。

「なっ!？」

洗夜達が見た先には、建物の屋上にある貯水タンクらしきモノのハシゴに足を引っ掛けて吊るされている男性、諸岡……通称「モロキン」の遺体がそこにあった。

End

無の勇者く久保 美津雄編く
第三十一話：模倣犯

同日

現在：堂島宅

あの後、堂島は現場に残って応援を待ち、洗夜は堂島に頼まれて先に帰宅していた。

幸いにも菜々子が諸岡の死体を見ずに済んだこともあり、帰宅してからそのまま布団の中で眠り、悠は担任であつた事もあつて急いで陽介達と合流する為にジュネスへと向かい、家には洗夜が残つた。

本当ならば色々調べたい事があつたのだが、こんな事態の中で菜々子を一人、家で留守番させる訳にもいかない。

そうなる洗夜が今できるのは家事だけであり、溜まっている洗濯物を洗濯機に入れて回して始めた時だった。

——ピンポーン！

鳴り響くチャイムの音。来客の存在を知らせる音に呼ばれて洗夜は玄関へ向かい、相手に声を掛けた。

「はい、どちら様でしょうか？」

「僕ですよ、洗夜さん。……白鐘です」

玄関の扉、その向かい側から聞こえる聞き覚えのある直斗の声。

洗夜は鍵を開けて扉を開けると、そこにいたのはやっぱり直斗だった。

「どうも」

「わざわざ家にまで来るのは珍しいな。何かあつた……な」

今朝、起きたばかりの諸岡 金太郎の殺人事件。わざわざ、直斗がここに来た理由がそれぐらいしか思い浮かばない。

「ええ……諸岡 金太郎さんが今朝、遺体で発見されました。その時、洗夜さん達も近くにいたんですね？」

「その様子だと……既に現場で叔父さんから話を聞いたな？」

流石にタイミングが良い。洗夜は少なくとも、そう感じた故に直斗

へそう問い掛けると直斗は頷いた。

「連絡を受けてすぐに現場に向かいました。そこには既に堂島刑事がいたので事情を聴いたんです。勿論、弟さん達からも話はさせてもらいましたよ?」

直斗は自分がここに来るまでの事を話すが、悠達の話をした時に表情を暗くする。

そんな風にいきなり表情が変われば洗夜も気付き、やれやれと髪を弄りながら聞くしかなかった。

「悠が……と言うよりも他の奴等が何か言ったな?」

「……別になんでもありませんよ」

直斗は顔を逸らして否定するが、それはまるで不貞腐れた子供の様にも見える。

そうなれば洗夜は苦笑するしかない。

「……何があつたかは分からない。けどな……お前等は互いを知らな過ぎてている。アイツ等も、そしてお前も……互いを悪く思わないでやってくれ」

「……思うも何も、何もありませんでしたから」

洗夜の言葉を聞き、ますます顔を逸らす直斗であつたが今度のはプイツと照れ隠しで逸らした事が分かる。

その様子に、ようやく洗夜は安心して一呼吸入れることが出来た。

「それで、素直じゃない探偵さんはどうしてここに来たんだ?」

「別に素直じゃな……って、そんな事は別に良いです。……洗夜さんは叫び声を聞いた時に何か気付いた事はありませんでしたか?」

叫び声とは、信号で止まっていた時に聞こえた通行人の叫び声の事だろう。あれを聞いた事で洗夜達は現場へ急いで向かうことが出来た。

直斗も堂島からその事を聞いて確認の為に聞き回ってたのだ。

「気付いた事か……」

直斗の言葉にその時の事を思い出す洗夜だったが、それは案外、簡単に思い出す事が出来た。

「信号で止まっていた時、信号無視して飛び出した奴がいた。霧が濃

くて姿は見れなかったが……シルエットはそんなに大きくなかった」
「高校生ぐらいですか？」

まるでその言葉を待っていたかのように間を開けずに言った直斗の言葉を聞き、洗夜は頭がスツキリした様に納得できた。

「そうだな……確かに高校生と言われると納得できる。だが……なんで分かった？」

「……簡単な事です。既に警察は一人の“男子高校生”を容疑者として特定しています」

まさに寝耳に水のような言葉が直斗から放たれる。

容疑者が特定された事なんて今までなかったのにも関わらず、ここでそれが分かるなんて洗夜には信じられなかった。

「容疑者が特定したのか！　今まで全く分からなかったのになんで今回はこんなにも早く!?!」

「“目撃者”ですよ。諸岡さんを担いで吊るしていた人物を見た人がいるんです。既に凶器も発見しています……諸岡さんの頭部の損傷とも一致する筈です」

「頭部の損傷？　諸岡さんには外傷があったのか？」

諸岡に外傷があった事実が洗夜を更に驚かせる。

今までの被害者達はシャドウに殺害されている事で外傷はなく、それが死因を分からなくさせていた。

(何かがおかしい……)

洗夜はこの事件に関して違和感を覚えた。

今までシャドウに殺させていた犯人にしてはあまりにもお粗末。スリルでも得たくなかったのか、そう思わせる程に危ない橋を渡り過ぎている。

洗夜は悩む様子を隠せず、それを見た直斗は満足した表情を浮かべながら口を開いた。

「それと……今回ですが、諸岡さんはメディアに映っていなかったようですよ?」

「なに?」

直斗の言葉はこれまでの推理を根本から覆す様な内容であった。

今までの犯人はメディアに映った者を標的とし、テレビに入れたが今回はそのまま実力行使。

自分達が助けている事でいよいよ我慢が出来なくなったのかとも思えるが、今まで証拠を残さなかった犯人がしたにしても納得が出来ない。

「同じ犯人なのか……？」

冨夜は納得できず、目の前に直斗がいるにも関わらずその場で真剣に考え始めた。

殺せなくともメディアに別の人物が映れば、そちらに標的を変えていた故に犯人の目的は“テレビに入れる”事と冨夜は思っている。

殺人はその副産物でしかないと思っていたが、実際に実力行使で殺人を行っている時点でその推理は成立しなくなる。

今までの犯人と今回の犯人が“別人”ならば話は簡単だが、例えば簡単なだけで証拠は何もない。——そう思った冨夜だったが。

「僕も違うと思いますよ。今までの犯人と今回の犯人では何もかもが違い過ぎている。殺害方法から証拠隠滅まで、その全てが粗末なものばかり……」

冨夜の疑問への答えに橋を掛けたのは直斗だった。

事件解決を難航にしていた殺害方法を始めとした証拠無き霧の惨劇。だが今回の諸岡殺害に関しては現場・凶器・目撃者までも判明している。

直斗にしても同一人物とは思いう事が出来なかった。

「おいおい……別人だったとしても、この犯人は明らかに怪奇殺人に便乗しているぞ？ これじゃまるで“模倣犯”じゃねえか……！」

「はい……今回の事件は“模倣犯”の犯行。それが僕の答えであり、最も恐れていた事でもあります」

頷きながら直斗は模倣犯への怒りで表情を険しくしながら言った。模倣犯の存在は確実に真犯人を見つけるまでの妨害になってしま

う。
だが真犯人を隠す“偽りの犯人”の存在、それは捜査の混乱だけではなく、別の結末の可能性も生み出してしまっていた。

「更に言えば、警察上層部はその容疑者を模倣犯ではなく、この稲羽連続怪奇殺人の“犯人”とするつもりなんです」

「当然と言えば当然か……」

洗夜は直斗の言葉を納得するのに時間は掛からなかった。

この稲羽の事件のニュースは既に海外にまで報道されており、しかも御丁寧に警察が足取りを掴めていない事も丁寧に流されている。

国内外からの批判、それに対応する為に身内を信じず『白鐘』に頼つたにも関わらず、漸く掴んだ尻尾の犯人は模倣犯。そんな結末は警察は望んでいなかった。

「堂島刑事を始めとした数人は納得していませんが、既に上の方達は模倣犯を真犯人として祀り上げる気なんですよ。——ですが、僕は諦めません」

「待て直斗！」

そう言っただけで帰ろうとする直斗を洗夜は呼び止めた。

「お前が諦める気はない事は分かる。だが、何か策はあるのか？ お前が正しいとしても、依頼した上層部は偽りとは言え解決できる事件に首を突っ込まれても良い顔をするとは思えないぞ？」

「そうでしょうね。つい先程、その上層部の方から“お礼”を言われました……『ありがとう。流石は白鐘の四代目』だとね……」

直斗の話に洗夜は、やはりと言った様に表情を険しくする。

明らかに直斗への依頼達成の言葉であり、見方を変えれば“牽制”とも受け取れる。

「警察は僕にこれ以上は介入して欲しくないようですが……『白鐘』の名を背負っている以上、偽りと分かっている真実を認める訳にはいきません」

「大丈夫なのか？ ある意味で後ろ盾であった警察上層部を敵に回すんだぞ？」

「問題ありません。上手くやるつもりですから……」

「そうじゃない……大丈夫なのかと聞いたのはお前自身の事だ」

ある意味で自分に都合の良く受け取った直斗に洗夜は呆れた様に溜め息を吐き、首を横に振りながら否定した。

「ただでさえ、お前は重い物を背負っている。そんな中で警察が……お前にとって敵になれば本当にお前は潰されてしまうぞ」

「……警察が僕を邪魔に思うのも計算の内です。警察上層部が欲しているのは“事件解決”と言う結果だけですが、探偵が求めるのは事実のみ。全ての覚悟の上……」

答え等はどうでも良く、事件解決と言う結果を得られれば警察上層部はそれで満足。

現場の刑事が違うと言っても認めない。直に依頼した探偵だろうが同じ事。事件解決という結果が得られるならば真実じゃなくても良い。

そんな警察上層部の答えは既に直斗は予想の範囲内であり、真実の為ならば依頼人であろうが敵に回す事も辞さない。

そんな覚悟を持って稲羽にやって来た直斗の姿は立派だが、注意して見れば体が微かに震えている事に冴夜は気づいていた。

(たった一つのミスで今まで築いていたモノが消える。……俺達には分かる事が出来ないプレッシャーと、お前は今も戦っているのか)

探偵・子供・女、それだけの要素で直斗は他者には感じる事も出来ない程の重圧を負っている。

味方がいなくとも、他者から遊びだと言われ様とも直斗は表情にも出さない。それがせめてもの抵抗なのか、強さなのか分からない。

「俺で良ければ……ずっとお前の味方だぞ直斗」
「……………ありがとうございます」

冴夜の言葉に背を向けたまま直斗はそう返答し、堂島宅を後にした。



7月29日 (金) 雨

現在：堂島宅【冴夜自室】

あれから数日が経ち、悠達は期末テストの為に必死で勉強していたが事件の進展はなかった。

冴夜が悠から聞いた話では、ジュネスで偶然サボっていた足立から

容疑者の行方が分からないとの情報を得たのが最後。

悠は学年で五位以内に入っていて洗夜と堂島や菜々子から褒められて嬉しそうだが、今一複雑な表情もしていたのを洗夜は気付いていた。

理由は単純に、犯人を自分達の手で捕まえられないのが辛いからだ。本来、調査をする警察が犯人を追い詰めるのは良いことなのは悠達も分かっている。

しかし、やるせない気持ちもある。その所を洗夜は理解しているつもりである為、下手に口出しはしなかった。

そして、霧の出ていた金曜日の夜。事態は突然に急変する。

「これは……」

何時も通り洗夜は霧の出る夜にマヨナカテレビを確認しようとしていた。

この所、対して異変がなかった為、今日も何もないだろうと思った洗夜だったが今日は少し違った。

景色はいつものテレビの広場の様に、たいして特徴がない場所だったが、そこにはどこか顔色が悪く文字通り目が死んでいる様な目をした写真の少年が現れる。

少年はまるで自分がテレビに気付いている事を知っているかの様にニヤリと口を歪ませ、静かに口を動かした。

『みんな、僕のこと見ているつもりなんだろう？ ……みんな、僕のこと知っているつもりなんだろう？』

「兄さん」

洗夜がテレビの中にいる少年の言葉を聞いていると、悠が部屋の扉を勢いよく開けて入って来る。

それに対して洗夜は、一瞬だけ視線を悠に向けて頷くと直ぐにテレビへと視線を戻した。

「やられたな……」

「彼はまさか……」

「ああ、恐らくは諸岡さんを殺害した模倣犯だろ」

洗夜は机の上に置いてあった写真を悠へと見せた。

その写真はバイト中に冴夜が見ず知らずの少年が配っていた一枚、それを貰ったものだった。容疑者と思われる少年は既に顔が割れており、写真とテレビを見比べて悠も険しい表情を隠せない。

「模倣犯はテレビの世界を知らない筈じゃ……」

悠達は直斗や冴夜から話を聞き、模倣犯と言う存在。そして模倣犯がテレビの存在を知らないと言う考えで固めていたが、現に少年はテレビの中にいる。

悠の言葉に、目を閉じて冴夜だったが、すぐ様口を開いた。

「何かが間違っている……」

まるで裏を掛かれた様な感覚に冴夜は、拳を握り締めながらテレビを見詰めていると、テレビの中の少年はまるで挑発する様に笑い、ゆっくりと口を開いた。

『捕まえてごらんよ……フフフ。お前等なんかに捕まらないよ……』

その言葉を最後にマヨナカテレビは消えて砂嵐に戻り、冴夜と悠はテレビに視線を戻さずにそのまま状態で立ち尽くす。

常人よりも声が低く、顔が腫れているかの様に太った顔。別にその人の外見に何かを言うつもりは無い。

だが、他者を見下すあの態度が何故か冴夜と悠は気に入らなかった。

「悠……早速、明日にアイツを追いかけるのか？」

「そうした方が良い……アイツはまた何かしそうな気がする。だから、陽介達に連絡して明日すぐにテレビの世界に向かう」

冴夜の言葉に悠は力強く頷き、早速、陽介達に連絡しようとして携帯を取り出そうとするが、冴夜がそれに待ったを掛けた。

「ちよっと待て悠……」

冴夜はそう言うと、押し入れの中に隠していた己の武器である“刀”の入った布袋を手にとり、袋を緩めて柄の部分を露出させると悠へ差し出す様に向ける。

「これは？」

「抜いてみる……」

呆気になる悠へ真剣な表情で冴夜はそれだけ言い、悠は困惑しながら

らも柄を掴み、引くように抜くと、刀からその刃が顔を出した。

「凄……」

刀の刀身は綺麗な物であり、 дайだら屋でその場しのぎで買った武器とは比べ物にならない程の違いを悠は理解していると、洗夜は満足そうに笑みを浮かべ、布袋ごと鞘を悠へ手渡した。

「持っ……ていけ……悠」

「……流石に受け取れない」

流石の悠もすぐには領く事が出来なかった。手に持っただけでも分かる程に刀からは“重み”を感じる事ができ、渡されて、はいそうですかとすぐに受け取る事は悠には出来ない。

だが、洗夜は首を横へ振りながら鞘を悠へ向け続ける。

「良いんだ悠。俺に出来る事はこれぐらいしかない……戦う事の出来ない俺のせめてもの助力だ」

どこか悲しそうな表情で言う兄の言葉に悠は前のお見合いを思い出す。

あの時、突如として起こった洗夜のシャドウ？ の存在、そして謎の異変。それは自分の知らない何かに洗夜が苦しんでいる事を意味している。

悠もそれとなく聞いてみたが、結果はホテルで言われたのと変わらず諦めるしかなかった。

そんな何かを背負っている兄のせめてもの助力。共に戦えない洗夜が自分達を信じて託してくれた想いを受け、悠はその鞘を手に取り、刃を鞘に納めた。

「重……い……とても重く感じる」

「ある意味で曰く付きの刀だからな……」

洗夜は悠の言葉に冗談半分でそう言っ……て笑うと、表情を真剣なものに戻した。

「この刀はシャドウを“弱らせる”効果がある。きつと、お前達の助けになってくれる筈だ」

「ありがとう……兄さん」

洗夜から刀を預かった悠は頷き、その刀を力強く握り絞めた。

E
N
D

第三十二話：久保 美津雄と言う男

7月30日（土） 曇り

現在：ジュネス 【特別捜査本部】

平日の午後に賑わうジュネスの休憩所。ある客は売店でアイスやかき氷を購入して食べていた。又ある者は備え付けのテーブルに座りながら談笑し、またある者は立って食べて楽しんでいた。

そんな賑わうジュネスの一角、屋根付きの休憩所で悠達は集まり、昨日のマヨナカテレビについて話し合っている。

犯人は模倣犯であり、テレビの世界の存在も知らない者で真実を追う者達に偽りの真実をばらまいて惑わす。

それが直斗と冴夜の考えだったが、既に美津雄は知らない筈のテレビの世界に逃げ込んでおり、最初の二人の殺害を仄めかす事を周囲に言いふらしていた事も既に判明している。

警察は行方を眩ませた美津雄を血眼になって追っているが……決して見付かる筈はない。

（どっち道、早くあの少年をテレビから連れ出さなければシャドウに殺されて死ぬ）

気付いているのかどうかは分からないが、美津雄が自分が今までしてきた殺害方法によって自分の身を危険に晒している事に悠は何とも言えない想いを抱く。

「皮肉だな……今度は自分がシャドウに殺されそうになるなんて」

その悠の言葉に陽介達は顔を上げた。

「このまま放つとけば、アイツは裁かれる前に死んでしまう。だが、そんな事はさせない」

「勿論だ……アイツはなんの償いもしてない。絶対にそんな事は許さねえ！」

陽介は人一倍強い気合を抱いていた。

犯人を救出するのはやはり抵抗があるが、このままシャドウに殺されてしまえば分かる事も分からなくなり、出るところに出て裁けない。

悠達は自分達の胸に生まれる複雑な感情を静め、テレビに行く事を

決めた。

「よし……なら、此処で少し情報を整理したらテレビの中に行くぞ」
悠の言葉に陽介達は頷き、洗夜から預かった一枚の写真を取りだし
てテーブルの上へと置く。

「……一応、皆に聞いておきたい。この少年……」久保美津雄」と接
点は？ 少なくとも、りせの所には来ていたと兄さんは言っていた」
悠は真剣な眼で陽介達へ言い、陽介達も言葉に合わせて写真を見つ
めると全員が思わず表情を歪ませた。

「ニュースでも映ってるけど……相変わらず気味が悪いな」

「このうっすらとした笑みが何か見下されてる感じがして、良い印象
が持てないよ」

「……少なくとも、どつかで会ってたら忘れらんねえ顔だな」

陽介は険しい表情を浮かべ、りせは複雑な表情、完二はあまり興味
を持ってない様だ。

全員が手厳しい意見の中、悠は意外にも情報が出ない事に一息入れ
て己を落ち着かせる。

（誰も会っていないのか。……今までの被害者にも接近していると
思ったけど、そうでもなかった？）

悠は自分の考え過ぎかと思いい、スポーツドリンクをと飲んで頭を冷
やす。

（本当にモロキンはただテレビに入れずに殺しただけだった？）

悠はスポーツドリンクをテーブルへ置いて腕組をし、他のメンバ―
も同じ様な格好で考え込む中で千枝だけが何かを思い出そうとして
いた。

「……私、こいつの事を雪子の近くで見た気がする」

「えっ？」

「本当かよ里中！ いつだ？」

陽介が食い付き、千枝に追及するが千枝の表情はハッキリしていな
い様に悩みの表情であった。

「それが思い出せないんだよね。でも何かつい最近の様な……」

千枝は更に考え込むが、答えはすぐに思い出す事が出来た瞬間、千

枝は叫んだ。

「あつ！ ああああああつ！！ 思い出した……こいつ、確か鳴上君が転校してきた日に校門でいきなり雪子の事をナンパした奴だ。出会いがしろに雪子！ とか言ってる」

「転校初日？ ナンパ……？ ……あつ！ いたな。確かに久保だ」

眠れる記憶から思い出した千枝と悠の二人だったが、そんな事とは裏腹に雪子は納得した表情はしていなかった。

「そんな事あったっけ？ 千枝達の気のせいじゃあ？」

ある意味で天然である彼女は自分が告白された事も気付かない事もしばしば。

故に久保の存在を思い出せない雪子の言葉に千枝はブルブルと首を振って否定する。

「そんな事ないって！ 雪子ってそういう事はすぐに忘れるけど、よくよく思い出してみるとアイツ……事あるごとに雪子の側にいたんだよ。つい最近は見なくなったと思ってたけど、停学して転校してたらんなら当たり前か……」

「確か、ニュースでコイツを停学にしたのがモロキンって言ってたスよ」

完二が思い出したようにニュースの事を話し、悠はそれで久保が雪子達を狙う動機を理解する。

「天城はフラれたから。モロキンは停学した恨み……それが動機か」

「そんな……私、そんなつもりじゃないのに」

悠の呟きに雪子はショックを受けた様に小さく呟いた。

「でも、雪ちゃんへの動機は分かっただけども……完二は？」

現実世界に來た事で何故か人間が“生えて”きたクマのその呟きに伴い、悠達も悩み始める。

雪子の場合にはフラれた恨みだが、完二の場合には何なのかが分からない。

カツアゲ、喧嘩、暴行。何故か物騒な事しか思い浮かばないが完二の性格を知っている悠からすれば否定するしかない。

しかし、最初の出会いで自分達は完二に襲い掛かっている事も

あつた悠達。彼等は多少の疑いの籠つた眼差しで完二を見詰めると、それに気付いた完二は思わず冷や汗を流す中、陽介が代表して口を開いた。

「完二……お前、一体何した？」

「はあッ!? 俺は何もしてねえよッ！」

完二は身を乗り出して抗議するが、悠達は気にする事なくドリンクを飲み干す。

「ゴクゴク……喧嘩売られて返り討ちにしたとか？」

「絶対あり得ねえ！ こんな奴、顔を忘れらんねえツスよ!？」

今度は陽介が再度、聞き返す。

「本当に本当か？」

「本当だつつうの！」

千枝も更に聞き返す、

「もしかして……あれか？ って事は？」

「あ……いや、やつぱりねえって！」

「もしかして……完二くんが意識してないだけで、何か恨みでもかつてたんじゃ？」

「……」

雪子の言葉に黙り混む完二。

彼の記憶の中でそんな事ならば覚えがあつたのだ。

初対面だと思つた相手に『あの時はよくも……』等と自分が分からない恨みによつて喧嘩を売られる事もしばしば。

完二は冷静に今までの事を思い出して行く内に、心当たりが大量に蘇る。

（あれか?……いや、あれはもう終わった筈。じゃあ、去年の……いや、あれは三年の奴等だ。コイツとは無関係……）

頭を押さえて必死に考える完二の姿に、悠達もその様子に本当に何かしたのかと不安を抱き始めたが、完二達が悩んでいる間にも既に何せには見当がついていた。

「……まさかとは思うんだけど」

久保の写真を見て何か思い出したりせは語りだした。

それは久保が豆腐屋に来た時の事。りせは久保をあしらう様に相手をしていたが、その時の会話は覚えている。

「久保って人との会話の内容って、基本的に誰かの悪口だったから基本的に無視して結局は洗夜さんに助けてもらったんだけど、その時の悪口で一番多かったのはアイツ等は集団じゃないと何も出来ないとか……」 暴走族”とかに対する事だった」

「暴走族……？」

悠達はその単語をそう呟くと、視線は静かに再び完二へと移動する。

そしてりせの言葉からその視線の意味が分かった瞬間、完二は驚きの声を上げた。

「いやちげーよ！ 俺は族じゃねえ！ つーか、何でそんなイメージについて……まさか、あの番組のとばっちりかよ!? ふぎけやがってツ！」

完二は番組に対する怒りから飲んでいた缶を握り潰して丸め、そのままゴミ箱へと投げる。ゴミは見事にゴミ箱へと入り、少し離れた所から子供が拍手を送った。

「じゃあ結局……最初の二人も含め、誘拐した全員に対する動機があるのか」

「そうなるクマね……」

悠とクマが話をまとめた結果、少なくとも久保には殺人の動機とは断言できないが、少なくとも今までの被害者全員に対して良い感情を抱いていない事が分かった。

その事実の小西 早紀の件もあって、拳を握り絞めていた陽介の怒りが爆発した。

「ふぎけやがってツ！ あの野郎……！ そんな理由で人を殺してきただって言うのかよ！」

「行くうー！ この事件を終わらせに！」

陽介に続き、雪子の言葉に頷く悠達は椅子から立ち上がって自分の飲み物を飲み干した。

既に皆の表情からは覚悟が現れており、既に戦う準備は整ってい

る。……だがそんな中、陽介は悠の足下のとある一点に視線を奪われてもいた。

「なあ相棒、さつきから気になってたんだけど……一体、そいつは何なんだ？」

「コーン！」

陽介の言葉に応えるかのように今の場では場違いな鳴き声が響く。そんな鳴き声の出処である悠の足下に視線を動かすと、そこに居たのは悠の椅子の真下で欠伸をを噛み締めている一匹のキツネがいた。

身体中に付けている傷跡故に多少は怖くも見えるキツネだが、首から掛けているハートの柄のエプロンがギャップだからか雰囲気は怖可愛いで済んでいる。

しかし、気配も極力消してただけあつて陽介を除くメンバー達は驚きの声を上げた。

「うおっ！　なんでキツネ!？」

「私も全然、気付かなかった……」

(なんか……お揚げが食べたくなってきた)

「皆……実はこのキツネは只のキツネじゃないんだ!」

完二が驚き、りせも目をパチクリさせてびっくりしており、雪子は一人、お揚げに意識を奪われている。

そんな中で悠は力強い眼差しと口調で言い放つが、そんな事は言われなくとも分かっている。

こんなキツネが一般常識の産物ならば、明らかに裏で動いているのはエプロンの業者しかない。

「実は……このキツネは身体を癒す不思議な葉っぱを持ち歩いている。お金を請求が……多分、テレビの中での戦いで役立つ筈だ」

「で、でも……葉っぱですよ？　本当なんですか、その非現実的な葉っぱって……」

一般常識ならばりせの言う通り。そんな都合の良い葉っぱがあるならば見てみたいと陽介達全員が思っており、例え存在していたとしても山菜とは訳が違い、口に入れるのは怖い。

「いや実際に食べてみた。——問題はない」

「なんで微妙に間があるんですか?!」

悠が既に食している事に驚きと微妙に間を開けている事に不安を覚え、りせは椅子から立ち上がりながら言い放った。

「悠先輩もなんで食べたんですか！ 非現実でしかも葉っぱですよ？ 青汁でもなんでもないんですよ?!」

「……非現実にはもう慣れた。ペルソナとシャドウに関わっている時点で俺達は非現実の人間だ」

「あつ……確かに」

少し楽しそうに話す悠の言葉にりせも思わず納得。

感覚が麻痺しているが身体を癒す葉っぱよりも、ペルソナやシャドウの方が非現実。

結果的に自分達の間がマヒしている事を実感したのか、りせだけではなく陽介達も苦笑しながらも納得するしかなく、陽介達が納得すると悠は表情を真剣なものへと変えた。

「……それじゃあ行くこう」

「おうー」

悠の真剣な表情、そして言葉に陽介が応え、他のメンバーも力強く頷く。

そして、洗夜達は新たに仲間となったキツネと共にテレビの中へと足を踏み入れた。今度は友を救出するのではなく、全ての元凶かも知れない者を救う為に。



現在：テレビの世界【いつもの広場】

「うゝ分かりづらい……」

「頑張れ久慈川！ 気合い入れやがれ！」

「うるさい馬完二！ 探知って神経削って大変なんだからね！」

りせはヒミコの力を使いながらも発見できない事に嘆き、そんな彼女に気合が足りないと言っていると発破を掛けようとする完二。

そんな二人の言い合いを悠達は苦笑しながらも見守る。

今まで行方不明者が作り出したダンジョンの場所を特定していたのは、殆ど洗夜の力によるものだが洗夜は戦えない。

その事を悠が陽介達に説明すると不安や複雑な表情をそれぞれが浮かべたが、洗夜が言った成長しているとの言葉を思い出して気合を入れ直して、洗夜が裏から手伝えなくとも陽介達は不安を一切感じさせていない。

「じゃあ……鳴上君の腰の刀は洗夜さんの……」

「ああ……兄さんからの選別だ」

「二刀流かあ……格好いいな」

悠の腰に掛けてある今まで使用して来た悠の刀と洗夜からの刀を見ながら陽介は羨ましそうに呟いた。

「あんただだって二つ使ってんじゃない？」

「いや、クナイ二本と刀が二本じゃ全然違うつつうの。やっぱ男は刀だろ？」

千枝からの言葉に陽介はそう返答した。

自分が好きで使っているとは言え、ロマン的には刀の二刀流の方が格好良く見える。使い易さとロマンは全くの別物なのだ。

そして、暫く悠達がそんなやり取りをし、りせが愚痴に近い言葉を呟いていると、りせが「何か」を捉えて目を大きく開けた。

「——見付けた！　ここからそんなに遠くない」

りせの言葉を聞き、互いに頷きあって気を引き締める悠達は急いでその場所へと向かって行った。



現在：ボイドクエスト【入口】

「此処だよ……」

「此処だよって……この場所、まるで……」

りせの案内で足を踏み入れた雪子は殺人犯とは思えない場違いの光景に言葉を失い、悠はその光景を一言で表した。

「ゲームの世界」

目の前に広がる古いレトロゲームの様な場所。

周りに生えている草木、火、水はおろか空や大地までもがピカピカと点滅し、ドットの様に見える。

眩しい、チカチカする。悠達はそう思いながら、目の前の世界で酔いに近い症状を感じながら辺りを探索し始める。

「何処もかしこもゲーム一色かよ。——あん？」

ふざけた世界に怒りを抱く完二だったが、入り口の隣に設置されているモニターを発見して覗き込んだ。

” 勇者の名前を入力してください”

ミツオ

?????

「人を殺しておいて勇者かよ……」

完二はその文章に怒りを通り越し、逆に冷静になれた。

人を殺しておいて、よく自分を勇者等と言えたものだと思いに感心してしまう。

完二の眩きに気付き、同じように覗き込んだ悠達もそう思う中、悠はモニターの下に設置されているパネルを弄り、何か変化が起きないか試してみた。

旧式のゲームコントローラーの様なデザインのパネルだった故に、悠は簡単に操作を行えた。

しかし、だからこそ異変に気付く事が出来た。

「……駄目だ。名前が” ミツオ” から一切変更出来ない」

「当然だよセンセイ。此処はあの子が作った世界なんだから。……しかも、今までの中で一番強い力を感じるクマ。今までよりも断然注意した方が良いクマよ？」

「コーン！」

状況が分かっているのか、クマの言葉に応える様にキツネは鳴き、そんなキツネを見ていたりせは考える様子で悠に言った。

「悠先輩……この子、シャドウと戦う時どうしよう？」

「基本的にはりせと一緒に行動させようと思っている」

伊達に怪しい外見をしている訳ではなく、このキツネの気配の消し方は異常のレベルで上手く、気配を察するのにも長けている。

万が一、探知中のりせにシャドウが近付いて来たとしてもキツネが教えてくれる、そんな考えを悠はりせへ伝えようと、りせは納得した様に頷いた。

「分かった！ この子の事は任せて！」

ピースで応えるりせに悠は頷き、キツネにもりせの側にいる様に教えると悠達はボイドクエストへと足を踏み入れた。



その頃、悠達が足を踏み入れた同時。

現在；ボイドクエスト【最上階】

目的の人物である久保 美津雄はボイドクエストの最上階、まるでコロッセオを彷彿させる広場に立っていた。

ここまで走って来た為に息も切れて足もフラフラだが、その表情は気味の悪い笑みを浮かべ続けている。

自分を警察が捜している。他の連中もそうだ。皆、自分の事を知っている、捜している。

美津雄は自分が追われている事を自覚していたが、内心では焦つてもいなければ不安でもない。

自分が捕まらない事を知っているからであり、美津雄は確信した様に唇の端を歪ませる。

「は……はは……皆……皆が俺を捜してる。捕まえてみるよ……無理だけどな……！」

誰もいない静寂の広場に、美津雄の他者を見下す言葉が響き、我慢していたが耐えられずに美津雄は歪んだ笑みを更に濃く浮かべた。

此処にいる限り自分は捕まらない。誰も此処には来れない。それにも関わらず、今もこうしている間に此処が分からない警察や町の人々が捜している。

小馬鹿にした様に楽しんでる美津雄の内心の声、その内容は――

“今、町の中心にいるのは自分だ”

それを己に再度自覚させた事で美津雄は心臓の鼓動が早くなり、強

烈に興奮を覚えた。

「へ、へへ……どいつもコイツも馬鹿な奴だ。俺よりも下の癖に……俺を見下しやがって！——まあ、だから死んだんだけどな、あの馬鹿な女子アナも……調子乗ってた女子も……モロキンの奴も……どいつもコイツも……！」

興奮から急転、齒を食い縛る美津雄。

今までの事を思い出したのか、先程とは売って変わって歪んだ笑みが消え、代わりに憎しみに満ちた顔が現れる。

だが、その憎しみの意味がなんなのかは誰にも分からない。そんな時だ。

「……」

「っ?! だ、誰だっ!!」

何者かの気配を感じた美津雄は背後に向かって叫び、冷や汗をダラダラと流しながらその気配のある場所から視線を固定し、その正体を瞳に写す。

「……?!」

だが、美津雄は言葉を失い、思わず尻餅すら付き、そのまま気配の元凶を震えながら指差した。

美津雄も自分の起きている事が理解出来なかった。何でこんな事が起きる、そう疑問をずっと己に問い掛けながら叫ぶ。

「なんでだ……なんで……俺がもう一人……いるんだよ!」
「……」

叫びに怯む事無く美津雄?は感情一つ無い表現で美津雄を見ていた。まるで、自分の目の前には最初から何もいないかの様に……。



同日

現在：堂島宅【居間】

悠達がボイドクエスト内に侵入していた頃、洗夜は自宅で一人、洗濯物を畳みながら時計を眺めていた。

「……今頃は久保の世界だな」

信頼はしている。悠達の成長によってペルソナの力も、悠達自身の事も。

しかし、それでも心配や不安はある。だが、それはあくまでも家族としての心配や不安。

お使いに行く子供を心配する親の心境の様なものであった。

「……買い物に行くか」

家で今やれる事は大体済ませ、このまま家にいても無駄に不安がるだけでしかない。

洗夜はそう思うと、誤魔化すように独り言を呟きながらエコバックを肩に掛け、商店街へ向かおうと家の鍵を持った時だった。

——ピンポーン！

家に響くチャイム音。

タイミングが悪いと思いつつも居留守をする理由もある訳なく、洗夜はエコバック等を手に持ちながら玄関へ向かい、玄関の前から相手へ声を掛けた。

「どちら様でしょうか？」

「……新聞の集金ですー！」

返って来た言葉は何やら阿保っぽい間の抜けた男の声であった。

胡散臭さもすれば怪しいと言う感情が何故か沸き上がったが、同時に不思議と開けても良いとも洗夜は思えてしまい、己の感情に困惑しながら玄関の扉を開けた。

「はい、おいく……らっ？」

「……ど、どうもお」

玄関の扉を開けた洗夜を待っていたのは本当に怪しい新聞の集金ではなく、見覚えのある四人の姿。

その内の集金と嘘をついた人物の気まずそうにしている姿を目の当たりにし、同時にその背後の三人の姿を認識すると洗夜は思わず上を見上げて呆れる様に息を吐いた。

「はあ……ここまで来るか？ 普通は来ないだろ……美鶴？」

「……すまない」

申し訳なさそうな表情を隠さない美鶴と付き添う様に左右にいた
明彦・アイギス・順平の姿に洗夜は諦めた様に溜め息を吐くしか出来
なかった。

END

第三十三話：無の勇者 その名はミツオ

同日

現在：稲羽市【町はずれの空き地】

美鶴達が堂島宅へ来た後、洗夜は美鶴から静かな場所で話がしたいと言われ、諦めた様な気持ちでそれに頷いた。

その結果、運転や付き添いの桐条の関係者達は車に残り、洗夜と美鶴、そして明彦・アイギス・順平だけが空き地に立っていた。

「そう言えば……ゆかりはどうした？」

洗夜は目の前のメンバーの中でお見合いの時にいた筈のゆかりがない事に気付き、美鶴達へ問い掛けると真っ先に反応したのは順平だった。

「あつゆかりつちなら今日は仕事つすよ。鳴上先輩は知らないと思うつすけど、ゆかりつちって今は——」

「悪いが、そこまで聞く気はないぞ」

洗夜のハッキリとした言葉に順平も思わず言葉が止まる。

このままのノリで行けば何とかなると思っていた順平だったが、そこまで甘くはなかった。

「ゆかりは用事でいないのは分かって安心したが、じゃあお前等はなんで稲羽に来た？」

洗夜は内心でゆかりが悠達の方へ向かっているのではと深読みしていたが、順平の言葉を聞いてそれは考え過ぎであった。

順平は咄嗟に機転を利かせられるような人間ではなく、良くも悪くもあまり上手な嘘は言えない事も分かっており、洗夜は今はゆかりの事は忘れる事にした。

だが、そうなれば本題は美鶴達が稲羽に来た理由になる。

「色々ところちらにも事情がある……」

「教えてもない住所に来てる時点でその事情には俺も含まれてるんだな？」

「……」

洗夜の言葉に美鶴は沈黙で返す。

既に洗夜は堂島が美鶴達に稲羽の住所を教えていない事は聞いていた。美鶴達との事で不安を覚えた洗夜が堂島に聞いており、堂島は教える暇もなかった為に美鶴達には何も言っていない事を洗夜へ教えていた。

しかし、桐条ならば堂島の家を調べるのは容易な事であるのは想像に容易く、洗夜にはそこまで驚きはなかった。

「お前等……本当になんで来た？ 流石に俺の事が気になっただけで来るほど、暇じゃない筈だ」

二年前とは違い、今の美鶴は桐条のトップ。他のメンバーも自分の時間が必ずある筈であり、洗夜は自分の事だけで来たとは到底思えなかった。

そう明らかに不審に思う洗夜だったが、そんな洗夜の言葉にアイギスが応えた。

「洗夜さんの事も訪れた理由ですが……優先目的は「シャドウワーカー」としての方です」

「シャドウワーカー？」

聞きなれない単語。しかし洗夜はペルソナやシャドウを真つ先に連想させることが出来た。

と言うよりも目の前のメンバーからシャドウの文字が出た時点でそれ関係としか思えなかった。

「簡単に言えばシャドウ関連の事件解決を目的とした特殊部隊だ。警視庁と桐条で共同設立した政府公認の部隊であり、今回俺達はその事で稲羽にやって来た」

シャドウワーカーの事を明彦から説明され、洗夜はそれをすぐに納得できた反面、警視庁と共同設立したという事実などに驚き、困惑してしまった。

秘密主義であった事から、これからも限られた一部の人間しか知る事はないと思っていた洗夜だったが、明彦の言葉を聞いて“二年”と時間が流れている事を深く実感、そして考えさせられた。

桐条、と言うよりも美鶴達は進み始めている。洗夜はそれを感じると、自分だけが取り残されている様な気がしてしまった。

「……なら、この稲羽に来たのもシャドウ関係って事か」

「そうなる。……シャドウが関係しているのか確証はまだなかったが、色々と不明な情報が我々の耳に多く届くようになっていたその時、お前と再会した」

美鶴は冷静な口調でそう説明した。

やはり桐条なだけあり、稲羽の事件の異様さには気付いていた様だ。しかし、それでは決定打には欠ける情報であり、現状を見守っていた時に起こった洗夜との再会。そしてペルソナの異変。

それを直接感じ取った事で美鶴達は動き、お見合いから数日で稲羽に訪れた。

「今回は本格的な介入ではなく、あくまで下見に過ぎないが……危険性を感じればすぐにでも動くつもりだ」

「……まあ、その事に関して俺がとやかく言う権利はない。……が、出来れば介入はもう少し待ってもらいたい」

「そう思うのは弟が原因か？」

明彦の間もなく放った言葉に洗夜はピクツと身体を動かして反応したが、それは反射的に過ぎず驚き自体は全くなかった。

「悠はお前等に何を言った……？」

「私達がペルソナ使いかどうか……あの時、悠さんはそう仰いました。更に言えば、あの時洗夜さんに異変が起きた時に悠さんがペルソナを召喚したのを私達は目撃しております」

「そこまで知ってるなら話が早い。——悠は仲間達と共に事件を追っている。色々と思うかもしれないが……悠達を俺は見守りたい」

アイギスの言葉を聞いた洗夜はハッキリとした口調で美鶴達へそう言うが、美鶴は首を横へと振る。

「……洗夜、それを我々が聞く理由はない。ペルソナ使いと言え、彼等は何の後ろ盾もない一般人なのだろう？」

美鶴の言葉は的を射ていた。美鶴達とは違い、何の後ろ盾も持っていない悠達は何かあっても誰かに守ってもらえる事はない。

今も堂島に目を付けられており、万が一警察に連行される事態に陥ってもどうする事も出来ない。

だが、それは洗夜が悠にしつこく言った事でもあり、洗夜は小さく微笑みながら空を見上げた。

「後ろ盾は確かにない。だが、ただの一般人だったのは俺達も同じだった筈だ……」

「わざわざそいつ等が危険を冒す必要はないと言っているんだ、洗夜」腕を組んだままの明彦が厳しい口調で言い放つ。

確かに本業である美鶴達が来た以上、悠達が事件に首を突っ込むのは間違っているかも知れない。そもそも、美鶴達は政府公認である以上、洗夜の言葉を無視する事など簡単にできる。

更に言えば、わざわざ洗夜に伝えること自体が不要でしかないが、それでも伝えたのは美鶴達なりの考えがあるのか、それとも仲間だったからなのか。

どちらにしろ、洗夜に伝える事があるのだろうか、当の洗夜は明彦の言葉に怯まず、笑みを浮かべたまま答えた。

「確かにな……だが、それでも俺は信じているし、悠がこの事件に関わっている事にも意味があると思っている……『アイツ』みたいにな」

「……」

迷わない洗夜の言葉に美鶴達は黙るしかなかった。

『彼』の事を出されてしまえばしようがない事だった。
「まあ……俺がお前等を止める権利はないがな。——さて、話が終わるなら俺はそろそろ帰らせてもらおうぞ？ 夕飯の材料を買わないといけないからな」

洗夜がそう言つて美鶴達の横を横切ろうとしたその時、アイギスがそんな洗夜の腕を掴んだ。

「待って下さい洗夜さん」

「なんだ？」

アイギスがこんな積極的に動くのはある意味で珍しい光景であった。

心的に豊かになったとはいえ、どこか彼女はズレている。

表情的にも冗談ではなさそうな事で洗夜も足を止めたが、アイギスの言葉を聞いて驚く事になる。

「洗夜さんも参加して頂けませんか？……シャドウワーカーに」

「なに……？」

アイギスの言葉に洗夜は表情が険しくなり、美鶴達も驚きを隠せな
いで固まってしまった。



その頃。

現在：ボイドクエスト【最上階付近のフロア】

洗夜が美鶴達と話していた頃、美津雄が生み出した世界であり、レ
トロゲームを彷彿させる【ボイドクエスト】に侵入した悠達は順調に
上のフロアを進んでいた。

しかし、上のフロアへ進む毎にゲームらしくシャドウ達の妨害も強
くなり、悠達はシャドウとの戦闘を回避できず、戦闘も苛烈さを増し
ていた。

「そこだー！」

悠は武者姿のシャドウからの攻撃を右手の刀で受け止め、左手に持
つ洗夜から贈られた刀でガラ空きの腹部を斬り付ける。

そして陽介達の刀の特性であるシャドウを弱らせる効果も手伝い、
シャドウの動きが鈍くなるとイザナギやキンキ等のペルソナで止め
を刺す。

だが、目の前の敵を倒しても悠の動きは止まらない。他で戦ってい
る仲間へ指示を出さなければならぬからだ。

「天城は陽介を援護！ 完二は千枝を、クマはりせとキツネを頼む！」

「分かった！——来なさい……アマテラス！」

「ウッス！——タケミカツチ！」

悠の声に雪子と完二は応え、雪子はコノハナサクヤから転生した新
たな仮面、日本神話の太陽を神格化した神である『アマテラス』で陽
介へ群がるシャドウを焼き尽くす。

完二も千枝の背後から迫るシャドウをパイプ椅子で殴り飛ばし、
吹っ飛んだシャドウをタケミカツチが拳で叩き潰す。

そしてクマに守られながら皆をサポートしていたりせとキツネも

怪我はなく、りせはヒミコで辺りを探知してシャドウの反応が消える
と悠達へ手を振って知らせる。

「みんな、ご苦労さま！ さっきので最後みたい！」

「ふう……流石にシャドウ達も攻撃的になつてるクマね」

「コーン！」

クマは上のフロアに近付く度にシャドウ達が凶暴になつてい
る事を実感し、疲れを隠せず深い息を吐いた。

「けどさ、もう結構上まで来たよね？ 久保の奴、一体どこまで逃げた
んだろ？」

「ここまでフロア全体を見ながら来たが、久保はどこにもいなかった」
千枝の疑問に悠も頷いた。

見落としがない様にフロアの全てを探してきたが、美津雄の姿はど
こにも確認出来ていなかった以上、現状まで来たフロアより上にいる
事が確定している。

「チツ！ まだシャドウが襲わねえからって最上階まで逃げたんじゃ
ねツスか？」

「やっぱ、そうなるか……」

「マヨナカテレビじゃ、ああ言ってたけど……やっぱり追われている
事を自覚してるんだと思う。だから逃げられるところまで逃げられ
る以上、最上階が一番可能性が高いと思う」

完二の言葉に陽介は頭を掻き、雪子も最上階にいる可能性が一番高
いと踏んでいる。

かなり上がってきている以上、悠達もその可能性を考え始め、りせ
へ聞いた。

「りせ、最上階までは後どの程度だ？」

「えっと……ちよつと待って下さい。随分、上つて来たから分かる筈
……」

りせはヒミコを召喚し、早速自分達がどの程度まで上がって来てい
るか調べ始めた。

美津雄の闇が深いとはいえ、流石に今までの経験でそろそろ最上階
だと予想は出来ており、案の定、りせはすぐにそれを調べ終える事が

出来た。

「今、私達がいる場所は第8章……つまり8階。最上階は10階だから後二階だよ?」

「やっぱり、殆ど目と鼻の先か」

「後二階……見つけても穏便に済めば良いけど……」

悠は最上階までの事を考えていると雪子が美津雄を発見した時の事を考え始める。

見た目が気味悪いと言ってもモロキンを直接殺害している以上、簡単に事が済むとは誰も内心では思っておらず、陽介は険しい表情を浮かべていた。

「まず無理だろうな……ここに来るまで皆も見ただろ? あいつ、人を殺す事を何とも思っちゃいないって」

陽介の言葉に悠達の表情が曇る。

ここに来るまで見て来た“光景”を皆は思い出す。ゲームの戦闘のような表現で殺されてゆく者達の姿を。

ミツオの攻撃・ダメージ・レベルアップ。そして女子アナは倒れた、目撃者は倒れた、モロキンは死んだと永遠に流れ続ける光景を見た悠達は怒り、そして不快感を覚える程。

「何も無い事に越したことはないが、大型シャドウ化する事も視野に入れた方が良い」

「何も無いと良いけど……」

悠の言葉に皆は頷き、千枝は不安そうにそう呟きながらメンバーは階段を上って行く。



現在：ボイドクエスト【最終章】

悠達は目の前にそびえ立つドットの巨大な扉の前に立っていた。

本来は鍵穴がありそうな部分には球体が埋まりそうな場所があり、悠達はここに来るまでに倒したシャドウが落としした黒い球を詰め込むと、鍵が開く音が悠達の耳に届く。

これによつて美津雄がいるであろう扉の先へ行く事が可能となる。

「これで後は進むだけだな」

「ああ！——でもよ、流石に今回は疲れたぜ……」

扉を見上げる悠の言葉に頷きながら陽介は伸びをし、身体からポキポキと音を鳴らした。

他のメンバーもストレッチや座って休む者もあり、流石に今回は悠達にも疲労が溜まっていている事に悠は考えた。

(どうするか……)

前に雪子のシャドウの時は無理した事で危険に晒されたが、今回はそんな同じ轍を踏む事はしない。

悠がこれからそう動くか考えていると……。

「コーン！」

キツネが悠の下へ近付いて来た。首に付けているエプロンからは見覚えのある“葉っぱ”をチラチラと見せており、悠はキツネの言わんとしている事が分かった。

葉っぱを使え、キツネはそう言っているのだという事を。

確かに葉っぱを使えば回復でき、万が一の時に対応できるのだが悠の表情は曇っていた。

「……」

「どうした相棒？」

陽介が悠が考えている事に気づき、近付いて語り掛けて来た。

「皆が疲労している中で……キツネの葉っぱを使うかどうかを考えてた」

「葉っぱ？……ああ、確かそんな事を言ってたけな」

陽介はテレビの世界に来る前に言っていた悠の言葉を思い出す。

体を癒す葉っぱ。現実的な人間が聞けば9割は疑われるだろうが、今の陽介は少なくとも非現実側の人間であり半信半疑であるが、あってもおかしくはないとも思っていた。

「確かに半信半疑であっけどよ、俺はこれに賭けてみるぜ？」

そう言って陽介はキツネの持つ葉っぱを貰うと、それを口に運んだ。

「あつ……」

その光景に悠は何か言いたそうに手を伸ばしたが、既に陽介は葉っぱを食べた後であった。

そして陽介が葉っぱを口にした事で他のメンバーも皆がやるなら自分もと言った様子で食べ始めた直後、その瞳を大きく開いた。

「ツ!? こ、これは……!」

「な、なんて事……!」

陽介達は驚いた。口にした瞬間、口中に広がるミントの様なスーとした感じにお茶の様な香ばしさ。

気付いたら既に自分達の身体の疲れ等が吹っ飛んでいた。

本当にキツネに化かされている気分。しかし、そんな皆の様子を何か複雑そうな表情で葉っぱを食べながら見ている者が一人……悠だ。

「ムシャムシャ……」

無表情ながら何かを思っている表情。心の内側に明らかに何かを隠している。

そんな悠の姿に陽介達も気付いた。

「どうした相棒?」

「センセイ、なにかあったクマか?」

陽介とクマが気になって悠に声をかけた……そんな時だ、何かが自分のズボンを引っ張っている事に陽介は気付いて下を見る。

そこにいたのはキツネだった。先程と違うのは、キツネの足下に置かれているのが葉っぱではなく、何処から出したのか数字が打ち込まれた電卓。

陽介達はしやがみ、電卓を手を取って見ると、電卓に打たれていたのは五桁の数字であった。

「5、6、4、0、0……なんだこの数字は?」

「暗号ツスか?」

暗号、数式、年号、色々と考えるがどれもピンと来ない。キツネもそんな陽介達の足下で、何かを訴える様な目ですっと見詰めている。

一体、何が言いたいのかわからず、陽介達は困惑していると悠が何処か気まずそうに数値の意味を話し出した。

「……実はその数値……葉っぱの”値段”なんだ」
「……は？」

「ね、値段って……」

悠の言葉を聞いた陽介は口を開き、千枝も息を呑みながら再び電卓を覗き込んだ。電卓に打たれた数字56400。

つまり、この数字を値段に置き換えると……。

「ご！ 五万六千四百円かよッ!？」

「はあッ!? 五万六千四百円っ!?!」

「なにそのボツタクリッ!？」

「えくと……クマのニツキュウが500円だから……ぬおっ!

じゅ、十倍っ!？」

「百倍だよ……クマさん」

「……言いそびれた」

皆が値段に驚く中で一人謝罪する悠。この葉っぱは効き目が凄いが値段が半端無い。

しかも、このキツネは一切値引きしないという買う側からしたら嫌な信念?を持っている。

だが、陽介達は別の事を心配していた。その心配を解決する為に陽介は自分の財布を取り出して悠の方を見た。

「相棒……今、幾ら持ってる?」

少し生気が薄れた感じの声で喋る陽介達に慌てて財布を取り出して中身を確認する悠だったが、現実は厳しかった。

悠の表情は良くはなかった。

「……二千三十円」

「俺……この間クマのツケとか食費で……千五百二十四円」

「私……この間新しいDVD買ったから……ごめんなさい。八百と……六円です」

「私も検定の費用払ったから千三百円……」

「……スンマセン。小遣い前で……四百円……あッ! でも、愛屋の割引券なら……無理ッスよね」

「私も……新しい服買ったから……二千四百と……二十一円です」

「クマは持ってきて無いも〜ん！」

特別捜査隊に金なし。貧乏捜査隊に突き付けられた現実に悠達はクマを除く誰も顔を上げようとしなない。

全員が気まずい中、悠が決死の覚悟でキツネに交渉を挑んだ。

「……後で油揚げをやるから半額にしてくれ」

「……………コンッ!!」

悠の言葉にキツネはプイッと顔を横に向く。態度通り値段を下げる気は全くないようだった。

最初からそうだったが、値切り対策なのか、このキツネが戦いの途中で役に立つ事は無かったが邪魔になってもいない。

それどころか、シャドウにも気付かれない程に気配を消すのが上手い。

自分の身は自分で守っている。それ故に悠達は守ってやっているのだから値下げしろとは言えなかった。

なによりキツネの鋭い眼を見る限り、このままでは回復したとは言え先に進ませてくれそうに無いのは明白。

(こうなれば……)

悠は意を決して最後の“手段”を取った。



現在：ボイドクエスト【最終章・コロッセオ】

最後の手段で何とかなった悠達はキツネの不満顔から目を逸らしながらも扉の中へと足を踏み入れた。

そこはボイドクエストの最上階であり、悠達が見たのは周りを高い壁に覆われた広場、そしてその壁の上に存在する観客席。

そこは正に戦う為だけの場所、コロッセオを彷彿させる場所であった。

そして、そのコロッセオの中央には目的である人物“久保 美津夫”が立っており、更に奥にも久保と同じ姿をした者が立っていた。

「遅かった…………… 既にシャドウが出ている！」

「でも、なんて言うか……………どっちが本物なのか分かりづらいな」

「どっちもシャドウっぽいしね……でも、場所的に考えたら奥のがシャドウじゃないかな？」

悠の言葉に、陽介はどっちが本物か分からず、配置的に考えて奥にいるのがシャドウだと千枝は推理した。

だが、こんなにもすぐ後ろで悠達が話しているにも関わらず、久保は全く気付いておらず奥の方にいる自分のシャドウに何かを叫び続けていた。

「誰も俺の凄さに気付かねえ！ だから殺してやったんだッ！ あの馬鹿な女子アナや第一発見者を……そして、モロキンの野郎をもだっ！ 繁華街にいただけで停学にして、俺のプライドをズタズタにしたあのモロキンをだぜ！」

「あの野郎……！」

自分のやった事に対する罪の意識が全く感じられない美津雄の言葉に、完二は思わず歯を噛み締めながら拳に力を入れた。

近所では族潰しの不良で通っている完二だが、その心は優しく、やって良い事と悪い事も理解している。

それ故に、自分がどれ程の事をしたのか全く理解していない美津雄に怒りが湧き出て仕方なかった。

そして、同じ怒りを陽介や雪子達も感じていた。

「あんな奴に小西先輩は……！」

「さつき諸岡先生に補導されてプライドをズタズタにされたって言ってたけど……もしかして、私が誘拐されたのは私が誘いを断ったから……？ でも、だったらなんで他の人まで……！」

「誘拐した奴全員が気に喰わなかったんじゃない？ アイツの言葉から察するに……！」

りせがそう言った時だった。悠達に気付いたらしく、美津雄は振り向く。

ゴツゴツとし、妙に四角く身体に似合わない程に大きな顔と、死人のような生気のない瞳。

悠達はその姿を見た瞬間に背筋に悪寒が過った。一体、何をしでかすのかが分からない。

いきなり奇声を上げて襲い掛かって来るかも知れない。

悠達にそう思わせる程に、久保の雰囲気等は異様だった。

最早、相手は只の学生ではなく殺人犯だが、そんな悠達の様子に微塵も興味が無いのか、美津雄は口元を歪ませると突如、大声で笑い出した。

「アツハツハツハツハツ!!」

「ひっー!」

がらがら声の様な乾き切った笑い声に、りせは思わずビクツと反応してしまい、千枝と雪子の二人が落ち着かせる様にりせの手を掴み、悠達も身構えた。

だが、美津雄は暫く笑っていると特に何もせず馬鹿にするかの様な口調で悠達を指しながら口を開いた。

「なにお前ら? 本当はここまで追っ掛けて来たのかよ?」

「一応、確認するが……久保 美津雄だな」

美津雄の背後にいるシャドウから出来るだけ遠ざけようと、悠は久保に対して他愛ない言葉を投げると悠の言葉に美津雄は再び口元をニヤつかせた。

「ニユース見たんだろ? なら分かんたろ?——全部だ! 全部俺が殺ってやったんだ! 二人だけじゃあ誰も俺を見ねえから……だから三人目……モロキンの野郎も殺して殺ったんだつ!!」

「マジかよ……本当にお前が、小西先輩達を……!」

美津雄本人からの言葉に、陽介から怒りの感情が溢れ出てきた。

何故、小西早紀がこんな訳の分からない奴に殺されなければならなかったのか。

何故、もつと早く美津雄の存在に気付かなかったのか。

陽介は今になって後悔ばかり生まれてしまう。

悠達もそんな陽介の様子に気付いたが、今の状況では投げ掛けてあげられる言葉がなかった。

だが、先程の陽介の言葉を聞いた美津雄だったが、何故かその表情は嬉しそうであり、満足げな表情をしていた。

そして、久保はそのまま今度は自分のシャドウの方に向きなおす。

「どうだ！ コイツ等だって俺を知ってるんだぜっ！ 何もないあの町で俺は時の人だ！ 色んな奴が俺を見てるんだぞっ!!」

先程よりも感情的な喋り方をし始めた美津雄はそのまま自分のシャドウに対し、色々と言葉をぶつけ始める。

だが、当の美津雄のシャドウは何も言わない。——いや、その表情を見る限りでは美津雄の言葉から何も感じてすらないようだった。

『……………』

何も言わない己のシャドウに対し、久保は怒りを露にした。

「なんなんだよ……………なんで何も言わないんだよっ!!」

怒りに任せた言葉をシャドウにぶつける美津雄。

その言葉の感情から察するに、悠達がここに来るまでにも色々とシャドウに話し掛けていた様だが、返事は無かったと思われる。

だがこの時、シャドウが初めて美津雄の言葉に対しリアクションを示した。

『……………だって、何も感じないから』

「な、なんだと……………!？」

見た目通り言葉にすら生気が感じられないシャドウ。

そのシャドウの言葉に美津雄は初めて喋った事への驚きよりも、シャドウの言葉に驚いてしまっていた。

『……………僕は無だ。無なんだから何も感じない……………そして、君自身も……………君は僕だから……………』

「な、なんだよそれ……………!」

美津雄はシャドウの言葉に怒りを覚える。自分の事を殆ど知らない悠達ですら自分の事を知っている。

おそらくニュースかなんかで知ったのだろう。もしかしたら町中か、日本中が自分を知っているかも知れない。

なのにも関わらず、自分と同じ姿をしたシャドウは美津雄の事を無と言った。

それが美津雄は許せなかった。他人は知っているのに、自分自身が自分を知らない。

そう思われている様で、美津雄はシャドウに対し怒りを覚え、思わ

ずその場で大きく叫び散らした。

「ふざけんじゃねえよっ!!」

(マズイ……い!)

美津雄から醸し出される危険な雰囲気を感じ取った悠は、シャドウの暴走化を抑える為、別の話題を口にした。

「一つ聞きたい! お前は一体、何処でこの世界の事を知ったんだ?」

美津雄の事を模倣犯と元々、洗夜から聞いていた悠だが、このダンジョンに入ってからのも出来事や美津雄本人からの供述から察するに被害者三人を殺したのは美津雄という事になり、その流れで自然に誘拐していたのも美津雄という事になる。

ならば、美津雄は何処でこのテレビの世界を知り、どうやって誘拐を成功させていたのか?

テレビの世界は偶然知ったのならばそれで良いが、誘拐の方は偶然で片付けられない。

悠はその二点が気になった。しかし、悠の言葉に振り向いた久保は悠の顔を見た瞬間、何かを思い出した様に目を開き、そのまま睨み付けた。

「……バイト」

「……?」

「バイトつってんだよ! お前! あの時、俺とりせの邪魔をしたバイトだろ!」

美津雄が言っているのは、暫く前に美津雄にしつこく話し掛けられて困っていたりせを洗夜が助けた時の事だろう。

どうやらその事で悠を洗夜と間違えられた様で、その話を聞いたりせは不満げな表情で美津雄を睨んだ。

「邪魔って……なんで私がアイツの物みたいに言われてるの?」

「うくん……あの子は恐らく世間をと言うか、周りを見下して世界が自分を中心に動いてると思ってるクマよ。だから、他人が誉められたり認められたりすると面白くない。逆に、自分が他の人より勝っている部分があると出来ない人を凄く馬鹿に思うよ。そんな感じで町に来たりせちゃんを自然に自分の物と思っただんじゃない?」

「お前……本当にクマか？」

何気に観察しているクマの言葉に完二は謎の違和感を覚えると、クマはドヤ顔を披露した。

「ふふくん！ クマは毎週ヨースケの家でパパさんとママさんと一緒にテレビを見ているクマから、ああ言う子に關しては任せるクマ！」
「お、お前……たまにいなくなると思ったら人の親となにパイプ築いてんだよ……」

「毎週水曜日！ 歪んだ若者の直し方！ オススメクマ！」

ピースしながらテンションをあげるクマに、溜め息を吐きながら陽介に同情する悠達だが、美津雄を無視して盛り上がるクマ達の、その行為が美津雄の逆鱗に触れてしまう。

美津雄は自分を無視したクマ達を睨むと拳を握り絞めて叫んだ。

「なんなんだよ！ お前等まで俺を無視しやがって！ こうなったらお前等も全員殺してやるっ！」

そう叫ぶと同時に、今度はシャドウの方を向く美津雄。

「お前もだこのニセモノ！ 俺は出来るんだ！ 全員殺してやる……！ ハハ……特に俺を馬鹿にするニセモノ野郎は……」

「ッ!? マズイ！」

「やめろっ！」

美津雄がなにしようとしたのか分かった悠と陽介は、美津雄を止めようとしたが遅かった。

美津雄は自信を取り戻したらしく既に自分の世界に入り、悠達の声は聞こえていなかった。

——そして、あの言葉が放たれる。

「俺の前から消えちまえっ!!」

その言葉が引き金となる。

『認めないんだね……僕を……』

美津雄の言葉を聞いたシャドウの周りから大量の闇が溢れだし、その闇は美津雄を飲み込もうとその身体を包み込み始めた。

「なっ!? なんだよコレ——!」

闇に飲み込まれる美津雄を見て悠達は助けようとしたが、闇の動き

は早く、あつという間に美津雄を飲み込んでしまった。

そして、美津雄を取り込んだ闇はやがて一つの形になり始め、見た目はドット絵の塊だが、そのドット一つ一つが巨大なブロック状、右手にはそのブロックで作られた剣を持ち、まるでレトロゲームの勇者を彷彿とさせるシャドウ『導かれし勇者ミツオ』が現れる。

その光景に悠達はそれぞれ武器を構えて戦闘態勢に入った。

「結局こうなるのか……」

悠はそう呟き、精神を研ぎ澄ませる様なピリピリとした空気が包み込む。

そして、悠達はペルソナカードを構え、戦いの合図の代わりに仮面の名を叫んだ。

——ペルソナッ！

悠達か、美津雄か、この戦いの結末が誰に対してのエンディングになるのか、まだ悠達は知らない。

END

第三十四話：GAME OVER

同日

現在：ボイドクエスト【最終章・コロッセオ】

「避けて！　また来るよ！」

勇者ミツオとの戦いが幕を開け、悠達は己の全力を持って挑んでいた。

見た目がゲームのキャラクターだけに、勇者ミツオの攻撃は一見ふざけた様な攻撃ばかり。

見た目は剣だが、ドット故にビルの様に長方形の鈍器にしか見えな
い剣を振り下ろす。

魔法攻撃もドットだが、突然放たれる攻撃を避けるのは難しく、り
せのサポートが不可欠。

そして最後はアイテム攻撃。文字通りに攻撃であり、爆弾を悠達目
掛けて放り投げてくる。

だが、ふざけている様な攻撃ばかりだが、それでも大型シャドウの
攻撃。その威力はとて大きく、油断していれば悠達もすぐに命の危
機に晒されるだろう。

しかし、悠達は全く油断などしていなかった。

勇者ミツオとは言え相手はシャドウ。油断しない理由はそれだけ
で十分であり、りせの声に悠達は一斉に散らばった。

「今だ——オルトロス！」

回避した悠は勇者ミツオの攻撃のインターバル、即ち僅かな隙を見
流さずペルソナを召喚した。

『グルルル……』

二つ首の魔犬オルトロスは声を唸らせながら勇者ミツオを睨み付
けた瞬間、四つの瞳を大きく開き、二つの口から巨大な炎を吐き出
した。

目標は言うまでもなく勇者ミツオであり、オルトロスの炎攻撃アギ
ダインが勇者ミツオを包み込む。

『!!?』

炎に包まれる勇者ミツオ。払っても炎は消えず、悠はその隙を突いて攻勢を指示する。

「陽介！ 里中！」

「任せろ！——スサノオ！」

「行くくよ！——トモエ！」

小西 早紀の弔い合戦とも言えるこの一戦に陽介は気合が入り、新たな仮面の姿になったスサノオと共に勇者ミツオの前に立ち塞がった。

千枝もペルソナが転生してはいないが、彼女の成長と共にトモエの能力も上がっており、堂々とした態度で勇者ミツオの前で仁王立ちする。

そんな堂々とする相手を見ても無視できないのは勇者の性か、それともゲームの性なのだろうか。勇者ミツオはスサノオとトモエの方へ素早く方向転換し、剣を掲げながら攻撃を行った。

「花村先輩！ 里中先輩！ 攻撃が来るよ！」

勇者ミツオが攻撃準備を整える前にリセは二人へ注意を促し、それを聞いた陽介と千枝は気合いの入った笑みを浮かべた。

「了解だ！ 気合い入れるよ！——行くぜスサノオ」

「こつちも続くよ！——トモエ！」

主の言葉を聞くと同時に勇者ミツオへ向かって行くスサノオとトモエの二体に対し、勇者ミツオも迎え撃つように剣を振り下ろす。

「受け止めて！」

千枝の声にトモエは剣の前に立ち塞がると、その強烈な一撃を薙刀で受け止めた。

大きな金属音と衝撃波を生み出しながらも一撃に耐えた双方は、そのまま鏢迫り合いを開始するが陽介はその好機を逃さなかった。

「今だスサノオ！」

陽介は仮面へ叫び、スサノオもそれに応える。

己の身体の周りを回転している武器である鋸の刃の様な円盤。その円盤に疾風属性技『ガルーラ』を纏わせるとその円盤は強烈に高速回転を始め、スサノオはその勢いに乗る形で勇者ミツオへそれを投げ

た。

風を切りながら進むスサノオの一撃。トモエに気を取られていた勇者ミツオがそれに気付く事は出来ず、気付いた時には高速回転する刃をその身に受けた後だった。

『!!?』

火花を散らしながら勇者ミツオの身体で回転し続けるスサノオの円盤。ガルーラが消えると同時にスサノオの下へと戻り、残されたのは荒々しい傷跡を残す勇者ミツオの姿だけであった。

傷跡の部分のドットは砂嵐やバグツた様な映像の乱れが表示され、明らかにダメージが大きいのが分かるが勇者ミツオは問題なく立ち上がった。

——瞬間、勇者ミツオは炎と強烈な一撃をその身に受けた。

「アマテラス！」

「タケミカツチ!!」

己の仮面の名を叫ぶ雪子と完二。それに応える二つの仮面の力、ブースタで補助された高火の『アギダイン』と力の限りの文字通りの力技『剛殺斬』を受けた勇者ミツオの身体は燃え上がり、スサノオの攻撃を受けた場所に更にタケミカツチの一撃が直撃した事であろう肉体に亀裂が走った。

『……………!!』

そのダメージで揺れ動く勇者ミツオは壊れた機械の様に不規則な動きをすると、真上から迫る仮面の姿に気付く。

「オニー！」

一本角の赤鬼を召喚した悠は名を呼びながら指示を出し、勇者ミツオの真上からオニは身体を回転させながら武器を勇者ミツオへ振り下ろす。

勢いに任せた力技。それは同時に隙を多く見せる行動でもあるが、オニに気付いても身体が上手く動かせない勇者ミツオへは効果的だ。

何も出来ない勇者ミツオへオニの武器が直撃し、陽介達の付けた傷からドットが大きく弾け飛んだ。

『!?……………!!』

欠落した身体では思う様に動く事は出来ず、目のドットの光も点滅して今にも消えそうであった。

既に虫の息。今こそトドメの時と悠達は思い、クマのキントキドウジもミサイルを放つ。

「いけ〜！ キントキドウジ！」

キントキドウジは一本の巨大ミサイルを投げるとミサイルに火が入り、一直線に勇者ミツオへ直撃するとそのままミサイルの勢いに押し込まれながらコロッセオの壁に激突、そしてミサイルの爆発に飲み込まれた。

「やったクマか！」

「どうだりせ？」

「え〜と……殆ど力は今のところ感じないけど、念のため油断はしないです！」

爆風の煙でまだ姿が見えず、りせは勇者ミツオを警戒するが何も感じられない程に敵の力を察知できない。

既に消滅したか、それともそれ程まで勇者ミツオがダメージを負っているのどちらかだ。

りせの言葉を聞き、悠達は警戒を強める中、やがて煙が晴れて勇者ミツオがその姿を現したが……。

『……』

勇者ミツオは壁に寄り掛かる様に倒れており、起き上がる気配はない。身体も半壊し、ドットも顔の一部しか光っていない。

しかしまだ息はあるらしく今にも消えそうに点滅する瞳を悠達へ向けると、勇者ミツオはとある“一人”を視界に捉えた。

それは悠だった。

「……？」

悠も勇者ミツオと目が合った気がし、同じ様に見つめた。

——瞬間、勇者ミツオの中で何かが目覚めた。

『ア……イツ……ハ？』

勇者ミツオは悠の事を思い出した。

勇者ミツオ、と言うよりも久保 美津雄と鳴上 悠の接点はハツキ

り言つて特別存在しない。雪子をナンパした時に出会つてはいるが当時の目的は雪子だけであり、悠の事は“なんだこいつ？”程度にしか認識出来ていなかった。故に過去に直接出会つたのはその時だけある為、美津雄が悠を思い出すと言うのもおかしい話である。

——だが、美津雄が悠のあずかり知らない所で悠の存在を知る事になれば話は別だ。

それは美津雄が停学を受け、八十神高校から姿を消して悠が転校して来てからのとある日の事。

やる気のないバイトを終えて商店街の中を帰宅の為に歩いていたら、美津雄は帰宅中の八十神高校の女子生徒達とすれ違った時に聞いた話。

『ねえねえ？ 最近転校してきた二年生の先輩って知ってる？』

『鳴上先輩だよね！ 転校初日にモロキンに立ち向かつたって聞いた！』

『聞いた！ 聞いた！ 見た目はクールなのに熱い一面を見せるギャップが良いよね！』

女子生徒の話は転校生・鳴上 悠の話。

転校ばかりの人生だっただけに悠は勇気・根気・寛容さ・伝達力・知識がずば抜けて高く、転校初日からモロキンと向かい合う程。

そんな悠だ。先輩・後輩・同級生達から良い意味で注目されるのに時間は掛からなかった。

だが、突然学校に現れた転校生がこんなにも言われている中、学校から消えた自分はどうなのかと美津雄は不意に考える。

そして何か言われるのかと思ひ、立ち止まってその女子生徒達をジッと美津雄は見つめていると、ずっと見られていれば当たり前だが気付く。

美津雄の視線に気付いた女子生徒はチラッと美津雄の方を振り返った。

——しかし、それは歓迎の表情ではなかった。

『なにあれ……きもっ』

『知り合い？』

『そんな訳ないじゃん……誰よあれ?』

不満、嫌悪、眼中になし。

美津雄を見た女子生徒達からは一切の好感はなく、誰かも分からない存在でしかなかった。

『ミツオ は レベルアップ! 不安が4上がった・逆恨みが2上がった・悲しさが7上がった・虚しさが10上がった』

『テン……コウセイ……!』

美津雄のボルテージが高まる。

悠には一切関係無ければ非も存在しない案件だが美津雄の中での決定権を持っているのは、やはり美津雄自身にしかない。

そして理不尽な恨みは更なる記憶を美津雄へ思い出させた。

それは美津雄が新しい学校へ転校して数日の事。

『なあ?……この前転校してきた奴いんじゃない?……あいつの事どう思う?』

『久保の事か?……まあ、好きじゃない……って言うかどうかでもいいな』

『大した事も出来ないのになんであんなに偉そうなんだか……』

美津雄の転校先の評判は悠とは真逆のものだった。

悠とは違い、転校先で受け入れて貰えず、周りからは好感をもたれる事はなかった。

しかし、それは当然の結果でしかなかった。美津雄は自分が中心とかし考えておらず、自分以外の相手を見下していたからだ。

自分達を偉そうに見下す様な人間に、何故好感を抱かなければならない?

『まっ……どうでも良いよな本当に』

好感は疎か、美津雄への興味すら周囲が無くするのに時間は要らなかった。

しかし、それが美津雄の現実でも悠の現実に影響が出る事はない。

『鳴上がうちの部活に来てくれて助かったぜ……』

『ああ、これで次の練習試合は貰ったな!』

『鳴上だけじゃないさ。俺等も頑張ろうぜ!』

それはとある日に美津雄が聞いた声。

八十神高校のとある帰宅中の部員の内容、それは自分達の部活に悠が入部した事で戦力が上がった事の話だった。

だが、いくら悠でも突然運動部の部員から受け入れられた訳ではない。最初は悠を受け入れず、邪険に扱う者達が多かったが、そんな中でも悠を受け入れた者達と出会った事で悠は前に進めた。

そんな者達と関わって行く内に周囲も悠を受け入れた。

悠とて何の苦労もなく居場所を作った訳ではないのだが、美津雄からすれば自分の“苦労もしないで恵まれている奴”としか思う事が出来なかった。

結果、それを思い出した美津雄は自分勝手な怒りを燃え上がらせる。

『ナン……ナンダヨ……オマエ……!』

りせの時もそうだった。稲羽に着て間もないりせならば自分の魅力に気付いてくれる。自分の事を見るだろうと美津雄は思い、りせが店番するタイミングを覚えて行動に出た。

その時、必死に話題を美津雄はりせへ振ったのだが、所詮は己の抱く他者への負を共感させる様な事ばかり。つまりは誰かの悪口しか言っていないかった。

しかし、りせの反応をあしらわれていると気付かない美津雄は共感、そして話を聞いて貰えていると勘違いする。

そんな時だった。りせと自分の間に割り込む存在が現れたのは。

『お客さん、何かお探しですか?』

灰色の長髪の青年、洗夜と会った美津雄は洗夜の第一印象はすぐに判断できた。

格好いい部類の顔、商店街の人達又はお客の主婦の人達から人気があり、最低限以上の人望を持つ青年。つまり、美津雄にとっては“大っ嫌いな人種”であった。

そんな中で先程まで自分と楽しくお喋りしていたと思っていた筈のりせが洗夜の背中に隠れ、自分へ見つめた事で美津雄は気づいた。

「?はい・いいえ」

『!……ナ、ナニヲ……!?!』

勇者ミツオに響く声。それは最初に見た美津雄?の声であった。

そしてその声と同時に現れる謎の表示に勇者ミツオは悪寒を抱いた。

『君には最初から何も存在しない。力も心も……全て。——だから真実を見せる。本当の“無”の君を』

【データ を 消去しますか?】

【?はい・いいえ】

【データ を 消去します】

『ヤメロヨオオオオオツ!!』

気付いて叫ぶも時すでに遅し。

勇者ミツオの身体は崩れ始め、同時に彼の中の何かも壊れて行くような気持ちも覚えた。

「久保のシャドウが……!」

「消えて行く……?」

勇者ミツオの身体が消滅して行くのを眺めながら悠と雪子はよく分からない幕引きを感じたが、それは幕引きではない。

それに気付けたのはヒミコを宿すりせだけだった。

消滅した筈の勇者ミツオの場所から別の“強い力”を感じ取ったりせはすぐに叫んだ。

「強い力を感じる……来るよー!」

りせの言葉に一齐に悠達も身構える。

そして勇者ミツオだった残骸の場所に“それ”はゆっくりと浮きながら出現し、その姿を見たメンバーは思わず言葉を失った。

「あれって……」

「赤ちゃんクマか?」

千枝がその存在を指さし、クマがその姿の事を口にする。

産まれたばかりの様に弱々しく見える小さな身体と手足。その姿は赤ん坊と言うよりも胎児に近く、そんな見た目に似合わない大きな力を持つシャドウ『ミツオの影』がその姿を現した。

「あれが本体だよ」

「けっ！ 中身は全く成長してねえって事かよ……あの姿は」

りせの言葉に完二は目の前のミツオの影の姿を見詰め、完二は複雑な思いを抱きながら表情を曇らせる。

完二ですらミツオの影の姿を見てそれがどういう意味なのか察する事が出来た。良くも悪くも成長せず、それにも関わらずそんな奴が人の命を奪った事に完二は怒りを抱く。

「誰からも認められねえつての辛いぜ……俺もそうだった。——けどな、相手から認められねえ理由に自分の責任が一割もねえって思つてる時点でテメエは変われねえぜ！」

完二はそう叫び、タケミカツチと共にミツオの影へ向かつて行った。

ミツオの影もその敵の姿に気付き、その小さな身体から力を放出させた。

「……大きな攻撃が来るー！」

「んな事は関係ねえ！」

りせの言葉に完二は怯まずに突き進み、ミツオの影は攻撃を放つ。

『オギヤアアア!!』

ミツオの影から放たれた攻撃はフロアの広範囲に及ぼす攻撃『空間殺法』で巨大な衝撃を生む。

勿論、すぐそばにいたタケミカツチは諸にその攻撃を受けてしまった。

「グオツ!?——なんのこれしきぐれえ!!」

しかし完二は怯まず攻撃を受けたまま進み、タケミカツチも同じく無理やり突き進み、己の巨大な武器をミツオの影の前で振り上げ、そのままミツオの影目掛けて振り下ろす。

強烈な一撃にミツオの影は叩き落され、そのまま地面にめり込んだ。

『オギヤア!!』

だがそこは大型シャドウ故にしぶとかった。

ミツオの影はタケミカツチの武器を無理矢理突破し、再び宙に舞い

戻る。

——瞬間、三つの影にミツオの影は壁に叩きつけられた。

「俺等を忘れんなよ！」

「よくも雪子にストーキングしてたな！」

「えっ……私、ストーキングされてたの？」

スサノオ・トモエ・アマテラスがそれぞれの武器でミツオの影を壁に叩きつけ、叩きつけられたミツオの影は瀕死の羽虫の様にフラフラと浮きながらその場から離れようとし始めた。

だが、そんなミツオの影の上空に沢山のミサイルが降り注ぐ。

『!?』

「オラオラオラア！ 逃がさないクマよお！」

今にも逃げだしそうなミツオの影へそうはさせまいとクマがやり過ぎレベルでミサイルをキントキドウジへ放ちさせた。

最早、ミサイルの雨である状況に爆風で徐々にダメージを追って行くミツオの影。そんな中、陽介達もその場から退避し始めていた。

「うおお!? 馬鹿野郎!? 俺等がまだいるだろうが！」

「やばいやばい!」

陽介達がクマに抗議する中、退避した頃にはミツオの影も身体中に焦げがこびり付きながらミサイルの雨から脱出する。

——その直後、ミツオの影の胴体に一本の刀が突き刺さった。

『!』

ミツオの影は何が起こったと困惑し、刀が飛んできた方向を見るとそこには構えていた悠が立っていた。

同時に己の身体に起こる異常にミツオの影は気づく。何故か力が入らず、技が上手く出せない。

それもその筈、ミツオの影に刺さっている刀は洗夜から預かっているシャドウを弱らせる刀。その場から逃げたくとも逃げられず、壊れたラジコンヘリのようにトリッキーな動きでフラつくミツオの影に巨大なシルエットが重なった。

ミツオの影は見上げると、そこにいたのは雷を浴びた大剣を振り上げるイザナギの姿。

「終わりだ……」

悠がそう呟くとイザナギは大剣を振り下ろし、ミツオの影を両断する。

肉体が二つに別れながら徐々に消滅して行くミツオの影。地面に落ちた頃には肉体は消滅し、その場に残されたのは気を失った美津雄だけが残っていた。



現在：稲羽市【町はずれの空き地】

「洗夜さんも参加して頂けませんか？……シャドウワーカーに」

「なに……？」

アイギスの言葉に洗夜は表情が険しくなり、美鶴達も驚きを隠せないで固まってしまった。

「お前な……俺はもうペルソナを制御する事は……」

「分かっています」

「なら見栄えの良いアンティークにでもなってもらうつもりか？ 悪いが、それに関しては自信はない」

洗夜は小さく笑みを浮かべながら軽口を呟くがアイギスの表情を真剣な物から変わらない。

「いてくれるだけでも良いんです……洗夜さんも『あの人』と同じ……私達に大切な事を教えてくれた人だから……」

「俺と『あいつ』は全く違うさ……」

洗夜はそう言つてアイギスの頭に軽く手を置き、そのまま横切つて行く。

その行動の意味する事、それは断りの意味。背を向けながら手を振り、別れを伝える洗夜を見て美鶴は思わず呼び止めた。

「待ってくれ洗夜！……何かないのか？ 私達がお前に出来る事は何も無いのか……？」

シャドウワーカーとしてではなく桐条 美鶴と言う一人の人間として美鶴は洗夜を呼び止めた。

彼女なりに我慢の限界であった。今までも洗夜と会いたかった事

を我慢するしかなかった彼女だが、再会してもこんな付き合い方を望んでいた訳ではない。

二年前の一件、あの不可解な件も自分達は真相を知らないのだ。全てに納得できない。

すると、洗夜は背を向けたまま美鶴へ返答した。

「美鶴……お前にとって“絆”とはなんだ？」

「絆？」

「……ああ。相手に優しくし、傷付けない様にして仲良くする事が絆か？」

洗夜のその問いかけに美鶴も明彦達も返答する事が出来なかった。と言うよりも答えが出なかった。

それが絆かと言えば美鶴達の答えはNOと言う。だが、直感的に美鶴はそれだけが洗夜が求めている答えではないと分かった。

そして暫く美鶴達が沈黙で返す中、洗夜は不意に何かを感じた様に足を止めて顔を上げた。

「せ、先輩……う？」

洗夜の雰囲気が変わった……つと、順平は直感的に分かった。

先程まで『人』の雰囲気だった。何の違和感もない純粋な人の気配だったが今は異質なものとしか見れない。

「俺の身に何が起きてるか……それは絆の力。ワイルドの可能性の力……」

全てを悟った様に洗夜はそう呟いた時、異変が顔を出した。

『p i i i i i i i i i i !』

この町はずれの空き地は廃品の置き場所であつた故に雑に積まれたテレビも存在している。

そのテレビの山から一斉に奇音が発せられ、電気も無ければケーブルも切られていて映る筈のないテレビに“それ”は映った。

灰色の長髪、見覚えのある背格好。それは誰が見ても鳴上 洗夜その人であった。

—— “金色の瞳”を除けば。

「っ!？」

見覚えのあるその姿に美鶴達は言葉を失う。

同時に周囲を見渡すと、周りに置いてあるテレビ全てに洗夜?の姿が映し出されていたが当の洗夜は特に驚いた様な様子はない。

寧ろ、悟っているように大人しく、そして虚しそうに見える。当事者である洗夜が黙る中、テレビの洗夜が代わりの様にその瞳を輝かせ、動き始めた。

『怒り、憎しみ、妬み……負の絆。傷の舐め合いの様な互いが傷付かない様な偽りの絆ではなく、互いに深い楔を入れて築く強き絆……』

洗夜の言葉は今までのどの時よりもハッキリとした口調で聞き取りやすくなっていた。

しかしそれは言わば、洗夜?の存在もハッキリしているとも言える事。洗夜?は確実に己の存在を強くしており、こうやってテレビを介して現実に現れている。

そんな光景に美鶴達は息を呑む中、怖いもの知らずと言うか感情的なのか順平が一番近くのテレビに詰め寄り、怒りの顔を顔にした。

「また出やがったな! 鳴上先輩の姿しやがって……何なんだよお前は!」

『ハハハ……負の絆、悪意によって刻む人の本質、望むべき絆。……忘れたくとも忘れる事も出来ない深い絆……真なる絆……』

洗夜?の言葉は順平の言葉とは噛み合っておらず、そのまま己の言葉を言い続ける。

——瞬間、順平の隣にあったもう一台のテレビの画面が割れた。

「へっ……っ!」

何事かと順平は隣を見ると、目に映ったのはテレビの画面を突き破る明彦の右ストレートだった。画面が割れた事でそのテレビからは洗夜?の姿が消えるた。

そして明彦はそれを確認し、テレビから腕を何事も無かった様に引き抜き、周りのテレビを確認するが他のテレビには未だ洗夜?の姿が映っている事に気付くと頭を捻った。

「むっ……これじゃ駄目な様だな」

何を思っただの行動だったのか。少なくとも明彦の思惑は外れたら

しく、未だに映る他のテレビに美鶴が近付いた。

「お前は……何なんだ？」

『……』

美鶴の言葉にテレビに洗夜？は一斉に今も黙り続ける洗夜へ視線を送り、金色の瞳の光を輝かせる。

『我は汝……汝は我……そして……影……真……な……る我……』

そう言っただけでテレビから洗夜？は一斉に消え、その光景をアイギスはただ黙って見守り続ける。

「そういう事だ……」

ここでようやく洗夜が言葉を発した。

まるでゲリラ豪雨の様に突然起こり、そしてあっという間に消えてしまった異変に美鶴達も我に返り、美鶴が洗夜へ近付こうとした時だ。

不意に美鶴の携帯に着信音が発せられた。掛けて来たのは部下の一人であり、美鶴は電話を出た。

「私だ。——なに……？」

部下からの電話に美鶴の表情が変わり、明彦達も一斉に彼女の方へ視線を移し、美鶴が電話を切るとすぐに問い掛けた。

「どうした？」

「……容疑者の少年の身柄をたつた今、確保した様だ」

美鶴のその言葉に明彦達の表情が変わる。だがすぐに悩むような表情を浮かべた。

理由は単純に洗夜だ。美鶴達がここに来たのは稲羽の事件についてであり、容疑者確保の情報を聞けば優先順位は洗夜よりも容疑者となる。

「またも話が全て出来ないのか美鶴達が思う中、洗夜が美鶴へ言った。」

「そろそろ帰る。……弟が帰ってくる頃だ」

そう言った洗夜の表情はどこか嬉しそうな笑みを浮かべていた。

容疑者確保がそんなに嬉しいのか、それとも……。

「まさか洗夜……この容疑者確保にお前の弟達が——」

「明彦」

何かを察して洗夜へ問い掛けようとする明彦を美鶴が止める。

洗夜は何も言わないが、それに関して笑みを浮かべているという事は、そういう事なのだ。美鶴は分かっており、無意味な結果で終わる問いかけを止めたのだ。

そして美鶴はそう言い終え、洗夜の方を見詰めた。

「洗夜……送って行く」

「……ああ、悪いな」

洗夜はそう返答し、美鶴達の手で自宅まで送ってもらった。

——しかし……。



現在：堂島宅【玄関前】

堂島宅前で降りた洗夜だったが、玄関前で不意に足を止めた。

「……キツネ？」

玄関前に佇む一匹のキツネ。目に傷、ハートのエプロンが特徴的なキツネだ。

野生ならば警戒するが、明らかに野生とは思えない姿と雰囲気。洗夜も困惑する中、洗夜の様子がおかしいと思った順平が車の窓から顔を出し、キツネの存在に気付いた。

「うおっ！ 本物のキツネ……マジでいるんっすね」

田舎町だから野生と順平は思っている様だが、同じ様にアイギスが窓から顔を出した時、キツネの放った鳴き声を聞いた瞬間、事態は変わった。

「コーン！」

「？……請求ですか？」

「なに……？」

その日、稲羽の人々は異様な光景を目にしたと言う。

金髪の美少女が仲介する様に間に挟み、青年とキツネが言い争っている光景。

肩を落としながらATMの前に立つ青年、それを監視する様に隣に

座るキツネの姿。

そしてその日、堂島宅から言い合いが聞こえて来たと……。

——その事と関係は不明だがその日、白鐘 直斗は洗夜に電話しても連絡がつかなかったらしい。

そしてもう一人……。

【伏見】

そう画面に写しながらずっと鳴っている携帯に洗夜が気付く事はなかった。

END

黒き仮面く鳴上 洗夜編く 第三十五話：愚者の旅先

現在：堂島宅【洗夜の部屋】

町が人が寝静まった頃、洗夜は布団の上で片足を曲げ、その上がった膝に手を置きながら座っていた。

別に眠れない訳ではない。だが洗夜がまだ起きていると変化は訪れた。

電源を入れていない筈のテレビが勝手に映る現象。それはマヨナカテレビとも違い、砂嵐を背景にした洗夜？の姿を映し出した。

『怒り……恨み……妬み……憤怒……復讐……悲しみ……全て自分で選んだ事。自らが負の絆を選び、周りを利用していただけ……己の心を埋める為にな』

「……」

金色の瞳を光らせて禍々しい笑みを浮かべながら洗夜？は呟くが、洗夜はそんな相手を見捨てる様にペルソナ白書を開いていた。

その開いたページには『スサノオ』と『ロキ』の名が記されていた。陽介のスサノオとは違い、本格的な日本神話らしい姿をした仮面と北欧神話のトリックスターの名を持つ仮面達だ。

「……」

『受け入れろ……も……う……全て……が……遅……い——』

その言葉を最後にテレビは何も映っておらず洗夜？も姿が消えた。それを確認する様に洗夜はテレビをジッと見詰め、そしてその後もう一度ペルソナ白書の先程のページを視界に入れた。

『■■■■』

そこには既に何も書かれておらず“白紙”のページとなっていた。そんなペルソナ白書を洗夜は認識すると、静かにそのページを閉じた。



7月31日（日）晴れ

現在：堂島宅【洗夜の部屋】

悠との壮絶な兄弟会議の翌日。テレビのニュースは美津雄逮捕一色で報道されていた。

家族への突撃インタビューは勿論、嘗ての同級生から絶対に関わった事のない様な赤の他人のインタビュー。

更には美津雄の嘗ての作文等も映されており、まさに我先にと言う感じの報道合戦である。

また、まるで物語の様な殺人である故に事件を前々から知っている者、そして知らなかった者までもが加熱し、未成年の学生だった事も手伝い、美津雄の事を分らない者は殆どいない。

己の逮捕によって美津雄の願いは叶った。色々な人間が彼の事を見ている。

——【殺人犯】として。

しかし、そんな中で洗夜はとある人物と通話をしていた。

それは昨日から着信を行って来ていた者からであり、洗夜からしても意外な人物からだった。

——その人物の名前は【伏見 千尋】と言う。

高校時代の付き合いであった彼女から連絡が来るのは予想外ではあったが、昨晚から多く着信があった以上、洗夜には無視すると言う選択肢はなかった。

そして互いに久し振りの挨拶をし、会話を行う。

「しかし、本当に久し振りだな。お前から連絡が来るなんて思ってたなかった」

『実は本題がありました……鳴上先輩にお頼みしたい事があるんです……』

「頼み……？」

洗夜は伏見の言葉を聞き始める。



話を聞いた冨夜は頼みの内容を頭でまとめると、今度修学旅行と言う名目で月光館学園に他校の生徒が来るとの事なのだが、他校の責任者の先生に不幸が起きてしまい急遽予定を修正し、学園の良いところとかをOBに言ってもらおうと言う企画が持ち上がった。

その事で冨夜にも参加を伏見は頼んだのだが……。

「それ……俺じゃなくても良いだろ？　と言うより、なんでわざわざOBが学園の良いところを言わなきゃいけない？　ただの自慢話になる……と言うよりもそういうのは在校生の役目だろ？」

『うう……確かにそうなんですけど……』

その言葉に少し申し訳なさそうな声になる伏見。

その声に冨夜も少し罪悪感を覚えるが、伏見の能力は冨夜も知っている為、いくら急遽の予定を作る事となったとしても伏見がこんな企画を出すとは思えなかった。

「……なにかあったのか？　生徒会長になったお前がこんなよく分からない企画を出すとは俺には思えない」

『そ、それが……』

冨夜の質問に対し伏見は、少し言いづらそうに口ごもりながらも静かに話し始めた。

『……最初、江戸川先生がなんか新たな薬品を作ったからその実習をさせたいと言ったんです。　そしたら、それを聞いた生徒会のメンバーがその提案を阻止する為に適当に言ったのが……』

「この企画か……」

——恐るべし江戸川。

冨夜は思わず頭を抑えた。

江戸川先生……嘗て、冨夜が在学していた私立月光館学園の保険医兼総合教師であり、普通の生徒からまあまあの人望を、一部の生徒からは熱狂的な人望を持つ教師である。

しかし、その知識の範囲は魔術・秘術・儀式・神話・薬品等々、オカルトや薬品技術に至るまでである意味で幅広く、嘗て調子が悪くなっ

た冨夜と『彼』も変な薬を飲まされた事もあった。

だが不思議と効果は良く、未だに江戸川先生の作った薬による事件は起こっていない。

伏見の話から察するに、二年たった今も相変わらずなのだろう。

『あと……江戸川先生、何故か鳴上先輩が来るかも知れないと伝えたら喜んでいました。』彼なら飲んでくれる。……そう言っていました……』

(未だに俺を忘れていなかったか……！)

どの生徒ならば協力的なのか記憶している恐るべき江戸川である。

伏見からそんな事を聞いてしまった冨夜は話を変える事にした。

「それより伏見……俺以外に何人来るんだ？ 流石に俺一人じゃないだろ？」

『今の所は鳴上先輩を含めれば三人ですね……』

「誰と誰だ？」

『それは……内緒です！ でも、鳴上先輩もきつと喜んでくれる人達ですよ！』

そう言いながら伏見は電話越しで嬉しそうな様子が想像できる様な明るい声を出し、冨夜も伏見の嬉しそうな意味が分からなかったがそれ以上は追求しなかった。

『あの……それで、鳴上先輩……来てくれますか？ 予定は9月7日なんで、出来れば前日に来て頂きたいんです……』
「つまり9月6日……か」

そう言いながら冨夜は机の上に置いてある黒色の写真立てを視線に捉えた。

部屋の電気は消しているがそれでも確かに見える写真を見て冨夜は、伏見のお願いに承諾すると言う事は再び”あの街”に行くと言う事を自分に問い掛けた。

(……俺はどうしたいんだ？ 断ればそれで終わりだが……これを見れば、あの場所に行く機会は二度と無いだろうな)

冨夜は悩み、そしてその結果を口にする。

「俺で良いなら……行ってもいい」

洗夜は考えた末にそう言った。

あの事件の始まりと終わりの町。洗夜が大事な物を手に入れて失った場所。

色々あったが、洗夜はあの街が好きだった。

それが洗夜を再びあの街へ向かう事を決めさせたが、それと同時にあの街へ行くのはこれで最後にすると覚悟を決めさせた。

そんな洗夜の言葉の裏にそんな葛藤がある事等分かる筈もない伏見は、電話の向こうで喜びの声をあげた。

『は、はい！ 詳しい事は後々、御連絡しますので！ 九時過ぎなのにありがとうございます!!』

『いや……礼を言うのは此方かもな。(もう一度、あの場所に行く機会をくれたんだからな……)』

『は、はあ……？ 良くは分かりませんが……それでは今日はこの辺で、御休みなさい鳴上先輩 』

『君もな伏見……』

それだけ言って電話は切れた。

再び静かになった部屋で洗夜は静かに溜め息を吐くと、自分が本当にその場所へ行くと言う事を言い聞かせる為に、呟く様に自分の行く場所の名を口にした。

「学園都市……人工島 辰巳ポートアイランド」……」



8月1日(月)曇り?晴れ

その日、洗夜は堂島と共に昼食を取っていた。

洗夜はバイトがなく時間に余裕があり、堂島も昼時間ぐらいは取れると言っていた。……と言うよりも、そう言っただけで洗夜を昼食に誘ったのは堂島自身である。

珍しい堂島からの誘いを洗夜が断る筈もなく、堂島が行きつけの蕎麦屋で食べ終えると入口に設置されている自販機から缶コーヒーをそれぞれ買い、二人は近くの公園のベンチで残りの昼時間を過ごしていた。

「まあ……たまにはこういうのも良いだろ」

まだ何も言っていない洗夜の疑問を晴らすように堂島はさり気なく、独り言の様にそう呟いた。

「確かにこういうの初めてだ……」

「なんだかんだでお前と二人、こういう時間が取れなかったからな……」

ただでさえ多忙だった中での怪奇殺人事件が重なり、堂島が洗夜と二人で何かする様な時間は殆どなかった。

家に帰れば適当な会話はするが、それは一歩踏み込むような会話ではない。

洗夜が既に二十歳とは言え、堂島からすれば十年以上会っていないかった甥っ子に過ぎず、甥と叔父としての家族としての会話も楽しめたかったのだ。

「ああ……その、なんだ……確か今年は大学を受験するんだっただな？」
「本音を言えばそこまで興味はない……けど後々、自由に生きるのに学歴は付きまとう。なら……そうするしかない」

何とか会話を見つけたのか堂島はやや口ごもりながら話し掛け、洗夜もそれに応える。

だが、どこか堂島の表情が暗い事に洗夜は引つ掛かりを覚えていた。

そしてそれは的を射しており、この会話も本音五割・建前五割であり、堂島が洗夜に聞きたい本音十割が確かに存在していた。

「そうか……だが受ける以上は手を抜くなよ？ お前が勉強している事も知っているし、受ける前とは言え合格に関しては気にしちやいな
いが、やる気も無ければ力も発揮できないからな」

堂島はらしくないと分かっているのか、自分の言葉に苦笑しながら言った。

叔父らしい事を言っただけを激励してもいるが、やはり何かを言いたそうにしているが言えない。

そんな反応を見れば洗夜も流石に気付いており、自分から切っ掛けを作ろうと考えた。

「……叔父さん。そろそろ本題に入ってもらって構わない」

「！……やっぱり気付くよな……」

洗夜に言われ、冷静になった事で堂島も自分の様子が変わったと思
い出しながら自覚し、気まずそうに肩を落とす。

「言い訳みたいだが……今回、お前を昼に誘ったのはその事だけの為
じゃない。純粹に叔父と甥としてお前との時間を作りたかったんだ」
「その事に関しては疑問を持ってない。……ただ、そんなに言いづら
い事なのかなってさ」

「それは……」

洗夜のハツキリとした言葉に堂島の表情が曇る。

刑事である堂島が身内とは言え、ここまで言葉を詰まらせるのも
中々に珍しい事と言える。

だが洗夜は堂島がこうなる時はどういう時か知っている。それは
家族として踏み込もうとする時にあり、自分の言葉で家族が傷付く
ではないかと思った時、堂島は臆病になってしまう。

(俺が言うしかない……)

洗夜は自分が架け橋を掛けようと決め、堂島へ聞き返そうとした。

——時だった。架け橋は意外な所から架けられる事になった。

「桐条」が今回の事件に介入したんですよ……洗夜さん」

背後からの声に洗夜と堂島が振り向くと、そこにいたのは直斗だっ
た。

突然の事で驚いたものの、洗夜からすれば聞きなれた声でありそこ
まで驚く事ではなかったが、堂島は別である。

「白鐘……！ お前……なんでここに……？ つて言うか、盗み聞き
してやがったな？」

驚いた表情でそう言う堂島だが徐々に表情に怒りが現れた。

聞きたい話の本題はまだ言っていないにしろ、今は叔父と甥っ子二
人の時間でもあった。

そんな時に空気が読めないと言うか、赤の他人に踏み込まれて良い
気分は堂島はしない。

「その事に関しては申し訳ありません……が、堂島刑事も聞きたかつ

た筈ですよね？ 洗夜さんと桐条の関係を……」

申し訳ない気持ちはあるらしく直斗は気まずい感じに帽子を深く被り直す、その表情はすぐに真剣なものに戻して洗夜と堂島へ視線を戻す。

申し訳ないからの堂々とした直斗の態度。それを見た堂島は「もう一つ」気付く事ができた。

「……お前。さてはお見合いの話も聞いてたな？」

堂島はそう言っただけで鋭い眼光で直斗を射抜く。

帰って来てからその事を話したの相棒の足立にだけであり、良くも悪くも口の軽い足立が直斗に言い包められたのだと堂島は想像に容易かった。

「それも否定しません。……ですが、堂島刑事も洗夜さんに聞きたかった筈ですよ？ 桐条の事で……」

「！……それは……だな……」

直斗の言葉に堂島の表情が曇る。

ハッキリ言っただけでそれは正しく、洗夜にそれを聞きたかった思いがある。

堂島はそれを言われた事で嘘だとは言えず、表情を曇らせ続けていると洗夜が静かに立ち上がった。

「……」

「洗夜さん……？」

「少し歩いた方が良い。叔父さんが昼休み終わりに署に戻れなくなる」

洗夜のその言葉に堂島と直斗は互いに顔を見比べた後、静かに頷くのであった。



現在：稲羽市【警察署への通り】

洗夜・堂島・直斗の三人は警察署に行く道を歩きながら先程の話の続きを行っていた。

「……つと言う事で更に言えば桐条と言うよりは、桐条主体の政府公

認の特殊部隊——【シャドウワーカー】がこの事件を裏で捜査し始めたんですよ」

直斗は堂島と並んで歩きながら前を歩いている洗夜の背中にそう語る。

「だが……俺から言える事は殆ど何もない——美鶴達とは確かに友人だったが、その後にアイツ等が起こした事までは把握なんか出来ない」

本当は美鶴達にシャドウワーカーに誘われたが、今はその事をが直斗に言わない方が良い。

直斗の手伝いをしていると言っても、洗夜もわざわざ場がややこしくなる様な事を言うのは気が進まず、そう思いながらシャドウワーカーの事は無関係と言い張る事にした。

事実、殆どシャドウワーカーについては知らないのだから真実と嘘が両方あって丁度良い。

——しかし、それで直斗が納得するかどうかは別問題。

「シャドウワーカーの事に関してはそうでしょうが——“桐条”そのモノに関してはどうでしょうか？——【南条】から独立し、自分達だけで得た桐条の力は良くも悪くも大きい……堂島刑事だって御存じでしょう？」

「……つたく、一番言いづらい所で振ってきやがつて」

直斗の言葉に堂島はぼつが悪そうに頭をかき、足を止めて溜め息を吐きながら語りだした。

「……警察関係者の間じゃあ有名な話だ。自分達が捜査している事件に、もし桐条が関わっているなら上の連中から圧力を掛けられ、事件は揉み消されるってな」

「そういう事って……刑事の叔父さんが普通に言っただけのモノなの？」

堂島が足を止めた事で洗夜も足を止めて話を聞き、刑事である堂島がそんな話をして良いのかと洗夜は尋ねる。

事実を知っているとはいえ、洗夜は噂の様な内容を堂島が信じているように話すのが珍しくも思っていたからだ。

だが、洗夜の言葉に以外にも堂島は特に表情も変えずに続ける。

「言つたろ？ 関係者の間じゃあ有名だつてな——最初は噂程度だったが一時期、桐条の関わる事件に手を出した奴が上の指示を無視して捜査した結果、左遷させられ表舞台から消されたって話があった。……それ以来、口には誰も出さないが……公然の秘密みたいになつてんだ。まあ、こんな田舎の警察には関係無い話だったかな」

そう言つて堂島は話を戻すかの様に直斗を見詰める中、その話を聞いた洗夜はその内容に心当たりがあった。

——黒沢巡查……。

嘗て、自分や『彼』と結構良好な関係を築いた交番の警官の事を洗夜は思い出す。

見た目が恐いが中身は優しくかつた人であり、色々とサポートをしてくれた人だ。

学園都市を去る際に挨拶したのを最後に何の音信も無い。

だが、桐条が原因で左遷させられた黒沢巡查はあの事件に大きく貢献したのは事実故、恐らくは酷い扱いを受ける事はないだろう。

そして洗夜がそう思いながらボくとしてた時だった。

「……それで、結局あなたはどの程度まで知っているんですか？——洗夜さん」

不意に言葉の照準を自分に向け直す直斗の声に洗夜は我に返る

「だから知らない。シャドウワーカーとか言われても俺には分からない。どちらかと言えば叔父さんの方が知っているんじゃないのか？」

「……いや、俺もシャドウワーカーなんて特殊部隊の名は聞いた事はない。——分かっているのは桐条の力だけだ……現にうちの署の署長は桐条相手に既に尻尾を振っている状態だからな」

堂島はそう言つて思い出したようにし、うんざりした様に溜め息を吐く中、直斗は話を続けた。

「知らないという割には色々タイミングが良いと思いませんか？

この事件の今まで桐条が介入する予兆はありませんでしたが……あなたのお見合いの直後に介入してきた。——更に言えば、あなたは友人でも桐条と親しい方ですよね？」

「……俺が美鶴達に何か言ったと言いたいのか？」

如何にも疑っています。と言わんばかりの直斗の態度に洗夜の視線も険しくなり、直斗も迎え撃つ様にその視線を受け止めた。

一触即発までとは言わないが、少し空気がピリ付いているのを堂島も察してはいたが、それを口に出して止める事まではしなかった。

——否、出来なかった。

(白鐘は前に言っていた……洗夜はちよつとした協力者だと)

堂島がそれを知ったのは本当に偶然だった。

あまり事件以外で周りと関りを持たない白鐘が、何故か洗夜が共にいるのをよく目撃されているのが気になった堂島が直斗に尋ねたの始まりだ。

『洗夜さんとは事件についての簡単な協力者の関係です』

堂島にとつてはまさに寝耳に水であった。

悠達とは違って怪しい行動も洗夜には見受けられなかった事もあり、堂島が直斗を問い詰めると直斗は一瞬だけ意外そうな表情をしながらもすぐに平常心となり、堂島へ説明をした。

『鳴上 洗夜は——』

——何かを知っている。

テレビ報道された人物が誘拐される事。天城雪子の件等を始め、洗夜が色々と知っているのは直斗からすればそれなりに不可思議な事であった。

勘が鋭いやら偶然やらで洗夜は片付けたが、少なくとも直斗はそれだけとは全く思っていなかった。

しかし、だからと言って洗夜が犯人とも思えず、犯人の共犯者の証拠もない。

だが——。

——鳴上 洗夜は事件について何かを隠している。

それが直斗の出した答えであり、洗夜が自分達に敵対している訳ではないが、他に隠している事もあると踏んでいる。

洗夜と接してきた直斗が洗夜との会話で今まで感じて来たの“一線”である。

一線を引かれている。それが直斗が感じて来た思いであり、洗夜が事件に関わっている可能性を聞かされた堂島も悩んだ。

(悠もそうだが……洗夜までも。だが……洗夜は桐条とも繋がりがある。——それ関係なのか?)

今まで悠達には何度も疑う機会があつたが、その裏に洗夜がいるとは思つても見なかつた堂島。

そんな堂島が選んだ選択が直斗からの問いに対する“洗夜の反応”である。甥っ子の様子を見守り、真実を見極める事を選んだのだ。

「洗夜……」

最後の弱音なのだろう。堂島はどこか不安そうに甥っ子の名を呟く。

「洗夜さん……別に僕は貴方を責めている訳ではありません。これは信頼の裏返しとでも思つてください。——僕は知りたいんですよ……貴方が隠している事——」

——非現実。

直斗の言葉を遮つた言葉。洗夜の声で放たれた言葉に遮られ、その言葉に全てを呑まれた事で後に残るは沈黙だけ。

ピシヤリと言われた言葉に呆気になる直斗と堂島の二人。だが二人の先を歩んでいる為、背を向けている状態の洗夜はその顔を見ないまま語り始めた。

「この事件に非現実が関わっていたらどうする? 都市伝説の様な……心霊現象の様な……本来、俺達が踏み込めない世界がこの事件にあつたらどう思う?」

「っ!——何を?!」

直斗は洗夜の言葉に我に返ると、すぐに非難するかのように険しい表情を洗夜の背へと向けた。

なんだかんだで直斗は真剣に聞いている。だが、その答えが非現実やら等の訳の分からない言葉であつた。

直斗だけではなく、堂島も何を言っているんだと言うかのように困惑した表情を浮かべていた。

——その時だった。一瞬、洗夜の身体がブレた様な歪んだような光

景を直斗と堂島は目撃した。

「！」

「……？」

直斗は目の錯覚かと瞬きをし、堂島も疲れ目かと軽く目を閉じて撫でる。

しかし、それは錯覚ではなかった。洗夜の身体から二重に見える様に何か微妙かに存在していたのだ。

——アイテル。黒き愚者が微かな存在を示していた。

「愚者は迷いに魅入られ……抜け出す事を諦めた」

背中しか見せずに洗夜はそう呟き、そんな背しか見れない直斗と堂島はやや不気味さを覚える。

背しか見えない故、洗夜の表情が想像できないの原因だ。

また目の前の現象も影響を与えている。目の前の現実なのか、目の錯覚なのかも分からない事が二人に混乱を呼んでいた。

そして、混乱の中で二人を非現実が？み込み始めようとする。

——瞬間。

「そこまでに致しましょう」

直斗と堂島の目の前に不意に姿を現す存在。

幻想的な青を強調した服を纏う銀髪のエレベーターガール——エリザベスが洗夜の背から肩に右手を置いていた。

その行動はまるで落ち着かせているようにも見え、洗夜もエリザベスの存在に気付く。

「悪い……迷惑をかけた」

「いえ……大事にならずに済んで良かったです——あまり……ご無理をなさらず」

エリザベスは心配と不安を混ぜてそう言うと洗夜から手を放し、直斗と堂島に一礼して二人を横切って行く。

そしてエリザベスが横切った事で直斗は我に返り、すぐに背後を向く。

「あの——ッ！」

直斗はいつの間にか現れたエリザベスに興味を引かれたが、振り向

いた時には既にエリザベスの姿はそこになかった。

「そんな……」

「……疲れてんのか？」

直斗も、我に返って同じ様に振り向いた堂島も頭が付いて来ない。

目の前にいた人間が僅かな時間で消え、更に先程までの現象が消えた事で先程までののは夢、幻だったと思えている自分に複雑な思いを抱く中、直斗は向き直して再び冴夜の方を向いた。

「冴夜さん……い！」

「時間だ」

直斗の声に冴夜は一言そう言った。

そして冴夜のその言葉に堂島は自分の腕時計を見ると、既に時間は12時50分を過ぎていた。

残念ながら時間はここまでだ。

「もう戻らなきゃならん」

「じゃあ俺も……」

そう言つて冴夜はその場から去って行く。

そんな甥っ子の背を見詰めながらも堂島は頭を切り替える様に左右に振り、署の方へ駆け足で向かって行く中、直斗だけは最後まで冴夜の背を見つめ続けていた。



それから約一月程、時は流れる。

所謂、夏休みの期間。悠達は夏休みを堪能しながら宿題やテレビの世界を歩き来して過ごしていた。

いつの間にかジュネス以外にも堂島宅に集まるのが普通の様になり、陽介達が堂島宅にいるのも珍しい事ではなくなっている。

それは結果として良い方向であり、菜々子が寂しい思いをせずに済んでいたりにしていた。

そして冴夜もそんな彼等にバイトの合間などを利用して菜々子の宿題と一緒に教えたり、美鶴達やエリザベスと共に稲羽の町を過ごす等、色々とした日常の中を歩いていたりした。

夏休み・海・スイカ、堂島共々、色々と巻き込まれる事もあったが、時期が九月に近づくに連れて美鶴達も部下を残して一旦は稲羽を離れるなど、ちよつとした変化が稲羽を訪れたり去ったりしている。そして、その去る変化の中には洗夜の姿もあった。



9月6日（火） 晴れ

現在：稲羽駅

「それじゃ色々作り置きしてるからカップ麺以外にも食べてくれよ？ あと、燃やせないゴミは今度から火曜日に変わったから。それと、寝る時はちゃんとガスの元栓と戸締まりをしつかり。それから――」

まだ朝早い時間、大きなスポーツバックと刀の入った袋を右肩に乗せながら洗夜は車の外から車内にいる堂島と学校の都合で休みの菜々にそう話していた。

早いものでもう9月6日だが、それまでまた色々であった。

なにせ、弟と修学旅行へ行く様なものなのだから。一昨日になって洗夜と悠達はお互いに向かう場所が同じだと判明した。

判明した時の様子は十人十色の反応だったが、洗夜と絆が深くなり尚且つ、洗夜が月光館学園の卒業生だと言う事が分かった事で少なくとも全員が喜んでいた。

暇があったら洗夜に案内等をしてもらおうと言う事だ。

そして修学旅行前日、洗夜は準備等の為に修学旅行で来る悠達よりも一日早くに月光館学園へ着かなければならず、時間の都合でこんな朝早くに稲羽を出なければならなかった。

堂島宅を出る前に長持ちする料理を作ったり、ゴミの日についてもメモを残したりして後は電車に乗るだけなのだが、洗夜はやはり心配になり現在に至っている。

そんな洗夜の姿に堂島と、お見送りをすると譲らず付いて来た菜々子も苦笑しかでない。

「洗夜……大丈夫だから早く行け。そろそろ電車が来るぞ。――つうか、なんで“木刀”を持っていくんだ？ 枕じゃねんだからよ」

「洗夜お兄ちゃん……菜々子達は大丈夫だよ？」

そう言う二人の言葉に漸く洗夜は心配しながらも車から離れた。

「……それじゃあ、本当に行くけど……本当に大丈夫？」

「大丈夫だからさっさと行け……」

しつこい洗夜に堂島は苦笑以外でない。

まるで日頃、自分達が何も出来ないと思われているかの様だからだ。

食生活とか安定したのは事実だが、洗夜と悠が来る前はこれが普通だったのだから問題はない。

そう思いながら苦笑気味にそう言った堂島の言葉に洗夜はやつと駅へ入って行った。

「それじゃあ、土産期待してくれ」

「洗夜お兄ちゃんいつてらっしやい！」

菜々子の言葉に手を振って答え洗夜は、駅の中へと消えていった。

そして、いきなり静かになった空間が嫌だったのか堂島は洗夜が出てこないのを確認するとすぐに車を出した。

「洗夜お兄ちゃん……大丈夫……かな？」

洗夜を見送ると言って聞かなかった菜々子だが、やはりまだ眠いのか目をこすりながらそう言った。

「……アイツなら大丈夫だから、お前は寝てなさい」

「……うん」

堂島の言葉に菜々子は小さく頷くと静かに目蓋を閉じ、その姿に堂島は一息入れて運転を続ける。

菜々子が洗夜を心配するのも無理はなく堂島も理由を理解していた。

今日までの間、やたらと洗夜が上の空である事が多かったのだ。

この間も菜々子と堂島の弁当を間違え、堂島に可愛らしいキャラ弁が、菜々子にはガツツリした弁当を渡してしまった事もある。

そのお陰で日頃のイメージは改善されてしまい、一部の刑事、婦警と何故かお弁当会が開かれてしまった。

そんな事を堂島は思い出していたが我に帰り、再び運転に集中す

る。

——が、すぐに別の事を思い出してしまう。

(あの時ののは一体……)

堂島が思い出すは8月1日の事、あの時に目撃してしまった異常な光景であった。

ただの疲れと思つて無理矢理に考えない様にしていたが、思い出す度にやけにリアルだつたと思つてならない。

あれから直斗も何か考える様になつたり、桐条も更に鳴りを潜める様に裏で調べ始めている。

(何だつてんだ……)

この田舎町に突如投げられた“連続怪奇殺人事件”と言う名の爆弾。

冴夜と悠が来た時期ともあつて色々と堂島にとつても特別な事件でもあつたが、気付けば事件の裏に甥っ子の影・警察上層部からの探偵・桐条率いる特殊部隊。

——何かがおかしい。

堂島は事件の中で“引つ掛かり”を覚えていた。

世間や警察は美津雄逮捕で事件終息と思つているが、堂島はそういう事は出来なかつた。

(諸岡殺害は久保だが……最初の二人は?)

諸岡殺害の証拠はいくらでも出ている。最初の二人の事件では警察が手を抜いていたのではないかと思う程に。

(色々と気になるが……)

今考えても仕方ない。そう結論を出す事で堂島は運転に集中し直し、自宅へと戻つて行つた。



数時間後。

現在：とある乗り換え駅。

冴夜は現在、稲羽から幾つか離れた駅で降りていた。

ここからは乗り換えをしなければならず、少し面倒だが降りなければ

ばならない。

だが乗り換えれば、後は辰巳ポートアイランドまで乗り換えなしで終点まで寝ていられる。

費用も既に伏見を通して学校から受け取っている為、困る事もない。

洗夜は荷物を整えながら乗っている電車を降り、乗り換えの電車に乗ると適当な席を見付けた。

四人が座れる座席だったが誰もいない為、洗夜は棚に荷物を置き、刀の入った袋を持ちながら窓際の座席に座ると刀に身を任せながら外を眺めながら昨夜の事を思い出す。

『刀は持つて行くべき』

昨夜、悠は突然部屋に來ると、そう言つて刀を返して來た。

突然の事に理由を聞いても“なんとなく”やら“勘”みたいな事を言っていたが、悠には辰巳ポートアイランドが前のシャドウ事件の場所である事を伝えていたからかも知れない。

(何も起きはしない……起こさせないさ)

今は止まっているが、やがて電車は動き出した事で景色も動きだし、洗夜はそう心の中で眩きながらいつの間にか眠ってしまった。

次に目を覚ましたのは巖戸台駅だった。



現在：巖戸台駅

電車の音声と共に扉が開く。それと同時にぞろぞろ電車から出る人々。

個の存在を意味など成さないかの様な人混みの中に洗夜も混ざりながら歩く。

この時だけは自分もペルソナ使いではなく、どこにでもいるただの人間でいられる様な気がする。

洗夜はそう思いながら次の目的地へと足を進めながら久し振りの駅の光景に心の中だけで笑みを浮かべていた。

(二年振りか……)

嘗ては何度も訪れていた巖戸台駅。そこに着いた洗夜が次に向かうのは接続駅である為に存在するローカル線だ。

それに乗り換え終点であるポートアイランド駅へ向かい、母校である月光館へと向かわなければならぬ。

(余裕だな……)

左手の腕時計を見ながら洗夜はそう呟いた。

伏見から指定されていた時間には余裕があり、このまま行けば何事もなく辿り着けるだろう。

元々、江戸川の家を潰す為の企画となっている以上、自分や他のO・B・OG達はいてくれるだけで良い。

申し訳なさそうに伏見がそう言っていた事もあり、特に心配する事も洗夜にはなかった。

(行くか……)

まだ時間はあるが、あとちよつとで出るモノレールがある。

ここで時間を潰すのも良いが油断して遅れるのは防ぎたい。ならばポートアイランド駅で時間を潰した方がまだ安心できる。

洗夜は人混みの流れに混ざり、その流れに身を任せる様に歩き出した。

「……」

何事も起こらない。

周りの毎日が同じ日常である人々の流れに混ざりながら辺りを見回し、洗夜はそう思いながら進んで行く。

——瞬間、洗夜は不意に後ろから手を掴まれた。

▼▼▼

彼女にとってそれは偶然だった。

昔、引越してしまった親友と泊りで遊び、その翌日の早朝に電車に乗った。

他の友人達と集まる約束をしていた為、その場所へ向かう為だった。

乗り換えも特にはなく、人も少なかった事で安心して座る事が出

来、彼女は静かに眠りに着いた。

『巖戸台駅〜巖戸台駅〜です。御降りのお客様はお忘れ物のない様に
ご注意ください』

(「…………もう着いたんだ」)

どうやら深い眠りに入っていた様だ。

アナウンスで目を覚まし、気付いた時に目的地までの間が短く感じ
てしまった。

「んっ……………」

座ったまま伸びをし、彼女は他のお客様が降りるのを待つことにし
た。

今乗っている電車はこの駅が終点であり、乗って来るお客はいな
い。

自分と同じ様な考えをしている人も多く、一部のお客は他のお客の
様子を見ながら荷物をまとめている。

また自分の隣に座っているお客もその一人だろう。彼女はそう
思った。

自分からは座席の背もたれ側である為、姿は見えないが気配はあ
る。

(この人や他の人が行き始めたら私も行こうかな…………)

彼女は三つ編みにしている自分の髪を整えながらそう思い、手回り
の荷物を確認していつでも降りられるようにした時だ。

不意に隣のお客が立ち上がり、彼女は思わず見上げた。

——瞬間、世界が止まった。

「えっ……………」

それは一人の青年。灰色の長髪が目立つ、スポーツバックを肩に掛
ける一人の青年だった。

しかし彼女にとつてはそれだけの存在ではない。

——二年振りでも分かる程だった。

「どうして……………っ!?!」

突然の事に思わず涙が出そうになるが、青年が自分に気付かずに電
車を降りた事で彼女はすぐに我に返り、急いで荷物をまとめて降り

た。

(どっ……！)

急いで見渡すが既に青年の姿はどこにはいない。

視界に映るのは沢山の人の流れ。この中で目的の人物だけを見つけるのは困難としか言えない。

——だが。

(↑……そうだ)

彼女はすぐに思い出す。

青年とはいつも登校していた。だから行動が昔と変わらなければ……。

「！」

——見つけた。

人の流れの邪魔にならない柱の傍、昔と同じ様にそこに立ちながら人の流れを見ていた。

しかし、青年は腕時計を見るとその場から移動を始めた。

だが、彼女も次は見逃す事はしない。ここで見失えば本当に会えない気がしたからだ。

——二年前の様な別れは望んでいない。

青年が人の流れに入ると同時に彼女も流れに入り、ずっと青年の背を捉え続ける。

仲間達とこの町に会う約束がされた今日。これは偶然ではなく運命としか思えなかった。

だからこそ——。

——彼女は。

——【女教皇】は。

——『山岸 風花』はその手を掴んだ。



現在：ベルベットルーム

「おや……っ？ どうされましたかな？」

「エリザベス……?」

イゴールとマーガレットに背を向けながら不意に立ち上がったエリザベスは二人の言葉に振り向かずには答えた。

「……少し出掛けて参ります」

「またなの? 今度は何処へ行くつもり?」

「っーん……でございます」

正す様にエリザベスに言うマーガレットだが、エリザベスは反抗する様に言い返す。

そんな妹の姿にマーガレットは呆れた様に溜め息を吐くが、イゴールは全てを分かっているかの様に笑い出した。

「ヒツヒツヒツ……! あの街に向かうのですか……気を付けて行くのですよ」

「はい。主様……」

イゴールの許可に頭を下げるエリザベス。

その言葉にマーガレットもエリザベスが何処へ行こうとしているのかが分かった。

「もしかしてエリザベス……あなた、あの街に行く気なの? でも、なんで今更……」

「ヒツヒツヒツ……! 何かを感じましたかな……」

二人の言葉にエリザベスは顔を横へ向けて二人の方を向くと、小さく笑みを浮かべると彼女は右手の人差し指を立てる。

その指の先には20枚のアルカナカードが回っていた。

「はい……再び回り始めた彼の旅の結末。その一つを私自身に刻み込む為に……」

エリザベスはそう言ってベルベットルームから姿を消した。

END

第三十六話：目覚めし抑圧

現在：巖戸台駅

「風花……？ 山岸風花か……！」

「はい……はい……！」

突然、腕を掴まれて振り向いた冴夜。

そんな彼が振り向いてその目に写したのは忘れる事の出来ない一人。成長して女性となった山岸風花だった。

二年振り、そして髪型や顔つきも変化しているとはいえ面影はあり、冴夜が見間違う事はない。

それを証明するかの様に、冴夜の問いに風花は嬉しそうに、そして泣きそうになっている様な潤んだ瞳で頷いた。

「なんで……？」

「偶然でした……本当に偶然でした……！ でも、それでも……！」

走って追いかけて来たのだろう。

風花の息はやや乱れており、それでも何とか声を振り絞って言葉を吐き出し続ける。

まるで、言うのを止めれば冴夜が再びいなくなってしまうと思っ
ているかの様に。

「そうか……」

冴夜は風花の必死な様子に一息入れる様に呟いた。

今でも掴んだ自分の手を離そうとしない風花。そんな姿に冴夜は覚悟はしていたとはいえ、実際に味わうと違う気持ちの重さ。そして風花の想いに罪悪感が拭えなかった。

「だが……」

色々と考えたり言ったりしたいが、残念ながら冴夜と風花の二人がいる場所はそんなゆっくりと出来る場所ではない。

混み合う駅。その人混みの中なのだ。

『』

』
洗夜と風花の様子に気付いたのか、チラチラと二人を見て何やら話し出す人々も現れ始める。

事情を知らないとはいえ、無関係な第三者からすればどうとでも解釈されてしまう。

このままでは面倒事にもなり兼ねず、周囲の視線に気付いた洗夜は諦めた様に風花の手を握り返した。

「場所を移すか……風花。ここだと互いに落ち着いて話せないからな」

「！」

それは風花がもぎ取ったチャンス。過去を知る為の権利を得た事を意味している。

そんな風花が洗夜の言葉の意味を理解できない筈もなく、静かに、だが力強く頷くのだった。

▼▼▼

現在：喫茶店

洗夜と風花は何とか周囲からの視線に耐え、最寄りの喫茶店へと入店した。

席は窓際であるがフロアの隅。客数が少ない事も手伝い、二人にとって“色々”と話すのには好都合な環境であった。

互いに注文した飲み物と洋菓子もテーブルに置かれ、この喫茶店に存在する権利を得ると同時、二人の会話も始まりを迎えた。

「二年振りだな。——いや、そんな話は聞きたくないか」

「……はい」

洗夜の言葉に風花は小さく頷いた。

「二年前、どうして……突然、いなくなっただんですか？」

顔を下に向けたまま、風花は悲しそうな表情を浮かべながら言った。

最悪、このまま涙が零れてしまうかもしれない。だが、だからこそ下を向いたままその表情を見せない様にする。

それが風花なりの微かに残った強がりだった。

「……卒業したんだ。寮から出て行くのは当然だ。——この理由じゃ駄目か？」

「……はい」

冼夜の言葉に風花は頷く中で、ある事に気付いていた。

それはどこか真剣ながらも、冼夜のその話す口調には自分を和ませようとしている事だった。

このままではあやふやに話を躲され、そのまま冼夜にこの場を去られてしまう。

「どうして……話してくれないんですか？」

「……話したくないからだ」

直球で風花は聞いてみたが、冼夜もそれを真つ正面から受け止めた。

——しかし、そう言った冼夜だったが、表情を困った風に笑いながら仕方ない様に息を吐いた。

「けど……いつまでも言わない訳にもいかないのだろうか」

「えっ……？」

まさか聞けるのだろうか。先程までそんな流れではなかったにも関わらず、諦めた様な口調で呟いた冼夜の言葉に風花は戸惑う。

だが、そんな風花が戸惑う中で冼夜は話を始めたのだった。

「風花……俺はもう——」

何かを言おうとした、その時の冼夜の表情を風花は忘れる事は出来ないだろう。

それは強く風花の印象に残り、覇気のない冼夜の声もあつて彼女は声が出せなかった。

「……お前達とは一緒にいられないんだ」

冼夜はまるで憑き物が取れた様に爽やかに、そして同時に困った様な笑顔でそう呟いた。

そこからは風花は話が終わるまで何も言う事ができなかった。



その頃。

現在：辰巳ポートアイランド【駅前広場はずれ】

薄暗く湿気臭い駅の外れ。そんな場所にいる者達は御世辞にも柄が良いとは言えず、全員が髪を染めて目付きが悪く下品な笑い声をあげる男女の若者ばかりだった。

人数は五人。男三人、女二人だ。

しかし、今のこんな状態でも冴夜や明彦が見れば昔よりマシだと言うだろう。

冴夜達が卒業した後に変化でもあったのか、昔よりはそんな若者の人数が減っており、そんな昔よりはマシになった駅広場の外れに新たに青年が一人、足を踏み入れる。

すると、そんな青年の姿に若者達も一斉に視界へと入れた。

「……おいおい」

青年を見た若者達は一斉にその容姿によって言葉を失った。

その青年はボロボロのニット帽を深く被っている為、顔の全ては把握しづらいが恐らくは二十代だと思われる。

しかし、青年の姿は異質だった。

何がとは言いつらいが、まずはその格好だ。まだ気温が秋に成っていないこの時期にも関わらず、ニット帽同様に少し傷が目立つ赤いコートを身に纏っており、そのコートの端に茶色というよりも銅の様な色の鈴らしき物も付いている。

だが何よりも一番目立つのは青年の容姿ではない。それは肩に掛けている自分の頭二つ分も長い何かが入っている布袋だった。

明らかに普通ではなく足の歩みを止めない青年の姿に、先程の若者達は最初は驚いた表情で青年を見つめていたが、やがて意地の悪い笑みを浮かべて青年へ近付いた。

「おいおい。そこのお兄さんちよつと待ってよ」

「そんな格好と変な物を持って此処に何の様だあ？」

「ちよつとやめなつて……ハハ！」

数が多い事で気が大きくなり、青年を囲む様にして絡み始める若者達に青年も一瞬、足を止めたが当の青年はそれ以外は一切リアクシヨ

ンを見せない。

それ所か、まるで何も無いように黙って二人の若者の間を挟じ開ける様に再び歩き出した。

「なっ！ おいつ!?!」

「シカトしてんじゃねえよっ!!」

青年の反応に若者達は、まるで自分達を馬鹿にされた様に感じると一人の少年が青年に向かって殴りかかった。

明らかに暴力沙汰だが、そんな様子に慣れているのか周りの若者達はニヤニヤと笑みを浮かべて少年の行動を止める気配は全く無い。

若者達全員が、殴られる青年の姿を想像していた……勿論、殴りかかった少年もそう思っていた。

——だが……。

「——!」

殴りかかってくる少年に対し青年は、無駄の無い動きで振り返りそのままカウンターの様に少年に頭突きをかました。

結果、殴りかかった時の勢いも助け、強烈となった頭突きをもらうに当たった少年はそのまま地面に倒れる。

「ぐわあああつ!!? ふあな……ふあなが……イヘエ……イヘエよ……!」

さっきの勢いは何処へ行ったのか、少年は鼻を抑えながら泣き叫ぶ。

濡れた様な感覚で息もしずらく、鼻血も流れている。そんな少年の様子に、他の若者たちは思っていた光景とは違う現状に驚きを隠せず、化けの皮が?がれた。

「なっ!」

「えっ!?!」

若者達には初めての経験だった。

人数も多く、明らかに不良と思われる服装や姿にも関わらず相手が一切怯まず向かって来ると言う事態。

先程と打って変わり、地面に平伏す仲間の姿を見て表情に恐怖の色を浮かべる若者達に、今度は青年が口を開いた。

「——おい」

「!?」

思ったよりも迫力のある青年の声に、若者達は全員身体をビクつかせながら青年の方を向いた。

「二度なら許す……分かつたら俺に構うな。そして——ここに二度と来るんじやねえ!」

青年はそういう言い放ち、睨みだけで人を殺せるのでは無いかと思う程の眼力で若者達を黙らせた。

そして、その青年が後に見たのは自分に恐怖し逃げ出す若者達の姿であった。

——数分後。

青年は誰もいなくなった場所の段差に静かに腰を掛けた。

元々、この場所に青年が来た理由はあまり大した事では無い。

ただあまり人が近寄らず個人的に他よりも落ち着けるマシな場所。それを考えた結果がこの場所だった。

「……情けねえ」

静かになったこの空間で青年はそう呟く。

この言葉は先程の若者達に言っている訳では無く、青年は自分に言っているのだ。

力で先程の若者達を振り伏せた事、元々は先程の若者達もろくな事をしていた連中では無いだろうが、青年の目には泣きながら自分に恐怖の視線を向けて逃げる若者達の姿が焼き付いている。

力だけしか何かを解決出来ない事に青年は呆れていた。

(あの時……俺はこうして生きていく事を覚悟した。だから……揺れるな)

親友が助けてくれた命。生きるつもりはなく、償いの為に命を粗末に使い続けた自分にその親友は言った。

——生きる!

(簡単に言ってくれやがる……)

それは思っている以上に辛く大変な事。

青年は親友の言葉を思い出し、心の中で面倒そうに呟くが口元は嬉

しそうに笑っている。

(二年振りか……)

この二年、青年は“償い”の為に命を燃やした。

自分の命を助け、未来に生きる様に言った親友の事を考えればそう生きる事を望んだからだ。

他にも理由はあるが今青年が思っていたのはその事だった。

(電車にいやがったな……思ったより元気そうだったが、何処かおかしくも見えた)

青年はそう思いながらコートに付けていた傷だらけで形が少し崩れた鈴を取り出した。

電車で偶然に再会したその親友の姿。相手は自分に気付かなかつたがそれで良い。

それが青年を選んだ事だからだ。

そして、青年はそれと同時に自分がこの街に来た理由を思い出す。

それは、一人の別の友からの連絡。

『お前が望むならば……あの街に来い。お前も十分に頑張っている。もう、皆に言っても良いのでは無いのか?』

(今更……どんな面で会えば良いんだ。”洗夜”に気付いても、何も言えなかつた俺はよ……)

威圧的な雰囲気を出す青年は、その見た目とは裏腹にとっても弱々しく寂しそうな姿でそう心の中で呟くのだった。



時間だけならば少しの事。

その短時間で風花は洗夜から全てではないにしろ、半分以上の真実を聞く事が出来ていた。

だが己で望んだ事とはいえ、それが受け入れられる事かと言えば別の話だった。

「それは……本当の事なんですか……? もうペルソナを制御できない……ワールドが暴走しているって……!」

「ああ……本当だ」

洗夜は余計な事を言わず、風花からの言葉に肯定だけして頷く。

だがその表情までは黙らせることは出来ず、風花に余計な心配をさせまいと弱々しい笑顔を絶やさないう様にしている。

「……風花。ここでお前と会えたのは都合が良かったのかも知れない。乾もそうだが……ゆかり達にも上手く言つといてくれ」

「そんな……それじゃ洗夜さんは！」

「もう……皆と会う気はない。それがお前達を守る事でもある」

洗夜はどこか弱々しい口調。——しかし目線は真つ直ぐに風花を見つめながら言い。そして、そんな凜とした視線に耐えられず、風花は顔ごと下へと背けてしまった。

しかし、それで風花の心も折れたかと言えばそれは別であった。

——駄目。ここで洗夜先輩から逃げちゃ駄目！——本当に取り返しが付かなくなっちゃう。

「私は……そんなのは嫌です。こんな答えを……皆が望んでる筈がありません！」

「望む望まないじゃない。——そう言う問題ではないんだ」

辛そうになりながらも、それを隠すように洗夜は日の光が差す窓を見ながら言った。

ハッキリ言つて“今まで”の状況だけでもギリギリなのだ。

“あの一件”に直接関わったのは美鶴・明彦・ゆかり・順平の四人だけだったが、洗夜との“絆”があるのは風花達もだ。

——築ヶ。思イ出セ。受け入レロ……黒キ負の絆ヲ。

三日月の様に歪んだ口元で笑いながら己のシャドウが自分に囁いてくる。

気のせいとも思えるだが、洗夜には確かに感じ取れた。

——やはり駄目だ。無理をしてでも風花と別れるべきだった……。

己のシャドウ。それは既にワイルドそのものとも言える存在となつている。

他者との絆が“力”となるワイルド。だがワイルドと合わさっているシャドウを抑える為には本来、美鶴達との接触を避けなければならなかった。

他者との繋がりとはい自分や相手が思っているよりもとても強く、心で拒んでも気付かない振りをしているだけに過ぎず、それははっきりと繋がっている。

強く繋がっている者達の傍にいれば己のシャドウの力を強くさせてしまい、本当に抑える事が出来なってしまうのだ。

「……風花。お前に負担ばかり掛けたが俺にも余裕はないんだ。——乾達の事は頼む」

洗夜はそう言うのと無理矢理話を終わらせるように席から立ち上がり、請求書を掴んだ。

丁度良いと言いは変だが、伏見との約束もある。そのモノレールの時間が洗夜には迫っていた。

「えっ——あつ！ 待って下さい！」

何としても洗夜とこの場で別れる事をしたくない風花。

しかし、彼女に今できたのは一時的に呼び止める事だけだった。ここから先の事はノープランであり、風花は何事かと不思議がる洗夜を見ながら考える。

——そして思い付いた。

「お、お、お……お花摘んで来ます！」

店内に響く風花渾身の一撃。

風花の顔は恥かしさで真っ赤に染まっており、そう言い放つと逃げ様に風花は女子トイレの扉の中へと消えて行く。

そして洗夜もその言葉の意味を知らない訳ではなく……。

「お、おう……」

戸惑い気味にそう呟いて無意識のうちに再び椅子に腰を掛けた。

——と言うよりも言葉が出ず、取り敢えず落ち着こうとしての行動であった。

(どうすれば良い……?)

一旦は座って落ち着こうとした洗夜だが、ハッキリ言って伏見との時間が本当に迫って来ていた。

風花の分も合わせて会計を済ませ、この喫茶店から出るのが最善だが、先程のテンションでの風花を置いて行くのも気が引ける。

これ以上はワイルドの件もあって一緒にいるのを望まなかったが、今は別の意味で悩みどころである。

——本気でどうしたものか。

洗夜は色々和本気で悩んでいた。そんな時だった。

——不意に横からコーヒーの入ったマグカップが洗夜の目の前に置かれ、更には一緒にケーキも置かれた。

「……はっ？」

注文は全て終わっているにも関わらず、これはなんなのか？

洗夜は何事かと思い、運んできた人物を見るとそこにいたのはこの喫茶店のマスターだった。

中年だが貫禄のある男性のマスター。その人は顔を向けた洗夜に目を合わせると落ち着いた様子で頷き、静かに呟いた。

「サービスです。——女性に恥を掻かせるものではありませんよ……」

「は、はい……」

何故か優しい表情でそう言われた洗夜は困惑しながらも頷くしか出来ず、何のかと冷静になった洗夜は無意識に店内を見渡し——そして気付いた。

周りのお客の視線が“自分”に集中している事に。

どうやら自分と風花の会話は思ったよりも周りに影響を与えていた様だと洗夜は気づき、何故か青春している若者を見守る様な温かい視線を一身に受ける。

(で、出れん……)

今ここで風花を置いていけば何を思われるやら。

洗夜は諦めてサービスの品を口にしながら風花を待つしかなかった。



その頃、まさか自分の発言が洗夜に多大な影響を与えているとは微塵も思っていない風花は一人女子トイレで頭を抱えていた。

「うう……！」

洗夜の足を止める為とは言え自分はなんて事を叫んだのだろう。

風花は恥ずかしくて鏡の自分の顔すら見る事が出来ない。

(……私、洗夜先輩に変だっと思われちゃったのかな)

恥かしい想いを抱きながら風花は先程の発言によって洗夜から印象が気になってしまう。

わざとらしくなかったかな？ 変に思われていないかな？ 風花は色々と悩み始める。

(洗夜先輩は……私の事、どう思ってくれているんだろう……?)

少なくとも自分の声が洗夜に届いてはいない。だがそれでもない。

二年振りの再会となる中、洗夜の様子は風花から見るとどこか弱々しく、ハッキリ言ってしまうと覇気が無くなっていて儂い存在に見えた。

その姿は風花からすれば信じられない姿とも言えた。

『下がれ山岸!』

出会って間もない頃から洗夜に守ってもらってもらい、その時の言葉や後姿が今でも鮮明に覚えている。

更に言えば守ってもらっていたのはシャドウからだけではなく、クラスでの虐めからでもあった。

(私じゃ……何も出来ないのかな。何とも思われていないのかな……)

守られてばかりであった自分では頼りないかもしれない。

しかし、それでも風花の中に洗夜を見捨てる選択肢は端からない。

「!……そうだ!」

こんな事を考えている場合ではない。

風花は急いで携帯を取り出して“とある人物”へとメッセージを送った。



その頃。

現在：辰巳ポートアイランド【とある喫茶店】

辰巳ポートアイランドで営業している平凡な喫茶店。

そんな喫茶店の外では白い毛、そして赤い瞳をした一匹の犬が欠伸をしながら座っており、中では四人の男女が誰かを待つかのように時計をチラチラ見ながらドリンクを飲んでいた。

「風花さん……何かあったんでしょうか？」

「連絡はない……」

四人の中で頭一つやや小さい少年である天田 乾が待ち人である風花が来ない事に心配し、その向かい側では何故かゴスロリファッションの女性。二年前、人工ペルソナ使い“ストレガ”の一員として戦ったチドリその人が携帯を見ながら連絡が無い事を確認する。

既に待ち合わせ時間は一時間以上経っており、風花の性格を考えれば遅れる事に関する連絡が来るはずだと誰もが思っており、乾は連絡がない事に向かい側に座る男、順平の方を見る。

「順平さん……風花さん、どうしたんでしょうか？」

「……そうだよな」

問い掛ける乾から問い掛けに対し、順平はどこかうわの空で返す。

口に運んでいたドリンクのグラスも既に空でありながらも未だにストローを口に咥えており、乾も気になってはいたが最初に合流した時からこんな感じであり、二年前も何だかんだで抜けていたから気にはしていなかった。

——順平の考え事の理由が“洗夜”とは思ってもみなかったからだ。

(結局、何も変わらず……そして分からなかったんだよな……)

順平は今日までの出来事を思い出していた。

自分が教えている少年野球のコーチを無理言って休んでまで向かった一つの田舎町。

行けば何かが変わる。きっと動きが起こる。そう安易に思ってしまったっていた順平は今では後悔しか出来ないでいた。

(俺じゃ無理なのか……)

乾やチドリの方をチラツと見て順平は俯く。

目の前の仲間には洗夜の事を言っていない。言える筈がなかつ

た。

洗夜の消えた理由を本人からの知らない人が読めば理解できない手紙だけであり、乾達は今も納得していない。

だからといって当事者であった自分達でも事態が分からず説明は出来ない。

——誰なら鳴上先輩を……。

桐条美鶴・真田明彦・アイギス。この誰でも駄目だった。

一番可能性があつた桐条美鶴。彼女でも無理だったのだ、順平は自分では無理だと早々に気付いてはたが納得はしなくなかつた。

今までも洗夜を始めとした人々頼りだった順平。だから今回も適材適所で良いだろう。

(良い訳ねえだろー！)

下らない自分はもう辞めた。故に順平は諦めなくなかつたが、事態は自分が思っていたよりも複雑だった事を思い知ってしまった。

——お前達が望んだ結果だろうか？

(……クソッ！)

あの時は頭に血が昇っていた故に気付かなかつたが今ならばあの“洗夜？”の放つ威圧感を思い出せる。

強い存在だったと……。

「鳴上先輩……本当に何が起こってんだよ。ちくしょう……」

■ ■ ■

“……お前じゃなきや鳴上先輩は……”

今はこの世界にいない友を順平は思い出す。

恐らく今も後悔しているであろう洗夜は、まだ“あの戦い”を知らないのだ。

「鳴上先輩……」

どうしようも出来ない自分に歯痒く感じながら順平は不意にもう一人の方、ゆかりの方を見た。

先程から黙したまま携帯を弄る彼女はそのまま動きはない。

順平はまた仕事関係かと思ひ、邪魔をしない様に考えたが不意に動きは起こつた。

突如、ゆかりが立ち上がって自分達の方を振り向いたのだ。更に、

その表情はどこか陰しくも焦りが混ざっている。

「ゆかりっち……っ？」

ゆかりの突然の動きに順平、そして乾達も呆気になるがゆかり本人は特に気にする事もなく注文書を持って無言でレジへ行き、そのまま会計を済ませてしまおうとそのまま皆の所へと戻る。

そして……。

「急ぐわよー！」

「はっ……っ？」

ゆかりの突然の発言。その意味を理解するよりも先に彼女の手によって喫茶店の外に連れてかれるメンバー達。

一体何事なのかと説明を順平達は求めようとしたが、それよりも先にゆかりは素早く移動を始めてしまい、順平達もコロマルを連れて急いで後を追いつながら問い掛けた。

「ちよっ！ ゆかりっち何処に行くんだって!？」

「ゆかりさん!？」

順平と乾が何とか問い掛け、チドリはコロマルと共にその後ろを走る中でゆかりは振り向かずには答える。

「良いから急いで！ 本当に手遅れになるかも知れないの!！」

「ハアッ!? 手遅れって……っうか、本当に何処に向か——」

「“月光館学園”よー！」

順平の言葉を黙らせながらゆかりは目的の場所を教え、順平達も訳の分からないまま彼女の後を追うしかなかった。

その真意を知らぬまま、再会への時は迫っていた。



現在：月光館学園【校門】

月光館学園、設立して20年程立つ小中高一貫校であり洗夜達の母校。その校門の前で現生徒会長の“伏見千尋”は待ち人であるOBを待っていた。

約束の時間には余裕があるが、今から来てくれる人物は時間にルーズではなく寧ろ厳しい人物。

そんな彼女の予想通り、その先輩は既に校門の目の前までに来ていた。まだ生徒会・会計時代だった時にお世話になって伏見自身も信頼している人物。

彼女からしてもこの間連絡して以来であり、実際に会うのは二年振り以上だ。

そんな再会となる今。此方に向かっているOBである鳴上洗夜も伏見に気付き、手を振っている。

「よう伏見！ 元気そうだな」

「は、はい……鳴上先輩もお元気そうで何より……です」

伏見が完全に信用している数少ない男性である洗夜。そんな彼の再会だったが伏見の表情には“困惑”が見てとれる。

何故ならば……。

「——でだ。そろそろ……放してくれないか風花？」

「い……や……です！」

校門まで目の前と言う所にも関わらず洗夜は背中にしがみ付き、全力で体重を掛けてくる風花によつて辿り着く事が出来ないうでいたのだ。

(確かあの人は……山岸先輩……?)

風花の事は伏見も見覚えがあつた事で正体が分かったが、今回の行事の件では彼女は呼んでいなかった。

だが目の前で洗夜にしがみ付きながら移動を妨害？しているであろうこの光景。伏見には何が何だか理解する事が出来なかった。

本当ならばとつくに敷地内に入っているであろうが、前のめりになりながらも前に進む洗夜に対して風花も全力でそれに応えており、辿り着く気配が全くない。

「相変わらずですね……鳴上先輩」

在学中も何かと洗夜の周りは騒がしかった気がする伏見にとつては、目の前の光景でも苦笑する程度で済んでいたが、そんな状況下で“風向き”が変わり始めてしまう。

「どうした伏見。最後のOBはまだ来ないのか？」

伏見の背後。つまり学園側から彼女に声を掛けた者が現れた。

その者は美人と言う分類に確実に君臨しており、腰まである赤い髪が目立っている。

——つまりは“彼女”である。

「か、会長!？」

声に驚いた伏見は振り返りながら声を出し、その彼女の言葉に“会長”こと二年前までは本当に生徒会長であった“桐条美鶴”はやれやれと言った様子だった。

「伏見……私はもう会長ではない。今は君が会長だろう」

「あつ……そうでした。つい癖で……」

最早刻み込まれたレベルの反応だったのが気になったが、美鶴はその事を特に言おうとせず最後に来る筈のOBを出迎えに行つたまま戻つてこなかった彼女が気になっていた。

しかも意識をこの場に集中させれば何処か騒がしい事にも気付く、美鶴は何事かと思つて校門の方へ意識を向けるとそこにいた二人に美鶴は目を大きく開いた。

「洗夜!? お前なのか!……山岸、君まで何故……?」

いるとは思つてもみなかつた組み合わせに美鶴は驚き、そんな彼女の声に洗夜と風花も気付いた。

「美鶴!?… なんてお前が——」

「桐条先輩!」

美鶴がこの場にいる事に洗夜が問い掛けようとしたが、その瞬間に風花も美鶴がいた事に意識を持って行かれて思わず洗夜を掴んでいた手を離す。

結果、今まで前方に力入れていた洗夜を妨げるものは無くなった事で、過剰だった力が解き放たれた。

「グフオツ!？」

妨げるもの消えた事で顔面から地面にダイブする事になった洗夜だったが、運は良かったのだろう。

不幸中の幸い。洗夜のカバンが彼と地面の間に偶然入り、直撃だけは避けられたのだ。

そして思わず手を離してしまった事に風花もすぐに気付く、美鶴も

急いで洗夜の下へと駆け寄った。

「す、すみません洗夜先輩！」

「洗夜、大丈夫か！」

「……ああ。大丈夫だ」

二人に声をかけられた洗夜。そんな洗夜に二人は手を差し伸べたが、洗夜は軽く手を動かして大丈夫だと示して自力で立ち上がった。

「……」

その行動によって美鶴と風花に少しの寂しさを残したまま。

「鳴上先輩！ お怪我はありませんか!？」

「ハハッ……この程度で怪我する程鈍ってはいない。——ところで……」

慌てた様子で駆け付ける伏見に軽く笑いながら無事を伝えると、洗夜の視線は美鶴へと向かう。

「なんでお前が……ああ、やっぱりいい。伏見がお前に声を掛けない筈がないか」

「……そういう事だ。勿論、私だけじゃないがな」

「俺もいるという事だ」

見計らった様なタイミングで現れたのは一人の男。共に稲羽にまでやって来ていた真田明彦その人だ。

嘗てはファンクラブまで存在していぐらいに異性からの人気が高かった明彦だが、洗夜は目の前の彼の姿を見て固まってしまう。

原因なのは明彦の姿。彼の姿は元は服だった物なのだろうと思う布切れとマントの様に巻いている布。

——つまりは“半裸”だ。

「……そのままの格好でここまで来たのか、明彦？」

「?……当然だろ」

どうやらこの二年間で明彦が自分とは遠い世界に行ってしまった事を洗夜はようやく自覚した。

冷静に周りの者達を見れば全員が明彦に視線を向けようとしておらず、外で出会えば赤の他人として扱っている様には見えない。

そして洗夜が皆と同じ様に目を逸らすと、今度は美鶴が洗夜に問い

掛ける。

「ところで洗夜。お前は何故山岸と共にいる？」

「……偶然。本当に偶然、駅であった。それだけだ……」

美鶴の問いに洗夜は冷めた様子で返答する。

言葉に嘘偽りは言っていない。後ろめたさを新たに作る必要もなければこれ以上は本当に危険でしかない。

本人が“否定”しようが、誰かが“拒絶”しようが関係ない。

——“絆”が消える事はないのだ。

「それだけって……そんな事はないです！……桐条先輩達は知っているんですか？ 洗夜先輩は——」

「生憎だが……風花。美鶴達は俺の異変を知っている」

洗夜がそう言い放つと、風花の表情が固まった。

風花が考えそうな事だった。少なくとも風花には美鶴との再会を洗夜は伝えておらず、自分の事を美鶴達に伝えて皆で何とかしようと思っていたのだろう。

しかし、美鶴達が洗夜の異変を知っていた事で事情は変わる。

——否。今の状況も変わる。

「知っている……って、どういう事ですか？ だって……あれから誰も洗夜先輩とは一度も——」

「簡単な話だ。俺と美鶴達はこの間、再会したから知っている。……それが答えだ」

「えっ……」

驚愕の事実となる言葉。それを平然と語る洗夜の言葉。

それを聞いた風花は先程からの内容の大きさに危うくパニックに陥りそうだったが、そこは二年前の事件を戦い抜いたペルソナ使用だ。

何とか心を落ち着かせるが、その精神に襲い掛かった衝撃の勢いまで消せず、その勢いを美鶴達へと放ってしまおう。

「再会……？ 桐条先輩達は知ってた……？——どういう事ですか？

知っていたなら……なんで何も話してくれなかったんですか!? どうして洗夜先輩を助けようとして——」

これは風花だけの話ではないが、洗夜に何とか連絡を取ろうとしていたのは乾もそうだった。

美鶴達とは違い、風花と乾の洗夜との別れは突然の別れであり、最後の言葉も洗夜が置いた置手紙のみ。

何かあったのではないかと悩み続ける、それが二年。連絡が取れた事だけではなく、再会までしていた事を黙っていられば風花も怒るのも無理はなかった。

洗夜の現状もそうだ。自分よりも既に知っていたならば、何故、行動をしていないのかと風花は疑問を抱いたのだが、その答えはすぐに察する事が出来てしまう。

何故ならば、その風花の言葉に美鶴達の表情はとても暗く、明らかに後悔を抱きながら落ち込んでいるからだ。

それだけ風花は理解してしまった……。

「桐条先輩達でも……」

助ける事が出来なかった。

二年前の真実を知る事が出来なかった。

風花は口には出さずともわかってしまったのだ。

「もう……関わるな。もう終わった……忘れろ……頼む……!」

洗夜は風花の様子を見る事はせず、美鶴達の間もそのまま通り抜ける。

自分の思っていた展開とは違う事に伏見も困惑気味だが、洗夜はそれでも校門の中に足を踏み入れた。

しかし、それでも素直に校内に入れないのは運命のせいなのかも知れない。

「それが……洗夜さんの答えなのですか?」

「アイギス……」

校内から出てきたのはアイギスだ。

二年前の制服ではなく、全身が隠せる様な私服を身に纏っている。そんな彼女の突然の登場だが、不思議と洗夜は驚きはしなかった。寧ろ、分かっていた様な気さえする。

不思議な雰囲気の中で会った洗夜とアイギス。そんな二人は互い

に正面で立ち止まり、真剣な眼差し同士で向き合った。

「洗夜さん……美鶴さんも風花さん達も……そして私も洗夜さんに助けられました。……そんな貴方に今、何が起こっているのか私には分かりません。ですが、苦しんでいる事は分かるんです……」

「……そうか」

そう呟き、洗夜はアイギスから目をそらす逸らす。

無垢、そして純粋なアイギスの瞳。洗夜はそれが時折苦手でもあった。

全てが見透かされている様な感じがするからだ。

「二年前……もう本当にあの頃の様にはなれないのでしょうか？」

「アイギス……お前は“過去の俺”を求めているんだな。……無理だ。同じ人間でも、過去の俺と今の俺は“別人”だ。戻る事なんて誰にも出来ない……」

彼女の目の前にいる鳴上洗夜。それが今の自分であり、過去の自分ではない存在。

今の洗夜にはワイルドを制御する事も、アイギスの願いを叶える事も出来なかった。

そんな洗夜の言葉を聞いたアイギスも自分の言葉の意味を理解してしまったのだろう、顔を下へと向けてしまい、気まずい空気が流れる中で伏見も混乱を隠せない。

「あ、あの……会長や鳴上先輩達は何か……」

「――伏見」

伏見が様子がおかしい事を指摘しようとした時、美鶴が彼女を呼び止めると同時に正面に移動し、素早く肩を掴む。

そして正面から彼女の目を見据えたその姿。まさに蛇に睨まれた蛙であり、伏見もビビッて動く事は出来なかったが、そんな伏見に美鶴は言い放つ。

「君は今、忙しい筈だな？」

「えっ？……いい、いえ……ちゃんと急ぎの仕事は――」

「忙しいのだろう？」

有無を言わせない美鶴の圧。それが察せない伏見ではなかった。

これはいけないやつだ、とすぐに理解する。

「わ、私……先に校舎に戻ってますね……」

哀れでしかないが伏見はそう言っただけで校舎の中へと戻って行き、この場に嘗ての戦いの無関係者は一人もいない。

だが、それで何か変化起こすには弱すぎた。

「……」

冨夜は特には何も言わず、アイギス横を通り過ぎようとした。

関りを切る。本当にそう思わせる様に気迫を感じてしまう程に。

しかし、これが冨夜の答えであった。

(これで良い……)

後ろからの視線を感じるが振り向く事はしない。

絆を消す事が叶わないならば、それから全力で目を逸らす。それしか自分には出来ない。

冨夜はそんな情けない選択を全力で進むことを選んだ。

——しかし、そんな選択を“抑圧した己”が見逃すはずはなかった。

——お前はまだ、絆の力を甘く見ている。

(何……?)

冨夜はその言葉に足を止めた。意味は理解出来なかったが、悪寒が走ったのを感じ取っていた。

しかし同時に冨夜はその意味をすぐに知る事になる。

——小さな白い影が美鶴達の間を横切って行ったのは、まさにそんな時だ。その白い影は真っ直ぐに冨夜の下へと向かい、そして……。

「ワンッ！」

白い影、その正体は一匹の犬。その犬はそれは嬉しそうに一吠えし、尻尾を激しく振りながら冨夜の周りを走り回るが、冨夜は驚いた様子で目を大きく開いていた。

何故ならば、その犬は……。

「コロマル……!?!」

「コロマルさん……?」

赤い眼をした白い犬。それは二年前、共に戦ったペルソナ『ケルベ

ロス』を扱うコロマルであった。

コロマルは洗夜との再会が嬉しいのだろう。嬉しそうに吠えながら未だに洗夜の周りを走り続けるが、洗夜の思考は既に別の事を考えていた。

「まさか……!」

理由はどうでもいい。だが、コロマルがここに一匹で行動しているとはまずあり得ない。

ならば“連れて来た者”がいる筈だ、と洗夜はそう考え、それはその通りだった。

「鳴上先輩!!」

背後から聞こえる女性の声。それは聞き覚えのある声であり、つい最近聞いた声でもあった。

洗夜は思わず振り返ると同時に頭で正体は既に分かっていたが、そこにいるであろう人数までは分からなかった。

「ゆかり……!?!——ッ……それに乾……お前達まで……!?!」

振り向いた洗夜の姿に映る他の仲間達。彼等の存在に洗夜は驚きで口調が震え、そんな洗夜との再会となった乾も驚きを隠せなかった。

「洗夜さん……なんですか? でも、どうしてこの場所に……」

「鳴上洗夜……」

驚き、そして混乱で連れて来たゆかりやその場にいた美鶴達。そして洗夜に交互に顔を向ける乾。

チドリも嘗ては戦い、そして打ち解けた相手の存在に気付くが他とは違い、少し驚いた程度でしかなかった。

しかし、この中で一番驚きのリアクションが大きかったのは順平だった。

順平は思わずコケそうになりながらも前に出た。

「鳴上先輩!! 稲羽の町じゃなかったんすか! つうか、ゆかりっちは何でここに先輩がいんの知ってたんだ?」

「風花から連絡があったの……」

皆に携帯に届いた風花からのメッセージを見せながらゆかりは答

える。

そして同じく、風花も携帯を握り絞めながら前に出る。

「私……皆に知らせなきゃ……この機会を失ったら本当に鳴上先輩が遠くに行っちゃう気がして……!」

不安に押し潰されそうな声で風花が叫び、周りの雰囲気がおかしい事に乾も気付いた。

状況を全て理解できそうになかったが、少なくとも洗夜が自分達の目の前にいるのだ。

二年前の事を聞くのは今しかないと、乾も無理やり頭を納得させる。

「洗夜さ——」

「帰れッ!!」

突然の洗夜の鬼気迫る叫びに乾の声はかき消され、同時に全員の動きが固まる。

——それと同時だった。空気が“凍った”のは。

『全員、揃った……』

“聞き覚え”のある声がこの場にいる全員の耳に、否、“頭の中”に直接聞こえた。

だが全員は気づく。これは“異変”の前触れである事に。

すぐに辺りを見渡し、事態を確認しようと美鶴達が動こうとする。

——その時だった。

「違 う …… 駄 目 だ …… 駄 目 だ 駄 目 だ …… 駄 目

だ あ あ あ あ あ あ あ あ あ つ !!」

洗夜が頭を両腕で抑えながら空へ、まるで何かを抑え込むように叫び声をあげる。

「洗夜!」

「洗夜さん!?!」

美鶴が、アイギスが、明彦達が洗夜の異常に急いで傍に行こうとした。

その時の、瞬きする様な短い時間。僅かな時間の間で十分だったのだ。

——洗夜が堕ちる時間は。

『我は汝……汝は我……』

『汝、再び真実の絆を得たり』

『真実の絆……それは即ち“原初”の道標なり』

『今こそ、汝には見ゆるべし』

(違うつ!!)

刹那の世界で洗夜は脳内に聞き覚えの言葉を否定する。

しかしそれは意味無き事でしかなく、洗夜の頭の中、そして心に次々と止まることなく続く。

【魔術師】の……。

(止めろっ!)

【女教皇】の……。

(聞かねえっ!)

【女帝】の……。

(黙れっ!)

【皇帝】の……。

(こんな……)

【法王】の……。

(全部……)

【恋愛】の……。

(俺のせいだ……)

【戦車】の……。

(俺が望んだから……)

【正義】の……。

(俺は……)

【隠者】の……。

【運命】の……。

【剛毅】の……。

【刑死者】の……。

【死神】の……。

(“お前”は——)

虚ろな瞳。一切、輝きを残さない哀れな愚者。

演じる“役”すら忘れ、黒である故に何者にもなれず、黒である故に全てを持つ矛盾なる旅人。

幾つもの存在が自分に語り掛けるのを洗夜は感じながら、力なく心の中でそれを呟こうとする。

【■■■】の……。

(……“お前”は)

【■■■】の……。

聞こえない二つの存在アルカナの中、洗夜の瞳が虚ろのまま力なく倒れ込む。

そんな中で洗夜は最後の意識を使い、“あの言葉”を呟いた。

(お前……は……俺じゃ……ない……)

『……ククツ』

消える意識の中、洗夜は誰かの小さな笑い声を聞いた気がしたが、もうそんな事を気にすることは出来ない。

洗夜の意識は既に眠っているのだから……。

——それと同時に、洗夜の左手から放たれる白い世界が美鶴達を飲み込んだ。

“……悠”

ただの呟き。風の音より儂い音。

意識する事も出来ない中、弟の名を【愚者】は想った……。

▼▼▼

「これは……!」

「どういう事だ!」

「非常事態です……」

洗夜から放たれた白い光。それは一瞬の出来事である同時に美鶴達を異質な背中に誘った。

そんな中で、メンバーの中でいち早く意識を覚醒させた美鶴、明彦、アイギスの三名は困惑しながらも何とか現状を理解しようとする。

画面の外枠の様な黒い枠が何重にも現れる光景。そんな中を自分達は落ちているのか上がっているのか、それとも前後左右に進んでい

るのかすら分からない。

感覚が明らかに狂っており、そんな中でゆかり達も意識を覚醒させる。

「ん?.....えっ! 何これ!?!」

「うおっ!?! 流石の俺たちもどうなってるのか分かんねえぞ!」

「身体が上手く動かせない.....!」

ゆかり、順平、風花は困惑を隠せず、驚いた勢いで混乱しながら周囲を見渡すと乾、チドリ、コロマルも意識を覚醒していた。

「なんですかこれは!」

「影時間?.....いや違う」

「ワンツ!」

焦った様に乾は周りを見回し、チドリも冷静ながらも表情は険しく、そんなチドリに抱かれながらコロマルも周囲を警戒していた。

しかし、不幸中の幸いであったのは「洗夜」を除く全員が無事だったことだ。

その事実気付いたのは美鶴だった。

「洗夜?.....そうだ洗夜はどこだ!」

「あそこだ!」

見つけたのは明彦だ。

明彦の視線の先にはやや弓なりになりながら、頭を下に向けて意識を失っている洗夜の姿があった。

刀の入った袋を肩に掛けたままだが、それも力なくズリ落ちかけている。

感覚の狂った中でもその状態は危険だと判断でき、明彦が何とか身体を動かし、洗夜へ必死に少しずつ近づきながら腕を伸ばす。

(伸ばす事も出来なかった二年前とは.....違う!)

歯を食いしばり、必死の形相で腕を伸ばす明彦の胸に抱くのは二年前。

洗夜と明彦。出会いこそは「最悪」だった二人だが、時を経て親友にまでなった。

そんな二人の別れは意味不明、不可解な結末。

明彦はそれを納得せず、三回目になる今回の再会で確信を得た。

——恐れず、前に進めと。洗夜と向き合えと。

「ツ！ うおおおおおおおっ!!」

明彦は叫ぶ。親友を“二人”も失ってなるものかと。

目の前で意識のない洗夜と被って目に写る“ニット帽の少年”の背を見ながら限界を無視して腕を伸ばし、そして掴んだ。

——巨大な“白い腕”が、洗夜の全身ごと。

『クククツ……』

「な、なんだこいつは……!」

目の前。本当に掴めた筈の距離で自分から洗夜を奪った“真っ白な存在”

それを目の前にした瞬間、明彦の全身を“悪寒”が駆ける。

それと同時に明彦だけではなく、美鶴達にも駆け巡った。

目の前の“これ”は普通ではない。嫌悪感すら抱きそうな不気味過ぎる存在。

鳥肌すら立って己の脳・身体が警告する。

——危険だと。

しかし、明彦達がそう思っているにもかかわらず同じ考えとは限らない。

巨大な白い影は一切明彦達を気にした様子はなく、認識すらしていないのか怪しい。

そんな異質な“白”は、蜃気楼の様に歪んだ空間から巨大な上半身だけを現し、洗夜を掴んだ腕を自分の顔の上へと持って行く。

——そして……。

『アア……ゴクンツ!』

洗夜を“丸呑み”にした。

その衝撃的な光景を目の当たりにした美鶴達。

驚愕する者。顔色が青白く染まる者。何が起こったのか理解しきれない者。

それぞれが目の前の状況を理解しようとした中、真っ先に目の前の存在を“敵”として認識したのはアイギスだけだった。

「ッ！」

銃口を白い存在に向けるアイギス。

しかしその瞬間、アイギスを含むメンバー達の視界が急激に落ちる。

世界が変わる。そんな認識を無意識のうちに理解した美鶴達を嘲笑うかのように、洗夜を飲み込んだ白い存在はただただ大きく笑うのだった。



そしてその頃……。

同日

現在：堂島宅【居間】

「……ん？」

誰かに呼ばれた様な気がした。そう思った悠は反射的に背後を振り向いたが、そこには当然だが何も無い。

しかし、正面には存在していた。

「もう！ お兄ちゃんのぼんだよ！」

トランプの手札を両手一杯に持ち、頬を膨らませながら怒った様子の奈々子。

そんな菜々子の声に悠は意識をそちらに戻した。今は菜々子と一対一のババ抜き対決の真っ最中。

ババ以外は何を引いても当たりのまさに防御を捨てた戦いだ。

（……と、見せかけて）

奈々子にババを持たせるのも大人げなく、運と言えども奈々子を悲しませたくない。

そんな悠に出来るのは極限まで鍛えた“器用さ”を利用したイカサマだった。

（ババを奈々子に渡さない様に……）

見破る事が出来るか。カードの海の中に身を潜ませるババの存在、悠の技術を。

兄として、勝つことが出来ない一戦が幕を開けていた。

——時だった。

『……でだ。そろそろこっちの事も思い出せてくれよ……電話代も馬鹿になんないつつうの』

「……あつ」

左手に持っていた携帯電話から聞こえる陽介の声。

その声によつて悠は己は同時に電話をしていた事を思い出す。

そんな悠に少し待たされた事で、陽介はせかす様な口調で悠へ問い掛けた。

『それで結局、相棒はどうすんだ？ 相棒以外は皆、ジユネスに集合してっから……そのままテレビの中に行こうとしてんだけど？』

「……ああ、そうだったな」

陽介の言葉で悠は思い出した。

久保の逮捕。しかし、それでも謎は残っている。それを言ったのは洗夜、そして悠だ。

その事を聞いた陽介達は最初は心配し過ぎだと思っていた様だが、やはり引つ掛かりはあつたのだろう。

今日、万が一の事も考えて再調査と修行を行おうと連絡して来たのだ。

本来ならば行かねばならない。悠はそう思つてたのだが……。

「お兄ちゃん……っ？」

自分の目の前でカードを引かない自分を不安そうに見つめる奈々子がいる。

洗夜も留守にしており、堂島も久保の後始末でまた遅くなりがちの中、悠までも菜々子を寂しい想いをさせていけないかった。

「……ごめん陽介。今日は家に俺と菜々子しかいないんだ」

『そうなのか……それじゃ仕方ねえよな。分かった、たまには相棒抜きでやってみるぜ』

「……すまない」

皆が一つの事をしようとしている中で自分の都合を優先してしまった事に悠は謝るが、菜々子の事でもあつて後悔はない。

勿論、陽介もそれは分かつており、気にしてない事を伝えようとい

つもの感じで調子が良さそうに応える。

『気にすんなって！ 逆に菜々子ちゃんを一人にさせらんねえだろ？』

たまには俺等に任せろって！』

陽介はそう言って電話を切ってしまう。

回線が切れた音だけが悠の耳に届くが、何故か胸の中にザワついた感覚が残ってしまった。

「……兄さん？」

不意に思い付く兄の姿。しかし悠は自分で思い出してもその考えの答えが分からず、その不安を忘れる様に菜々子とのトランプを再開させるのだった。

——その行動が、一つの選択であった事など分かる筈もないまま。

END

第三十七話：黒の駅

同日

現在：堂島宅

それは突然の出来事だった。

居間で悠が菜々子と遊んでいると突如、玄関の扉が勢いよく開かれ、一人の少年が息を切らしながら入って来た。

金髪でどこか無駄に豪華な服。悠にとってもその人物は見覚えがある、と言うよりも人状態でのクマだった。

しかし、息を切らしているだけならなともかく様子も何かがおかしい事に悠は疑問を抱く。

「クマ……?」

「セ、センセイ！ 大変だよ！ テレビの世界が!」

ここには菜々子もいると言うのに気にする余裕もない程の出来事が、どうやらテレビの世界で起こっている様だ。

クマは焦りすぎて息を整える前に話を進めようとする程だ。悠も嫌な予感を覚えると、クマの存在に菜々子も気付いた。

「あっクマさん！」

「あつ！ こんにちははくナナちゃん！」

余裕はある様だ。笑顔の菜々子へ笑顔で返すクマの姿に悠は静かにテレビの電源を入れる。

「つて、センセイ！ テレビ見てる場合じゃないよ！ 本当にマズイクマよ！」

またクマの異常なテンション、と言う名の発作かと思いきや、どうやら本当に事態はマズイ事になっている様だ。

再び焦った様子で変なテンションへと変化するクマを見て、悠もふざけている場合じゃない事を理解した。



「シャドウが……!」

クマを部屋へと招いた悠は、クマから何が起こっているのか聞くと
どうやらテレビの世界、そこでシャドウ達が異常な行動をしていると
の事だった。

「うん！ クマはヨースケのパパさんと次のイベントの打ち合わせで
一緒に行かなかったけど……その後、いきなりシャドウ達の異常を感
じたんだ。調子の悪いクマの鼻でも感じる程だよ、本当にヤバイよ
！」

「何かあったのか……？」

クマの話聞いた悠は何やら嫌な予感を抱く。

陽介達の事も心配だが、それとは違う。

だがその予感は徐々に大きくなり、それは大きな不安、そして焦り
となつてゆく。

——悠。

「兄さん……？」

悠は菜々子と遊んでいる時に感じた声を思い出す。

他者との繋がりは思っているよりも強い。

それが他の人物との繋がりでも強ければ、血の繋がった実の兄なら
ば……？

「それだけじゃないよ！ なんか大勢の人間もテレビの世界に入って
来てるんだ!! 色々ありすぎてクマも訳がわからないよ！」

「ッ！ 陽介達以外にも人が!？」

クマのその言葉が決め手だった。

元から行かないと言う選択肢はなかったが、その言葉を聞いた瞬
間、何か見えない力に引っ張られる感覚を感じた。

「行こう……菜々子には後で謝らないと」

困った様に悠は呟くが、その瞳は力強く光っていた。



現在：テレビの世界【いつもの広場】

「……何が起こっているんだ？」

菜々子に謝り、急いでジュネスからテレビの世界へと悠とクマは

入った。

——瞬間、異常に気付いた。世界の雰囲気も殺気に満ちており、周りの霧全てが鋭利な刃物の様に感じ、その世界の“住人”も異常に染まっていた。

「セ、センセイ……あのシャドウ達、何か変クマよ?」

「アブリリー型のシャドウ……けれど、あれは……」

二人は目の前で浮かんでいるシャドウの姿に唾然としながら見上げる。

卵の様な球体に巨大な口。それは悠が始めて戦った『アブリリー系』のシャドウ達がそこにはいたのだが、その姿は普段の時とは明らかに違っていた。

それは一言で言えば“オーラ”の様なもの。炎上する火の様に激しく動くオーラをアブリリー達が纏っていたのだ。

外見事態は変わっていないものの、雰囲気は別物でしかない。

「これが異変なのか……?」

悠は辺りも含め、辺りを見回しながら呟いた。

確かに成長して行く中で、最早敵ではない程の力の差が生まれた一部のシャドウ達がこんな状態になっているのだ。

異常という事も言い過ぎではない、悠がそう思った時だ。

クマが冷や汗を流しながら悠の方を向く。

「セ、センセイ……呑気に過ごせる時間はなさそうクマ……」

震えた声で呟くクマの視線へ悠も向けると、アブリリー達全てが自分達の方を向いていたのだ。

大きな舌を大きく回しながら近付いており、明らかに敵意を持っていた。

「戦うしかない様だ……」

「そうみたいクマね……」

ジリジリと後ろに行きながら距離を取りながら悠とクマは武器を構え、ペルソナカードを取り出す。

そしてペルソナカードを砕いたと同時だった。それが開戦の合図となる。

『ヒヤア~~~~!』

「イザナギツ!!」

「キントキドウジ!!」

自分達を守る事も考え、イザナギとキントキドウジは召喚と同時に仁王立ちの如く。不動のまま構えるがオーラを纏ったアブルリー達はお構いなしに二体に飛び掛かる。

「イザナギ! 振り払え!」

「キントキドウジもミサイル発射クマ!」

主の命に従い、大剣を振りアブルリー達を一閃するイザナギとミサイルを発射し、爆風で多数のアブルリーを消滅させるキントキドウジ。

しかし、倒された事でスペース空くと同時に再びアブルリー達が埋める様に現れる。

それも倒した数以上に出現し、一部はペルソナ達を上手く横切り悠達へ直接襲いに掛かった。

そんなシャドウの群れに悠とクマも武器を持ち直し、迎え撃とうとする。

「クマ!」

「りようかいクマ!」

悠はクマの名を呼びながら合図し、飛び込んできた一匹のアブルリーを刀で相手の勢いを利用して斬りつけると、アブルリーに大きな切り傷が生れる。

人間では致命傷になりかねない傷でもシャドウにとっては別であり、今にも口から下が落ちそうになりながらもアブルリーは悠へと襲い掛かろうとする。

——しかし、それは悠にとっても想定内だ。

「今だ!」

「やるクマア!」

致命傷にならなくとも傷自体は大きい。そのダメージによって鈍ったアブルリーの動きを悠は見逃さず、クマがすかさず爪で追撃を行った。

クマの鋭利な爪はアブルリーを切り裂き、アブルリーは奇声を上げる事もなく大きな肉片となりながら消滅していった。

これが目の前の異常なシャドウ達と戦う上での悠とクマの作戦だった。

明らかにいつもよりも強くなっているであろうシャドウを生身で、しかも単身で相手をするのは危険と判断した悠は二人掛かりで確実に倒す案を考えていたのだ。

そしてこの作戦は功を奏し、二体、三体、とペルソナが取り零したアブルリー達を悠達は確実に倒していき、数を確実に減らしていった。

「よし……今だイザナギー！」

悠はそう叫ぶと、悠とイザナギの瞳が、身体が蒼白い光を放つ。

主とペルソナの力が一つとなり、巨大な力を得たイザナギは大剣から数多くの斬撃を飛ばした。

それはまるで空間全体を巻き込むかの如く。その『空間殺法』と言う技名の通り、アブルリー達は次々とバラバラになって消滅していった。

これで多くの数を倒した事になる悠とクマは、これで戦闘は終わるだろう思っていた……が。

「駄目クマよセンセイ!! キリがないクマー！」

全滅させたであろうアブルリー達だったが、先程同様に空いたスペースを待っていたかのように雪崩れ込みながら再び出現する。

しかも、その数は最初の時よりも確実に多かったのだ。全ての個体が不気味なオーラを纏っており、新たに現れたシャドウ達も全てが“強化”されているのだ。

辺りを覆うであろう数に悠とクマは圧倒され、流石の悠も全力を出さず得なくなる。

「力を節制したかったけど……そう言ってられないか」

悠は新たなペルソナカードを取り出しながらシャドウ達を睨み付ける。

こうなれば一気に決めるしかない。強力なペルソナを召喚し、悠は

目の前のシャドウ達を素早く全滅させようと考え、ペルソナカードを砕こうとした。

——まさにその時だった。宙に浮くアブルリー達を“何か”が切り裂いたのは。

『ヒヤッ!?!』

それはまるで蛇の様に長く、動きもしなる様な動きをしながら次々とアブルリー達を消滅させてゆく。

そんな突然の出来事に驚きながらも、悠とクマが集中してアブルリー達を攻撃しているものを見詰めると、それは刃の付いた紐の様な何かであり、先程までの動きも入れると“正体”は一つしかなかった。

「“鞭”……なのか？」

それは刃の付いた鞭。その正体に悠が気付くと同時、異変はまだ終わらなかつた。

「センセイ！ あれを見るクマよー！」

指を差しながら叫ぶクマ。その示した場所へ悠は顔を向けると、そこには一つの“球体”が浮かんでいた。

まるで地球儀の様にも見えるが、不思議なのはその地球儀にアブルリー達が吸い寄せられている事だ。

その光景は一言で言えば“引力”が働いている様に見え、一定の数が集まるや否や、巨大な雷がアブルリー達を飲み込んだ。

——しかし、それでもまだ序の口に過ぎなかつた。

(何か来る……)

不意に悠は何か感じ取った時だった。

二人の上空を“何か”が横切ったのだ。悠は反射的に顔を上げ、すぐにその“存在達”の姿を捉えた。

「あれは鳥?……牛の骨?」

牛の骨の様な物に座る女型。

金色の翼を持ちし人型。

巨大な球体を肩に持つ者。

三つ首の番犬。

火の灯った杯を持ちし女型。

それらは現れると同時にシャドウ達を次々と薙ぎ倒して行き、その光景に悠とクマが目を奪われていた時だった。

隙を見せた悠とクマへアブルリーが巨大な口を開けながら襲い掛かってきた。

「しまっ——」

悠は気づくがワントンポ相手の方が早い。

強い衝撃を悠は覚悟したが、それが訪れる事はなかった。

巨大な“盾”と、盾よりは小さいがそれでも大きな“槍”を持ちし者がアブルリーを吹き飛ばしたからだ。

「助かった……が」

悠は冷や汗を流しながらも、己を助けてくれた存在を見上げる。

シャドウを圧倒していたから既に察してはいたが、その存在から発せられる幻想的な蒼白い光がある事でそれは確信へと変わった。

「……ペルソナ？」

「はい……これが私達のペルソナです」

背後からの声。それは女性的な声で在り、明らかにクマのものではなかった。

しかし、少なくとも悠には聞き覚えがある声でもある。

「だ、誰クマ!？」

ただ一人、クマだけは知らないのもあって警戒するが、霧から現れる者達の姿に悠は一息入れた。

「やっぱり、アイギスさん……美鶴さん達も」

「やはり悠さんだったんですね……」

霧から現れた者達。それは辰巳ポートアイランドで姿を消したアイギスと美鶴達だった。



「テレビの中だあ!？」

「正確にはテレビの”中に存在”する世界です」

情報交換兼整理。今の状況を悠が美鶴達に説明すると、素つとん狂

な声で叫ぶ順平へ慣れた様子で悠は冷静に対応する。

そんな悠に順平だけではなく、ゆかりも混乱気味に聞いてしまう。「そんなテレビの世界って……ああくちよつとゴメン。まだ頭が全てを処理できないみたい」

頭を押さえながら何とか現状を理解しようとするゆかりだが、無理もあるまい。

順平もゆかりも、美鶴達全員に言える事だ。

この世界に来た当時、この世界に入った時のショックからか美鶴達は意識を失っていたのだ。

そんな時に不幸中の幸いと言うべきか、最初に意識を覚醒したのは美鶴・明彦・アイギスの三人。

この世界の事等は微塵も分からず、先程まで自分達は月光館学園にいたと言う事実によって美鶴達は困惑状態であった。

しかし洗夜がない事で先程の光景が甦り、自分達は再び“非現実”に巻き込まれたのだと理解できたのだ。

その後は風花も目を覚まし、彼女の探知特化のペルソナ『ユノ』によって場の把握をし始めた所、大量のシャドウの反応。そして誰かが戦っている事を知った美鶴達はその場に駆け付けて現在に至るのだ。

それでもまだまだ混乱しているであろう状況だ。悠は落ち着かせるように話す。

「無理はしないで下さい。逆に、こんな現状をすぐに理解出来る方が難しい」

順平同様に、ゆかりに対しても冷静に対応する悠。

そんな慣れた様子に悠に美鶴が口を開く。

「……先程、君はこの世界について軽く説明してくれたが、それだけでは分からない事が多すぎるな。前にも似た様な場所へ連れて行かれたが、あの時とは状況が違い過ぎる」

前はお見合いの時に洗夜の“異変”によって巻き込まれたがすぐに帰還を果たした。だが今回は前とは違い、完全にこの“世界”へ足を踏み入れたと感じ取れる。

「似た様な世界を知っているが……ここもまた“異常”な世界か」

そう言つて美鶴は己の足下を見た。

そこには何処から出ているのか分からない光によつて生まれた彼女自身の影があつたのだが、これがまた普通の影では無い。

本来ならば只、真つ黒な筈の影なのだが今は真つ黒どころか二、三色の色が混ざりあつている様な変な模様が映し出されている。

常識はずれな影を見て、美鶴ですら多少は困惑の表情を表してしまふ。

そして、アイギスと風花もまた、美鶴の言葉に繋ぐ様に辺りを見た。

「それだけではありません。この霧、そして……」

「さっきのはやつぱり……」

シャドウ関連に対策されているアイギスの眼すらも遮る霧と、辺りから微かに感じている気配に風花が恐る恐ると言つた表情で辺りをキョロキョロと見回す。

そんな風花の様子に悠が気付き、悠は彼女へ言つた。

「こんな世界にも住人はいます……」 シャドウが

悠の言葉にあつた聞き慣れた単語に、混乱していた風花達は驚いた表情を出すすぐに冷静になれる。

最初に風花が「シャドウ」の気配を感じ取れていた事もあるが、やはり詳しい者から聞くのとは印象が違う。

美鶴達もそうなのだろう。やはりか……と呟きながらも、冷静な態度は崩さなかつた。

「ところで……次は俺から良いですか？」

美鶴達が落ち着いた事で今度は悠が質問をしようとする。

説明はしたが、美鶴達がこのテレビの世界にいる理由はまるで分つていないのだ。

「一体、何があつたんですか？」

「……そうだな」

悠の言葉に美鶴は周りの様子を確認しながらも、静かに頷いた。



「兄さんが!？」

美鶴からこれまでの話を聞いた悠は驚き、声を上げた。

まさか普通に出て行った筈の兄、洗夜が関係しているとは思わなかったからだ。

しかし悠の驚きは仕方ないが、その悠の声で驚く者達もいた。

「えっ……兄さん？」

「やっぱり、あなたは洗夜さんの……」

風花は困惑した様に。乾はどこか察していた様な感じで呟くと、悠は二人の方を向いた。

「……俺は鳴上 悠と言います。兄は鳴上 洗夜です」

「ええッ!？」

「そう言えば似てる……」

風花は驚き声をあげ、チドリは冷静に悠の姿と洗夜を重ねていた。

洗夜の弟がこんな所にいる。誰でも驚くべき内容である筈なのだが、先程からの様子を見る限り例外がいた事に気付く者がいた。

それは乾だ。乾は困惑気味に、そして疑いの眼差しを美鶴達へと向ける。

「美鶴さん達は悠さんの事を知っていた様子でしたよね……どういう事ですか?——今思えば、先程の洗夜さんとの再会の中から変でした。僕達に何か隠しているんじゃないんですか!」

「ちよっ! 落ち着けて乾! 俺等にも色々あったんだ……」

順平は慌てて乾を止めようとする。

「落ち着ける筈ないでしょう!?! 洗夜さんが突然去った理由も分からなかった……美鶴さん達が知っていた様子でも、いつか話してくれるって信じてました。——けど! こんな状況で何も言ってくれないなら、僕達はどうすれば良いんですか!」

「……確かにそうだな」

明彦は言葉が見つからない、そう言った風に険しい表情で呟いた。

そんな表情を見てしまうと何とも言えない気分になる。自分で言った手前、どうすれば良いのか乾も分からなくなってしまうた。

「本当に、何が起きているんですか……」

「——私から話そう」

「私にも……話をさせてください」

美鶴と風花が前に出てそう言った。

美鶴はあの時の事を知っている者として、風花は直接洗夜から乾達の事を頼まれた者として、悠や乾、そして皆と自分の為に語りだした。



美鶴が語った事、それは何故自分達が悠の事を知っているのか。何故、洗夜の事を分かっていたのか。

——そして二年前、洗夜が消えた時の出来事。

風花が語ったのは洗夜から伝えられた事、それはペルソナの制御が出来ない事、ワイルドの力が制御出来ない。

——そして、このままでは“再び” 皆を傷付けてしまうという事だった。

美鶴と風花は己が知っている事を全て吐き出し、両者が語り終わった時に迎えたのは“沈黙”

怒り・悲しみ等の感情の言葉ではなく、誰も何も発さない沈黙。その中で、ようやく言葉を放ったのは乾だった。

「なんですかそれ……そんな事、信じられる筈ないじゃないですか！」
暗く重い表情を浮かべていた乾だったが、感情を爆発させる様に叫んだ。

——信じられなかった。あんなに強かった洗夜がそんなに苦しんでいる事が。

——信じる事は出来なかった。洗夜と美鶴達にそんな事が起こっていた事が。

「——すまない」

美鶴が呟き、明彦は口を閉じたまま沈黙を貫くが握られた拳は震えていた。

その光景で充分だった、乾が今までの事が本当の事だという事が。

「どうして……そんな事になってしまったんですか……？」

乾は諦めた様に顔を下げながら誰に言ったでもなく呟く。

「……それは私達にも分からないの」

「分からないってそんな……自分の事じゃないんですか！」

「落ち着いてくれ乾！ 本当なんだ！——本当に俺っち達にも分からねえんだ……」

顔を下に向けながら呟くゆかりの言葉に感情的に迫ろうとする乾。そんな彼を順平が間へと入り、何とか説得するがやはり当事者である順平の表情は暗かった。

そして結局、望んだ答えは何一つ得られなかった乾も黙るしかなかった。

美鶴達も本当は何か話してあげたかったが、事実を知っているのは洗夜だけだ。その洗夜から何も聞き出せなかった自分達には何も出来ることがないと諦めるしかなかった。

アイギスもそれは同じであり、何か思う事があってもそれが“ 真実” なのかと言う保証もなければ、その答えが未だに自分の中でも曖昧過ぎて言葉に出来なかった。

そんな中で悠はある言葉を思い出していた。内容は前に洗夜が言った言葉だ。

『俺は……利用してしまっていたんだ。……その結果、俺は仲間達に苦しみの絆を——』

『これは“ 罰” なんだ……』

利用・罰。二つとも良い思いとは少し離れている言葉。

それを洗夜が仲間の話の時に言っていた事に悠は疑問を抱いていた。

その言葉を言った時の兄の声には“ 後悔” の感情も混ざっており、まるで洗夜自身が美鶴達に何かをした様にも聞こえる。

——兄は一体何を後悔している？

悠は今までの兄の姿もあってか悩みながら考えた時だった。

『築け……黒の絆を——！』

「！」

悠は不意に思い出す。兄の部屋を調べた時に聞こえた声の事を。

思い出すと同時に胸がザワザワと仕出し、悠の中に一気に不安が込

み上げる。

——恐らく……俺は兄さんと美鶴さん達の間は何が起こったか分かっている。

だが悠は己が不安を抱いた事、それが“本能”から来ている事も理解する。

何か自分にとっても何かがあるのだろうか、悠は目の前の問題から目を逸らす事はしなかった。

——思い出せ。……あの声が聞こえた時、自分は何をしていた時だったかを。

悠は思い出そうとし、その答えが喉まで出かかった。

——その時だった。

「やっぱりそうクマよ……」

「クマ……？」

不意に耳に届くクマの声。それに悠の意識、そして美鶴達の意識も引っ張られた。

悠や美鶴達がクマの方へ顔を向けると、クマは周囲を不安そうにしながらキョロキョロと見回していた。

いつもならば美鶴達の様な美人にうるさいのに、今の状態のクマは珍しく悠もそんな様子に首を傾げていると美鶴が悠に声を掛けた。

「悠君、その……先程から気にはなっていたんだが……」あれ“はなんなんだ？”

美鶴が代表する様にクマの方を向いた。

確かに始めてクマを目撃した美鶴達からすればクマの存在は謎でしかない。

故に悠は考えた……。

——なんて説明しようか……？

【ジュネスのマスコット・秘密兵器・授業で作りました】

悠が考えたのはこの三択で在り、考えてみれば悠もクマを他者に説明出来る程理解は出来ておらず、それはクマ自身も己の正体を分かっているという為仕方ない事だった。

と言う訳で、悠は取り敢えず三択から考えた。

「秘密兵器です」

「秘密にしてはやけに目立っているが……っ」

悠の言葉に明彦は疑問を持つように首を傾げると、辺りを見ていたクマの動きが止まり、悠達の下へとやって来た。

「クマ、どうしたんだ？」

「センセイ……やっぱりそうクマよ。この世界の異変の原因は“大センセイ”クマ……」

申し訳なさそうに呟くクマに悠は驚いた。

「大センセイ……とはどなたの事でしょうか？」

「兄さんです」

聞きなれない“大センセイ”と言う者が誰なのかアイギスが悠に問い掛けると、悠は洗夜である事を教えると順平は納得する。

「ああ……ずっとお前の事をセンセイって呼んでたからな。その兄である鳴上先輩は大センセイか！」

「分かりづらいでしょー！」

ゆかりが順平とクマへ向けて言い放つが、事態はそれどころではない。

「えっと……クマくんではないのかな？——この世界の“異変”って……それとその原因が洗夜先輩って言うのは一体？」

「あつそうか……フウカちゃん達はこの世界初めてクマね。それなら仕方ないクマよ」

情報交換はしたが今この世界で起きている異変を美鶴達に説明はしていなかった事を悠とクマは思い出し、このまま話しても美鶴達には内容が伝わらないだろうと考えた。

洗夜が原因と言うのも気にはなつたが、悠はまず“異変”から説明し始めた。

異変に関しては悠自身もあまり分かっておらず簡単に短時間で説明ができた。

風花は途中でクマから呼ばれた事に『フ、フウカちゃん……』と困惑していたが、美鶴達はその話は理解した様に頷いてくれた。

「……そういう事だったのか」

「このシャドウは少し変だなとは思ってましたけど、あの状態は異常なんですわね？」

美鶴と乾の言葉に悠は頷いた。

「はい。この状態はいつものこの世界ではないんですけど、その原因が……」

「冨夜さんと言うことですね」

アイギスが先程の言葉を思い出すと、彼女や悠を含め全員がクマの方へ顔を向ける。

「なんとなくだけでも……前に会った時に大センセイの力が不安定な気はしていたクマよ。それとさっきまでの話を聞いて確信したクマ。きつと大センセイのワールドが周りのシャドウに影響を与えているって」

「つまり……結局はいつも通りなのか？」

「まあ……簡単に言えばそうクマね。多分、大センセイのシャドウが出ているクマよ」

悠はまさかとは思ったが、今までと同じでどうやら【冨夜の世界】とシャドウが出ているらしい。

その結果がこれだが影響が今までの雪子達の比ではない。ワールド故なのか、どうやら今回は一筋縄ではないかない事を胸に秘めた方が良さだろうと悠は思っていた時だった。

「ああ……すまんが俺達にも分かりやすく教えてはくれないか？」

明彦が事情を知りたそうに悠へ問い掛ける。

そして悠もシャドウはシャドウでも、抑圧された存在のシャドウの事は話していない事を思い出し、明彦達にすぐに説明する。

明彦達も本当ならパンクしそうな情報ばかりなのだが、彼等が静かに聞いている事に場数の差も悠は感じ取っていると明彦達は頷いた。「成る程な……どうやら今の話通りならば冨夜のシャドウがいるという事か」

「実際、私達は鳴上先輩のシャドウらしきものを見ているから……今の話を聞けて寧ろ納得できたわ」

お見合いの時、テレビの世界に来た時。二回、冨夜のシャドウらし

きものを目撃しており、明彦達は困惑するよりも寧ろ洗夜？の正体が分かり安心すらあった。

「しかし問題はその原因の場所……そこを探すには探知能力のペルソナがいる……」

「うん……だから私が見つけてみせます」

チドリ言葉に風花が前に出ると同時、彼女のペルソナ『ユノ』が現れて彼女を包み込んだ。

「凄いな……」

「ひゃあ……フウカちゃんは探知タイプのペルソナ使いだったクマね」

現れたユノから放たれる存在感はりせのヒミコの比ではなく、見ただけで風花がりせ以上の力の持ち主である事を理解した悠とクマは驚き、そして尊敬の目を風花へ向けた。

「はは……」

二人からの真剣な眼差しに思わず風花は苦笑いを浮かべる。

そんな眼差しで見詰められたのが初めてであり、同時に目の前の二人はペルソナ使いとして後輩でもある。

つまりは風花も照れくさいのだ。

「あつ……そうだクマ。美鶴さん達に装備を持ってこないと」

「そういえばそうクマね。それじゃ、クマもお手伝いするクマ」

悠の言葉にクマが頷くと、二人は広間の隅っこに向かい何やら漁り始める。

美鶴達は今度は何だと思いつながら見守っている内に二人は両手一杯に何かを抱えながら戻って来ると、それを美鶴達の前に置いた。

それは一言で言えば“武器”だ。剣・槍・弓等何でもござれ。これらは全て悠達がいだら屋で買い漁った物だが、誰の装備にもはまらなかつた武器。言わば残り物だが、いだら屋製であつて質は良い。

そしてそんな山の様な武器に美鶴達は絶句してしまう。

「……これは君達が？」

「これは流石のおれっちも驚き……」

美鶴は困惑する様に、順平は反応が困る様に苦笑している。

よく今まで警察に捕まらなかったと叱るべきか、それとも褒めるべきか悩むレベルだ。

少なくとも銃刀法違反を回避するのは難しいレベルだろうが、今はありがたい事だった。

「まあ今はありがたく使わせてもらいましょう。流石にこの世界を手ぶらでつてのは不安なもの」

「そうですね……僕もこの槍を使わせていただきます」

「ワン！」

ゆかり達も苦笑しながらもそれぞれ武器選んでいき、乾も槍を持ちながらコロマルへ小太刀を取り付けてあげた。

その後は順平、チドリも武器を選んでゆくが美鶴・明彦・アイギスは選ばなかった。

「あれ？ ミツルちゃん達は選ばないクマか？」

「ツ！——ミ、ミツルちゃん？——ゴホンツ！ 私は大丈夫だ。アイ

ギス、頼めるか？」

「はい」

クマからのまさかのちゃん付け呼びに美鶴は一瞬固まるがすぐに戻り、アイギスへと何かを頼むとアイギスはどこからともなく一本のサーベルを美鶴へと渡す。

「今は手慣れた武器を使いたい」

「そうだな……」

美鶴はサーベルを慣れた様に振り、明彦もいつの間にか腕にグローブを付けている。

「全武装の安全装置を解除しました」

アイギスはそう言うと言いつつ服を脱ぎ捨てた事で彼女の姿が現れる。

白銀の身体。それは機械の身体だった。

「アイギスさん？」

「クマも今日は驚きばかりクマー！」

アイギスの姿を見た悠とクマは純粹に驚くが、しかしその様子に恐怖などは一切見せなかった。

「驚きましたか？」

「びつくりです」

アイギスの問い掛けに悠がそう言うと、アイギスは思わず笑顔を浮かべてしまう。

菜々子と同じ悠からも恐怖などの感情が無い事を察したからだ。

そんな風に悠とアイギスが話していると、クマは手をポンツと叩いて何かを思い出していた。

「あっ忘れていたクマ……もう今日は色々あつて大変クマね」

そう言いながらクマは美鶴達に眼鏡を配りまわり、全員が受け取るのを確認すると困惑気味に眼鏡を持つ美鶴達に説明する。

「そのクマ特製の眼鏡をかければ霧の中でも大丈夫クマ。度も入っていないから問題もない筈クマよ」

「そう言えば君も付けているな……」

「ハイカラです」

美鶴が悠も眼鏡を付けている事に気付くと悠は誇らしげに頷いた。

「ハイカラかどうかは分からんが……霧は見えなくなったな」

「もう何でもつすね」

明彦と順平は受け入れが早く、他のメンバーも次々と掛けて行く。

クマはコロマル用にも配慮してか、コロマルのはゴーグル型の眼鏡で邪魔にもなっていない様だ。

「これで準備は大丈夫な筈クマ……後は——」

下準備が完了したことで後は洗夜？はいるであろう世界の場所だ。

クマはそう言って風花の方を向き、悠達も風花の下へと向かう。

「風花さん。何か分かりましたか？」

悠が風花に声をかける。

「……不思議な世界ですね。この世界以外にも周りから別のなにかを感じます」

目を閉じながら集中する風花。

別の何かとは雪子達が生み出した世界の事だろう。

洗夜のシャドウの影響が強いとは言え、この世界に馴れていない風花には霧や他の世界が邪魔でいつもの様には探知が出来ないでいた。

しかし、それであつても風花と“ユノ”の力は強力だ。少しずつだ

が、探知で範囲を広げている。

——そして、その時が来た。

「……………見つけました。ここから少しですが、離れた場所に洗夜さんと強い力を感じます」

風花のその言葉に悠と美鶴達は頷き合う。

「……………風花、案内を頼む」

「はい。皆さん……………こっちはです」

美鶴へそう言うと、ペルソナを一旦消し歩き出す風花を悠とクマ、そして美鶴達が後を追った。



——違和感

風花の案内によつて兄・洗夜の下へ向かう現在の自分達の状況。それに悠は違和感を感じていた。

先程の広場と変わらない道。洗夜の場所にはまだ着かないにも関わらず、シャドウとはまだ一回も戦闘になつていなかった。

洗夜のシャドウによつて影響を受けているであろう異常なシャドウ達。

天敵であり、問答無用で襲う対象が集団で移動しているのにシャドウには全く出会つてなかった。

雪子達の世界へ向かう途中でも数回は戦闘しており、今この世界に起こっているシャドウ達の異変も考えれば何者かの作為を感じる程に出会わない。

しかしそれでも救いなのは、リセを超える力を持つ風花が同行している事だろう。

なにかあれば彼女が異常を知らせ、クマも少しは勘づいたりしてくれる。

だがそれでもいつもと違う世界の雰囲気、悠は胸の中で静かに神経を削っている間に順平達はテレビの世界を見回していた。

「……………何もないんだな」

「特にこれと言った物……………だけどね」

順平とゆかりは物珍しそうに辺りを眺めながら歩いて行く。
タルタロスとは違う異質な世界。なにか思う事があるのだろう。
そんな風に暫く歩いていたら時だ。突如、コロマルが足を止めて唸り
声をあげ始める。

「……グルル」

「どうしたのコロマル？」

チドリがコロマルに気付く顔を向けると、アイギスがコロマルに近
付き通訳する。

「……視線の様なものを感じる。そうコロマルさんは言っておりま
す」

「視線……ですか？ でも、僕は何も……悠さんは何か気付きました
か？」

「いや、特にこれと言った事は……でも、油断しないに越した事はない
筈だ」

歩きながら振り向き、乾にそう伝える悠。

自分達よりはこの世界に慣れてる悠の言葉には説得力があり、乾
やチドリ達も少しは安心できた様子であり、最低限の警戒心を纏いな
がらも乾達は肩の力を抜いた。

——その時だった。

「これは！」

突如、悠達の世界が黒に染まった。

その事でパニックにはならなかったが、困惑の表情を隠せないメン
バー達に風花は素早く説明する。

「入りました。ここからが洗夜先輩が生み出した世界です」

「ここが兄さんの世界……？」

「洗夜はこの先にいるのか？」

悠は息を呑むように眩き、明彦は風花の方を向いて聞き返した。
「はい……ここから少し行った所に何か大きな力を感じますから」

風花の言葉に全員が再び周りを見回した。

文字通り黒い地面、周りに佇むオブジェなのかどうかも分からな
い、赤やら青やら色々な四角い物体。

悠とクマでさえ今までのダンジョンの中で、一番の異常さを嫌でも感じてしまった。

流石の悠とクマでさえ息を呑み、そんな様子に順平も帽子を被り直しながら空を見た時だった。

順平はこの世界の異常を思い知らされた。

「なっ!?——あれって……!」

順平の平常ではない口調の言葉に全員が順平に視線を向けた後、メンバー達も同じ様子が同じ様に空に顔を向ける。

そして、そこには合った物に悠と美鶴達は我が目を疑った。

「!……どこまでも、驚かさされるな」

「黒の……”満月”です」

黒く染まった世界の空に君臨していたのは、空と同じく黒色の満月だった。

しかし黒とは言え、それは新月でも日食の様でもない。確かに月の姿が捉える事が出来ており、それでも色が黒だと言える状態だった。

だがその月の異常さは色だけではない。ジツと見つめていると、まるで意識までも吞まれていきそうな力を感じてしまう。

そんな月に当てられてたのか、ゆかりと風花は見ているだけで思わず吐き気を催した。

「なにあの月……頭がクラクラする……!」

「私、少し気分が……」

倒れそうになる風花に、側にいたチドリが支える。

「大丈夫、風花?」

「ありがとうチドリちゃん……でも、大丈夫。行きましょう」

「……はい」

再び一人で立つ風花の姿に、悠と美鶴達も頷くしか出来なかった。洗夜を見付けて助ける。自分にはこれしか出来ない。そんな思いを胸にしまいながら風花は静かに案内の為に前に出たのだ。

——だがそんな時だ。

『何処ニ行ク……?』

聞き覚えのある声が悠と美鶴達に聞こえた瞬間、反射的にメンバー

達の動きが止まった。

そして全員がゆっくりと背後を振り返ると、そこにいたのは……。

「兄さんのシャドウ……!」

服装は変わっていたが歪んだ笑みを浮かべた洗夜？改めへ洗夜の影がそこにいた。

全身を基本的に黒で統一された服装だが、服の柄は色んな色の鎖が施されたもの。

まるで拘束衣を思わせる姿に悠と美鶴達は危うく吞まれそうになるも何とか耐えるが、風花とクマは別の意味で吞まれようとしていた。

「嘘……!… こんな近くまで接近されてのに気付かなかったなんて……」

「匂いを感じ取れなかったクマ!… こんな強い力を持つてるシャドウなのに、気付けない方がおかしいクマよ!」

自分達の探知を糸も簡単に抜けられた事に驚きを隠せない二人。りせを上回る風花、悠達が来るまではシャドウから隠れた生活をしシャドウに敏感なクマの二人は、糸も簡単に己の探知を突破された事に驚きを通り越してショックすら覚える。

だが、それと同時に今回の様な出来事に美鶴達を始め、当事者である風花にも何故か初めての体験に思えない感じを覚えた。

デジャブの様な感覚。嘗て、自分達はこんな光景を見た事があった様な気がする。

そう考えた美鶴達、そしてそれが何か気付いた。

「まさか!」

風花は何かを思い出した様に声をあげると、その声に答えるかの様に美鶴も苦虫を噛みながら洗夜の影を睨み付ける。

答えは簡単だった。少なくとも二年前、洗夜と共にいた者には分かる事がある。

——それは。

「へメラ」のジャミング能力……【アンチ・マハアナライズ】か……!」

「アンチ・マハアナライズ」……通称、ジャミング能力。

それは現在、桐条が把握しているペルソナの中でも洗夜のペルソナ『ヘメラ』だけが持つ希少なスキルである。

風花やりせが持つ、能力を把握する為のアナライズとは真逆の能力。処か、彼女達にとつて最悪にし最強の天敵であると同時に完全なアナライズ潰しの力。

情報はおろか、姿すらも隠せる程に強力なスキル。戦闘能力を捨てた対価に得た力とも言えよう。

それが今、洗夜の影がその力を得ている。悠は静かに刀に手を添えながら、洗夜の影から視線を外さずに見続ける。

「やっぱり、ペルソナの力も支配下になっているのか……」

「ゴクツ……！　クマ、ちよつと武者震いが……」

人の姿でありながら、大型シャドウを前にしている様な迫力を前に悠は息を呑み、クマは思わず震えてしまう。

だが、大型シャドウ化していないと言う事は洗夜はまだ否定していない証拠。どう行動するか、ここが分岐点となるとこの場にいる全員が思っていた。

——そんな時だった、洗夜の影が不意に一冊の本を悠の前に放り投げた。

それは辞書よりも厚い本であり、悠達にとつても見覚えのあるものだった。

「——兄さんの”ペルソナ白書”!？」

悠が拾ったのは洗夜の所持品であるペルソナ白書だった。

本来なら洗夜が持っている物。その白書を悠は無意識の内にページを捲ると、悠の視界に入ったのは全て”白色”となったページのみであった。

「既にペルソナが……」

「クツ！——シャドウ！　洗夜は何処だ！　アイツに何をした!!」

この世界に来るときに洗夜は呑み込まれてしまった。その事を思い出し。洗夜の身の危険を感じた明彦は拳を握り締めながら洗夜の影に向けた。

しかし、そんな明彦に洗夜の影は特に気にもせず、静かに笑い声を出す。

『クク……！　ココマデ来タ……新タナ絆ヲ築ク為カ？　寂シイモ
ナ……孤独ハ……』

「なにか様子がおかしい？」

「気にする事ないわよチドリ。言葉遊びに決まってるわ！　それよりも質問に答えなさいよ！」

「兄さんは何処にいる……！」

ゆかりと悠の言葉に続く様に美鶴達も又、静かな構えを解かず、洗夜の影へ少しだけ距離を詰めた。

数的にも何かされたとしても対処できる筈だった。

すると、洗夜の影は悠の言葉に首を傾げた。

『見エナイカ？　“ソナナ物”ヲ付ケテイルカラダ……見エルダロウ……目ノ前ニ！』

「ッ!?——これは……！」

悠は己の目の前で起こった事に驚きを隠せなかった。

空に君臨する黒の月の光がこの世界を照らした瞬間、それは出現する。

一言で言えば黒い塔。

最上階が円上の広場になっている、天にも届くと錯覚しそうになる程に高い塔だ。

だが、悠も美鶴達も最上階等は目にも入らない。

そんなモノを見るよりも意識を持っていかれるモノが目の前にある。

出現したのは黒い塔だが、形が異常であった。

赤い家、黄色のビル、青い小屋等々、色とりどりの建物や物が黒い塔にぶつ刺さっているのだ。

いや、恐らくはぶつ刺さっていると言う表現も正しくはない。

正しく言うならば、黒い塔から色とりどりの物が”生えて”いる。

建物の存在感や異常さ、この全てが圧巻なのは悠もクマも、美鶴達でさえ否定出来ない。

しかし、そんな状態でも異常は終わらない。そんなメンバーの上を“何か”が通って行くのに悠は気づき、見上げるとそこにあったのは……。

「電車……？」

そう電車だった。電車は真っ直ぐに異様な目の前の建物の中へと入って行き、その光景を見ていたアイギスは再び気付く。

「良く見れば……他にも電車があります」

アイギスの言葉に悠や美鶴達も目を凝らし、しっかりと目の前の建物を見るとまるで纏わり付く蛇の様に電車が何台も走っているのだ。

そんな不自然な建物だが、電車や建物の姿を見るとある場所に思えた。

「まるで“駅”だ……」

悠の呟きに美鶴達も思わず納得する。

“黒い電車”が赤・青・黄色等、色んな色の建物に入って行くのだ。確かに駅と言うのが的を射ているのかも知れない。

そう、ここが洗夜の作り出した世界【黒の駅】なのだ。

そして、悠達がこの世界の存在を完全に認識した瞬間、洗夜の影は悠を見ながら静かに語り出す。

『来ルノカ？ 黒キ愚者ノ下ニ？』

『入ルノカ？ 黒キ愚者ノ世界へ？』

『見エルノカ？ 黒キ愚者ノ真実ガ？』

一々、間を空けながら話す洗夜の影。

まるで何かの役になりきっているかの様に両手を挙げたり等、何かリアクションをしながら話していく。

そんな様子だが、悠達は静かに状況を見極めようとする。

確実な事しか出来ない。その思いを胸に、悠達は洗夜の影を見ている時だった。

洗夜の影の雰囲気が変わり、場の空気が変わる。

『……辿り着ケルノカ？ 黒キ愚者ノ所へ？』

そう呟いた瞬間、洗夜の影から巨大な力が放たれる。

『コノ数多ノシャドウヲ倒シテナ!!』

「！——シャドウです!？」

洗夜の影が言い終わると同時に風花が叫んだ瞬間、悠の周りから大量のシャドウ達が出現する。

アブルリー・ダイス・ギガス・アニマル・武者。

少なくとも、一目見ただけで五種類ものシャドウが確認出来る。

所々に通常の大型シャドウも存在しており、悠達は瞬く間にシャドウに囲まれてしまった。

その中に既に洗夜の影は消えており、クマは武器である爪を出しながら悠に言った。

「やっぱりそう言う事だったクマか。ここまでシャドウに会わなかったのは、シャドウがこの世界に集まっていたからと言う事……」

「それは随分と手の込んだサプライズだな」

「ああ！ 腕が鳴る程にな！」

悠の冗談に明彦も腕を鳴らしながら答え、美鶴達もそれに頷く。

「風花、君は後方に下がってサポートだ。ゆかりとチドリは風花の護衛……残りのメンバーも臨機応変に対処。悠君、クマ……君達もいるか？」

「いつでもどうぞ」

「センセイと同じく」

美鶴からの問いに頷き、ペルソナカードを取り出す悠とクマ。

シャドウも既に臨戦態勢。

「皆さんー！」

アイギスは素早く、何処からともなく出した白い拳銃“召喚器”を所持していなかった順平達に投げた。

そして、順平達がそれを素早く掴んだ瞬間、全員が叫ぶ。

——ペルソナ!!

仮面の名を呼び、悠達の周りに多数のペルソナが現れシャドウ達に飛び込んで行く。

洗夜救出の幕が上がった。

——しかし、この戦いを洗夜だけの為と思ってはいけない。

——洗夜救出のだけの戦いとは思ってはいけない。

——これは鳴上悠、そして元S・E・E・Sメンバー達にも大きな意味があるのだから。



——悠達がシャドウと戦いを始めた頃、テレビの世界に新たに“二人”足を踏み入れる者達がいた。

一人はエレベーターガールの格好をした銀髪の女性であり、彼女の周りを小さな妖精が飛び回っていた。

もう一人は、破れたニツト帽とボロボロのコートも纏う青年だ。青年は警戒するように辺りを見回していると、女性の方が何やら拾い、それを青年へと渡す。

「これをどうぞ……」

「……？」

青年が受け取ったのは眼鏡だ。拾った物であり、何故眼鏡をしなければならぬのか分からなかったが青年は渋々と眼鏡を掛ける。

すると、その瞬間に青年の視界から霧が消え去った。

「そういう事かよ……」

「そういう事でございます。——ではレッツゴーでございます。」

謎のテンションの銀髪の女性に青年は溜め息を吐いた。

と言うのも、この青年は目の前の女性に誘拐に近い形でここに連れて来られた様なものだった。

青年も一応は抵抗したのだが、見た目に似合わず女性は力が強すぎたので諦めたのだ。

——しかし青年が諦めた理由は彼女との力差ではなく、それは彼女から言われた事であった。

『その鈴を与えた貴方様の親友様が命の危機に陥っております。——このまま自分は死んだと嘘を吐き続け、見殺しにするのですか？』

「——チッ！」

目の前のヘンテコエレベーターガールに言われた事を思い出しながらも、己の意思で青年はここに足を踏み入れたのだ。

命を助けられた親友の危機。見捨てる事なんて出来なかった。

——今度は何に巻き込まれやがった……洗夜。

異常なモノに縁のある親友の名を呟きながら青年は女性の後を追いかける。

——その時、チリンツと彼の持つ歪になった鈴が小さな音を出していたが、青年以外に聞く者はいなかった。

END

第三十八話：洗夜の根源。逆位置の脅威

同日

現在：テレビの世界【洗夜の世界・黒の駅】

悠は僅かに乱れた息を必死に落ち着かせようとしていた。

兄、洗夜のシャドウが放ったシャドウ達も全てがオーラを纏っており、一体一体が通常よりも強かった。

そんな変異シャドウの群れとの戦いだが、美鶴達の協力もあって何とか余力を残して全滅させる事が出来たが、悠自身が考えていた予想よりも体力を持っていかれている。

周りを確認するように悠は横目で美鶴達を見るが、慣れている様子で疲れた姿を見せる者は誰もいなかった。

——俺がここで疲労を見せている場合じゃない。

悠はそう考えている内、乱れた息は落ち着きを取り戻し、そして落ち着いた。

美鶴達の事は兄から話は聞いており、歴戦と言うのは変だが自分達よりは確実にシャドウと戦い慣れているには悠も気付いている。

故に足を引つ張りたくない。まだ兄の世界に入つてすらいらないのだ。自分の知らなかった兄の事が知りたい。

『お前が知るには……まだ足りない』

悠は、入口の前にいるだけで疲労している自分に兄がそう言っている様な気がした。

だがこちらも後戻りをするつもりはない。向くのは前と横だけだ。

悠は覚悟を入れ直して黒の駅の入口へと立つと、美鶴達も気付いた様に悠の下へやって来る。

「洗夜の作り出した世界……か」

「はい。兄さんの心そのもの……そう思う事も出来ます」

感傷深く美鶴が黒の駅を見上げ、悠も同じように見上げると明彦達も同じように見上げる。

一見すれば駅とは思えない様な異様な姿だが、所々に確かに駅らし

き形があると同時に強烈な威圧感も存在感と同居している。

中に入れば変異シャドウではなく、大型シャドウレベルの敵もいる筈だ。油断すれば途中下車させられるだろう。

そんな想いを胸に悠は意を決して中に足を踏み入れると、美鶴達も続くように足を踏み入れた。



現在：ベルベツトルーム

悠の視界に広がったのは幻想的な明かりに照らされている車内。ベルベツトルームだった。

「あれ……？」

「！——おやおや……これはこれは……」

突然招かれたと不思議に思っている悠の姿に、イゴールも何故か驚いた様子で見えており、隣のマーガレットも同じ様子だ。

「この様に突然訪れるとは、どうなされましたかな？」

「いや……俺もさっぱり。兄さんの世界に入ったと思っただらここに來ていた。——イゴールが招いたんじゃないのか？」

まるで自分達は関与していないと言わんばかりの態度にイゴールの様子に困惑しながらも、悠は事情を知る為に問い掛ける。

普段から何を考えているのか分からないイゴールだ。今回も何かあるかもしれない。

悠が警戒とまではいかずとも色々と考えてるが、当のイゴールは特に気にすることなくいつもの様子で笑い出した。

「ヒツヒツヒツ……いえいえ、貴方様が今、大きな力の前に立ち向かうとしている中でこちらから招く事は致しませぬよ。——寧ろ、これは貴方様の意志で訪れたのでしょうか」

「俺の……？」

悠は思わず考え込む。あの瞬間、一体なにを自分が思っていたのかを。

イゴールは胡散臭いとはいえ信用が全くないわけではない。言葉が正しいならば自分の意志でベルベツトルームに訪れた事になる。

そんな風に悠は悩むように考えていると、その光景にイゴールが笑い出す。

「ヒツヒツヒツ！——分からないならばそれも結構……！——ですが自覚がなくとも私に聞きたい事はあるのでは？」

「……確かにある」

イゴールの言葉に悠は素直に頷く。

悠が洗夜から聞いた二年前の事件の事、それは詳しく聞いた様で実はそうではない事を悠自身は分かっていた。

影時間・ストレガ・ペルソナ暴走での死者。重要な“単語”は聞いたが、肝心な内容は最低限のハリボテの様な内容だった。

陽介達はそれでも驚いて納得した様だったが、悠自身は違った。事件の規模の割には洗夜の教えた内容が薄っぺらいと感じていた。

しかし、だからといって悠はその事を兄へ追求するような事はしなかった。

兄の弱々しい表情や声を聞いてしまえば、それが聞いてはいけな事なのだと分かる。

——だが……。

「兄さんにとって……とても辛く、そして大切な思い出に土足で踏み込む事になるけど……それでも俺は兄さんの事を知るべきだ」

両親が留守にしがちの生活。寂しい想いも沢山あった中で悠の記憶にあるのは兄——洗夜の存在だった。

誕生日やクリスマス等の表立った日は勿論の事、両親と共に過ごした記憶は悠にはなかった。

両親的には子供達を食わせて行くには仕方ないと思いつつ働いていただろうが、両親のいない日々や引っ越しばかりの生活は辛いものと言える。

しかし、そんな中で自分を支えてくれたのが洗夜だったのを悠は知っている。

誕生日だろうがクリスマスだろうが共にいてくれた兄を救う為、悠は覚悟を決める。

「頼むイゴール……兄さんの事を話してくれ」

「……構いません。——ですが、先の事件につきましては洗夜様本人から聞いた方が宜しいでしょう。——私がお話しする事は更なる真実の欠片。あの方のワイルドに関してでございます……宜しいですか？」

「……構わない」

寧ろ好都合だと悠は思った。おそらく、今回の一件に一番影響を及ぼしているのは兄のワイルド能力。悠はそれを知らねばならないとずっと思っていたが機会はなかった。

しかし、イゴールは鼻は長いが嘘を言う存在ではないと悠は信頼しており、直接真実を貰えるとは思っていないが確実にヒントは貰えると感じている。

そんな信頼を知ってか知らずか、イゴールはいつもの調子で笑い出した。

「ヒツヒツヒツ……他者との繋がりで成長して行く力……」ワイルド“は謂わば白。——真っ白な何も存在しない白紙その物でしかありません」

「なんとなく理解できる」

イゴールの言葉の通りとは言いづらいが、少なくとも言わんとしている事は悠は身を持って理解出来ていた。

初めてペルソナに覚醒し、アブルリー・陽介のシャドウと戦った時に比べて今はペルソナの力も数か月前とは比べ物にならない。

それは陽介達・堂島や菜々子・そして稲羽の人々との出会い。——それが絆、繋がりの数でありイゴール的に言えば“色”なのだろう。新たなに誕生して来たペルソナ達の力が上がっているのもそういう事であり、悠は己のワイルドが真っ白ではなくなっている事を今この瞬間、深く自覚する事が出来た。

そして、そんな悠の考えを察しているのだろう。イゴールも迷いなく頷いた。

「……ええ。空っぽの状態で始めた命の旅。——皆、ワイルドを持ちし患者を背負う真っ白な旅人なのです」

——ですが。

イゴールはまるで“例外”がいるかの様に話を区切ると、ややアンバランスな長い両腕、その内の右腕を払う様に振るとテーブルの上に真っ白な紙が現れた。

そしてイゴールが今度はその紙の上に両腕を翳すと、その腕から沢山のタロットカードが出現する。

そのカード達はゆっくりと回りながら落ちて行き、そのまま紙の中に吸い込まれるように消えて行ってしまうが、カードが消えた紙の場所には色が染まっていた。

「これは……？」

悠は困惑しながらも染まりゆく紙の行く末を見続ける。

赤・青・緑等の色に染まって行く紙。それは重なる事で美しい模様となり、同時に新たな色を生み出して行った。

しかし、悠は目の前のその異常に気付いて行く。

次々と色を取り込んで行く紙。しかし、それは徐々に美しい色から遠ざかって行くのだ。

それらは薄暗い色になっていき、やがて紙全体を“黒”が一面染め上げた。

その光景を見終えた悠は新たな展開を求める様にイゴールを見詰め、イゴールはいつもの笑い声で応えた。

「ヒツヒツヒツ！——これもまた一つの答え。一つの可能性なのです。黒のワイルド……否、言うならば“黒き愚者”でしょうか……」

——それが鳴上 洗夜様の“正体”ですか？

「ッ！」

イゴールのその呟きを捉えた瞬間、悠の心臓は大きく一回鼓動を刻み、我に返った様に悠は息を呑んだ。

「……理解できない。俺には分からない……イゴール。これが……ワイルドの終着点なのか！——菜々子や堂島さん、そして陽介達との絆も最後はただこんな……！」

悠は目の前で今もカードを色として呑み込む真っ黒な紙を見ながらイゴールへ問い掛ける。

ドロツとした様に全てを呑み込んで行く黒に、悠は雑味の様なもの

が一切ない純粋な恐怖を抱いてしまっていた。

不思議と紙がまだ真っ白な時は安心感があった。それは色——他者との絆を確かに感じ取る事が出来ていたからかも知れない。

しかし今はもう違う。どれだけ呑み込んでも変わらない黒。目の前のそれが自分に言っ来て来ている様に見える。しまう。

——足りない……もつと寄越せ。もつと絆を寄越せ。

誰かが止めねば全てを呑み込んでしまう。そんな恐怖を更に抱く悠だったが、ずっと眺めている内に不意にある欲求を抱いてしまった。

(触れてみたい……)

それは好奇心から来たものではない。その事だけは悠は分かっていた。

触れたい理由。それ純粋な理由という点では先程と同じだろう。全てを呑み込む黒に“魅了”されただけなのだから。

——触れてみたい。安心できそう。触れていない方が不安だ。

そんな考えに呑まれながら悠は無意識のままに目の前の黒へと手を伸ばす。

このまま黒の力を感じたいと思いつながら……。

——しかし、その時だった。横から悠の腕を掴む者が現れたのは。

「呑まれては駄目よ……」

「ッ！——これは……」

悠の腕を掴んだのはマーガレットだった。そして悠はマーガレットに掴まれた事で我に返り、そのまま彼女の方を向いた。

「気分はどうかしら……?」

「柔らかく、気持ちいいです」

「えっ——?」

気分はどうかと聞いたマーガレットだったが、悠から帰って来た言葉聞いて僅かに表情を固めたが、すぐにいつものクールな表情へ戻し、静かに笑った。

「ふふ……大丈夫そうね」

「お陰様で」

悠は満足そうな顔を浮かべながらマーガレットへお礼を言った。
——すると。

「ヒツヒツヒツ……それもまた一つの可能性。必ずしもの”命の答え^{到達点}”ではございません」

イゴールの声が再び悠を本題へと呼び戻した。

先程まで悠は黒の力に魅了されてしまったが、イゴールは何事も無い様な様子で悠を見続けていた。

「無^白も全^黒も……全^黒てを受け入れる力でございます。——ヒツヒツヒツ……本^黒当は無^白も全^黒も同じ力なのですがね……」

「そうは言うが……俺は確かに今——」

ワイルド^黒の力の片鱗を知ってしまった。同じ力と言われても納得は出来ない。

悠はそう思いながらテーブルに置かれた黒の紙へ再び視線を向けた。——そしてある事に気付く。

「……紙が白い？」

先程まで見ていた紙の色が真っ白に変わっていたのだ。

全てを呑み込むかの様に底の見えない黒。それは既にそこには存在しておらず、代わりにアルカナカードを呑み込んでいるのは白だ。

悠は自分が今まで見ていたのは幻、又は錯覚だったのかと混乱してしまうが、瞬きしてもう一度を同じ場所へ視線を向けた。

——そんな悠を迎えたのは“黒”だった。

「ッ!?——これは……」

もう何が何だか分からず悠は混乱してしまった。

目に写る物が次々と姿を変えてしまい、それが本当の姿なのかが分からない。

「ヒツヒツヒツ……」

そんな悠を見ながらイゴールは左手の人差し指を立てると、テーブルに置かれた紙がクルクルと回転し、それはやがて一枚のタロットカードに姿を変えた。

悠側からは裏しか見えず、そのカードに書かれているアルカナは見えなかった。

「ヒツヒツヒツ……お分り頂けたでしょうか？——その者の歩んできた影響によって人は白にも黒にもなられる。——鳴上 洗夜様の場合は少々特殊なモノと言えるでしょうが、再び戦いの場に戻る貴方が知っておくべき事は……」

そう言つて手を翳すイゴールの手に一枚のタロットカードが舞い上がった。

それは『愚者』のカードであり、愚者のカードはヒラヒラとイゴールの手の上で回り続けている。

「洗夜様のアルカナを支えていた軸となるアルカナは間違いなく『愚者』でありましょう。——ですが、黒の力を支えていたのも『愚者』だけなのでしょうか？」

——愚者も“一色”ではないのですよ？ イゴールはそう言つて再び笑つた時だった。

悠は不意に意識が覚醒する感覚に襲われた。どうやらベルベットルームから出る時の様だ。

「ふふ……少しアルカナの意味も知つた方が良いみたいね」

意識が覚醒する直前、悠はマーガレットから一枚のメモを渡され、それを受け取ると同時に意識は覚醒していった。



現在：黒き駅【一階エリア・エントランス】

意識が覚醒すると同時、悠は黒の駅へ突入した所であった。

悠は錯覚の様に混乱する頭を落ち着かせながら、自分の手に握られているメモに気付く。それはマーガレットから渡されたメモであり、中にはアルカナの意味などが記されていた。

——何故か主に“逆アルカナ”の意味を……。

「……」

悠は何か胸騒ぎを感じながらも美鶴達と共に周囲を見回した。

中は外の外観通り、かなり複雑な構造をしており、クマとペルソナを召喚して辺りを調べている風花は表情を曇らせる。

「マズイクマね……これは」

「この世界から沢山の強いシャドウの気配を感じます。上のフロアも複雑な構造をして……あれ？」

探知していた風花が何かに気付いた。

「どうした山岸？」

「桐条先輩……上の階から人の気配がします。一人……二人……五人程感じます」

風花が感じた気配。しかも五人。その条件に該当する者達を悠は一つしか知らない。

「きつと陽介達です」

「？——君の仲間なのか？」

明彦の言葉に悠は頷く。

「この世界にいるってことは全員がペルソナ使い？」

「はい。皆、自分と向き合ってペルソナ使いに覚醒しています」

チドリの言葉に悠は陽介達もペルソナ使いである事を教えた。

流行ってんのか？——後ろで順平がそう呟くのが聞こえたが、流行ですと言えばスベリそうなのを悠は感じ、特には言わないでおいた。

「……風花、それ以外には何かある？」

「ううん。外の様子が分からなくなっているけど……それ以外はないみたい」

実はそれが風花にとって気にしている事であった。

代わりに中が探知しやすいとかはないのだが、まるで鳥籠の様な罠にはまった動物の様な気持ちを風花は抱いていたのだが、今は先に進むことを皆は選んだ。

「……進むぞ」

明彦の言葉に美鶴達、そして悠とクマも頷き、目の前にある階段を上がって次のフロアへと向かった。



現在：黒の駅【二階エリア】

二階へと進んだ悠と美鶴達が見たもの。それは謂わば“迷宮”であった。

外同様に複雑な形・色。黒の駅というだけあり、周りには改札機や切符販売機等も存在しているが、そのどれもが壊れていたり、柱にめり込むなど普通ではなかった。

そして挙句の果てには悠達が進んでいる通路の床には線路まである始末。

「これ……電車が走って来ませんよね？」

まさかとは思いたくないが、乾が不安そうに呟いた言葉に悠と美鶴達は思わず足を止める。

「そう言われるとかなり不安なんだけど……」

「悠、君達は私達よりこの世界を理解している。やはり可能性にはあるのか？」

不安そうにするゆかりの言葉に頷きながら、美鶴は悠へと聞いた。シャドウの力も強くなっており、その最中に電車が現れでもすればたまったものではない。

故に美鶴達は可能性も含めて早めに知らねばならなかったのだ。

「すいません。俺も言い切れる程の根拠は……」

聞かれた悠も少し考え込んでしまう。可能性的には絶対ないとは言えないが、悠も言い切れる程の自信はなく、答を求める様にクマの方を向いた。

「クマ。やっぱりそういう罫もあるのか……？」

「——ないクマ」

クマはハッキリと言い切った。その表情にはいつものふざけた感じはなく、真剣そのものだ。

そんなクマの様子に悠は驚き、明彦はクマに念を押すように問い掛ける。

「本当に大丈夫なのか？」

「——絶対ないクマ」

有無を言わさないクマの言葉。それはハッキリとした口調であり、今までのクマを知っている悠からしても驚きを隠せない。

「クマ……どうしたんだ？」

「センセイ……クマはこの世界がこわいクマよ。——ずっと感じるク

マ……！」

そう言うクマの身体はどことなく震えており、悠も美鶴達もクマの様子に戸惑いながら彼の言葉を待つしかなかった。

「何を感じた？」

「……分からないクマ。この“感情”がなんなのかクマには分からないクマ！——ただ言えるのは……色んな感情の中、クマ達に向けられている敵意……いや殺意クマ」

恐れる様に発するクマの言葉に誰かが息を呑む。

悠はまだ分からないが、少なくとも悠とは別の事で洗夜と縁がある美鶴達は薄々と感じていたのだ。

それが何なのか分からなかったが、今のクマの言葉で理解できなかった。

——それと同時に、なぜ毘がないのかも理解出来てしまった。

「毘などではなく、自分の手で殺さなければ気が済まない……そういう事か？」

美鶴の発した言葉。それを聞いた時、今度は分かった。

——全員だ。悠とクマを除いた影時間を生き抜いたメンバー達全員が息を呑んだのだ。

「やっぱ……おれっち達じゃ無理なんじゃねのか？——やっぱり鳴上先輩が望んでるのは俺等じゃなくて……『あいつ』なん——」
「いいえ」

心に亀裂が走りそうになった順平だったが、彼の言葉を遮る者がいなかった。

——アイギスだ。

「洗夜さんは知らないだけです。——あの子の“戦い”を……『あの子』の想いを。——ですが、それを伝えられるのは『あの子』ではなく、私達だけです」

いつか絶対に洗夜に伝えなければとアイギスはずっと思っていた。

あの子に起こった繰り返された“あの子”の事を洗夜は全く知らないと同時に、それは『彼』の想いも知らないという事であった。

本当ならばもっと早くアイギスは伝えたかったが、洗夜の様子も

あつてタイミングが合わず話せないでいたのだ。

しかしアイギスは今回の異変も洗夜自身だけの問題ではなく、あの事件の『彼』についての“後悔”も影響していると思つて居るのだ。

——伝えなければなりません。それが出来るのは私達だけなのですから。

アイギスは心中で強く決意を固め。そのアイギスの雰囲気で見察する事が出来たのか、順平も美鶴達も力強く頷き合つた。

「その通りだよな。——確かに鳴上先輩に伝えられんのは俺等しかいねえもんな」

「その通りだ。私達が洗夜の事を分かつていないと同じく、洗夜もあの後に何が起こつたのかを知らない。——絶対に伝えねば……」

らしくなかつたとバツが悪そうに呟く順平と、色々な想いを抱く美鶴。

今も消えぬ“桐条の罪”——それに洗夜を巻き込んだと言っても過言ではなく、今までは大切な人である故に洗夜を救おうとしていたが、美鶴は桐条の当主としてでも洗夜と向き合う覚悟を決めたのだ。そんな仲間の姿。それを見ながら風花も嬉しそうに頷いていた。

(……洗夜さん。私達は皆で洗夜さんに会いに行きます)

風花は喫茶店で洗夜に言われた話を思い出していた。

全てを語つた訳ではない話だったが、洗夜から皆へと託された真実。

洗夜はそれで全てを終わらせようとしたのだろうが、残念ながらもこれで簡単に終わらせられる程度の“繋がり”ではないのだ。

喫茶店では自分一人だけだった為、洗夜を救う事は出来なかつたが今は皆がいる。——風花は心強さの様な、温かさを胸に抱きながら安心する様に小さく頷いた。

「皆で……洗夜さんを迎えに行きましょう」

「はい。——僕も言いたい事が沢山あります」

何も知らなかつた事もあるのだろう。乾も風花の言葉に力強く頷いている。

しかしそんな様子の中、悠の心中にはある“不安”があつた。

それは恐らく戦うであろう抑圧された存在。——洗夜のシャドウの事。

(ずっと抑圧してきた心。それが自由を持った今、一体どれだけの力を持っているのか……)

一人で兄を救うのではない。絆を力としてきた悠は不安を出さない様にしていたがそれは胸騒ぎの類なのだろう。

洗夜のシャドウの力。それがずっと悠の中では消えず、寧ろ大きくなっていた。

——ペルソナとシャドウは同じ存在。

嘗てイゴールから言われた言葉が悠の脳裏に過る。

考えすぎだと思えばよい。だが同時に覚悟しなければならぬ。

——敵は洗夜が誕生させたペルソナの力を全て持っている可能性も。

(俺も……全力で向き合えないと)

覚悟を決めた悠は内ポケットから一枚のペルソナカードを取り出した。

それは悠からしても特別な“ペルソナ”が宿っているカードであり、それ故に今まで戦いで召喚する事がなかったのだ。

強い力には代償が伴う。このペルソナは強力過ぎるのだ。

強力過ぎる為、今の悠では無理をする前提でなければ、このペルソナの力を活かす事が叶わない。

だがそんな事は悠が一番理解しており、悠は落ち着いた様子で笑みを浮かべていた。

——覚悟が出来たからここにいる。

強い想いと共に悠と美鶴達はこの黒の駅を再び進み始めた。

——ただ一人、クマを除いて。

「わからない……」

悠も美鶴達も先に進んでおり、周りには誰もいない中でクマはただ呟いた。

「この世界に来てから色んなものが入って来るクマ……」

困惑しているかのように、クマは両手で頭を抑えながら左右に振つ

て眩く。

この世界に来てからクマは、自分の“鼻”の調子が良い事にずっと疑問を感じていた。

当初は、ここ最近では調子の悪かった事もあって喜びの感情が多かったが、調子が良かった時には感じとれなかった“感情”等を探知できることに気付き、それが違和感へと変わった。

——怒り・憎しみ・妬み。

数多の負の感情が漂うこの黒の駅。だが、それを探知タイプの風花ですら細かに探知出来ないのだ。

——にも関わらず、己がこの世界を“理解”している事が謎で仕方がない。変異シャドウ達の纏うオーラも負の感情から来る強化なのも理解しており、洗夜のシャドウが美鶴達を直接、手を下したい事も何故か分かっている。

——そう。分かり過ぎているのだ。この世界から放たれる力が自分に入って来るのも感じ、クマの混乱はピークに達しようとしていた。

「クマは……クマ……は……」

何が何だか分からなくなってきたクマ。そんな彼の身体から漏れでるのは不気味なオーラ。

シャドウ達が纏っている同じものであり、それがクマを包み込もうと広がった。

——時だ。クマの脳裏に“悠達”の姿が不意に浮かぶ。

「！——そうクマ！ クマはクマ！ 少なくともそう理解した筈クマ！」

クマは纏わり付く迷いと共にオーラを振り払う様に体を振り回す。本物の自分。その事で悩んだが、そんな事は関係ない。この世界に来てから変になったからなんだと言うのだ。

少なくとも、自分には悠達や菜々子が付いている。クマはその事を思い出すと、急いで悠達の後を追いかけた。

「センセ〜イ！ 待つてほしいクマよ！」



【黒の駅・三階エリア：裏切り】の魔術師駅】

——そんなつもりじゃなかった……誰も巻き込む気なんてなかった。——ただ、一人ぼっちが嫌だったただけなんだ……。

「……洗夜」

新たなフロアに足を踏み入れるや否や。美鶴達の耳に洗夜の声が響き渡った。

どこか無気力気味、だけど悲しさを纏わせた声。どうにかしてあげたくとも、洗夜の辛さの根源を知らず、今の状態では何もしてあげれる事が出来ない。

そんなもどかしさを抱きながらフロアの前へと進むと、美鶴達が目にしたのは電車のホームであった。

現実世界の面影は残されているホーム。悠と美鶴達が中央にまで足を進めた時、ホームに鳴り響くは警報の様な音。そして同時に一台の電車が入ってきた。

まるで幼い子供が絵の具をぶちまけた様な複雑な色をした電車。その電車が停車すると、そのまま扉が解放される。

「乗る……？」

「えっ……乗らなきゃ駄目？」

マイペースな様子で乗るのか聞くチドリ言葉に、ゆかりはこんな変な電車に乗らなければならぬのかと戸惑いの言葉を呟く。

別にゆかりも絶対に乗りたくない訳ではなく、もしこれに乗る事で洗夜を助ける事が出来るならば迷いなく乗る覚悟はある。

しかし、外見からして怪しさ満点のこの電車。ハッキリ言ってお尻が凄いのだ。

「……やはり尻か？」

「尻……にしては無駄が多い気がするがな」

美鶴と明彦はそう言って互いに顔を見合わせた。

先程のクマの話では尻で直接、自分達の命を奪う真似はしないと書いていたが、直接的ではない尻の可能性もある。

乗りこんだ瞬間に分断されて別々に飛ばされる可能性もあり得る。

しかし時間も限られおり、美鶴達は素早く話し合いを行い始め、風花とクマも何とか探知を試み始める中で悠は不意に見上げるとある物が目に入った。

それは駅名が記された看板。それが吊るされていたのだが、駅名はそこには書かれてはおらず、代わりに一つの“イラスト”が記されていた。

それはタロットカードの【魔術師】の絵。しかも逆位置でそれが描かれていたのだ。

——逆位置？　もしかして……。

逆位置の【魔術師】の絵。それを見た瞬間、悠は先程のマーガレットからのメモを思い出してそれを開いた。

メモにはアルカナの種類。そして正位置と逆位置の意味が記されている。

その中で悠は【魔術師】の項目を探し、そして見つける事が出来た。「魔術師。逆位置の意味は……：混迷・無気力・裏切り・空回り……？」
想像は出来ていたが、読む限りやはり良い意味ではないと悠は感じた。

しかし、だからといってそれが何だと言うのが問題だ。駅名に書かれた【逆位置の魔術師】の存在。

「……何を示しているんだ？」

この世界にとっての正解が必ずある筈。最悪、イゴール達の言葉も思い出さねばと悠が思った時だった。

——不意に“誰か”が自分の傍を横切って行く事に気付く。あまりに突然だった為、一体、誰かと悠はその姿を目で捉えると、それは“探し人”とも言える人物。

「——兄さん!？」

それは実の兄——鳴上　洗夜その人だった。

しかし、悠の声にも洗夜は反応する事はなく、そのまま停車した電車の中へと乗車してしまう。

そしてその後を追いかける様に電車へと乗り込む悠を誰が攻められようか。

そんな二人の姿を目撃してしまったクマと美鶴達もまた、もう相談する暇なんてなかった。

「センセイ!？」

「今のは洗夜か!?——追うぞー!」

クマと美鶴の言葉を皮切りに、他のメンバー達も駆け出して急ぎ電車へと乗り込んだ。

——瞬間、悠や美鶴達は光に包まれた。



『裏切りもの!!』

目の前の少年の感情爆発な怒号。——それを幼い洗夜は黙って聞いていた。

——また始まった……けど、今回はおれが悪い。

洗夜は静かに息を吐き、少年の言葉を正面から受け続ける。

目の前でヒステリックの様に騒ぐ少年。それは洗夜にとって引越し先での友達なのだ。

同じサッカーチームに所属しており、少年と洗夜はチームにとってのエース的存在。特に少年はサッカーが人一倍上手く、周りの大人達からの評価も高い程。

そんな少年が信頼していたのが洗夜だった。洗夜のサポートもあり、試合では今まで以上に少年の力を発揮させていたのだ。

——洗夜とならやれる! 最強のコンビで試合に勝つんだ!

幼い故に、少年は疑う事をしなかった。これからも長い先、洗夜が自分のサッカーを支えて行くものだ。

だが、それはすぐに訪れてしまった。

『来週、鳴上が引越す事になった』

チームの監督の言葉。それが一言一句、少年は忘れる事が出来ない。

更に言えば、大会は再来週にある。つまり洗夜はそれよりも先にいなくなってしまうのだ。

そして、そんな事実を聞いた少年が取った行動。それが――。
『裏切りもの!!』

洗夜を一人呼び出し、思いつき怒号をぶつける事だった。
そしてそんな怒号を洗夜は黙って受け止めるしか出来ない。

本当ならば、チームのメンバーにはもつと早めに言いたかったのだが、洗夜と悠の両親は多忙過ぎるのだ。

いつ引越すかも分からいままの中、突然に両親から引越す事を告げられた洗夜がすぐに皆へその事を伝える事は出来ない。

洗夜はこの少年が自分を信頼していた事は知っており、それもあつて言い返す事は出来ない。

元々、少年は感情が爆発する事が多かった。家に遊びに来るように言いながらも、自分の思い通りにならないと他の友人を、出てけ!と怒鳴って追い出す事も多かった。

そんな少年の性格を知っているからか、洗夜は引越した後の不安を抱えるがそれを少年へ言う事は出来ないでしまう。

そして結局は少年はずつと洗夜へ、裏切りものと怒号を飛ばし続けた後、不貞腐れた様に軽く洗夜の足を蹴ると去って行ってしまった。それが洗夜と少年の別れだった。

――そして洗夜が引越した後に始まった大会。そのチームの結果は一回戦、惨敗。

原因は少年の独断専行。洗夜が消え、サポートする者がいない。チームプレイもしない少年一人のチームなど恐れるに足らなかつたのだ。

『鳴上がいてくれればなあ……』

『鳴上じゃなく、お前が引越せばよかつたのに……』

チームメイトの言葉。

『君は器が小さい。キャプテンでもエースでの器じゃない』

他チームの監督にすらこんな事を言われてしまう始末。

――鳴上ばっかり……鳴上ばっかり……あんな裏切りものばかり!
り!

“孤独”になった少年。彼は洗夜ばかり信頼されている事に怒る。
——そして、洗夜の後姿を想いながら、己と繋がる一本の“繋がり”
を恨みがましく掴み続けるのだった。



悠と美鶴達は意識を覚醒させる。まるで夢から目覚めた様な気分
だった。

そして思い出すように悠達が背後を振り向くと、そこには既に電車
の姿はない。

「今のは……?」

「洗夜……の過去だったのか?」

悠と美鶴が思い出そうとする様に、ボンヤリしている頭を抑えなが
ら呟く。

幼い少年に怒号を浴びせられている幼い洗夜。そんな光景を自分
達は夢の様な感覚で見っていた気がする。そう悠達は思えた。

全員が見ていたのだ。あの光景を……。

「過去だったとしても……何故、私達はそれを見せられたのでし
ょうか?」

「……分からない」

アイギスの疑問に明彦は首を横へ振る事しか出来ない。

明彦だけではない。ゆかりや順平達も、さっきの光景に色々と思う
事はあるがその真意を察する事はできなかつた。

周りは互いに悩みながらも、先程の光景を思い出して話し続けてい
た。——そんな時だ。

『裏切りもの……裏切りもの……ぜんぶ、あいつのせいだ……!』

突然にフロアに響き渡る声。その声の主の方を皆が向くと、そこに
いたのは先程の光景にいた少年だった。

何やら恨みがましく呟いている少年だが、その姿は輪郭だけが同じ
であり、外見はシャドウの様に真っ黒で金色の瞳だけが光っている。
普通ならば近寄りがたい。そんな存在なのだが、非現実慣れしてい

るこのメンバー。

困惑はするが、その時間は短く。目の前の存在を貴重な情報として見ることにしたのだ。

「鳴上洗夜を知っているのか？」

美鶴が代表する様に少年？に問い掛ける。

——先程の光景は洗夜の過去だ。ならば、目の前の少年は洗夜の闇の根源。それに関わっている筈だ。

ただ洗夜の事が知りたい。嘗て、自分の事を支えてくれた洗夜という一人の男。

自分の辛さを洗夜が支えてくれた事。それに甘えてしまっただけの過去の自分。だが、それは今では後悔となってしまうている。

そんな後悔を背負う美鶴。ハッキリ言って彼女は今、シャドウワーカーの美鶴として来ていない。

桐条美鶴。そんな一人の人間としてここにいる。だが、それが親友としてなのか、桐条当主としてなのか、それとも一人の女性としてなのか。

それは美鶴自身も分からない。——フリをしている。

そしてそんな美鶴の言葉を聞いた少年？ はというと、声に気付いて美鶴達の方を振り向いた。

——しかし、その表情は憎しみで歪んでいる。

『——知ってるさ。全部、あいつのせいだ……あいつのせいで俺の人生は狂ったんだ!!』

「それって鳴上先輩が引越して大会に出なかつた事……？」

『そうだ!! あいつがいればあんな負け方はしなかつた!——あいつが俺を“裏切った”からだ!』

ゆかりの言葉を聞いた少年？ は怒鳴りながら話を続けた。

チームからの孤立。他チームの監督達からの評価。それらも全て、洗夜が自分の為に動いてくれず“裏切った”からだ。

ただただ、ずっとその暴言を叫び続ける。その姿はただの自分勝手、そして自業自得による当然の結果だと美鶴達は感じていた。

だが、それでも少年？ からすれば洗夜との事は“裏切り”だった

のだろう。

『そうだ……裏切った洗夜が全部……悪いんだ!!』

溜め込んだものは全て吐き出すように、少年？ が大きく叫んだ時だった。

悠と美鶴達の脳内に何かが届いた。

——我は汝……汝は我……汝、ついに真実の絆を得たり。

——真なる【魔術師】の絆……それは即ち…… “裏切り” の道標なり。

「裏切り……？——ッ！ そうか！」

悠は思い出した様にマーガレットからの “メモ” を取り出す。

そしてそこに書かれている魔術師の項目。そこには逆位置の意味が書かれており、それは確かにあった。

—— “裏切り” の文字が。

「まずいー！」

悠はその本当の “意味” に気付く。だが、既に遅かった。

少年？ の身体から強烈な黒い靄が溢れ出し、それはやがて一つの形となった。

—— 巨大な身体。燃える剣。それは嘗て、洗夜と『彼』が操った仮面『スルト』の姿を模したシャドウ—— 【裏切りの魔術師】だ。

【裏切りの魔術師】が姿を見せた瞬間、悠達も戦闘態勢に入り、一斉にペルソナを召喚した。

それが戦いの開始の合図。そして先に動いたのは【裏切りの魔術師】

『ラグナロク！』

先制攻撃。しかも放ったのは炎系最強技の “ラグナロク” だった。地面を、周囲の空気すらやく獄炎となり悠達へと迫る。

——だが、これでやられる者達ではない。

「迎え撃てー！——アルテミシアー！」

美鶴はサーベルは振り上げ、それに応える様にアルテミシアが巨大な氷塊を放つ。

広範囲に広がる巨大な氷塊—— “マハブフダイク” とラグナロク。

それが激突し、強烈な衝撃と爆風を発生させながらも美鶴はそれを相殺させた。

だが、同時に美鶴は理解する。

——なんとという強さ……！ 満月の大型シャドウ……それよりも強い！

先程の少年？ の姿とは裏腹に、出現したシャドウの強さはとても高かった。

強烈な炎技もそうだが、その纏う存在感もまた嘗ての強敵の比ではない。

風花やクマの言葉が表すならば、それだけ洗夜のシャドウの影響が強い証拠でもある。

——だが。

「引く理由にはならん！」

激を飛ばす美鶴。その言葉と共にアルテミアはブフダインを纏った鞭で「裏切りの魔術師」へ強烈な一撃を放った。

そしてそれは「裏切りの魔術師」の身体へと直撃し、渴いた音と共に氷の破片が周囲へと飛来する。

『グウツ!?——ユルサン!!』

美鶴の攻撃に怯んだ「裏切りの魔術師」だったが、一気に上空へと浮かぶと剣の炎の火力を上げながら振り上げる。

「させません！」

「キントキドウジ！」

アイギスは両指と頭部の銃器で乱れ撃ち。クマはキントキドウジで特大のミサイルを発射した。

それらの攻撃。それは空中の「裏切りの魔術師」へ一斉に直撃し、煙を立ち昇らせながら地面へと落下し、激突する。

だが、そこは大型シャドウ。ダメージを負いながらも立ち上がり、フロアに巨大な咆哮をあげた。

『シャドウ……タチ……ヨ……アツマレ!!』

その咆哮と共に一斉にフロアの中に出現する黒い水溜り。そこから次々とシャドウが出現するや否や、敵を最初から理解している様に

悠達の方へと近付いて行く。

そこは当たり前だが、友好的な気配はなく、不気味なオーラを纏った強化状態で殺気を出しながら距離を詰めて行く中。悠達とシャドウの間を一つの閃が走った。

それは一体のシャドウの頭部へと吸い込まれ、それが“矢”である事に気付いたのは、そのシャドウが倒れながら消滅してからだ。

今度は此方からの先制攻撃。順平が思わず振り向くと、そこにいたのは弓を構えたゆかりだった。

「はいはい……あんた達の相手は私達がしてあげるわ」

仕方ない様に呟くゆかり。その言葉の意味を察し、順平やチドリ、そして乾やコロマルもシャドウ達へと向かって行っていた。

「よっしやー！」

金属バットでアブルリー型をぶっ飛ばしながら順平は突き進み、彼のペルソナのトリスメギストスもその金色の翼で切り込んで行く。

ゆかりは先程同様に弓で補助し、チドリ・乾・コロマルもペルソナや武器を使って次々とシャドウの数は減らいった。

このままの勢いで行けばシャドウはすぐに全滅するだろう。——なれば、残りのメンバーがすべきことは……。

「フッ!!」

【裏切りの魔術師】の顔面へ明彦の強烈な拳がめり込んだ。更に彼のペルソナが追撃する形で剣で勝ちあげ、結果、【裏切りの魔術師】は宙へと再び身体を放り出される。

そこを美鶴が、アイギスが、クマが、再び攻撃を繰り出して行き、徐々にダメージを蓄積させて追い詰めて行く。

——しかし、それで倒されるシャドウではなかった。

『ウオオオオッ!!』

怒りで咆哮をあげる【裏切りの魔術師】は宙で体勢を直すと、剣の火力を上昇させ、再びラグナロクの放つ準備を始める。

最初に撃つたものよりも威力が大きいのか、その為は先程よりも長い。

——故に、最後の一撃は思う存分に準備が出来ていた。

「イザナギ!!」

『ッ!』

悠が叫ぶ己のペルソナの名。その声に「裏切りの魔術師」は顔を上にあげるが、時既に遅し。

強烈な雷を纏った大剣。それを既にイザナギは振り下ろし、そのまま「裏切りの魔術師」の身体へ叩き込む。

そして、その一撃により地面に沈む「裏切りの魔術師」はその動きを止めた。

「終わった……」

「こっちも終わりました……!」

悠の呟きに応えたのは乾だ。乾達が相手をしていたシャドウの群れも全滅しており、残された空間には先程の少年？ の姿へと変わった【裏切りの魔術師】だけがいた。

しかし、既に少年？ の勢いは消えており、ぐったりと肩を落としながら消滅し始めている。

『分かってた事だった……今のままじゃだめだって……洗夜がいてくれたから俺はチームにいられたんだって……全部、分かった。——洗夜が裏切ってたなんか……いない事……に……裏切ってたの……俺だつ……た……』

その言葉を最後に少年？ のシャドウは消滅した。

それと同時にホームに記された『逆位置』の魔術師の絵もゆっくりと消滅していった。

「……終わったんすかね?」

「……いや。やっと始まった」

「そうだな……」

落ち着いた様に呟く順平。その言葉に悠と明彦は否定する。始まった。——否、ようやく知る事が出来たのだ。

——黒きワイルド。逆位置の絆。そして今回のシャドウ暴走。これら全ての原因は洗夜の過去。心の深淵に隠れている。

そして、誰も口にはしないが薄々と勘付いてもいる。

先程の光景。そしてシャドウとの戦い。洗夜のカ——その「裏」の根源。

それらを知る為に悠と美鶴達は再び階段を上って行く。

女帝・皇帝・正義・戦車……次々と現れる光景。そして変異するシャドウを倒しながら。また一歩、また一歩と悠と美鶴達洗夜の下へと歩いて行くのだった。

END

第三十九話：乗り越えし過去

悠と美鶴達は黒の駅を進んで行く。そして彼等は洗夜の色んな感情を聞く事になった。

『おとうさん……おかあさん……はやくかえってきて……ひとりはいやだ……！』

『一人はもう嫌だ……不安だ……胸が苦しい！——誰でも良い……俺を一人にしないでくれ……！』

『どんな「繋がり」でも良い……もう……ひとり……いや……だ』

フロアを進む毎に聞こえる洗夜の心の声。

悠も美鶴達も、それが聞こえ始めれば足を止めて耳を傾ける。

年齢が違うのだろう。幼い声。追い詰められている様な声。力尽きた様な悲痛な声。——共通しているのは皆、悲しみが混じっている事だ。

だが、それは同時にまだ洗夜の「黒きワイルド」の力の根源。それを殆ど察していない者達に、もしかすると、可能性を考えさせることになる。

そしてそれを最初に口にしたのは乾だった。

「もしかして洗夜さん……さっきの光景。——友達からあんなひどい事を言われたのに……絆に……？」

両親の離婚。そして母との非現実での死別。

それらの悲しみを、孤独感を理解している故か、乾は洗夜が何を「絆」にすらしてしまったのか考えてしまう。

同時に思い出す。——二年前。皆が寮にいた時、食事を作ってくれていた人物。

——いつもそれは洗夜さんだった。風花さんの料理は思い出すのは辛いけど、洗夜さんの作ってくれた食事はいつも温かくて、そして心も暖かくしてくれて……そう、作ってくれる人がいる。その事が僕はとても嬉しかったんです。

そんな事をおもっている内、つい口に出した時があったつけ。——

と、乾は思いながらその時の洗夜の言葉を思い出す。

『——ハハハ。そうか、それは嬉しいな……確かに、作ってくれる人がいる事って、嬉しい』事だよな……』

今、思えばと。乾はその時の洗夜の後姿が自分以上に「何か」を抱えている様に、悲しそうに見えた気がしたのだ。

——そして、そんな事を乾が呟き、思っていると。その呟きに反応した者がいた。

「『ひどい事』……？——絆……？」

それはゆかりだった。

ゆかりは思い出す。二年前の、あの出来事を。

洗夜が消えた理由。そして、それが「己」のせいだと言い張る洗夜。——との間に起こった事。

それをゆかりは思い出し、同時に順平を始め、美鶴と明彦も察し始める。

的を得ているのかもしれない。洗夜との事。そして、それを己のせいだと言った意味。

繋がるのだ。先程の光景、黒き絆が。

しかし、もう殆ど理解し始めているメンバーだが、最後の最後で理性が待ったを掛けている。

——決定的なものが欲しい。

それが美鶴達の共通の考えだった。

もしかして、自分達は洗夜の力を言い訳にしたいだけなのではないか？ 自分達の事を正当化したいのではないのか？

そう思ってしまう美鶴達。逃げたくないのだ。予想、多分、恐らく。そんな中途半端な言葉ではなく、疑いが混ざる事のない『真実』

それを知る為に悠と美鶴達は再び、階段を上って行くのだった。



新たなフロアに進む悠と美鶴達。

進むたびに彼等を待っていたのは「裏切りの魔術師」の時と同じ光景であった。

鳴上家が引越した先、そこで一部上場企業の夫を持つ“主婦”その人物は他者を貧乏人と見下す人間だった。長い間、滞在しない予定であり普通なアパートを借りた鳴上家もその対象。

子供には洗夜や悠と遊ばない様に言い放ち、馬鹿にしていた主婦。しかし、洗夜の両親の仕事を知った途端に掌返し。

——だが、見る目があつた両親はその主婦を無視。そして引越す直前にそれは起こる。

その主婦の夫の会社が突然の“倒産”したのだ。主婦は何故か洗夜の両親に助けを求めるが、既にそんなレベルの話でもなければ両親以外にも助ける者はいない。

現実逃避に逃げた主婦のシャドウは、まさに【悲観の女教皇】

月光館学園での事。女子同士だと、必ず歪んだ繋がりや妬みは存在している。

カリスマ性のある美鶴が気に入らない一人の女子。彼女が目を付けたのは、美鶴と仲の良い洗夜だった。

彼女から親しい人物を奪う事で目にモノを見せたかったのだろう。

しかし、洗夜も馬鹿ではない。明らかに何か良くない思惑を持つ者の誘惑に応じる訳もないどころか、恋愛感情すらない女子生徒に付き合う理由はない。

——結果、堪え切れなくなった女子生徒は他人の財布を盗み、それを美鶴のせいにしてしようとしたが偶然教室に戻った洗夜が目撃。

事態はすぐに終息するが、その女子生徒は最後に洗夜を恨んで自主退学。

空回りした女子生徒のシャドウはまさに【空虚の恋愛】

引越した前のある学校。転校生として目立ち、周りからすぐに信頼を得た洗夜を気に入らない一人の男子生徒。

適当な連中を集め、洗夜に対する苛めを行い始めたのだ。周りは気づき、心配するが次のターゲットになる恐怖で助けることが出来ない。

それらの行いに洗夜が特に反応しなかった事もあるが、その男子生徒の怒りのボルテージは上がってしまふ。

——そんな時、彼は言ってしまう。悠の存在を、弟をターゲットにしてやると……。

それを言った瞬間、男子生徒は「鉄」の味を味わう事になった。そう、洗夜に顔面を殴られたのだ。

温厚そうな洗夜の怒りの形相。止まらない報復の嵐。彼は竜の逆鱗を踏んでしまったのだ。

——その後、暴力騒ぎだったにも関わらず学校側は問題視しなかった。

理由は二つ。洗夜が引越す事、そして、その男子生徒の信頼がなかったからだ。

——もう、会う事はない二人。だが、後に洗夜はその男子生徒の名を見ることになった。

バイクの飲酒運転。電柱に若者がぶつかり即死。その被害者の名前がその男子生徒だった人物。

暴走し、自分勝手だった男子生徒のシャドウはまさに【劣勢の戦車】
そして……。

——【無気力の剛毅】

——【陰湿の隠者】

——【不正の正義】

——【自暴自棄の刑死者】

——【浪費の節制】

——【屈辱の塔】

——【失望の星】

——【衰退の太陽】

——【非常識の法王】

——【悔恨の審判】

悠達は戦い続けた。洗夜が繋げた絆とも呼べるのか分からない黒の絆。その根源達と。

洗夜が歩んできた道。人間の「負」と言えるもの、それらを体現する者達の形を成すシャドウ達を悠と美鶴達は倒し、新たなフロアへと歩みを進める。



現在：黒の駅【第7階エリア】

「ん……？」

新たなフロア。そこに足を踏み入れた時、美鶴と明彦は今までとは違う感覚に気付き、足を止めた。

「美鶴先輩……？」

「真田先輩もどうしたんすか？」

二人の様子に気付き、ゆかりと順平も足を止め、困惑気味に二人へ問い掛けた。

しかし二人は返答する事はなく、ただ黙ってフロアの上空へと顔を上げ、他のメンバー達も何かあるのかと同じ場所を見上げると……。

「あれは……？」

「またアルカナですか……！」

アイギスと乾が宙に浮くアルカナの存在に気付き、またシャドウと戦う事になると思い、身構えた時だった。

「いや大丈夫だ」

「ここは俺と美鶴にやらせてくれ」

美鶴と明彦がメンバーよりも一步、前に出る。

その表情は覚悟が決まった様に険しいもので、その表情で二人は宙に浮くアルカナを睨み付けた。

——【女帝】・【皇帝】の二枚を……。

「女帝と皇帝……確か——」

悠もその存在を確認すると、マーガレットからのメモを再び開き、その項目を見つけた。

【女帝】・逆位置——挫折・嫉妬・感情的・情緒不安定。

【皇帝】・逆位置——未熟・横暴・独断的・無責任。

記されていたのはこの言葉。

だが、そこまでは分かったが美鶴と明彦の纏う雰囲気、それが変わる

理由は分からなかった。

——が、静かに舞い降りてくる二枚のアルカナ。それが徐々に形を変化させて行き、やがて一つの形となった事で悠は全てを理解した。変化した二つのアルカナの姿。それは、美鶴と明彦のペルソナ——アルテミスとカエサルそのものだったからだ。

そう、女帝と皇帝のアルカナ。それは美鶴と明彦、二人のアルカナと同じ。

「過去を見せるまでもない……か」

「そういう事だろ……」

今までのフロアのように電車は入って来ず、そのままアルカナがシャドウ化した。

その意味は美鶴と明彦の二人だけが分かっている。

『洗夜はお父様の代わり……自分を見てくれる……自分だけを見てくれるだけで良い……』

『洗夜はシンジ同様に追い越す目的の一つに過ぎない。良かったじゃないか？——これなら簡単に洗夜を追い越せるぞ？』

美鶴と明彦。二人の脳裏に語り掛けてくる声。それは自分の声と同じもの。

それが目の前のシャドウ達から放たれている。

だが、それに気付く者は二人以外にもいる。その一人は悠だ。

「これは……」

悠にも声が聞こえた。鮮明に、そして光景も薄っすらと見えてしまう。

——洗夜の背に顔を沈め、静かに泣いている女帝。

——洗夜と激しくぶつかり、互いに衝突し合う皇帝。

これは二人と洗夜の繋がりのかと、悠は思わず足を踏み出すと、そんな悠の肩を掴んで止める者がいた。

悠が振り向くと、そこにいたのは……。

「アイギスさん……」

「ここは美鶴さんと明彦さん……お二人にお任せしましょう」

どうやらアイギスにも先程の声が聞こえていた様だ。

強い意志。それが籠った瞳で訴えるアイギスの言葉を聞き、悠はもう一度、美鶴と明彦の方を向く。

そこに立っている二人。その背から蒼白い光が溢れ始めており、覚悟は目に見えて明らかだった。

「下がりましたよう」

「はい」

二人の覚悟を理解した悠の言葉にアイギスも頷き、他のメンバーもその様子で察したらしく二人に任せてフロアの後方へと下がった。

これで残ったのは美鶴と明彦の二人だけ。

そして目の前の二体の姿が完全なモノとなり、そこに君臨する【挫折の女帝】・【未熟の皇帝】の二体。

それらが叫びの様な咆哮を放った瞬間、美鶴と明彦から放たれる光も解放される。

「——行くぞ明彦！」

「おおッ！」

二人が覚悟を撃ち抜き、アルテミシアとカエサルが召喚された。

——そして、ほぼ同時。両者の武器が衝突する。

「アルテミシア！」

『アハハハハ!!』

互いの武器。刃の鞭が何度も激突し、火花を散らせながら押し合う。

「押し切れカエサル！」

『ハアアア!!』

激しい美鶴側と対照的なのは明彦。

明彦のペルソナ——カエサルと【未熟の皇帝】は互いの大剣で押し合い。激しい攻撃はなくとも、それは純粹な力の勝負。

そんな両者に共通しているのは、二人共特殊な事はせず、真つ正面からシャドウにぶつかっている事だ。

その姿はまさに全力であり、まるで己を乗り越えようとしているかの様。

そんな中、サーベルで敵の攻撃を受け流しながら、美鶴は静かに思

い出していた。

〔挫折の女帝〕——まさに昔の私だな……〕

激戦の中での想い。美鶴は目の前のシャドウを見つめながら、思い出すように心の中で呟いた。

——全てはお父様の為。

彼女が当初、ペルソナを使いタルタロス攻略、シャドウ討伐に参加していたのは桐条の責任。等の理由ではなかった。

純粹に父——「桐条武治」の為だった。ペルソナで負担を受けながらも、シャドウとの戦いで危険に晒されようが、彼女にとつてはそれが全て。

——そんな中、二年前の事件で武治は死んだ。美鶴を、洗夜達の未来の為に倒れたのだ。

故に彼女は皆の前では平然を装ったが、身内を、しかも大好きな父親が亡くなったのだ。

そんな彼女の異変を洗夜が気付かない訳がなく、二人が学校の屋上へ向かうと洗夜は美鶴へ言った。

『背中ぐらい貸してやる……だから無理だけはするな』

そう言つて耳にイヤホンを、音楽プレーヤーを起動させながら洗夜が自分に背を向けたのを美鶴は今でも覚えている。

そして、その意味が分からない美鶴ではなかった。

自分を理解してくれている。自分の傍にいてくれている。

それが分かった瞬間、気付けば美鶴は洗夜の背で泣いていた。——

吐き出すように、ただただ純粹に。

そして10分以上、美鶴に背を貸していた洗夜だったが……事の時。

(充電するの忘れてた)

沈黙するプレーヤー。その何も発さない音の代わりに、洗夜がずっと美鶴の鳴き声を聞いていたのだ。

そしてそれは洗夜自身しか知る事が出来なかった事でもあった。

——今、この時まで。

「ふふ……全く、あいつはいつもそうだったな」

美鶴にも聞こえたのだ。先程の光景を思い出し、そしてその時の洗夜の心の声を。

鳴き声を聞かれてしまったのには恥ずかしさがあるが、嫌な感じは全くなかった。

——思い出せば、お父様の死で随分と洗夜に頼ってしまったな。

美鶴は思い出す。そして同時に目の前のシャドウが自分に語り掛けてくる。

『洗夜さえいてくれればそれで良い……それで私の心は救われる！
もう誰にも渡さない!!』

「……本当にそうだったな」

ゆかり・風花の二人が異変に気付き、美鶴に話しかけた事で美鶴は洗夜を父の代わりにはしなくなった。

だが、それでも卒業後も望むならば自分の傍にいて欲しい。

美鶴はそう思っており、その後の事も想像が容易い程であった。

——しかし、だからこそ「アレ」は起こったのだろう。

『お前は誰も守ってくれなかった……なのに、なんで私の傍から消えようとする!?! 私の中から離れるならば——』

——お前は必要ない。

「ようやく理解出来たぞ……洗夜」

自分らしくない「感情」の叫び。それを己のせいだと言い張る洗夜。その理由を、美鶴は全て理解した。

そして同時に否定する。

「やはり違うな洗夜。——私にもあの事の……「黒き絆」の責任はあった!」

——瞬間、美鶴の纏う雰囲気が変わった。そしてアルテミアも鞭捌きにもキレが、威力が増し。【挫折の女帝】を徐々に押し始めた。

そんな事態に理解が苦しむのは【挫折の女帝】だ。

『なっ!?!——何故だ!?! 何故ここまで力が出せる!?!——過去に囚われる! 苦しめ! 迷え!!——「黒き絆」は決して消え——』
「それで良いんだ……」

叫ぶ【挫折の女帝】の隙を美鶴は見逃さなかった。

氷結を纏う強烈な一撃が【挫折の女帝】へ入る。氷結耐性を持つていた【挫折の女帝】だったが、美鶴の一撃はそれを無視する様に与えた。

その光景は、まるで【挫折の女帝】が美鶴に屈したかの様であった。『ガッ……カハッ！』

【挫折の女帝】はその一撃により沈むように仰向けに倒れ、身体が徐々に消滅を始める。

しかし美鶴はそんな事は気にせず、倒れている【挫折の女帝】の身体の上上がり、そしてゆっくりと歩きながら顔の前で止まる。

そんな美鶴を【挫折の女帝】は顔をだけ動かし見上げた。

『無駄だ…… “黒き絆” は私を倒しても消えない……お前はずっと……苦し——』

「私は言った筈だ。——それで良いと……」

美鶴はそう呟くと、まるで憑き物が取れた様に穏やかな表情を浮かべ、ゆっくりと手を自分の胸へと置いた。

「“黒き絆” か……確かにこれで苦しんでしまった。——だが、だからこそ “黒き絆” も含め、本当に洗夜と繋がる事が出来る……」

そう言い終えた美鶴の表情。それは満足そうに小さな微笑みを浮かべており、黒き絆の事も受け入れたかの様だった。

——そして、そんな表情をする美鶴であったが不意に右足を上げ、自分を見上げる【挫折の女帝】へ言い放った。

「——私はもう “過去” も “未来” から目を背けるつもりはない」
その言葉を最後に、美鶴の右足が【挫折の女帝】の顔面へと放たれた。

まさに “処刑女王” のオーバーキルのヒールキック。顔面が吹っ飛んだのではないかと思う様な威力だったが、そんなバイオレンス展開はなく、そのまま【挫折の女帝】は消滅した。

——桐条 美鶴の完全勝利だ。



——そして、美鶴の戦いが終わる頃。明彦の方も戦いは佳境へと入っていた。

「フンツ——ハアツ！」

『ハアアア!!』

カエサルと【未熟の皇帝】は鏝迫り合いから純粹な打ち合いとなり、明彦もペルソナ能力で強化した拳——“拳の心得”で攻撃を繰り返していた。

どちらもインファイターであり、力だけの純粹ゆえにこれ以上は長引く要素はない。

切っ掛け次第。それで決着がつく。

『ハハハハッ!!——力だ！ 力さえあれば！——もつと力を!!』

ダメージは蓄積されている。しかし、それでも【未熟の皇帝】は声を荒上げる事をやめない。

余裕も殆どない筈だが、そんな姿はまさにシャドウらしいとも言える。

——そして、それは明彦も同類と言えた。

明彦もまた、こんな状況下で色々と考えていたのだ。

「力か……確かに、俺そのモノだな」

【未熟の皇帝】の咆哮を聞きながら、明彦は思い出す。

——全ては“妹”の死。

妹を助けることが出来なかった。それが明彦の“力”を欲する事になった始まり。

ボクシング、そしてペルソナ。徐々に明彦は力を得て行った。

——そして“真次郎”が死んだ。

自分の罪に目を背け、受け入れ。そして己を己自身で罰し続けた親友の死。

力を得ても尚、失ってしまった命。だが明彦は止まる事はせず、突き進み、遂に仲間達と共に“影時間”を終わせる事が出来た。

——そして“鳴上 洗夜”が自分達の下から去った。

明彦自身は“あの時”の事を今でもしっかりと覚えている。

『俺は何も守れなかった……が、お前は俺よりも“強い力”を持っていた筈だ。——なのに何故、お前は守れなかった？——お前の力は何の為にあったんだ？』

あの時、洗夜に放ってしまった言葉。

洗夜の「黒きワイルド」によって繋がされ、それによって放ってしまった言葉。

しかし、明彦は思う。あれは自分の中で思っていた言葉なのではないのかと。

そして同時に、それは「自分自身」への言葉でもあったのではないのかとも。

「俺の力は何の為にあった？——過去を悔いる為か？——己の無力感を消し去る為か？」

——否、違う。

「俺自身の為……そして仲間を守る為でもある!!」

明彦は跳び上がり、強烈な右ストレート。それを【未熟の皇帝】の腹部へと放つ。

結果【未熟の皇帝】は身体が浮き、そのまま壁まで吹き飛んで強烈な衝撃を受けながら激突する。

『ガアアアアッ?!——力……力がああああアッ!!』

壁に挟まりながら【未熟の皇帝】は叫び続ける。その身体は徐々に消滅が始まっているが、その力の暴走を抑えるつもりはない様だ。

叫びながら【未熟の皇帝】の周囲に強力な雷が降り注ぐ。まだ危険を去っていない。

——が、明彦は至って冷静であり、寧ろ昔の事を思い出す事すらしていた。

「今になって思えば……まさか互いに親友になるとは思っていなかったな洗夜」

明彦が思い出すは洗夜との出会い。高校一年の時の事。

一言で言えば二人の出会いは「最悪」であった。

明彦と洗夜の出会いは同じクラス。しかし、それはあくまでも顔見せ程度の出会い。この時は会話すらしていなかった。

本格的な出会いは、その数日後。駅前での事であった。

休日。同じ歳くらいの少年三人が、一人の少女をナンパしていた所を目撃したことが事の始まり。

あまりにしつこく、見るに堪えない光景に明彦がその内の一人を蹴散らしてしまった。

その時にその三人は自分と同じクラスだと判明したが、明彦の記憶にはない事からあまり気にしなかった。

しかし、その内の一人が「友人」に助けを求める電話した事でそれは起こった。

——そう、その時に助けを求められたのが洗夜だった。

助けの電話を着て現場にやって来た洗夜は事情を聞き、しつこくナンプアした三人が悪いと言ったのだ。

——だが、同時に明彦もやり過ぎだと非難したのだ。

この頃の明彦は力に敏感でクールでありながらも血気盛んであり、洗夜の言葉が自分の「力の否定」に聞こえてしまった。

更にそこで明彦が言い返した言葉が洗夜の「逆鱗」に触れてしまい、最終的には明彦の「拳」と洗夜の「蹴り」がぶつかり、喧嘩に発展してしまっただのだ。

それが明彦の、洗夜との出会いだ。

「フツ——たまには、また喧嘩してみるのも良いのかも知れないな」

思い出す。同時に何かを「察した」様な表情を浮かべる明彦は、表情を引き締めると、そのまま轟雷の中を駆け抜ける。

まるでどこに落ちるのか分かっていないかの様に「野生の勘」を働かせ、そのまま「未熟の皇帝」の目の前で跳び上がり、そのまま顔面へその重い拳を放った。

それは【未熟の皇帝】の額に直撃し、強烈な音共に衝撃が襲う。

——そして【未熟の皇帝】の顔に「亀裂」が走り、そのまま砕け散って消滅した。

明彦の勝利であり、そのまま明彦と美鶴の二人は合流を果たす。

「そっちはどうだったんだ美鶴？」

「……ああ。やっと知る事が出来た」

「……そうか」

美鶴の満足そうな表情を見て、明彦も自分と同じく美鶴が乗り越えたのを察した。

取り敢えずは、これでこのフレアの戦いは終わり。目の前で待っている安心した表情の悠とクマ、そしてアイギス達の下へと美鶴と明彦は戻って行くとうとした。

——時だった。

『相変わらず……あなた方は“滑稽”ですね』

「ッ！」

何者かの声が届いた。

——瞬間、美鶴と明彦の背後に電車が駆け抜け、警報機がこれでもかと鳴り響き、周囲は明らかに異常事態を知らせる。

安心しきっていた悠達もこの事態にすぐに警戒し、急いで美鶴と明彦の下へと向かい合流すると、目の前に突然現れた電車の前で何が起こっても大丈夫な様に身構えた。

すると警報機が静まり、周囲に沈黙が流れる。

静かな空間の中、電車の音だけが鳴り、やがて目の前の扉が開いた。そこから聞こえる足音。そして今まで感じた中で一番の威圧感、重い空気に全員が息を呑み、クマが震えあがった時に“彼”は現れた。『“あの方”を救おうとしながらも、それとは最もかけ離れた方法を取っている。——“死”こそが救いであると言うのに……』

「ッ!?……まさか……!」

「お前は……!」

「そんな……!」

電車から現れた一人の“男”の姿に、美鶴は驚愕し、明彦と乾は怒り、ゆかり・順平・風花は思わず呼吸を忘れる。

そして悠とアイギスは身構え、クマは悠の後ろに避難する。

——そんな中で、チドリだけが一番様子がおかしかった。眼も口も揺れ、震え。目の前の男に恐怖以外にも感じている様だった。

肉体はシャドウと同じく闇に覆われており、両腕に“刺青” 灰色の長髪。そしてシャドウ特有の“金色の瞳”を輝かせる存在。

その者の名をチドリが呟く。

「“タカヤ”……!」

名を呼ばれた存在。タカヤ——【降格の運命】がその姿を現した。

E
N
D

第四十話：降格の運命

現在：黒の駅【第八フロア】

「タカヤ……！」

電車から現れた青年——タカヤの姿に美鶴達の目を大きく開き、驚愕する。

洗夜からは名前は聞かされていない故、初対面である悠とクマは目の前にいるタカヤが分からずとも、美鶴達の様子から察して警戒を見せていると明彦が前に出た。

「何故、お前がここにいる!!」

「待って下さい真田先輩！ この人も今までのシャドウと同じです！」

今にも食って掛かる勢いの明彦を風花が止めに入った。

目の前のタカヤも先程までと同じで、黒き絆から出たシャドウだ。

外見は同じでも、怒りをぶつけた所で相手は本物のタカヤではない。死んだ時の姿を見ている、因縁がある者達はそう簡単に割り切れなかった。

「ストレガのタカヤ……！」

乾もその一人。真次郎は、タカヤの攻撃から彼を庇って死んだのだ。

いくらシャドウでもそんな男の姿をしていれば、心にもぎわめきが起こるのは当たり前。

それでもどうにか冷静を装い、乾はタカヤを見つめ続けながら疑問を抱く。

「なんでこの人がこのタイミングで出て来たんでしょか……？」

「分からない。——でもあの駅名に記されてい『運命』のアルカナを見る限り、洗夜との黒き絆がある筈」

乾の疑問に答えたのはチドリだ。

彼女もストレガの中では考えて動くタイプ。既に今までの法則を理解しており、タカヤと洗夜の間には絆がある事を理解していた。

だが、少なくとも彼女には心当たりはなかった。

「でもいつ洗夜と絆を？ 私には心当たりがない」

「……あっても洗夜の事だ。何か問題でも起こしていたんだろう」

美鶴は思い出しながら、呆れた様子でそう言った。

仲間にも影響を及ぼすならば相談するだろうが、自分だけの事ならば何も言わないだろう。

当時は自分もそうだったので何も言えないが、美鶴は自分と洗夜へため息しか出せなかった。

「あれがストレガ……」

そして悠はと言うと、目の前にいるのが兄から聞いた人工ペルソナ使い『ストレガ』である事を知り、同時に雰囲気で危険と判断。

肌に纏わりつくピリピリとした殺気。シャドウ特有の不気味さもあり、金色の瞳からも狂気がただ漏れていて思わず反射的に身構える。

すると、それに気付いたゆかりが悠を気にかけてくれた。

「悠くんは大丈夫？ ……って言うかアイツの事は知ってるの？」

「はい。兄さんから大体の事を……人工のペルソナ使いで、嘗て戦ったと」

「それで正解だぜ……！」

悠の言葉に順平も反応し、身構える。

彼にとってもタカヤはギリギリ因縁があり、他の者達もどの道、戦闘になると身構えた時だった。

タカヤが小さく笑い出すと、その瞳が大きく光り輝いた。

『……見せてあげましょう』

その声を最後に悠と美鶴達は光に包まれた。



そこは影時間。辰巳ポートアイランドの駅裏で二人の若者がぶつかり合っていた。

片方は刀を振るい、片方は拳銃を放つ。

そんな両者を守護するモノ達がいた。黒き仮面と赤に染まった仮

面だ。

両者——洗夜とタカヤ。双方の武器をそれぞれのペルソナが受け止め、戦いは一進一退の攻防を演じる。

だがやがて双方共に動きを止めて武器を下ろし、タカヤが話し始めた。

『まだ分かりませんか？ あなたも私達と同じです。この世界でしか生きれない。その力が証明しているではないですか？』

『俺はお前達とは違う。この影時間を終わらせると美鶴達と約束した』

『約束……ですか。何の価値もない言葉ですね。実に下らない!! ——ヒュプノス!』

『——■■■■!!』

両者のペルソナが再度激突した。その余波で周りは抉れ、壊れ、洗夜とタカヤも微かなダメージを負う。

『くっ?! ——あなたは約束をしたと言う! ——ならば私達も救うと言った言葉はどうなのですか! ——裏切るのですか!?!』

『俺はペルソナと薬の副作用を消したいだけだ! ——そうすれば生きていける! ——俺のペルソナの力なら、それが可能だ!』

『違う!! ——それは救いではない!! ——ただの穢れ、私達にとっての救いではない!!』

『ならチドリを開放しろ! ——彼女は変わろうとしてる!!』
『違う……穢れただけですよ!!』

両者は叫び、ぶつかり合い、そしてすれ違う。

洗夜の救い。タカヤの救い。それは文字は同じでも、中身は全く違うもの。

互いに受け入れれない。受け入れることが出来ない。

その口調の激しさを、心の激情を具現化する様に両者の『メギドラ』がぶつかり合う。

『すれ違う!! 私達はすれ違い、別々の道を歩む……分かれる。——別れる運命の様ですね!!』

『それが俺達の繋がりなのか……チドリの様にならないかタカヤ!!』

両者は何度も叫び、何度もぶつかり合った。
——その光景を最後に悠達の意識が覚醒する。



「今のは……？」

「タカヤと……洗夜の黒き絆？」

我に返った悠の呟きに、困惑しながらチドリも呟く。

見た限りでは二年前の出来事だろう。だが互いに一人という珍しい状況の中の事。

チドリは知っている。タカヤは洗夜に興味があつたのを。洗夜がタカヤに興味があつたのを。

しかし両者が理解しあつた様には見えなかった。その最後まで。

「あんなんでも絆なのかよ、鳴上先輩……」

先程の光景を思い出した順平は納得できないと、辛そうな表情を浮かべた。

チドリをタカヤの銃弾から庇った自分を、更に庇って助けたのが洗夜だ。だから順平は恩があり、だからこそ理解をしたくなかった。

タカヤは狂っていたともいえる。それなのに、何故にあんな正面から向き合えるのか。

「らしいと言えばらしいんだけどな……」

「理解は出来ないけど、何となく分かるのよね……ああ、鳴上先輩らしいなああって」

順平の言葉にゆかりも思い出すように言った。

一体、どれだけの人が洗夜を理解できているのか。少なくとも自分は理解出来ない。そうゆかりは思っている。

優しさ、厳しさを感じさせ、まるで家族の様に接するのに引き離すときは一気に拒絶するのが洗夜だ。

(でも、そんなのを受け入れていたからこんな事になったんだろうなあ)

懐かしみながらも後悔するゆかりだったが、そんな彼女等に自由時

間は終わりだと美鶴が皆に声をかける。

「始まるぞ……！」

「あわわわ……！ 凄い力を感じるクマよ?！」

「皆さん！ すぐに警戒を!!！」

クマとアイギスが焦り、緊張する様に身構えて叫ぶ。

三人の目の前ではタカヤ——『降格の運命』がその力を解放しようとしているのだ。

身体のうちちが向いてはいけない場所を向き、身体を闇が包み込む。

そしてその姿を変異させた。

『さあー 始めましょうか!』

その姿はタカヤのペルソナであり、毛細血管の様な翼を持っていたヒュプノスを彷彿とさせる。

こんな不気味で謎のいあつ威圧感を放つシャドウを悠は今まで見た事がない。

更に『降格の運命』の周辺からはシャドウも現れ、悠と美鶴達もペルソナを召喚した。

「イザナギツ!!」

悠は素早く行動を起こし、周囲のシャドウ達をイザナギで薙ぎ払う。

美鶴達も同様にシャドウ達を倒し、余裕が出来た者から『降格の運命』を標的とした。

『来なさい……相手をしてあげますよ! ——メギドラ!』

「行くよ——カーラ・ネミー!」

最初に交戦したのは乾だ。カーラ・ネミーは『ジオダイン』を放ち、メギドラと合わさって空中で大爆発を起こす。

そこへ乾が槍で突撃するが、それを察知して『降格の運命』は空中へ逃亡。

代わりの様にシャドウが現れ、次々と属性技を乾へと放った。

「いけない!」

数の暴力に乾は迎撃しながら後退を選択。『降格の運命』からは離

れたが、無理をするタイミングでもなかった。

「もう！ 矢が足りないわよ！」

「シャドウの数と種類が多過ぎます……！」

ゆかりとアイギスは次々とシャドウ達を撃ち抜いてゆくが、その数にジリ貧を強いられていた。

ペルソナで広範囲に属性技も放つが、種類の多さを武器に生き残って突破してくるものもある。

そんな状況だ。出来るだけ孤立しない様にするが、探知タイプの風花は一人だけであつてサポートが間に合わないでいる。

「風花！ こいつの弱点なんだっけ!？」

「はい！ そのシャドウは物理に強く、炎が弱点です！」

だが、それでも風花は頑張っていた。

シャドウと戦っている順平をサポートし、今度は他の人にもすぐに手助けを行う。

しかしその分、自分の身の危険も増す。

「風花さん！」

そんな風花に迫っていたシャドウを悠が斬り捨て、イザナギもまとめて『ジオンガ』で周囲のシャドウを粉碎した。

「あつ、ありがとう悠くん……！ 周りに気を取られて気付かなかつたみたい」

「この数じゃ仕方ないです。大型シャドウも上空で様子見してますし……」

そう言つて悠と風花が上空を見上げると、そこでは『降格の運命』が皆を見下ろしながらシャドウへ力や指示を送っていた。

時折、隙を突いたメンバーが攻撃を仕掛けるが、大型シャドウとして地力も強く、先程に己のシャドウと戦つて疲労しているとはいえ明彦と美鶴とともに対等以上にやりあっている。

「タカヤ……！」

そこではチドリも戦っており、己のペルソナであるメーディアで周囲のシャドウを殲滅し、そのまま『降格の運命』とも戦闘を開始した。

『マリソカリン』で増えたシャドウを魅了し、その隙で『アギダイン』

を放った。

『チドリ……あなたですか！——ブフダイーン!!』

チドリの存在に気付き『降格の運命』も反撃。

両者の相対する属性技はぶつかり合い、そのまま相殺するが『降格の運命』は更に攻勢に出た。

『さあ！ 死を受け入れましょう!!』

そう叫ぶと『降格の運命』から蒼白い光が放出され、意識を集中し始めると風花がその意図に気付く。

『避けて！——『コンセントレイト』です！ 大きな攻撃が来ます！』

風花が見破ったのは魔力攻撃の威力を大幅に上げる技『コンセントレイト』だった。

更に別の大きな力も感じ、相手が何をしようとしたのかを理解。皆に危機を知らせ、それぞれが回避行動を取る中で『降格の運命』は力を解き放つ。

『受け入れなさい——メギドラオン!!』

万物属性技の大技『メギドラオン』が放たれた。

コンセントレイトで強化されており、その威力は通常時のメギドラオンよりも強力で広範囲。

周りのシャドウを巻き込みながらの攻撃に美鶴達は回避を不可能と判断。全員はそれぞれその場で足を止め、メギドラオンへ迎撃技を一斉に放つ。

『地上に落とすな!!——アルテミシア!』

『カエサル!!』

『お願いします——アテナ!』

『ええい！ キントキドウジ!』

美鶴達の攻撃が次々とメギドラオンへ呑み込まれ、落下していたメギドラオンはその場で停止と同時に大きな爆発を生んだ。

『ぐう!?——なんと滑稽に抗う方々だ!!』

爆発の余波に巻き込まれた『降格の運命』だが、少しのダメージとバランスを崩すだけで済み、再びメギドラオンを放とうと力を溜め

た。

——が、それ故に周囲の注意を怠り、その背後から迫る巨体の一撃に気付かなかった。

『ガハッ!!』

尋常ではない衝撃に襲われた『降格の運命』は隕石でも落ちたかのように落下し、凄まじく地面へ叩き付けられるその光景に順平達も驚いた。

「おお!? ス、スゲエな……!」

「凄い力でした……!」

「ですが今のは……?」

順平や乾が驚く中、アイギスは誰が攻撃をしたのかとその場所を向くと、一つの巨体が降り立った。

その正体はミヨルニルを持つ北欧の雷神『トール』であり、その隣には悠が立っていた。

そう悠のペルソナだった。

「全く兄弟揃って大した奴だ」

「全くだな」

悠の活躍に明彦と美鶴は笑みを浮かべ、どこか嬉しそうな様子。

成長を喜ぶ兄や姉ではないが、思わずそう感じてしまう程に悠が頼もしく見えてしまったのだ。

アイギスやゆかりも思わず笑みを浮かべており、悠の雰囲気から『彼』や洗夜を思い出しているのだろう。

『あなた……ですか……鳴上 悠!!?』

しかしここで『降格の運命』が復活。

地面から這い出て、再び浮かんで悠を向きながら一斉に攻撃を放った。

『ブフダイーン! ——アギダイーン!! ——さあ死を受け入れなさい!?!』

「——断る。迎え撃てトール!」

悠の声に応え、トールはジオダインを纏ったミヨルニルを振り回し、敵の攻撃とぶつかり合う。

砕ける氷と火の粉が舞い散り、トールの剛腕が『降格の運命』を殴りつけるが向こうの動きは止まらない。

『あなたも鳴上 洗夜と同じだ!! 何も救えず、待っているのは破滅! 意味なき平和との別れが待っている!!』

「俺と兄さんは違う」

——だからこそ。

『なっ!?!』

悠は『降格の運命』の懐に入り込み、そのまま一気に刀を振り上げた。

「兄さんを助けられる」

『グアッ!』

『降格の運命』は苦しむ声を出し、バランスを崩したところへトールが追撃。

強烈な一撃を叩き込むと『降格の運命』は大きく吹き飛び、地面に叩き付けられるとその動きを止めた。

そしてシャドウから再びタカヤの姿となり、そのまま腹ばいに倒れた状態となり、その周りに皆も集まる。

『滑稽だ……:実にあなた方は滑稽ですね。救おうとしながらも、それはあの男——洗夜の思う救いではない。——クククツ……:死の為にあなた方は傷付く姿……:意味のない足掻きで——』

長々と語ったタカヤだったが、そこまでで口を閉ざされた。——チドリの手によって。

タカヤの頭部にナイフを突き刺し、弾ける様にタカヤは消滅すると順平が彼女の下へ寄った。

「チドリ……:大丈夫なのか?」

「大丈夫……:さっきのはタカヤじゃないのは分かってる。けど、ケジメを付けたかった……:私は何も出来ていないから」

そう呟くとチドリはゆっくりと上を見上げる。

感傷に浸っている様ではなく、何かを誰かに伝えている様にも見えるが、彼女はそのまま小さく語り始める。

「順平……:私は洗夜の事を理解できない。敵だった私を救ってくれた

事は感謝してる。優しくて、順平達と繋ぎ合わせてくれた」

——だけど。

「ここが洗夜の世界なら、なんで洗夜は私を助けてくれたの？——
ずっと見てきたけど、洗夜は黒き絆を築いて生きてる。だったら私を
助ける理由はない。何を想い、何を考えてるの？ 順平達も傷付い
て、洗夜本人も傷付いて……なんでこんな事になってるの？ この駅
に入った時にクマも言ってた。私達に敵意や殺意を向けてるって
……洗夜は今、どうなってるの？」

チドリの言葉に誰も応える者はいない。応えることが出来ない。
ここまで来て徐々には分かかってきていたが、それを確かな答えで出
せる者はいない。

だが悠はせめてもの言葉として呟いた。

「兄さんは……寂しかった」

「寂しい？ ……ならどうしてこんな絆ばかり築いているの？ どう
して私達を殺そうとするの？ 私には理解することが出来ない」

チドリは本当に理解できなかった。

最初、出会った時は本当に敵同士。何も理解する事などないと思っ
ていた相手だ。

だが順平が彼女を変え、切れそうになったその繋がりを洗夜が守っ
た。

しかしその洗夜が今、守った絆を含めて全てを壊そうとしている。
彼女はそんな目の前の現実にはショックもあり、そこにタカヤも現れ
て尚の事だった。

「チドリ……正直、オレも殆ど直感的にしか分かってねえ。けどそれ
でも鳴上先輩を助けたんだ。確かに今まで見て来たのも鳴上先輩
の心なんだろうけど、全部が全部こうだって思えねえんだ」

「どの道、まだ先はあるからクマ達はまだ全部を見てないよ？ ……
だから答えを急ぐのは大センチに会ってからでも遅くはないクマ
よ？」

悩むチドリに順平とクマが説得ではないが、自分の考えを口にする。

他のメンバーも同じで、分かっているけど知りたく、先に進みたいと思う。

その結果が辛い事になったとしても。

「……助ける為だったが、知る為にもなっていたな」

美鶴は虚しそうに呟く。

S. E. E. Sメンバーで長い付き合いの自分と明彦ですら理解してあげられなかった。それが辛く、そして寂しいものだと思っただけだ。美鶴は感じた。

「皆が進もう。……例え辛い現実があつたとしてもな」

美鶴の言葉に皆は頷き、チドリも全てを知るためと考え、再びメンバー達は次のフロアへと足を進めた。

しかし、彼女達は知る由もない。次のフロアが最大の難関である事を。

E N D